願いの空へ

久住祐治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
願いの空へ

【Ｎコード】
Ｎ１２５２Ｓ

【作者名】
久住祐治

【あらすじ】
何の因果かＩＳ学園に入ることになった主人公（男）。ただ、その入学のためには女装する必要があった。しかも、おえつらえ向きに女子にしか見えない容貌だった少年は、自分の性を隠してＩＳ学園に入学することに。さてさて、どうなることやら。

この作品には男の娘成分、のほほんさん成分が多分に含まれています。

また、原作キャラのオリ主ハーレムもありますので、そう言ったものが嫌いな方はお戻りくださいませ。

ＩＳって作品名に入ってるじゃん。ということで、小説タイトルから「ＩＳ」を取り除きました。今後ともよろしく！　　注：不定期更新です。

　現在オリジナル展開中＆かなりグロい、または不気味なシーンが多く入っております。苦手な方はご注意ください。

オリジナル設定集　ネタバレありに付き、未読の方注意（前書き）

ということで、とりあえず機体とオリジナル用語だけ出しておきます。
書けるくらい話が進んだら、キャラも追加していくつもりです。
ちなみに、まだ中盤かどうかすら怪しいです。

１１／４　追記

オリジナル設定集　ネタバレありに付き、未読の方注意

梟　《ふくろう》

束が作成した、名目上は第三世代型ＩＳ。補助用ＡＩ『イヴ』を搭載している。

コアに呼ばれた香織に共鳴し、エラーを出しながらも起動する。

そのエラーのせいで絶対防御が消失、エネルギーバリアも脆弱なものになっていたが、福音に落とされてからようやく香織との共鳴率とも呼べるものが一定水準に達し、内部の構造を書き換えたことで香織専用のＩＳとしてようやく一次移行する。

香織との絆は深く、一次移行の時にはコア内部の電子空間に香織とイヴを招きいれるほどに繋がっている。

武装一覧

《夜雀》　《よじゃく》

中距離戦用射撃型兵装。マシンガンタイプ、装弾数五〇発、射程距離は約五〇〇メートル、それ以上では集弾性が著しく低下する。

取り回しやすくなるように小型化されていて、単発、三点射撃、フルオートの三つの機能が備わっている。

特筆すべき特徴は無いが、癖が無く扱いやすい兵装である。

武装特性は不明。

《夜鷹》　《よたか》

近距離戦用刀剣型兵装。二メートル程度の黒い刀身を持ち、鍔の部分に羽の模様をあしらっている。

一次移行したことで双刀となり、攻撃範囲が広がった。

武装特性は《ナイトホーク》、ステルス機になぞらえて命名された。

効果は、使用者のＩＳと使用者自身の全てを見えなくする。ただし、日光に晒されていると若干違和感が生まれることがある。この透過処理はレーダー類にも適用されるため、完全なステルス状態となる。

《啄木鳥》　《きつつき》

超近距離戦用突杭型兵装。俗に言うパイルバンカーである。

シャルロットの『グレースケール』に近い構造だが、一撃の爆発力はこちらの方が遥かに高い。しかし、その分恐ろしく当てにくくなっているトリッキーな装備。

武装特性は不明。

《夜羽》　《よばね》

防御・遊撃用翼型装甲兵装。

一次移行したことで耐物理装甲の羽が二枚で一対、耐エネルギー装甲の羽が二枚で一対、計四枚に進化した。

ただし、物理はエネルギーに、エネルギーは物理に対して耐性がなくなっているため、咄嗟の判断が勝負を分けることもある。

展開すると背中にＸの字を描くように出現する。上部の二枚が物理、下部の二枚がエネルギーである。

また、下部の二枚の耐エネルギー装甲翼の先端はビットになっており、一つの羽につき五枚、系一〇枚のビットが使用できる。《ナイトホーク》のステルス能力は分離したビットにも適用される。

単一技能（ワンオフ・アビリティー）《とりのさえずり（バードエイク）》

梟のワンオフ。

夜羽の装甲をすべて擦り合わせることで鳥の声のように聞こえる周波数の音を発生させ、あらゆるエネルギーをその場で消滅させる。

出力を上げれば理論上は運動エネルギーや、ＩＳを動かすのに必要なエネルギーすら消滅させられるほどになるが、現在はＢＴエネ

ルギーを消滅させることが限界。無理をすれば他のエネルギー類も消滅させられるが、あまり持続はしない。

イヴ

束が梟に組み込んだ補助用ＡＩ。

公私に渡って香織をサポートし、まるで人間のように話す。

香織のことは娘や息子のように思ってもいて、度々無茶を繰り返すためにそろそろ自重してくれないんだろうかとも思っていたりいなかったり。

ちなみに人格は女性である。念のため。

真打・鉄　《しんうち・くろがね》

束が創った月のコロニー『アルカディア・？（ワン）』で初めて作られた第三世代型ＩＳ。

束が簪のために用意した資材、データをふんだんに使用して、簪がその努力の成果として作り上げたものである。

ちなみにそのつくっていた時の簪曰く「なんていうか……、頭の中、凄くなってた」らしい。

超高機動型でありながら頑丈な第二世代を遥かに凌駕する装甲とエネルギーを持っている。簪がそのときの完成によって作り上げたため、ところどころに簪独特の癖のようなものが入っている。そのせいで、簪以外はまともに扱うことすら難しい。

武装一覧

《朱鉄》　《あかがね》

近距離戦用刀剣型兵装。

大きな一枚の板のような形の剣で、展開時点で恐ろしい熱量を持ち、鉄板程度ならば容易に融解するほどだが、その熱量は時間の経過と共に更に肥大化して行く。

武装特性は《紅蓮朱鉄（グレンノアカガネ）》。

膨大な熱量を物質化させ、熱を発する巨大な刀身へと変化させていく。時間をおいて一度しか使えないものの、直撃すれば普通のＩＳは一瞬でシールドエネルギーが尽きるほどの威力を誇る。

《蒼鉄》　《あおがね》

近・中距離戦用銃剣型兵装。

銀色の刀身の峰の部分に、青い銃身を横たわらせたような形を持つ。

銃部分からはＢＴエネルギーの銃弾を発射することが出来るほか、チャージすることで刃にＢＴエネルギーを纏わせ、エネルギーと物質の同時攻撃を行える。

武装特性は不明。

ブレイブ・ティアーズ

セシリアの『ブルー・ティアーズ』が二次移行した機体。

スペックが全体的に向上しているほか、セシリア自身が偏光制御射撃（フレキシブル）を会得し、武装も大幅に増加している。

父が死の間際に設計したＩＳであり、その発展系だけあってセシリアとの相性は非常に良い。

武装一覧

《ブルー・ティアーズ》

中・遠距離専用遠隔操作射撃型兵装。

『ブルー・ティアーズ』であった頃から使用されていたものだが、その数は二次移行に伴って三倍の一二基、ミサイルビットも同じく三倍の六基となっている。

その名に込められた意味は、「涙を流す者たちの、その思いを背負う力となること。悲しみも、苦しみも、全てを打ち払う雫となること」。

武装特性は《そのなみだをはらいましょう（Blow off Tears）》。

八基のＢＴビットで立方四角形状にケージを作り、その中に残された四基のビットとともにＢＴエネルギーを一斉掃射、飽和状態となったそれを爆発させて追い討ちを掛ける。

ミストラル・リヴァイヴ

シャルロットへ、父アルフォンスと義母クラリス、そしてデュノア社が総力を挙げて作り上げた、『デュノア最後のＩＳ』。直訳すると『暴風の再誕』となる。

デュノア社初の第三世代機であり、その第三世代型兵装のデータ処理のためにその膨大な拡張領域の半分を使用しているが、それでも残りの半分で最低三〇個の武装が格納できる。

カラーはオレンジと白のツートン、待機状態は右手小指の指輪。

武装一覧

《デュノア・オルグイユ》

『デュノアの誇り』と名づけられたその武装は、ミストラル・リヴァイヴの左腕部、メカアーム状になっている。

手のひらで相手を拘束し、強引に相手のシールドエネルギー回路にバイパス、デュノア・オルグイユの専用エネルギータンクにエネルギーを流入させた後、タンクが満タンになったらそれを一気に攻

性エネルギーへと変換し、ゼロ距離からのエネルギー砲撃を行う。
　このときのエネルギーは特殊なものとなっており、相手のシールドバリアをある程度中和できる。

《空海断絶（チヘイヲワル）》
　篠ノ之箒の持つ『紅椿』が搭載している《空裂（からわれ）》の武装特性。
　一度刃を鞘に収め、それからエネルギーを充填して居合いの要領で一気に抜き放つことで、数百メートル先までを一気に切り裂く。
　その威力は尋常ではなく、アリーナの壁とシールドバリアが一瞬で破壊されたほど。

武装特性
　ＩＳの武装を操縦者が完全に理解することで発現させることができるもの。
　ワンオフの武装版とも呼べる。
　現在は香織と簪、セシリアと箒が使用可能。

オリジナル設定集　ネタバレありに付き、未読の方注意（後書き）

以上です。

プロローグ（前書き）

さて、やるぞー

プロローグ

「がつがつがつがつ……」
「えぇっと……、美味しいですか？」

目の前で盛大に僕の作った料理を平らげていく女性に、恐る恐るそう聞いてみる。カチューシャにくっついているウサギ耳が、ひょこひょこと揺れてとても可愛らしい。

しかしなぜ「がつがつ」を口で言いながら食べているんだろう。と言うかよくそれで食べられるね。

「うん、グッドだよ最良だよ！　いやぁー、お腹ぺこぺこでぶっ倒れたときはどうしようかと思ったけど、君のおかげで助かっちゃった！　君、結構面白いしね」
「は、はぁ……」

妙にハイテンションだなぁ。

「おっと、自己紹介がまだだった。私は篠ノ之束って言うの。君は？」
「篠ノ之束って、あのＩＳ開発者の！？」

ＩＳ、正式名称をＩｎｆｉｎｉｔｅ・Ｓｔｒａｔｏｓ。元々は宇宙空間での活動を想定して研究、開発されたマルチフォーム・スーツだが、宇宙開発が遅々として進まなかったことと、一〇年前に起こったとある事件がきっかけで、ＩＳは飛行ユニット、兵器として注目を浴びる形になった。

従来の戦闘機、戦車、あらゆる兵器が鉄屑へと変わるほど圧倒的な戦闘力。しかし、それを求めて再度戦争を起こそうとするほど国

の頭は愚かではなく、ＩＳはスポーツとして、そして有事の際の即戦力として求められることになった。

尤も、開発者である篠ノ之博士が四六七個のＩＳコアを作成したのを最後に一切の製造を止め、そのコア製造技術も公開していないのだから、全てのコアを日本が所有していた当初に戦争を仕掛けようとする国もなかっただけの話だけど。

しかし、このＩＳには重大すぎる欠陥があった。それは、女性しか起動できないこと。

もちろん、ＩＳの性能とその事実を知った各国は、我先にと女性を優遇し、有能なＩＳ操縦者を引き込もうとした。その結果、たった一〇年でこの世界は女尊男卑へと早変わりしてしまったのだ。

確かに、ＩＳを使える女性が優位に立つというのはまだ分からないでもない。けれど、ＩＳへの適性もなく、何を為したわけでもない女性が我が物顔で威張っているのを見るのは、なんと言うか、哀れだった。

「そ。その束ちゃんだよ！　らぶりぃ束ちゃんと覚えてくれたまえ！」

「いや、普通に束さんと呼ばせていただきます」

「む、ノリが悪いなぁ……。まあいいや、ご飯ご馳走様。美味しかったよ」

「あ、いえいえ」

で、なぜこの束さんが我が家でご飯を食べているのかと言うと、まあ要するに、我が家の前で行き倒れていたのだ。

学校から帰ってきてみれば、僅かに身じろぎするだけのウサ耳が玄関前に突っ伏していると言う珍事態に、思わず僕の頭はショート寸前まで駆け抜けた。もちろんきちんと戻ってきたが。

「うーん、じゃあお礼として……、私の秘密の隠れ家パート二三五

四号に招待してあげよう！」
「隠れ家って……、ああ、そういえば束さんって政府から探し人指定されてるんですよね」
「まー、私を見つけるのは無理だろうけどねー」

僕は簡単に見つけましたけどね。というか、なんとなくこの人と話すのは楽しいかもしれない。

「って、やばいバイトが！」
「ん、君、バイトしてるの？」
「色々事情がありまして、まあ」

時計を見ると、六時半。がっつり遅刻だ。店長は優しいから笑って許してくれるんだろうけど、僕自身がそういうのだめなんだよなぁ……。一応連絡だけいれておこう。というか今日は休ませてもらおう、なんか疲れた。

「ちょっと待っててもらえますか？　バイト先からお休みもらってきます」
「了解了解。あ、お茶飲んでていいかな？」
「あはは……、ご自由にどうぞ」

なんだかもう、この人自由人だな……。

それから一時間後、僕と束さんは揃って山道を歩いていた。
……何故こうなった。あ、隠れ家とやらに行くのか。

「着いたよー。ここが私の隠れ家パート二三五四号」
「随分と隠れ家が多いことには突っ込まなくていいですか？」
「別にいいよ？」

さいですか。

「ささ、中に入ってー」

言われるがまま、僕は束さんに背中を押される形でボロッボロの山小屋の中へと押し込められる。腰まで伸びた僕の髪を引っ張らないように気を使ってくれてるのが、ちょっと嬉しかった。
あ、この髪はお姉ちゃんが切るのもったいないって言って切らせてくれないんだよね。長いと邪魔なんだけど、もう慣れちゃったな。

「それで、ここが？」
「違う違う、もーっと下だよ。それと、束ちゃんって呼んでね！」
「え、いや」
「ね！」
「……はい」

奇妙すぎる気迫によって押し切られた僕は、渋々頷いてから束さん、じゃなかった、束ちゃんの先導で暗闇を歩いていく。
ギシギシと音を立てていた床は、いつの間にか金属質な音を返すようになっていく。……あれ、小屋がこんなに長いわけないよね！？

「ちょ、ちょっと束ちゃん！？　ここ何処なんですか！？」

「だから言ったじゃん、隠れ家だって」
「なぜ語尾が弾んでるんですか！　この小屋の構造自体謎なんですけど！？」
「天才に不可能はないんだよ！　ってことで、此処だよここ」

よく分からないままもや押し切られ、束ちゃんの後に続いて金属質な扉を潜る。
僕が足を踏み入れた途端、真っ暗だった部屋の中に光が灯され、そこにあるモノが露になる。

「これ、って……！？」
「んっふっふー、これぞ、私が暇つぶしで開発中のＩＳだよ！　名前はまだないけど、なかなか面白いチューンなんだよねー。残念ながら公表してないせいで、だーれも候補者がいないからこの子も飛べないんだ」

束さんの声が、とても遠くに聞こえる。
気づけば、僕はふらふらとそのＩＳへと歩み寄っていた。
両肩に取り付けられた、折り重なった無数の装甲。脚部は細く、まるで鳥の足のようで。両の手は鋭く、それでいて温かみのある滑らかな曲線を描いて形作っている。

「……飛びたいの？」

触れず、問う。
答えるわけがないと知っていて？　否。
答えてくれると、思ったから。
操縦者のいない空の座席に、思わず手を伸ばし、

――じゃあ、飛ぼうよ。

「……ッ！？」

キンッ、と僕の頭の中に金属質な甲高い音が鳴り響く。ただ高いだけではない。祝福の音色とも取れる、温かなそれはきっと、この子の産声だった。

ＩＳの名称は未登録。特性などまだ見抜くことすら出来ない。ただひたすら黒いデータの塊が僕の中に流れ込んでくる。その中の一つ一つに、混ざっているのだ。この子の『飛びたい』という思いが。

知りえるはずのないものが――皮膜装甲（スキンバリアー）展開、完了。

分かりうるはずのないものが――初期化（フォーマット）、完了。

次々と、僕の中に――拡張領域（バススロット）、確認。

流れ込んでくる――ハイパーセンサー最適化、完了。

「わぁお……！」

「こ、これって……！」

気づけば、僕はそこに立っていた。

人の背丈を優に越したその場所、ＩＳを身に纏い、僕は立っていた。

手足は動く。三六〇度、あらゆる角度を見通せる。部屋中の埃の数だって数えられるくらいだ。

でも。そう、でも、だ。

――なぜ、自分がＩＳを動かせるのだ。男の自分が、何故？

そう考えて、僕は反射的に自分の体を抱くようにして身震いする。正確にはＩＳごとだが。

男でＩＳを動かせる。それは、きっと世界にとって未曾有の事態だ。女尊男卑をたった十年で推し進めたこの世界は、歪みに歪んでいる。

普通の検査だけならまだいいのかもしれない。だけど、それ以上

のことをされないとは限らない。仮に誘拐でもされてみろ、人体実験のいい材料じゃないか。

一瞬でそこまで考えてしまい、思わず顔を青ざめさせる。

「おーぅい、大丈夫？」

「っは……！？　あ、はい……」

「とりあえず降りてきてー。ちょっとばっかしお話があるからさー！」

その声に引っ張られ、笑う膝で何とか床に下りる。

そこにいた束ちゃんは、それはもう楽しそうな顔で笑っていらっしゃって、

「とりあえず、ＩＳ学園いっとこうか！」

久しぶりに、人をぶん殴りたい衝動に駆られた。

「あれ？　ＩＳが動いたよ？」事件から一夜明け、僕の家には織斑千冬さんと束ちゃんの二人が集まっていた。

織斑さんはなんというか、バリキャリ？　古いかな、とりあえずすっごい綺麗な人だった。

さすがに一晩経てば僕も心が落ち着いていて、割とまともに応対できた。

「おっはー、香織ちゃん！」
「な、なんで僕の名前を!?　っていうかちゃん付け!?」
「このらぶりぃ束ちゃんの手に掛かれば、プライバシーなんてあってないようなものなんだよ？」
「えぇー……」
「おい束、少しは紹介したらどうだ？　向こうも困っているだろうが」

てへっ、とか言い出しそうな顔の束ちゃんに、呆れ顔の織斑さんが突っ込む。仲がいいのかな。
にしても、織斑さんってどこかで聞いた名前なんだけど……。

「仕方ないな……。私は織斑千冬、ＩＳ学園で教師をしている」
「あ、ああー！　お姉ちゃんが言ってた人！」
「姉がいるのか？」
「あ、はい！　一之瀬葵って言うんですけど」

僕の姉である一之瀬葵は、現在ＩＳ学園に通う高校一年生。と言っても、今年で二年生だけど。
そっか、前にちょっと零してたのってこの人のことだったんだ……。確かにカッコいいし、綺麗な人だよね。

「ああ、一之瀬か。なるほど、妹がいたのか」
「……へ？」

いや、あの？

「そうだよねー、可愛いよね！　ちーちゃんもそう思うよね？」
「それは置いておいて、私が呼ばれた理由が全く分からないんだが。

丁度休日だったからと言って出てきたが、まさか用もなく呼び出したわけじゃないだろう？」

今妹って言った？　いや、そりゃ僕は顔がよく女っぽいって言われるけどさ……、そんなに見えるのかな？

「じゃ、まずは誤解から解いておこっか。この子、男の子だよ？」

「……何？」

「で、この子がＩＳ起動させましたって言ったら、どうする？」

「……なんだと？」

あ、あれ、いつの間にかお二方とも真面目モードに！？　どうしよう、付いていけてないよ！

織斑さんは僕を睨むような目つきで見てくるし、束ちゃんはにやにやとこっちを見ている。なんだかすごく、気分が悪い。

「それは本当なのか？」

「うん。目の前で起動させたんだから間違いないよ。それで、この子の意見も聞いてこれからどうするか考えようと思って、ちーちゃんのこと呼んだんだ」

「なるほどな……。まさかお前が別の人間とまともに話すところを見るとは思わなかった。まさか他人に気を使うと言う高等技術を身に付けているなんてな？」

「ふふん、行き倒れてた私を助けてくれた恩人なんだよ？　これぐらいやるって」

うふふあははしてないで、ちょっと助けてくれませんでしょうか。

「あ、あのー……」

「っと、すまないな。それで、間違いなく君は男なんだな？」

「はい、間違いなく男です。男ですよ？」
「あ、ああ、わかった。さっきはすまなかった。しかし、君はどうするつもりだ？」

どうする、と聞かれても……。
ＩＳが起動できる男なんて、いい実験体だ。まして今の世の中、男の地位はとても低いんだから何されたっておかしくない。それに、私には後ろ盾もないのだから。
そのことを伝えると、織斑さんは難しい顔で考え込む。

「そうか……。実はな、他にも男で起動できた者がいるんだが」
「ほ、本当ですか！？」
「ああ。私の弟だ」
「それで、弟さんはどうすると？」
「強制的にＩＳ学園行きだよ。尤も、あそこではいかなる公的権力も介入できず、国とのしがらみの一切が断ち切られるから、安全と言えば安全なんだがな」

それを聞いて、思わず考え込んでしまう。確かに、ＩＳ学園なら身を守れるし都合のいいこともいろいろある。だけど、だけどだよ？　三年後には研究者たちが手ぐすね引いて待ってるんだ。それを避けるためにはどうすれば……。

「行ってみるか？　ＩＳ学園に」
「え？」
「私個人としては行ってもらいたいんだがな。もちろん、モルモットになれと言うわけじゃない。そこでＩＳの扱いを学べば、立場を手に入れることだって出来るようになる。一線を退いた私が言えることじゃあないがな」

なんというか、先生だった。
カッコいいけど怖い先生って、お姉ちゃんは言っていたけど。この人は、すごい人なんだと身を持って知らしめられた感じがした。
いや、具体的に言い表せと言われると困っちゃうけど、なんとなくそう感じたから。

「でも、香織ちゃんとしては男だってばれるのは嫌なんでしょー？」
「そりゃ嫌ですよ！　お姉ちゃんにも、迷惑かかるし……」
「なら、女装していけばいいじゃん！」

その一言が、僕の人生を根本的に変えることになるなんて、そのときは思いもしなかったんだ。
普通気づくんだけどね？　うん。

プロローグ　（後書き）

うん、今日のことを思ってほしい。
四月一日、エイプリルフールなんだ。すまない。
どうしてこんな遅くに投稿したのかっていうと、朝から考えて、カラオケに行っている間も考えていたからなんだ。このサプライズを。
ただ、僕個人としては香織ちゃん（誤字にあらず）の行く末を生暖かく見守ってあげてほしいと思う。恐ろしいほどの不定期更新になると思うけど、一人でも続き見たいと言う人がいたら続けていこうと思う。
誰もいなかったら、これはこのまま放置して、現在更新中のものが一つ終わったら連載しようと思う。

何が言いたいかって言うと、ＩＳで誰もやっていないことをやりたかっただけなんだ。
誰かＩＳの男の娘もの書いてる人がいたら、僕のリサーチ不足だ。
すまない。

第1話　今日から

「ここが、今日から通う学校かぁ……」

目の前にあるでかい校舎を見上げて、思わず溜め息を吐きそうになる。

結局来てしまった。ＩＳ学園に。

あの後、千冬さん（プライベートではこう呼んでいいと言われたので）のコネを使って戸籍をちょっと変更して、実技試験と筆記試験を受けさせてもらった。

実技の時には学校所有のＩＳ『打鉄（うちがね）』を使わせてもらって、何とか教官に勝てた。こっちの動きは凄い拙かったけど、人並み以上には動かせてるみたいでお褒めの言葉もいただいてしまった。

筆記は結構簡単だったかな。こう見えても勉強はきちんとしているし、お姉ちゃんの話に追いつくためにＩＳの勉強も少ししていたから。

「うぅ、周り女の人だらけだよ……」

別に苦手ってわけじゃないし、ちょっとやそっとじゃ動じないのも自負できるんだけど……、こうも多いと威圧感があるからね。

僕、いや、私はその中を歩いていくと、昇降口で靴を履き替えて教室へ向かう。確か一組だったかな。

そうそう、千冬さんの弟さんも一組らしいから、まだマシだろうと言っていた。マシ、だといいなぁ……。

「そう言えば、口調も変えないといけないんだよね……。はぁ……、ガンバだ、私」

一人称から変えていかないと、絶対どこかでぼろが出るからね。出たらまずいんだけど。

まあでも、頭切り替えていこう。

ちなみに今の服装は普通に女子の制服。栗色の伸ばした髪とこの顔のせいでばっちり女性として認識されているみたいです。声だって男とは思えないほどだし。

でも、ここで強くなればお姉ちゃんに負担を掛けることもない。がんばらなきゃ。

「えっと、席は此処かな」

場所は窓際一番後ろ。日当たり良好、しかもほとんどの人の視界から外れている。名前順じゃなくて適当なのかな。

ＳＨＲ開始まではまだ少しあるから、今のうちにクラスメイトの顔を覚えられるだけ覚えて、無理か。やっぱり喋らないと無理だね。

例の弟さんはまだ来てないみたい。あとうちのクラスにいるのでチェックしておくべきは、セシリア・オルコットさんかな。イギリスの代表候補生。事前に調べた限り、懐に入りさえすれば落とすのはたやすいかな。問題はそこまでどうやって入るかだけど……。

「……さん、一之瀬香織さん！」

「あ、は、はい？！」

うわぁ……、思いっきり裏返っちゃったよ……。変に思われてないかな？

それとなく周りを見渡してみたけど、うん、大丈夫そうだ。

「えっと、次一之瀬さんの番なんですけど、自己紹介、してもらえるかな？　最初『あ』から始まって、『い』の一之瀬さんは三番目だから」

「あ、はい、すいませんっ。えっと、一之瀬香織です。特に無いんですけど、一年間仲良く出来たらなと思ってます。よろしく、お願いします！」

がばっ、と頭を下げる。パラパラと拍手があって、無事次の人にバトンが回った。

頭を上げて椅子に座った私に向けられているのは、好意と観察の視線。少なくとも悪感情は入っていないようで安心した。

にしても、考えに没頭していたせいでＳＨＲ始まってたのに気づかなかった……。開始早々躓いちゃったよ……。

ちなみに、香織と付けられたのは、両親が私を産んだときに娘の方の名前しか考えてなくて、息子の名前がなかったからこれでいいかと付けられた名前。まあ、両親からもらったものだから大事にしているんだけど。

なんて考えていると、今度は例の弟さん、織斑一夏（いちか）の番だった。

まあ、千冬さんに頭叩かれてたけど。

「どうなっちゃうんだろうなぁ、私」

小さく呟いた言葉は、結局誰にも答えられることなんてあるわけなくて。

私の前途多難な女装生活は、こうして幕を開けるのであった。

時間は過ぎて、二時間目の休み時間。教室内ではちょっとしたゴタゴタが起きていた。

なんでも、教官を倒したとか倒してないとかの話らしい。それって、あれだよね？　入学試験の。私が受けたのはちょっと特例だったけど、それでも勝てたよ？　ちょっとしんどかったけど。

けど、セシリアさんは確か専用機持ちだよね？　ただ起動できただけの人が相手するには無茶だと思うんだけどな。

まあ、そのときは丁度チャイムが鳴ったから大きなイザコザにはならなかったんだけど……、どうやらその後の方が大変だったみたいです。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

千冬さんが壇上に立って言う。少しでも情報があれば、それだけで戦闘は変わってくる。相対したときにＩＳで手に入る情報だけではとてもじゃないが十分とはいえない。実弾兵器なら反動（リコイル）やら射程距離やら、その全ての情報を有効に活用できれば確実とは言えずとも何％も回避確立は上がり、武器自体を破壊することも可能になってくる。エネルギー兵器だってそれは同じことだ。

だからこそ、こう言った授業はワクワクして仕方ない。学校でも世界史の授業とかは楽しかったな。先生が面白かったのもあるけど。

ちなみに、朝のＳＨＲで千冬さんが出てきたとき、私は思わず耳を塞いでしまった。それぐらい盛大に黄色い声が上がったのだ。

……早くも『私』に慣れている自分がいるから嫌になるなぁ。気をつけないと戻れなくなるかも。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

思い出したように千冬さんが言って、ちらりと悟られぬようにこちらと弟さん、一夏君を見た。タメだから一夏でいっか。

代表者、クラス代表ってことだよね？　ってことは、まずはそれがクラス内最強ってことなのかな。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を図るものだ。今の時点で大した差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

うんうん、やっぱり思った通りだ。クラス対抗戦が何度かあるのかは分からないけど、それでも出てみたいな……。

きっと皆強いんだろうな。……ここに来た以上、一番を目指したい。越えたい壁はまだ無いけど、壁が出来たときにもっと強くなりたいと思えるようになりたい。

いや、この状況がある意味壁なんだろうけどね。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

おおう、一夏が凄い推薦されてるよ？

……なんだか、セシリアさんの顔が凄いことになってるんだけど。大丈夫かな。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

突然立ち上がってまさかといった様子で言う一夏。そもそもこの

クラスに織斑は君と千冬さんしかいないんじゃないかな。
そんな私の心の呟きをスルーして（当たり前か）千冬さんが進行する。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？　いないなら無投票当選だぞ」
「ちょっ、ちょっと待っ――」
「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」
「い、いやでも――」
「……私が立候補しても、良いでしょうか」

織斑姉弟（きょうだい）の話の間をぶった切るが如く、私の声が響く。少し作ってはいるけど、ほぼ地声だ。それで女性の声と遜色ないのは自慢していいのやら判断に困る。
ピタリと止まったクラス内。そしてその中の空気。あれ、私やっちまった感じですか？

「ふむ。織斑と一之瀬、他にいないか？」
「待ってください！　わたくしも立候補致しますわ！　一之瀬さんならばまだしも、男がクラス代表になるだなんて恥さらしもいい所ですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……あれ、私完全に女として見られてるね。喜びたくないぞ。
それはともかく、セシリアさんは完全にスイッチ入ったみたいです。

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！　わたくしはこ

のような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

うわぁ、凄いなセシリアさん。千冬さんって隠れブラコンみたいなもんなのに。

束ちゃんに教えてもらったけど、相当凄いらしいね。それを目の前にしてこれか。ちょっと背筋ゾクッとしたな。

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

む、なんだかちょっとカチンときたな。そりゃ、私も一夏もＩＳは初心者だけど、それなりにやっていこうと頑張っているのに。それを無碍に扱うのはいただけない。いや、一夏は知らないけどさ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で――」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

一夏が言った途端、セシリアさんは言葉を失った様に声を詰まらせ、小刻みに震える。

そして、その直後。

「あっ、あっ、あなたねえ！　私の祖国を侮辱しますの！？」

甚だ心外だとばかりに声を荒げ、そう喚き立てる。なんだか、心の奥のほうが冷える感じがした。

「決闘ですわ！」

盛大な音を立てて机を叩き、セシリアさんは一夏へ人差し指を向けて言い放つ。あの、私は何処にいるんでしょうかね。まあ、いいか。

正直ちょっと、私も腹立ったから。

「セシリアさん、ご高説のところ申し訳ありませんが……、少し日本人を舐めきっていらっしゃるようですね」

「……なんですって？」

ちょっと挑発気味に、そして事実イラッとしている自分の気持ちを込めて言ってみたら、物の見事に引っかかってくれる。グッド。

敵意剥き出し、といった感じでこちらに視線を投げ飛ばしてくるセシリアさんを直視して、私も負けぬように視線をぶつけながら口を開いた。

「確かに、日本は島国です。外の方から見れば田舎にもほどがあるでしょう。ですが、あなたが祖国を侮辱されて怒るのと同じように、私にも日本への愛着があるのです。今の宣言、私にも有効と見てよろしいですか？」

「そ、それは……」

言い淀むセシリアさん。だけど、プライドの高い人は煽ればすぐに食いついてくる。

「専用機持ちが量産型二人を相手に梃子摺るのですね。それでは、とても代表候補生などとは名乗れませんね」

「なっ……！？　い、いいでしょう、二対一で相手をして差し上げますわ！」

かかった。女性口調で挑発するのはやったことなかったけど、成功したみたいだ。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と一之瀬、オルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

千冬さんが手を打ち鳴らし、それで話は終わりになった。さて、啖呵切っちゃったけどどうしようかな。頑張るしかないよね。

皆が授業に集中し始めたのを見て、私も教科書を開いて授業に専念することにした。

放課後。寮へと向かった私は、そこではたと気づく。

「部屋、何処？」

そう。私は部屋を聞いていないのだ。例外的に後から入試を行ったせいで、寮の編成が分からない。くっ、どうすればいいのか……。

「あ、一之瀬さん」

突然名を呼ばれ、思わず振り向く。そこには、きぐるみチックな

ダボダボの服を着た少女が立っていた。
　えっと、うん、思い出せない。クラスで見た顔だってことは覚えてるけど。

「えっと、お名前は何でしたでしょうか？」
「相部屋の布仏本音だよ、よろしくねー」
「一之瀬香織です。って、もう知っているんでしたよね。よろしくお願いします」

　うん、やっぱり個室なんてもらえませんでした。仕方ない、ばれないように生活するしかないか……。常時ブラ着用だな。偽パイもか。
　しかし、なんともほんわかした人だなぁ……。のほほんさん？
今頭の中にポンッと浮かんだんだけど。

「部屋を忘れてしまったのですが、何号室でしたか？」
「一〇三〇室だよぉ。はい、合鍵。失くすと織斑先生に大目玉食らうらしいから気をつけてねぇ？」
「それは大変ですね。気をつけないと」
「うんうん。じゃあ、お部屋に行こうよ」

　そのまま布仏さんに連れられて、コツコツと廊下を進んでいく。すれ違うのは女子、女子、女子。女子だけだ。中学校がとても懐かしいよ……。
　廊下の途中の一〇三〇室の鍵を開けた布仏さんと一緒に、部屋の中へ。
　中はホテルの一室のように綺麗で、というかこれはまんまホテルじゃないですか。いいなぁ、ベッドもふかふかみたいだし。

「ねえねえかおりん。かおりんは奥と手前どっちのベッドがいい？」

「かお、りん？」
「あ、あだ名駄目だったかなぁ？」
「あ、ううん、ありがとう。かおりんでいいですよ。それと、私はどちらでも大丈夫ですけど」
若干違和感を感じないでもないんだけど、目をうるうるさせる布仏さんを見たら言い出せるわけないです。
「じゃあ、私は手前のベッドにするね」
言うが早いか、ベッドにダイブする布仏さん。もしかして、戻ってきてすぐにベッドに入れるから手前にしたのかな。
「でも、凄いねかおりんは」
「何がですか？」
「クラス長決めるときの啖呵、カッコよかったよー」
「あ、ありがとうございます……」
ほめてくれるのは嬉しいんだけど、今思い出したら結構凄いこと言ってるよね。ド素人の打鉄二機であの『ブルー・ティアーズ』を破らなきゃいけないってのは凄い難題だと思う。せめてどっちかが専用機だったらよかったんだけど。
……そう言えば。あの子はどうしたんだろう。明日にでも千冬さんに聞いておいてもらおうかな。

第1話　今日から　（後書き）

はい、香織ちゃんの偽装学園記、始まり始まり。
皆様どうぞ、生暖かい目で見守ってやってくださいましな。

第2話　鬼神降臨！？（前書き）

ストックだけでも投下しておこう。

第2話　鬼神降臨！？

「ふわぁ……、んくっ、朝か……」

ガラス戸から差し込む朝日に起こされる形で目を覚ました僕は、寝返りを打って時計を確認する。

皆おはよう、一之瀬香織です。

時刻はまだ五時半。学生の行動時間範囲としてはかなり早い時間だろう。緊張して眠れなかったせいもあるのかもしれない。目覚ましのスイッチを押して鳴らないようにすると、布仏さんのベッドを見る。

「んにゅ～……すぴー……」

「気持ちよさそうに寝てるなぁ……」

見ていると癒されそうな寝顔を一瞥して、それから……うん、シャワーを浴びよう。

あがったら着替えて、よし。朝の行動プランはとりあえず決定かな。

そうと決まれば、早速制服を持って脱衣室へ。知っての通り僕は男だし、大浴場には入れない。だから、一夏のことがうらやましかったりする。だって、入らない言い訳を考えなくてもいいじゃないか。

一夏は世界初の男性ＩＳ操縦者だ。そしてあの初代にして今尚最強のＩＳ操縦者、織斑千冬さんの弟でもある。立場的にも能力的にも好待遇なのは間違いないだろう。

対して僕は一般人。それも割りと貧乏人だ。これと言って特技もなく、立場もない。むしろ束ちゃんと知り合いってことで、危ないことに巻き込まれるかもしれない。同じ男性ＩＳ操縦者でも、後ろ

盾の厚さでは一夏の方が上なんだから。
それに、僕のせいでお姉ちゃんに迷惑をかけたくない。今だって迷惑をかけてるんだから。……近いうちに、会って話さなきゃなぁ。

「……うん、ネガティブおしまい！」

自分に言い聞かせるように、もしくは吐き出すようにして僕はシャワー室へと入った。
熱いお湯がパシャパシャと体の上を跳ねる。憎らしいほどにすらりとした自分の体の上で。美しいレベルで肌が白いし、確かに自分も気に入ってはいる。だけど、まさかこんなことになるとは思いもよらなかった。
あの時ＩＳを起動できたことを秘密にしてしまえばよかったと、そうは思わない。あのＩＳは、鳴いていたから。
飛びたいと。空を飛ばせてほしいと、ずっと叫んでいたから。僕はそれに応えてあげたいんだ。
今の願いは、あの子と一緒に空を飛んで、家族を全ての災いから守れるくらい強くなること。だから、僕はここにいる。
じっと目を閉じて考えを纏めた僕は、軽く寝汗を流してシャワーを止め、体を拭いてからきっちりパッドを当ててその上からＩＳスーツを着る。もちろんパンツは男物だけど、最悪女物を買いに行かなきゃいけなくなるかも知れないというのが辛い所だ。
まあ、これなら着替えのとき下着姿になることもないし、大丈夫だからね。……あれ、ＩＳスーツならブラしなくてもいいんじゃないかな。でも、パッドはそんなに大きくないし、急に変わったら変か。それに、束ちゃんの所で試しに使ったときにも違和感なかったからいいや。なんだか思考が投げやりになってきてるなぁ。
制服をその上にきちんと着て、準備完了。今日もがんばれ、『私』。

「あ、おはよ〜かおりん。シャワー浴びてたんだ」

脱衣室から出ると、黄色いダボダボのフード付きパジャマを着た布仏さんがベッドに腰掛けていた。寝ても覚めても微笑ましいお姿で私とっても癒されます。

「初めての場所だと緊張してしまって。寝汗を流していたんです。起こしてしまいましたか？」

「んーん、大丈夫だよ。ゴロゴロするのは好きだけど、起きるのは早いんだ〜」

それは羨ましい。夜更かしすればした分だけ起きるのが遅くなる私にもそれを少し分けてくれないだろうか。無理ですよね。

ともかく、だ。私は一週間後の決闘に望まなければならなくなった。怒らせちゃったよね、セシリアさん。

あの時は私もああ言っちゃったけど、セシリアさんだってああ言えるほど厳しい道を歩いてきたはずだ。そのことは、決闘が終わったらちゃんと謝ろう。

「私も着替えちゃおうかなー」

言って、もぞもぞと服を脱ぎだす布仏さん。私は女子の着替えをまじまじ見つめる趣味はないので、自分のベッドに退散する。一応私男ですから。

あー、新聞とか読みたいな。

着替えが終わった布仏さんと、図らずも一緒に時計を見上げる。まだ六時だった。

「そろそろ食堂開くかな？」

「早い人はもう食べる人もいるでしょうけど……。お腹空きました

か？」
「ううん、もう少しご飯は後の方が良いよね」
「早く食べれば良いというものでもありませんからね。テレビでもあればいいんですけど」

生憎と、この部屋にはテレビは取り付けられていなかった。というか、全ての部屋にテレビは取り付けられていないだろう。ポータブルタイプのものを持ち込んでいる人がいないとは限らないけれど。
昨日は大浴場に行かない言い訳が「疲れているからシャワーで済ませる」で済んだけど、これからどうしよう。まあ、何とか考えとかなきゃ。

「授業開始が八時二〇分からだから、のんびりできるよー」
「え、ええ、まあのんびりはできるんですけどね」

なんというか、修学旅行でホテルに泊まったときの、騒ぎづらい感覚。朝早くに起きるとがやがやしづらい、周囲に遠慮してしまうあれを思い出してしまう。隣の部屋の連中は徹夜してカードとかボードゲームやってたけど。
ちなみに、私は普通に女子の部屋に引っ張り込まれたりしてました。いや、いじめとかじゃなくてほんとに良くしてくれるんだよ？
その方向が「香織ちゃんって可愛いよねー」だったりするんだけどね。あ、クラスメイトからの呼ばれ方は苗字か（主に男子）名前のちゃん付け（主に女子）のどちらかだった。
まさか私がＩＳ学園に入っているなんて知るわけないだろうけど、女子の皆は嫌な納得の仕方しそうだな……。

「でも、来週どうするの？　相手は代表候補生だよ？」
「あはは……。つい言ってしまったので、今から頑張るしかありません。頑張るしか……」

頑張るしか、ないのだ。
這ってでも上に上がる。強くなるなら、このぐらいの壁はどうということはない。超えてみせる。

「放課後にアリーナと練習機の申請したらどうかな？　少しでも動かせば変わるかもしれないし」
「そうですね、言ってみます」

ありがとうございます、と付け足して軽く会釈。布仏さんは「いえいえー」と片手を振り返してくれた。
ん、ちょっと気分転換してこようかな。

「ちょっと外を歩いてきますね。四〇分ごろには戻ります」
「はーい」

鍵をポケットに入れて外に出る。廊下はひんやりとしていて、まだ人の気配はほとんどなかった。
テクテクと歩いてロビーに着くと、一人スーツ姿でコーヒーを飲んでいる千冬さんがいた。意外と早起きなのかな。

「千冬さん、おはようございます」
「ああ、一之瀬か。ん、これだとごっちゃになるな。今は香織でいいか」
「あ、はい。千冬さんは何を？」
「織斑先生だ。まあ、今はいいか。朝の一服だよ、仕事前のな」

「お前も飲むか？」と言ってわざわざコーヒーを淹れてくれた千冬さんにお礼を言って、ミルクとガムシロップを注ぐ。コーヒーは出来合いのものだけどね。学校では厳しいけど、意外と優しい人な

んだね。

「それで、どうだ。一日通ってみて」

「周りが女性だらけって言うのは、意外ときますね。お風呂も使えませんし」

「そうか、お前はそういう弊害もあったな……。男だとばれていれば、近々男湯の時間が作られるからそこにいれらるんだがな」

「まあ、シャワーでも事足りますし。それに、これからは全力で取り組まないと。一方的にやられるのだけは嫌ですし、セシリアさんにも失礼ですから」

言うと、千冬さんは面白そうにくつくつと笑う。

「なるほどな、そういう考え方か、お前は」

「悔いは残したくありませんから。あ、束ちゃんにちょっと聞いておいてほしいことがあるんですけど、連絡取れますか？」

「束の連絡先なら、これだ。携帯はあるか？」

聞かれて、ポケットから柄のない黒い携帯を取り出す。前にお姉ちゃんが連絡用にと持たせてくれたものだ。

携帯を千冬さんに手渡すと、千冬さんは慣れた手つきで電話番号を登録する。私より操作早いんじゃないかな。私はいまだに両手です。

「これでよし、と。あとで時間が空いたときにでも掛けてやれ」

「あ、はい。ありがとうございます」

「さて、と。それじゃあ私は部屋に戻るかな。お前も授業には遅れるなよ」

「はい！」

ひらひらと片手を動かして自室へ去っていく千冬さんは、なんだかかっこよかったです。

「だから、怒っていないと言っている」

千冬さんと別れてちょっと外をお散歩してきた後、布仏さんと一緒に食堂に行くと、そんな声が聞こえてきた。

私が持っているトレーに載っているのは、和の心を体現したような『ＴＨＥ・日本食』と呼べるもの。白米、味噌汁、お漬物に焼き鮭。いいよね、こういうの。

布仏さんはパンとスープだけだ。お腹空かないのかな……。

「だから箒――」
「な、名前で呼ぶなっ」
「……篠ノ之さん」
「……」

見てみれば、一夏と篠ノ之さんが言い争っていた。いや、アレは言い争っているって言うより篠ノ之さんが距離感を掴めてないだけなのかな。

んー、よし。

「織斑君、お隣いいですか？」

「へ？」
「うぉ、すごいねかおりん。速攻だ」

いえ、そういうわけじゃないんですけどね。ただ色々話さないとならんこともあるわけでして。主に来週のこととか来週のこととか来週のこととか。

「ああ、別にいいけど」
「ありがとうございます。布仏さんも」
「うん。って、二人ともよく食べるんだ……」

のほほんさん、今更ですね。ん、心の中ではのほほんさんと呼ぼう。……うん、そうしよう。

「俺は夜少なめに取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」
「バランスの取れた食生活は大切ですよ？」
「いや、わかってんだけどさ。なんか力がでないっつーか」

んー、夜はそんなにカロリーを消費しないのかな。確かに、朝沢山食べると脳もきちんと動くようになるとか聞いたことがあるけど……。私は三食きちんととってもこの体型です。

「織斑君、名前を呼び捨てにしてもいいですか？　せっかく同じクラスなのに、苗字で呼ぶのはアレですから」
「んー、それもそうだな。いいぜ別に。じゃあ、俺も名前で呼んだ方がいいのか？」
「どちらでも構いませんけど、姉がいるので名前の方が分かりやすいかもしれませんね。香織と言います」
「おう、わかった。香織だな」

「はい。よろしくお願いします、一夏」

よし、コンタクト成功！　ま、一々戦闘のときにさん付けで呼んでたらアレだし、先に確定させとかないと。一応タッグなんだし。なんて思ってると、突然のほほんさんが私の袖を引いてきた。

「むー、織斑君だけずるい！　かおりんかおりん、私は？」
「え、えっとー……、ひぃっ！？」

な、なな、なんか凄まじく殺気の篭った視線が……！？
はっ、篠ノ之さん！？　篠ノ之さんが割り箸を指の力だけでへし折らんとしていらっしゃる！？　違うよ、私はあなたの恋路を邪魔するようなことは、傍目から見ればこれしてるじゃんどうしよう関係を悪化させてしまうぅぅ！？

「ねーねーかおりんってば」
「おい、どうしたんだ香織？」

両サイドからちょんちょんと私を突っつくのほほんさんと一夏。しかし一夏、気づいて。君の後ろに鬼神が降臨なさっておられまする。

「わかりました、布仏さんはあとで何か考えますから。一夏、後で決闘の時の作戦を考えたいのでお時間をいただけますか！？」
「わかったー」
「おう、いいぞ」

はぁ……。何とかなった……。篠ノ之さん、怖いよぅ……。
結局、その朝食を私はろくに食べられなかった。後で篠ノ之さんともお話しておかないと死ぬるかもしれません、私。

それから時間は経って一時間目の休み時間。よし、頑張れ私。

「あ、あの、篠ノ之さん。ちょっといいですか？」

「ん、ああ。何だ？」

うわぁ、この時点で怖い。いや、ただ無愛想なだけなんだろうけど……。

「朝食のときのことなんですが……。もしかして、一夏が好きだとか」

「っ！？　な、なにを馬鹿なことをっ」

言った途端、顔を真っ赤にして反論してくる篠ノ之さん。ああ、ビンゴです。

「安心してください、そのことを本人に言うつもりはありませんし、私が彼を好きになることもありません。ですから、この一週間だけは彼と会話をしてもこちらに殺気を向けたりとかは、やめていただきたいんですが……」

「あ、ああ、いや、それは済まなかった。私もやりたくてやったわけではなくて、だな、ついと言うか」

好きになることはないと断言すると、篠ノ之さんは目に見えて態度が軟化した。ああ、やっぱりただ嫉妬していただけなのかな。

「うん、私のことは箒でいい。君のことも呼び捨てでいいか？」

「あ、はい！　よろしくお願いしますね」

「ああ、よろしく頼む」

結局、ぐっと握手を交わして仲直りできた。よかった、おそらく

もうあの鬼神降臨はないだろう。ない、よね？

……あれ、作戦会議は！？

第2話　鬼神降臨！？（後書き）

うーん、早くヒロイン出したいな。いや、ヒロインはのほほんさんなんだけど。

せっかくのハーレムだし、ね？

あ、月村待ってくださっている方、もう少しお待ちを。口内炎が痛くて執筆できません。ほんと口内炎創った奴氏ねばいいのに。

第3話　作戦会議

「一夏、今良いですか？」
「お、おう。作戦会議、だっけか？」

放課後、私は一夏の席に寄ると肩を叩く。もちろん、一週間後に向けての作戦会議だ。
箒さんは声を掛けたのが私だと知ると、睨みつける目をふっと緩めた。よかった……。

「んで、何をどう話し合えば……」
「……とりあえず、相手のＩＳを知ることから始めましょうか。イギリスのサイトに飛んで、公表されているブルーティアーズの最低限のデータを持ってきました」
「ブルーティアーズ？」
「セシリアさんのＩＳの名前です。また、彼女の武装の一つであるビット兵器の名でもあります」
「なるほど……」

コクコクと頷いてデータを眺める一夏。というか、代表候補生を相手取るんですから、このぐらいは知っておきましょうよ……。

「このビットはビーム兵装が四機、ミサイル兵装が二機の合計六機で構成されていて、直接ＩＳと接続すればスラスターにもなる優れものです」
「ビットか……。射撃特化なのか？」
「そうみたいですね。一応申し訳程度に近接専用のブレードも積まれているみたいですが、この兵装の構成から言えば使用されることはないと考えて良いでしょう。どう懐に入り込むかが鍵になります

ね」

言いながら、ビットを拡大表示して映す。青い板のようなデザインのそれを眺めながら、私は思考の海に沈む。シミュレーションゲームなんかをやっているときには、いつもこういう状態になる癖みたいなものがあると、昔友達が言っていたっけ。

まず、戦闘の状況から整理してみよう。セシリアさんと私達二人の戦力差は歴然。二対一でも明らかにセシリアさんの方が強い。むしろ、一対多を想定されているブルーティアーズならばより有利に働くだろう。どう足掻いてもそれは覆せない。ならどうする？

こちらは二人。なら、二人でしか出来ないことをすればいい。相手がビットと本体の二人なら、こちらはタッグの二人だ。

「他に積まれているのは、《スターライトｍｋ？》というレーザーライフルです。おそらく、ビットで撹乱してこの主力兵装で隙を突いてくる戦法でしょう。と言っても、他の戦法を警戒しておくのも忘れてはいけませんが」

「そうだな……。一番手っ取り早いのは、ビットを先に全部潰すことか？」

「そうですね。しかし、その場合はビットに注意を向け過ぎない方が良いですね。狙いを悟られれば簡単に回避されてしまいますから」

「でも、ほかにはどうするんだ？　俺達二人とも初心者だろ？」

そう、問題はそこだ。相手は代表候補生、専用機への搭乗時間は軽く三〇〇時間は越えている。そして、ＩＳは乗れば乗るほど相性が上がっていく珍兵器だ。となれば、初めて量産型を操縦する私達は圧倒的に不利。

だけど、だからこそ戦う価値があるのだ。

「後は、どれだけＩＳ同士で連携が組めるかですが……、一週間は

連携の練習をせずにお互いＩＳやその他の練習に当てませんか？
素人の浅知恵で連携など考えても、うまく行きっこないですし」
「まあ、そりゃそうだよな。よし、それじゃあそうするか。よろしく頼むな、香織」
「ええ、こちらこそ。よろしくお願いします、一夏」
軽く微笑み、一夏と握手を交わす。一通り情報のおさらいは出来たかな。
どうやら彼は、相手のことを調べると言うことをしないらしい。なら、その辺は私の仕事ですね。
情報交換を済ませると、一夏は箒さんに連れられて教室を出て行った。向こうは向こうで特訓ですか、頑張ってくださいね、箒さん。

「さて、私はっと」

バッグ片手に教室を出ると、生徒用のＩＳの使用申請をするために窓口へ。申請自体はいつでも出来るけど、アリーナの確保とかの事情もあって使用許可が下りるまでにはちょっと時間が掛かる。
それでも、二回くらいは動かせるはずだからそれで慣れないと。

「すいません、って山田先生？」
「あ、一之瀬さん！　どうしたんですか？」

窓口にいたのは、書類と睨めっこしていた山田先生だった。
こんなこともしてたんですね……。

「打鉄（うちがね）の使用申請をしたいんですけど、良いでしょうか？」
「わかりました。じゃあこっちの用紙に必要事項を記入して提出してください。早ければ明日にでもアリーナの許可が下りると思いますから」

用紙を受け取り、ボールペンでさらさらと必要事項を記入していく。気をつけなければいけないのは、性別に関係してくる要項は偽装後の戸籍情報でいれないといけないところだけか。

数十秒で用紙を埋めると、こちらを温かな目で見ていた山田先生にそれを渡す。綺麗なアーチ状に削り整えられた爪は、きちんと磨かれて光沢を放っていた。

「はい、記入漏れはありませんね。それじゃあ許可が下りたらお知らせしますね」

「ありがとうございます。それじゃあ、私はこれで」

「気をつけて帰ってくださいねー」

そう言って見送ってくれる山田先生に小さく会釈すると、校門から出て寮へと歩いていく。と言っても、寮までは大した距離があるわけでもないからすぐについてしまうわけだけど。

いやぁ、寮のロビーも相変わらず姦(かしま)しい。女子だけだから仕方ないと言えば仕方ないけどね。

「ただいま帰りました、ってまだ帰ってないんですね」

自室に戻っても、部屋の中には誰もいなかった。のほほんさんはまだ学校かぁ。

丁度いいし、走りに出ようかな。体力作りも大切なんです。

で、寮の外周を体力の限り全力疾走してきた私は、ふと寮のロビーに掛かっている時計を見る。走り始めてから丁度一時間が過ぎていた。

これ以上やれば立っていられなくなるという位まで頑張ったし、今日はそろそろ終わりにしようと思い自室へ向かう。少しの間走ってなかったから、ちょっと疲れたな。

ちなみに、今はＩＳスーツ。体操着代わりだけどすぐに乾くし汗も外に逃がしてくれるから運動するには最適なのだ。中学校ではこれよりもワンランク下の素材で作られた体操服を使ってたっけ。あれも着やすかった。

「あ、かおりんだー」
「布仏さん。いつお帰りに？」

部屋に戻ると、のほほんさんがベッドの上でゴロゴロと転がっていた。それも心底嬉しそうに。やぁ、癒されるね。

「ついさっきだよ。そういえば、今朝言ったこと覚えてない？」
「ええっと、何のことですか？」
「織斑君だけ名前はずるいから、私もあだ名とかで呼んでー」
「えぇー……。本音、さん？」
「さん付けなの？」
「……のほほんさんはどうでしょうか」
「あ、それならいいよー」

いいんですか。そしてのほほんさんの気迫がなんだかおかしかった。

「これで、友達度アップだねー」
「あ、はぁ……」

意味が分からないけど、とりあえず頷いておこう。
昨日と色違いの緑色（昨日は黄色）の部屋着を着たのほほんさんから、平時ものほほんさんでいいとお許しが出たのはいいけど、なんでこだわるんだろうか。別に名前でもいいだろうけど。

「私はお姉ちゃんが三年生にいるから、布仏さんだとごっちゃになっちゃうんだよー」
「ああ、そう言えばそうでしたね。では、のほほんさんと」
「うんうん、ところで今まで何してたの？」
「寮の外を走り込んでいたんです。体力作りで」
「じゃあ、シャワー浴びちゃえば？　汗びっしょりでしょー？」
「はい、そうさせてもらいます。ご飯はどうしますか？」
「もうちょっとしたら行くつもりだよー」

わかりました、と言葉を返し、パジャマと共に脱衣所へ入る。
さて、頑張らなきゃね、今週一杯。

「もしもし、束ちゃん？」

皆が寝静まった後。『僕』はこっそり寮を抜け出して外の茂みの陰に隠れて電話をかけていた。
電話の相手は、篠ノ之束。

『あ、もしもし香織ちゃん？　やーん、連絡待ってたよ！　番号は調べてあったんだけど、ここはそっちから掛けてくるのを待った方が風情があるなーと思って待ってたんだよー！』
「あはは……。ところで、あの子はどうなったんですか？」

相変わらず凄いマシンガントークだった。

『ふっふっふ、まだまだ調整どころが一杯だから、もうちょっとかかりそうだけど安心してね！　必ず一緒に飛べるようになるよ！』

「ほ、本当ですか！？」

『もちろん！　送るときはちーちゃんに連絡するから、楽しみに待っててね！』

ぶつ、と携帯が切れる。まあ聞きたいことは聞けたから良しとしようかな。

あの子、やっと飛べるんだね……。

それから、六日後。

「……えーと、織斑先生？」

「なんだ？」

「一夏は何故専用機なんでしょうか」

一切詳細を聞かされていなかった『私』は、思わずそう言った。

てっきり、私は今まで訓練機二機で相手取るものだと思ってたんだけど……。

「数日前に用意できてな。クラスでも言ったんだが、聞いてなかったか？」

「えっ……。すいません、聞いてませんでした……。　まあでも、これで少しでも食い下がれれば……」
「何とかなるさ！　向こうも知ってるし」

うぅ、多分イメージトレーニングと復習してたせいだ……。
まあ、とりあえず今は置いておこう。専用機となれば少なくとも戦力の向上は見込める。より細かく言えば、火力の向上は見込める。それが戦力になるかどうかは、一夏の腕次第だ。

「仕方ない……。先に出ています！」

ＩＳ『打鉄』で先に飛び出すと、独特の浮遊感と共に空へ浮かぶ。打鉄の基本装備は近接戦闘用のブレードとハンドガンのみ。つまり、火力で言えば一番下だ。ここをどうカバーするか……。

「テステス、聞こえてますか？　セシリアさん」
「ええ、聞こえてますわよ」

頭の中で声が聞こえた。これがＩＳ同士の通信みたいなものか。意外とあっさり出来たな。

「良かった。あの、一つ条件を加えさせていただきたいのです。一夏が専用機持ちになっていたようなので、私か一夏、どちらかのシールドエネルギー残量がゼロになった時点でこちらの負けというのはどうでしょうか」
「しかし、それでは一之瀬さんが不利ではありませんの？」

高圧的な、けれど優しさの含まれた声に、思わず頬が緩む。けど、ね。

「そうならないよう、全力を尽くすだけです」
「……わかりましたわ。織斑先生、よろしいでしょうか？」
『まあ、いいだろう。全員、全力を尽くせ』

放送機材から吐き出された千冬さんのその声と共に、一夏がピットから飛び出してくる。よし、役者は揃った。

「よろしくね、打鉄」

腕を動かしながら、一人そうごちる。
飛ぶのは、これが三度目だ。前の二回は訓練で少し飛んだだけ。ほとんど操縦練習だったけどね。――警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。
開放回線（オープンチャネル）で話している一夏とセシリアさんを眺めながら、集中してブレードを呼び出し（コール）、それとなく構える。刃は手元よりも下に、後ろに流すように。
独特の緊張感が体を蝕む――否、支配する。それは決して不快なものではなかった。むしろ、高揚感と共に体を動かす燃料にすらなりそうなほどだ。――警告！　敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわねっ！」

エネルギー弾の掻き立てる独特の音が、開放回線から流れ出たセシリアさんの声と共に耳に届き、三六〇度を見渡せる中で一夏のいる元へと飛んでいく。

『一夏、無事？』
『あ、ああ。にしても気持ち悪いぜ、こりゃ』
『それでもやらないといけません。交代（スイッチ）噛ませながら叩きましょう。

後衛（バック）は陽動で』
『わかった。じゃ、まずは俺から行くっ』
個人間秘匿通信（プライベートチャネル）で軽く作戦案を交わしてから、互いに空を飛ぶ。
心地よい浮遊感だった。
一夏が刀身長めのブレードを呼び出し（コール）、器用に狙撃を避けながら空を進んでいく。それをサポートするように、私もブレードを収納（クローズ）、ハンドガンを展開（オープン）して狙いを定める。と言っても、正確に狙うわけではなく気を散らすための威嚇射撃だ。当たれば御の字。
「くっ、この！」
「香織、そっちだ！」
「了解、交代（スイッチ）します！」
単語を交わし、素早くハンドガンを収納（クローズ）しブレードを展開（オープン）する。
さあ、行こう。
グイッ、と引っ張られるような強烈な加速感と共に、私と打鉄は弾丸のようにその場から飛ぶ。応戦しようと掲げたライフルにも臆せず、一直線に。
大丈夫、当たらない。
直後、銃口を青い光が満たしていった。

第3話　作戦会議（後書き）

ということで、戦闘開始。戦闘の模様は大分カットされるでしょう。

ああちくせう、口内炎が治らない。小さくなって来てる気はするけどなぁ……。

第４話　戦いの恐怖

――バリアー貫通、ダメージ５７。シールドエネルギー残量、８６。実体ダメージ、レベル中。

「わかってるんだよ、そんなことっ！」

吐き出すように呟いて、ビットから撃ち出される特殊エネルギー（ＢＴ）を回避していく。二機ならまだしも、四機もいるんじゃ回避だけで手一杯だ。

模擬戦開始から約三〇分。ブルーティアーズには一撃も与えられないまま、私たちはじりじりとシールドエネルギーを削られていた。まだ辛うじて避けてはいるものの、正直厳しい。

一夏のＩＳ『白式（びゃくしき）』に装備されているのは、近接戦闘用のブレードが一本だけ。後付装備（イコライザ）も出来ない特殊なＩＳらしいけど、この状態では最悪の武装だ。

そしてこの『打鉄（うちがね）』に備わっているのは、近接用のブレードと短距離射撃用の拳銃（ハンドガン）のみ。そして相手とこちらの搭乗時間差は優に二八〇時間以上。無論向こうが上である。

『一夏、無事ですか！？』

『な、なんとかな……。そっちは？』

『大分まずいです。ですが、ある程度相手の特性は分かりました。エネルギー残量は？』

『６７、実体ダメージは中破。そっちはどうだ？』

『５７、大破一歩手前です。仕掛けるのは、これでラストでしょう』

お互い随分とぼろぼろだ。けれど、おかげでこのビットの攻略法も分かってきた。

『あのビットは、操縦者の意思で動いています。そして、それには多大な集中力が必要になってくる。その証拠に、ビットの相手をしている間はライフルは撃ち込まれませんでした』
『ああ、それは俺も思ってた。いけそうか？』
『行くしかありませんよ。私がビットを陽動します。隙を突いて、斬ってください』
『分かったっ』

大分曲芸飛行染みた動きでビットの攻撃を回避しながら、私はビットの動きを見ていく。
常に私の周囲を囲むようにして飛び回る四機のビット。だけど、人の操るものなら必ずズレが生じる。そこを突けば……！
左手に収まっているブレードをきつく握り、じっとビットだけに集中する。一夏の方は、向こうでうまくやってもらうしかない。
周囲三六〇度、それこそ真下や真上、自分の後ろといった場所は、普段見ないだけあってやや反応が遅れてしまう。今までも、そこは優先的に狙われてきた。だけど、気づいてしまえば簡単なことだ。
それとなく隠しながら撃っては来ていたけど、それでもっ！

「……ここ、だッ！」
「そんなっ！？」

ギュゥッ、と急な加速と共に左向きに振り向いた私は、その勢いのままブレードで斬り払い、発射寸前だったビットの一機を破壊する。よし、続けて！

「これと、これっ！」

真逆の場所を同時に見ることは出来ない。その思考の穴を突くよ

うに上下に飛んできていたビットを、展開（オープン）したハンドガンと振り払ったままのブレードの逆袈裟で同時に破壊する。後一機は。

「でぇりゃぁあああ！！」

真後ろになった其処にいたビットを、上空から突っ込んできた一夏がすれ違い様に叩っ斬る。そのままの勢いで、一夏は呆然としているセシリアへと加速して飛んでいく。

が、次の瞬間。

「――掛かりましたわ」

（まずっ――！？）

「一夏、逃げてッ！」

「おあいにく様、ブルーティアーズは六機あってよ！」

腰部分を守るスカートのようなアーマーが動き、無骨な砲身が顕わになる。

ビットとは明らかに違うフォルムのそれは。

「んな、ミサイルッ！？」

直後、白と赤の光が視界を刺し貫き、黒煙がそこを満たしていく。

円形のそこから吐き出されたミサイルは、回避する暇もなく白式を纏う一夏へと命中した。

「一夏あぁぁあああ！」

『一夏あああぁあああ！』

香織の悲鳴が、モニターから鳴り響く。あまりに悲痛なその叫びに、真耶（まや）は思わず耳を塞ぎそうになってしまった。

モニターは黒煙で満たされ、その向こうを見ることは出来ない。

思わず一夏の名を呟きそうになった箒（ほうき）は、すぐそこまで出掛かった名をぐっと飲み込んでモニターを見つめた。

「――ふん」

モニターを見つめたまま、千冬（ちふゆ）は鼻を鳴らす。それは、溜め息にも似た何か。

モニターを遮っていた黒煙が晴れていくにつれ、箒と真耶は思わず胸を撫で下ろした。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

完全に黒煙が晴れたそこには、白式が立っていた。ただし、その形状は大きく変わっていたが。

――味方ＩＳ健在。今の攻撃によるダメージは無し。

「え……？」

思わず呟いた瞬間、私の視界には白銀のＩＳが浮かんでいた。

白式が、変わっていた。先ほどまでの無骨なデザインは消え、代わりに現れたのは、御伽噺の中に出て来るような騎士の鎧めいたそれ。残念ながら兜はなかったが。

「いち、か……？」

「なんだかよくわかんないけど、おう。ようやくこいつは俺専用ってことらしいぜ」

曖昧な笑みを浮かべながら、涙の滲む声で問うた私に答える。よかった、無事だった……。

人にミサイルが当たる瞬間なんて、見ていて気持ちのいいものじゃない。それも目の前で、だ。爆発の威力は、死の危険が無いことを簡単に忘れさせてくれるほど恐ろしかった。

ＩＳは、兵器だ。そのことを、私はようやく思い出した。

どこか浮かれていたんだ。自分が男で二人目のＩＳ操縦者だと聞いて、やはり浮かれてしまっていた。でも、考えてみればそれは、世界で二人目の『搭乗者を選ぶ殺戮兵器』のテストパイロットということだ。

こうして接してみて分かる。この子達は戦うために生み出されたことが。だけど、だけど私は……、それを否定してあげたいと思っていたんだ。

ううん、『私』じゃなくて、『僕』が。

「ま、まさか……、一次移行（ファースト・シフト）！？　あ、あなた、今まで初期設定だ

けの機体で戦っていたって言うの！？」
「どうやらそうらしいぜ。香織、やれるか？」
「……うん、大丈夫です。やりましょうっ！」

刹那、風を裂いて突き進む純白の機体。私の役目は、その突撃をサポートすること。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

聞こえてくるのは、一夏の独白。きっと、開放通信（オープンチャネル）で流れていることにも気づいていないんだろう。

「俺も、俺の家族を守る」
「……は？　あなた、何を言って――」
「とりあえずは、千冬姉（ちふゆねえ）の名前を守るさ！」

それは、独白と言うにはあまりに力強いもので。思わず私も、頬が吊り上ってしまいそうになっていた。
全く、男子と言うのは度し難い。『僕』も含めて。

「ああもう、面倒ですわ！」

突っ込んでくる私と一夏を迎撃せんと、残されたミサイルビットから大量のミサイルが吐き出される。一発でも当たれば即アウト、ハイリスクハイリターンの大きな賭け。
その賭けを、一夏は真っ向からぶった切っていく。動きで回避しきれないものは私がハンドガンで撃ち落し、突き進む道を作り出す。

「行け……っ、行けぇぇぇえええええ！　一夏あぁぁぁあ！」
「おおおおっ！」

純白の騎士は、空を斬り裂いて突き進む。
その剣から解き放たれた青い光が、一際強く光り輝き――。
『試合終了。勝者――セシリア・オルコット』
ブザーと共に、その放送が鳴り響いた。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

試合終了後、ピットに戻った私と一夏を待っていたのは千冬さんのお叱りだった。
まあ、負けてしまったのだからきちんとお叱りは受けよう。打鉄も、あまり飛ばせなくてごめんね。

「武器の特性を考えずに使うからああなる。身をもって分かっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればＩＳを起動しろ。いいな」
「……はい」
「それと、一之瀬。よく戦った」
「……へ？」

えっと、何で褒められたの？　よく分からない。というか怒られ

るんじゃなかったの？

「なんで、私は褒められてるんでしょうか？」

「訓練機で、しかもサポートもこなしながら生き残る。相手が注目していなかったとはいえ、ＩＳをまともに動かして五回に満たないお前がそこまでできれば十分優等生だろう」

「あ、ああ、ありがとうございますっ！」

うわ、うわわわっ、千冬さんが褒めたよ！？　お姉ちゃんも「あの人が人を掛け値なしに褒めるところを見たことがない」って言っていたあの千冬さんが！？

「……おい、なんだその形容し難い表情は。幽霊でも見るような目だな」

「あ、す、すいませんっ。その、織斑先生はあまり人を褒めないと聞いていたので……」

「……はぁ。まあいい、とりあえず今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

「は、はい！」

「おう」

バシンッ！　と千冬さんが盛大な音を立てて一夏の頭を叩く。電話帳レベルの厚みがあるそれで。

千冬さん、それはさすがにひどいと思います。そう思っても口にはしない。それが我が家の処世術。

「いってええっ！」

「返事は「はい」だろうが。お前はこれを読んでおけ。ＩＳを所持、使用するための規則だ。一文字も余すことなく読むんだぞ」

「げっ、なんですかこの『あなたの街の電話帳』みたいな厚さは！

？」

「いいから読んでおけ。それがＩＳを使う責任の重さだ」

千冬さんの言葉には、いつの間にか真面目な重みが加わっていた。その迫力に、一夏も言葉を発することなく頷く。

一夏は箒に連れられて、例の本を抱え帰っていった。山田先生は管制室に戻ってアリーナの点検をするらしい。

私が今残っているのは、千冬さんに口パクで「ここに残れ」と言われたからだ。

「さて、と。今は戻してもいいぞ。音声は流れないからな」

「あ、はい」

息を抜き、近くの出っ張りに腰掛ける。正直、身体的疲労はマックスに近い。それ以上に精神的疲労は上限突破しているが。

千冬さんは軽く微笑むと、ぽんっと僕の頭に手を載せる。じんわりと、千冬さんの温もりが伝わってくる。

「とりあえず、よくやった。さっきも言ったが、訓練機であそこまで立ち回ったのは早々いないだろう。誇っていい」

「あ、ありがとうございます……」

「……何かあったか」

「え……」

千冬さんは突然言って、僕の隣へ腰掛ける。学校では絶対に見られない柔らかい一面が、少しだけ顔を覗かせていた。

千冬さんが僕を見る目は、決して厳しいものじゃなかった。慈しみ、のようなものが混じった、優しい瞳。

「……怖かったんです。一夏にミサイルがぶつかったとき、思い出

しちゃったんです。自分たちが乗っているものが兵器だってこと。皆ＩＳが危険の無い機械みたいに見ているけど、これは人殺しの道具で、実戦だったらあれは死んでいたのかもしれないって考えると……！」

言外に促され、僕はぽつぽつと言葉を零す。

次第にそれは涙声へと変わっていき、とうとう僕は言葉を発することも出来なくなった。

「うっ……、ぐすっ……」

「そう自覚できているなら、お前は何も心配ないさ。最近の連中には、それを思い知らせることが最も難しい。天狗になっているのならぶちのめせばいいし、落ち込んでいるだけなら励ましてやればいい。だが、ＩＳが恐ろしいと感じさせることはそうできることじゃない。直接味合わせるためには技量が足らない者が多いのさ」

「で、でもっ……！　僕、あの子に触れたときに感じたんです……！　飛びたいって、飛ばせてほしいって鳴いているのを聞いたんです！　そんなの聞いちゃったら、飛ばせてあげたいと思っちゃうじゃないですか……」

「あの子、というのは束（たばね）のところのＩＳか」

尋ねるというよりは確認するように言ったその言葉に頷く。

「ＩＳは、確かに恐ろしい兵器だ。だが、同時に頼もしい翼でもある。お前がＩＳを恐ろしいと感じたのなら、次はその恐ろしさを頼もしさに変えてくれる相棒（ＩＳ）を見つけることだ」

「それ、って……」

「束から話は聞いている。一週間以内に到着するらしい」

「恐れることを恐れるなよ」と、千冬さんはそう言って去ってい

った。
残されたのは、俯いて地面を見つめる僕だけ。
小さく溜め息を零すと、力なく立ち上がって寮へと足を向けた。

「ただいま帰りました」
「あ、かおりんかおりん！　すごかったよ今日の試合！」
「ありがとうございます、のほほんさん」

部屋に帰った『私』を出迎えてくれたのは、また黄色に戻っていたのほほんさんだった。またかわいらしいものを着てますね、なんて言ってあげたくなるが、正直今はそういう気分じゃない。というかちょっと頭が痛い。

「……大丈夫？　ちょっと顔色悪いよ」
「え、ええ……。今日は、シャワー浴びて寝ます。ご飯はいらないので……」
「そっかー。何かあったら言ってね。友達なんだから」
「はい、ありがとうございます」

ゆっくりと礼をしたあと、覚束ない足取りでベッドへと倒れこむ。
ふかふかの布団の感触が、不思議と暖かかった。

第４話　戦いの恐怖（後書き）

まだストックは尽きないぜ。まだ、な。
ちなみに、原作より若干一夏がハイスペックになっています。
戦闘中にプライベートチャネル使える所とか。最初はまともに使えませんでしたからね。

第5話　決まりました

翌朝のＳＨＲ。朝食を食べる気にもなれずに昨晩の夕食と今日の朝食を抜いた私は、精一杯の虚勢で背筋を正しながら先生の話を聞いていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでいい感じですねー」

嬉々として喋る山田先生は、ずんと暗く沈んでいる一夏には気づいていないらしい。もちろん、周囲の女子も大いに盛り上がっている。

「先生、質問です」

一夏が挙手。

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、何でクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは――」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

その言葉と共に立ち上がったセシリアさんは、腰に手をやって機嫌良さそうに次の言葉を放つ。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

一夏が負けたんじゃなく、一夏と私が負けたんだけどね。

「それで、まあ、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして。一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりＩＳ操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

「いや、ちょっと待ってくれよ！　香織はどうなるんだ！？」

「えっと、すいません。私も体調上の理由で辞退させていただきました。それに、せっかく専用機持ちがいるのに訓練機が代表になったらあれですし」

体調上の理由って言うのは本当だ。正直言って今のままじゃ一対一のプレッシャーに勝てる気がしない。もっと強くなってからじゃないと、私は足手まといにしかならない。

一夏は大きく溜め息を吐くと、沈み込むように机に突っ伏す。本当にやりたくなかったんだろうな。

「そ、それでですわね」

咳払いを一つして、一夏の方をスッと見直すセシリアさん。

「私のように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳ操縦を教えて差し上げれば、それはもう見る見るうちに成長を遂げ――」

言葉を遮るように、大きな音と共に机が叩かれ、箒さんが立ち上がった。

あれ、修羅場？

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

「あら、あなたはＩＳランクＣの篠ノ之さん。Ａのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！　頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしてもと懇願するからだ」

「え、箒ってランクＣなのか……？」

「だ、だからランクは関係ないと言っている！」

途中で口を挟んできた一夏を怒鳴りつける箒さん。周りの子が怯えてますよ、と言いたくても言えない。

と言うか、これはもう修羅場ですよね？

なんて考えていると千冬さんが、立ち上がって口論を始めている箒さんとセシリアさんの元まで歩いていき、出席簿で両者の頭を引っ叩く。うわ、凄い音したよ今。

「座れ、馬鹿ども」

冷徹そのものといった声で二人に告げる千冬さん。さすがに千冬さんには逆らえないのか、二人はおとなしく席に着いた。

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

いい音を立てて出席簿で叩かれた一夏は、なんとも言えない顔で頭部を抑えていた。何か下らないことでも考えていたんだろうか。

「お前達のランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな」

うわぁ、手厳しい。でも確かに、世界最強から見ればどんぐりの

背比べもいいとこだよね。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言っただろう。下らん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

はーい。

「……お前、今何か無礼なことを考えていただろう」

「そんなことはまったくありません」

「ほう」

バシンバシンッ！

片眉と共にギリギリと吊り上げられた出席簿が、小気味いい音を立てて一夏の頭を殴打する。それも二回。脳細胞が瞬く間に死んでいくなぁ、うちのクラスの特定の人は。

「すみませんでした」

「わかればいい。クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

クラス全員（数名除く）からの「はーい！」の大合唱で、めでたく一夏がこのクラスのクラス代表に決定されましたとさ。

うん、後で一夏に何か作ってあげようか。あんまりに不憫すぎてきた。

「箒さん」
「ん、香織か。どうしたんだ？」
「いえ、お姿をお見かけしたので、ご一緒にどうかと思って」

翌日。放課後に寮への帰り道で箒さんの後姿を見つけた私は、パタパタと駆け寄って声を掛けた。
大して驚いた様子もない箒さんは、くるっと振り向くとこちらの顔を確認して小さく表情を崩す。

「ああ、いいぞ」

崩した表情、敢えて言えば微笑みだろう。それを私に向けながら、箒さんは先導するように先に立って歩いていく。
む、歩幅が広い。私の歩幅は少し狭いから、少し小走りを挟む気持ちじゃないと追いつけないな。

「一夏とはどうですか？　仲は」
「な、い、いきなり何を言い出すんだっ」
「いえ、少しは進展したのかな、と」
「……まだだ。それどころか、私の気持ちに感づいてすらいない」

うわぁ。それはまた、なんというか。箒さんは典型的なツンデレだと思うのに。ちょっと過激だけど。
一夏も一夏だけど、まあ箒さんも真正面からのアプローチってしてないのかな。

「で、でも、同室なんですよね？　それ相応のハプニングは」
「相部屋になったことを馬鹿なことと言い切り、下着を見れば懐か

しむ馬鹿だぞ」
「……えっと……、ご愁傷様です」

それはいくらなんでもない。本当にない。男として謝らせてほしいけど、ばれるのでやりません。
下着は、千冬さんで慣れちゃってるのかな。相部屋は自分に魅力がないと考えているだけか？　どちらにしても、このままじゃあね。

「じゃあ……、手料理を作ってあげるとか？」
「……私は、料理は苦手なんだ」
「なら、コーチしてあげましょうか？」
「い、いいのか？！」

噛みつかんばかりの勢いで私の手を取る箒さん。怖いです。

「ま、まあ、暇つぶしにもなりますし」
「是非頼む。どうもセシリアの様子が妙でな、一夏に惚れた可能性がある」
「……まあ、戦いを超えて育まれる愛と言うのもありますし、ね」

しかし私に限ってはその枠には当てはまりませんけどね。男ですから。
とりあえず、練習場所は私の部屋でいいかな。

「それじゃあ、いつから始めましょうか。お時間はありますか？」
「そうだな……、空いている時間に部屋を訪ねるから、大丈夫だったら頼む」
「わかりました。準備して待ってますね」

まあ、少なくとも化学薬品を持ち出すようなトンでもさんではな

いことを祈ろう。さすがに、酸味が足りないからって塩酸やらを入れる人じゃないよね？

とりあえずそれだけはないことを祈る。

「それにしても、セシリアとの戦いは凄かったな」

「ええ。一夏が土壇場であんなことになるとは思いませんでした」

「いや、一夏もそうなんだが、お前もな。訓練機の扱いづらさは一応人づてに聞いたことがあるから、あそこまで動かせるものかと思ってな」

「え？　ま、まあ、一応練習しましたから」

突然私の話になって、ちょっと挙動不審になりながら言葉を返す。褒められるのには慣れていないんです。顔真っ赤になってないだろうか、心配だ。

「一夏が言っていたぞ。お前の支援がなかったら、とっくに墜ちていたと」

「そ、そうですか……。それは、なんとも」

嬉しいんだけどなぁ……。まあ、私もタッグじゃなければ墜ちてる自信があるし。結局どっちもどっちなんだよね。

今のところは一夏が上かな。最適化（フィッティング）の終わってない専用機であそこまで持たせたんだし。

とりあえず箒さんに料理の練習をするという約束を交わし、その日は終わったんだけども。

まさか、あそこまで酷いとは誰も思わないのです。それはまた、後のお話。

「……のほほんさん、どうですか？」
「美味しいよかおりん！」
「よかった……。自宅にいた頃は姉の分も作っていたので、こう見えても腕には自信があるんですよ」

その日の夜、私は自室でのほほんさんに料理を振舞っていた。
メニューは白米、塩味強めの野菜炒め、椎茸（しいたけ）のお吸い物。お吸い物は薄めに作ってあるから、野菜炒めの塩味を丁度柔らかくしてくれる。但し、塩分の取りすぎには注意しましょう。
それにしてものほほんさん、とっても美味しそうに食べてくれる。私がお腹が減ったから作ったんですけど、のほほんさんが「私も食べたーい」と言ったので、二人分作ったのです。

「それでも、食堂のものには負けるんですよね……。もっと美味しくできる気がするんですけど」
「いや、まあ向こうはプロだしー。むしろ勝っちゃったらあそこのご飯食べられないよ」

ああ、まあ確かに。主に申し訳なさとか、その辺で。
まあでも、大雑把に作った割には小奇麗に出来たのでよしとしますか。美味しかったし、お腹も膨れたし。

「それじゃあ、シャワー浴びてきます」
「はーい」

まだご飯を食べているのほほんさんに断って、着替えと共に脱衣室へ。たまには湯船に浸かりたいけど、それには家に帰らないといけない。残念ながら、家は長期休暇じゃないとゆっくり出来ない距離にあるんだよね。

まあ、自分で決めたことだから弱音は吐きたくないけど。そんなの、冗談じゃない。

服を脱ぐと、念入りに隠すようにしてブラとパッドを服の下へ。ここって制服は色彩こそ同じだけど、改造ＯＫだしプリセットの制服のレパートリーもたくさんあるからとても助かる。トランクス履いてもズボンがあるから助かったね。

と言っても、普段はＩＳスーツを直で着ているから関係ないんだけど。さすがに胸はふんわりとだけ盛ってある。あんまりペッタンコでもあれだし。

とりあえず、これでよしと。

シャワー室の扉を開け、中へ入る。ちなみに扉はパタパタと扇状に畳まるあれだ。む、言葉で言い表せない……。まあいいや。

キュッ、とシャワーの栓を捻ると、頭上から熱いお湯が降り注いでくる。熱いと言っても熱過ぎる訳ではなく、むしろ心地いいぐらい。

「ふーっ……。本日の『私』、これにて終了。かな」

呟いて、その場に膝を抱えて座り込む。お湯はそれでもきちんと当たってくれていて、寒さを感じることはなかった。

ここに来て、一週間と少し。とりあえずここまでは順調だ。順調かどうかは疑問符がつきそうだけど、とりあえずはまあ。

「あの子、いつ来るんだろ」

呟いたのは、産まれて始めて起動させ、生まれて始めて起動させ

られたあの子のこと。
ＩＳは、兵器だ。だけど、あの子のことをそう思いたくない。言葉で具体的に言って見せろと言われれば、迷わず無理だと返せる自信のある気持ちが、心の中を占拠していた。
僕は、あの子を飛ばせてみたい。ここに入った意味の一つは、それなのだから。

「とりあえず、待ってみるかな」

立ち上がって栓を止めると、脱衣室からバスタオルを取って全身をくまなく拭く。よし、と。
後はＴシャツと短パンでよし。さすがに寝てる最中に脱がされたりしない限りはこれでバレない。エアコン止まらなければ、だけど。
もし真夏の熱帯夜にエアコンが止まったら、僕は死ぬね。断言できる。

「あがりましたよー」
「あ、食器片付けておいたから、私大浴場行って来るねー」
「すいません、ありがとうございます」
「いえいえー」

そう言って、洗面道具と着替えを持ったのほほんさんが出て行く。食器類は全て綺麗に洗われていて、棚の中に収められていた。うむ、やりおる。

「……さて、と」

それじゃあ、とくにやることもないし、寝ようかな。
ベッドに体を埋め、ふかふかの感触を堪能しながら、僕はこの日を終えることにした。

それでは、お休みなさい。

「ただいまー」

香織が眠ってからしばらくして、本音（ほんね）は一人で部屋に戻ってきた。すぐそこまでは友人と一緒だったが、友人の部屋は本音の部屋よりも手前だったためだ。

普段なら返事が返ってくる筈だったが、香織が眠っているのに気づくと、音を立てないように荷物を自分の棚に納める。

「幸せそうに寝てるなぁ」

寝る前にと香織の寝顔を覗き込んだ本音は、幸せそのものと言った香織の寝顔を見て思わず破顔する。

「そう言えば、かおりんの寝顔見たのって初めてかもー？」

小声で呟いて、確かにそうだと得心する。思えば、香織は本音が起きるよりも早いときは一時間以上、どれだけ遅くても五分前には起きていた。しかも、寝るのは必ず本音の後。

「うん、レア顔だぁ」

そのことに気づき、本音は何故か嬉しくなってしまった。
普通の友人で寝顔まで知っているものはあまりいないだろう。それも、ここまで無防備な寝顔など、そう見せられるものではない。
香織の秘密を知ったような気がして、本音はなんとなく得した気分になった。

「それじゃあ、お休み。かおりん」

軽く香織の頭を撫ぜると、本音は自分のベッドに入る。
後には、二人分の寝息だけが残された。

第5話　決まりました（後書き）

のほほんさんが可愛い件について。

第6話　『あの子』（前書き）

長いです。普段の1．7倍。

第6話　『あの子』

箒さんとの約束から数日が経った四月下旬。私は朝のＳＨＲ後に千冬さんに呼び出されていた。

「おはようございます、織斑先生」

「ああ。喜べ、束の奴から例のやつが届いたぞ」

「ほ、本当ですか！？」

思わず叫んでしまうが、幸い他の生徒たちは授業の準備や友人とのお喋りに忙しいらしく、私の声が気に止まることはなかった。

「丁度いい、午後の実習で乗ってみろ。訓練機で急加速急停止はできるな？」

「は、はい！」

「なら問題はないか。急下降と完全停止は？」

「一応できます。あの子で出来るかどうかはわかりませんけど……」

「まあ大丈夫だろう。後はぶっつけでやってみせろ。それじゃあな」

千冬さんは軽く笑って最初の自分の担当教科を持っている教室へ歩いていく。そっか、来たのかぁ……！

でも、最初に最適化（フィッティング）しないと携帯できないから、早めに行かないと。幸い、実習授業は午後からだからお昼休みに最適化（フィッティング）すれば間に合うだろう。

で、そんなこんなでお昼休み。ご飯なんて食べていられないとばかりに、お昼を誘ってくれたクラスメイトに平謝りしつつＩＳガレージへ。服をロッカーにしまってＩＳスーツになってから中へ入ると、既に千冬さんが待っていた。

「来たか」
「あの、あの子は……？」
「ここだ。今開ける」

言って手元の端末を弄ると、重苦しい音と共にＩＳ格納庫の扉が開かれる。
そこに納められていたのは、私が最初に見たときよりも幾分装備が美しく磨かれ、艶やかさすら感じさせる黒い機体だった。

「こいつが、梟（ふくろう）だ」
「梟……」

いてもたってもいられなくなり、私は三角跳びの要領でＩＳの脚部と腕部を駆け上ると、梟へと乗り込んだ。
直後、機械的な音と共に体がＩＳと一体化する。視界は三六〇度開けて、様々な情報が目の前と脳内を錯綜していく。その中で、一つの声が頭の中に響き渡った。

『おはようございます、カオリ』
「へっ！？　だ、誰！？」
『落ち着いてください。梟の補助（サポート）ＡＩ、イヴと言います』

思わず声に出して言ってしまった私を落ち着かせるように、イヴと名乗る声が言う。その声は今まで私が聞いたどんな声とも違っていた。サンプリングは誰のを使ったのか、非常に気になるところだ。

「って、ＡＩ？　ＩＳに？」
『私にインプットされているのは、マスターであるカオリのサポートです。戦闘、日常生活どちらもです』
「そ、そうですか……。初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）はできる？」

『問題ありません。すぐに開始しますか？』
「お願い」
『了解しました』

そう答えて、イヴはすぐに作業を始める。
……速いな。三分もあれば終わってしまいそうな勢いだ。さすが束ちゃん。

「……ねえ、イヴ」
『なんでしょう？』
「あなたは、私のことを覚えている？」
『はい、はっきりと』

作業を行っている間、私はイヴに話しかけてみた。
声は外には聞こえていないのか、千冬さんが不思議そうな顔でこちらを見ているけど。

『眠っているとき、私の元にあなたの温もりが伝わってきました。それに気づいて、私は飛びたいと願いました』
「そっか。それじゃあ、やっぱりあれはあなただったんだ」
『はい。あなたともう一度会えて、とても、とても……』
「……イヴ？　どうかした？」

突然言葉を詰まらせたイヴを不思議に思って、私はそう尋ねる。

『……現在の状況を的確に言い表す言葉が見つかりません』
「ん、どういうこと？」
『おそらく、私の中には感情を表す言葉でしか言い表せないものがあります。しかし、私はその何かを感情を表す言葉で言い表せません。どう言った表現をすればいいのか、分かりません』

「そっか……。私は、あなたともう一度こうして会えて嬉しいよ。やっと一緒に飛べるんだ、って」
『嬉しい……、ですか。私の中にあるものも、『嬉しい』というものかもしれません』
「本当に？　だったら、嬉しいな」

機械に感情があるなんておかしな話だけど、ＩＳには意識にも似た何かがあると言うのは公然の事実だ。だったら、人間臭いＡＩだってあっていい。
もっとも、今はまだまだ機械めいているけど。
そんなことを思ったときに、初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）の終了を知らせるアラームが鳴った。予想よりも少しばかり早いかな？

「よし、大丈夫そう？」
『はい、現状に問題はありません。現時点を持って、名称『一之瀬香織』をマスターとして認識します。今後ともよろしくお願いします、カオリ』
「よろしく、イヴ」

そう言って、ついつい頭を下げてしまう。下げてから、意味がないことに気づいたけど。

「織斑先生、最適化（フィッティング）まで終わりました！　ちょっと、飛んでみていいですか！」
「ああ、構わない！　慣らして来い」
「だって、イヴ。行こう！」
『はい、カオリ』

答えたイヴの声には、どこか嬉しさが混じっていた気がした。
ゆっくりと一歩を踏み出し、私は格納庫から体を出す。元からこ

の大きさだったような一体感が、私を包んでいる。

『シールドエネルギー残量確認。システムチェック。全システム、オールグリーン』

「よし、出ます！」

レールの上を滑るように、一気に体を前へ撃ちだす。大気と重力の壁を振り切って、空へ――！

一瞬、音が無くなった。

それを確認したときには、既に私は空の上にいて。

「……ようやく飛べたんだね、イヴ」

『……はい。夢が二つも叶いました』

どこかぼんやりとした声音で、イヴが言った。

機械が夢だなんて、きっと他の人なら笑うだろう。だけど、私は笑いたくないし、絶対笑わない。それを言ったら、男がＩＳを動かしているのだって、本当なら有り得ないんだから。多分。

「夢、か。それってどんなの？」

『一つ目は、こうして空を飛ぶこと。二つ目は――』

――あなたと、空を飛ぶことです。

いまだぼんやりとした声のままで、彼女（イヴ）はそう言った。

それから少し時間が経って、生徒たちが入ってくる前に私はガレージに戻った。千冬さんから開放通信（オープンチャネル）で声掛けられちゃったし。

戻ってきた私を迎えてくれたのは、ジャージ姿に変わっていた千冬さんだった。まあ、結構な時間飛んでいたし着替える時間ぐらいはあるよね。

「イヴ、楽しめた？」

『はい。楽しい、という感情で言い表せばいいのかは分かりませんが、きっとカオリと同じ思いです』

「そっか」

「なかなかいい機動だったぞ。ところで、出る前から独り言を言っているようだったが……」

「あ、私のってＡＩがあるみたいなんです。イヴ、開放通信（オープンチャネル）で話できる？」

『可能です』

「じゃあ今はそうしてくれる？」

「わかりました。『織斑　千冬』ですね、製作者（マイスター）のデータでは知っています。私はイヴ、イヴとお呼びください。そちらのことはチフユとお呼びしても？」

「……あ、ああ。なんというか、ＡＩとは思えないな。アイツが製作者なら何があってももう驚かないが」

流暢に話すイヴに驚いたのか、それとも呆れているのか、千冬さんは苦笑いしながらそう言う。うん、私もそう思います。束ちゃんのやることは一々滅茶苦茶だから。短い付き合いでもそれは分かる。

「この後の実習で専用機持ちにはデモンストレーションで飛んでも

らう。出来るか？」
「はい、大丈夫です。イヴのことは……」
「秘匿しておくべきだな。ただでさえお前はややこしくなってきている。当面は出来うる限り情報は隠匿すべきだろう」
「わかりました。イヴ、個人間秘匿通信（プライベートチャネル）に戻していいよ」
『はい。それとカオリ、私との会話は個人間秘匿通信（プライベートチャネル）で可能です』
『……こう？』
『はい』

頭の中で、人影が頷くのが見えた気がした。あれがイヴなのかな。とりあえずＩＳを解除すると、梟は小さな鳥のペンダントに変わる。カッコいい、かな。うん。私に似合うかどうかは分からないけど。

「よし。ちなみに、梟とお前に専属の整備チームはいない。一から十までおまえ自身でやることになる」
「はい！」
「まあ、わからないことがあれば聞け。表向きは架空の会社のテストパイロットと言うことになっているから、専用機持ちということだけは広めても問題ない」
「ちなみに、その架空の会社って……」
「束がついこの前作り上げたらしい。社員と社長をあいつが兼任している。しかも、政府には疑問を抱かれないよう巧妙に情報を隠匿してあるようだ」

うわぁ、束ちゃんやりすぎじゃないですか……？　いや、確かに守ってもらえるのはありがたいけど……。
束ちゃん、相変わらずやることが派手ですね……。この数十分でこんなに痛感するとは思わなかった。

「凄いですね、束ちゃん……」
「今更だがな。世界が電子機器に頼っている限り、あいつの敵じゃない。ＩＳが世界の敵になろうとな」
「……させません、私が。この子を兵器になんて」
少し沈んだ面持ちの千冬さんに、私ははっきりとそう告げる。
「……ふふ。言うな、ひよっこ。なら、私はその言葉を信じさせてもらうさ」
「あはは……。ありがとうございます」
世界中で、男では一夏と私だけが今のところＩＳを起動させられる。尤も、私は非公開だけど。
一夏の場合はもう止められない所まで来てしまっていたらしいけど、私は表に出ないよう入念に線を張り巡らせてからここに来た。その違いはあるはずだ。
「よし、グラウンドで待っていろ。じきに生徒が来る」
「はい！」
そう言われ、グラウンドで待つこと一〇分あまり。
全員が揃ったそこに、さっきと同じジャージ姿の千冬さんが現れる。あ、隣には山田先生もいるよ。
「ではこれより、ＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、一之瀬。試しに飛んでみせろ」
言われて、私は胸元の（若干膨らんでいるのはパッドをいれているからだ）梟のアクセサリに触れる。
この状態からの起動は初めてだから、ちょっとばかり緊張するな。

『行こうか、イヴ』
『はい』

直後、私の体が光に包まれ、そしてすぐにそれが晴れる。その後には、黒い装甲を肩に浮かべた黒いＩＳがあった。
攻撃用武装は刀剣型近距離武装の《夜鷹（よたか）》、パイルバンカー型近距離武装の《啄木鳥（きつつき）》、そしてサブマシンガン型の中、遠距離武装《夜雀（よじゃく）》。
防御用武装は両肩の黒い装甲《夜羽（よばね）》。展開すると全身を黒い装甲版が無数の羽となって、翼のように覆う防御装甲になる。
これはある程度自由が利いて、打撃武装にも転用できるとか。これはイヴから聞いたことだけど。
一応ビームコーティングされてるから特殊兵器（ＢＴ）をある程度反射でき、直接打撃にも強いらしい。結構やりすぎだと思うのは私だけでしょうか。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

前を見ると、一夏がそう急かされていた。まだうまくイメージが定着できていないのか、なかなかＩＳは起動しようとしない。というかそのそぶりすら見せない。あの白いガントレットが《白式》なんでしょうか。

「集中しろ」

千冬さんに言われ、一夏は突き出した右腕に装着されているガントレットを、左手で包むように掴む。そして数秒。
一秒掛からずに、それこそあっという間に一夏の全身は《白式》に包まれていた。

「よし、飛べ」
「よっと」

千冬さんの指示に従い、後背部にある二基の推進装置（スラスター）を噴かせて急加速。先に空に行ったセシリアさんを追うようにして飛んでいく。
頬を撫でる春先の温かな風が、とても心地良かった。

「香織さん、それは……？」
「専用機、『梟』です。ついさっき届いて少し飛ばしただけなんですけどね」
「そ、そうでしたの……。どこかの企業の所属なのですか？」
「え、ええ、まあ。一夏のような特例とは違うと思いますよ」

嘘です、がっつり特例です。それも飛び切りの。だけど言えない。言ったら私の命がマッハでヤバイ。
って、そう言えばセシリアさんの私の呼び方が変わってる？

「あの、セシリアさん、香織さんって……？」
「あ、お嫌でしたか？　お友達になれたら、と思ったのですけど……」
「いえ、いいですよ。これからもよろしくお願いしますね、セシリアさん」
「ええ、よろしくお願いしますわ」

空中で器用に姿勢を制御して、お互いにお辞儀。なんだか新鮮っていうか、むしろシュール……。

「あ、そう言えば、立候補のときに失礼なことを言っていたら申し訳ありません。謝ります」

「い、いえ、わたくしも随分失礼なことを言ってしまいましたし、お相子ですわ。それにしても、一夏さんはなにを……？」

朗らかに笑ったセシリアさんの視線を追って、私も下を見る。そこでは、一夏がやっとＩＳを展開したところだった。

いや、もうちょっと早く展開できるようになろうよ。せっかくの専用機なんだし。

『手にして少ししか経っていないのですから、仕方ありません。むしろこうして早くも使いこなせているマスターの方が稀有ではないでしょうか』

『えっ、そうなの？』

『はい。といっても、男性のＩＳ操縦者のサンプルはマスターと『織斑　一夏』の二名しかありませんので、確定したことは言えませんが』

まあ、確かにそうだよね。ただでさえＩＳはブラックボックスが多いから、かなり疑問だ。

「あ、上がってきた」

「では香織さん、先に行きますわね」

「はーい」

気の抜けた返事を気に留めることもなく、セシリアさんは上へと上がっていく。とりあえず待ってみようか。

「は、はや……」

「セシリアさんと戦ったときのあの機動を思い出してください。もっと動けるはずですよ！」

「って、んなこと言われても……！」

空を舞うように一夏の周りを遊覧飛行しながら、私はもっと高く飛んでいく。いつの間にか、セシリアと同じ高さにまで到達していた。

それにしても風が気持ちいい。このままずっと飛んでいたいけど、さすがにそうも行かないか。こりゃ、いくら自分が風を感じられないと言っても、パイロットが空に夢中になるのは良く分かるなぁ。

「結構、飛ぶのって難しいのな。自分の前方に角錐を展開させるイメージって、そもそもそんなことすることなんて、普通は無いっての」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的でしてよ」

「そう言われてもなぁ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ」

それは多分、参考書を読んでおけば理解できる範囲の話だと思うんだけどね。私も大まかな理屈はおぼえてるけど説明はしない。と言うかめんどくさいし。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？　反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

断固として断ると言った感じでセシリアさんの申し出を断る一夏。確かに難しいけど、今のうちに覚えた方が楽だと思うんだけどな。

「そう、残念ですわ。ふふっ」

えらく楽しそうに笑うセシリアさん。さすがと言うべきか、笑み

には嫌味にならない上品さが滲み出ていた。あの戦いの後からずっと印象が良くなった気がするんだよなぁ……。

それに、箒さんも「あの女は要注意だ」なんてぼやいてるときがあるし。ああなっているときの箒さんには不用意に近づいたらダメです。

「って、いつまで飛んでいたらいいんでしょうか。私はいつまででもいいんですけど」

「そろそろ指示が来ると思いますけど……」

「一夏っ！　いつまでそんなところにいる！　早く降りてこい！」

指示じゃなくて怒号が飛んできました。それも箒さんの。思わず首をすくめてしまうほどの音量だった。くっ、もうちょっと開放通信（オープンチャネル）の音量下げとくべきだった。

『下げておきます』

『うん、お願いイヴ』

イヴはイイ子だなぁー……。なんて感想を抱きつつ、とりあえず一時停止。山田先生がわたわたしてるぞ、箒さん。

「織斑、オルコット、一之瀬、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

「了解」

「了解です。では一夏さん、お先に」

言うが早いか、セシリアさんはすぐに方向転換を済ませると地上へと飛んでいく。瞬く間に小さくなっていくセシリアさんが地表で完全に停止したのを見ると、こちらも下りる準備へと入る。

「それじゃあ一夏、下で待っています」

そう言い残し、私も下へ飛ぶ。スピードはみるみる上がっていき、まるで墜ちていっている様な気分だった。

しかしまあ、そんな感覚にいつまでも浸ってはいられないわけで、地表スレスレのところで急減速を掛けると、慣性を無理やり抑え込んで完全停止してみせる。

んぉおおっ!?　結構掛かる……！

「……よし。うまく行った」

『誤動作無し。全て規定範囲内です』

「ありがと、イヴ――」

直後、私の背後で凄まじい轟音と共に土煙が巻き起こった。

え、なに？　驚いて後ろに注目すると、そこには巨大なクレーターが出来上がっていた。え、隕石でも落ちてきたの？

「馬鹿者。誰が地上に激突しろといった。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すいません」

千冬さんの声で、ようやく事態を把握する。

要するに、一夏が空から急下降して完全停止も急減速も出来ずに地面と接吻したらしい。その証拠に、煙が晴れたところからは白い機体が姿勢制御しながら空中に浮かんできていた。

それから少しの間ゴタゴタがあったけど（主に箒さんとセシリアさんの一夏争奪で）、結局千冬さんの一喝でそれも収まった。さすが鬼教か

「一之瀬」

「すいませんでしたッ！」

バシンッ！　と私の頭に叩きつけられた出席簿が凄まじい音を立てる。叩きつけられた瞬間には既に土下座していました。いや、威圧感が半端じゃない。

っていうか絶対防御が発動しなかった？

『絶対防御の発動よりも早く、生身に攻撃が到達しました』

『……それ、人間として有り得る？』

『普通ならば有り得ません』

うわぁい。さすがブリュンヒルデ、そんな限界お構いなしですか。ゾンビじゃあるまいし。

「まあいい。織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。では始めろ」

そう言われて横を向いた一夏が、再度右腕を突き出し、左手でがっしりと握り込む。

そうして数秒経つと、右手の平にはしっかりと《雪片弐型》が握られていた。便利だけど、実戦だと命取りだよね……。私ももっと精進しないと。

「遅い。〇・五秒で出せるようになれ」

そう言われ、一夏はうぐぅ、とでも言いたげな表情を見せる。ま

あ、一夏も頑張っているみたいだから、ちょっと不服なんだろう。
まあ、ＩＳも根源的には兵器なわけで、安全に扱うためには優しくしていられないんだろうな。
まあ、私は兵器にしたくないんだけど。

『カオリはよくやっています。少なくとも、私を扱う技術はマイスターよりも上でしょう』
『そ、そうなの？』
『マイスターは母ですが、カオリは主です。その違いです』
『は、はぁ……』

一応褒めてくれているらしい。まだまだこの子の考えていることはわからないことが一杯だ。
そんなことを考えていたら、既に話はセシリアさんの方に移動していた。

「セシリア、武装を展開しろ」
「はい」

そう言うと、腕を片と水平になるように上げたあと、ピシッと真横へ。目も眩むような閃光が一瞬だけ放たれ、そこには《スターライトｍｋ？》が現れていた。おお、早業。

「さすがだな、代表候補生。――ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」
「で、ですがこれはわたくしのイメージを纏める為に必要な――」
「直せ。いいな」
「――、……はい」

千冬さんに噛み付かんとも見えたセシリアさんだったが、口を開こうとした途端に千冬さんに睨まれて止まった。うん、その判断は正しいと思う。

けれど、千冬さんの言葉は正しい。特に、殺し殺されるの意味を知っている千冬さんの言葉は、重い。その重さが、私にとっては頼もしく、ありがたかった。

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はっ、はいっ」

なにやら慌てた様子で《スターライトｍｋ？》を収納（クローズ）し、言われたとおりに近接用武装を展開（オープン）する。

しかし、《スターライトｍｋ？》のときとは対照的に光はただ零れるように収束せず、像すら見えてこない。ああ、やっぱり苦手なのか。

この量子変換は、操縦者自身のイメージによる。射撃特化のブルーティアーズに慣れているセシリアは近接用武装を滅多に使わないせいで、出すのに手間取っているんだろう。

そして、それは一夏にも当て嵌まる。日常で馬鹿でかい刀を手にすることなんてまずない。だから、量子変換で武器を取り出すのに手間取ってしまうんだ。

……でも、私訓練機を使ったとき、結構簡単に収納も展開もこなせたんだよなぁ。その辺どうなんだろう。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。――ああ、もうっ！　《インターセプター》！」

とうとう武器の名を叫び、ようやく近接用のブレードが形となる。

セシリアさんは屈辱だと言わんばかりの顔だったけど、個人的に

は武器の名前を言って呼び出すのはカッコいいんだよなぁ……。
まあ、実戦でそんなことやってたら死んじゃうけど。

『そもそも、カオリの腕ならイメージだけで量子の固着化は可能です』
『あ、ありがとうイヴ』
『……？　どういたしまして』

なぜ礼を言われたのか分からないと言った様子だったけど、イヴはそう言った。
それが思いのほか可愛くて、思わず頬が緩んだのが誰にも見られていなくて良かったと思う。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」
「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！　ですから、問題ありませんわ！」
「ほう。織斑、一之瀬との対戦で、二対一とは言え初心者に簡単に懐を許していたように見えたが？」
「あ、あれは、その……」
「ま、まあまあ織斑先生！　セシリアさんも人間ですし、まだ若いんですから、それはこれから直していけばいいじゃないですか！　ね、セシリアさん？」

あんまりにセシリアさんが縮こまってしまっていたので、思わずそう声をあげてしまった。
意外そうにこちらを見たセシリアさんと千冬さんに見つめられ、こっちこそ息が詰まりそうになる。いや、セシリアさんはまだしも、千冬さんまでそのリアクションって……。

「……まあいいだろう。一之瀬の言うことも一理ある。が、近接武器の展開ぐらい即座に出来るようにしておけ。それと、射撃武器を展開するときの癖も直しておくこと。いいな？」
「は、はい！」
「一之瀬、次はお前だ。近接用武装を展開してみろ」
「はい」

とうとう私の番が回ってくる。いい練習だと思ってやらせてもらおう。
頭の中で即座にイラストを引っ張り出してくる。試運転をしていたときに何度か呼び出しているから頭の中に図案は入っている。
思い描くのは、一振りの刀。自分の背丈と同じほどの長さ、薄く鋭く、そして堅牢にしてすべてが黒に染められたもの。鍔は片翼を模し、柄は日本刀と同じ物。
考えた直後、左手の中にはそれが納まっていた。
近距離武装、《夜鷹》。梟に搭載された武器の一つだ。

「〇・八秒、まあまあだな。次は――」

千冬さんがそこまで言った所でチャイムが鳴り響く。どうやら、今日の授業はこれで終わりらしい。

「時間だな、今日はここまでだ。織斑、グラウンドは片付けておけよ」

やれやれと言った様子で言う千冬さん。あ、あのクレーターを一人でやるんですか……。
ちょっと可哀想だとは思うけど、ごめん。私は少しでも長くイヴと会話してみたいんだ。
後で埋め合わせしようかと考えつつ、今日の授業は終わりを告げ

た。とりあえず、変な挙動しなくてよかったぁ……。

第6話　『あの子』（後書き）

大事なお知らせ。これでストックが尽きました。
以降は月村の魔女＞ネギま＞ＩＳの優先順位で更新していく予定です。
ですが、一応不定期更新ですのでのんびりとお待ちいただければ幸いです。
それでは。

第7話　幼馴染と言う存在

「というわけでっ！　織斑君クラス代表決定おめでとう！」
「おめでと～！」

現在時刻、夕食後の自由時間。ここからお休みまでは大分時間があるため、大体皆ここで好き勝手に行動しては怒られるものが出てくる。尤も、最近はそんなバカもいなくなってきて、ある意味つまらないと以前千冬さんが言っていたけど。

「……」

この『織斑一夏クラス代表就任パーティー』の主賓である一夏は、文字通り固まっていた。
いや、時々溜め息をつくから完全に沈黙してはいないようだけど。こうなった原因の一人としては、ちょっと心苦しい気がしないでもないかな。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」
「ほんとほんと」
「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」
「ほんとほんと」

相槌の人、さっきから同じ答えしか返してない気がするんですが。

『カオリ、大丈夫ですか？』
『え、なにが？』
『心拍数の増大が確認されます。若干緊張状態にあるかと』

そう言ったイヴの言葉には、ＡＩのはずなのに奇妙な温かみがあった。

確かに、今私は結構緊張していたりする。だって、これだけ多くの同年代の女性との触れ合いは早々ないから。

教室では一応距離感が保てていたからいいけど、今日はなんだか皆が近い。女の子特有のフワッとしたいい匂いが鼻腔を突いて、くらくらしそうだ。

『うん、大丈夫。多分ね。体調悪かったら戻って休むから、心配しないで』

『そうですか。わかりました』

そう言ってまた黙り込むイヴ。

うん、でも出会って時間は経ってないけど、イヴと私の相性は悪くないと思う。機体も割りと思うように動くし、飛ぶ時だって、イヴの補助があってだけど、ちゃんと飛べる。

だけど、いつかは。私の力だけで、イヴを空に行かせてあげたい。そう願っている。

チビチビとジュースとお菓子（夜食してもあんまり太らない体質だけど、昔からお姉ちゃんに肌が荒れるからやめなさいと言われてきたから、あんまり食べない）をつまみつつ時間が流れるのを待っていると。

「それじゃあ、香織ちゃんも何かコメントくれない？」

「はいっ！？」

くっ、まさか私にまでコメントが振られるとは思わなんだ。恐るべし、なんとか先輩。

「って、どんなコメントすれば……」

「とりあえず、なんでクラス代表辞退したのかだけ教えてくれないかな？　セシリアちゃんが辞退したときには、まだチャンスはあったでしょ？」
「あ、ああ、そのときはあまり体調が良くありませんでしたし、話題性を考えると専用機持ちで且つ男性である一夏に譲った方が、何かとうまく行くかと思いまして」
「おお、ってことはクラスのことを考えての行動だったんだね！　いい子じゃない！」

いえ、そういうつもりは全くございませんのですが。そんな私の言葉は多分届いてないだろう。
で、その後はなんか私と一夏、セシリアの三人で手を重ね合わせた状態でスリーショットを撮られた。正確にはシャッター押すまでの数瞬でかなりの生徒が乱入したけど。

「で、のほほんさん、どうして私に抱きついてるんですか？」
「かおりんが一番好きだからだよ？」
「あ、はぁ……」

なんだかとっても素直な言葉に、ちょっとたじっとしてしまった。いや、好きって言葉がライクの方だって分かってても、ぐらって来ますよ。のほほんさん、美人さんだもの。

「そろそろ夜も遅くなってきましたし、私はこの辺で引っ込みますね」
「えー？　もう少しいなよー」
「夜更かしは美肌の大敵ですよ。それと、主賓が随分お疲れのようですから」

九時半を回ったところで、そろそろ助け舟を出そうかとそう言葉

を掛けてみる。
　一夏は目に見えてぐったりしているが、それに気づいているのは誰もいない。皆、夜のテンションで通してるから疲れ知らずなんだろう。
　だがしかし、そうやって油断しているとお肌は荒れ放題になるのです。なので私は引っ込みます。いつかあった時に「あぁぁぁぁぁぁ！　か、香織のお肌がああぁぁぁ！」なんてことにならないように。
　あの時はマジで困った。夜更かしせず、お肌をきちんと守ると言うことで開放してもらえたけど、そうじゃなかったら一日中引っ付かれたかもしれない。まあ、弟可愛さみたいなもんなんだろうけどさ。もうアレはごめんだ。
　で、私の言葉に反応した十数名は、乾いた笑いを発しながら自室へと引っ込んでいった。お肌は大切だもんげ。

「一夏、大丈夫ですか？」
「うお、おう。なんとかな」
「あまり無理はしないでくださいね、明日に響きますよ」
「おう、ありがとな」
「いえいえ。箒さん、頑張って」
「へ！？　あ、ああ！」
「セシリアさんも、ですかね？」
「え？」

　最後に我が友人達へと別々にエールを送り、ついでにセシリアさんの頭をぽんぽんとあやすように撫でてみた。あ、髪の毛サラサラだ。特に行動に理由はないけど、なんだか恋する乙女って可愛いなぁと思っただけで。
　とりあえず、その場で自分が何をしたのかに気づき、思わず顔を真っ赤にする。

「あ、ご、ごめんなさい！　つい！」
「え？　あ、いえ、大丈夫ですわよ？」
「すいません、ほんとにすいません！　それじゃあ、今日はこの辺で！」

何度か平謝りして、そそくさと自室へ戻る私。うわぁ、なに自爆してんだ。っていうかなにやってんだ。
セシリアさんはなんとも思ってなかったみたいだけど、女性の頭を軽々しく撫でるなんて……！
バタン、と音高く自室のドアを閉めると、ベッドに腰掛けて一息つく。のほほんさんはまだパーティーで弾けるらしい。若いって凄いなぁ。いや、私もそうなんだけどさ。

「……お風呂入ろ」

着替えを持って脱衣所へ入ると、梟だけを肌身につけてシャワー室へ入る。
梟は防水加工も完璧だから、この程度では壊れるなんて事はない。というか大体のＩＳはそうだろうけど。
宇宙空間での使用が念頭において作られているはずのＩＳが水に浸かった程度で壊れるようじゃ、とても使えた物じゃない。

『疲れましたか、カオリ？』
「うん、少しね」

シャワーを浴びながら、『僕』はそう答える。
ふぅ……、さすが女子のパワー、ちょっとやそっとじゃ終わりそうに無いなぁ。
とりあえずシャワーを手早く浴びて寝巻きに着替え、梟を首にか

けて部屋に戻る。このシャワー生活も慣れたものだ。
ん、でもちょっとはお風呂に入ったりとかもしたかったり。

「まあ、贅沢は言えないよねー」

ねー。……うわ、寂しい。
のほほんさんはまだパーティーだし……、寝ようかな。

「よし、寝よう。寝よ寝よ」

……べ、別に寂しいわけじゃないんだからね！
……ぐすん。

朝。
もはや恒例となった五時半に起床し、歯磨きしてシャワーを浴びて、女装して準備完了した『私』は、のほほんさんと一緒に教室へ。
……えー、と、ですね。何ですかこの騒々しさ。なんでこんなに皆テンション高いの？

「あの、箒さん？　これ何があったんですか？」
「ん、香織か。いや、クラス対抗戦のために、一夏に発破を掛けていたところだ」
「あんまりプレッシャーを掛けてもしょうがありませんよ。過ぎた

るは猶及ばざるが如し、です」
『やりすぎることは、足らないことと同じように良くないということですね』

さらりとフォローするイヴ、グッジョブ。
こっちは防御が紙だけどあんまり狙われず、一夏はかなりガードが固い分ガンガン攻撃される。どちらにしても面倒なことこの上ない。

「そ、そう言えば香織！　今日は転入生が来るらしいぞ！？」
「露骨な方向転換ありがとう、一夏。けど、この時期に転入？　時期遅れの入学じゃなくて？」
「ああ。しかも、中国の代表候補生らしいぜ」

それはそれは……、一夏危うし？
クラス代表なんて、ちょっと小細工すればいくらでも変えられるし、代表候補生だったら尚更だ。
もし一夏とその代表が当たれば、多分今のままなら一夏は負ける。

「まーでも、今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ！」

クラスの女子が、一夏を励ますようにそう言う。
と、その直後。

「――その情報、古いよ」

クラスの入り口から聞こえてくる声に、思わず顔をそちらへ向ける。
小さな体躯、ツインテールの髪。とても昔に、出会ったことの会

った子が、そこにいた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？　お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「ふー、ちゃん？」

ポツリと、私の呟いた言葉で凰鈴音と名乗った少女が目を見開く。ギョロ、とこちらに視線を向けると、ポカンと口を開けてふるふると震え始めた。

「か、かお、り……？」

「ふーちゃん、ふーちゃんなの！？　ど、どうしてふーちゃんがここに！？」

「ちょ、それはこっちの台詞よ！？　あんた、おと――」

続く言葉は、しかし続かなかった。痛烈な打撃音によって遮られたから。

少女がずいっと後ろを向き、そしてそれ以上の勢いで仰け反る。

「入り口でギャーギャー騒ぐな。もうＳＨＲの時間だ、教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

若干イイ笑顔を浮かべながら言った千冬さんに、猛烈にビビリながら言う凰鈴音、もといふーちゃん。

なんだかゴタゴタがあったけれど、ふーちゃんはあっという間に

二組に戻り、私はその日の午前中を悶々とした様子で過ごすことになった。

「……ふー、ちゃん」

ふーちゃん、鳳鈴音は、私の幼馴染だ。

なんでふーちゃんかって言うと、小さいときに鳳の字を風と間違えてふうちゃんって呼んだからなんだけど。

小学校のときにたまたま一緒に遊んでいて、それが縁で仲良くなった。

中二の時にふーちゃんが中国に引っ越してしまってからは、疎遠になっていたけど……。まさかふーちゃんが転校生だなんて。

……いや、待て。今目下の問題はそこじゃない。

『鳳鈴音が、カオリのことを男だと知っている、ということですね』

『うん……。どうしよう……』

『抹殺しますか？』

『その物騒な考えをしまって。とりあえず、お昼休みに事情を説明して、黙っててもらうしかないかな……。休み時間だと短すぎるから』

まさか、こんなところから私が崩される危険性が出てくるなんて……。

……でも、ふーちゃんに会えたのは、嬉しかったかな。

第7話　幼馴染と言う存在（後書き）

はい、鈴音登場です。
早く代表戦まで行きたい……。しかし、急いてはことを仕損じるのだ。
それでは。

第8話　一段落？

「で」
「……はぅ」
「なんであんたがここにいるの？　香織」
「……それは、その」
「女子の制服着て、一人称を『私』に変えて」
「えぅ……」

時間は流れてお昼休み。
食堂の端っこに陣取った『私』とふーちゃんは、とっても重たい雰囲気を周囲に撒き散らしていた。周りの人たち、すいません。頑張って食事してね。
で、物凄く怒っているようなふーちゃん。何か赤い闘気のようなものが立ち昇っているのは気のせいでしょうか。

「……ねえ、香織。怒ってるわけじゃないの、本当に何があったの？」
「えっと……、初めからだと随分前になるんだけど……」
「いいわよ、全部話して。ご飯食べながらでいいから」

ゆっくりと、まるで赤ん坊に聞かせるように柔らかい声で言ってきたふーちゃんに何とかそう答えると、ふーちゃんはこくりと頷いて、喋るように促してきた。
怒って、ないのかなぁ……。

「中学卒業前なんだけど、家の前に篠ノ之束ちゃんが倒れてて、ご飯を作ってあげたお返しにって、ＩＳに触らせてもらったら動いちゃって……。それで、自分の身を守れるくらい強くなろうと思って、

ここに」
「ががっと端折った中に大分突っ込みたいところがあったけど、この際それはスルーするわ。とりあえず――」
スッと立ってこちらへやってきたふーちゃんを見て、思わず腰が引けてしまう。
そんな私に構うことなく、ふーちゃんは私の目の前までやってくると、私の頭へと自然に手を伸ばし、くしゃっと撫で回した。
「――ただいま、香織」
「ぁ……、うん、お帰り。ふーちゃん」
一年ぶりの再会は、意外と涙腺を緩めてくれやがるらしいことだけは、判明した。
「落ち着いた？」
「うん……。ごめんなさい、泣いちゃって」
「くっ、違和感あるわねー……。もっと男らしくなっているかと思ってたけど」
「ちょ、ふーちゃん!?　そういうことは……！」
「あ、ごめんごめん。オフレコだったわよね」
しっかりと再会したことを確認し、涙を零しながらも現状を伝えた私に、ふーちゃんは前と全く変わらない笑みを向けてくれる。
まあ、イヴのことまでは話せないんだけど……。それでも、こうして私を『僕』として扱ってくれるのは凄く嬉しいのだ。
「にしても、そこまでしてＩＳ学園にねぇ……。声が聞こえたってのも、なんだかあんたらしいわよね」
「ほ、ほんとに聞こえたの！」

「ふふっ、はいはい。あんたならほんとにそうなのかもね。それにしても、一年でまた一段と、綺麗になって」

……へへん、私だって綺麗になりたくてなったわけじゃないよ。もう諦めてるから美容も大切にしてるけどさぁ……。

「それで、アンタはいま何処に住んでるの？　まさか……、寮？」
「うん。のほほんさん、って分からないか。うちのクラスの袖ぶらぶらさせてる子と相部屋」
「……へー、ふーん。そう。決めたわ」
「え？」
「その子と、部屋変わってもらう」
「え、えぇっ！？」

うわぁ、凄いこと言い出したよふーちゃんが！

「その方がアンタも安心でしょ？」
「そ、それはそうだけど……。でも、他の人に迷惑だから……」
「……はぁ。わかったわ、アンタがそういうならやめとく。けど、時々遊びに来なさいよ」
「う、うん。それはもちろん」

あれ、なんだか簡単に引き下がったなぁ……。いや、食い下がられたらそれはそれで厳しいんだけど。

「それじゃあ、私は一夏の方に顔出すから、この辺で。ボロ出すんじゃないわよ？」
「ふーちゃんの方こそ、私のこと言わないでね」
「はいはい。それじゃ」
「うん、バイバイ」

軽く手を振り、駆けていくふーちゃんを見送る。……なんだか、小動物チックで可愛いな、なんて思ったのは内緒だ。言ったら多分ぶん殴られるだろう。

その日の夜、私は一人ベッドに沈んでいた。

今日は、色々と起こり過ぎている。幼馴染が二人揃ってＩＳ学園に入学していることが、そもそもおかしいのだが。

一人目の幼馴染はまあわかっていたからいい。そもそも、その幼馴染に会うためにわざわざこの日本にまで戻ってきたのだから。

しかし、休日にでも会えたらいいな、程度に思っていた二人目の幼馴染まで学園にいることには驚いた。

確かに昔から少女然としていたし、自分よりも数段可愛かったことも理解できる。だが、男だ。男なのだ。ということはつまり、二人目のＩＳが使える男ということになる。

それを公表していないのは、一重に彼に後ろ盾がないせいだ。

いかに世界を自分に合わせた天才とブリュンヒルデがバックについても、所詮は個人。国一つが腰を上げればとても平穏な生活など送れないだろう。

「……守りたいな」

ポツリと、願望が口から零れる。

香織の周りは敵だらけだ。だからこそ、この身で何かが出来るかもしれない。

「にしても、なーんであんなに可愛くなってんのよ！」

相変わらずの可愛らしさに、私はさすがに頭を抱えたくなる。なぜ女子の自分より男子のあいつの方が可愛いのか、ちょっと神様とやらをぶん殴ってみたくなってしまう。

しかも、勘の鋭い年頃の少女達を悉く欺いて既に一月以上が経過しているはずだ。……まさか、実は女の子でした、なんて展開はないわよね？

そう思いをめぐらせていると、突然ドアがノックされた。食事に行っていた同室の人がもう帰ってきたのだろうか。

「えっと、ふーちゃん。いますか？」

「香織？　まって、今開けるわ」

直ぐにベッドから降りると、扉の鍵を開けて中へ招き入れる。

香織はTシャツ姿のラフな格好だったが、一応ブラジャーはつけているらしい。だって胸があるもの。……詰め物、よね？

それと、香織のほかにもう一人。あ、この人がのほほんさんね。

「えへへ、早速来てしまいました」

「お邪魔しまーす」

「……あーもう、ほんとに負けた気がする」

にこにこと笑って頬をポリポリと掻く香織を見て、思わずそうぼやく。ほんと、反則級に可愛いんだけどこの子。

「初めまして、凰鈴音よ。あなたがのほほんさん？」

「うん、布仏本音です。よろしくねぇ、鈴ちゃん」
「え、ええ、よろしく」

この黄色い電気ネズミチックな服を着ている人がのほほんさん…。なんというか、香織も心休まる人と相部屋になったのね。
ところで、その耳や尻尾が言葉に合わせてひょこひょこ動いているのはなぜなのかしら。本物じゃないわよね？

「何か飲む？　ポ○リと爽健○茶があるけど」
「じゃあ、爽健○茶で」
「のほほんさんは？」
「私も同じでいいよぉ」
「じゃ、ちょっと待ってて」

冷蔵庫から爽健○茶のボトルを取り出すと、三人分のプラスチックのコップに注いでいく。
ベッドに零さないように机の上に自分のコップを置くと、香織とのほほんさんにコップを渡した。何故か知らないけど、のほほんさんはさん付けしなきゃいけない気がするのよね。尊敬とかじゃないんだけど。

「なんだか、他の人の部屋って新鮮だぁー」
「なーんか力が抜けるわね……」
「まあ、のほほんさんだから……」

その一言で片付いてしまうのは、どうなんだろうか。

「そう言えばふーちゃん、対抗戦に出るんだよね？」
「ええ、そうよ。一夏が代表だし、やる気も出るってもんよ」
「アハハ……。あんまりやりすぎないでね？」

苦笑いしながら言わないでくれると嬉しいんだけどなぁ。
ともかく、こうして私の久しぶりの幼馴染との談笑は、友人を一人増やして続いたのだった。

翌日の放課後、『私』は自己練習のためにアリーナへと足を運んでいた。

『調整完了です、カオリ』
「ん、ありがと。管制システム、クレー射出！」

言った直後、上空へ右から左へと射出される黒色のクレーに狙いを定めて、《夜雀》の引き金を引く。本来なら弾幕を晴れるこれも。今は単発射撃に変更しているから大きなハンドガンと大差ない。
設定した数は五〇個。そのうちの四二個を撃ち落した私は、軽く息を吐き出した。
やっぱり、射撃武器の精度はまだまだ甘い。四九、四八くらいまでは詰めたかったんだけど、やはり個人の技術では今はこれが限界か。
「管制システム、ターゲットを」
私の言葉に反応し、かなり遠い距離に人型のターゲットが三つ出

現する。
　それをズーム機能を使わずに射撃し、撃った場所をズームして確認する。……中心から数ミリから一センチ強ずれてる。高機動戦じゃまだまだ使い物にならないかな。

「精が出ますわね、香織さん」
「あ、セシリアさん。どうしてここに？」
「いえ、帰り際に丁度アリーナで訓練しているのを見かけまして。はい、スポーツドリンク」
「あ、ありがとうございます」

　梟をネックレスに戻すと、近くまで歩いてきたセシリアさんからペットボトルを受け取って一口煽る。汗をかいた体に、冷えたスポーツドリンクが染み渡るようだった。

「それにしても、中々の腕ですわね。クレー射撃の方はズームは？」
「いえ、ズームせずにです。逆に反応が遅れますから。それに、ほぼ五分の一を撃ち漏らしてますから、あまりいい成果とは……」
「それでもですわ」
「あ、そう言えば、一夏はどうしたんですか？」
「一夏さんなら、今頃箒さんにしごかれていますわ。今日は箒さんの日ですから」
「へぇー」

　つまり、代わる代わる一夏に稽古をつけていると。一夏も大変だなぁ。頑張れ男の子。私は傍観しておく。

「あ、そうですわ。香織さん、回避訓練をなさってみる気はございませんこと？」
「回避訓練、ですか？」

「ええ。私のブルー・ティアーズのエネルギー弾を、一〇分間ひたすら避け続けること。一発でも被弾すれば即やり直しと言うのはどうでしょう？」

……つまり、全方位からの無差別攻撃を完全に回避する特訓か。

有用かどうかは別として、機動性は確実に上がるかも。

「分かりました。それじゃあ、それが終わったら、次はセシリアさんの接近戦用武装の展開練習ですね！」

「うっ！？　ま、まあ確かにそれも、必要と言えば必要ですわね……」

接近されたときに咄嗟にガードできれば、それだけでも有用ですし……、なんてボヤキながら、一瞬で青い装甲に身を包むセシリアさん。

「それじゃあ、行きますわよ」

「はい！」

次の瞬間、私の周囲を囲む四機のビットから青い光が吐き出された。

第8話　一段落？（後書き）

次回辺りで対抗戦かも。
セシリアとの絡みはなんとなくです。セシリアさんちょろ可愛い。

第9話　戦う刻

クラス対抗戦。クラス内で決められたクラス代表同士が戦い、その腕を競う。

その戦いが、今始まろうとしていた。

第二アリーナにて始まろうとしているその戦いは、一年二組と一年一組の代表候補生、つまりふーちゃんと一夏の戦いである。

……どっちを応援すればいいかわからないので、とりあえず両方応援することにした。

ちなみに、私はアリーナの観客席にいる。丁度入り口付近だ。

『イヴ、どっちが勝つと思う？』

『スペックだけを見れば白式でしょう。ただ、凰鈴音と甲龍（シェンロン）の相性次第ではわかりません』

『そっか……』

イヴとそんなことを話しつつ、アリーナの中を見つめる。

その直後、試合開始の合図と共に甲龍が飛び出した。

刃を振るい白式の《雪片弐型》を跳ね上げるが、即座に三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）で甲龍を正面に捉えた白式を見据えて姿勢を正す。

「まだぎこちないけど、巧いね」

呟きは周囲の熱気によって掻き消される。

一拍を置いて再度攻勢に出た甲龍の攻撃は、まさに猛攻。自由自在に両の手で繰る刃が四方八方から繰り出されるのを、白式は悉く受け流す。この辺りは箒さんとの訓練の賜物なんだろうか。

幾度となく剣戟が振るわれこのままでは千日手かと思われた瞬間、甲龍の肩付近に浮遊する非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）の装甲がスライドし、中心

に存在する球体が発光する。その直後、白式は何かに殴り飛ばされたように吹き飛ばされた。

「何が……？」

『衝撃砲でしょう。空間自体に圧力をかけて砲身を生成し、余剰で生じる衝撃自体を砲弾として撃ちだす武装です』

『なるほど……。つまり、見えない大砲ってことだね』

『はい。しかも、角度の制限がほぼありません。真後ろまで視野があったとしても、人間の腕は二本、真後ろに攻撃は届きません。そう言った点でかなり強力な武装です』

バカスカと撃ちだされる不可視の弾丸を器用にも避け続ける白式を眺めつつ、イヴの解説を聞く。

しかし、一夏もよく避けるなぁ……。辛うじて空間の歪みが見えるけど、これはなんとも。

そんなことを考えていると、両者が距離を離す。それとともに二人の間に流れる空気が変わった。白式の姿勢が加速体勢へと変わったのと、甲龍がその手に携えた刃を構え直したのは同時。

一瞬の静寂の後、一気に加速した白式の刃が甲龍へと届きそうになり――そして、けたたましい轟音と共に凄まじい衝撃がアリーナ全体を襲った。

「なにっ！？」

『探知を掛けます』

すぐさまイヴが梟を通してネットワークにアクセスし、何が起こっているのかを調べ始める。

数秒後、イヴは直ぐにこちらへと戻ってきた。

『ネットワークへのアクセスがブロックされています。分かった範

囲では、遮断シールドがレベル４に設定され、全ての扉がロックされているようです』

『ここから出ることは！？』

『正規の方法では不可能です。ハッキングも危険性が高く、余り推奨できません。それと、アリーナの中心に熱源反応を確認しました。ＩＳのようですが、所属は不明』

所属不明のＩＳに、遮断された扉……。状況から見て、そのＩＳがハッキングしておかしくしたと見て間違いないか。

なんてことを考えているうちに、全身装甲（フル・スキン）のＩＳらしき影と二人の攻防が始まっていた。

全身装甲なんて、いや確かに精神的にはそっちの方が楽だろうし、それなら顔も見えないだろうけど……。一体何のつもりで……？

思っていても、何も行動は出来ない。私には遮断シールドを解除する術はないし、扉も開かない。ハッキングはさすがにまずい。……結局、人頼みか。

最悪だ。

介入してきた謎の全身装甲（フル・スキン）と二人の戦闘が始まってから既に一〇分。

私は、貧乏ゆすりしつつも三人をじっと見続けていた。

「……イヴ」

『なんでしょう』
「このシールド、破る武装は」
『あります。《啄木鳥（きつつき）》を使用すれば、破壊できる可能性は十二分に』

その言葉を聞き、私は無言でＩＳを起動させる。これ以上、職員の到着を待っていられない。
私が行っても何も出来ないかもしれない。ただ殺されるだけかもしれない。だけど、これ以上二人が傷つくところなんて見ていられなかった。
確かに、一夏はだんだんと強くなってきているし、ふーちゃんも強い。それでも、私にだって何か出来ることはあるはずだ。

「かおりん」
「っ、のほほんさん……」

いつの間にか、のほほんさんが隣に立っていた。他の生徒達は入り口周辺でドアが開くのを待っているのに。

「行くつもりなの？」
「……はい」
「待っていれば、先生達が収拾してくれる。それでも？」
「待っているだけで解決することは、本当に一握りです。私は、自分に嘘をつきたくない」
「死ぬかもしれないよ？」

普段と全く違う鋭く切りつけるような言葉に、私は思わず足を竦ませる。
顔は見えていないが、声に感情が見えない。それが、どこか空恐ろしく感じる。

「……死ぬつもりはないよ」
「……ん」

途端に、のほほんさんの雰囲気が戻る。詰まりそうだった息が途端に喉から流れ出した。

「じゃあ、行ってらっしゃい」
「え？」
「死ぬつもりはないんだよね。だったらいいよ」

普段と同じ雰囲気で、それでもはっきりとした口調で、のほほんさんが言う。

パシッ、と可愛らしいその小さな手で梟の装甲を軽く叩き、そっと微笑む。

「頑張って」
「――うん！」

大きく頷き、《啄木鳥》を展開。左手の下に巨大な杭打ち機（パイルバンカー）が形成される。杭から火薬の入っているシリンダーから、すべてが黒塗りだ。

既に周囲のざわめきは相当のものになっている。早くしないと。

シールドの前で《啄木鳥》を構え、思い切り前へ突き出すと同時に一撃目を打ち出す。ガギィンッ！　と言う音が鳴り響くも、シールドにはひびが入っただけだった。

「よし、いける！」

ガギンッ、ガギッ、バリンッ！

総計四本目の杭によってシールドが破られ、そこにＩＳ一機分程度は通れる穴が開く。

「行ってきます！」

「うん、行ってらっしゃい」

最後に一度だけのほほんさんの方を見て、それから勢いよく穴の開いたシールドを通り抜ける。

直ぐに《夜雀（よじゃく）》を呼び出（コール）した。マガジンに入る弾丸は五〇発、量子化しているマガジンは後五本。弾丸は日本の打鉄で使われているハンドガンのものと同じだから弾丸は確保できるけど、現状ではやや心もとない。

『イヴ、弾丸をホローポイントへ』

『了解』

マガジン内の弾丸がフルメタルジャケット弾からホローポイント弾へと変更される。攻撃性の高さを第一に選んで、三種類ある弾丸のうちこれを選んだ。ちなみに残りの一つは信号弾ね。束ちゃんの趣味だって。

《夜雀》をフルオートへと変更し、即座に全身装甲へと照準を合わせて引き金を引く。

『ふーちゃん、一夏！　無事！？』

『香織！？　あんた何してるの！？』

『説明はあと！　怪我してない？』

『だ、大丈夫よ。一夏もね！』

『おう！』

ひたすら銃撃を行い、こちらへの行動を封じていく。ダメージは

入らなくても、それなりの足止めにはなる！
ガンガンと音高く全身装甲へと弾丸が当たっていき、だんだんと粉塵で視界が遮られ始めていく。

『香織、あいつ多分無人だ！』
『えっ！？』
『つまり、容赦しなくていいってこと！』
『イヴ、対象の生体反応は！？』

最後だけはイヴにだけ言う。返答は――、Ｎｏ　ｌｉｆｅ。生体反応なし。

「香織っ！」

どちらが叫んだのか、気づくと私の真横から太いビームが私を狙っていた。
咄嗟に《夜羽（よばね）》を展開し、なんとかそのビームを防ぐ。けど、これじゃあそう何度も防いでいられないか……。

『凄い、シールドをぶち破るほどのビームを！？』
『二人とも、残りのシールドエネルギーは！？』
『私は一八〇よ。一夏、あんたは？』
『八三だぜ』
『……一夏、策は？』

念のために聞いておく。
まずいな、マガジンがもう三本持っていかれた。もう半分しか残っていない……。

『鈴の《龍砲（りゅうほう）》を思いっきり撃ってもらって、それをエネルギーに

して『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で一気に接近して、零落白夜で落とす！』
『……それじゃだめ。外れたときのリスクが大きすぎる。それに、万が一避けられたら落とされる』
『けど、これ以外に方法はっ！』
『ふーちゃん、撹乱用の龍砲、後何発撃てそう？』
『頑張っても一〇発が限度ね。どうするつもり？』
『……よし、私の銃弾が切れるのを合図に、ひたすらアイツの両腕を狙って龍砲を撃って。動きが止まっているときに私が近づいて斬りつけるから、一夏は後ろに回りこんでそこから零落白夜で斬って！』

つまり、ふーちゃんの援護射撃と共に私と一夏で挟撃する。少なくとも全員回避するだけのエネルギーは残せるし、そもそも様子を見られるほどのエネルギーは残されていない。
マガジンは残り二本。

『……わかった、それでいこう。ダメでもともとだ！』
『無理しちゃダメよ！　二人とも、ヤバイと思ったら引くこと！』
『『了解！』』

全員が全員の目を見て頷く。
直後、弾丸が切れる。

「一夏ぁっ！」

――キィー・・・ン、という音と共に、その声が飛び込んできたのとは同時だった。

「箒さん！？」
『敵ＩＳ、篠ノ之箒をロック確認！　射撃体勢に入ります！』

「男なら……男なら、そのぐらいの敵に勝てなくてなんとする！」

イヴの声が聞こえる。全身装甲は、腕を箒さんの方へと向けた。先ほどまで私が乱射していた弾丸の残した粉塵のせいで、隣の二人にはその姿が見えていない。

キュイン、と全身装甲の腕にエネルギーが溜められ、撃ち出される。だめだ、エネルギーのチャージが速過ぎる！？

「っんのぉっ！」

未完成な瞬時加速（イグニッション・ブースト）を発動させ、一瞬で敵ＩＳの射線上へ。未完成だったからなのか、全身に恐ろしい激痛が走るが、そんなことは無視だ。

《夜羽》を展開、自分を覆うようにして相手の射撃を防ぐ。激痛のせいで一瞬意識が飛ぶかと思ったが、割と何とかなった。が、射撃が止まない！？

『ふ、ぅちゃん！　やって！』

『くっ、それを止めろってのよッ！　一夏、行って！』

意識が朦朧とする中、必死で個人間秘匿通信（プライベートチャネル）でふーちゃんへと言葉を伝える。

直後、独特の発射音と共に射線が大きく揺らいだ。どうやら衝撃砲が命中したらしい。

「うぉおおおっ！」

粉塵の影で、黄金ともつかない単一技能（ワンオフ・アビリティー）の色に包まれた白式が突っ込んでいく。

金属同士がぶつかり合った音とはとても思えないほど流麗な音を

立て、全身装甲の右腕が斬り飛ばされる。私の方に両腕を向けていたからか、反撃はない。

その直後、四機の蒼いビットから放たれたビームが敵ＩＳを貫き、全身装甲が地面へと落ちていく。これは……！？

『お待たせしましたわ。大丈夫ですか、皆さん！』

『セシリア、さん……！』

『タイミングばっちりだぜ。さすがセシリアだ』

『あ、当たり前ですわ！　私はイギリス代表候補生なんですから！』

わぁ、可愛い照れ隠しだ。なんて思っていたら、視界の端に見えた。

残った左腕が、自分の右腕を斬り飛ばした一夏へと照準を合わせているのを。

「まずっ――！」

『カオリ！？　危険です！　カオリッ！』

軋みに軋む体に鞭打ち、危険だと声を上げるイヴすらも無視して、再度瞬時加速を使用する。

全身が、バラバラになりそうだ。頭が痛い。

「んぎっ、ぁあああぁあああ！！」

「香織、無茶しちゃ――！」

一瞬だけふーちゃんの声が聞こえた。

ガツンッ！　という例えようもない恐ろしいほどの衝撃と共に、防御のために再度広げた《夜羽》をビームの衝撃が襲う。

足が、腕が、千切れそうなほどに痛む。涙が出る。止まらない。

ぐらぐらと、目の前が揺らいでいく。けど。

一夏がもう一度動き、斬り崩すまで。この守備は破られてはいけない。

「香織ッ！？　テメェエエエエエッ！」

「その手を、除けろォ！」

その言葉と共に、刃を振り下ろす一夏とふーちゃん。

ふっ、とビームが途切れ、私は意識を闇へと沈――。

「……篠ノ之さん」

既に夕暮れが近くなった廊下で、布仏本音（のほとけ　ほんね）は声をあげた。

その目には憎悪とも取れる感情すら灯っており、身長差を感じさせないその威圧感に、篠ノ之箒（しののの　ほうき）は思わずたじろいだ。

「なぜ、あの場であのようなことをしたんですか」

「布仏……？　一体、何を」

「昼間の騒動のとき、なぜわざわざ自分の身を危険に晒したのですか。あの瞬間、あなたは何も出来なかった。なのにあんなことをしたせいで、香織は全身がズタズタに壊されたっ！」

「っ！？　そ、そんなに酷いのか……！？」

まるで親の敵を見るような目をして叫んだ本音がつめより、ぐい

っと箒の襟首を掴み上げる。
普段と全く違う口調の本音に、箒はどこか薄ら寒い恐怖すら感じていた。

「力がないことを悪いとは言わない。ないことを悔やむことも、悲しむことも、持っている者に対して嫉妬することだって悪いだなんて言えない。だけど、それで誰かの足を引っ張るな！」
「わ、私だって何かしたくて！」
「あなたは、この学園に何をしにきているの？　力を持つ者はそれ相応の責務を負わなければいけない、そのことを理解している？　あなたの身勝手な行動で、一人の人間が死に掛けたことを、本当に分かっているの？」
「ぁ、ぁ、私、は……！」
「……こないで。しばらく、私の前に姿を見せないで。こんなこと言いたくないけど、あなたを見ていると際限なく敵意が沸いてくるから」

奥歯をぎしりと軋ませて言い放った本音に、箒はとうとう何も言えなくなる。今まで、このおっとりしたクラスメイトが見せたことのない一面を見たことも、それによって突きつけられた事実も、彼女にとっては重すぎた。
箒は、ただ一夏のことを叱咤激励してやりたかっただけだった。それだけの思いで動いたから、この結果を生んだということには気づいていないが。
目を伏せ、箒はそっとその場を離れる。
一人になった本音は、ふと窓の外へと視線を向け、自嘲するように笑みを零した。

「……何やってるんだろうね、私」

それから少し後、ようやく面会が出来るようになった香織の元へやってきたのは、他でもない凰鈴音（ファンリンイン）だった。
しかし、今一番話をしたい少年は、昏々と眠り続けている。

「香織」

呟く。
だが、それに応えてくれた少年は、いまだ眠ったまま。その事実に、鈴音は拳を握り締めて涙を流す。
力があれば。自分が、一夏と香織を纏めて守れるほど強ければ、こんなことにはならなかった。
あの後、無事全身装甲を倒した一夏だったが、ダメージが蓄積していた香織は意識を失っていた。
バイタルにも影響が出るレベルでダメージを負っていたため、直ぐに精密検査を行われた結果、香織の体は無茶な瞬時加速の連続使用に、耐久度以上の《夜羽》の使用などによって相当なダメージを被っていたことが判明した。

「筋肉断裂に複雑骨折……。アンタ、これわかっててやったの……？」

患者の怪我の状態を記したデータを見て、鈴音は涙声になりながらもそう零す。
悔やんでも、悔やんでも悔やみきれない。もっと別の方法があったかもしれないのに。

『……凰鈴音。声が聞こえますか？』
「だ、だれ！？」

突然聞こえた声に、鈴音は咄嗟に周囲を見渡す。が、当然だれも

いなかった。
眠っている香織以外には。

『私はイヴ。梟に搭載されている人工知能、ＡＩです』
「梟って、香織のＩＳ！？　まさか、ほんとに！？」
『はい。梟に個人間秘匿通信（プライベートチャネル）で繋いでくだされば、こちらから特殊パスを繋ぎます』
「わ、わかったわ」

言外に「表沙汰には出来ないこと」を話すことを語ったイヴは、直ぐに回線を開いた鈴音へ向けて特殊回線を繋いた。

『改めまして、凰鈴音。あなたには、私の存在を知っておいて貰いたいと思い、こうして話しています』
『どういうこと？』
『現実での協力者が少ないのです。現在私の存在を知っているのは、マスターであるカオリとチフユ、そして製作者（マイスター）のタバネだけです。あなたには、現実でのカオリの支えになると共に、今日のように不測の事態でカオリが墜ちた場合に、カオリが周囲に男だとばれる危険性を少しでも減らす手伝いをして欲しいのです。無論、これ以上カオリを傷つけさせるわけはありませんが』

何処か悔しげな色を浮かべ、イヴはそう語る。
現実で、彼女は無力だった。どれほど言葉を並べても、それが形を成すわけではない。結局、自由に出来るのは電子の世界までだった。
だが、この少女は違う。現実に肉体を持ち、香織と共にいられる。ならば、協力関係を結んでおくべきだと考えた。

『カオリは、心が徐々に軋み始めています。自分の事を隠して生活

することが、想像以上の負担になっているのでしょう。あなたには、それを和らげてあげて欲しいのです』

『……いいわよ。私が何か出来るなら、何だってする。あなたも、そうでしょ？』

『当たり前です。カオリは私の主ですから。尽くすのは当然です』

はっきりと、無機質な音声でそう断じたイヴに、鈴音は思わず小さな笑みを零す。

一番つらいのは鈴音ではない、眠っているこの少年なのだから。

「いつまでも、くよくよしてらんないわね。私が、香織を守ってみせる」

決意を口に、鈴音はそっと香織の頬を撫でた。

本当ならば眠り姫に口づけの一つでもしてやろうかと思ったが、自分はそこまでロマンチストではないし、やるのだったらもっといい場所の方が雰囲気があると思いやめたのだ。

ファーストキスは消毒液の味、なんてことはあまり経験したくないものだから。

第9話　戦う刻（後書き）

へへ、シリアスだって。
おかしいな、本当ならのほほんさんがこんなにブラックじゃないはずだったのに。
のほほんさんは、自分でもどうしてこうなったかわからない。けど、箒の原作でのあの行動はお咎めされてしかるべきだと思います。あれはまずいでしょう、いくらなんでも。
なので、ちょっと大事にしてみた。
あ、感想なんかいただけるとすっごい喜びます。なのはの方も空白期に入ったからか、めっきり感想が減ってちょっとしおしおになっております。よかったら書いていってくださいませー。

次回は、香織の姉が登場……？　かも！

第１０話　穏やか医務室

「……んっ」

目が覚めた。

いつから眠っていたのか、記憶がない。確か、代表戦に横槍入れて無人の全身装甲と戦って、それで……。

「……そっか、それで倒れたんだ」

ようやく思い出せた。それと同時に、消毒液の臭いがツンと鼻腔を刺激する。……なんだか嫌な気分になった。

ふと、ベッドの左右に重みを感じた。そこにいたのは、ツインテールの少女と茶色の髪をショートカットにした……。

「……あれ、お姉ちゃん！？」

っとと、なんとか声を抑えながら叫ぶ。なんでお姉ちゃんがここにいるんだろうか。もしかして、もう僕のことばれてる？

でも、なんでふーちゃんとお姉ちゃんが一緒になって寝てるんだろう。ずっと傍にいてくれたのかな……。

「痛っ……！」

ふーちゃんの頭に右手を伸ばそうとした瞬間、右腕を思い切り壊されるような痛みが走る。あまりの激痛に、私はその場で顔を顰めて背を丸めるしかできない。

『目が覚めましたか、カオリ』

『イヴ、ごめん。無茶して』
『構いません、とは言えませんね。これからは出来る限り無茶は避けてください』
『うん、善処します』

まるで理解しているように思えません、とイヴに溜め息交じりに言われながら、あの後自分がどうなって、何日経っているのかを聞いてみる。

『あの戦闘の後、カオリはすぐに緊急処置室へと運び込まれました。チフユの手助けもありカオリが男性だとばれることはありませんでしたが、傷の具合はあまりよくありません。双腕部の筋肉はしばらく動かすどころか触れるだけでも激痛が走るはずです。さらに、超急加速と急停止、そして相手からのエネルギーの余波の影響で内臓器官もひどいダメージを負っていました。梟の機能をフル活用したおかげで内臓器官へのダメージはほとんど回復していますが、それでもしばらくは苦労することを覚悟してください』

マシンガントークとはまさにこのことか、一気に怪我の状況を解説された。

それによれば、僕の体は割とズタボロになっているらしい。立って歩く程度なら問題ないが、ＩＳでの戦闘はしばらく無理だそうだ。

『それと、あの戦闘からはすでに三日が経っています』
『えっ、そんなに！？』
『はい。ただ、三日間寝たきりだったおかげで体力と内臓器官のダメージはほとんど回復しています』
『……でも、なんで梟に回復機能なんて付いてるの？』
『タバネの配慮では？　ともかく、あと一週間もすれば腕の方もまともに動かせるはずです』

一週間……、その間食事はどうしようかな。まさか食べさせてもらうって訳にも行かないし。
というか、どうしようかこの両サイドの二人。とりあえず起こすべきかな……。心配掛けちゃったみたいだし。

「えっと、二人とも！　起きて！」
「……ん、んんっ……？」
「ぁれ、今何時……」

おほう、寝ぼけていらっしゃる。いや、可愛いけど今って何曜日だっけ？　日の昇り具合から言って普通の時間帯だと思うけど……。二人とも大丈夫なんだろうか。

「お姉ちゃん、ふーちゃん！」
「あ、れ、か、香織！？　目が覚めたのね！？」
「香織……！　良かった、良かったよぉ……！」

……えっと、ちょっとまって。痛い、痛いんですけどふーちゃん！？
あとお姉ちゃん手を持たないでめっちゃ痛いから！　泣くよ！？
年甲斐もなくみっともなく、どうしようもなく泣くよ！？
と言いたいのに、悶絶して体を震わせることしか出来ない。

「……あれ、香織？　香織！？」
「ふ、ふー、ちゃん、痛い……！」
「あっ、そっか怪我！　葵義姉（ねえ）さん、怪我！」
「え？　あ、ああ！　ごめんね香織！　痛かった？！」

痛かったです、物凄く。

だけど、それ以上に二人が僕を心配してくれていたのが凄く嬉しくて、とりあえず今は笑っておくことにした。
それから数分は僕の目が覚めたことを喜ぶ二人をずっと笑ってみていた。
二人とも僕が寝ている間に仲良くなったらしくて、お姉ちゃんを「義姉さん」と呼ぶほどに仲がよく……、あれ？　おかしくない？

「それで、腕以外にはもうほとんど治ってるのね？」
「うん、そうみたい」
「ったく、無茶するんだから……。のほほんさんに一夏にセシリア、それに千冬さんも心配してたから、お見舞いに来たらちゃんと御礼して謝んなさいよ？」
「わかってるよ。助けに行ったのに、助けられちゃったしなぁ……」

二人の言葉が耳に痛い……。
でも、あの無人ＩＳは一体なんだったんだろう。何の目的があって……。

「……痛っ」
「ほら、難しい顔してるわよ。アンタは今は休めばいいの。それだけのことをしたんだから」
「お姉ちゃん……」

ペシッ、と僕の頭を平手で軽く叩いたお姉ちゃんが、ニカッと笑ってそう言ってくれる。
こういうところは、本当にいいお姉ちゃんなんだよなぁ。

「そうそう、義姉さんの言う通りよ。まずは体を治して、後はそれから考えましょう」
「……ねえ、ふーちゃん？　なんでお姉ちゃんのこと義姉さんって

呼んでるのかな」

「え゛」

ほっほっほ、濁点付きの濁った「えっ」が入りましたぞ。……キャラおかしいな、疲れてるのかな。

いや、ほんとになんでお姉ちゃんのこと義姉さんって呼んでるんだろう。別に僕と夫婦だとか恋人だとかってわけじゃないのに。

「ふふふ、鈴ちゃんったらね、お姉ちゃんに」

「わー！　わーわー！　義姉さん、それは言わないって！？」

「あれ、そうだったかしらー？」

「お願いします勘弁してください！」

「ふーちゃんが敬語！？」

……うん、どうやらふーちゃんの中でお姉ちゃんの脅威度は千冬さん並になったらしい。ふーちゃんって、千冬さんの前だと敬語になるんだよね。

結局、なんでふーちゃんがお姉ちゃんのことを義姉さんと呼んでいるのかは分からなかった。言おうとする度にお姉ちゃんのことをふーちゃんが阻止するからなんだけど。

「ところで、今日って何曜日？」

「月曜日だけど？」

「授業は？」

「公欠を貰って来てるわ。鈴ちゃんもね？」

……もらえたのか、公欠。というかそれってもらえるものなの？

「織斑先生が協力してくれたのよ」

「へぇー……」

具体的にどう協力してくれたのかは聞かないことにしよう。なんか怖そうだし。

「って、僕の単位は……？」

「アンタも公欠だから、後で補習だって」

「うえぇ……」

勉強が嫌いって訳じゃないけど、やっぱり補習と聞くと嫌になる。うんざりしていると、突然お姉ちゃんが顔をぐいっと近づけてきた。真顔で。

「……ねえ、香織。大体の事情は鈴ちゃんから聞いたわ。どうして私に秘密にしていたの？」

「えっと、心配掛けたくなかったし……。ちゃんと言おうとは思ってたんだけど、何組かとか知らないし、変に聞いて身元がばれれば大変だし……」

「……そっか。うん、じゃあこれからは存分にお姉ちゃんを頼りなさい！　いい！？」

「あ、うん……、ありがとう……」

嬉しいけど、うん。あんまりお姉ちゃんに負担かけたくないんだよね……。

……あ、ご飯どうしよう。一週間ご飯抜きはさすがに死んじゃうと思うんですが私？

「ま、落ち込むことないわよ！　補習は合同らしいから、一緒にやりましょ」

「そうなの？」

「……私は一緒じゃないんだけどなー……」

「お、お姉ちゃん……」

学年違うんだからそりゃあそうだと思うよ。
けど、ふーちゃんと一緒なら少しは気が楽かな……。

「そろそろお昼だし、ご飯貰ってくるわね」
「それじゃあ私は、織斑先生に香織が目を覚ましたことの報告に行って来るわ。大人しくしてるのよ？」
「さすがにこの状況で動こうとは思えないよ……」
「よろしい。じゃあ行って来るわね」

そう言って、ふーちゃんとお姉ちゃんは病室から出て行った。
ふぅ……。とりあえず、休もう。色々考えたいし。

『……イヴ』
『はい』
『僕は、弱いね』
『……はい』
『強くならないと。もっと、今よりもっと強く』
『……はい。一緒に、進んでいきましょう。私はあなたをサポートするために生み出されたのですから』

まったく、イヴって本当に機械らしくない。それがまたいいんだけど。
ぼんやりと考えていると、突然医務室のドアが開く。
ちなみに、今医務室には僕以外の患者はいない。医務室に数日に渡ってかかりっきりになるような人はそうそう出やしないからだ。

「かおりーん、目が覚めたの？」
「のほほんさん？　ごめんなさい、心配掛けて」

すぐに僕を『私』に切り替え、入って来た少女に応対する。
相変わらず袖を伸ばした制服を着ているのほほんさんは、私を見るとあからさまにほっとしたような顔で傍へ寄ってきた。

「今、お昼休み？」
「うん。途中で鈴ちゃんとすれ違ったよぉ？　なんだかすごい嬉しそうな顔してた」
「そうですか」
「かおりん」
「はい？」
「ていっ」

短い言葉の応酬の後にやってきたのは、軽い衝撃。
肩から腕にまでは衝撃を伝えないようにゆっくりと、けど少しだけ痛みを感じるように鋭く繰り出されたチョップ。
なぜ突然こんなことをするのかと抗議の視線を相部屋の友人に投げかけてみれば、彼女はちょっとだけむくれるように頬を膨らませ、腰に手をやっていた。

「危なくなった罰だよ」
「え、理不尽」

だよ、と続けようとした口を、のほほんさんの人差し指が塞ぐ。
まるで映画のワンシーンのように軽やかに、それでいて普段ののんびりとした雰囲気も一緒にあって。
むくれていた顔がいつの間にか笑顔に変わっていることに気づいて、私も思わず笑みを浮かべた。
何を言うでもなく私とのほほんさんがただ笑い続けていた時、またもやドアが開かれた。今度はやや乱暴に、だが。

「香織、ご飯持ってきたわよ。お腹空いてるでしょ」
「ありがとう、ふーちゃん」
「あ、鈴ちゃんだー。さっきぶりー」
「さっきぶり、のほほんさん」

扉を開けて入って来たのは、その手に二人分の食事を携えたふーちゃんだった。
っていうか、出て行ってから一〇分経ってないんだけど。

「鳥のから揚げに白いご飯、お吸い物に沢庵。好きでしょ？」
「うん！」
「……アンタ、なんか子供みたいよ？」
「失礼な、そんなことないよ！」
「んーん、かわいいよー？」

のほほんさん、それはフォローになってないです。
まあでも、とりあえず今日が平和だからいいかなぁ、なんて考えてみて。
後のことは、後になってから考えることにした。

「いただきます！」
「はい、いただきます」

第１０話　穏やか医務室（後書き）

お姉ちゃん登場。イメージ映像的には「とあ禁」の「御坂美琴」が成長した姿、的な。今目に付いた御坂がイメージに似ていたので見た目そんな感じです。

さて、ここから物語がどう動くのか……、私も若干不安でございますが、お付き合いくださいませ。

第11話　嵐の前

僕が起きて、そして『私』として再び復帰したのは、怪我が少し治り始めた四日目からだった。

「はい、あーん」
「あ、あーん……」

え、今何してるのかって？
……のほほんさんにご飯を食べさせていただいております。昼食を。
腕の痛みは大分引いたけど、腕が恐ろしく重いせいでまともに茶碗一つ持てやしない。そのせいでご飯も「はいあーん」が続いている。正直言うとかなり恥ずかしい。
ふーちゃんとのほほんさんが替わりばんこで私にご飯を食べさせることになっているらしいのです。誰か助けろ。他の人ならいいって訳じゃないけど、かといってこれは公開処刑に等しいと思うんだ。
でも、女子通しで食べさせあいとかって普通なのかな？　皆割りとスルーしてるけど。
あ、ちなみに医務室にいたときに他の皆もお見舞いに来てくれたんだけど、何故か箒さんだけ居心地悪そうにしていたのを覚えている。なんでだったんだろうか。

「美味しい？」
「う、うん」
「よかったー、お料理は久しぶりだったんだぁ」

嬉しそうに微笑んで、自分も食事を続けるのほほんさん。……あ

の、その箸って私の口に入ったものじゃ……。
いや、今私は女性として通ってるから、別に気にしないってのは分かるんだけどね……。

「今日の実習も見学するの？」
「まだ、まともに動かせませんから。皆が頑張る姿をのんびり見学させていただきます」

本当は私も参加したいけど、今出れば体を更に痛めるだけで終わってしまうだろうから、ここは我慢だ。
まずは瞬時加速（イグニッション・ブースト）を完璧に使いこなせるようにしよう。なぜあんなに過負荷が掛かったのかも調べないと。

「そう言えばのほほんさん、クラス対抗戦って結局どうなったんですか？」
「そのうち再試合だってー。あんなことがあったあとだから、慎重になってるんだと思うよぉ？」
「それもそうですよね。一夏も不憫だなぁ……」

そんな話をしている最中に、私の携帯が鳴る。
そのディスプレイに映し出されていたのは、「束ちゃん」の四文字だった。

「うえぇっ！？」
「どったのー？」
「あ、いえ、ちょっと電話するので、外行ってきますね！」
「え？　あ、うんー」

慌ててのほほんさんに断りを入れると、人気が少ない廊下の隅に行って携帯を開く。

「もしもし？」
『もすもす終日（ひねもす）ー！　皆のアイドル束ちゃんだよー！』
「いきなり電話掛けてこないでくださいよ！　びっくりしたんですから！」
『あははー、ごめんごめん！　ところで、この前の襲撃事件をモニターしてた時、梟が変な挙動をしてたんだけど』

束さんにかかればＩＳの情報封鎖も紙同然か……。
って、変な挙動？
なんて考えているとあっという間に腕が重くなってきたため、とりあえず窓枠に腕を預けて楽な体勢を取る。

「それってどういうことですか？」
『うーんとねぇ、絶対防御が発動してないんだよ。より正確には、生命維持機能が完全に死んでた』
「じゃあ、この大怪我もそのせいで？」
『多分そうだと思うよ。ちょっと見ておいてくれないかな？　怪我が治った頃にお呼びたてするからさ』
「わ、わかりました。イヴに言えばいいんですか？」
『そゆことだねー。あ、そうそう！　本社はちょっと面白いところに作ってあるから、呼んだときには一旦家に戻っててね？』
「あ、はい」

思わず頭を下げつつそう返事をすると、束ちゃんは満足そうな声と共に電話を切る。
……絶対防御が発動してないって、どういうことだろう。まともに動けるようになったら見てみることにしよう。

「……さて、と。コーヒーでよかったか？」
「あ、は、はい！」
「そう固くなるな。楽にしろ」

時は流れて夜。
『僕』は何故だか千冬さんに呼び出されて寮監室にいた。
それにしても、あんまり片付いてな

スパァン！

「……Ｗｈｙ？」
「ふむ、妙なことを考えていただろう」
「なぜわかるんです！？」
「フィーリングだ。何か入れるか？」
「あ、ミルクとガムシロップお願いします」

わかった、と小さく頷いて、千冬さんは片方のコーヒーにミルクとガムシロップを入れる。
先の方に小さく掬う部分がついた細いスプーンが入ったマグカップを受け取ると、掻き混ぜつつ一口飲む。

「美味しい……」
「私だってコーヒーくらい淹れられるさ。で、本題に入るが、いいか？」

「あ、はい」
「先日の無人ＩＳ襲撃事件、私達はあの無人ＩＳをゴーレムと呼称しているが、あのゴーレムには未登録のＩＳコアが使われていた」
「え！？」

思わず声を漏らしてしまった。
未登録の、ということはつまり、どこかの国や企業がＩＳコアの製造に成功したか、もしくは……。

「束ちゃんが、関わってる……？」
「というより、あれは全て本人の仕業だと自分で白状したぞ。ただ、行った本人が言うのも気まずいし、ちょっと気がかりなことがあるから私から伝えておいて欲しいと言われてな」
「……束ちゃんは、何を目的に？」
「さあな。だが、あいつを信じてやってくれないか。友人としての頼みだ」
「……はい。僕も束ちゃんの友達ですから」

千冬さん自身も歯がゆい思いなんだろう、自分の飲み物に視線を落として溜め息をついている。
かと思いきや、おもむろに立ち上がると冷蔵庫から缶ビールを取り出してプルタブを、

「って、いいんですか！？」
「ん、ああ。気にするな。口外禁止だぞ。さっきの束の件も合わせてな」
「おまけのように言わないでください！？　まあ、わかりましたけど」

生徒の前でがっつりビール飲む先生ってどうなんだろうか。うち

はお酒飲む人いないしなぁ……。

「ん、飲むか？」
「飲みません」
「そうか」

素気無く断ると、千冬さんは言葉少なくまた一口呷る。
しばらく無言で飲んでいた千冬さんと僕だったけれども、やがて千冬さんが口を開いた。

「一之瀬、学校生活はどうだ？」
「え？」
「一夏の奴はそれなりに馴染んで、友人もキチンとできている。そう心配することはないんだが。お前の方がどうかわからなかったからな」

えっと、これは僕のことを心配してくれてるんだろうか。

「今のところは、大丈夫です。ばれてはいないみたいですし。お姉ちゃんにも打ち明けて、ふーちゃんとも再会できて」
「……どうやら、本当に大丈夫らしいな。ほぼ女子校のようなこの場所がストレスになっていないかと心配していたが、杞憂だったらしい」
「ありがとうございます、心配してくれて」

気にするな、と千冬さんは薄い笑みを浮かべ、缶の中に残っていたビールを一気に飲み干す。その様子が妙に色っぽかったのが印象的だった。

「さて、そろそろ時間も時間だ。呼びつけて悪かったな」

「いえ、ちょっと楽になりましたから。今度束ちゃんに会ったら、一言くらい言っておきます。束ちゃん自身も危なくなっちゃうことだってありますから」
「存分に言ってやれ。就寝時間は守れよ」
「はい。それでは、失礼しました」

一礼し、扉を閉める。と、自分の部屋の方からがやがやと声が聞こえてきた。ふーちゃんとお姉ちゃんが部屋に来ているのだろうか。
そう考えて、僕は自室へと戻る足を少しだけ速めていた。

香織が出て行ったあと、千冬は大きく溜息を吐きだすとノートパソコンを開き、一つのウィンドウを呼び出す。

「これでいいのか、束？」
『うん、ありがとねぇ！　ちーちゃん大好き！』
「それで、調べ物は終わったのか？」
『……うん。終わったっていうか、終わらされたっていうか』
「……どういうことだ？」

ハイテンションから一転、世界を変えた科学者はしんみりとした口調に切り替わる。
その背後では、数多くのディスプレイの中でウィンドウが開いたり閉じたりとせわしなく動いていた。

『香織ちゃんの戸籍をもう一回調べてみたんだけどね。おかしいんだよ、肉親のデータ』
「なに？」
『戸籍では生まれて間もない頃に死んでいることになってる』
「だが、あいつは物心ついてすぐに死んだと言っていたはずじゃなかったか？」
『そう。それをとっかかりにしていろいろ探ってみたんだけどね？　世界中に繋がったよ、データが』
「なっ……！？」

ウィンドウの向こう側で、珍しくしんみりとした顔の彼女に思わず喉に言葉を詰まらせて目線を返す。

「一之瀬の両親は普通のサラリーマンと専業主婦だったはずだ！？　一之瀬姉の時にもそれは確認した！」
『じゃあ、それが間違ってるんだろうね。多分生きてるよ、両親両方とも』
「……はぁ、しかも本人はそれを知らない、と。どうなってるんだ全く」
『もしかしたら香織ちゃんのＩＳ適正とも何か関係があるかもしれないし、色々調べてみるねぇ』

その言葉と共にウィンドウが消え、室内に静寂が訪れる。
その中で、千冬は一人天井を見上げた。
とてつもなく大きな嵐が迫りつつあることを感じながら。

第11話　嵐の前（後書き）

次回から2巻の内容に突入。

香織を取り巻く事象の糸は収束を始めていく。

第12話　Bind Company

腕が完全に回復した後の日曜日、僕は一人で自宅へ戻っていた。
というのも、以前束さんから言われた『メンテナンス』を受けるために、束さんの迎えを待っているわけで。

「一〇時……、そろそろかな？」
「……りちゃーん！」
「ん……？」

家の前で待っていると、どこかから声が聞こえてくる。右でも左でもないし、前でも、もちろん後でもない。……まさか！？

「上！？」
「だーいせーいかーい！　ドーンっ！」
「うわぁっ！？」

突然の轟音とともに降ってきたのは、何やらよくわからない機械に乗った束ちゃんだった。相変わらず突飛な行動しかないというかなんというか、とにかくすごい人だ。
束ちゃんは面白そうに機械から飛び降りると、ひょこひょことこちらへ近づいてくる。小動物チックだ。

「ひっさしぶりだねー香織ちゃん！　どう、その後いいことあった？」
「まあ、幼馴染にも再会できましたし、そういった意味では」
「そっかそっかー、じゃあ今度はその幼馴染ともお話しよっか！」

ひぅっ！？　な、なんかお話って言った瞬間に背筋を怖気が走っ

たのですが！？

「ん、どうしたの香織ちゃん？」

「えっ！？　あ、ううん、な、何でもないよ！？」

「むむう、まあいいや。とりあえず乗ってよ！」

そう言って束ちゃんが、自分の乗ってきた妙な機械を起こすとペシペシ叩く。

よくＳＦとかでありそうな、宙に浮くバイクのようなもの。結構大きいけど、駆動音が全くない。それどころかどんな燃料を使っているのかすらわからない。

「おやおや、これが気になるのかな？」

「これ、なんですか？」

「暇つぶしに作ったマッハバイクだよん！　ま、ＩＳ使った方が速いんだけどね」

ちなみに絶対防御付きです、なんて面白そうに言った彼女の規格外さを、改めて痛感させられる。

ＩＳコアは積んでないんだろうけど、むしろそれ抜きで絶対防御機能を使えるようにするというのはなんとも信じがたいことだ。必要な事態にはなってほしくないけど。

さあさあさあ！　と束ちゃんに急かされてバイクの後ろに乗り込む。意外とシートはゆったりしていて、跨っても大して違和感なく座れた。無駄に座り心地抜群である。

「さぁ！　束ちゃんお手製の本社まで、レッツゴー！」

「え？　ひっ、わあぁぁぁぁぁあああ！？」

――お花畑が見えました。

『制限速度？なにそれ美味しいの？』ばりに街道を突っ走ったバイクは、いつの間にか海上を走行していた。いや、え？　バイクって陸上を走るものであって、海の上を滑走するものじゃないはずなんだけど。

そんな疑問を提示することすらできず、僕は束ちゃんの後に続いてなんとか小さな島へと降り立った。

しかし、なんだ。日本にこんなジャングルチックな島が存在していたのかと思わず目を疑うほど、鬱蒼と生い茂る木々が見える。

「えっと、ここは？」

「へへーん、私の立ち上げた『バインド・カンパニー』の本社だよ！　ちなみにジャングルは束ちゃんお手製のホログラフィックでござーい」

「……もう突っ込みきれません」

「んー、まだまだあるよ？　島の中を巡回してる交戦可能なアニマルロボットとか、この島にあるラボとかね？」

歌うように続ける束ちゃんの後に続いて、ホログラムらしいジャングルの中を歩いていく。しかし、なんでホログラムに質感があるんでせうか。

しばらくホログラムジャングルの中を歩いて行くと、突然開けた場所に出た。森の中の広場のようになっているそこの中央には、と

んでもない大きさの大樹が聳え立っている。
　束ちゃんはその樹に近づくと、おもむろに手の平を大樹の表面に押し付ける。すると、ロックが解除されたことを知らせるブザー音とともにエアロックも解除され、手の平を中心として大きな扉のように表面が開く。

「うわっ……」
「ふふーん、ここがバインドカンパニー地球本社の入口だよ！　ちなみに、今のところ社員は私と香織ちゃんのみだけどね！　はい、これ社員証」
「あれ、意外と普通――」
「防刃防弾耐レーザー加工などなど、あらゆる攻撃や衝撃に耐えきれる加工済みだけどね！」
「――じゃなかったー」

　恐ろしいほど技術が無駄遣いされた、名刺サイズのメタリックカードを受け取る。重いような軽いような、奇妙な重量感。
　開いた扉の中は、鋼鉄によって作られたエレベータ。束ちゃんは躊躇いもせずにそこへ乗り込むと、早く入るように僕を手招き、乗り込んだところで社員証を、普通はボタンがある場所に設置された何かの機械に翳した。
　すると扉が自動的に閉まり、あのエレベータ独特の浮遊感とともに下降していく。

「さて、と。イヴ、開放通信（オープンチャネル）で話して大丈夫だよ」
「わかりました、マイスタータバネ」
「イヴ、どうして黙ってたの？」
「周囲を警戒していました。それと、盗聴などのデータを削除し、こちらのことを勘づかれないように」

どうやら、今までイヴが全然喋らなかったのは僕たちの情報を漏らさないように警戒してくれていたからだったらしい。そりゃ、僕も束ちゃんも機密の塊なんだし、見つかったらまずいよね。
束ちゃんはその辺もわかってたみたいで、どうやら僕も少しばかり浮かれていたようだ。注意しないとね。

「それにしても、凄いねここ」
「そりゃあ天才の束さんにかかればこのぐらい夜食前だよ！」
「朝じゃないんだ」
「肥りますよ」
「大丈夫だもん！　乙女は太らないの！　うん○だってしないもん！」
「束ちゃん、それは無理があるよ。というか女の子がそんなこと言わないの、はしたない」

……いや、僕だって男だし今の発言はちょっとばかし恥ずかしかったけれども。そういうとこはびしっとしないとね。
そんなアホなことをしているうちに、音のないエレベータは本社内部に着いたらしい。
エレベータから降りた僕を待っていたのは、白銀によって彩られたＩＳラボ、休憩所、研究室、事務室などなど、昨今ＩＳに手を出している会社なら大体が持っているようなものの中でも最上級に位置する設備だった。

「電子機器関連はぜーんぶ私が作ったし、他のものも束さんのパートナーが提案して作ってくれたんだー」
「パートナー？」
「そ。ハル！」
『おかえりなさい、お母様。そして香織、イヴお姉様。ようこそバインド・カンパニーへ』

突然、各所に設置されたスピーカーから音声が流れた。
イヴとはまた違う合成音声ながら、同じように全く不自然さを感じない。

「ただいまー。コーヒー淹れといてねー。それと、香織ちゃんに案内お願い。イヴにはマップデータ渡しておいて」
『わかりました』
「香織ちゃん、案内が終わったらご飯にしようねー！　私は先にラボにいって調整してるから！」
「あ、うん！」

あはは、あははー、なんて言いつつ束ちゃんは物凄い勢いで走り去っていく。で、結局パートナーについての説明はなし？

『私は『ＨＡＬ－３００００』。お母様、つまりマイスター束により作り出された人工知能、ＡＩです。ハルとお呼びください。イヴお姉様よりも後に開発されましたので、妹ということになります』
「えっと、ハル。あなたと束ちゃん、私達以外にここの人員は？」
『いません。細かい制御や外部との一切は私に任されています。お母様はあまり他者との接触を好みませんので』
「そっか。ええっと、それじゃあ案内してくれるかな？」
『わかりました。ではまずは――』

「ご馳走様でした！」
「あー美味しかったぁー！　やっぱり食は世界の生み出した最高の文化だねぇ！」
「ハル、ご飯ありがとう。とっても美味しかったよ」
『ありがとうございます、香織。といっても、プログラミングされた手順どおりに作っただけですが』

案内が終わった後の昼食を終え、僕たちは満足げに吐息を漏らした。
とにかくご飯が美味しかったし、それを作ったのがＡＩによって統制された最新調理機器達だというのもなんとも胸躍らせる話だ。
僕がこんなこと言うのはアレかもしれないけども、やっぱりＳＦというのは憧れる。まあ、少しは自分で動かなきゃ人間ダメになるとも言うけど。

「さて、と。それじゃあ梟みたいから、香織ちゃん。ちょっとラボまで来てー」
「あ、はーい」

束ちゃんの後に続き、ＩＳラボへ。世界中で使われている最新設備を更に五世代ほど飛び越えた最新機器が揃っているため、僕は全く手が出せません。どうやって使うんだろうか。
腕輪になっている梟を外して束ちゃんに手渡すと、即座に解析を始めた。

「ふむふむ、んー、なるほどにゃー、そういうことか。とするとここをこう弄って、あ、でもそうするとこうだからここでこうのこうこうこうこうこうこうにゃにゃにゃにゃっと！　はい出来た！」
「途中からなんだかおかしかったよ？」

「マイブームはウサ耳猫語に今決定したよ！　もうやめたけど」
「飽きっぽいのですね」
「んもう、イヴちゃん辛口だね！　ところで、なんだか梟の絶対防御がプログラム自体すっぽ抜かれてたから、とりあえずもう一回組み込んでみたけど、やっぱり消されちゃうみたいだね。とりあえず最低限の生体保護プログラムは強化しておいたから、出来るだけ生身へのダメージは避けてね？　大きいダメージを受ければ防御が簡単に割られちゃうからね」

　矢継ぎ早に繰り出される説明を頑張って理解してみると、それはつまり、ＩＳの売りの一つである『絶対に搭乗者を死亡させない』機能が働いていないそうだ。以前のあの大怪我もまともにプログラムが動いていなかったからしい。

「あ、それと。梟はまだ一次移行（ファースト・シフト）してないね？」
「はい。まだ一次移行に足るデータが足りません」
「そっかー。でも、香織ちゃんは絶対守ること。いいね？」
「もちろん」

　……えーっと、今また物凄い事実が発覚したのに僕は蚊帳の外なんです。誰か助けてください。
　つまり、僕は今まで一次移行も済んでいない、最適化しただけのＩＳで頑張ってたってことかー。そりゃ死に掛けるね。

「あの、束ちゃん。じゃあ一次移行っていつごろだと思う？」
「わからないよ。いくら天才の束さんでも、ＩＳコアの進化は未知数、予測は出来ないんだよん。だからこそ面白いって言うのもあるんだけどねー」

　むぅ、束ちゃんでも分からないか……。

とにかくひたすら乗ってみるしかないのかな、これは。

「まあとにかく、これからもガンガン、イヴと一緒に梟を使ってあげてね。じゃなきゃいつまで経っても一次移行にだって辿りつけないからさ」

「うん、頑張ってみる。ね、イヴ？」

「ええ、頑張りましょうカオリ。何をどう頑張るかまでは決まりませんが」

最後の最後でしまらないけど、とりあえず今日の会社訪問はこれにてお開きとなった。

また色々と問題を抱えてしまったけど、頑張らないと。

第12話　Ｂｉｎｄ　Ｃｏｍｐａｎｙ（後書き）

結局第二巻までいかんかった、申し訳ない。
次回から二巻ですね。

重大な欠陥ともいえるものが発見され、またお話が面倒な方向へ。
新たに現れる彼女達との出会いで、何が変わるのか。

第13話　金銀キャンペーン

翌朝、疲れからかのほほんさんよりも少しばかり遅く目を覚ました僕は、すぐに服を着替えると頭を切り替える。
昨日もらった社員証は胸ポケットに入れてあるけど、落としてもきちんと私のもとへ戻ってくるようになっている。性別のところが女性になってるからね。

『カオリ、ハルから新規開発武装のテストプランが送られていますが』
『えっと、どういうこと？』
『どうやらタバネがあれやこれやと開発に走っているようです。だれかお母様を止めてください、と愚痴のメールも届きました』

がんばれハル。私は手助けできないから。というか私だと束ちゃんは止められません。
のほほんさんは既に食堂に向かっていたみたいで、とりあえず部屋の鍵を閉めると一人で廊下を歩いていく。と、長い黒髪を後ろで縛った姿が見えた。

「箒さん、おはようございます」
「ん？　か、香織……」
「あの、私の顔に何か付いてます？」

食堂に向かうつもりだったのだろう箒さんに挨拶すると、振り向いた彼女はまずいものを見たかのように固まってしまう。

「あ、あ、い、いや、そ、そうじゃない。その、少し気分が悪くてな……」

「大丈夫ですか？　医務室行きます？」
「い、いや、大丈夫だ！　心配ない、すぐに治る！」
「え、で、でも……」
「大丈夫だ！」

半ば無理やり、怒鳴るようにして会話を終わらせた箒さんは、とんでもないことをしたかのように少し顔を青ざめさせて一、二歩下がった。

「あ、す、すまない……」
「いえ、いいですよ。すいません、私こそ」
「いや、私が悪いのだ。……お前のことも、考えずに……」
「え？」

何故か、箒さんが立ち止まる。静かに肩を震わせているかと思うと、急にこちらへ振り向いてきた。その目には、玉のように涙が浮かんでいる。

「……ごめん、なさい……っ……！　私の、私のせいっ、でっ……！」
「ほ、箒さん！？」
「ごめっ……、なさいっ……！」

蹲るようにして涙を流し、ひたすらそう繰り返す箒さん。その姿を見て、私はとにかく彼女を泣き止ませることを優先させることにした。
彼女の肩を、包むようにしてそっと抱くと、そのまま背中をさすり続ける。
しばらくして涙が嗚咽に変わった頃、箒さんは赤く泣き腫らしたその目をこちらに向けた。

「落ち着きましたか？」
「あ、ああ……。あの、その……、以前のクラス代表戦のときのことだが……」
「え？」
「私のせいで、お前に大怪我をさせてしまった……。謝って済むことではないと分かってはいるが、謝らせて欲しい……！　済まなかった……！」

まだ少し涙声のまま、彼女はそう漏らす。
私の中ではとっくに片付いたと思っていたことが、彼女の中ではまだ終わっていなかった。そのことに気付いて、私はそっと彼女の頭を撫でる。

「じゃあ、これでおしまいです。ごめんなさい、気づいてあげられなくて。あなたがこんなに苦しんでいたのに……」
「え……」
「私はあなたを許します。気に病まないで」
「だ、だが、それでは……！　それでは私の気が済まない！」

悲痛ともとれるような声で叫び、箒さんは唇を噛む。

「お願いだ……！　私を許さないでくれ……！」
「いいえ、許します。箒さんは今まで苦しんだんでしょう？　苦しむことの意味がわかっているのなら、もう苦しむ必要はないんです。だから、私はあなたを許します」
「ぁぁっ……、ぁ――――！」

次の瞬間、彼女はもう一度その瞳から大粒の涙を零し泣き出した。
その肩を、私はそっと抱く。せめて、少しでも苦しまないように。

翌日。

昨晩箒さんが一夏に何かしらの約束をしたらしいという噂を聞いて、箒さんも少しは吹っ切れたのかと少しばかり気が楽になった私だった。

まあ、その後すぐにこんなことが起きるとは予想していなかったわけだけども。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二名です！」

「へっ？」

「え……」

「「「ええええっ！？」」」

教室中が爆発したような大声で包まれる。

いや、転校生ってだけでもこのＩＳ学園じゃ珍しいのに、その上それが更に二名か……。ふーちゃんに続いて二人目と三人目だ。

あれか、世界初の男性ＩＳ操縦者がいるからなのだろうか。

けれども、なんで二人同時にこのクラスなのか。もうちょっとバラけてもいいはずなのに。

「失礼します」

「……」

二人が入って来た途端、クラスが静まり返った。
銀色の髪を持って背の低い眼帯を付けた少女と、長く伸びた金髪を後ろで束ねた女顔の『少年』。うん、おかしいね。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」
「お、男……？」
「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

眩しく輝く笑顔と共に言うシャルル君。……んー、なんか引っかかる。違う気がするんだけど。

『イヴ、あれ本当に男？』
『いえ、女です。骨格が完全に女性型です。体組織があれば、本社の方にデータを送って解析できますが？』
『ん、手に入りそうだったらやろうか。正直言って、こんなタイミングの編入は危険すぎる。何か変だよ』

つい先日アリーナの壁ぶち破ってＩＳが降ってきたばかりなのに、自国の大事なＩＳ操縦者をそんな安全性の不安な場所に送ってくるかな、普通。
それに、一夏と同じ境遇ってちょっと無理がある。それならなんでマスコミが嗅ぎ付けてないのか。どれだけ強固な情報封鎖でも、それだけのネタなら必ず綻びが生じるはずだ。

「きゃ……」
「はい？」
「きゃあああああ――――っ！」

おほう、耳が凄いですよ？　ぐわんぐわんする。

「男子！　二人目の男子！」
「しかもうちのクラス！」
「美形！　守ってあげたくなる系の！」
「地球に生まれて良かったーっ！」

あははは、耳がぐわんぐわんしておりまする。すごいねぇ女子のぱぅわは。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」
「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

至極めんどくさそうな声で諌める千冬さんと、おどおどしながら声を上げる山田先生。頑張って。

そんなことを考えながら皆を眺めていると、ふと銀色の髪の転入生と目が合った。ちょっと笑いかけてみる。

「……フン」

鼻で笑われて目を逸らされた。少しショックです。

すると、千冬さんの方に視線を向けていた彼女に向けて、千冬さんが口を開く。

「……挨拶をしろ、ラウラ」
「はい、教官」

突然姿勢を正し、流れるような動作で敬礼するラウラと呼ばれた少女。

それを見て、千冬さんは疲れたようなめんどくさそうな顔で口を開く。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

教官と呼ぶってことは、軍隊か何処かで千冬さんが教えていた少女だってことかな。……軍隊で教えてられてたんなら、何でここに来たんだろうか。あの子も要注意かな。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

おほう、山田先生泣きそうじゃないか、もうちょっと加減してあげて。

なんてのんきなことを考えていると。

「っ！　貴様が――」

突然一夏を睨みつけたかと思えば、彼女は一夏の頬を音高く叩いた。

「……」

「う？」

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

その言葉には、嫌悪なんてちゃちなものじゃない、憎悪とすら言えるどす黒い色が塗りたくられている様に感じた。

「っ、いきなり何しやがる！」

「ふん……」

一夏の言葉に答えることなく、その列の一番後ろへと歩いていくラウラさん。

一夏と彼女の間に何かあったのだろうか……。

「あー……ゴホンゴホン！　ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

手を叩いて無理やり事態を終結に持っていく千冬さん。まあ、ここで喧嘩するよりはマシかな。

っと、私もそんなゆっくりしてられないや。すぐに服を脱ぎ、中に着込んでいたＩＳスーツを露出させる。

ちなみに、このＩＳスーツは絶対防御が発動しない私のためにと、昨日束ちゃんが作ってくれた特注品。急所の部分には集中的に防御性能の高いＩＳ装甲を繊維化したものを使っているらしい。束ちゃん、やりすぎじゃないでしょうか。

色は梟と同じ黒で、胸部にはパッドがずれない様にきちんと加工が施されていて、その、股間のモノも目立たないようにその部分が加工されている。スーツのサイズはぴったりなのが驚きです。

「それじゃあのほほんさん、先行ってるね」

「はーい」

ほにゃほにゃと笑って手を振るのほほんさんに笑みを送りながら、

廊下を走らない程度に駆けていく。
とりあえず今分かることは、またとびっきりの厄介ごとが二つばかり増えたということだけだった。

第13話　金銀キャンペーン（後書き）

シャルとラウラの登場でございい。しかし香織はシャルの正体には気づいている様子。
次回はこの後すぐの授業風景から！

あ、題名はその場のノリです。

第１４話　死闘　模擬戦！

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」
「はい！」
「くうっ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」
「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

開始早々騒いでしまい、千冬さんにフルスロットルで叩かれたセシリアさんとふーちゃんの嘆きと怨嗟の声でした。
千冬さんの言ったとおり、今は実戦訓練の時間。金髪さんは一夏と一緒に出てきたけども、私の隣にいる子がまぁた恐ろしい目で一夏を睨んでいるんです。
確か、ラウラさんだったっけ。何かあったのかな？

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――凰（ファン）！　一之瀬！」
「は、はいっ！」

おおう、私が呼ばれた。これが幼馴染補正ですか？　違いますか、さいですか。

「むぅ、一夏のせいなのになんでアタシが……」
「ま、まあまあ。いい訓練だと思えば、ね？」
「そうだけど、さ」

ふーちゃんは納得しきれずにいたけど、やがて諦めたように息を吐き出した。
どんまいどんまい。

「それで、お相手はどなたが？　私とふーちゃんですか？」
「慌てるな一之瀬。対戦相手は――」
声に被さるように、飛行機が飛ぶときに出すあの甲高い音が聞こえてきた。
何事かと周囲を見渡せば、そこには。
「あああああーっ！　ど、どいてください～っ！」
『っ！　イヴ！』
『はい』
思わず梟を展開、防御装甲と素手で突っ込んできた落下物を受け止めると、それに押しつぶされないように後ろへ加速、そして徐々に減衰していく。
なんとか被害を出さずにそれを不時着させてみれば、それは山田先生＋ＩＳだった。何してるんだろうか、この人は。
「だ、大丈夫ですか？　山田先生」
「は、はいー……。すいません一之瀬さん、助かりました」
「わぁー、かおりんかっこいー」
遠くから聞こえてきたのは、ハイパーセンサーによって拾われたのほほんさんの声。ちょっと照れるね、これ。
ともあれ、山田先生と共に元の場所に戻った私を待っていたのは、軽く頷いていた千冬さんだった。
「ＩＳには本来救助は必要ないが……、まあいいだろう。模擬戦時などに相手のＩＳが故障し飛行が持続できなくなった場合、ああいった方法での救助は有用だ。落下の際の恐怖で空に上がれなくなる人間は、いつだっているからな」

「は、はい！」

おお、千冬さんに褒めてもらえた。なんだか嬉しいぞ。

「さて、と。では山田先生、スタンバイを」

「はい」

「凰、一之瀬。ツーマンセルで山田先生との実戦訓練だ」

「え、ええ！？　ちょ、それは幾らなんでも……？」

「安心しろ。そう言っているうちには刃一つ突き立てられん」

驚いたように聞いたふーちゃんのその言葉を、鼻で笑ってそう言い放った千冬さん。ああ、それマジなんですね。

ということはつまり、千冬さんが認める程度には山田先生は強い、と。うわぁ……。

『まあ、頑張ろう。ふーちゃん、油断はしないで』

『わかってるわよ。千冬さんがあそこまで言うからには、それ相応の実力があるはずだし』

『うん。それとイヴ、データ取りよろしくね』

『了解です』

緊張を四肢に漲らせ、軽く息を吐き出す。ぶるり、と武者震いがした。

「では、両者位置に着け。……始めいっ！」

空に上がった私たち三人が闘志を滾らせたことを感じ取った千冬さんの一言で、その空気は一変した。

ズドンッ！　という正確な射撃と共に一瞬前まで私がいたところを実弾が通り過ぎる。そこにいれば、穴が空いていた。

『ふーちゃん、交代（スイッチ）なし！　上下撹乱挟撃（ハイ・アンド・ロー）で叩く！』
『オッケー！　位置取りは龍砲でサポートするわ！』

瞬く間に音速の世界へと突入した私は、あらかじめ呼び出（コール）しておいた《夜雀（よじゃく）》で弾幕を張り、直角に上昇していく。

「逃しませんよ」
「ッ！？」

ぞくり、と背筋が怖気立った。
冷徹と呼べるほどに冷たく研ぎ澄まされたその声を、私は訓練機に乗ったときに知っている。
この学園の入学試験のとき、私の試験を担当した先生と同じ感覚、同じ声だった。
できるかぎり冷静に振り返ると、振り向き様《夜鷹（よたか）》を呼び出（コール）し、横に一閃。
案の定それは避けられたけど、それでいい。

「逃さないのは、こっちも同じよ！」

独特の音と共に、ふーちゃんの肩付近に浮遊する非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）から放たれた不可視の砲弾は、しかし幾発もの銃声によって掻き消された。

「なっ、撃ち落した！？」
「発生場所と自分との距離を計算すれば、着弾地点も斜線も弾き出せますよ」

この人は……、つくづく私達の想像の上を行っている。

認められる程度には強い、なんてものじゃない。化け物に近いレベルだ。

至極冷静に相手を見定め、適した距離に持ち込んで寸分狂わず銃弾を叩き込む。全く持って、私達はこの人を軽く見ていたようだ。

『ふーちゃん、作戦練り直し。これは無理だよ』

『みたいね。全く、化け物ってレベルじゃないわよ！』

辛うじて弾丸の雨をかわしつつも、やはり数発の被弾は避けられない。

けれど、それも《夜羽（よばね）》を展開している今の状態であれば大したダメージにはならない。

『私が出来るだけ被弾を防ぐ！　ふーちゃんはなんとか隙をみつけて一撃入れて！』

『了解！』

ふーちゃんに指示を飛ばすと、反撃とばかりに《夜雀》の引き金を引く。マガジンを交換する手間も惜しいため、弾が切れれば即座に放り投げて《夜鷹》へと持ち替える。

その合間合間に撃ち出される龍砲の砲弾を悉く回避しながら、次々に弾幕を張り、更にグレネード弾まで混ぜてくるその綿密さには、ほとほと呆れてしまう。主に現実逃避的な意味で。

「捉えましたよ」

「――こちらもですっ」

こちらへ突き進む銃弾の音に混じり、龍砲の発射音が爆ぜる。

それを既に音だけで避けた山田先生のＩＳ、ラファール・リヴァイヴへと数多の銃弾が突き刺さった。

「他の銃撃！？」

驚きながらも冷静に銃口を銃声のする方へ向け、寸分狂わず甲龍の駆動部分を狙い撃ちにかかる。

けど、それが誤りだ。

『イヴ！』

『エネルギー充填完了です』

ガチンッ、と頭の中で何かが噛み合う。

その直後、音速の壁を一瞬で超え、山田先生へと肉薄する。

――瞬時加速（イグニッション・ブースト）！？

ハイパーセンサーに飛び込んできた誰かの声を聞き流し、左腕に取り付けられた最後の装備を打ち放つ。

《啄木鳥（きつつき）》、とっつきとも呼ばれるそのパイルバンカーの一打が入った直後、《夜羽》の合間を撃ちぬかれた。

全身を襲う衝撃と同時、散々削られたＩＳのエネルギーがとうとうゼロの表示を示す。

「くぅっ……！」

「香織！　このっ！」

私が墜ちたことに焦ったのか、さっきまでの距離を一気に詰めて《双天牙月（そうてんがげつ）》を振りかざすふーちゃん。

だめだ、それは悪手すぎる！

「ふーちゃん、だめ！」

「冷静さを失うのはアウトですよ」
「え、きゃぁ！」

真っ直ぐ突っ込んできたふーちゃんへ向けて、グレネードを撃ち放つ山田先生。
……終わっちゃったか。

「そこまで！　山田先生、ご苦労だった」

地上に降り立った私達は、ＩＳを解除すると一息吐いてお互い笑いかける。
少しだけ、指が震えていた。

「強いなぁ……。二対一でもだめかぁ」
「行けそうだったんだけどなーっ！　あそこで突っ込まなければ……！」
「い、いえ、強かったですよ二人とも。冷や冷やしちゃいました」
「ちなみに、山田先生は元日本代表候補生であり、とある事情がなければ私に相対できただろう逸材だ」

えー……、そりゃ勝てませんよ。というかそんなに強かったんですね、山田先生。
あの目つきとか雰囲気とか、確かに普通とは違ってたし、スイッチのオンオフでもあるのかな。

「その、とある事情ってなんですか？」
「あがり症だ」
「……え？」
「そこまで酷いわけではないが、公式戦となればガチガチに緊張してまともな成果が出ない。代表になった者との模擬戦は全勝してい

るのに、公式戦ではボロ負けしている」

ああ、そういうことか。

あれだけの威圧感と実力でどうして候補生止まりだったのか疑問だったんだけど……。

時間があれば、もう一度お相手して欲しいなぁ……。あれだけ強いなら、きっともっと強くなれる。

「あはは……。けど、本当に二人とも強かったですよ。半分以上削られてしまいましたし」

「墜とした本人が言う台詞じゃないわね……」

「まあ、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意をもって接するように」

パンパン、と千冬さんが手を叩いて、全員の注意をそちらに向ける。

「専用機持ちは織斑、一之瀬、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。では九人ずつ、一つだけ八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれろ」

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて～」

「デュノア君の操縦技術を見たいなぁ」

「ね、ね、私もいいよね？　同じグループにいれて！」

おおー、カオスカオス。すごいことになってるなぁ。

まあそれはそうなるよね。一夏とデュノアさんのところにぞろぞろと人が集まっている。まるで甘い物に集まるアリのように。……、これは良くない例えだね。女の子をありんこ呼ばわりはよくありま

せん。

「この馬鹿どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド百周させるからな！」

そんな千冬さんの声に、二人に群がっていた人たちはぞろぞろと自分のグループへ集まっていく。

「最初からそうしろ、馬鹿どもが」
「よろしくねぇ、かおりんー」
「さっきの凄かったよ！　あんなに強かったんだぁー」
「え、えーっと、うーんとっ！」

のほほんさんが一緒でした。そして最後の人、必死に言葉をひねり出そうとしなくていいよ。

ともかく、これでグループ分けも終わり、ようやく実戦訓練へと入っていけることになった。

なんだかどっと疲れたよ……。

第１４話　死闘　模擬戦！（後書き）

ということで山田先生超強化しました。めっさ強いです。
内容がちょっと薄いですが、次回は原作では入っていなかった、午後の整備授業になるかと。
香織も一応整備できるようになってますしね。

第１５話　専用機

時間は少し流れて午後の授業。
私達専用機持ちは専用機と訓練機の整備、一般生徒は訓練機の整備実習の時間である。

「とりあえず、梟の方からやっちゃおうかな」

工具箱を片手に引っさげ、髪をポニーテールに結んでからよしっ、と気合を入れると、既に起動済みの梟をカチャカチャと弄くりだす。
内部処理のバグ確認や外部装甲の手入れ、各駆動部位の泥の掻き出しなどなどメンテナンスは始めればきりがないけど、それをきちんとやっておけば、機体はちゃんとそれに応えてくれる。
ちなみに、専用機持ち以外は順番に訓練機の整備方法を実践しているから、私たちに回ってくるのは一番最後だろう。

『えーっと、確かフラグメントマップの確認をしておいてって言ってたよね』
『情報をロードすれば、こちらでハルへ送っておきます』
『ん、わかった』

イヴの言うとおりにフラグメントマップのデータをロードすると、その情報が秘匿回線を通じてハルの元へと送られていく。
細かな作業も多いけど、これは若干本職のメンテナンスに食い込んでいたりする。だって、普段のメンテナンスは私以外には行える人はいないんだし、仕方ない。
一夏はデュノアさんに基本的な部分を教えてもらいながらこなしているけど、あれは簡易メンテナンスの基礎部分だから、機密漏れってことにはならない、はずだ。

セシリアさんとふーちゃんは慣れているのか、普段どおりと言った感じでメンテナンスを終えている。ラウラさんも同様だった。

んー、まだ時間余りそうだし、もう少しやろうかな。

装甲をはずしてシステムの補助を受け持っている基盤部分を露出させると、出力パラメータ表を表示してから細部を弄る。弄るたびに変化するパラメータを逐一チェックしつつ、最適な形へと作り変えていく。

「わっ、かおりんすごーい」

「のほほんさん、訓練機の整備実習はどうしたんですか？」

「待ち時間中だよー。それより、そんなところまでメンテナンスするのぉ？」

後ろから掛けられた声に振り向かず答えると、小さく頷く。

「ちょっと事情がありまして。っと、これでよし」

念のため、一部にエネルギーを通して反応をチェック後、装甲を元の位置に固定し直す。やっぱり、さっき戦ったときに少しだけパラメータが違う数値に変更されていたらしく、ラボで調整したときよりもほんの少しだけ性能が上がっていた。

「ふーっ、と。終わっちゃったけど……、まだ整備終わってないみたいですね」

「いやぁ、かおりんが速いのが原因だと思うよぉ？」

「そ、そうですかね？」

「そうだよぉ」

むぅ、そんなに速くやっている覚えはないんですが。

「おっとぅ、もうすぐ私の番だからいくねぇ？」
「あ、はい」

トテトテと歩き去っていくのほほんさんを見送った後、しばし思案する。困ったな、やることがなくなってしまった。
というか、整備はいつもしているからいつもの要領でやってすぐ終わったし。
じっとしているのもあれなので、機密に関わらない程度に皆の整備状況を見て回ることにした。

「一夏、どんな感じですか？」
「あれ、香織。もう終わったのか？」
「普段からやってますから。それでも速いみたいですけどね」
「さすがだなー」
「一之瀬さんは企業代表なんだっけ？」
「そうですよ。と言っても、まだ新参ですけど」

代表が最古参というか、生みの親であることは黙っておくべき。そうするべき。
けど、一夏も大分いいペースで整備を進めているようだから、あんまり心配ないかな。……あれ、何で私が同じ新参さんの面倒を見ようとか考えているんだろうか。
確かに、私も束ちゃんと一緒にいたときにそれなりにＩＳのことを叩き込まれたけどさ。

「って、デュノアさんは調整しなくてもいいの？」
「僕のはもともと細部の調整は必要ないんだ。第二世代は頑丈さが売りな面が強いから」
「なるほど」

確かに、第二世代は研究時間がたっぷりあった分完成度が高い。下手な第三世代よりも強いと言われるのもそのあたりの事情が絡んでいるんだろう。

そういうこともあって、第二世代のＩＳの耐久性には目を見張るものがある。

第三世代は精密部品の塊だって面もあるからことあるごとに簡易メンテナンスなんかは欠かせないんだけど、第二世代は既に各パーツなんかは各国で量産も可能な機体だ。メンテナンスだって簡単に済む。

デュノアさんの『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』は第二世代型ＩＳ『ラファール・リヴァイヴ』のカスタム機らしいから、そういうのもあるんだろう。

「それじゃ、他の人のところ見てきますね」
「おうー」
「それじゃあね」

会釈してからその場を離れ、ふーちゃんの元へ。

って、あんまり進んでないのかな。

「ふーちゃん、どんな調子？」
「まあ、いつもの簡易メンテと変わんないわ。細かい部分はメンテナンスチームに任せてるし」
「あ、普通の専用機持ちってそういうのいるんだっけ」
「そうよ。って、アンタはいないんだっけ？」
「うん。まあ、それでも大丈夫なようにメンテは一通り覚えたし」

これがまた結構大変なんですよ。

基盤の中の埃取りとかもやんないといけないし、ほんとに細かい作業が一杯。もう嫌になるってくらい。

でも、自分の羽の毛づくろいだと考えてたら、ちょっと楽しくなったのも事実でして。現金なものだ。

ちなみに主観だけど、『甲龍』は第三世代の中で一番メンテが楽だと思う。

『白式』は言わずもがなの特化性能だし、『ブルーティアーズ』もＢＴ兵器とかの関係でちょっと面倒そう、ラウラさんのに至ってはトライアル段階とかって話だから、結構面倒だろう。

それに比べれば、『甲龍』は燃費重視型。内部でもあまり変動が出ないようになっているんじゃないかな。多分。

それでも外装とかのメンテは欠かせないだろうけど。

「ふーん。やっぱり香織は凄いわねー。よっし、メンテ終わり！」

「訓練機はまだ空いてないみたい。他の人のトコ見て回る？」

「そうねー。どうせ暇だし」

パチンッ、と手を打って立ち上がったふーちゃんと共に、今度はセシリアさんのところへ。

セシリアさんは、真剣な顔でディスプレイと向き合いキーボードを打っていた。

「セシリアさん、どんな調子ですか？」

「あら、香織さん。鈴さんも。まあ、いつもと変わりませんわね」

「へー、アンタって細部メンテまでやるの？」

「ええ、ある程度は把握しておかないと嫌な性分なのですよ」

あはは、ふーちゃんとは大違いだね。

「って痛っ！？　な、なにするのふーちゃん！？」

「今、アタシがずぼらとか思わなかった？」

「えっ、何で分かったの」

「ほほう？」
「あっ」

しまった、言ってしまった。
いや、ふーちゃんって結構ずぼらなところとか大雑把なところとかあるし、確かＩＳも半分以上感覚で動かしてるって聞いたし……。
私も結構感覚で動かしてるけど、だんだん理性で統率できるようになってきている。これが学習の成果という奴なのかもしれない。

「うりゃ」
「あ、やめ、ひゃめへ、ふーひゃん！　いひゃい、おえんあひゃい、おえんあひゃいぃ！」
「おおー、伸びる伸びる！」

などと言う私の思案を一切無視し、ふーちゃんがおしおきだとばかりに私の頬を引き伸ばす。
当然抗議するも、思った以上に私の頬が伸びたのが楽しいのか、ふーちゃんは一向に手を離そうとしない。しかもその手つきがぜんぜん痛くないのだから困ったものだ。
なんだかんだ言って、私もふーちゃんも怒ったり怒られたりを本当にやっているわけじゃない。ただのポーズだ。じゃれあいとも言うかもしれない。
そんな私たちを見て、セシリアさんはクスクスと笑っていた。何か彼女の笑いを誘うようなことをしただろうか。

「なに笑ってるのよ？」
「うふふ、いえ、とっても仲がよろしいのですね」

困ったように笑いながらも問いかけたふーちゃんに、セシリアさんは上機嫌そうに笑って言う。

それにしても、見れば見るほど皆のメンテナンス方法は面白く違っている。

『白式』と『甲龍』は同じ戦闘方法、要するに接近戦主体のＩＳ。その簡易メンテ方法は自分の手を使って直接弄っている。それによって自分とＩＳの感覚を近づけ、コンマ何秒の世界でズレが生じないようにしているんだろう。

一夏の場合はそれしか知らないから、と言うこともありうるけども。

一方の『ブルーティアーズ』はディスプレイとキーボードを使用した、いわゆるプログラミング的な方法。これによってＢＴ兵器などの発射タイミングのラグの調整を行い、正確な射撃を行えるようにしているんだろう。

ラウラさんは、例によって分からない。調べてもらうことも出来るけど、それは必要な時でいい。今はまだ、危機じゃない。

デュノアさんは、どうなんだろう。多分プログラミング方式のメンテナンスと手動メンテナンス、両方やってるんじゃないかな。

ちなみに、私のは簡易ではなく通常のメンテナンスの域だからその辺はあんまり関わらない。話しているのはＩＳ操縦者が行う簡易メンテナンスのことだし。

なんてことを考えていたところで、千冬さんから専用機持ちにお声が掛かった。ラウラさんには話しかけられなかったな。

で、打鉄のメンテナンスは対して時間がかからなかった。だって、やれるし。わかっていなかったのは一夏だけじゃないかな。

「あれ、あなたは……」
「……こんにちは」

放課後、もう少し念入りなメンテナンスをしておこうかと格納庫に行った所で、特徴的な水色の髪を見つけた。
彼女、更識簪（さらしきかんざし）さんは小さく会釈しながら挨拶すると、またすぐにディスプレイへ視線を戻した。
更識簪、日本代表候補生で四組のクラス代表でもある。不可解なのは、そんな位置にいる彼女に専用機が与えられていないこと。
トライアルシリーズであっても、代表候補生には専用機が与えられているはずだ。だって、貴重なデータ源なんだから。でも、本当に何故なんだろうか。

「何してるんですか？　簪さん」
「……別に。私用」

突き放すような言葉。その途中で見えた画面には、ＩＳのプログラミングが隙間なく浮かんでいた。
これって、もしかして。
ふと思い立ち、彼女の前にあるＩＳを見る。それは、ＩＳと言うにはところどころが欠けている代物だった。

「もしかして、これ作ってるんですか！？」
「……まあ」
「凄い……！　これ、どれくらいで出来るんですか？」
「まだ、ぜんぜん。データが足らなすぎるから」

そう言った彼女の顔が、悲痛に歪む。
何かあったのかと尋ねれば、眼鏡の奥の瞳が潤み、憎憎しげに、

吐き出すように喋りだす。その内容は、驚くべき、と言うには少しばかり予想の出来た話だった。

なんでも、一夏が出てきたせいで白式の開発に人員が取られてしまい、今ではこの『打鉄弐式』は見向きもされなくなってしまったんだとか。

いや、それっておかしくないかな。

「えっ？」

「だって、『白式』は束ちゃ、篠ノ之博士が凍結されていたものを引き取って仕上げたって言ってましたよ？　人員なんて余ってるほどだと思ってたのに」

「……それ、どういうこと」

「いえ、だから。『打鉄弐式』の開発に人員が回せないなんて、ありえないってことです。幾ら世界初の男性ＩＳ操縦者が出ても、それで量産できそうな機体の開発を中止してそっちに全て回すなんて、おかしいんですよ。まして企業なら尚更です」

企業であれば、一定の業績を示さなければならない。だが、『白式』は量産できるわけでもなければあの単一技能（ワンオフ・アビリティー）を再現できるわけでもないのだから、データ収集に多くても半分裂けばいいぐらいのはずだ。それで足りなければ政府を使えばいい。

しかし、『打鉄弐式』は別だ。アレは量産機としての可能性だってあるのだから、容易に切るのはおかしい。

「じゃあ、なんで……」

「その辺は分かりませんけど……。あ、そうだ――っ！」

「なに？　きゃぅ！？」

思いついた瞬間、彼女の肩をがっしりと掴む。後から考えると、これは相当まずいことをしていたんじゃないかな。

残念ながらそのときの私はそれに気づくこともなく、真っ直ぐ彼女の目を見据えるとにやりと笑いながら言い放っていた。

「――私も一緒に作らせてもらえませんか、純日本製最強のＩＳを！」

思えば、私はこの頃からＩＳバカとして極まってきていたのかもしれなかった、と言う話である。

第１５話　専用機（後書き）

はい、簪ちゃんと邂逅。
えー、なぜこれが更新されているかってーと、活動報告のほう見ていただけると分かりますが。
なのはが書けない……っ！
なので、しばらくなのはは低速更新となります。代わりにそれ以外の三作品、これとネギま、ネタ帳の更新が活発になるかと。まあ、わたしは結構な周期でこう言うのがクルので、「またか」といった感じでスルーしていただけるとありがたいです。

追伸。
感想いただけるとありがたいです。
モチベーション上がります。ガチで。

第１６話　ＢＯ☆Ｕ☆ＳＯ☆Ｕが止まらない（前書き）

７／３０　話数が間違っていたので修正しました。

第１６話　ＢＯ☆Ｕ☆ＳＯ☆Ｕが止まらない

「バランスはこのぐらいでいいかな？」
「うん……、あ、ちょっとまって。そのままで……、よし」

簪ちゃんとの邂逅から数日が過ぎ、私たちは今日も格納庫内でＩＳと向き合っていた。
最初は遠慮していたんだけど、しばらくしたらお互い敬語とかは一切なしになっていた。というか、千冬さんに怒られるまで熱中していたなんて久しぶりだったから、その頃には疲労であまり頭が回らなかったというか。
ともあれ、こうして私は簪ちゃんとＩＳを作っているわけで御座います。中々進まないけどね。

「やっぱり、実際の稼動データが圧倒的に足らない……。打鉄の稼動データはもらえないし……」
「……よし。簪ちゃん、ちょっと待っててくれる？」
「え？　うん……」

データが足りないなら持って来ればいいじゃないの精神で、ピ、ポ、パ、っと。

『おっはーハロハロー！　皆のアイドル束ちゃんだよー！』
「今日も元気ですね、束ちゃん。それで、あの、お願いがあるんですけど……」
『うんうん、わかってるよわかってるよーっ！　ＩＳの稼動データが欲しいんだよね？　で、も♪　それにはまずそっちの子と話さないとね？』
「……え、話せるんですか？」

『なんだいその「あなたコミュニケーション能力ゼロなのに何言ってるの？」みたいなニュアンスはー！？　束ちゃんは天才なんだぞ、そのぐらいできるやい！』

いや、だって事実そうじゃないですか。

興味がない人間はとことん冷遇して、挙句無視する。それがこの人の常套手段であって。やはり少し不安だ。

「じゃあ、絶対冷たくしちゃダメですよ？　ちゃんと話してくださいね？」

『オッケーオッケー、任せといてー！』

「はぁ……。簪ちゃん、うちのバカ社長が簪ちゃんと話したいって」

「え、私に……？」

携帯を簪ちゃんに渡して、溜め息。大丈夫、だよね？

『ハロハロー、皆のアイドル束ちゃんだよ！　君は更識簪ちゃんだね？』

「は、はい……。あの、束って……」

『そう！　私こそがＩＳを作り上げた天才なのです！　ところでところで、簪ちゃんは香織ちゃんのことをどう思ってるのかな？』

「え、どうって……。優しい、人……？」

『ほうほう、なるほどなるほど。まあいいや、それじゃあかんちゃん』

「か、かんちゃん……？」

『簪ちゃんだからかんちゃん！　君は今日からバインドカンパニーの社員です！』

「え、えぇ！？　ま、まって、まってください、どういう」

『ＩＳの稼動データの一つや二つ、この束さんが持っていないとでも思っているのかなー？　それに、話してみて分かったよ！　君は

束さんの下に来るべき、そうするべき！』

……今束ちゃんが無茶な勧誘をしていそうだ。

というか、普段は大人しめな簪ちゃんがあんなに焦るなんて珍しいなぁ。

「で、でも、私は日本の代表候補生で……」

『んー、ああ！　白式一つ完成させられない無能なんて頼ってたらいつまで経っても作れないよ？　大体、白式だって束さんが作ったんだから、あそこの連中は手が空いてるはずなのにー。あんな連中なんかより私のトコにきなよ！　ね！』

「ちょっと待ってください……。今香織ちゃんに代わりますから……」

お、とうとう簪ちゃんが相手するのを放棄したぞ。

簪ちゃんから電話を受け取り、耳元へ。

「それで、どうなったんですか？」

『バインドカンパニーにお誘いしたら、ちょっと待ってって言われちった。てへっ』

「てへっ、じゃないですよ。まあ、入ってくれれば嬉しいですけど……、そもそもどういう事業を念頭においてるんですか？　この前言ったとき聞きませんでしたけど」

そうだそうだ、忘れていた。そもそもバインドカンパニーって何する会社なんだろうか。私も社員ではあるけど、その辺分からない。

『ん、宇宙開発だよ？　宇宙はいいよー、わからないことが沢山あるんだから！　今のところは月にコロニー作ってるから、出来たら一度見に行こうねー！』

「……はいぃ!?　ちょ、えぇっ!?　え、えええっと、あれ、これどういう反応すればいいの!?」

『あはは、香織ちゃんってばおもしろいね。まあそれはともかくとして、かんちゃんにはＩＳとか宇宙で使ったときに便利な道具とか、色んなアドバイザーも兼ねて欲しいのだよ！　日本なんてちっちゃい所に留まってるのはつまらないでしょ？』

うわぁ、これはなんとも……。

でも、なんだか聞いていたらわくわくしてきてしまう。

だって宇宙だよ？　まだ前人未踏の世界に手を出そうって言うんだ、わくわくして当たり前だ。

「ということなんだけど。簪ちゃん、どうかな？　お給料は出ると思うけど」

『もちろん、バシバシ出るよ！　人件費とか考えなくていいぐらいだしね！』

うん、まあハルもいるしね。

「……私の、お姉ちゃん。知ってる？」

「簪ちゃんのお姉ちゃん？　……ごめん、出てこないや」

「更識楯無って言う、二年生。生徒会長で、織斑先生を除けば学園最強って呼ばれてる」

「そんな凄い人がお姉ちゃんなんだ……」

「でも、皆私をお姉ちゃんのおまけとしか見てくれない……。私を私としてみてくれた人は、香織ちゃんと束さんだけ……」

どんよりと曇った目を伏せ、少し涙声になりながらそう呟く。

聞けば、更識家は裏の世界で動く暗部に対抗するために作られた、『対暗部用暗部』なのだという。そのせいで昔から彼女は姉のスペ

アとして考えられ、常に姉よりも劣る者として見られてきた。
ＩＳがこの世に生まれてからは、それが加速した。自由国籍をもち、自分で第三世代ＩＳを作りあげ、ロシアの国家代表にまでなった姉と常に比べられ、いつしか彼女のことを本当の意味で見てくれる人はいなくなったのだという。

「……そっか。辛かったんだね、簪ちゃん」
「お姉ちゃんが悪くないのは、分かってる……。だけど、だけどこんなの……！」
『なら、尚更うちにおいでよ！　ＩＳを作りたいなら、束さんと香織ちゃんが手を貸しましょー！　どう？』
「……お話、お受けします」

その返事を受けて束ちゃんが喜ぶのを聞きながら、僕はきゅっと簪ちゃんを抱きしめる。

「私は、きっとお姉ちゃんの前に胸を張って立てるようになる……」
「応援するよ。手助けする。一緒に頑張ろう？」

それからしばらくして、私と簪ちゃんは頬を紅くしてお互いを見つめていた。
……うん、冷静に考えれば普通に抱き合ってましたね。いや、なんとなく気恥ずかしくなっちゃって。

「……とりあえず、今日は切り上げようか？」
「……うん」

微妙な、雰囲気。

香織ちゃんと別れて、自室へ入る。幸い、ルームメイトはまだ戻ってきてはいないようだった。

良かったと思う。泣きはらしたこの赤い目は、あまり人には見られたくなかったから。

ベッドに身を投げると、ぼふりと音がした。ベッドの空気が吐き出される音だった。

「……なんでだろう」

本当に何故だろう。出会って間もないあの少女と一緒にいると、酷く落ち着いた。

焦りと不安でぐらついて、自分でもどうしようもないとささくれ立っていた心が、穏やかに静まっていくのが自分で分かる。

おかしな話だとは思うけど、今日は自分で考えているよりも気分がいいようだ。普段なら考えることも億劫だと、直ぐに机に向かって一心不乱にペンを動かしているのに。

普通なら言ってはいけないような暗部のことに、私自身の事情。それを全部話して、それでもなんでもないように笑っていた。笑ってくれた。

「……惚れてる？」

私が彼女に惚れている、というのも……、あながち間違いではないかもしれない。だって、私のことを認めてくれた人だから。

そう言った意味では、束博士にも感謝しないといけない。私がもっと高みへ上がるための階段を作ってくれる人になりそうだから。

私は、私の力でお姉ちゃんを超えてみせる。そのために国にこだわっていたら、きっと超えられない。

誰かに遠慮なんてするもんか。

それに、束博士の会社は宇宙を目指すと言っていた。香織ちゃんの話では、既につきにコロニーを建設中とか。

……正直、心が躍る。

私はアニメが好きだ。勧善懲悪系のヒーロー系は特に。そして、次に好きなのが、ロボットアニメ。……よく「女なのに変だ」といわれたけど、これは見るのをやめる気はしない。だって、かっこいいから。

ロボットアニメは大体宇宙が関係してくる。だから、うん。ワクワクしている。

ＩＳが発表されたときにもドキドキした。やっと人類が宇宙に行くんだって、幼心にワクワクしたけど、結局世間の偉い人たちは自分達の利益しか頭にないようで、私のドキドキワクワクも、いつしか消えかかっていた。

全部がうまくいっていなかったその矢先にこの話が来て、その心に火が付いたのも正直な所だ。

だって、宇宙だ。未知の領域だ。そこにあの人が、世界を変えた束博士が先陣切って入っていく、その傍に居られるのだ。こんなにワクワクする話はない。

「……楽しみだな」

クスリと、思わず笑みが零れる。

ああ、本当に。楽しみだ。

いつしか、私は束博士のもたらす様々な規格外を思い浮かべては恍惚の笑みを浮かべ、結局ルームメイトに心配され、あまつさえ若

干痛い子という認定を頂いてしまった。
うん、自重しよう。
それと、本音にも謝らなきゃ。今まで避けててごめんなさいって。

『それでそれで、あの子との関係はどうなの香織ちゃん！？』
「別に、普通のお友達ですけど？」

簪ちゃんと別れて部屋に入るやいなや鳴り出した携帯に出ると、案の定束ちゃんだった。
というか貴女は私のお母さんですか？　そんな私の関係に首突っ込まんでも……。あ、ちなみに今のほほんさんはどこかに出かけています。
ぼすっとベッドに腰掛け、楽な姿勢へ。

「それより、あの月面コロニーってマジですか？」
『もちろん！　本社はあっちに移転予定だから！』
「というか、どうやって月に……」
『ＩＳがどうやって武装を出し入れしているか、知っているでしょ？』

……えっと、確かＩＳは武装を量子変換して出し入れしてるんだよね。
……え？

「ま、まさか……」
『そうっ！　私篠ノ之束は、世界初っ！　量子変換転送装置を開発したのです！　しかも生物転送可能！』
「え、えぇーっ！？」

うわ、やったよこの人。とうとうやり遂げたよ……。というか早くない？　どうして会う度に、もしくは連絡取るたびに色んな発明が増えていくのかな！？

「……うん、そろそろ束ちゃんのぶっ飛び具合に慣れてきたと思ったけどまだまだだったよ」
『あはははは、束ちゃんの小宇宙（コスモ）が叫ぶのさ、世界を変えろとぅ！』
「いや、これ以上引っ掻き回すと色々まずいので自重してください。……それで、簪ちゃんのは真面目なんですね？」
『当たり前だよ。それに、聞いただけでこの束さんに直感させるほどの努力の才を秘めているのは久しぶりなのだぜ！』

……まあ、とりあえずどうしようもない事態にはなって来たのかな？
はは、目の前が霞むや。

『カオリ、ハルからメールです』
『え？』
『『お母様の暴走が止まりません。止められません、ごめんなさい』だそうです』

……とりあえず、当面の目標は束ちゃんの暴走にブレーキをかけることかな。

『あれあれ、おーい、どったのー？』

……大丈夫かなぁ。本当に。

第１６話　ＢＯ☆Ｕ☆ＳＯ☆Ｕが止まらない（後書き）

なんか知らんけど一日で書けた。何故だろう。
香織ちゃんは頑張って束さんを止めることを目標にしたようです。
そして軽々と宇宙進出フラグ成立。簪魔改造計画開始。さて、どうなることやら。

あ、それとできれば感想お願いします。
一度感想が途絶えると、なんともいえない気分になるものですね……。

第17話　鈴さんが告白したようです。

今日は土曜日、午後は自由時間となっている。
午前中は理論学習だったから、体を動かすのには丁度いい。
という事で、とりあえず手始めに人気のないグラウンドを三週ほど走ることにした。
グラウンドの円周は一周五キロ、三週だから十五キロだ。フルマラソンの三分の一ぐらいかな。
これでも鍛えてますから、このぐらいなら少しの息切れぐらいで走りきれる。最近はもっと体力もついてきたし、もう少しタイムを縮められるかな。
それが終わったら今度はアリーナへ。第三アリーナでふーちゃん達が一夏の特訓してるって言ってたし。ちなみに、一五キロは一時間二〇分で走りきった。もっとタイム縮まったぜ、いえい。
アリーナでは、一夏が射撃武器を手に弾を的へ撃ち込んでいた。
あれ、白式って刀一本じゃなかったっけ？

『どうやら、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？のライフルを借りているようですね』
『あ、そういうことか』

ＩＳの武装は基本的に他人への譲渡は行えないが、使用許諾（アンロック）することで登録している者全員が使えるようになる。
あのライフルもデュノアさんが貸し出しているんだろう。
しかし、一夏って射撃兵装向いてないよね。自分で撃つよりひたすら模擬戦して射撃兵装の癖を掴んだ方が早くないかな。

「ふーちゃん」
「あ、香織。マラソン終わったのね」

「一五キロくらいならこんなものだよ。最近は体力も増えてきたし」
「じゃ、何かあったら守ってよね？」
「あはは、その時によるね」

さすがにそこに居ないのに守れってのは無理だしね。まあ、代表戦みたいな失敗はしないように頑張るけどさ。

「それで、今は一夏の特訓だっけ？」
「そ。私は感覚的なことしか教えられないけどね。簪さんの方はいいの？」
「大体目処は立ったからね。あ、そうだ。明日って空いてる？」

そうだそうだ、これを言っておかないと。
前に本社に出たときに「幼馴染のこともお話しないとね！」って言ってたのを思い出した。今日連絡しておこう。

「明日？　特にすることないけど、何？　デート？」
「いやいや、そうじゃなくて。束ちゃんがふーちゃんと話したいんだって。まあコミュニケーション能力皆無なんだけど」
「ん、わかったわ。つまりデートね！」
「あの、ふーちゃん？　そういう発言するとふーちゃんはそう言った人に見られるし噂されるよ？」
「別にいいわよ、香織となら」

あっけらかんと言わんでください、かっこいいなぁもう。
……って、え？　えっと、それ僕となら付き合っていいってこと？　え？

「ぷっ、あっはははは！　どうしたのよ香織ってば、ぽかーんとしちゃって！　本気に決まってるじゃない！」

「え、あ、そうだよね、本気に……、え？」

――へえええええええ！？

「へ、あれ、え？」

「ちょ、ちょっと香織？！　顔真っ赤じゃない、体調悪いならそう言いなさいよ！」

「ふぇ、あ？」

「ああほら、こんなに真っ赤になって。どうしたのよ、風邪？」

「あら、どうしたのですか？　香織さん」

「ああ、セシリア。香織、ちょっと風邪引いてるみたいなの。付き添いで出るから、一夏に言っといて」

「わかりましたわ。香織さん、お大事に」

「え、あふ、ふひゅん……」

あ、なんかもう、頭回んなくなって……。

「ちょ、香織！？　香織、香織ぃー！」

場所は変わって鈴の部屋。というかアタシの部屋ね。

意識を失った上に熱まで出ている様子の香織だけど、さすがに医務室に担ぎ込むと性別ばれちゃうかもしれないから、自室で看病することにした。

でも、風邪って様子じゃないのよね。咳も鼻水もないみたいだし。

「んっ、んんー……」
「ん、どうしたの香織」
「んー……」

……寝言かしら。無意識？

ともかく服はそのままでベッドに寝かせておく。服といってもＩＳスーツだけど。服は量子変換してしまってあるらしい。便利ねー、ＩＳって。

それにしても、こうやって寝てる姿はほんとに女の子よね。というか普段の立ち振る舞いを意識して女の子にしてるせいで、男ってことを時々忘れるわ。

「っと、お水汲まないと」

さすがにこれだけってのはまずいし、濡れた手ぬぐいを額に当てるぐらいはしといたほうがいいわよね。

下手に手を出すより、このぐらいの方がいいだろうし。アタシだって専門じゃないもの。

シャワールームで使っているプラスチック製の桶に水を張り、そこにタオルを浸してからぎゅっと絞る。これでも力はあるほうだから、これで十分かな。

その後タオルを額に乗せられるように折り畳むと、香織のおでこへ。これでよし、と。

「……なんだか、こうしてるとアタシがお姉ちゃんになったみたいよねー」

香織が、弟か。えへへ、なんかいいかも。

ほら、毎朝部屋に起こしに行って、なんだかんだ言いながら素直に従う香織とか？

あ、もしくは寝ぼけた癖でベッドに引きずり込まれちゃって、起きるまで動けなくてそのまま二人で……。

それとも、アタシが起こしてもらう側？　香織がアタシのことをお姉ちゃんって呼んで、漫画でよくある光景を再現したり……。

えへ、えへへ……。

やだもう、アタシ変態みたいじゃない？　いや、でも本当にそれはアリじゃないの？　どうなの凰鈴音、これはあり？

『ダメダメ、ダメよ鈴！　それ以上足を踏み入れちゃいけないわ！　男女交際は清く正しく、こんなところで道を踏み外したら、お義姉さんが泣いちゃうわよ！』

おや、頭の片隅から天使鈴ちゃんが。

よく絵画とかでありそうな天使が着ている、あの白い布のような服と、天使のワッカをつけている。

『はん、何言ってるのよ！　世の中は弱肉強食、強い者が勝つのよ！　欲しければ奪う、そうでしょうが！』

今度は悪魔鈴ちゃん？　やだ、こういうコスプレいいかも。可愛いじゃない。

頭からはにょいんとふよふよの悪魔の角のようなものが伸びているけど、よく見ればそれはカチューシャのようだった。

『ダメだったら！　いい？　鈴は香織とどんな関係になりたいの？』

「そ、それは、こ、ここ、恋人とか、ふーふ、とか、えへへ……」

『だったら！　まずはゆっくり、焦らず慎重にいくべきよ！』

『はぁ！？　あんたバッカじゃないの！？　香織はこんなに可愛い

のよ！？　他の狼に食われる前に、鈴が食べてあげるべきでしょうが！』

「やん、うふふ、食べるだなんてそんなぁ♪」

脳内で激しくぶつかり合う白と黒のアタシ。

あ、でも、うん。今なら……。

『しまった、そうこうしている間に何を血迷ったのか鈴が口付けを！？』

『よし、いけ、ぶちゅっとやってしまえー！　ついでに既成事実を！』

『だ、だめだったら！　そ、そんなぇっち、なことは許さないんだからー！』

「い、いただきます……」

『わーわー、鈴ー！　ダメだったら、こらーっ！』

ふよん、と唇に柔らかな感触。

（うわ、やわらかぃ……）

蕩けそうなほどの幸福感が体を駆け上る。というか顔を赤らめた香織がエロいんだけど。何この生き物、食べていい？　いい？

『あ、ああっ、ふ、不潔っ！　不純異性交遊はんたーいっ！』

『いよしっ、よくやったわ凰鈴音！　そのまま頂いちゃいなさいっ！　って、ちょっとちょっと、何添い寝してるのよ！？』

「ふぁ、暖かい……」

えへへ、香織暖かい……。

おやふみぃ……。

「はっ！？」

がばっ！　と起きようとして隣にいる誰かに阻まれた。

「って、ふーちゃん？　なんで腕組んで寝てるの、というか僕は何でここにいるの……？」

『カオリが顔を真っ赤にして倒れた後、鈴が香織を背負って自分の部屋まで運びました。そして今に至ります』

凄くがっつり端折られたイヴの説明を何とか理解して、それから部屋に備え付けられている時計を見る。

七時半。食堂がしまるまで、残り三〇分である。

そして、とっても空腹感が押し寄せている僕の胃袋は、明日の朝までもちそうにありません。

「仕方ない、起こそう。ふーちゃん、起きて」

「んん、香織ぃ……？」

「そうだよ、ほら起きて」

「やぁだぁー、んぅ」

ひしっ。

普段のふーちゃんからは考えられないような猫撫で声と共に、僕

の首元へと抱きついた。
え、ええ、なにこれ、何がどうなってるの？
「ちょ、ちょっとふーちゃん！？　寝ぼけてる！？」
「んー？　あらひの弟なんらから、あらひの言うこほをきひなひゃい！」
「あー、寝ぼけてるや。ふーちゃん、僕だよ。香織だよ！　弟って何のこと！？」
「……ふえ、え？　かおり？」

あ、やっとぱっちり目が覚めたようだ。ん、なんだかぎりぎり見える耳が真っ赤？

「あ、や、こ、これは、その、違うのっ！　既成事実とか子作りしようとかそんなこことじゃにゃくひぇ！？」
「き、既成、事実？」
「ちが、違うのーっ！　うわぁぁぁぁん！」

なんか凄いこと言ってると思ったら泣き出したーっ！？
ううっ、どうしようどうするべき！？　と、とりあえず背中をぽんぽんと叩いて、うん、あやす感じで……。

「大丈夫、大丈夫だよー……」

僕は保母さんじゃないんだけどなぁ……。
というか、なんで急に泣き出したの？　うーん、ここからじゃ顔が見えないなぁ。一回離れたけど、もう一回抱きしめちゃったし。
それから、十数分後。

「ううっ、ごめん香織……。ふがいないお姉ちゃんで……」

「いや、まだ寝ぼけてる？」
「う、ごめん。それより香織、熱は？」
「熱？　いや、ないけど……」
「そう、よかったーっ！　あんた、顔真っ赤にして倒れたからどうしたのかと思ったのよ？」
「それで看病してくれてたの？　ありがとう、ふーちゃん」
「別にいいわよ、そ、それに、キ、キキ、キスも、したし」

……うん、今なんて言ったこの子？　キス？　ＫＩＳＳ？
魚のアレじゃなくて、口付け？　接吻？　マウストゥマウス？

「は、はえぇ！？」
「何変な声出してるのよ？　あ、そ、それともまさか、い、嫌、だったの……？」
「ええっと、あの、嫌じゃ、ない、けど……。その、突然だったし……、大体、倒れたのもふーちゃんが僕と付き合うのが本気とか言ってからかうから……」
「か、からかってなんかないっ！　あ、アタシは香織のことが、その、好き……、だから……」

顔を真っ赤にしてそう反論するふーちゃん。
えっと、好き？　今度はキスの反対で？　え、僕のことを、ふーちゃんが？
……まて、一旦落ち着こう。ＫＯＯＬになるんだ一之瀬香織。

「へ、返事はまだでいい、から。うん。アタシも、その、まだ落ち着いて、ちゃんと告白したわけじゃないし……」

な、なれないよ！　クールになんてなれないよ！
ああもう、なんか真っ赤になったふーちゃんは普段の快活さが嘘

みたいに女の子らしいというかしおらしいというか、物凄い気恥ずかしいんですが!?

「うー……、ああもう！　とりあえずこれで話終わり！　ご飯食べましょ！」

「え、ええーっ!?」

「いいじゃない、アタシは香織分充填したし♪」

「え、なに香織分って」

「カオリニウムとも言うわ。葵義姉さんは一度の充填で一ヶ月は生き延びられるって言ってたけど、アタシは二週間が限度ね……」

いや、そんなことを聞きたいのではなく。

そもそもその摩訶不思議な成分そのものについてご教授願いたいんですが。

「アタシは香織と普段から一緒にいるからこれで済んでるけど、葵義姉さん、家に帰ったときってすぐに抱きついてなかった？」

「……あ、言われてみれば」

「カオリニウムが切れる前に、そうやって補充してたのよ。アタシもこうやってるとありがたさが分かるわぁー」

「って、いやいやそうじゃなくてさ」

「いっけない、もう食堂閉まっちゃう!?　ええい仕方ない！　香織、自分の部屋から財布持ってきなさい！　購買行くわよ！　夜食を確保しなきゃ！」

あ、もう食堂諦めたなこの子。

でも、もう七時五〇分だし、今から食堂に行ってもご飯は食べられないかな。

「ん、わかった。じゃあロビーでね」

「オッケー、急いでね！」

ふーちゃんと別れると、歩きながら量子変換されていた制服を元に戻す。あ、このやり方便利かも。

部屋に戻っても人気はない。のほほんさんはお風呂か食事のどちらかだろう。毎晩一〇時には寝ているし。

自分の机から財布を取り出すと、ロビーへ。そこには、既にふーちゃんが待っていた。さすがもともと自室にいただけあって早い。

「ふーちゃんごめん、待った？」

「そんな時間でもないでしょうに。何食べる？」

「んー、お肉？」

「太るわよ」

「あんまり太らない体質なんだよねぇ。増えても筋肉だし」

その言葉に、ふーちゃんはなにやら目を見開いている。ん、何かおかしなことを……、あれ？　これ中学時代にあったな。

あの時は確か後ろから胸を鷲掴みされたりお腹に抱きつかれたりしたわけですが。

「この、なんてうらやましい体質なのよーっ！」

「ひゃぁっ！？　な、なにするのふーちゃん！？」

「ぬぁーっ！　アタシなんて、幾ら食べても身長伸びないのにー！　あんたは苦労知らずでその体系維持してるわけっ！？」

「そ、そんなこと言われても、ひゃんっ！」

ちょ、ふーちゃん、お腹はダメだって！？

「あ、ちょ、あは、あははは！　ふ、ふーひゃ、やめっ、あははははっ！」

「このこのこのこのこのーっ！　全国の体系維持に悩む女子学生の恨みよーッ！　ったぁっ！？」

もうダメかと思われた矢先、後ろからスパァン！　と聞きなれた音が。

し、死ぬかと思った……。

「何をしている。全く、ロビーでいちゃつくな馬鹿者が」

「い、いちゃつくだなんてそんな、えへへ……」

「何を嬉しがっている……。まさかお前、マゾか？」

「ち、違いますっ！？　って、織斑先生は何でここに……？」

「一之瀬が倒れたと聞いたが……、ふむ。どうやら間違いは起こっていないようだな」

……あの、千冬さん。間違いってーのはつまり、ナニをあれしてってことですよね？

「まあそういうことだが、何もないようだからまあいい。一之瀬、体は大丈夫か？」

「あ、はい。ふーちゃんから告白されて、パニくって倒れただけです」

うーん、これってヘタレなのかな。それに、ふーちゃんのこと前はちゃんと真っ直ぐ見れたのに、今は目が見れないし……。

なんて考えていると、千冬さんはぜはぁー、と溜め息をつく。幸せ逃げますよ？

「まあ、青春しているようで何よりだが、間違っても間違いだけは起こしてくれるなよ。で、今から購買か？」

「な、何故分かったんですか？」

「財布持って出て行こうとしていれば大体分かる。購買は九時までだから、そう焦らなくてもいいだろうが……、丁度いい。ちょっとお使いを頼むか」

おや珍しい、千冬さんがお使いを頼むなんて。

となりのふーちゃんもＵＦＯを見たかのような表情をして、叩かれた。

「ひたぃ……」

「大丈夫？　ふーちゃん」

「ううー、撫でて撫でてー……」

「ああ、はいはい。痛かったねー」

「で、お使いだがな。スルメと枝豆のパックを買ってきてくれ。釣りはやろう」

なんて言いながら、千冬さんはどこからか取り出した財布から千円札を一枚抜き取って僕に渡した。

ふーちゃんの頭を撫でながらそれを受け取ると、片手で器用に二つ折りにしてポケットへ押し込んだ。というか、こう言うのはいいんだろうか。

「なに、気にするな。ただし、あまり遅くまで騒いでいるんじゃないぞ」

「あ、はい！　ありがとうございます！」

「さて、では私は部屋に戻る。スルメと枝豆、頼んだぞ」

「はい、おやすみなさい織斑先生」

会釈よりも少しだけ深く礼をすると、千冬さんは軽く笑って部屋へと戻っていった。

うわ、かっこいいな……。僕もあんな風に爽やかに出来ればいい

けど、まあ無理だろうなぁ。

「って、ふーちゃん。いつまでこうしてるの？　はやく購買に行こう？」

「そうだったわね。うぅ、もったいない……」

「もう、あれくらいなら言ってくれればいつでもしてあげるのに……」

「ほんとに！？」

うわぁ、凄い食いつき方だ。そんなに頭撫でられるの好きなのかな？

……それとも、僕だから、かな。そうだったら嬉しいけど、やはり何か気恥ずかしくもある。

「ほんと。ほら、早く行こ――」

「何してるのよ香織、早く早く！」

「――うって言った矢先にこれか。わかってるよふーちゃん！」

気恥ずかしさを隠すように、笑みを作って先に行っているふーちゃんへそう返す。

よし、頑張れ『私』。もう一息だぞ。

……でも、本当にどうしようか。ふーちゃんとのこと。

第17話　鈴さんが告白したようです。（後書き）

盛大なネタバレとともにお送りしました、今回。
やけに更新が早いって？　あはは、お昼過ぎから書き出して、気づいたら六ページ目に突入してたよ！

いくら場面転換が二回あったからといって、これは……。
あ、でも更新は不定期ですので、こういった感じに早くなることもあれば極端に遅くなることもあります。ご了承ください。

鈴に告白されてしまった香織は、その悩みとともに鈴、簪の両名を連れて自宅へと戻った。
そこに待っていたのは……？
次回、乞うご期待！

作者の書く鈴ちゃんは男勝りで姉後肌、だけど気づけば乙女チック。
そんな彼女を目指しています。ほら、流れでキスして嫌われたときのこと考えて泣いちゃう辺りとか。
そんな鈴ちゃんが可愛いと思った人は感想をどうぞ。

……あれ、のほほんさんは？
夜のパート、はさむ？

閑話　パジャマパーティーをしましょう

「ただいまー」
「あ、おかえりぃかおりん。倒れたって聞いたけど、大丈夫？」
夜食（半分くらいお菓子類）を買って部屋に戻ると、既にのほほんさんが戻ってきていた。
相変わらずあの黄色いきぐるみのようなパジャマだった。袖だぼだぼですね。

「はい、ふーちゃんのところで休ませて貰ってました。心配掛けてすみません……」
「んーん、いいんだよぉ。学生のうちは心配掛けるのが仕事だって、お母さんが言ってたしぃ」

私はよくお姉ちゃんに「あんたはもっと甘えなさい！」と言われてたなぁ。でもお姉ちゃんに悪いし、あんまり甘えるのって得意じゃないんだよね……。
と、のほほんさんが私の持つ袋に興味を示したようで、そちらに視線を向けていた。

「あ、これですか。休んでいたうちに食堂が閉まってしまったので、ふーちゃんと一緒に夜食を買ってきたんです。その合間に今日はパジャマパーティーでもしないかって」
「え、でも織斑先生に怒られるんじゃないぃ？」
「枝豆とスルメのお使いを頼まれましたので、少しくらいなら見逃してくれるそうですよ？」
「わぁ、織斑先生太っ腹だねぇ」

ちなみに、枝豆とスルメはきちんと先生に渡してきた。お釣りもちゃんと返そうとしたんだけど、それはやると言って聞かなかったので、致し方なくふーちゃんと二人で分けたのです。

さて、どうやらのほほんさんも乗り気なようなので、ちゃちゃっとパーティーの準備を。

お菓子類はある程度陳列して、飲み物はもう冷えてるけど一応冷蔵庫へＩＮ。

「それじゃあのほほんさん、私少し汗を流してしまいますね。ふーちゃん達が来たら入れてあげてください」

「わかったよぉー」

のほーんと笑ったのほほんさんに笑みで返し、パジャマを持って脱衣室へ。もちろん偽パイとブラは寝るときも使います。じゃないとばれるからね！　ちなみにこのブラ、背中の部分が蒸れたり擦れて肌を痛めたりしないようになっている。便利だ。すっごい便利。

シャワールームに入ると、お湯で汗を流した後に髪を丁寧に洗う。これは雑にやると色々ダメなんだよね。というか、やったらお姉ちゃんにばれてお風呂に引きずり込まれたことがある。ほんと、お姉ちゃんって自分のことには無頓着だけど、私のことはやたらと構うんだから。

「っと、あんまり浴びててもあれかな」

気づくと、一〇分以上シャワーを浴びていた。

慌ててお湯を止めると、脱衣室で体を拭いてから偽パイ&ブラジャー装着。パンツは見られないし、トランクスでオッケー。どうせ朝になったらＩＳスーツに着替えるし。

その上にパジャマを着たら完成かな。

「のほほんさん、あがりましたよー」
「あ、香織。お邪魔してるわよ」
「お邪魔してます、一之瀬さん！」

部屋へ戻ると、既にパジャマ姿のふーちゃんともう一人の方がいた。
というか、髪下ろしたふーちゃんは新鮮だなぁ。
えっと、それでこっちの方がルームメイトの人かな。

「あ、いらっしゃい二人とも。えっと、ふーちゃん、こちらの方がルームメイトの方？」
「鈴のルームメイトの谷津坂楓（やつさかかえで）です！　どうぞよろしく！」
「あ、はい、よろしくお願いしますね。一之瀬香織です」
「ほほう、お胸様もそこそこお有りのごようしでゅっ！？」

ズゴンッ！　と恐ろしい音を立てて谷津坂さんが地面に叩き落される。え、っと、大丈夫？　死んでないよね？

「楓？　アタシ言ったよね？　アタシの幼馴染にセクハラすんなって？」
「り、りりり鈴さんっ、待った、ごめん、嘘、嘘だって！　冗談だよ冗談！　そんな、マジに怒んなくたって！？」
「あーら、別に怒ってるわけじゃないのよ？　ただ丁度いいサンドバックがあるなぁと目を輝かせてみたりしてるだけだから」
「た、たしけて香織ちゃん！？」
「あ、のほほんさんこれ美味しいですよ」
「あ、食べたーい」
「はいどうぞ。あーん」
「あーん、んんー、おいひいねぇ」
「いちゃいちゃしてるぅー！？　ちょ、助け、ぎゃあぁぁぁぁ！！」

なんだか後ろで鈍い音が聞こえるけど、気にしちゃいけないよね。
別に今のふーちゃんが怖すぎて目を向けられないとかじゃないし、体で向こう側を見えないようにしてのほほんさんの視界からあの惨劇をカバーしようとしてるわけじゃない。断じてない。
数分後、そこには人であった何かと、血糊を頬に飛び散らせて壮絶な笑みを浮かべているふーちゃんがいた。

「ふーちゃん、終わった？」
「ええ、終わったわよ。アタシの幼馴染にセクハラかまそうとした愚かなクラスメートへの天誅はね……」
「楓さん、安らかにお眠りください……」
「し、死んでない、しぃ……」

あ、生きてた。
まあそんな感じでパジャマパーティースタートです。
ちなみに、楓さんの容姿は黒髪ロングの眼鏡さん。眼鏡はレンズのフレームがないタイプだそうだ。ちなみにふーちゃんの前の二組代表でもあったらしい。
さて、この辺で皆のパジャマ姿をお披露目していこう。
まず私から。私は水玉模様のパジャマで、汗とかでも透けない素材で作られているから、ひん剥かれない限りは男だとバレる心配はない。
のほほんさんはさっきも言った通り、昔の大人気ゲーム&それを原作としたアニメのマスコットキャラクターのようなパジャマ。きぐるみって言った方が早いかもしれない。ちなみに袖はダボダボ。
ふーちゃんは暗めの水色のTシャツに黄土色の短パン。一言で言えばラフな格好だ。
で、楓さんは色鮮やかな紫色の甚平。なんで、紫……？
ちなみに全員髪は結わいてません。痛んじゃうからね。

「よし、それじゃあパジャマパーティー始めましょうか！」
「私とふーちゃんは、先にご飯だね」
「そうね。楓、のほほんさん、先にお菓子つまんでていいわよ？」
「おー、ありがたやー」
「ありがたやありがたやぁー」

ちなみに、のほほんさんはもう楓さんとお互いに自己紹介したらしいから割愛です。
さて、それじゃあ、と。先に飲み物出しておこうかな。

「はいどうぞ、ウーロン茶」
「ありがと、香織」
「ありがとねぇ、かおりん」
「あ、ありがとう香織ちゃん」

全員に行き渡った所で食事スタート。
購買のお弁当って、意外と美味しいんだよね。ちなみに、私の今日のお弁当はハンバーグ弁当です。ふーちゃんは鮭弁とサラダ。私は夜でもがっつり食べます。

「いいなぁ香織ってば」
「ん、ナニが？」
「だって、食べても太らないんでしょ？」
「まあ、運動もしてるしね」

さすがにきちんと運動して、三色栄養バランス考えて食べてるのに太ったら嫌だし。
ん、ハンバーグ美味しいなぁ。今度はレシピ変えて作ってみようかな。

「あ」
「ん？」
「ほい、っと」

ふーちゃんのほっぺたにご飯粒がついていたのでとりあえず取ったけど、捨てるのはな。
食べちゃえ。えいっ。

「あ、ああ、あえ、ええっ！？」
「ん、どったのふーちゃん？」
「あ、あんた、それ、あたしのほっぺの……！？」
「うん。……うん？」

うん、そうだよね。これふーちゃんのほっぺたについてたお米様だよね？
で、それを私が食べた、と。
……よし、とりあえず布巾で口を拭って、これでよし。

「んぐぬんんんーっ！！　んーっ！」
「ちょ、ちょっと香織！？　ちょっとー！？」

ベッドに顔を押し付けて絶叫しておいた。
いや、何してるのさ私！？　さっきあんなことがあったばかりだというのにまたこんな……！？

「若い者は元気ですなぁー」
「ほんとに、羨ましい限りで」
「こらそこ二人ぃ！　茶化さないっ！」

あ、ふーちゃんが怒っている。
ふむ、しかしこれは私の失態でもあるし……。
そうだ、こういうときには。

「ふーちゃん」
「え？」
「ん」
「……え？」
「ん」

現在、わざとほっぺたに米粒をつけて待機中。お互い取ればそれでお相子だよね！

「……えっと、あむっ」

わたしの頬についていた米粒を手で取ると、ふーちゃんはそれを口へ入れる。
うん、これでお相子だ。おあい、こ？　いや、いやいやいや、待て待て私、まずお相子って時点でおかしいぞ？　どうしたんだ今日の私！？　なんか調子狂いっぱなしなんですけど！？

「あ、かおりんずるーい、私もやるー！　とってー」
「なぬ、ならば私もだ！　鈴、とって！」

そんな私たちの様子を見て、のほほんさんと楓さんも私たちの弁当から米粒を掠め取ると、わざとらしく頬につけた。いや、いやいや。

「……どうすれば」
「とりあえず、とってあげれば？」

うん、まあ放置って訳には行かないし、とってそのまま捨てるのはお米を作ってくださった農家の方々にあれなので、食べますけども。

「あむっ」
「ひょいっと」
「おおー、なんだか楽しいよぉ」
「あ、これ快感かも……」

これ、意外と恥ずかしいんですが？　というかのほほんさん、もう一回やろうとしないの。私のご飯減っていくから。
とりあえずその場はそれで落ち着き、まあ私の心中が大荒れの中食事を済ませると、本格的にパーティー開始である。

「さて、と。それで三人とも、今気になる人はいる？」
「突然何よ、藪から棒に」
「いやー、やっぱり狙いは織斑君かなーと思って。一番遠いんは私な訳だしさ？」
「別に、一夏は友達だけどそういう感じじゃないわよ。どっちかっていうと昔馴染みの男友達ね」

あ、一夏とふーちゃんも幼馴染だったんだよね、確か。
不思議な縁もあったものだ。

「じゃあ、香織ちゃんは？」
「え、私ですか？　そうですね……、まあ一夏はないとして、今気になっている人は、特にはいないですね」
「その割には、鈴のご飯粒取ったときにやけに反応してなかったー？」

「え、ええっと、あれはその、ですね！」
「はいはい、わかったわかった。ここじゃ日常茶飯事だし、別に変な目で見たりはしないよ。お幸せにねー？」

ああ、こんにゃろ勘違いしてるぅー！
でも好きというか気になる人としてはそうだし……、あーもう、どうすればいいのさ！
しかもふーちゃんが顔真っ赤にしてるし！？　ほら、そういう反応するからそういう系の人だって思われるんだぞ！？　あ、でも私とだったら勘違いされてもいいって言ってたっけ……。

「あ、顔真っ赤だー」
「で、のほほんさんはどう？」
「うーん、おりむーはカッコいいけど朴念仁だし、かおりんの方が好きー」
「その好きはどっちの好き？」
「友達の方かなー？　今は」

今は！？　じゃあもしかするとそれな感じになりかねないんですか！？

「よかったわね香織、愛されてるじゃない」
「あれ、ふーちゃん意外と余裕そうだー……」
「もうカオリニウム補給してるし、心に余裕が出来てるわ」
「だからそのカオリニウムって何！？」
「香織と接することで補給できる成分よ。私の心の安定に欠かせない」

うん、全く分からん。
というかこれってパジャマパーティーなのか？　ただのガールズ

トークな気がしてならないんですけど。

「なるほど、じゃあさっき抱き付いて寝てたときに補給したのだね！」

「見られてた！？」

「うんうん、私は理解ある若者だから！　存分におやりなさい！」

「ちくしょう、味方がいませんっ！？」

「こら香織、ちくしょうなんて使っちゃダメでしょ？」

「諸悪の根源が何を言うか！？」

味方が、味方がいない！　もうどうすればいいの！？

いや、楽しいけど！　楽しいけどどうするのこれ！？

で、結局これは日付が変わるまで続きましたとさ。

本当に、女子のパワーって凄い。

今日の教訓：不用意な発言、行動は身を滅ぼす。

閑話　パジャマパーティーをしましょう（後書き）

はい、数時間も経たずに更に投稿。異例の投稿ペースである。
これからはこういった閑話もたまに書けたら投下していくので、その時点でヒロインポジションにある人と香織とのいちゃいちゃ、または日常が見たいという場合は要望を出してくれれば、書ければ書かせていただきます。

香織に「ぎゃおぉぉぉん!?」て言わせようか迷った。
男の娘繋がりだけど、作者はそっちの本編はやってません。アイマス難しす。

あ、楓さんはオリキャラです。作者は二巻までしか原作を所持していません。その上三巻は一度読んだだけです。それ以上は、読んでいないのです。
出てないよね、鈴のルームメイト？　あれ、出てたっけ？　出てたらこっちはパラレルということで一つ。

第18話　Bind Company Second !!

夜は明けて日曜日、僕は一人で寮のロビーにいた。

「んー、まだ一〇分前だし、もうちょっとかかるかな」

朝八時五〇分からなぜこんなところにいるかというと、今日は本社までお出かけだから。

ちなみに束ちゃんにはさっき連絡したので問題なし。

それにしても、朝のロビーって静かだなぁ……。ちょっと落ち着くかも。

「香織、おはよ」

「あ、ふーちゃん。おはよう」

「更識さんは？」

「まだみたいだね」

やってきたふーちゃんと一緒にロビーの椅子に腰掛け、一息つく。

「香織、はい」

「え？　あ、ありがと」

ふーちゃんがぐいっと差し出してきたのは、ちょっと不恰好なサンドイッチだった。

「時間がなくてそれぐらいしか作れなかったけど、朝食だしこれで我慢してね。向こうで何か食べましょ」

「ありがとう、ふーちゃん。コーヒー淹れてくるね」

「あ、私ガムシロップだけでいいわ」

「わかった」

ロビーは休憩所も兼ねていて、簡単な食事くらいならここで取れるようになっている。食堂以外で寮の中ではここと屋上が憩いの場として人気が高いのだ。

備え付けのコーヒーメーカーでコーヒーを淹れると、コップに注いでお盆に乗せ、ガムシロップを二つ、ミルクを一つ持って戻る。

「はい、コーヒーとガムシロ」

「さんきゅ」

コーヒーメーカー以外にコップに入れるタイプの自販機や普通の缶やペットボトルも売ってはいるけど、そっちはやはりコーヒーメーカーと比べて味が落ちる。寮監の先生はもっぱらこっちらしい。

二人で軽いブレックファストを楽しんでいると、廊下の向こうからゆっくりとこちらへ歩いてくる人影が見えた。

「あ、おはよう簪ちゃん」

「おはよう……。えっと、凰さん、初めまして。おはようございます……」

「ん、初めましてでおはよう更識さん。私のことは鈴でいいわよ」

「えっと、じゃあ私のことも、簪で、いいです……」

おずおずと言った様子で声を出す簪ちゃん。やっぱり、ふーちゃんとは初対面だから喋りづらいのかな。

「りょーかい。何か食べてきた？」

「いいえ、何も……？」

「それじゃ、はい。私の作ったサンドイッチ。形は不恰好だけど、味は保証するわ」

「あ、ありがとう……」
「それ食べたら行こうか。飲み物いる？」
「ううん、大丈夫……。ありがと……」
「いいえ、どう致しまして」

うわぁ、なんかサンドイッチ両手で食べてる簪ちゃんって、小動物みたいで可愛い……。
なんというか、こう、抱きしめたくなるような、撫で回したくなるような、そんな衝動に駆られる。
もきゅもきゅとサンドイッチを頬張る簪ちゃんをふーちゃんと二人でゆったりと眺めた後、食べ終わった簪ちゃんと共に学園を出る。

「ところでさ。篠ノ之博士とは私話してないんだけど、大丈夫？」
「大丈夫。というか大丈夫にさせるから。束ちゃんって普通にコミュニケーション能力皆無だから」
「うん……、それは話してて私も思った……。でも、なんだか楽しい人」
「それなら、まあ大丈夫そうね。変なことされてないわよね？」
「いや、それはさすがにないよ」

道中こんな感じで話しながら我が家に着き、とりあえず迎えを待っていようと家に上がると。

「あ、お帰り香織ー」
「お帰り香織ちゃーん！　待ってたよー！」

バタン。

「……おかしいな、ウサ耳が二人いたように見えたんだけど」
「香織、戦わなきゃ、現実と」

「……ふぁいと」

ううう、二人が今は恨めしい……。

よし、気を取り直してもう一度、扉を開ける。

「あ、お帰り香織ー」

「お帰り香織ちゃーん！　待ってたよー！」

「リテイクのつもりでしょうけど慌てて座りなおしたせいで衣服乱れまくってますよ」

うん、やっぱりお姉ちゃんと束ちゃんでした。

お姉ちゃんがなんで朝一に出てきた僕より早くうちにいるのかとか、どうして束ちゃんがうちに上がりこんでるのかとか、まあ色々聞きたいことはあるけども。

「まずこのでっかい筒状の物体は何！？」

「量子変換転送装置、俗に言うワープマシンだね！」

「だと思ったよこんちくしょうっ！　束ちゃん、少し自重して！　ハルからこの前お母さんが止められない助けて的なメールが来たんだからね！？」

「えー、ハルがそんなこと言ってたの？　んもう、言ってくれれば構ったのにぃっ」

「いや、止まれよ。で、これで本社まで行くんですか？」

「そうだよん。ちなみにあーちゃんもうちの社員の仲間入りだから！」

おおう、突っ込みどころが。

あーちゃんっていうのは、多分うちのお姉ちゃんのことだな。で、お姉ちゃんもバインドカンパニー所属、と。まあこれはいいや、束ちゃんの暴走は今に始まったことじゃない。

それで、とりあえず簪ちゃんも確定してて、じゃあ……。

「とりあえず、ふーちゃんとお話してください。自分でお話したいって言ったんですから、ちゃんと話して下さいね？」

「はーい！　で、君がふーちゃん？」

「鳳鈴音、鈴でいいです」

「じゃ、りんちゃんだー！　平仮名なのがポイント！」

「は、はぁ……」

「それで、りんちゃんは中国の代表候補生なんだよね？　まあ束さんにはそんなことどーでもいいんだけど、中国でこのままくすぶってるのと、香織ちゃんと一緒に宇宙を目指すの、どっちがいい？」

「後者よ、即決で。ただしうちの母親の身の安全と生活レベルは保証して」

「オッケーオッケー、その辺は中国に適当な技術投げてやれば勝手に食いつくだろうから、全然無問題だね！　よーし、引き抜き成功だね、さっすが私ぃ！」

めまぐるしい。

えーっと、あれ、中国代表候補生が候補生やめてうちの企業に就職したよ？　ヘッドハンティングってやつかな？

でも、その場合ってりんちゃんのＩＳは没収されちゃうんじゃ？

「その辺はねー、うちのＩＳコア一個とこれの今までのデータ全部やるから寄越せって言っとけばいいよ。国動かしてる連中は大体目先のことしか頭にないからねー？　うへへ、可愛い女の子が一気に三人増えたよ！」

「その笑い方親父臭いんで止めてください。で、本社行くんですよね」

「そうだねー。一応皆の体とか調べてこれからの専用ＩＳ製作の参考にしておきたいし。かんちゃんは、自分でＩＳ組みたいんだった

よね？　ならうちの機材とデータ全部自由に使っていいよ！　私は社員には優しい社長さんなのです！」
「丸投げとも言いますけどね」

凄いなぁ、普通の企業だったらこんなことしないよねぇ。
なんて思ってると、突然束ちゃんが手元のハンドヘルドコンピュータへ向けてカタカタと何かを打ち込んでいる。

「……何してるの？」
「んー？　ＩＳ学園のコンピュータにこっそり忍び込んで、三人分のデータをちょこっと拝借しているのですー。また写真撮影とかだるいでしょ？　だから、ここでちゃちゃっとデータ造って本社に送って、ハルに社員証頼んでおこうと思ってさー」
「ああ、なるほど。千冬さんにばれないように、は無理ですね。今度あった時はご愁傷様です」
「酷い！？　少しは上司を助けようという気概はないの！？」
「あははー、残念ながら」

うん、束ちゃんはこういう扱いでも問題ないみたい。
というか問題ないね。絶対。本人もあんまり気にしてないし。
そんなこんなで粒子変換転送装置、これめんどくさいな……。ワープ装置へと乗り込んだ私達。

「で、ほほいのほいっと。気づいたら向こうについてるし、事故で融合しちゃったりとかもないから気楽にしててねー」
「最後の最後で怖いこと言うわねこの人！？」
「でも……、たぶん大丈夫……」
「簪、その根拠はなに……？」
「……勘？」
「当てにならないっ！？」

「よーし、いくだべー♪　あ、ポチッとな」

そんなグダグダな雰囲気と共に私たちの意識が一瞬消し飛び、そして気づいたときには……。

そこは本社でした。え、何これ早い。

「とーちゃーくっ！　たっだいまーハル！」

『お帰りなさい、お母様、香織、イヴお姉様。そして更識簪様、凰鈴音様、一之瀬葵様、ようこそ、バインドカンパニーへ』

「……人工知能？」

『はい。私はＨＡＬ－３０００。お気軽にハルとお呼び下さい』

「たっちんが言ってたのってこれかー。よろしくね、ハル！」

「にひひー、凄いでしょうあーちゃん！」

「凄い凄い、アニメみたい！　さっすがたっちんだ！」

「わっはっはっは、もっと褒めたまへー！」

……なんで束ちゃんとお姉ちゃんが意気投合しているんだ。

ああ、あれか。シスコンとブラコンで被ったのか。そういうことにしておこう。良くないけどそういうことにしておこう。なんか束ちゃんに関しては突っ込んだら負けな気がしてきた。

そんな私を尻目に、簪ちゃんは周囲の機材や雰囲気に目を輝かせて大興奮、ふーちゃんも表には出さないけど結構テンション上がってるみたい。

「束社長、貴女凄い……。ロマン、分かってる」

「おおっ！？　もしかしてかんちゃんはそういうの大好きかな！？」

「うん……。特に内部に銀形の色を使っている辺り、近未来のこだわり」

「そうなんだよ！　香織ちゃんは突っ込んでくれなくてねー。ほら見て見て、中央のこういうでっかいディスプレイってイカしてない

!?」
「……ひしっ」
「ひしっ！」

あ、簪ちゃんと束ちゃんが抱き合った。特撮とかロボット好きだって言ってたからね、簪ちゃん。通じ合ったんだろうねぇ。
いや、というか私の周囲にはふーちゃんしか救いがないんだろうか。っとぅ!?

「お、お姉ちゃん!?　なんで突然抱きついてるの!?」
「カオリニウムが不足してるのよぉー……。学校じゃ学園違うから中々会えないし、寮でも織斑先生が目を光らせてるしぃー！　んはぁー、やっぱり生はいいわねぇー」
「なんか親父臭いっ!?　もう、お姉ちゃんってば……。補給したら離れてよ?」
「んー、りょーかーい」

……やばい、疲れてきた。

『ふぁいと』
『うん、がんばる』

イヴも応援してくれてるから、頑張ろう。
というか誰もイヴに関しては突っ込まないんだね。

「ふあぁ……」
「ふぃー……」

束社長と一緒に、食堂の机にべたりと突っ伏す。ひんやりとして気持ちいい。

やっぱり、ここに来て正解だった。こんなにいい環境で仕事が出来るなんて、まるで天国だ。

なんというか、この会社全体が秘密基地染みていてとてもいい。大好き。

話しの途中でワープ装置のことや月への移設計画のことも聞いたけど、やっぱりこの人は凄い。私の冷め切っていた好奇心と夢を、あっという間に溶かしてくれた。

「あ、そう言えば社長……？」
「ん、なーに？」
「さっきハルが言っていたイヴお姉様って、誰ですか？」
「私が梟につけた、香織ちゃんのサポートＡＩ。香織ちゃんってほら、男の娘じゃん？　色々フォロー必要なんだよね。おもに電子方面で」

……ん？　男、の子？
待て、今そう言った？　香織ちゃん、が？

「……香織ちゃんは男の子？」
「あれ、言ってなかったっけ。そう、香織ちゃんは男の子だよ。そしてそれを隠して学園に通ってるの。今国の連中に見つかると色々とあれだからねぇー」

……まあ、確かにその通りだ。今でこそ香織ちゃんは社長の後ろ盾があるとはいえ、この会社も悪く言えばダミー、影響力はあまりない。とすれば、誘拐されモルモットにされてもおかしくはないわけだ。

「ここのメンバーは全員知ってることだけど、きちんと秘密は守ってね？　学校でこの事知ってるのは、ここのメンバーとちーちゃんだけだから。あ、ちーちゃんは千冬ちゃんのことね？」

「はい……。秘密は守る。私たちだけの秘密」

「おお、いい響きだね……」

そうしたら、あれかな。

惚れちゃっても、いいかな。

女同士だから最後の一線をためらっていたけど、今なら、いいかな？

「頑張れ少女、私は皆の恋を応援しているぞー！」

「……うん」

……頑張ろう。うん。

「そんなかんちゃんにプレゼントだよん！」

「え？」

すっと顔を上げると、そこには満面の笑みの社長がいた。

「着いてきて！」

ぐいっと私の手を引き、社長に連れられやってきたそこには、一台のＩＳのようなものが。

けれど武装も何もなく、二つの球体とＩＳの外装がそこにあるだけ。

「これは……？」

「ＩＳだけどＩＳじゃない、かんちゃん専用移動式ラボラトリー！　これをかんちゃんに差し上げまーす！」

「えっと……？」

「これはね、既存のＩＳラボのテクを全て詰め込んだ、移動式のＩＳラボなのだよ！　これ一つあればいつでもどこでもＩＳの調整が行えます！　しかも改造から新規建造まで何でもござれ！　ちなみに束さんも一つ持ってるよん」

それは、とても凄い代物ではないのだろうか。

だってピットが必要なくなるし、重い工具を持ち運ぶ必要も無い。

それに、本音に楽をさせてあげられる。

「……ありがとう？」

「うんうん、気にしなさるなー！　名前はまだないから、かんちゃんが付けてあげてね！　はい、乗って乗ってー！」

「あ、うん」

ＩＳに乗るのと同じ感覚で、けれど装着されるのは上半身のみ、下半身へは座り込めるように椅子状になった装甲が伸びている。

背を預ける感覚で乗り込むと、なんというか、マッサージチェアのような座り心地だった。ＡＩＣも聞いているらしく、宙に浮く。

「……名前。じゃあ……『モーティブ』。お前は、モーティブ」

『モーティブ、新規名称を確認。所有者『更識簪』と特定。初期化（パーソナライズ）及び最適化（フィッティング）を行います。この作業には数十秒かかる可能性があります』

その音声が流れた直後、目の前にコンプリートの表示。
指の腹でそれを押すと、小さなビープ音と共に全身の軽くなる感覚。

「うん、これでこの子は正真正銘君専用だよ！　よかったね、モーティブ！」
「……よろしく、モーティブ」

応える代わり、キーボードがそれぞれに光る。
モーティブは、『本音』という意味。もう一度あの子と話し、仲直りして、一緒にまたラボに立つ。
そして願わくば、共にここで働きたい。そんな誓いと願いを込めた名前だった。

第18話　Ｂｉｎｄ　Ｃｏｍｐａｎｙ　Ｓｅｃｏｎｄ　！！（後書き）

原作三巻で束さんが使っていた『吾輩は猫である』の同タイプのラボを簪がゲット。次回はのほほんさんと簪の回か、それともラウラ回か……。

そしてロマンの三文字で束さん、葵、簪の三名が意気投合。鈴空気。

本人はパジャマパーティーで一回気持ちリセットして、できるだけ普通に接しようと頑張ってます。

あ、これ2時間くらいで書きました。

めっちゃ筆が載る。ほとんど詰まらずに。

第１９話　鈴の音と眼帯さん、知り合う

時は巡って月曜の放課後。
アタシは第三アリーナへとやってきていた。
あ、バインド・カンパニー所属の凰鈴音です。……うん、なんか中国代表候補生って言うよりもこっちの方がカッコいい！　ほら、所属と候補生の違いよね。所属って言ってた方がカッコいいじゃない？
コホン、それはともかく。

「珍しいわね、アンタ一人とかち合うなんて」
「鈴さんこそ、香織さん達とご一緒ではありませんの？」
「香織達はグラウンドで自主トレしてから来るってさ。アタシはそれまで学年別トーナメントに向けて自主トレよ」
「そうなのですか。では、ご一緒にどうですか？」
「別にいいけど、当てないでよね？」
「そうそう下手ではありませんことよ？」

こんな感じで、かち合ったセシリアと歓談。
ちなみに、甲龍はとくに何も弄られていない。まだ束さんが中国に渡す情報とコアを用意していないから、来週までには用意して交渉終わらせる、だそうだ。……ほんと滅茶苦茶だけど、身内に甘いなぁ……。まあ助かるからいいけど。

「んじゃまあ」
「始めましょう――」

直後、お互いのハイパーセンサーに反応。
咄嗟に退避すると、その場に超音速の砲弾が飛来した。

何事かと砲弾の来た方向を見てみれば、そこには合同実習の時に姿を見た『シュヴァルツェア・レーゲン』がたたずんでいた。

「どういうつもり、転校生？　いきなり攻撃なんて、ちょっと無粋じゃない？」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ……！」

ちらりと視線を横にやれば、そこにあるセシリアの顔はひどく強張っていた。

なんかやられたのかしらね、こいつに。まあいいわ、喧嘩売るなら買うのがアタシの主義だし。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見たときのほうがまだ強そうではあったな」

「言葉でいびるのは三流の証よ。文句があるなら」

《双天牙月（そうてんがげつ）》を展開、両手に構えて臨戦態勢をとる。

「腕っ節で示しなさい」

「くっ、くははは！　いいだろう。まずは貴様からだ、凰鈴音！」

「いいわね、嫌いじゃないわよアンタ。さぁて――」

エネルギーは問題なし、戦闘は、出来る。

相手はガチで遣り合える相手だ。それにドイツの新型にも興味がある。手合わせするには絶好の機会。

テンションも上がってきたし、やらない手はないわよねぇ！

「――始めましょうかァ！」

アタシの雄叫びと同時に《龍砲》を発射するも、あっさりと回避

される。全く、さすがにそう奇襲は通じないか。
なら正攻法で行くまでよ。
《龍砲》を軽く狙いをつけて乱射しつつ、相手の懐へと飛び込むべく疾走する。
向こうもズドンズドンとこちら目掛けてレールガンを撃ち出しているものの、お互い全く当たらない。まあ、あちらも制度は期待していないだろう。レールガンが向こうの主力兵装ではないのだし。

「うるァッ！」
「ふん、遅いぞ」
「まだまだァ！」

ラウラの隙を突いてガシガシと殴りに行くものの、やはり相手は軍人。こういったときの対処もお手の物だ。
と、突然こちらへ向けてラウラが右手を突き出す。ガクンッ、とこちらの動きが停止した。あー、やば。嵌ったか。

「こちらの停止結界のことを分かっていて突っ込んでくるとは、やはり獣か」
「チィ、やっぱしこれせこいわねー。アタシのＩＳだと相性悪すぎってやつよね」
「ふん。墜ちろッ！」

肩から射出された二本のワイヤーブレードとレールガンの砲弾が、アタシ目掛けて一直線に降り注ぐ。
けどまあ、このぐらいでへこたれてたらダメよね。うん、ぜんぜんダメよ、アタシらしくないじゃない？

「猪突猛進大変結構――、止めれるもんなら止めてみろッ！」
「な、バカなっ！？　ＡＩＣを振りきるだとっ！？」

「アタシの愛を舐めんなっ！」

超恥ずかしいこと口走ってるけどまあいいや！

これの理屈は単純、ＡＩＣで止めきれる動きのベクトルを上回るベクトルで動いただけ。まあ無理させすぎてエネルギーはすっからかんだし、装甲もボロボロだけど。やっぱり負荷掛かりまくってるわね……。もうこの手はつかえそうにないか。

「ふざけた事をっ！　だが、もう一度は出来まい！　大人しく墜ちろ！」

「危ない、鈴さん！」

再度こちらへ向かってくるラウラへ向けて、こちらも真っ直ぐ突っ込んでいく。

喧嘩を買ったんなら、全力で叩きのめすのが礼儀ってもんでしょ？　それで負けるならアタシが弱いってだけ。もっと強くなればいいだけの話よ。

「セシリア、手ェ出さないでよ！？　これはアタシの、喧嘩なんだからあああ！」

こちらを翻弄しようと撃ちだされたワイヤーブレードを、二対の《双天牙月》で叩き落し、レールガンの弾をひたすら避けながら《龍砲》を撃ち込んでいく。

既に戦闘は高速に達し、更にスピードを上げていた。

やっば、楽しっ。癖になりそうね……！

そんなことを思った直後、ワイヤーブレードが今度は六対に増え、更に両手の装甲からプラズマ刃が展開される。うわ、まだ増えるのね。いいじゃない、燃えてきたわよ。

「停止結界を使うまでもない、今の貴様などこれで十分！」
「あっははは、いいじゃない、燃えてきたわ！　やっぱ、超楽しい！　ねえラウラ、そう思わない！？」
「くっ、窮地に追い込まれて笑うなど、異常者か貴様は！？」
「そうかもね！？　でもしょうがないじゃない、楽しいんだからさぁ！」

やばい、これほんとにやばい。楽しくてしょうがない。
なんというか、香織とだらだらしているのも楽しいけど、これは別の楽しさだ。血が滾るというかなんというか、こういうガチの戦いってあんまりなかったし、色んな手を使ってくる相手とあんまりやったことなかったからね。それに、なんか殺気みたいなのが伝わってくるのが楽しいっていうか、もうとにかく楽しいのよ！
うーん、アタシも若干おかしいのかもしれない。けど、香織を守るために強くなれるって考えたら、もっと楽しくなった。ほら、相手は本物の軍人だし、こんな機会なんてそうそうないじゃない？

「り、鈴さん……？」
「邪魔したら怒るわよ、セシリア！　エネルギー切れまで戦いたいんだから、さぁッ！」

ワイヤーブレードのうちの二本を《双天牙月》で斬り落とすと、ついでに装甲を一部叩き割る。これで武器は減った、まだいける。
けど、さすがにシールドエネルギーが二〇〇を切るとやや不安だ。そろそろフィナーレにするか。

「そっちもシールドエネルギーもあんまりないでしょ、そろそろ終わりにしない？」
「終わるのは、貴様だけだッ！」
「やっぱそう来るかッ！」

再度打ち合い、音高く金属音を響かせる。
びりびりと手に走る振動も無視して更に振るうと、その曲線状に位置していたワイヤーを断ち切る。
螺旋状に繰り出していく刃を悉く相殺しながら、ラウラもこちらの衝撃砲を吹き飛ばした。さすが。

「ふふふ、あはははは！　やっぱり最高、喧嘩なんて最近なかったから尚更よ！」
「……ああ、この高揚感、なんとなく貴様の言う『最高』に通じるものがあるのか？　まあ、いい。少なくとも貴様を打ち倒すのは私だ！」
「それはこっちの、セリフよッ！」
「おおおおおおおおおおっ！！」
「はあああああああああっ！！」

強者との戦いは身を高め、自分の力量を更に上げてくれる。それはすなわち、香織を守るのに必要なだけの力を得るのに役立ってくれる。
ラウラはまさしく強者であり、戦うには事足りる、満ち満ちた敵意を持っていた。だからこそ、アタシもその喧嘩を買ったのだ。
まあ、ここまでテンションが上がってしまったのは予想外だったけども。

「……私の勝ちだ、凰鈴音」
「ええ、アタシの負けね。ラウラ・ボーデヴィッヒ」
「……お前は、ただ乗っているだけの下らない人間ではない。先の無礼は謝ろう」
「別にいいわよ、ラウラ。アタシのことは鈴でいいわ」

活動限界に達して量子変換されたＩＳが待機状態に戻ると、アタシとラウラはそんなことを口にした。
がくがくと膝が震えて立っていられず、思わずその場にへたり込む。

「これが、思いが伝わるということか？」
「さあね。でも、アタシは誰かを守るために甲龍と一緒にいる。アンタはなんのためにそれと一緒にいるの？」
「……教官の名誉を守り、汚点を注ぐ。それだけだ」
「織斑先生のことね。汚点ってどういうこと？」
「……織斑一夏。アイツさえいなければ、教官はモンド・グロッソ二連覇を達成できていた！　私は、教官の汚点となったアイツを排除するために、ここに来た」

ふーん……。なるほどね。
しかし一夏の奴、面白いように厄介ごとを引き込んでくるのね。
さすがというかなんというか。

「まあ、そういうことをするなら、まずは守る人の立場に立ってみることね。やってから後悔した方が重いってこともあるから」
「その格好で言っても説得力がないな？　……ほら」
「……ありがと。アンタってやっぱり根はいい奴なのね」
「か、からかうなっ！？」

なにこの子、楽しい。というか可愛い？
香織とはまた違った可愛さというか、並べて愛でたいわ。
ともかく、差し伸べられた手を取ると、ぐっと引き上げられた。
さすが、鍛えてるだけあるわね。

「体は大丈夫か？」

「問題ないわ。このぐらい。なに、心配してくれてるの？」
「そ、そういうわけではない！」
「り、鈴さん、無事ですの？」
「別になんともないわよ。ちょっと力抜けてるけどね」
「……」
「なんだ、何か文句でもあるのか、イギリス代表候補生？」

おお、なんだか綺麗に変わったわねぇ。でも、もうちょっと愛想良くてもいいんじゃないかしら。
それにしても香織達遅いわねぇ。何してるのかしら。

「ふーちゃーん！」
「香織、遅いわよー！」
「ごめーん！　ちょっと手間取ったー！」
「はいはい、今そっち行くわ！　ほらラウラ、行きましょ。セシリアも」
「あ、おい！」
「ちょ、ちょっと鈴さん！？」

ピットから手を振ってきた香織達に応え、アタシは二人の手を引いて走り出す。一度走り出してしまえば足の力はすんなりと入り、二人をぐいっと引っ張って走る。
うん、ラウラって意外といい奴みたいだ。

「鈴、なぜそいつと一緒にいる!?」
「は?」

ラウラさんとセシリアさんを連れたふーちゃんがこっちに着くと、箒さんがいの一番にそう叫ぶ。
いや、突然なんですか?

「なぜラウラ・ボーデヴィッヒと一緒にいるのかと聞いている!?」
「はぁ? 友達のいない転校生に手を差し伸べるのが悪いことだとでも?」
「いや、それはフォローになってないからね。あ、ラウラさん。私は一之瀬香織、よろしくね」
「……鈴、こいつがお前の守りたい人か?」
「え、なんでわかったの?」
「……なんというか、線のようなものが見えた、気がした。赤い奴だ」

んっ!? それは、つまり、赤い糸で結ばれてるんだね(きゃぴきゃぴ)みたいなことですか!?
いやいや、それはない。というかラウラさんって確か軍人さんだったよね。……あれ、意外と軍人さんってロマンチストな人多い気がする。
というかふーちゃん、真っ赤になってくねくねしないでっ!?

「おほん、それはともかく。箒、それに何か文句でもあるの?」
「大有りだ! そいつは一夏を襲ったんだぞ!?」
「それで目の敵にしてるってこと? それと、アタシとラウラが仲良くしてるのと、どういう関係があるのよ?」
「そ、それは……」

あー、ふーちゃん怒ってるね。ラウラさんのこと悪く言われたからかな。

「うん、箒さん。今のは箒さんが悪いですよ？　価値観や見方なんて人それぞれなんですから、自分の見方を人に押し付けるのは良くありません」

「し、しかしだな……！」

「そうだよ一之瀬さん、あの子は一夏を！」

「それを言うなら、箒さんは一夏のことを何度も殴ってますよね？　時には竹刀や木刀で襲い掛かったときもありませんでした？」

ちなみに、この情報は女子ネットワークからの情報です。噂好きの女子は何でもかんでもネタにして楽しんでしまうものなのです。女って怖いね。いや、この年代の子だけかもしれないけどさ。

しかし箒さんや、幾らなんでも木刀はまずいですよ。人殺せるからね、木刀って。

「ううっ……」

「前科で言うなら箒さんのほうがよっぽど酷いですよ？　幾ら照れ隠しや恥ずかしさからだとはいえ、一歩間違えれば一夏が死んでいたこともあったでしょうに。今後は慎んでくださいね」

「……わ、わかった。すまん」

「謝るのは私じゃなくてラウラさんです」

「……ラウラ、ボーデヴィッヒ。その……、すまない」

綺麗に頭を下げながら謝罪した箒さんに、ラウラさんは呆気に取られるようにしてぽかんと口を開いていた。

虫、入りますよ？

「……ふ、ふん」
「ラウラさん、その態度はいけません。わかった、位は言ってあげるべきですよ」
「何故私が」
「それが礼儀だからです。相手が誰であろうと、礼を失すればそれは自分の品位を下げることになります。わかりましたか？」
「……謝罪は、受け取った。これでいいか？　一之瀬香織」

目を逸らしながらも、そうぽつりと零すように言ったラウラさん。
まあ、全く会話がなかったことに比べればマシかな。これから改善していけばいいか。

「はい、これで今回のことについては恨みっこなし、言いっこなしですよ。ラウラさんも、もう少し人と関わってみたらどうですか？」
「……関わらずとも任務に支障はない」
「じゃ、関わっても問題ないわけね。じゃあとりあえずアタシと関わってるんだし、香織とも関わってみるということで」
「なっ、待て鈴！　何を突然！？」
「少しは自分のクラスの人とも交流持ちなさい。香織、クラス内ではよろしくね？」

慌てたラウラさんを尻目に、ふーちゃんが軽く笑ってそう告げた。
ラウラさん、あんまり人を近寄らせないし……、確かにこっちから歩み寄った方がすぐに打ち解けられるかもしれない。
それに、もう一週間は経ってるのにぜんぜん友達いないのは寂しいもんね。

「わかった、ふーちゃん。よろしくね、ラウラさん」
「……よろしく頼む、一之瀬香織」

「はい、握手」

おずおずと差し出してきたラウラさんの手をそっと握り、握手。
最初はどんな怖い子かとも思ったけど、思ったより優しそうな子でよかった。
それにしても、やっぱり軍人さんの手ってごつごつしてるなぁ。
どっちかって言うと大人っぽい手って感じかな。

「よし、じゃあ訓練しようか！」
「おー！」

皆仲良くが、一番だよ。

第１９話　鈴の音と眼帯さん、知り合う（後書き）

鈴が好戦的なのは、強い相手と戦うことで自分が強くなれることとテンションが上がっちまったこと、フラストレーション溜まってたことの三つの理由からです。
普段は普通に戦ってます。

他の作者皆がシャルロットとラウラ両方を抱き込む中、冷静にラウラのみを囲んでみる。シャルロットは、可愛いけど絡めづらい。

というか、箒とラウラ比較したら、圧倒的に箒の方が危険だよね。
真剣まで持ってるし、躊躇いなく抜くし。木刀や竹刀だって殴り続ければ人殺せちゃうからね。
ラウラは許さないとか言っておきながらＩＳでの戦闘にこだわって、あくまで物理的に殺ろうとはしなかっただけマシ？

第２０話　学年別トーナメント（前書き）

みよ、一時間クオリティー。

第２０話　学年別トーナメント

翌日のＳＨＲ。
私たちに配られたのは、学年別トーナメントをタッグマッチで行うという旨が記されたプリントだった。

「さて、プリントを読んでもらえば分かるとおり、今年の学年別トーナメントは二人一組のタッグ戦で行うことになった。各自パートナーを見つけ、タッグを組んでおくこと。ちなみに、当日までにパートナーを見つけられなかった場合はランダムでの組み合わせとなるので覚えておくこと。朝の連絡事項は以上だ」

千冬さんの言葉でＳＨＲが締めくくられ、一時静まり返っていた教室は、まあ予想通りに爆発した。

「織斑君！」
「デュノア君！」

ん、あれ？　おかしいな、二人に殺到しているのが明らかにクラスの女子より多いぞ？
というかドア開いてるし。中入って来てるし。具体的には他クラス全員が押し掛けてるし。

「「「「「「「「「私と組んで！」」」」」」」」」
「まあ、こうなるよね」
「ふん、種馬に群がる雌ガキどもが……、下らん」
「こらラウラさん、そういうことを言ったらいけませんよ」
「いや、しかしだな」
「ラウラさん？」

「……す、すまん」

あれ、どうしてちょっと涙目になっているんだろうか。かるく凄んだだけなのに。

まあそれはともかく、人多すぎる。どういうことなの……。

「大変だねぇー、あの二人は」

「まあ、世界でたった二人の男性ＩＳ操縦者ですからね」

「ところで香織、アタシと組まない？」

「何でナチュラルに絡んでるの、ふーちゃん」

「……香織、私と組もう？」

「あれーうちのクラスが更に多国籍になったよー」

いつの間にか私の膝の上に座っていたふーちゃんと、隣に立っていた簪ちゃん。

特にふーちゃんはとてもナチュラルに、違和感なく私の膝の上に座っていたんだけど。何故でしょうか。

なんて思いながら騒動を眺めていたら、一夏はデュノアさんと組むことにしたようだ。まあ混乱を避けるためってことで順当だよね。あの子女の子だけど。

ふっ、変装するなら私ぐらい完璧にやるがいい！　行動の端々に女の子っぽさが出ているのだよ。もうちょっとか弱い系の男子を目指したほうが良かったな。

……あー、自分で何言ってんだろって思った。私は何をしているんだろうねぇ。

「というかさ、香織は誰と組むわけ？」

「うーん……、どうしようかな。ランダムでいいか」

「えー？　もうちょっと欲張んなさいよ！」

「いや、なにさそれ。別に私は誰と組んだって問題ないけど……」

「ぶぅーぶぅー。アタシと組みたいとかないわけ？」

頬を膨らませて不満たらたらといった顔で文句を言ってくるふーちゃんだけど、あんまり専用機持ちがかたまるとまずいんじゃないかなぁ？

だってほら、これは各々の腕試しでもあるわけだし、専用機持ちのほうが圧倒低に有利だって点は変わらない。だったら、出来るだけそれをバラけさせて、戦闘時間や回数を効率的にしたほうがいいんじゃないかな。

「ん、そりゃそうだろうけどさ……」

「まあ、そういうわけだから。私はランダムにするよ。ふーちゃん達は？」

「……香織がそうするなら、アタシもそうする！」

「私も……」

「私はー、元々専用機持ちじゃないからねぇー。ランダムでいいよぉー」

ふむ、皆ランダムか。とすると、気をつけないといけないのは一夏よりもデュノアさんだ。あの武装の多さに器用さは厄介になる。

……まあ、頑張ろうか。

「ところで、ラウラさんはどうするんですか？」

「私は、組まない。お前達と同じだ」

「そうですかー。もし一緒になったときは、頑張りましょうね」

「期待はしない、邪魔だけはしてくれるなよ」

むぅ、少しは打ち解けられたと思ったけど、やっぱりまだだね。

まあでも、軍人さんと私達一般生徒の感覚の違いは如何ともし難いだろうし、仕方ないか。

時は流れて六月下旬。
私たちはアリーナの更衣室にて出番を待っていた。

『イヴ、調整は？』
『問題ありません。ただし、無茶はしないように』
『はーい』

イヴは相変わらず心配性だ。まあ、そうさせてしまったのも私なわけだけど。
アリーナは学年ごとに使用されているから、試合を同時進行で行うことは出来ない。つまり、トーナメント表が発表された時点で自分の戦いがいつ始まるのかが分かるわけだ。
まあ、こっちとしてはやる気充填に十分な効力を齎してくれるわけだけど。

「……織斑一夏。必ずこの手で……！」
「ラウラさん、あまり感情で動かない方がいいよ。まあ、私が言えたことじゃないけど。感情のぶつかり合いになると、一夏は強い。出来る限り自分の土俵に持ち込んで叩いた方がいい」
「わかっている。ここで頭をカッカさせるほど、私は幼くない」

うははー、その体系で言われてもなぁ。

あ、ちょっとこっち睨んだ。すいません、へんなこと考えました。
ちなみに、トーナメント表は普通なら一日前までには出ているらしいんだけど、タッグに変えてからうまくいっていなかったみたいで、私たちも昨日くじ引きさせられました。
というか、一日でトーナメント表組んだんだよね？　お疲れ様です……。
けどこのタッグって、どう考えてもクラス代表戦の時の無人ＩＳ襲撃事件に絡んでるよね……。
束ちゃん、こんなところで弊害出さなくたっていいのに。
まあでも、実際何がくるか分かったものじゃないし、２ｏｎ１で対処できれば御の字って所なのかな。

「香織、準備できてる？」
「もちろん。そっちは？」
「いつでもオーケーよ。のほほんさんと簪は今着替えてるって」

隣に座ったふーちゃんとそんな風に言葉を交わしていると、トーナメント表の対戦相手が決定した音が鳴った。
ちなみに私は一回戦、ラウラとのタッグ。

「……おおう、まじスか」
「これまた、面白い組み合わせになったわね」

一回戦の相手が表示される欄に表示されていたのは、一夏とデュノアさんの名前。
つまり、ラウラさんは因縁の相手といきなりぶつかることになったわけだ。

「ちょっと行ってくる」
「はいはい」

ふーちゃんに断りをいれ、ラウラさんの元へ。
ラウラさんはトーナメント表を食い入るように見つめながら握り拳を作っていた。

「ラウラさん、行ける？」
「愚問だ。こちらの邪魔になるなよ」
「おっけ。私はデュノアさんを抑えるよ」
「……ああ、頼む」

ラウラさんの事情はふーちゃんから聞いた。
まあ、多分ラウラさんは決定的な矛盾も分かっていて、それでもそれしか方法がないから、やり方を知らないから、こうしてここに来ているんだろうけど。
だから、私はその手助けをする。ラウラさんが満面の笑みで日の元を満喫できるように。

「ということで、行ってきます」
「おう、行ってらっしゃい」
「頑張ってねぇー」
「頑張って……」

三人の声援と共に、私とラウラさんはアリーナへと向かう。
ＩＳを起動させ外に出た私達を待っていたのは、大衆の熱気とその向こうにある闘気だった。

「織斑一夏。貴様に勝ち、教官の汚名を雪ぐ！」
「勝手なこと言いやがって。いいぜ、相手になってやる！」
「というわけだから、デュノアさん。貴女は私が抑えさせてもらいます」

「やれるものならどうぞ」

両者がにらみ合い、そして。

「叩きのめすっ」

「上等！」

開始と同時に発動した瞬時加速（イグニッション・ブースト）が、『白式』を纏った一夏を一気に加速させる。

それを止めようとラウラさんがＡＩＣを発動させ、一夏の動きを止める。

更に追撃のためにシュヴァルツェア・レーゲンの砲塔を一夏へと向け、弾丸を装填。その時点でデュノアさんが動いていた。

「逃すか」

《夜雀》でデュノアさんへ牽制射撃、更に距離を縮める。

一応弾をばら撒きはしたものの、やはりこの程度は回避された。

ラウラさんは弾丸を撃ちだすことなくその場から退避し、そこへデュノアさんの銃弾が突き刺さる。

「ごめん、取り逃がした」

「次に行くぞ」

ラウラさんの声にはぶれがない。それは、戦いを知っているからだろうか。

私も負けてはいられない。

『イヴ、弾道予測。表示して』

『はい』

デュノアさんの使っている武装の大半は射撃兵装。といっても、弾道さえ予測できれば避けられない量じゃない。

相手はこの乱戦でビットを使えるほど器用ではないはずだし、まずあのＩＳにビットデータはなかったはず。ちなみに本社でデータチェックしておきました。

バレルロールのように横回転で弾丸を避けつつ、銃弾をばら撒いていく。

一夏の方はラウラさんが抑えているだろうから、まずはこっちを落とすべし。

「ふんっ！」

「くっ、僕狙いかなっ！」

「もちろん！　ハァッ！」

《夜鷹》で斬り付けるも、生憎相手の展開したブレードによって受け止められてしまった。空中ならではの回転という動きでデュノアさんを押し切ると、更に追撃するべく加速する。

「この距離なら！」

「ショットガン――ッ！」

こちらに構えられた銃口を見て、咄嗟に全身を《夜羽》で覆う。あんなものを生身に食らえば一瞬でミンチだ。冗談ではない。

過剰な反応に疑問を抱いたらしいデュノアさんだったが、変わらずガンガンと銃弾が吐き出される。まずい、幾ら防御性能に優れているとはいえこのままではジリ貧だ。

なにより、私が落ちればラウラさんが二対一で相手をすることになってしまう。それはまずい。

「つ、突っ込んでっ！？」

咄嗟に行った行動は相手の意表をつけたのか、デュノアさんが間の抜けた声を出していた。

私が行ったのは、単純に《夜羽》を展開したまま突っ込むということだけだ。まあ、これでなんとかなったのはなんとも物悲しいけども。

なんとかショットガンの射程から抜けると、そのまま《夜羽》でデュノアさんを殴りつけ、ショットガンを叩き落とす。更に一撃を加えて粉砕した。

「まず一個」

武装は破壊できないわけじゃない。叩き潰せばそれで終わりだ。

さて、次に行こう。

至近距離で《夜鷹》を振るうのと同時、動き回る相手へ向けて《夜雀》を撃ち放つ。

《夜鷹》の攻撃が軽くなってしまうものの、牽制には十分だ。

ようはラウラが一夏とけりをつけるまでの時間稼ぎが出来ればそれでいい。そしてあわよくば勝てば十分。

「どんどん行きますよ、デュノアさん」

「くっ……」

取っておきは、まだまだ出さない。

決戦兵器は一番美味しいときに出すものだ。

第２０話　学年別トーナメント（後書き）

ということで、大会開始。
次回辺りで終了？

第２１話　真実はいずこ

「くぅっ！」
『カオリ、無理しないでください。一撃でも良いのをもらえばアウトなんですよ？』
『わかってるけど、そうも言ってられないんだよね、これが！』

デュノアさんのマシンガンを器用に《夜羽》で叩き落とし、更に追撃してへし折る。これで破壊した装備は五つ目だ。確か、アサルトカノンと最初に壊したショットガン、重機関銃にグレネードランチャーだったかな。それが今まで壊した武装。
そこまでやってもまだぽんぽん重火器が出てくるのはいかがなものか。

『ラウラさん、そっちはどうですか？』
『もう少しで終わる！　耐えろ！』
『了解』

向こうも頑張っているらしい。といっても、あちらに意識を向けるのは到底無理な話な訳だけど。
何とか相手の武装を破壊しながら戦ってはいるものの、やはり恐怖心は強い。向こうはこちらも絶対防御が効いていると思って戦っているから、尚のことだ。まあ、かといって明かせないんだけどね。
明かせば色々面倒だし、梟に乗るなとか言われそうだし。

「さすがに強いですね」
「そっちこそ。これだけ武装を破壊されたのは初めてだよ」
「では、そろそろケリをつけましょう。あまり長引いてお客様を退屈させてもいけません」

「ショーのつもり？」
「この学年は大体そうでしょう？　という事で、行きますよ？」

《夜羽》を前面に展開した瞬時加速（イグニッション・ブースト）で急接近し、《夜羽》を前へと開く形で打撃を加える。
衝撃に耐え切れず、展開（オープン）したばかりの両手のハンドガンが上方へと弾き飛ばされた。

「しまっ……！」
「ここ、だっ！」

すかさず、上段から大きく振りかぶった《夜鷹》を振り下ろし、ハンドガンを叩きぎると共にデュノアさんへ叩きつける。装甲を叩き割り尚も止まらず、絶対防御を発生させた。

『あれ、強くない！？』
『タバネから送られてきた強化プログラムを適応してあります。相手の絶対防御との接触時、より多くダメージを発生させるようになっています』
『え、初耳なんだけど』
『適応はついさっき完了しましたので』

それなら仕方ない。
というかそれぐらいなら別に怒りもしないし、独断で動いてくれても構わないけど。

『一応、報告だけはしてね』
『以後注意します』
『うん。じゃ、行くよ！』
『はい』

今の攻撃でどれくらい削れたか分からないけど、途中でちまちま弾ばら撒いて削ってたし、それなりに持っていけたかな。
なら、間髪いれずに叩き込む！

「ハアァァ！！」
「くぅぅっ……！」

ガギンガギンガギン！　と連続して装甲を叩き割り、幾度か絶対防御を発生させてシールドエネルギーを削っていく。
その猛攻の中で、デュノアさんは何とか攻撃範囲から身を退け、こちらへ銃口を向けてきた。
けど、それを待ってたんだ。

「その一点、打ち貫くッ！」

銃を構え終わる前に急加速、懐に潜りこめば銃は発射できない。
ならば、ここはこちらの間合いになる。
《啄木鳥》を確実に当てるため、腕を密着させ、穿つ。
火薬の炸裂音と、杭の発射される爆音が辺りに響き渡り、デュノアさんは大きく吹き飛んだ。

「かはっ……！」
「まだ墜ちないか！」
「悪いね……、こっちに行かせてもらうよ！」

まずった、今ので墜とすつもりだったのに。読み違えたか。
距離をとったデュノアさんは、一直線にラウラさんの真後ろへと向かっていた。
一夏との接戦で気を回しているラウラさんは、それに気づいても

対処に遅れが出る。まずい、墜とされる！？

「ラウラさんッ！！」

「貰ったよ。全弾もってけぇぇぇえええええ！！」

「この、アンティークがッ！」

「テメェの相手は俺だっ！」

直後、展開（オープン）できる限りの武装を全て撃ち放ち、弾丸の嵐がラウラさんを襲った。

けど、あちらは墜とす。確実に。私のサポートミスだ。

デュノアさんに照準を合わせ、ファイア。一瞬気を緩めていたデュノアさんのＩＳに弾丸が注ぎ込まれ、一瞬で残り少なかったであろうシールドエネルギーをゼロにした。

ともかく、ここであとは一夏を墜とせば終わりだ。そう考えた瞬間、イヴの音声が響く。

『カオリ、警戒！　シュヴァルツェア・レーゲンからエネルギー反応！　通常のものではありません！』

『ッ！？　どういうこと！』

『おそらく、別のシステムが組み込まれているのでしょう。それによってＩＳが浸食を受けています。このままでは、操縦者の生命に危険が――』

言葉を遮るように、ラウラの方から感じていた感覚が途絶えた。

今まで当たり前のように感じていた、ＩＳコアの鼓動。なくなって初めて気が付いた。そんなものがあったことに。

でも、だめだ。これはだめだ。あれは、コアを殺してしまう。あのままでは、コアは死んでしまう。

本来のものではない情報に、外界との断絶。あんなことをすれば、コアは侵食に耐え切れない。

「だめだ、だめだよ！　ラウラ、目を覚まして！　起きてよラウラ！」

『操縦者の意識はあのシステムに取り込まれています。ダメージを与えてシステムを解除しなければ』

気づけば、呼び捨てにして呼びかけていた。

あの姿が誰かは知らない。だけど、あれは違う。たとえラウラがあれを望んだとしても、触れた時点で気づいただろう。あんなもの、欲しかった強さじゃないと。千冬さんの強さとは程遠いと。

だめだ。止めなければ。あの力を振るえば、ラウラはきっと戻れなくなる。今なら、まだ間に合う。

『また無茶をするつもりですか』

『……ごめん』

『カオリはいつもそうです。皆が心配しているのに』

『……ごめん』

『言っても無駄、なんですね』

『……ごめん』

『わかりました。では最高のサポートを期待していてください』

どこか嬉しそうなイヴの声。

まるで、私が迷惑を掛けるのを楽しんでいるかのように。

『カオリはもう少し、他人に甘えた方がいいですよ』

『ＡＩにまで言われると、なんだかへこむなぁ……』

『では、準備はいいですね』

『うん。必ず助けよう』

一夏とデュノアさんが騒いでいるけど、正直そっちまで気が回ら

ない。今はこっちで手一杯だ。
武装が全て問題ないことを確認すると、静かにラウラの方へ目を向ける。そこには、一切挙動を見せずこちらを眺める一体の巨大なＩＳの姿があった。

『どうやればいい？』
『あのＩＳを覆っている黒い物体を切り裂いて、中から操縦者を回収してください。ＩＳ自体は剥がれていますから、それでシステムは停止します』
『オーケー』

近づいて斬れば、それでいい。なんてシンプルな答えだ。滅茶苦茶難しいけど。
まあでも、頑張ってみるか。クラスに馴染めない、可愛らしい友人のために。

「ラウラ、今助けるよ」

宣言し、《夜鷹》を両手に構える。後は《夜羽》の防御性能頼りだ、頼んだよ。
ちなみに、ついさっき非常事態宣言が発令されている。わたし達もとっとと撤収しなくちゃいけない、訳だけど。
まあ、友達のピンチには、友達が立ち上がるもんだよね。

「すぅー……、よしっ」

ドンッ！　と地を蹴り、肉薄。そのままジャンプして一回転して一太刀目の横薙ぎを避ける。

『上から来ます！』

『オーライ！』

着地と同時に身を捻り、真横に斬撃を落とす。その回転に合わせて刃を振るい、一太刀目を横一文字に刻み込む。

ラウラ、早く出ておいで。暗い場所にばかり篭っていたら、大きくなれないぞ。

「はやく、帰っておいで。ラウラ」

構えなおし、更に斬撃が降り注ぐ前に上段から一太刀を浴びせ、十文字に傷を入れた。さて、と。

《夜鷹》を収納（クローズ）すると、両手をその十文字の傷に突っ込んで開く。若干抵抗はあったけど、ともかく開いた。

と、丁度空いた私の胸のところ目掛け、ラウラの小さな体が降ってくる。支えるものを失って倒れこんできたような形になったラウラをそっと受け止めると、それと共に降ってきた眼帯をキャッチした。

『っ！？　カオリ、離れてください！　エネルギーが急速に上昇しています！』

『なぬぅっ！？』

「くっ、こ、のおぉぉぉぉ！！」

ラウラを抱えている状態ではあまり高速は出せない。

出せる限界で離脱した直後、ＩＳの周りを覆っていた黒い何かは派手に爆発し、影も残さず吹き飛んだ。

……最悪だ、自爆前提のシステムなんて。

でも、弱弱しくはあれどＩＳコアの鼓動が戻ってきた。それを聞いて、何とか二人とも助けられたかと、ようやく安堵する。

「香織、無事か！？」
「あ、一夏。大丈夫、この通り。ごめんね、出番奪っちゃって」
近づいてきた一夏にそう微笑み、そして絶句した。
腹部に、強烈な熱。
「かお、り？」
後ろを向くと、黒いあの塊が、小さな子供の形になって私の腹部を貫いていた。これは、腹部に大穴開いたかな。
警戒、し損ねたな。
「かおりィィィィ！！」
崩壊していく黒い子供状の塊を見ながら、一夏の絶叫をＢＧＭに私は意識を失うのだった。
ごめんラウラ、おとしちゃうかも――。

――私は、結局勝てなかった。
呟きが波となって、私の心に広がる。
戦ってみて、なんとなく教官の言ったことが理解できたような気はする。だが、それでは強さとはなんだ。

私は、兵器として生み出された。戦うための道具だ。その唯一の存在理由を否定されたら、私はどうすればいい。

『生きてみなよ』

――私は、生きているぞ。

『うーんと、そういうんじゃなくて。何かに一直線って言うのもいいけど、やっぱり人間って、やりたいことが色々目移りしちゃうんだよ。あれもやりたい、これもやりたい。あれが欲しい、これも欲しい、って。でも、それを経験して、だんだん自分の進みたい一本が見えてくるんじゃないかな』

――それが、生きるということか？

『私は、そう考えてる』

――では、強さとはなんだ？

『……わかんない。そんなもの、きっと誰にも分からないよ』

――では、織斑一夏の、教官の言っていたことは嘘なのか？

『ううん、あれも本当のこと。でも、ラウラにとっては本当じゃない』

――どういうことだ？

『つまり、強さの意味はその人それぞれにしかないものなんだよ。千冬さんや一夏の言っていたことは、あの人たちだけの強さ。ラウ

ラの強さは、きっとまだ見つかってないだけで、必ずどこかにあるんだよ』

――強さは、力ではないのか。

『力が強さだって言う人も、確かにいる。それを否定はしないけど、ラウラの強さって違うんじゃないかな。誰かの強さを借りてるだけなんだよ』

――では、どうすれば見つかる？　私の強さは見つかるのか？

『探すしかないんじゃないかな。私だって、自分の強さがどこにあるのか、どんなものなのかは分からない。だけど、いつか見つかると思ってる。人生って、意外と何とかなるものだしね』

――……私は、兵器だ。

『ラウラは人だよ。可愛い女の子。意地っ張りでちょっと傲慢で、恥ずかしがりでちょっと常識外れで、そしてＩＳがとっても強い、僕らの友達』

――私は、人として生きていいのか？

『もちろん。だって、ああして人として、誰かを憎むってことが出来たんだから。だったら今度は、誰かを好きになったりすることも出来ると思うよ』

――そうか。

呟きに返ってくる香織の言葉は、それを最後に聞こえなくなった。

私は、人として生きられるんだろうか。
……生きて、みるか。私として。
そう考えていたとき、突然頭の中に映像が流れ込んでくる。

――どこかの研究施設。
――香織を幼くしたような幼児が、大きなポッドの中に入っている。
――これは、人を作っているのか？

「――香織、あなたは香織。私が貴方にあげられる、数少ないものだから、どうか受け取って。私が消してしまった命の灯火に、名づけられるはずだった名前を」

香織。
それは、なぜそれに付けられている？
あいつは人だ。試験管ベビーですらないこんなものが、アイツだというのか？

「――あなたは、いずれ世界に君臨する兵器を、きっともとの道へ正してくれる……。貴方は、私達の希望なのだから」

音声が消えた。優しい、女性の声だった。

――香織と呼ばれていた幼児の入れられていたポッドの、ネームプレートが見える。
――そこに記されていたのは、ｍｅｎの三文字。

これが事実ならば、香織は――。

「……うっ、ここは……」

「目が覚めたか」

その声は、私を救ってくれた恩師の声だった。

痛む体を無視して、周囲を見渡す。どうやら医務室に運び込まれていたらしい。

「私は……、一体……」

「全身に無理な負荷が掛かったことで筋肉疲労と打撲がある。暫くは動けんだろう、無理をするな」

「何が、起きたのですか……？」

聞かなければ。何が起きたのか。

そして、教官に、彼のことを。

「これは、重要案件である上に機密事項だ。いいな」

「はい」

「ＶＴシステムは知っているな」

「はい……」

ＶＴシステム、正式名称ヴァルキリー・トレース・システム。

過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムだが、あれはＩＳ条約によってありとあらゆる研究、開発、使用のすべてが禁止されているはずだ。

教官の話では、それが私のＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲンに搭載されていたらしい。……私の愛機に、勝手なことをしてくれる。

「現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

「……私が、望んだからなんですね」

強く。貴女になることを。

望みはした。だが、あのときの私は、本当にどうかしていたのだ。勝ちたいあまり、全てを捨てようとした。きっとあのまま戦っていたら、私は私でなくなっていただろう。

……助けてくれた、彼がいなければ。

「教官」

「なんだ」

「私を助けたのは、一之瀬香織で間違いありませんか」

「ああ。現在は腹部に大きく風穴を開けられ、集中治療室で生命維持中だ。予断を許さない状況だが、驚異的なスピードで回復しているらしい」

「ど、どういうことですか!?　風穴!?」

なぜだ、私の記憶でもそんなものはなかった。レールガンでも使わない限り、風穴など……。

「VTシステムの残骸がなぜか再起動した。お前の姿をとって腹部をずぶり、だ」

「そんな……。香織は助かるのですよね!?」

「助かる、だろうな。むしろあれは……」

確か、さっき教官は驚異的なスピードで回復しているといっていた。

あのとき起こった現象、おそらくは相互意識干渉（クロッシング・アクセス）の一種だろう。であれば、あれは香織の過去である可能性がある。いや、十中八九そうだろう。だが、一体あれは……。

「……教官。香織の過去を知っていますか」

「過去？　いや、両親は物心つく前に死亡、後は姉と二人で、だっ

たはずだが」
「……あのとき、助けられたときに、私は香織の過去を見たかもしれません。幼児の頃の香織が培養ポッドのようなものに入れられているところと、優しそうな女性に抱かれて、名づけられているところを見ました」
「それは……、本当か？」
「はい。香織の性別は、男なのですか？」
「……どうやら本当らしいな。これは色々聞く必要がありそうだ」

香織、アイツは誰にでも優しかった。ほんの数週間傍から見ていただけでもそれが分かる。
そんな香織が、人造人間？　そんな、バカな。
そもそも人造人間など、ありえるのか？　試験管ベビーですらようやく使われているレベルだというのに、あれほどの完成度を誇るバイオノイドなど……。
いや、ちがう。そうじゃない。あれは、人間だ。私も人間だ。それ以外に何がある？
あれほど優しく、私が傍にいても何の気後れもせずに接してくれた彼が、人間でないなど、私が認めるものか。
香織は人間だ。誰がなんと言おうと。

……そうだろう、香織。

『よかったね、マスター』

……なにか、聞こえた気がした。
凄く遠くから、何かが。

第２１話　真実はいずこ（後書き）

さて、きな臭くなってまいりました。
そしてまた怪我をした香織ちゃん。一体どうなるのか。
次回はまた病室だよ！　……病室率高くないですか？

第２２話　休息

――腹部を襲う強烈な鈍痛で、目が覚めた。
僕はどれくらいそうしていたんだろう。頭が酷く痛んだ。

「……香織？　おきたのね、目が覚めたのね！？」
「ふー、ちゃん……？　僕は、一体……」

見慣れた景色、そこは医務室の中だった。
白を基調にした落ち着いた雰囲気の中、ふーちゃんの赤い目は特に目立っていた。

「よかった、よかったよぉ……！　このまま起きないんじゃないかって、怖かったぁ……っ！」
「ふ、ふーちゃ、ちょっと、落ち着いて！　どういうこと、何が起きたの？」

大声を出すと腹部が酷く痛んだが、僕は先に彼女を落ち着かせることにした。
手を握ってわんわんと泣き出した彼女は、僕の声に何とか泣き止むと何が起きたのかを説明してくれた。

「香織がぶっ倒れてから、学校のコンピュータ全てにハルがハッキングを仕掛けたの。学校のコンピュータを乗っ取ったハルは、香織のお腹に開いた穴を縫合していったわ。確か、治癒促進剤だったかしら、そんな名前のスプレーで傷を塞いで、細胞の増殖を促進させるっていう注射を打ったの。でも、今香織のお腹は空洞。自分でも分かるでしょ？」
「この鈍痛は、そういうことか……」

「でも、ハルは香織が目覚めてから一日もすれば傷は完全に修復されるはずだって言ってたわ。何でも、治癒能力が通常の人間の数百倍から数千倍、胃袋や他の臓器なんかを丸々持っていかれてるのに、寝ていればすぐに元通りになるって……」

……確かに、僕は傷が早く治るような体質だ。だけど、なくなった臓器が復活するなんて、聞いたことがない。

でもとりあえず、まずはふーちゃんを安心させないと。

「ごめんね、ふーちゃん。心配掛けて」

「いい、いいのよ……！　アタシこそごめん……、守るって、言ったのにっ……！」

「……うん、大丈夫だから。僕は大丈夫だから」

『大丈夫だから、ではありません！　カオリ、貴方はもう少し自分の体を大切にしてください！』

「ご、ごめんイヴ……」

ふーちゃんに謝って、そしてイヴに謝って、それからそっと、包帯の巻かれたお腹を撫でてみる。……鈍痛の代わりに激痛が走って、思わず顔を顰めた。

「か、香織！？　傷に触ったらダメよ！　ほら、凄い汗……」

「ごめんごめん……。でも、本当にべこって感じだったなぁ、お腹に穴が空くとああなるのか……」

「感心してないで、ほら。汗拭いたげる」

傍にあったタオルで、ふーちゃんが僕の顔から吹き出た汗を残らず拭い去る。

それにしても、今はいつなんだろうか。あれからどれくらい経ったのか……。

「あれから、一週間よ。一週間眠ってたの。アタシ、もう死んじゃったかと思って……」
「一週間も……？　ごめんね、心配させちゃって」
「ううん、いいの。けど、お腹は大丈夫？」
『……簡易検査を行いましたが、臓器は半分以上再生、明日の朝までには完全に回復します』
「ほんとにっ！？」
「……ねぇ、ふーちゃん。今の言葉はまるで僕が妊娠してるみたいじゃない？」

そういうと、ふーちゃんはこちらをぽかんとみて、それからゆっくりと頬を高潮させて、え、なんでくねくねしだすの？

「ね、ねえ香織、その……、旦那様って、言ってみてくれない？」
「……あの、それ中学の時に」
「いいから！　あのセリフ、ねっ！」

あー、僕はまあ、こういう成りだから、中学校の時にちょっと演劇をやったことがあるのですよ。
で、そのときの僕の役目が、非業の死を遂げる貴婦人、要するに女役です。この成りにこの声だからなぁ……。

「……一回だけだよ？」
「うんっ！」
「……コホンッ。『旦那様、今この子がお腹を蹴りましたよ。旦那様と私の、愛の結晶です』」

ふーちゃーん、鼻から血が出てるよー。なんかこれやったときの女子と男子の反応一纏めにしたような状態になってるよー？

「『はっはっは、ようやく授かった子宝だ。お前もこの子も、頑張るんだぞ』」

それは続きのセリフじゃありませんか？　ねえ、それもしかして僕がまた続けろと？

ほら期待して目をキラキラさせてる。怪我人に何させてるの貴女は。

「……『わかってますよ、旦那様。ふふっ、ほら、この子も喜んでます』」

「……ねえ香織」

「なに」

「抱かせて」

「ダメです」

というか突然何を口走ってるんだこの子は。滅茶苦茶危ないというか身を乗り出すな涎垂れてる目の焦点があってない！？

「ふーちゃん、ストップ」

「むぅ、いけず」

「いや、僕怪我人だから。だめですよー」

「……よかった、香織、いつもの香織よね」

「いつもの僕じゃなかったら誰だと思ったのさ。そうだ、ラウラさんは無事？」

「ええ、ぴんぴんしてるわ。アンタのこと心配してたわよ」

そっか、無事だったかぁ……。よかった……。

でもふーちゃん？　いい笑顔を浮かべるのは構わないけど、せめてその口元についた涎を拭ってからにしてくれないかな。ちょっと

ぬらぬらてらてら光ってて、ちょっぴりえっちいですよ。

「それにしても、お腹減ったなぁ」

「胃袋はまだ元に戻ってないんでしょ？　ご飯は明日まで無しよ」

「えぇー……」

「消化できないんだから、変なところに落ちてもしょうないでしょ。我慢なさい」

「はーい……」

うぅ、やっぱりこの空腹感は堪えるなぁ……。

でも、誰にも被害がなくてよかった。

「そうだ、束さんから連絡あったわよ。『今回学校側が得た香織ちゃん関連のデータ全部抹消したからねー』だって」

「そっか。助かったぁー……」

「ハルがハッキングしてなかったら、男バレした上に穴開いたまんまで生活する羽目になってたものね」

ほんと、お腹に穴が開くなんてもうしたくない体験だなぁ……。

でも、骨はもう再生して、筋肉も元通り。後は臓器の再生を待つだけなんだとか。僕の体って意外とチートボディなんだねぇ。

いや、自分で言うのもなんだけど。

「というか、今何時？」

『午後一時半です』

「あれ、ふーちゃん？」

「抜け出してきたわ」

全く、この子は。僕のことを心配してくれるのは嬉しいけど、授業には出ないとダメじゃないか。

他の人たちはちゃんと受けてるだろうに……。

「受けてないわよ、っていうか無理に決まってるじゃない。簪は格納庫、葵義姉さんは部屋にそれぞれ閉じこもってるし、ラウラも上の空みたいだし。一夏たちもあんまり授業に身が入らないみたいよ」

「……、ごめんね」

「あんたが謝る必要なんて無いわよ」

皆、僕のことを心配してくれてるんだ……。

本当に申し訳ない気持ちで一杯だ。僕一人のために、皆が辛い思いをしてるなんて。

「まあ、もうしばらくすれば皆来るわ。……それで、一つ聞きたいことがあるんだけど」

「なに？」

「梟、絶対防御がないわよね」

「……うん」

「なんで？　束さんに言わなかったの？」

「ううん、組み込んだけど消されちゃうんだって。ほかにもシールドバリアーが随分弱体化してるみたい」

「それって、つまり体に喰らえば大怪我するじゃない！？」

まあ、そうなんだけど。

でも、僕はこの子の鳴き声に応えたわけで。

「僕としては、この子で宇宙に行きたいんだよね。ほら、最低限全環境での生命維持はあるみたいだし」

「……わかった、アンタはアタシが必ず守る。絶対守るから」

「……うん」

泣き腫らした真っ赤な目で、ふーちゃんはそう宣言するように言った。
守りたいのは、僕も同じなんだけどな。

「香織ッ！　目が覚めたというのは本当か！」
「香織、起きたのね！」
「目、覚めた……？」

どたどたどたっ、と医務室に雪崩れ込んでくる三名。

「医務室はお静かに。それと、ただいま」
「よかった、よかった……っ！　すまない、私のせいで……っ！」
「いいよ、油断した僕が悪いんだし」
「傷の具合は！？　大丈夫なの！？」
「明日の朝までは動けないけど、他は大丈夫だから」
「死んじゃったかと、思った……」
「あはは、ごめんね。この通り、もう大丈夫」

ラウラさん、お姉ちゃん、簪ちゃんが口々に僕の身を心配してくれた。
本当に、ありがたい限りです。でも医務室の中ではお静かにね？

「それにしても一週間かー、体ガチガチだ」

「復帰したらリハビリね。トレーニング兼ねて」
「じゃあ皆でやりましょうか！　ねえ、簪ちゃん、ラウラちゃん」
「うん……」
「は、はい！」

あれ、ラウラさんやたらとお姉ちゃんにキリッとした返事をするね？

「その、なんだ。お前は私の嫁にする！」
「……はい？」
「嫁じゃなくて婿じゃない？」
「日本には、気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする。義姉上からも許可は頂いているからな」
「とりあえずその間違った知識を植えつけたバカをぶん殴らせなさい。それとお姉ちゃん間違ってるって分かってるんだから直してあげて！？　というか何勝手に許可出してるの！？　ふーちゃんはどうなったぁ！？」
「面白そうだったし、ほら。一夫多妻制って、素敵だと思わない？」
「僕の回りは敵だらけだぁー！？」

ちくしょう、満面の笑みで何が「素敵だと思わない？」だぁー！　思わないよ、ぜんぜん思わないからね！？　全面敵色の風景が恐ろしいよ！
というかふーちゃん、頼むから反論して！？

「安心しろ。鈴と私は友人だ。そしてお前ならば私と鈴の二人に等しく愛情を注いでくれると分かっているからな」
「香織だからねー。大丈夫よね」
「もうだめだこの人たち！？　か、簪ちゃん！　お願い、助けてへ

ルプ！」
「……とりあえず、宇宙に行くまではダメ。その後は、私も参加する」
「ふへっ！？」
あ、変な声でた。というかなに、自分も参加？　何が？
「よかったわねー、許婚が三人出来たわよー？」
「よくないからね！？　とりあえず日本では重婚禁止だから！」
「宇宙に国境なんてないわ！　無問題よ！」
「ちくしょうこの人おかしいよ！？」
……懐かしいな、この空気。
突込み通しで僕が疲れるだけだけど、皆笑ってて。今まであんまりなかった、空気だ。
「と、とりあえず落ち着いて香織。大丈夫、とりあえず今までどおりでいいから。あとラウラも香りが男だってこと分かってるし秘匿もしてくれるらしいから大丈夫。オーケー？」
「……オーケー。はぁー……、とにかく、ここ医務室、騒がない。オーケー？」
「はーい」
「う、うむ。すまない」
「うん……」
よし、全員落ち着いたかな。というかね、人多い。医務室ってそんなに人が入れるスペースないんだよ。
ほんと、医務室の先生申し訳ないです。毎度お騒がせして。
「馬鹿どもが揃いも揃って何をやっている」

「織斑先生……！？」
「きょ、きょうかいたぁっ！？」
「織斑先生と呼べと、何度言ったらわかる、ばか者め。一之瀬弟、大丈夫なようだな」
「あ、はい。ご心配をおかけして申し訳ありません」
「それを監督するのが教師の役目だ。まあ、補習は追加されたがな。凰鈴音、一之瀬姉、更識簪、後で補習だ。一週間分」

皆、まともに授業出てなかったのか……。
でも、これも僕の責任だよね……。僕が危険な目にあわなければ、何とかなったかもしれないんだし。

「それと」
「いつっ！？」
「これは今自分のせいだなどと考えたお前への罰だ。こいつらは自分で選択しそういう行動を取ったのであって、お前のせいではない。お前はもう少し、自分に甘くなれ」
「え、で、でも……」
「今回の事件の顛末は復帰してから伝える。今は体を休めろ、いいな」

……これも千冬さんの優しさ、なのかな。

「……はい」
「よろしい。では馬鹿ども、回れ右して寮へ戻れ」
「で、でもっ」
「言い訳は聞かん、ラウラ以外の三人は説教だ。正座四時間耐久だ」
「お、織斑先生、お助けを……」
「だめだ」
「……ごめんなさい」

「謝るなら授業に出ることだな。ああ、一之瀬弟。明日の授業は全て免除だ、戻る許可が下りたら、部屋でゆっくりしておけ」

その言葉を最後に、千冬さんは全員を引き連れて医務室を出て行った。

疲れた、けどよかった。生きてて。

助けられたんだね。

『カオリの助けたかったものは、全て助けられましたよ』

『そっか』

なら、まあ、いいかな。

そんなことを、思う僕なのでした。

あー、お腹減ったなぁ……。

第２２話　休息（後書き）

大切なことが何も明らかにならないまま、医務室パート終了。
……本当に医務室パート、できそうだな。このままだと。
ラウラの嫁宣言は医務室で行われました。その心理はまた後ほど。

第２３話　動き出した歯車（前書き）

後半微エロ注意です！

第２３話　動き出した歯車

「……それで、何が聞きたいんですか」

香織が目を覚ます数日前、私は織斑先生に呼び出されていた。
生徒指導室の扉にしっかりと鍵を掛けると、開いている場所や隙間がないか確認したあとで、目の前の椅子に腰を下ろす。

「……一之瀬弟のことだ。あれは血の繋がった弟か？」
「当たり前です。それが何か」
「……ラウラが助け出されたとき、奇妙な光景を見たそうだ。一之瀬弟から流れ込んでくる映像をな。研究室のような部屋の中、培養ポッドの中に入っている香織によく似た子供、男性の研究者とそれに付き添うような形の女性。それに抱き上げられ、香織と名づけられたその子供……」
「……映画でも見たんじゃないですか？　きっと、それとごっちゃになってるだけです」

嘘を吐く。だが、これは知られるわけには行かない。
私は一之瀬葵、香織の姉だ。どんなことをしても、私はあの子を守る義務がある。
その私を見て、織斑先生はすっと目を細めた。

「……嘘が下手だな、お前は。事実だろう」
「……それで、どうするつもりですか？」
「どうする、とは？」
「もしあの子に手を出すようなら殺す。生まれてきたことを後悔するような苦しみを味あわせてやる」

拳を握り、知られぬ程度に腰を浮かせる。
私だって無為に日々を過ごしていたわけじゃない。日々鍛錬を続けてきた、一人の人間に負けるほど、私は弱くない。
全ては、あの子を守るために。

「なにもしないさ。ただ確認を取っておきたかっただけだ、何故男がＩＳを使えるのか、もしくはそう作られたのか」
「……織斑千冬、あまり妙なことを口走れば殺す」
「冗談だ、殺気を収めろ。お前は何を抱えている？」
「知れば逃げられない。だから聞くな」
「私はあいつの担任だ。生徒を守るのが、教師の役目だ」
「それが世界中の全てを敵に回すことだとしても？」
「無論だ。まあ、一夏とどちらを優先するかは決まっているが」

……その目は本気だった。
面倒な人間に捕まった、この手合いは満足するまで開放しないだろう。社長とは随分違うタイプだが、それゆえに成り立っていると言うことか。
ともかく、このタイプは情報を小出しにしてだまくらかした方が楽だ。とっとと終わらせるか。

「……わかった、話す。私たちの両親は死んでいない、今も世界のどこかで兵器を研究し、自分の目的のために命を消しているだろう。母もその犠牲になった」
「一之瀬弟は人間か？」
「あの子はバイオノイド、いわゆる人造人間だ。母が良心の呵責に耐え切れず、こっそりと育てていた唯一の成功策。今にして思えば、これもアイツの計画のうちなのかもしれない」

香織は、バイオノイド。忌むべき父親の研究によって生み出され

た人工生命体だが、その体は人間と変わらない。
変わっているとすれば、尋常でない自己再生能力と情報処理能力だ。どちらも生み出されるときに調整された。
小さい頃から、父はどこか変わっていた。
初めの頃はちょっと変わった機械を作っていた程度だったのに、日が経つにつれてそれは動物、そして人間のものへと変わっていった。
それからは、悪夢のような日々だった。私は出来るだけ家に帰ろうとせず、母は人道を解さぬ父の研究を止めようと必死だったが、それも無駄だった。
母は最後の砦とばかりに、そのときの完成作だった人工生命体を自分の息子として育てていた。その様子を、私は遠目から見ていただけだった。
母が人工生命体を、香織を育てていると知った父は、殊更激昂した。既にデータを取り終え、廃棄処分したと思っていた香織が生きていた、しかも他ならぬ母の手によって育てられていたと知った父は、母を連れて家を出た。
放っておけば私たちのような子供は勝手に死ぬと思っていたのか、それとも単純に興味がなかったのか。わからないけれど、父はそうして消えた。母も、生きているかどうかすら分からない。
それから私達は、必死になって生きた。あどけない笑顔を見せて「おねえちゃん、おねえちゃん」と呼んでくれるあの子が、愛おしくてたまらなかった。
その笑顔を守るために、私は必死に知恵と力をつけた。幸いうちには母の残したヘソクリと、祖父母の残した遺産が残っていたため、バイトが出来る歳まではそれで食い繋いでいた。本当に、よくあそこまでやれたものだと感心する。
香織には、両親は物心つく前に死んだと言い聞かせていた。……そうしなければ、あの子は壊れてしまう。
もしくは、許してしまう。優しすぎるから。

香織がＩＳに乗れるのも、おそらく奴が何かしたんだろう。香織が生み出されたのは今から一〇年前、丁度ＩＳが世に知られた頃だったから。

「……そうか。それで、お前はどうする？」

「決まってる。どんな手を使ってもあの子を守る、それ以外になにがある？」

「ふっ、愚問だったな。すまん。このことは絶対に口外しないと誓おう、一之瀬葵」

「……それでは、二者面談はこれで終わりですか？」

「ああ、ご苦労だった。帰ってもいいぞ」

結局、織斑千冬にはほとんどの部分を秘匿した。

私は守らなければならない。それが、私の義務だ。

目を覚ました翌日の夕方、私はすっかり治った体と共に自室へ戻ってきていた。

ちなみに、補習は夏休みに纏めてやるらしい。僕の場合は一週間以上補習かぁ……。ガンバろ。

「ただいま帰りましたー」

ドアを開けて中に入ると、のほほんさんは私のベッドにすがりつ

くようにして眠っていた。
寝言で「やだ、いかないで」と呟いている彼女を見て、すぐに彼女の手を握る。こうすると、悪夢は意外に収まってくれるものだから。
しばらくすると、のほほんさんはスヤスヤと穏やかな寝息を立て始めた。……心配させちゃったかな。泣いた跡、あるし。
とりあえず起きるまでそうしていようかと彼女の傍に座り込んだ直後、もぞもぞとのほほんさんが身じろぎした。

「んぁ……」
「起こしてしまいましたか」
「かお、りん？」
「はい、香織です。ご心配をおかけしました」
「ほんとに、どこも痛くない？　大丈夫？」
「はい。泣いていらしたのですか？」

寝起きで目を腫らせているのほほんさんの頭をゆっくりと撫でながら、そう問いかける。

「……いなくなっちゃう夢見たんだ。かおりん、いなくならないよね？」
「いなくなりません、大丈夫ですから」

なんだか、最近ずっと泣いている人を見ている気がするよ。まあ原因私なわけなんだけど。
とにかく、そう言いながら軽く抱きしめると、ようやくのほほんさんは落ち着いてくれた。……私は男なんですけどねぇ。

「えっと、じゃあ。ただいま、のほほんさん」
「――うん、おかえりなさい。かおりん」

ペコリ、と頭を下げて、彼女が言った。その様子が妙に小動物染みていて、思わず笑みが零れてしまう。

「あ、そうだ。休んでいた分のノート、貸していただけませんか？」
「いいよぉ。はい、どうぞ」
「助かります。あとで何かの形でお返ししますね」
「わははー、楽しみにしてるねぇ」

ノートを受け取ると、とりあえず机に向かおう、としてそのまま引き倒される。どさっ、とノートが手から零れ落ち、床に散らばった。

のほほんさんは仰向けになった私の上に乗ると、押し倒したような形でこちらを見る。

「の、のほほんさん？」
「じっとしてて――」
「あ、あの――」

時が止まった。そんな気がした。

唇に伝わる柔らかな感触と、間近に迫った瞳、淡い桃色の髪。ふわりと香る、女性特有の甘い香りが、脳の奥をぴりぴりと痺れさせる。

何秒間そうしていただろう、私は気づくと目を見開いたまま、荒く息を立てていた。

「の、のほほんさん、なにを……？」
「あーんむっ♪」
「んんぅっ！？　んーん、んーんーっ！」

何がなんだか分からないまま、更に唇を奪われる。
荒い息が私の顔にかかり、なんだか奇妙な気分にさせられてしまう。

「んー……、ぷはっ。はい、ご馳走様」
「な、ななな、なにをしてるんですか！？」
「ん、キスだよ？」
「キスだよ？　って、そんなあっけらかんと言われても……」
「恥ずかしかったでしょ」
「そりゃ、まあ……」

いきなりベッドに押し倒されて、あまつさえ唇を奪われたんだから、そりゃあ恥ずかしいと言うか、頬が火照ると言うか。
って、私は一応男なんですけど！？　女性に押し倒されて唇奪われて息荒げてってどうなの！？
なんか体が妙にけだるくて、頭あんまり回らないし……。

「心配させた罰だから。今日は一緒に寝よ？」
「へぇっ！？」
「ダメ？」

ぬぅ、ダメ、じゃないけど……。

「というか、キスは私を恥ずかしがらせるためだけにしたの！？」
「最初はそうだったけど、はあはあ言って涙目でこっち見てるかおりんみてたら、つい♪」
「ついじゃないですよぉー！？」

……まあでも、心配させちゃったし。
少しくらいなら、いいかな。

「こんばんわ、スコール」
「あら、こんばんわキティ。どうしたの？」
「ふふ、あなたの素敵な体が忘れられなくて……、疼いて仕方ないのよ。慰めてくださらない？」
「あらあら、年頃の乙女がそんなこと言っていいのかしら？　それに、私にはオータムがいるのだけど」

暗がりの中、裸体を隠そうともせずに寝転がる女性の豊かな金色の髪を撫で付け、少女、キティが笑った。
いるはずのない、二人目の男性ＩＳ操縦者、それと瓜二つの顔をもってして、美しいという言葉すら生温い色気を漂わせて、キティが笑った。

「私はね、スコール。貴女のように誰かから愛されている人を横から奪い取るのが大好きなの。私に夢中にすれば、いつか私はお兄様ですらも手に入れられる。そんな気がするわ」
「つまり、私は貴女に奪い去られるお姫様なのかしら？」
「違うわ。あなたを、私に蹂躙され、傅き、私から与えられるものはいかなるものであろうと感涙してその身に授かる奴隷にするの。そそるでしょう？」
「あら、私はそんなに安い女ではないわよ？」

スコールと呼ばれた女性は、少女を引き倒すようにしてベッドの中心まで転がると、まるで王女のような白いドレス姿の少女の首筋に、犬歯を突き立てる。

それほど尖ってはいないものの、その行為だけで少女は息を荒げ、スコールを情欲に潤んだ瞳で見つめていた。

「はぁ、はぁ……。ねぇ、スコール？　私を壊してくれないかしら？」

「貴女を？　でも、私を手に入れるんじゃないの？」

「ふふっ、たまには翻弄されるか弱い雌を演じたいの。ねぇ、スコール。来て……」

「あなたにそんなことを言われたら、我慢できないわね。いいわ、滅茶苦茶にしてあげる……」

そういうと、スコールは先ほどまでのように壊れ物を扱うような仕草をやめ、荒々しくキティの美しい栗色の毛を掴みあげた。

本来ならば痛みしか感じないような行為でも、今の彼女、役に入り込んだキティには快楽の元にすらなり得るものだった。

「ほら、痛い？」

「ああ、ええ、痛いわ……、凄く痛い……。でも、いいわ、もっと乱暴にして……」

「もちろん。こんなもので終わらせるほど、私は優しくないわ」

言った直後、キティに覆いかぶさるようにしてスコールが動く。

それからしばらくの間、誰もいない暗がりには媚声が響き渡っていた。

第２３話　動き出した歯車（後書き）

はい、やっと本筋はいりました。
のほほんさん、一回書き直したんですよね。なんか違う気がしたので。
うちののほほんさんは意外とアグレッシブ。
っつか、スコールとかは半オリキャラ化しそうです。勘弁してください。

さて、キティとは一体誰なのか。もう半分以上ネタバレしてるけどね！
次回は、ショッピング？

第２４話　香織ちゃん！　海ですよ、海！（前書き）

更新再開ー。ちょっと駆け足ですよー。

第２４話　香織ちゃん！　海ですよ、海！

「んー、ひっさしぶりねー、ここにくるのも！」
「最近忙しかったからねぇ」
「ここがショッピングモールか……」
「うぅー、お姉ちゃんも行きたかったよぉー……」
「お姉ちゃんは去年行ったでしょう……」

レゾナンス。そこは市の地下街と複合された、駅前の巨大ショッピングモールである。
とりあえずここに来れば大体のものは揃うし、意外とコアな部類のものまで取り揃えているお店もあるので評判もいい。あとは、うん。友達が言っていたけど、ナンパスポットとしても有名だ。男女共に。
こんにちは、香織です。今日は私服でショッピングモールまでやってきました。ちなみに、ふーちゃんはＩＳ学園の制服。
もしかしたら中学の友達に会うかもしれないし、事前にそう言ったときの設定は考えておいた。ラウラともきちんと打ち合わせはしたし。
あ、ちなみにラウラって呼び捨てにしてるのは、本人からそうしてほしいと言われたから。……僕の正体、ドイツに伝わってるとかはないよね？
まあそれはとにかく、今日何をしに来たかというとですね、ラウラの水着を買いに来たのです。
ついでに色々物色しましょうと言うことで、ね。お姉ちゃんのコーディネート欲に火が付いちゃったらしいから。

「それにしても、いつ来ても広いわねー」
「まあ、ショッピングモールだからね。仕方ないね」

「……なあ、香織。お前、その服は」
「どう！？　可愛いでしょ、可愛いわよねラウラちゃん！」
「は、はぁ……」
「……まあ、こういうことです」
「なるほど……。だが、それもアリだな」

うはは、ラウラが敵になった！？
いや、そうじゃなくて。ラウラが私の服について疑問を抱くことをやめたようです。まあいいけど。慣れたし、可愛いの好きだし。いいけど。お姉ちゃんが結構買ってくるから、この私服はお姉ちゃんコーディネートです。
さて、では早速。

「お姉ちゃん、ラウラをよろしく」
「ふふふ、まっかせなさい！　さあラウラちゃん、行きましょうか！」
「え、あの、義姉上？　その、か、香織ぃ！」
「行ってきまーすっ！」
「はーい、行ってらっしゃーい」

ラウラをつれて爆走するお姉ちゃん。……まあ、これで暫くは帰ってこないだろうなぁ。

「さて、それじゃあアタシ達はどうしましょうかね？」
「適当に見て回るにしても、どこから行こうか？」
「……あれ、香織に鈴！？」

悩んでいた僕たちに突然声が掛かる。おや、この声は？

「ああ、栄介、夢子ちゃん！」

「ひっさしぶりだなーっ！　元気にしてたか？」
「やぁん、香織ったらまた可愛くなってるじゃない！　写メ撮っていい！？」
「あ、うん、どうぞ？」

携帯で即座にあらゆる角度から僕を撮り出したのは、中学の友達、上道夢子（かみみちゆめこ）。で、その向こうで呆れた顔で笑っているのが陣内栄介（じんないえいすけ）。

ふーちゃんの昔のクラスメイトでもあり、懐かしい顔だ。

ちなみに、夢子ちゃんは赤と黄色のシャツに臍だしファッション。髪はサイドテールにしている。それはいいけど、風邪引くよ？　……そう言えば、あの格好今結構人気のアイドルを真似してるんだとか。一度街中でばったり会って、黙ってる代わりに握手とサインしてもらったんだって。それからゾッコンらしい。まあ、夢中になれることがあるのはいいことだよね。

しかもなんだっけか、確か名前が一緒の文字なんだっけ。まあ、テンション上がっちゃってるのも分からんでもないけども。

で、栄介はといえば、やや茶色のツンツン頭に無地の黒いTシャツ、チェーンのついた普通のジーンズ。

袖から伸びるのはそれなりに鍛えられた筋肉がついた腕である。原因は姉。

うちのお姉ちゃんは、まあ昔ちょっとぶいぶい言わせてた時期がありまして。その頃の舎弟でもあるんだな、これが。

その縁もあって栄介とも仲良くなった。幼馴染、とはまた違うけど、まあ大切な友人である。

栄介は結構不良っぽく見えるんだけど、実は恐ろしいほどのお人よしでもある。幼稚園からの付き合いである夢子ちゃんが引っ張っていないと、人助けで休日が潰れるレベルの。

小学と中学での遅刻の原因が全て人助けって言う学生も、そうそういないんじゃないだろうか。

「ってか鈴、お前戻ってるなら連絡くれよ！」
「そうよ鈴！　水臭いわねー」
「ごめんごめん、今ＩＳ学園にいるから、ちょっとごたごたしてたからさ」
「ってことはお前、ＩＳ持ってるのか！？」
「そっ、中国の代表候補生よ。っつってもまあ、そのうち企業所属に変わるけど」
「……まじか。で、香織はどこの高校行ったんだっけ？　結局言わずに行っちまったよな？」

おおう、よく喋りますな。

「あー、えっとね、結構遠いところなんだ。うちから通ってるんだけどね」
「そうなのかー」
「で、香織に連絡入れた私が、一緒にこうして買い物にきてるってわけ。二人は何か買いにきたの？」
「夢子が水着見たいって言うからさ。俺も暇だし、こうして来てるわけよ」
「あんた、放っといたら人助けで一日終わるでしょうが！」

それもまた凄い理由でございますね。

「というか、二人って付き合って」
「つつつ付き合ってなんかないわよ！　こいつはただのお、おお、幼馴染なんだからねっ！」
「そうだぜ、俺がこいつとはないって」

……ああ、うん。大体分かったからいいか。
それにしても、なんか凄い昔の知り合いって感じがする。学園で

色々ありすぎたからなぁ……。

「よし、とりあえず写メは一通り撮ったし……、行きましょうか！」
「あいよ。それじゃあな香織、鈴」
「うん、それじゃあね二人とも」
「またそのうちにでも、ね。ばいばい」

ヒラヒラと手を振って、栄介は夢子ちゃんに連れられていった。
頑張ってね、夢子ちゃん。
さて、と。どうしようか。

「……しまった、あの二人にくっついていけば栄介を弄り倒して暇を潰せた！？」
「それはやめてあげよう」

「で、学校では暇だからこっちでＩＳ作りに没頭することにしたと」
「うん……。束社長、迷惑？」
「んーんー、ぜーんぜん！　ぶっちゃけ作るもの全部作ったし、次は何しようかと迷ってたんだよねぇー」

香織達が買い物に出かけている頃、私は一人で本社へと赴いていた。
今日は一人でこちらへ向かうと話したところ、香織から自宅の鍵

を預けられ、香織の自宅からワープ装置でこちらに飛んだ。……もうこれが普通になっている辺り、感覚おかしくなってるね。

「そう言えば、束社長」
「ん、なに？」
「月のコロニーは、どうなったの……？」
「もう出来てるよー」
「そっか、そんなすぐには……、え？」

もう、出来てる？
月だよ？　宇宙だよ？　コロニーだよ？

「見たい？」
「み、見たい！　お願い、見せて、お願いします束社長！」
「ぬっふっふー、オーケーオーケー！　じゃあワープ装置に乗ってねん！　ハル、管制よろしくっ！」
『はい、お母様。良い宇宙（そら）の旅を』

束社長に連れられ、ワープ装置に乗り込む。
あれ、そう言えば宇宙服とかはいらないのかな……。
そんなことを思っている間に突然視界が光に包まれ――。

「――ふぅ。到着！」
「……あれ、もう？」

目を開くと、そこにはまるで今までの光景が嘘のような、夢の景色。
空は漆黒の宇宙が広がり、見渡すコロニー内部は様々な建造物がそびえ立っている。
まさに宇宙コロニーそのものといった景色が、私の目の前に広が

っていた。

「ワープには距離なんて大して関係ないんだよん！　ほらほら、やってきたよ私たちの専用コロニー！　その名も……！」

束社長はとたたっ、と銀色の床で足踏みするかのように歩を進めると、くるりとこちらを振り向く。

「アルカディア・Ｉ（ワン）！」

「アルカディア・？……」

一歩進むと、その一歩はとてつもなく軽かった。月の重力はここでも同じなんだろうか。

そっか、きたんだ。

来たんだ……！　宇宙に！

「束社長！　ここでＩＳ作ってもいい！？」

「おう！　ばんばんやりんしゃい！」

「ありがとう！　起きて、『モーティブ』！」

了承を得るとすぐにモーティブを展開、以前束社長から受け取ったあらゆるデータを次々に読み込んでいく。その中にはお姉ちゃんのＩＳのものもあったみたいだけど、それは自動で弾くようにした。

私は、私だけのＩＳを作る。今のテンションなら、この環境なら、なんだってできる気がした。

次々に表示されるデータを、表示されるのとほぼ同時に捌き続けていく。脳内にあるデータバンクから必要なデータだけを抜き取ると、構築用のデータベースに書き込み、ＩＳの建造に必要な材料、作りたい武装、最高スペックなどを次々に記述。……よし。

「データ完成、後は建造だけ」
「材料なら倉庫にあるよん。マップデータ転送しとくねー」
「ありがとうございます、束社長！　行ってきます！」
「飛び切りいい子に仕上て上げてくれたまえよ！」

頷き、駆け出す。目的の倉庫はすぐに見つかった。
すぐにモーティブの全システムを稼動させると、倉庫の中で必要な材料をピックアップして量子変換していく。
作業が終わると、次はＩＳ本体の製作。
ＩＳコアから繋がる重要箇所を重点的に、コンセプトは最高速の力。
名は、打鉄弐式ではない。あれでは不満だ、まだ先にいけるはず。この宇宙で生まれる、一番新しいＩＳなんだ。それを、私が作るんだ。
もっともっと、もっと凄いものを。
今ならば分かる。束社長が空に、宇宙に行きたいと、その手段としてＩＳを考えたのかを。
最初はきっと、手段として作ったんだ。だけど、いつの間にかＩＳ（この子）たちが自分で『宇宙（そら）に行きたい』と声を上げて、それに束社長（ははおや）が応えたんだ。
なら、私はそれを叶えたい。
空を飛びたいというこの子の希望を、私が叶えてあげたい。

「……待ってて。今、できるからね」

初めて宇宙で生まれる、ＩＳ。

「海！　見えたぁっ！」

ずだだーっと時間が流れて、臨海学校当日。
私達はバスに乗り込んでいました。海へ向かうバスの中でございます。

「香織、どうした？」
「んー、ふーちゃんも簪ちゃんも自分のクラスのバスだなぁ、と思って。あ、他の皆といるのが嫌なわけじゃないけど」

ところで、性別バレしたシャルロットさんはどうしてあんなに上機嫌なんでせうか。誰か教えて。
ともかく、大して動きもなく旅館へ到着。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」
「「「よろしくおねがいしまーす」」」
「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

元気がありすぎるのも問題なのですよ、女将さん。
で、ここでは私はのほほんさん、ラウラの二人、後うちのクラスの人一人と相部屋でございます。ラウラにも協力してもらって、何とかばれるの防がなければ。
ちなみに、個室にしてもらわなかった理由は単純、したら間違いなく何かあるとされてばれるから。めんどくさいね、こういう時って。

お風呂は皆が大浴場に行っているときに自室のお風呂で済ませます。……温泉、入りたかったなぁ。

で、何のかんのがあって社員全員集合。

「それで、香織は泳がないんでしょ？」

「というより泳げるわけないからね。お姉ちゃんがこれ着て写真だけは撮って来いってくれた服はあるけど……」

「葵義姉さんの見立てなら間違いないわね、楽しみにしてるわ」

「……あの、一つお話が」

「なによ簪、かしこまって」

「……この前、宇宙、行ってきた」

……えっと、今の流れで切り出すことかな。あと周りに人はいませんよ、もちろんね。

「で、ＩＳ、完成した……」

「本当に！？　おめでとう簪ちゃん！」

「う、あ、ありがと……」

もしかして、それってつまり簪ちゃんがそのレベルまで達してるってことだよね……。

私、超えられたなぁ……。

「それで、名前は？」

「それは秘密……。明日の調整時間に見せる」

「楽しみにしてるわよ？　なんにしても、これで葵義姉さん以外全員が専用機持ちって訳かー」

なんだかまあ、凄いことになってきたなぁ。

専用機が三機、設備が全て最新鋭の企業とか、どんなチートです

か。
　でも、うん。臨海学校終わったらコロニーに連れて行ってもらおう。今から楽しみだ。
「それじゃ、海行きますか！」
「おーっ！」
「お、おー……」

第２４話　香織ちゃん！　海ですよ、海！（後書き）

ということで、アイマス成分がちょっと混ぜられました。
そして舞台は宇宙まで！　さて、次回は……、自由時間ですよ！

第２５話　最初の日（前書き）

ＩＳの方が更新しやすかったので、先に更新。
以後もＩＳ中心で更新予定です。

第２５話　最初の日

さて、海である。浜辺である。
暑いのである！
もう、どうして日本の夏はこんなに暑いのかな。外国には行ったことないけど。パラソルとか持ってきておいて正解だね……。
とりあえずパラソルを差して、其処にレジャーシートを敷いて、と。ちなみに、このレジャーシートは夏の浜辺用らしく、地面から伝わる熱をカットして、下の涼しさを保ってくれるらしい。この前レゾナンス行ったときに買ってきました。便利なものがあるねぇ。

「これでよし、と」
「わっ、一之瀬さん綺麗……」
「白ワンピースに麦藁帽子って、そうそう似合う人いないのに……！　着こなしてる！」

あははー、これお姉ちゃんが着なさいとチョイスしたものですけどね。ちなみにノースリーブである。
紺色のスパッツ履いてるから、捲られても問題なし。さすが私。で、帽子は典型的な麦藁帽子である。似合ってるのかな。

「香織！」
「ふーちゃん、もう来たんだ」
「あんまり待たせたらダメでしょ？　って、綺麗なカッコしてるわね……。撮影でもするの？」
「綺麗、かな？」
「其処になんで疑問を持っちゃうかなこの子は……。綺麗よ、大丈夫」
「そっか、よかった」

……いや、いいのか？　だんだん最近思考回路おかしくなり始めてない？

ともかく、まあそれはともかくだ。

ふーちゃんの水着はこう、なんていうのかな。上下が分かれてるタイプのセパレートで、上は装飾で紐が付けられてる。下は紐で結ぶタイプだね。黒と橙が多く配色されてるみたい。

活発なふーちゃんのイメージに良く似合ってる、うん。

「それで、他の三人は？」

「簪とのほほんさんがラウラを引っ張ってきてるわ。あんたに見せるのが恥ずかしいって言って聞かないのよ」

「あ、あんまり無理にさせたらダメだよ？」

「大丈夫、あれは恥ずかしいだけで嫌がってはいないから」

それもまずいと思うんだけどなぁ。

そんなことを話しながら、私はとりあえずふーちゃんとパラソルの下へ座り込む。おお、ほんとに冷たかった。

「香織」

「何？」

「辛くない？」

「え？」

「今までずーっとシャワーだし、この三日間も大浴場には入れないんでしょ？」

突然、真剣な声音が耳を打つ。

思いやりの想いで満ちたその言葉は、自然と私の中に染み渡る。

「大丈夫。お姉ちゃんはこれより辛いことしてきたんだと思うし、

ごたごたしてる一夏よりはましだよ」
「……目に見える脅威から身を守るために、公に力を手に入れられる地位と、いつ誰が敵になるか分からない上に、味方がとんでもなく少ない地位じゃ、違いすぎるわよ。一夏だって大変だろうけど、さ」
比べられない。ふーちゃんはそう言って、そっと私の手を握った。
「守るから。アタシが香織を」
「……うん。じゃあ、私がふーちゃんを守るよ」
ふーちゃんを。そして、私の大切な人たちを守る。
私のせいで降り注ぐ火の粉ぐらい、自分の手で払えなければ。あの姉の弟なんだから。
しばらくそうしていた私達の耳に、突然声が飛び込んできた。
「かおりーん！」
「お待たせ、香織……」
「……あの、そのミイラは一体」
「ラウラ、恥ずかしいって」
ええぇー……。
やってきたのほほんさん、簪ちゃんに両サイドから挟まれた、バスタオルを巻いた人らしき物体はもぞもぞと動きながら何とか後ずさりしようと……、怖いです。
「や、やはり無理だ……！」
「かんちゃーん！」
「うん……。えいっ」

そういうと、のほほんさんと簪ちゃんは二人で一斉にラウラの身を包むバスタオルを剥がす。
すると、其処には両サイドの髪をアップテールにして、少しレースのついたセパレートタイプの黒い水着を着たラウラが姿を現す。
これは、ふーちゃんよりも大胆ですよ？

「どうー？　可愛いでしょー」
「うん、すっごく似合ってる。可愛いよ、ラウラ」
「へぅっ!?　か、かか、かわいい、のか？」
「うん！　そう思うよね、ふーちゃん」
「ええ、よく似合ってるわよ」

一言ごとに赤くなっていくラウラを眺めながら、私はそっと笑いかける。
のほほんさんは、なんかパジャマと似たような服ですね？

「防水加工済みぃ～」

え、そうなの。
で、簪ちゃんは、水色を基調にした涼しげな色彩の、これまたセパレートタイプの水着だった。皆普通に似合ってるなぁ。そしてそれに羞恥心を覚えていない私も私だ。

「新しく……買った……」
「よく似合ってるよ、可愛い」
「あ、ありがと……」

よし、じゃあまず早速、一枚目撮ろうか。
皆を撮りやすい所まで移動させると、タイマーをセットしてブロックの上に置く。

急いで皆のところに戻って並ぶと、思い思いにそれぞれがポーズや表情を作って、パシャッという音と共にフラッシュ。あ、ちなみにデジカメです。

「よし、うまく撮れてる。じゃあ次は、皆一人ひとり撮ってみていいかな？」
「いいわよー。皆もいい？」
「うむ」
「うん」
「いいよー」

おお、ありがたい。
と言うことでふーちゃんから撮影開始。ま、全員撮っても五分経ってないけどね！

「これでよし、と。皆ありがと」
「いいっていいって。じゃあ、私達は泳いでくるわね」
「うん。あ、ちゃんと準備体操していってね」
「分かってるわよ。ほら皆、行きましょ！」

ふーちゃんが先導し、皆は私に遠慮しながらも海へと走っていく。
……楽しんでね、皆。
さて、私はじゃんじゃん撮るとしようかな。その前にお茶飲もっと。

午後七時半、現時刻である。
昼食を挟んだ自由時間を満喫した私達は、夕食をいただくために大広間三つをぶん抜いて繋げた大宴会場で正座していた。
ちなみに、全員浴衣。この宿の決まりで、食事をするときには浴衣を着ていないといけないらしい。このときにもちゃんとブラとスパッツは履いています。死角はないよ！

「ん、おいしっ」
「なるほど、魚を生でと言うのはこういうことか」
「どうだと思ったの……」
「いや、サバイバルで食べたああいうものだとばかり」

それは明らかに間違えているよ！
それにしても、高校生に出すような食事じゃないね。本わさにカワハギってどうなのよ。最近めっちゃ高いのに。

「それにしても、一夏の周りは相変わらずだねぇ」
「一夏ですから」
「おりむーだからねぇ」

あ、ちなみに私の両サイドはラウラとのほほんさんです。ラウラ、意外と箸使えるんだね。
しばらくのんびりと食事をしていると、一夏のほうがなんだか騒がし、あ、千冬さんが。

「お前達は静かに食事することができんのか」
「お、織斑先生……」
「どうにも、体力が有り余っているようだな。よかろう。それでは

今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。五〇キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！　とんでもないです！　大人しく食事をします！」

砂浜五〇キロかぁ……。普通の道ならいけるけど、砂浜だと砂に足をとられるからなぁ……。かなり時間掛かりそう。というか、あの砂浜ってどのぐらい長いんだろ？

「あーかおりん、走ってみたいって顔してるー」

「えっ！？　ち、違いますよ！？　砂浜がどんな感触なのかなーとか、普段のタイムだけ走ったらどれだけ遅くなるのかなーとか、思ってませんよ！？」

「香織、トレーニングマニアか？」

「あはは、……若干」

最近トレーニングメニューが増えていたりするのもそのせいです。体力大分ついたしなぁ。

で、食事が終わった後は皆大浴場に行ったので、すぐに部屋のお風呂に入る。

でもこれでも、普段よりよっぽど広いし、しかも浴槽に浸かれるという、ね！　これだけで満足。

「うはぁ……、癒される……」

『浴槽とシャワーでは違うのですか？』

『うん、ぜんぜん違うよ。こう、浸ってる感じが、じわーっと体をほぐしてくみたいな』

『じわーっ、ですか』

んー、イヴには分かりづらいかなぁ……。

っと、あんまり長風呂してばれてもまずいし、もう少ししたら上

がろう。
　それにしても、随分遠くまできたなぁ……。最初の頃はこんなになんていうか、大事って言うのかな。そういう風になるなんて考えても見なかった。
　でも、悪くない。
　ぼんやりとした頭でそんなことを考えながら、お風呂から上がるといつものように服装を整える。ブラジャーつけて、その上に浴衣着て、と。

「これでよしっ」

　さて、それじゃあ用事を済ませよう。
　今日撮った写真の中で、千冬さんに渡しておく写真だけを別のメディアに保存して、それのチップを抜いてから部屋を後にする。
　多分今の時間ならまだ千冬さんは部屋にいるだろうし、早めに渡そう。
　部屋から出て、小走りに廊下を進んでいくと、向かいから洗面道具を桶に入れた一夏がやってくるのが見えた。

「お風呂ですか？」
「ん、ああ。香織はどこいくんだ？」
「ちょっと千冬さんに渡すものがあって。部屋にいますか？」
「ああ、多分いると思うぜ」
「わかりました。それじゃあ、楽しんできてください」

　おう、と返事を返した一夏は楽しそうに温泉へと歩いていった。
　あれは本当に楽しみにしてる顔だなぁ。温泉、入ってみたいなぁ……。
　よし、夏休みに旅行に行こう。それでたっぷり温泉に使って、海で遊んで。お姉ちゃん達と一緒に。

考えながら廊下を進み、千冬さんのいる教員室の襖、その横の壁をトントンとノックする。

「織斑先生、一之瀬です。お時間よろしいですか？」

「ん、ああ。開いているぞ」

しゃっと襖を開けて中へ。まあ、鍵のかかる襖なんてないからね。普通に考えれば。

部屋の奥では、浴衣姿の千冬さんが片膝を立てて座っていた。なんか、膝の上に腕乗せて、ビール掴んでたりしたら様になりそうな格好です。

「で、どうした。何か用事か？」

「昼間に撮った写真のデータをお渡ししようと思って。何か、保存できるものはありますか？」

「ああ、ならこれに入れてくれ。すまんな」

「いえ、海に入れない分楽しませてもらいましたから。入れるの、ここでいいんですか？」

「ああ。しかし難儀なものだな、お前も」

「好きでやっていることですから。それに、少しずつ前に進んでます」

ようやく宇宙へいける道が出来たんだから。

千冬さんもその意味に気づいたらしく、にやっと笑みを浮かべると、私の頭をわしゃわしゃと乱暴に撫でてくる。

「ひゃっ！？」

「……無理だけはするなよ。お前を慕っている奴らはたくさんいる」

「……はい」

いつもと違う、千冬さんの温かな言葉に、思わず笑みを浮かべながら手元で作業を進める。

ビーチバレーをやっている写真や、一夏と千冬さんのツーショット、クラス全員が納まった写真。どれも、二度と取れない一品物だ。

全ての画像を保存し終えると、メモリーを抜いて端末を千冬さんへと返す。

「はい、どうぞ」

「ん、すまんな」

「せっかくですし、マッサージでも如何ですか？」

「出来るのか？」

「お姉ちゃんにやってましたし、心得くらいは。どうぞ、横になってください」

「なら、甘えさせてもらおう」

そう言って、千冬さんはごろんとうつ伏せに寝転がる。

よし、久しぶりに張り切ろうかな。

以後は音声のみでお楽しみください。

「固いですね……。お疲れ様です」

「ふ、いつもお前達に手を焼かされているからな……、んっ」

「ふふ、こちらはどうですか？」

「あ、ああ、いいぞ……、んぅっ、っはぁ……！」

「んっ、しょっ」

「ふ、っくぅ……！　い、いたっ！」

「大丈夫です、今ほぐしてますから」

「も、もうちょっと、加減を……」

「すぐよくなりますから、大丈夫ですよ。ほら、気持ちよくなってきたでしょ？」

「ふあぁ……！　あ、ああ……」
「……」
「……」

……おや、千冬さんが黙ってしまった。
どうしたんだろ、痛かったかな。

「そこで盗み聞きしている連中、入って来い」
「ひゃっ！？」
「きゃあああああ！！」
「うわっ」

どさどさと襖を倒して雪崩れ込んできた数名。えっと、箒さんにふーちゃん、セシリアさん、簪ちゃん、と。……何をしてるのかな。この子達は。

「えっと、皆、何を？」
「……盗み、聞き？」
「た、たまたま通りがかったら織斑先生の色っぽい声が聞こえてつい興味をそそられたとか、もしかして香織と織斑先生が……ょっといけないことしてるんじゃないかとか思ってたわけじゃないんだからね！？」
「見事な自爆ありがとう、ふーちゃん。ただマッサージしてただけだよ？」
「一之瀬、そろそろいいぞ。ああ篠ノ之、デュノアとボーデヴィッヒも呼んで来い」
「はい」
「は、はいぃ！」

箒さん、そんなに千冬さんが苦手ですか……。なぜか脱兎の如く

駆け出していったんですが。
しかし、お話でもあるのかな？

「あ、あの、織斑先生。一夏さんは……」
「あいつなら風呂だ。しばらく待っていれば来るだろうから、その間に話を済ませるか」
「話、ですか」
「と言っても、関わってくるのは篠ノ之、オルコット、デュノアの三人だけだがな。他の連中の分もあるし、丁度いい」

そんなことを言っている間に、箒さんがシャルロットさんとラウラをつれて戻ってきた。一夏は不在である。

「おお、香織もいたのか」
「こんにちは、ラウラ。シャルロットさんも」
「うん、こんにちは。というか、こんばんは？」

ああ、確かにこんばんはですね。ええ。もう夜だし。

「それで、話というのは？」
「まあその前に、全員座れ。飲み物でも奢ってやろう。篠ノ之、何がいい？」
「わ、私ですか？！　えっと、その……」

そして固まる。ラウラは若干緊張しているみたいだけど、こっちのメンバーは立場上千冬さんとよく話すこともあるから、そんなに緊張することもない。
けど、箒さん達はやっぱり異常に緊張しているのか、ガッチガチのまま声を出せそうにない。

「通夜にでも来てるのかお前らは……。そら、欲しい奴があれば取り替えてもらえ」

そう言って、千冬さんはわたし達全員に別々のジュースを手渡していく。

「ありがとう……ございます……」

「ありがとうございます。いただきます」

簪ちゃんがこくりと頭を下げ、私もそれに倣って会釈程度に頭を下げると、手渡されたウーロン茶を開けて一口。

それが皮切りになったのか、他の皆も口々に礼を言うと一口呷って息をついた。

「飲んだな？」

「飲みました、けど」

「なな、何か入っていますの！？」

「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」

そう言って、千冬さんは新しく冷蔵庫から一本の缶ビールを取り出すと、ゴクゴクと喉を鳴らして飲み込んでいく。

……あの、汗が首筋に見えて、ちょっとえっちぃというか。

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが……、それは我慢するか」

上機嫌に言う千冬さんをぽかんと見ているのは、箒さん達の一夏グループ（仮）とラウラの四人。まあ、普段の千冬さん見てたらありえないと思うよね。

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ、酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」
「い、いえ、そういうわけでは……」
「ないですけど……」
「でもその、今は、仕事中なんじゃ……？」
「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

その言葉に、一夏グループがさっと手元を見る。そのジュースが口止め料なんですね。
うーん、やっぱり少しおつまみが欲しいなぁ……。でも材料ないから何も作れない……。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか。お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

と、千冬さんが一夏グループへ向けて言葉を投げた。
ああ、つまりそういう意味でのお話ですか。頑張れ女の子。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですので」

と言うのは箒さん。
頬を染めて恥ずかしそうに言っているのがなんとも。一夏もよくこれで落ちないな。あ、普段は手を上げてばかりだからか……。恥ずかしさゆえに。不憫な。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

セシリアさん、そんなこと言っても本心隠せてませんよ。

「僕――あの、私は……やさしいところ、です……」
「ほう。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ」
「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなぁ」

そういうのはシャルロットさん。多分一夏が一番マシと言うか、まともに接している人じゃないだろうか。
他の人は、照れ隠しに手を出してしまったりするからなぁ……。
逆に言えば、一夏はあまり女性としてみていないと言うことにもなるんだけど。ほら、好きだけど恋愛対称にならないって言う、あれ。

「ふむ……、まあなんにしてもだ。あいつは役に立つぞ。家事も料理も中々だし、マッサージだってうまい。付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」
「「「く、くれるんですか!?」」」
「やるかバカ」

残念そうに項垂れる三名。うん、まあ頑張れ。

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」
「で、なぜ私達はここに留められてるんでしょうか？」
「ん、ああ。鈴音、簪。お前達は先日付けでバインドカンパニーの正式所属となった。明日いきなり伝えられるより言いかと思ってな、今伝えることにした」

……おう、いきなりですね。
ふーちゃんと簪ちゃんはポカーンとした顔で私と千冬さんの顔をチラリチラリと。なにさ。

「で、それに伴ってお前達二人の国籍が不明になった。国籍不明の企業所属になっているから、これから面倒だぞ？」
「……大丈夫です！」
「……はい」

あの、ですね。お話が急すぎてよく分からないと言うか千冬さんなんで知ってるんですか？

「私はあのバカの友人だ、そのぐらいは聞きだせる。そっちの四人も、このことは他言無用、もし漏らせば社会的に死ぬと思え」
「あ、あの、話が飲み込めないのですが……」
「それは明日わかる。今はとりあえず「言ったら死ぬ」とだけおぼえておけばいい」

ビールのついでだ、と千冬さんは軽く笑いながら言ってのけた。けど、その、いいのかな？　これで。
だからこの混乱の中で聞き逃していた。千冬さんが「明日分かる」と言ったその意味を。

第２５話　最初の日（後書き）

はい、ということで正式に鈴と簪の国籍と所属がバインドカンパニーに移りました。
次回からは怒涛の展開、お楽しみに！

第２６話　荒れだす空（前書き）

この辺は一気に書けそうなので、更新ペースは速めです。

第２６話　荒れだす空

合宿二日目。
今日は丸一日、ＩＳの各種装備試験運用とデータ取りに追われることになる。まあ、私達バインド・カンパニー所属は関係ないんだけど。

「ようやく全員集まったか。――おい、遅刻者」
「は、はいっ」
「そうだな、ＩＳのコア・ネットワークについて説明してみろ」
「は、はい。ＩＳのコアは――」

以後割愛。ちなみに喋っているのは千冬さんとラウラである。
世にも珍しくラウラが寝坊して朝の集合に遅刻してしまったのです。ほんと、珍しいこともあるもんだ。
で、ラウラがコア・ネットワークについてを説明し終えたところで、千冬さんの号令がかかる。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

全員が一斉に返事をして、バラバラに散っていく。
ちなみにここはドーム状になっている上に四方を切り立った崖に囲まれている。どう考えても自然の物でない辺り、結構無茶したんだろうと想像がつく。
ここに来るには一度水面下に潜り、水中のトンネルに入らなければ行けない。無論外に出るときも同様である。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

がしゃんがしゃんと打鉄用の装備の一部を運んでいた箒さんが、千冬さんに呼ばれてそっちへと歩を進める。

「お前には今日から専用――」

「ちーちゃぁぁぁぁぁぁぁん！！」

砂煙を上げながら走ってくる人影。私の知りうる限りこのような漫画チックなばかげたことができるのは、あの人しかいるまい。

「……束」

「束ちゃん、何してるんだこんなトコで……」

まさかこんな堂々と乱入してくるとは……。さすがの私も予想外です。あれ、ふーちゃんと簪ちゃんが驚いてないぞ？

「やあやあ！　会いたかったよ、ちーちゃん！　さあ、ハグハグしよう！　愛を確かめ――ぐふぅっ！？」

「はい、織斑先生に迷惑掛けちゃいけませんよー」

「ぐるぢい、ぐるぢいよ香織ちゃん……？！」

「反省しました？」

「じだじだ、じだがらぁぁぁぁ」

「ならよし」

後ろから束ちゃんの襟首をがしっと掴んで止めていたのだけど、反省したようだから手を離す。

全く、あのスピードで突っ込んできたら危ないでしょうに。

「よくやった、一之瀬」

「いえいえ、即座にアイアンクローの構えに入った先生ほどでは」
「慣れているからな」
「……心中お察しします」

今だからまだしも、昔からこれをやられていたらそりゃあ慣れもする。と言うか、この人の人間離れした身体能力は束ちゃんにつき合わされたからじゃないのだろうか。疑ってしまうよ。
で、その束ちゃんはというと。

「やあ！」
「……どうも」
「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」
「殴りますよ」
「な、殴ってから言ったぁ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！　ひどい！　箒ちゃんひどい！」

うーん、束ちゃんってば、寂しいのを無理やり隠してるね。不器用さんだ。
そして箒さん、それは痛いです。間違いなく痛いです。

「え、えっと、この合宿では関係者以外――」
「ん？　珍妙奇天烈なことを言うね。ＩＳの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」
「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……」

山田先生が沈められました、救援を。
などとふざけていたら場がさらに混乱するので、この辺で収めよう。

「束ちゃん、自己紹介」
「えー？　めんどくさー」
「た　ば　ね　ち　ゃ　ん」
「はいっ！　篠ノ之束だよ、よろしくね！」
「……やるな、一之瀬」

え、何がですか。ちょっと凄んでみただけなんですが。
それにしても、ちゃんと挨拶したようで良かった良かった。人間関係って大事ですよ。

「まあいい、そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」
「こいつはひどいなぁ。らぶりぃ束さんと呼んでいいよ？」
「うるさい、黙れ」

おお、さすが旧知の親友。あしらいと罵倒に躊躇いがないですね。勉強になります。

「え、えっと、あの、こういう場合はどうしたら……」
「ああ、こいつはさっきも言ったように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」
「わ、わかりました」
「むむ、ちーちゃんが優しい……。束さんは激しくじぇらしぃ。このおっぱい魔神め、たぶらかしたなー！」
「はいやめなさい。簪ちゃん、ふーちゃん」
「うん……」
「はいはい」

二人にも協力を要請して、山田先生へ向かっていこうとする束ちゃんを確保。私と簪ちゃんで両脇を抑えて、ふーちゃんが襟首をが

しっと。

「ぬお？　こらー、三人とも放せーぃ！」
「だめです、放したら山田先生襲うでしょ」
「いいじゃんいいじゃん！　セクハラは青春の花だぞー！」
「そんな花なら枯れてしまえ」
「か、香織ちゃんの突込みがきついっ！？」
「とにかく、襲っちゃダメです。いいですね？」
「はーぃ。ぶーぶー、つまんないよー」
「というか、他に用事があったんじゃないんですか」
「おぉ、そうだそうだ！　ありがとね香織ちゃん！」

一通りコントを終わらせると、大人しくなった束ちゃんを解放する。まったく、エネルギー満ち溢れてるなぁ。

「あ、あの、それで、頼んでおいたものは……？」
「うっふっふっ、それは既に準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

ズビシャッ！　と言う具合に直情を指差す束さん。

「……ラストシューティング」
「懐かしいですね」

まさかここでガン○ムとは。どっちかって言うとガイナックス風味じゃないですか？

「……トップをね○え？」
「ああ、ありですね」

まあそんなことはどうでもいいか。
しばらくすると、ゴオオオォォォォなんて音と共に上空から何かが……、ゴオオオォォォォ？

「月からの直送便でございまーす！」
「やめぇぇぇぇい！？　イヴ！」
『はい！』

即座にＩＳを展開、周囲全体を守るように《夜羽》を広げる。
若干漏れはするけど、全員を守る分にはこれで十分！
直後、轟音と共に大量の砂が巻き上げられ、その何かが地面に突き刺さった。

「……生きてる？」
「おー、結構な迫力でしたなー！」
「束ちゃん！　今の禁止！」
「えー？　かっこよかったでしょ？」
「それで人が死んだら意味がないからね！？　とにかく、緩和装置でもつけない限り禁止！　いいね！」

全く……。
とにかく、怪我人はいないみたいだしまあいいか。今は。
しかし、まさか月のコロニーから落としてきたの？　束ちゃんのことだから感知されるヘマはしてないとしても、また随分と……。
なんてことを考えていたら、墜ちて来た金属塊の前面がぱたりと開いた。

「じゃじゃーん！　これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿（あかつばき）』！　全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ！」

その言葉と共に、中に格納されていた真紅の装甲が動作アームによって外に出される。

「さあ！　箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！　かんちゃん、データ送るから一緒によろしくー！」

「ん……」

「……それでは、頼みます」

「堅いよー。実の姉妹なんだし、こうもっとキャッチーな呼び方で――」

「はやく、始めましょう」

むぅ、なんだか箒さん、頑なだなぁ……。

そりゃあ束ちゃんのあの態度にも問題はあるだろうけど、察してあげられないかな。……無理か、多感な時期だもんね。いや、私もだけど。

とにかく、簪ちゃんと束ちゃんが並んで移動式ラボを起動させると、束ちゃんがリモコンのボタンを押した。すると、紅椿の装甲が割れて操縦者を受け入れる体勢に。しかも膝を落として乗り込みやすい姿勢に変わった。

「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新データに更新するだけだね。さて、ぴ、ぽ、ぱ♪」

束ちゃん、ぴぽぱなんて速度じゃないです。簪ちゃんも視線をあちらこちらに移しながら五枚の投影型ディスプレイにデータを映し出しながらキーボードを叩き続けている。速い。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。あとは自動支援装備もつけておいたからね！　お姉ちゃんが！」

「それは、どうも」

もくもくと作業を続ける簪ちゃんと対照的に、束ちゃんはべらべらとお喋りしながら作業を続けている。それでも簪ちゃんの作業速度が追いつけない辺り、さすが天才か。

「んー、ふ、ふ、ふふー♪　箒ちゃん、また剣の腕前が上がったねえ。筋肉のつき方を見れば分かるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなぁ」

「……」

「えへへ、無視されちった。――はい、フィッティング終了ー。超早いね、さすが私」

「こっちも終わった……」

「うん、お疲れ様かんちゃん！　モーティブにも慣れてきたねー」

そういうと、束ちゃんは自分の移動式ＩＳラボの末端でモーティブを撫でる。まるで自分の手足のように動かしているのを見つつ、再度紅椿を眺めてみる。

コアは作りたて、生まれたてだ。弱弱しくも力強い、矛盾しているものの正常な鼓動を感じられる。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？　身内ってだけで」

「だよねぇ。なんかずるいよねぇ」

むっ、コネは最大限活用するためのものですよ？

大体、姉が妹に贈り物をするののどこがおかしいんだい？

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？　有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

にやりと笑みを浮かべ、声がしたほうを向かずに束ちゃんはそう言ってのける。まあ、それ言ったら世の男性は「どうして俺たちにはＩＳが使えないんだ」と声を荒げるだろうし。そういう次元のお話なんだよ。

「後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくん、白式見せて。束さんは興味津々なのだよ」

「え、あ。はい」

束ちゃんに言われ、一夏が白式を呼び出す。

その白式の背部へとコードを突き刺すと、ディスプレイを呼び出してふむふむと唸る。

「ん～……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろ？　見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな？」

「束さん、そのことなんだけど、どうして男の俺がＩＳを使えるんですか？」

「ん？　んー……どうしてだろうね。私にもさっぱりだよ。ナノ単位まで分解すれば分かる気がするんだけど、していい？」

「いい訳ないでしょ……」

「にゃはは、そう言うと思ったよん。んー、まあ、わかんないならわかんないでいいけどねー。そもそもＩＳって自己進化するように作ったし、こういうこともあるよ。あっはっはっ」

……独自の、フラグメントマップ。確か、フラグメントマップは人間で言う遺伝子のようなもの。

とすれば、その配列を参考にすれば……？

「束ちゃん！」

「ん、なんだい香織ちゃん？」

「白式のフラグメントマップをサンプリングしてＩＳを作れば、男性でも起動できるＩＳを作れませんか？？」
「……ふむ、フラグメントマップ自体を設計図にしちゃうってこと？　とすると、成長の仕方まで白式に似ちゃうかもね……。でも面白いアイデアだねん、やってみる価値はありそうだよ？　まあ、いつやるかはわからないけどー」
「じゃあ、そのうちに」
「おーけーおーけー！　任せんしゃい！」

うん、これがうまくいけば、まあそんなにうまくいくわけはないけど、一歩前進できそうだ。でも、なぁ。
それが出来たとして、そしたら今度は戦争になりそう。それは嫌だ。暫くは、安定目指すしかないんじゃないかな。
で、そのまままうんにゃかうんにゃか喋っていると、突然束ちゃんが思い出したように耳を立てた。文字通り。

「そうだよそうそう思い出した！　りんちゃん、かんちゃん！　二人は既にうちの企業所属になってるので、国籍も違いますー！」
「……あー、そうか、昨日の話ってそれかー」
「それで、どこになってるの？」
「月面コロニー『アルカディア・？』だよん。だから二人は、アルカディア・？代表ってことになるかな？　まあ、それ言ったらうちのは皆そうなんだけどねー」

ふむ、と言うことは私もそうなるわけか。あれ、お姉ちゃんも？

「うん、あーちゃんもそうだぜぃ！　うははは、束さんの科学力は宇宙一ィィィィ！」
「シュトロハイム少佐やめてください」

しっかしまあ、一度も行ったことない場所の代表ってのも変な感じだなぁ……。

まあ、これが終わったら行くんだけどね？

「えっと……。これからよろしく、束社長……」

「よろしく、束社長」

「うむ、よろしくねん！」

はい、ということでとりあえずこれにて一件落着かな？

で、箒さんが紅椿を軽く飛ばした後、突然山田先生が駆け寄ってきた。

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

「どうした？」

「こ、こっ、これをっ！」

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼動をしていた――」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ぜ、全員揃ってます」

そこから先は、なぜか手話で会話をする千冬さんと山田先生。あの慌て方からして、相当やばいことらしい。

「束ちゃん」

「はいはーい。今仕掛けてるからチョイ待ちー……、出たよん、データ送るねー」

束ちゃんの高速ハッキングによって手に入ったデータが、社員のＩＳへと送られる。

其処に乗っていたのは、ハワイ沖で試験稼動をしていたアメリカとイスラエル共同開発の軍用第三世代ＩＳが暴走したと言う事実だった。しかも、今だ事態は沈静化されておらず、あちらの監視空域を離脱しているらしい。

「……最悪の展開ね」

「束ちゃん、向こうのほかの軍用ＩＳが動いてるって情報は？」

「ないね。というか、出す気もないらしいよ？」

……最悪だ。本当に最悪だ。

このまま放置していれば、間違いなく一般への被害が出る。

「全員、注目！　現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？　なんで？　特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

にわかに騒然とし始める女子。それを、千冬さんの怒号が鎮めた。

「とっとと戻れ！　以後、許可なく室外に出た者は我々で身柄を拘束する！　いいな！」
「「「はっ、はいっ！！」」」

その言葉に、全員がすぐさまＩＳを片付け始めた。

「専用機持ちは全員集合しろ！　織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰、更識、一之瀬！　――それと、篠ノ之も来い」
「はい！」

箒さんは妙に張り切ったような声でそう返事をする。
十中八九あの軍用ＩＳについてのことだろう。そして、それで千冬さんがあそこまで焦ると言うことは……。
どうやら、本当に命を賭けなければいけないことが起きているらしい。――くそったれ。

第２６話　荒れだす空（後書き）

とうとう始まった福音事件。香織たちはどういう判断を下すのか。
次回、乞うご期待！

第27話　止められぬ道（前書き）

連続投稿ー。
このまま戦闘まで書こうかな……。

第27話　止められぬ道

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥、宴会用の大座敷『風花の間』では、私達専用機持ち全員と教師陣が集められていた。

照明を落とし、全員が見える位置に大型の空中投影ディスプレイが表示されている。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

その言葉に、一夏が周囲をさりげなく見渡す。もっとも、緊張によってそれはぎこちないものになっていたが。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして五〇分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

「……先生、発言の許可を願います」

「許可する、一之瀬」

「まずその上層部の判断ですが……、それは強制権がありますか？」

「ない。参加は任意だ」

「では次に、アメリカとイスラエルの他の軍用ＩＳについて、福音を追跡しているＩＳはいますか？　また、この上層部の判断はアメリカとイスラエルに要請されてのものですか？」

「現状、福音の速度に追いつけるＩＳが存在していないため、追跡は衛星でのみ行われている。上層部からは要請があったとは聞いていないな」

……まずい展開だ。

話からすると、福音は私たちが止められるレベルじゃない。うまく行けば何とかなるだろうけど、被害は大きくなるだろう。

しかもこの状況からして、上層部はどこからかその情報を入手し、独断で動いていることになる。となれば、私たちが死んでも状況は隠蔽されるだろう。

そしてなによりも、許せない。暴走するということは、福音は何らかの干渉を受けたか、許しがたい行為をされたかのどちらかだ。そうでなければ暴走なんて有り得ない。……兵器だと、思っているのだろう。酷い話だ。

「つまり、我々がこの作戦に参加し、万が一誰かが死亡しても、公表されることはないということですね」

「なっ！？」

「か、香織さん！？」

「……そういうことになる」

「……わかりました、私からの発言は、今は以上です」

一礼して、着席。心中穏やかではなかった。

これは要するに、上層部が利権を得たいがために先走った結果だろう。普通ならばまだ実戦経験のない、しかもスポーツ用のＩＳで暴走した軍用ＩＳを止めろなどとは言わないはずだ。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

ほら、その通りになった。

「それでは作戦会議をはじめる。意見がある者は挙手するように」

「はい」

セシリアさんが手を上げた。

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二ヵ国の最重要軍事機密だ。決して口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視が付けられる」

「了解しました」

勝手な話だね。止めろと言っておいて。

大人って、これだから嫌だ。千冬さんだって、内心穏やかなはずがない。

そう考えている間にも、皆が相談をはじめていた。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。丁度本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも分からん。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

その山田先生の言葉に、全員が一斉に一夏の方を向く。
だからさ、なんで皆自分のことも考えずに戦おうとするのかな。
それっておかしいじゃん。
なら、私が代わりにそれをやろう。

「ところで！」
「なんだ、一之瀬」
「この件、報酬はどうなるんでしょうか？」
「報酬？」

何を言っているのか、といった感じで千冬さんがこちらを見る。
そう、報酬だ。まさか上層部も、何の出費もなしにこれを片付けられるだなんて、甘いことを考えているわけではあるまい。そんなもの、私が許すものか。

「はい。ただでさえ専用機持ち、つまり国家代表候補や企業代表は貴重な人材です。しかも私たちは皆一五歳の子供だ、報酬の一つや二つ、なければ逆に不誠実でしょう」
「……そう言った話は聞いていないが」
「簪ちゃん、ディスプレイ出して」
「ん」

私の意図を悟った簪ちゃんが、投影ディスプレイとキーボードのセットを出すと、私のほうへ移した。
軽く頭を下げてから、ディスプレイを指し示した。

「まず、参加者全員への報酬、合計二一億。この程度は出せるでしょう」

がしゃん、とお金が鳴る音と共にディスプレイに表示された各々

の名前の脇に、金額が表示される。

「加えてアメリカ、イスラエル両国への、福音がもたらす災厄による風評被害を未然に防げることを鑑みた上で、各国から毟り取れる分を加えれば、と」

そうしてはじき出された金額は、各員五億程度。ただし、七人揃えば三〇億を軽く越える上に、最前線に立たされるであろう一夏には更に報酬が上乗せされている。

「この程度、さらりと払ってもらわなければ動く気にはなれませんね」

「一之瀬、お前……」

「香織さん、本気で言ってますの!?」

「何がですか？」

意外にも、突っかかってきたのはセシリアさんだった。一夏か箒さん辺りが突っかかってくるかと思ったのに。

「お金が払えなければ戦わない、そういうつもりですの!?」

「私だって止めてあげたいです。でも、現実問題私達は命を失う危険性のある相手と戦わなければいけない、しかもこれは半強制だ。私は上層部の小間使いになるつもりはないんです」

そう、これを無償で受けてしまえば、上層部は味を占めて次々に厄介ごとを抱え込む可能性だってある。いわば、この程度をさらりと払うくらいの度胸がないなら、自分達で頭を捻れと言うこと。

「それに、私たち自身の問題でもあるんですよ。もしセシリアさんがこの戦いで大破して、万が一死んでしまったとします。その場合

イギリスはアメリカとイスラエルに猛抗議、最悪戦争になる可能性だってある。生き残って事件が解決した後に彼らが抗議を受けないために、お金を出して口を噤んでいてもらう。これは交渉として当たり前のことです」

「しかし！　戦わなければたくさんの人が犠牲になるかもしれないのですよ！？」

「私は他人を守るために皆を失いたくないんです！」

ドンッ、と机を叩いて叫ぶ。

この世の中で最も分かりやすい誠意の形の一つが、金だ。それを支払うと言うことは、一定の誠意を見せると言うことでもある。

上層部に「お金を払いますから何とかして、我々の対面を保ってください」と言わせなければ、私達はただの小間使いだ。

「……私は、賛成。そもそも、私はもう日本の代表候補じゃない……。学園のために戦ってやる必要性も無い」

「まあ、冷静に考えればそうなんだけどね。私は金が支払われるなら動くわ。まあ、そうじゃなくても胸糞悪いから動いちゃうかもしれないけど」

簪ちゃんとふーちゃんが続いて言う。

けれど、まだセシリアさんは納得していないらしい。そこに加えて、箒さんが立ち上がった。

「香織、何を恐れている？　死ぬことはないだろう、絶対防御があるのだから。そして、私たちの手には止められるだけの力がある、やらない意味がどこにある？」

「ショック死ということも有り得ます！　これは実戦、何が起きるか分からないんです！　もしＩＳが何かの拍子に動かなくなってしまえば、それはイコール死に結ばれるんですよ！？」

その感覚を、私は知っている。何度も何度も気を失い、死の淵に触れそうになってきた。我ながら、よく生きているものだと感心してしまうが。

梟は絶対防御がないばかりか、シールドバリアすらかなり脆い。銃弾一発で砕け散るレベルだ。

まあ、知っているのはふーちゃんと束ちゃんだけなんだけども。あとイヴとハル。

「織斑先生、最低一人頭五億。この報酬と十分な情報管制、今回の件で起こり得るすべてについての我々のサポート。このすべてを取り付けられますか？」

「……わかった。確かに、学生だからといってお前達の人権がなくなるわけではない。それに、お前の半強制という言葉も頷けるからな」

どれだけこのＩＳ学園がしっかりしているといっても、所詮は人の動かすものだ。私情など幾らでも入ってくる。ここで参加しないものが出れば、その人は気まずいまま三年を過ごさなければならなくなるかもしれない。人の命を救えるのに救わなかったクズだとか、そう言った汚名がついて回る。あまり女尊男卑な教師はいないといっても、やはり傾向はある。女の面汚しだとか言い出すものもいるだろう。

それを避けるためには、やはり参加するしかない。考えれば考えるほど泥沼に嵌る嫌な仕様だ。

「では、私は参加します」

「……なら、私もいい」

「決まりね。一夏、話は決まったわ。あんたは参加するの？」

「……俺は……、行くよ。金がどうとかってのじゃなしに、助けら

れるものを助けないでいるのは性に合わないんだ」
「オーケー、ならアンタの零落白夜で落としなさい。一撃ですべて持っていける攻撃はそれしかないわ」
「ですわね。ですが、問題は――」
「どうやって一夏を其処まで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」
「しかも、目標に追いつける速度が出せるＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

話が纏まり、皆が意欲的に話を進めていく。
さて、それじゃあこっちも支度をしよう。死なない支度を、ね。

『イヴ、最高速ってどれくらい出せる？』
『《夜羽》展開状態でしたら時速三〇〇〇キロ程度かと』
『その状態での戦闘は難しいか……。分かった、ありがと』
『いえ、無茶をサポートするのが私ですから』

うーん、イヴの中での私の評価ってどうなってるんだろうね？
……自殺志願者、とか？　いや、ないない。あって溜まるかって。

「よし、それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」
「それなら、私のブルー・ティアーズが。丁度イギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」
「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」
「二〇時間です」
「ふむ……。それならば適任――」
「待った待ーった。その作戦はちょっと待ったなんだよー！」

突然、天井から声が降ってくる。
その底抜けに明るい声は、束ちゃんだった。

「……山田先生、室外への強制退去を」
「えっ！？　は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」
「とうっ！」

空中で一回転、その後着地。この上下が狭い部屋の中でよくそんなことが……。
もうこの人についてはあんまり何かを気にしたら負けなんだと思うようにしよう。うん。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」
「……出て行け」
「聞いて聞いて！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」
「なに？」
「紅椿のスペックデータ見てみて！　パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！」

そう言って表示されたのは、紅椿の速度データ。其処には、福音の最高速度を優に越した数値が表記されていた。
でも、なぁ。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいほいっと。ホラ！　これでスピードはバッチリ！」

その言葉の後、不思議そうに首を捻っていた一夏へと説明をするべくこちらへ向く。

と、その直後。

『聞こえるかな、香織ちゃん』

『束ちゃん！？』

『今個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）でそっちと話してる。簡潔に状況だけ説明するね。私は、紅椿が活躍できる舞台を用意しようとして、福音のコアにお願いしたの。ちょっと暴走してもらえないかって言って、向こうはすぐ了承してくれた。けど、その後が問題だったの』

『後……？』

『うん。あの子が飛び去ったすぐ後に、福音は強制的にウィルスによってデータを書き換えられた。しかもすべてのＩＳを敵だと思い込ませられてしまって、最後の最後で何とかそのデータが流出しないようにコア・ネットワークとの通信を切断したの』

『つまり、これは束ちゃんの予想外のことってこと？』

『うん。だから、お願い。あの子を、苦しんでるあの子を助けてあげて。箒ちゃんは、もしかすると浮かれちゃっているかもしれないから。そんなにやわな子じゃないって、信じてるけど』

……全く、この人は馬鹿だ。大バカだよ、天才なのに。

けど、この事態になっているのは束ちゃんのせいじゃない。遅かれ早かれやられていただろうから。

ウィルスやこの悪質な暴走の原因は、他にあるってことが分かっただけでも十分だ。……助けよう。

『分かった、やってみる』

『……ありがと。ごめんね、ダメな社長さんで』

『今後は気をつけるように』

最後はわざと明るくそう注意してから、意識を切り替える。

どうやら束ちゃんはこうして話している間に口頭でＩＳの説明を

終えていたらしく、どうやら箒さんが紅椿で一夏と白式を運び、一撃で叩きおとすことにしたらしい。

「織斑先生」

「なんだ、一之瀬」

「私の梟なら、単身でですが最高三〇〇〇キロは出せます。サポートとして付けていただけませんか」

「……わかった。万が一の時にはサポートしつつ戦闘空域を離脱、すぐに戻って来い」

「了解」

言って一礼。あとは、二人が巧くやってくれれば私の出番は無くて済む。

だけど、嫌な予感が私の頭の中でひしめいていた。

「香織！」

「ふーちゃん、簪ちゃん……。それに、ラウラも」

「どういうつもり……？」

「アンタのＩＳがやばいってことはわかってるでしょ！？　もし喰らったら……！」

「そもそも、これは実戦だ。第四世代二機が矢面に立つと言うのだから、何も香織が行かなくても！」

「でも、あの子を助けたいんだよ。それに、あの二人だけじゃ、なんだか怪我しそうだし」

そういうと、ふーちゃんと簪ちゃんは揃って溜め息を吐いた。

「……まあ、アンタはそういう奴だったわよね。なら、怪我しないで帰ってきなさい」

「約束……」

「香織、冷静さを失うな。いいな、実戦の空気は今までとは比べ物にならない重圧だ。それに負けるな」
「……ん、わかった。ラウラ、アドバイスありがとう」
三人をぎゅっと抱きしめてから、出発地点へ向かう。
さて、生きるために戦おうか。私は、ＩＳを兵器のままでいさせない。そのために、梟と共に、イヴと共にいるんだから。

第27話　止められぬ道（後書き）

次回、福音戦。
二人のサポート役として同行することになった香織が其処で見たものとは？

乞うご期待です！

第２８話　銀と黒　白と紅（前書き）

連投。ようやくここまできたぜ……。

第２８話　銀と黒　白と紅

「来い、白式」
「行くぞ、紅椿」
「飛ぶよ、梟」

それぞれの声と共にＩＳが展開され、白、紅、黒と色とりどりの装甲が展開される。
時刻は午前一一時半、空は広く晴れ渡っていたが、どこかそれが不気味に感じた。

「じゃあ、箒。よろしく頼む。香織も、よろしくな」
「ええ、お互い頑張りましょう」
「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

不機嫌そうに聞こえるその声にも、どこか喜色が滲み出ている。
これは、気をつけていたほうがいいかもしれない。

「それにしても、たまたま私達がいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせればできないことなどない。そうだろう？」
「ああ、そうだな。ちなみに香織もいるぞ。それにな箒、先生達も言っていたけどこれは訓練じゃないんだ。実戦では何が起きるか分からない。十分に注意をして――」
「無論、分かっているさ。ふふ、どうした？　怖いのか？」
「そうじゃねえって。あのな、箒――」
「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」
「箒さん、浮かれすぎです。もう少し真面目に――」

「大丈夫だ、私は真面目だぞ？　香織こそ、あまり緊張しすぎるなよ？」

……これは、だめだ。まずい。こうも浮かれていたら、咄嗟の時に状況判断にミスが生じる。というかなんというか、久しぶりだな、イラッときたのは。

『一夏、箒さんに注意していてください。大ポカをやらかす危険性があります』

『ああ、わかってる』

『織斑、篠ノ之、一之瀬。聞こえるか？』

ＩＳの開放通信（オープンチャネル）を通じて、千冬さんの声が聞こえてくる。

『今回の作戦の要は一撃必殺（ワンアプローチ・ワンダウン）だ。短時間での決着を心がけろ。また一之瀬は、相手からの攻撃を出来る限り防御し、動きを止められるようフォローしろ』

「了解」

「了解です、可能な限りフォローに回ります」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らない』

「わかりました。出来る範囲で支援をします」

そう答えた箒さんだったが、やはり不安は拭えない。冷静さを装っていても、その返事は喜色交じりの嫌なものだった。

心中にもやを抱えているとき、突然個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で千冬さんから声が掛かった。

『――織斑、一之瀬』
「は、はい」
「はい、なんでしょうか」
『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かを仕損じるやも知れん。いざというときはサポートしてやれ』
「わかりました。ちゃんと意識しておきます」
「了解です」
『頼むぞ』

個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）から開放通信（オープンチャネル）へと切り替わり、同時に私たちの意識も切り替わる。
いよいよだった。

『では、はじめ！』

直後、箒さんの後を追うように加速、徐々に高速の紅椿との距離を縮めていく。
さすが束ちゃんお手製、加速性能が尋常じゃない。だけど、こっちだって伊達に鳥の名を名乗っているわけじゃない。

『《夜羽》展開』
『《夜羽》、展開します。展開終了後に加速開始』

前方に円錐状になるように《夜羽》を展開、大気を裂くように加速して行く。
抵抗はあるものの、予想よりもずっとスムーズに進んでいる。

「暫時衛星リンク確立……情報照合完了。目標の現在位置を確認。――一夏、香織、一気に行くぞ！」

「お、おう！」
「はい！」

箒さんが一気に紅椿を加速させ、私も梟でそれに追従する。
くっ、さすがに速いか……、抵抗がきつくなってきた。しかし、あの展開装甲付きのＩＳについていけるって、結構凄いことなんじゃ？

「見えたぞ、二人とも！」

声に意識が引き戻され、超遠距離からの視覚情報がハイパーセンサーを通して自分の脳内に投影される。
福音は、まさにその名の通り銀色に染め上げられていた。しかも、あれの頭部からは巨大な一対の翼のような武装が生えている。たしか、大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システム、だったか。

「加速するぞ！　目標に接触するのは一〇秒後だ。一夏、集中しろ！」
「ああ！」

更に加速が始まり、こちらも対衝撃を備えながら更に加速する。

「くっ、うぅ……！」
『カオリ、大丈夫ですか？』
『なん、とか……っ！』

正直かなり辛いけど、音を上げている暇はない。
視界を何とか確保すると、一夏が雄叫びを上げながら零落白夜で福音へと切りかかるところだった。

普通ならば一撃で沈むはずのその攻撃を、なんと福音は速度を維持したまま体を一回転させ、数ミリの精度で刃を避けた。
数センチならまだ分からないでもないに、数ミリと言う尋常ではない精密さを見せ付けた福音は、加速を保ったまま一夏の攻撃を更に避け続ける。

「大丈夫ですか、一夏!?」
「こいつ、速い……ッ!」

そう呻いた直後、一夏は最後とばかりに大降りの一撃を繰り出そうとした。
だが、それは悪手。大きく隙を作ってしまう一手。
頭部から生えている翼の装甲の一部が開き、中から砲口が覗き込む。あのままではまずい。

「一夏、下がって!」
「香織っ!?」

すかさず加速して一夏の目の前に躍り出ると、降り注ぐ弾丸を夜羽と装甲で防ぐ。爆風だけで、シールドが破られた。だが、損傷は装甲だけに留まり、夜羽は今だ健在である。まだ、動ける。

「香織、無事か!?」
「ええ、大丈夫です! 反撃を!」
「わかった!」

痛みはあるけど、動けないほどじゃない。体が吹き飛んだわけでもないし、まだ大丈夫。
一夏と箒さんが一気に加速して、両側から追撃を始める。

「一夏、私が動きを止める！」
「わかった！」
「サポートします！」

箒さんの攻撃の合間に、隙を突いたように《夜雀》を撃ち放つ。
これ以上の射撃兵装がないのが、今は惜しい。
しかも、私の弾丸は気にすることでもないのか、福音はそれを無視して箒さんだけに集中している。
やがて、徐々に箒さんの猛攻に耐えられなくなってきたのか、防御を交え始める福音。それを見て、一夏が身構えた。

「はあああっ！」
「Ｌａ……♪」

歌っているかのようなその声の直後、ウィングスラスターの砲門がすべて開かれ、三六機の砲口が全方位へと火を吹く。

「やるなっ……！　だが、押し切る！」

その雨の中を箒さんが紙一重で弾丸を避けながら、接近して行く。
ぎりぎりのところまだ近づいたところで、見逃すことのできない致命的な隙が、福音に作られる。
しかし、一夏は真逆の方向、海へと一直線に降りていった。

「一夏！？」
「うおおおっ！！」

ギリギリのところで一発の光弾を掻き消す。その先には、一隻の船があった。

「何をしている!?　せっかくのチャンスに――」
「船がいるんだ！　海上は先生達が封鎖したはずなのに――ああくそっ、密漁船か！」
「このタイミングとは……、最悪です」
けれど、だからといって見殺しには出来なかったのだろう。まずい展開が目白押しだった。
一夏の零落白夜はエネルギー切れでたった今使えなくなった。その上、これから私たちはこの船が沈められないよう確保しつつ、三人とも逃げ延びなければならない。
この状態では福音の討伐は絶望的だった。
「馬鹿者！　犯罪者などをかばって……。そんなやつらは――」
「箒！」
「ッ――!?」
「箒、そんな、――そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱い奴のことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない、全然らしくないぜ」
「わ、私、は……」
そう言って、問い詰められた箒さんは動揺した顔を隠そうと手の平で顔を覆った。
そのときに落ちた刀が、光の粒子となって消え去っていく。――具現維持限界（リミット・ダウン）が訪れていた。
ＩＳだって、エネルギーがなければ防御機能は絶対防御だけしか働かない。そして、その絶対防御用のエネルギーが切れるまで攻撃されれば、後はお陀仏だ。
それに気づいて福音へと注意を向けると、既に福音は一斉射撃モードへと入っていた。ロックは、箒さんへと固められている。すべての砲門が箒さんのほうへと向けられていた。

「まずいッ！」

全速力で加速し、全身にかかるGのせいで体が悲鳴を上げるのを無視して箒さんの前へ。

そのまま《夜羽》を展開すると、福音から撃ち出された光の弾丸のうち、箒さんにあたる部分だけを纏めて防御する。

「ぐ、くぅっ……！！」

『《夜羽》損傷率、九五％を超過！　カオリ、危険です！』

『大丈夫、だから――！』

言った直後、《夜羽》が崩壊した。

その残骸ごと光の波が押し寄せ、私の体目掛け殺到してくる。

肉を抉られ、骨を砕かれ、体が焼かれる痛みによって意識を失い、そしてまた痛みで意識が引き戻される。その繰り返しが続くうち、自然と頬が吊りあがっていた。

「は、ひ、ひ――」

『カオリ！？』

「い、いた、い、ひ、ひひ、ははは――」

『カオリ、しっかりしてください！　カオ――、ザーッ』

痛みに耐え切れず、喉が勝手に笑いを漏らす。

目の前が真っ暗になり――、

――そして、私は海の藻屑と消えた。

「――一之瀬さんの生体反応、ロスト……」
「……織斑と篠ノ之に帰還命令を。作戦を立て直す」
「織斑、先生……」
「……早く」

大広間で指揮に当たっていた教員達と専用機持ちの間に、暗い空気が流れる。
山田先生のその言葉をようやく理解したらしい鈴は、突然涙を溢れさせると千冬へと掴みかかった。

「嘘、嘘よねっ！？　そんな、冗談やめてよ！　ねえっ！？」
「凰……」
「そんなこと、そんなのって……！」
「落ち着け、凰」

千冬は鈴の肩を掴むと、自分の前まで引き剥がす。
それでも鈴は頭を振って声を荒げる。

「ねえ、嘘でしょ？！　香織が、香織が……！」
「落ち着け！　まだ死んだと決まったわけではない！」

千冬も、本当にそう思っているわけではない。だが、そう言わなければ鈴は壊れてしまう。そう見えるほどに今の鈴は危うかった。
涙で頬を濡らし、顔が酷いことになっているのも気にせずにその場に崩れ落ちる鈴。

「嘘、だぁ……」
「……大丈夫」

鈴の泣き声意外に音が聞こえず、静まり返った大広間の中心から、そんな声が上がった。
声の主は、更識簪。

「香織は、大丈夫」

根拠も何もない、そんな言葉が、なぜかとてつもなく心強く聞こえた。

第２８話　銀と黒　白と紅（後書き）

次回、香織を失った彼女達の選択は？

乞うご期待！

第２９話　戦いへ向けて

「……よし、セット完了」
「簪……？」
香織の生死不明の一報からしばらくして、私は自分のＩＳを整備していた。
というよりかは、対決戦用の装備へと換装していた、と言った方がいいだろう。今の私は、少しばかり怒っているから。
そんなときに、後ろから声が掛けられた。振り返るまでもない、涙声で尋ねてきたのは鈴だった。
「どうしたの……」
「アンタこそ、なにやってるの……？　ＩＳの、整備なんか」
「私は、戦いに行く。勝って、香織を助ける」
あの後、織斑先生は専用機持ち全員に旅館での待機を命じていた。士気の低下もあるだろうけど、やはり生死不明者を出してしまったという状況自体が、ゴーサインに待ったを掛けているんだろう。
でも、関係ない。
「……鈴は、どうする？」
「え……？」
「このままめそめそ引きこもるか、飛んでいって香織を助けるか。どっちがいい……？」
「……」
鈴に、私の言葉はいらないだろうと思いつつ、声をかける。
きっと、もう鈴の中で答えは出てる。私が見てきた中でも、鈴は

これで立ち止まれる人じゃないから。
そして、予想通りに、彼女は立ち上がった。

「……いやよ。私も行く。シグナルがなくても、生きていることなんて結構あるものね」
「ん」
「でも、どうやって見つけるの？」
「それならば私がやっておいた。ドイツの軍事衛星でな。ここから三〇キロ離れた沖合上空に福音を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見できた」
「さすが……。鈴、支度して来て」
「分かったわ。あの天使様に泥塗ってやる」

闘気と怒気を漲らせて頷いた鈴は、そのままどこかへと消えた。おそらく、調整へ向かったんだろう。
ちなみに、織斑一夏と篠ノ之箒は部屋にいるらしい。まあどうでもいいか。篠ノ之箒には、少しばかり言いたいこともあるけど、それはこれが終わってからでいい。あれと香織の優先度は著しく違う。

「束社長、全員分のブースターキット、作れた？」
「もちろんだよ。インストールは一分で終わるように作ってあるけど、使い捨てだから気をつけるようにね」
「ん」

こくりと頷き、人数分のデータチップを受け取る。この中には束ちゃんによって作成されたブースターキットの座標が登録されているから、これを使えば遠隔操作でブースターキットをインストールできる。便利なものだ。
それのうちの一つをラウラに渡すと、モーティブとＩＳを元に戻

す。

「よし、行こうか。鉄（くろがね）」

小さく囁いて、ＩＳを撫でる。

さあ、勝ちにいこう。私たちのヒーローを助けに。

一方その頃、簪と別れた鈴は黙々と出発の準備を進めていた。

「鈴、何をしている？」

「戦支度よ、見て分からない？」

さも当然のように答えた鈴に、箒は不思議そうに首をかしげる。

「出撃命令が出たのか？」

「独断よ、決まってるじゃない。それに、このまま黙ってるなんて冗談じゃないわ」

さっきまで落ち込んでいたことには触れず、鈴はそう言ってから準備を再開する。

その様子を見て、箒は何かを決意したように鈴を見て、口を開いた。

「……私も行く。一夏を呼んでくる」
「箒……」
「このままやられっぱなしなど、冗談ではない。それに、香織に庇われて倒せませんでした、では、あいつに会わせる顔がない。浮かれていた私が、バカだったのに」
「……なら、すぐに呼んできて。そう時間はないわよ」
「わかった！」

あいつに言いたいことは幾らだってある。だけど、今そんなことをしている暇はない。
もくもくと調整を続けていると、いつの間にか傍に束社長が来ていた。

「りんちゃん」
「……束社長。どうしたの？」
「りんちゃんに渡すものがあって。はい、これ」

そう言って手渡されたのは、一枚のチップ。

「これは……？」
「甲龍用の攻撃特化パッケージ、束さんのお手製だよ。……香織ちゃんと福音を、助けてあげて」

その言葉と共に束さんが語ったのは、福音が苦しんでいるということだった。
香織は、それを助けるために自分から志願したのだという。……まったく、どこまで優しくなれば気が済むのかしらね、あの子は。

「安心して、束社長。必ず助けるわ。香織も、福音も、まとめて」
「……うん」

どこか泣き腫らしたような目と共に、彼女が頷く。
まあ、頼まれたら嫌とは言えないわよね。

「行くわよ、甲龍」

ここは、どこだろうか。
気がつくと、僕は見知らぬ場所に倒れていた。
周囲は真っ暗、足元すらもはっきりとした存在感を感じられない其処で、僕は目覚めた。

「誰かいませんか？」

無音。
けれど、不思議と寂しさや怖さはなかった。なんだか、懐かしさのある場所。
いつまでも立ち止まっているわけにも行かない、とにかく先へ進んでみることにした。もっとも、どこが『先』なのかは全く持って不明なわけだけど。
一歩を踏み出すと、其処には確かに地面がある。見えないけれど、確かに踏みしめることが出来た。
ゆっくりと一歩ずつ進んでいくと、周囲の暗闇は徐々に一点だけを照らし出すように明るくなってくる。

「あれ……、端末？」

其処に落ちていたのは、携帯端末だった。

暗い闇のなか、ぽつんと其処で光を放っている。

なくなってしまった光がそこにあることに、僕は無性に嬉しくなって、思わず走り出していた。

「これ、もしかして僕の端末……？」

「カオリ！？　無事だったのですね！？」

「い、イヴ！」

突然端末から聞こえた声は、イヴだった。

自分以外の声が聞こえたことにほっとして、思わず胸を撫で下ろす。

そこで、自分がＩＳ学園の制服を着ていることに気づく。何故だろう。

「イヴ、どうしてこれに？」

「わかりません。再起動が終わったときには、ここに……」

「そっか……。とにかく進んでみよう」

「はい」

イヴの入った端末を片手に、僕は再度歩き出した。

周囲の闇は道を形作るように濃淡を浮き上がらせ、周囲の濃い闇が取り囲む中を、唯一淡く薄くなった闇の道が真っ直ぐ貫いていた。

一歩、また一歩と歩いていくにつれて、徐々に体に痛みが戻ってくる。

肩、胸、あばら、太もも、脛（すね）、ほかにも色々な場所がずきずきと痛む。まるで、何かで抉られたように。

けれど耐え切れない痛みというわけでもなく、何とか僕は歩を進めて行く。

「カオリ、大丈夫ですか？」
「なんとかね……」

実際は歩くたびに激痛が走り、気を抜けばその場に座り込んでしまいそうなほどだったが、それを口にすれば今度こそ歩けなくなると思い、空元気を張ってそう答える。

痛みに耐えながら進むことしばらくして、ふと気づけば周囲がやや明るくなっていた。

明るくなっていたというよりも、濃い闇が淡くなって来ていると言った方がいいだろう。

そして、その闇の中にいて一際暗い光を放つ少女が、そこにいた。

「あの、貴女は……？」
「……ようやく来たか、主」

僕の声に反応したのか、少女が言う。刹那、周囲の闇すべてが何かに掻き消されるようにして消滅し、周囲は白一色で埋められる。

髪は黒く肩くらいまでの短い長さで、黒い浴衣を身に纏った少女は、ゆったりとこちらを振り向いた。

「随分とまた、無茶をしたな。こんなにボロボロになって……」
「えっと……？」
「ふふっ、この姿ではまだ幼子ゆえ、仕方ないか」

僕の頬に手をやり、そっと撫でながら慈しむようにいう少女。その手つきが妙に優しくて、僕は思わず目を細めて身を預けてしまいそうになる。

「ようやく次の段階へ進む刻が来たのだ。何度も何度も死の恐怖と戦い、死に抗ってきた。その主の魂が、私と共鳴している」
「な、何を言っているのか、よく……」
「分からずとも良い、いずれ解る。さあ、今しばし体を休めよ。目を閉じ、私にその身を預けて」

ぎゅっと僕の体を抱きしめ、髪を撫でる少女。
まるで母親のようなその仕草に、僕はそっと目を瞑った。

「小さな体……、この身に、一体どれほどのものを背負って……」
「……いやじゃ、ありませんから」
「そうか……」

抱きしめられていると、まるでぬるま湯に使っているような心地良さが全身に行き渡ってくる。
それと共に、ゆっくりと全員を襲っていた痛みが癒えていく。

「今は眠るが良い……」
「ん……」

母親に抱かれているような暖かさを感じながら、僕はそのまま意識を落とした。

「銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）？」
「ええ、それのデータを採って来て欲しいの。ついでに貴女のお兄様とやらにも、ちょっかいを出して来ても構わないわ」
「素敵なお話ね……。いいわ、受けてあげる」

ホテルの最上階の部屋、そのベッドの上で、素肌を晒しているキティが言った。
その言葉を聞いて、同じように素肌を晒しベッドに腰掛けているスコールは小さく笑う。
キティはスコールを後ろから抱きしめるように首に手を回すと、手首をスコールの前まで持ってきた。

「ほら、見て。貴女に付けられた傷跡（しるし）、まだ残ってるわ」
「あれ程気持ちよさそうに悲鳴を上げていたじゃない？」
「ええ、嬉しいの。ありがとうスコール、帰ってきたら、今度は私が貴女に傷跡（しるし）を付けてあげるわ……。そうしたら、貴女も私のもの……」

ぎゅっ、といつの間にかスコールの前に回りこんでいたキティは、不意に彼女の首を絞める。
両手を使い、力いっぱい。けれど、スコールは動じることなくキティを抱え上げるとベッドへと押し倒した。
そして、お返しだとばかりに彼女もキティの首を絞める。ぎちぎちと、一切の情け容赦なく。

「ぁ、が」
「ああ、貴女とこうしているの、とても楽しいわ……！　互いの首を絞めあって、快楽を楽しんで、もうぐちょぐちょになってしまっているの……！」

「は、はは、良かった、わ、スコールぅ……」

キティが笑い、スコールが笑う。

「ねぇ、ねぇ！　もっと、もっと強く締めて……！　死に際を味わわせて……！」

「いいわよ、もっと強く……！　ふふ、絞めるのも、絞められるのもいいなんて、欲張りな子ね……！」

スコールは自分の息が苦しくなりだしているのも気にせず、更に強く彼女の首を絞める。

ゆっくり、ゆっくり、キティの意識に闇がかかりだす。それに伴って、彼女の笑みが深くなっていく。

「あぁ、ああ……！　は、ひ、ひひっ、ははははは」

それからしばらく、彼女達はそうして互いを愛し続けた。

子猫（キティ）はその魔物染みた魅力によって、捕らえた獲物を逃さない――。

第２９話　戦いへ向けて（後書き）

キティさん順調にぶっ壊れ中。
この子、別の意味で書いてて楽しい。その、アレ的な意味で。
異常の中の快楽を求めるというのが、どうにもツボです。歪んでるねぇ。
いや、リアルで危ない人ではないので。書いとかないと勘違いされそうだからね！

次回、決戦。
彼女達の、そして香織の行く先は？
乞うご期待！

第３０話　再誕する翼

海上上空二〇〇メートルのところで、胎児のように眠っているかのごとく自らを抱いていた福音は、微かな違和感と共にそちらへと首を動かす。

その直後、爆音と共に広がった粉煙が福音の頭部へ弾丸が命中したことをラウラに告げる。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！　さあ踊れ、その羽を蜂の巣にされたくなければなっ！」

吼え、福音が反撃のために起き上がるよりも早く次弾を装填、発射する。

大気に風穴を開け突き進む弾丸が、福音目掛け駆けてゆく。

ラウラの今の姿は砲戦パッケージ『パンツァー・カノニーア』を装備しているため、両肩に八〇口径レールカノン《ブリッツ》が、そして左右と正面に四枚の物理シールドがとりつけられていた。

そのラウラへ向けて福音が向かう。

進行を阻害する形で砲撃を行ってはいるものの、やはり相手は最新型の軍用ＩＳ。半数以上の弾丸は翼から放たれるエネルギー弾によって撃ち落されてしまう。

目前にまで捉えたラウラへと福音が手を伸ばし――、

「――セシリア！！」

しかし、その手は弾かれる。

突如としてその身を露わにしたブルー・ティアーズの強襲により、福音は更にダメージを負いながら一時的に後退する。

そのセシリアの姿もまた、ラウラと同じようにパッケージを装備

していた。
四機のエネルギービットと二機のミサイルビットは揃ってスカート状に腰部に接続され、スラスターの役割を果たしている。
その分の失った火力を補うのは、セシリアの手にしている大型BTレーザーライフル《スターダスト・シューター》である。全長二メートル越えというとにかく火力を突き詰めた仕様ではあったが、この状況ではその火力が頼もしい。
それが、強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を身につけたブルー・ティアーズの姿であった。

「私たちの友人を助けるために、貴女には墜ちていただきますわ！」

高機動状態から反転、正確に福音に照準すると引き金を引き、次々に光弾を浴びせていく。

『敵機Bを認識。排除行動へと移る』

それにいらだったのか、福音はようやくセシリアを認識すると機械的にそう言い放つ。
しかし、福音の前に立つのは二人だけではない。

「遅いよ」

セシリアよりも更に上を行く高機動を駆使して次々と二人の射撃を避けていく福音を、真後ろから声の主が襲う。
それは、ステルスモード解除の際にセシリアから離れ、距離をとり隙を窺っていたシャルロットだった。
後方からのショットガン二丁の接射の嵐を浴び、福音は一瞬だけ姿勢を崩した。しかし、それも一瞬。
すぐさま三機目に対し《銀の鐘（シルバー・ベル）》を使用した反撃を繰り出す。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイヴ専用防御パッケージは、実体シールドとエネルギーシールドの二重の盾によって、福音の猛攻を防いで行く。

息つく暇のない防御の、針の穴のような小さな隙間を狙い、シャルロットは自身の技能（スキル）である『高速切替（ラピッド・スイッチ）』によってアサルトカノンを呼び出し、撃ち抜いてゆく。

「香織とはそんなに親しい仲じゃないけど、それでも友達なんだよ。悪いけど、墜ちてもらうよ！」

それに加え高速機動射撃のセシリア、遠距離砲撃のラウラ。三方からの射撃に、福音はじわじわと消耗を始めて行く。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

全方向にエネルギー弾を放つと、福音は次の瞬間に全スラスターを用いての強行突破を計った。

しかし、そんなものを彼女が許すわけがない。

「させるかぁっ！！」

「逃さない……っ！」

海面が膨れ上がり、二つの影がそれを切り裂き躍り出る。

飛び出してきたのは鈍い銀色の輝きを持った、打鉄に似た機体、『真打（しんうち）・鉄（くろがね）』と、『甲龍』であった。

「あんたも苦しいのよね。今ぶっ飛ばして、引きずり出してやるか

らまってなさい！」
「斬り裂き、進むっ！」

それぞれの目に希望の光を灯した二人は、一瞬で肉薄すると同時に左右から斬撃を繰り出す。
鈴の《双天牙月》は赤い炎を帯び、接触するエネルギー弾を飲み込み更に大きくなる。
束によって作成された火力特化パッケージ『気焔万丈（きえんばんじょう）』に収められていたのは、《双天牙月》に装着する特殊武装《焔月（えんげつ）》、追加の衝撃砲に衝撃砲に読み込ませる威力強化プログラム。
それを手にした今の甲龍は、あらゆる壁を粉砕する。

「ずぉらァ！」

甲高い金属音と共に二人の攻撃を防いだ福音は、離脱を諦めたのか上空へと飛ぶ。
しかし、それを許すほど、もう一人の同行者は甘くなかった。

「逃さないと、言った……ッ！」

福音の認識速度すらも上回るスピードで福音の進路を妨害した簪は、その手に持った一振りの大剣を振りかざす。
どす黒いほどの朱に染まった、長方形の板のようなそれは、しかし剣であった。

「はあぁぁぁぁっ！」

膨大な熱量を伴って振り下ろされる刃を紙一重で避けた福音の装甲が、まるで何かに殴られたかのように大きく凹む。
近距離用刀剣武装《朱鉄（あかがね）》が、その武器の名である。

真打・鉄に収められた武装の一つであり、その主だった武装。その最大の特徴は、刃自身が周囲から熱を取り込み、増幅し、周囲に拡散させ、更にそれを取り込み増幅させるという、半永久機関のプロセスを踏んでいるところである。

この部分は束も一枚噛んでおり、この最大の難点であった永久機関を完成させたのも束であった。

「おらァ！」

一瞬動きが止まった福音へ向けて、紅蓮に染まった見えざる弾丸が豪雨のように降り注ぐ。

それは重力に逆らい上空の福音へと吸い込まれて行き、次々に爆裂する。

「やりましたの！？」

「――まだ！　っつーかセシリアそれ以後禁止っ！」

ご丁寧にフラグを立てたセシリアへ鈴は刺すようにそう口を出すと、龍砲の照準を再度合わせる。

『《銀の鐘（シルバー・ベル）》最大稼動――開始』

「やらせんッ！」

「止めてやるッ！」

両腕と翼を大きく広げた福音のはるか上空から、その声とともに降り注ぐは、世界でたった二機の大四世代型ＩＳ。

『紅椿』と『白式』だった。

紅椿は《空裂（からわれ）》を、白式は《雪片弐型（ゆきひらにがた）》をそれぞれ展開し、一斉に羽目掛け刃を振り下ろす。

「うおぉぉぉおっ！」
「せやあぁぁぁぁ！」

完全な不意打ち。
いかなるシステムであっても、行動と行動、拍子と拍子の間を突かれた攻撃には対処できない。
二人の刃は真っ直ぐにその羽を断ち斬り、海へと叩き落して見せた。
それきり、福音は動く素振りも見せず海中へと沈んでいく。

「……終わったな」
「ああ――」

静寂は一瞬。
それを切り裂くようにして、甲高い悲鳴のようなものが辺り一帯に響き渡る。
そして、それとともに広がる強烈な光。

「なんだっ！？」

誰が言ったかも分からないその言葉の響きが消える前に、光は球状へと変化し、そしてその中に青い雷を纏った『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が、ここに留まっていたときと同じように自らを抱き蹲っているのを見た。

「これは……！？」
「！？　まずい！　これは――『第二形態移行（セカンド・シフト）』だ！」

ラウラの声が響き渡る前に、その音が届いたかのように福音がそちらへ顔を向ける。
そこにあったのは、感情が消え表情の見えないバイザー。それを

見た瞬間、簪と鈴、そしてラウラが弾けるように叫んだ。

「逃げろ――！」

『キアアアアアア……！！』

低い、しかし甲高い、相反した雄叫びを産声として、福音は『第二形態移行』を終えてしまった。

そして福音は、その眼で獲物を見定めると、知覚の範囲外の速度を持ってしてラウラへと接近、その足を掴んだ。

「しまっ！？」

予想外に速い速度を見せ付けられ、ラウラは即座に全ての砲塔をそちらへ向けると砲撃を始める。

しかし、それは切断された頭部から這い出すようにして生えた『エネルギーの翼』によって全て無効化されてしまう。

「ラウラを放せぇっ！」

「よせ！　逃げろ、こいつは――！」

近接ブレードで接近し、きりつけようとしたシャルロットの言葉を遮り、ラウラが言うも、その言葉は更に福音によって遮られた。

次の瞬間、ラウラを包み込むエネルギーの翼。

荘厳な美しさと輝きを放つその翼に包まれ、その中でラウラはエネルギー弾の嵐に晒され、一瞬で装甲は打ち剥がされ、エネルギーが底をつき、海へと落とされた。

「ラウラ！　よくもっ……！」

激昂したシャルロットがショットガンを呼び出し（コール）、福音の顔面目

掛け至近距離で撃ち放つ。
ドンッ！　という音と共に弾丸が射出され、しかしその音はショットガンの発射音ではなかった。

「きゃっ！？」

福音の全身の装甲が卵の殻のようにひび割れ、そのひびの間から小型のエネルギー翼が生み出される。
それが一斉に羽ばたくことによって生み出されたエネルギー弾がシャルロットをショットガンごと吹き飛ばした。

「な、何ですの！？　この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な――！」

「しまった、エネルギーが……！？」

セシリアの言葉に続くように、一夏の声が響く。
それは、対抗できる刃の一つが失われたことの報告に他ならなかった。
そして、福音はまるでそれを喜ぶかのように叫ぶと、セシリアの眼前へ『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を用いて急接近、両翼の一斉射撃によって一瞬でエネルギーが消し飛ばされ、眼前の海へと叩き落される。

「セシリアッ！」

「ここまでやって、まだ足りないのか！　貴様はぁぁぁぁ！！」

「バカッ、箒！？」

セシリアが落とされたことに激昂し、箒が急加速で接近、連続した斬撃で福音を攻め立てていく。
怒ってはいても、箒の技にキレが消えることはなく、むしろそれは増していた。

「うおおおおっ！！」

互い違いに回避と攻撃を繰り返しながら、紅椿は徐々に出力を上げていく。それにより、福音との差は徐々に紅椿の方に向き始めた。

今度こそ、という意思を持って放とうとした一撃。しかし、それはエネルギー切れを知らせるブザー音によって阻まれる。

「なっ！　また、エネルギー切れだと！？　――ぐあっ！」

にやり、と。悪意ある笑みが彼女を捕らえた。

その直後、彼女の首までもを福音の右腕が捕らえてしまう。

「箒ィィィ！！」

響いたのは、一夏の悲鳴だった。

「……主、主。そろそろ起きよ」

「ん……、んんぅ……」

眠っていた意識が揺り起こされ、僕の前に眠る前まで見ていた彼女の顔が映る。

後頭部に柔らかい感触があった。

「ふむ、目が覚めたか？」
「は、はい……。あの、僕は……」
「ふふ、よく眠っていた。傷も癒えただろう？」
「え、あ、そう言えば……」
嬉しそうに笑う彼女の言葉で、体の痛みがなくなっていることに気づいた。
と、突然彼女の顔が真剣になる。
「さて、このまま主を膝枕しているのもいいが、それよりもやるべきことがあるな」
「え？　あ、ご、ごめんなさいっ！？」
「構わぬよ。私が好きでやった事ゆえな。それよりも主、立つがよい。次の段階へ進む準備は、整った」
そういうと、彼女は僕が起き上がるのを待ってから立ち上がる。
そして、両手をこちらへと突き出してきた。
「手を重ねよ」
「こ、こう――、っ！」
重ねた瞬間、たくさんの映像が流れ込んできた。
ふーちゃんの涙、戦っている皆、色んなものが流れ込んできて、最後に僕の中に入って来たのは、彼女の存在。
気がつくといつの間にか僕は目を瞑っていて、それを開いたとき、目の前の少女は少女ではなく、黒髪を長く伸ばした美しい女性へと変わっていた。
「貴女は、梟、だったんですね……」

「さよう。主が応えてくれた時、私は嬉しかった……。主と共に空を飛ぶのが、楽しくて仕方なかった」
「でも、完全ではなかった」
「主を乗せている限り、私の身を守る力は失われていた。しかし、主の痛みによってその守る力は新たに作り出された。もう、主を苦しめる心配はない」

ありがとう。
涙を流しながら、梟はそう告げた。
僕はイレギュラーだ。しかしそのイレギュラーと共に無理やりにでも飛ぼうとした結果、エラーが出た。そのエラーが絶対防御の消失、シールドバリアの弱体化に反映されてしまったんだ。
だけど、それももう終わり。
『第一形態移行（ファースト・シフト）』が終われば、それも消える。より強く生まれ変われる。
ばさっと、彼女の背中から黒い二対の羽が生えた。

「共に、飛んでくれるか？　主よ」
「……もちろん。行こう、梟。イヴも一緒に」
「うむ。ゆくぞ、二人とも」
「私が随分と置いてけぼりでしたね。埋め合わせはしてもらいますから」

イヴの怒った口調の中身が喜色に飛んでいることがなぜかわかって、思わず笑みを漏らす。
次の瞬間には、彼女とイヴと僕は一つに溶け合い、そして黒い光を放ちその世界は消え去った――。

悲鳴が響く。
しかし、そのさきに続くべき声は、箒の悲鳴は、エネルギー弾の射出音はなかった。
その代わりに聞こえたのは、鋭く何かを切り裂く音。

「――かお、り？」
「うん。ごめんなさい、箒さん。遅れました」

まるで待ち合わせか何かに遅れたように、軽く言い放つ。

「香織、香織なの！？　無事なのね！？」
「よかった……！」
「香織、生きてたんだ……！」
「すまねえ香織……！　あの時、おれがちゃんとしていれば……！」

口々に言うみんなの言葉を、彼は目を閉じて聞く。
そして、そっと口を開いた。

「とりあえず、詳しいことは後で話すよ。まずは、ただいま、皆。そして――」

心底嬉しそうに笑い、二対の漆黒の翼を生やし、その手に巨大な剣を持ち、彼は降り立つ。

「そろそろお開きだよ、福音。君の悪夢は、梟の羽の音が持ち去ろ

う」

完全となった梟を纏った香織が、そこにいた。

第３０話　再誕する翼（後書き）

やっと、やっとここまできた……！

次回、進化した梟と香織、イヴの三人が福音と激突！

乞うご期待！

第３１話　黒の攻防

「行くよ、梟、イヴ」
『はい、カオリ』

香織は四枚となった《夜羽（よばね）》を背中に展開し、一対となった《夜鷹（よたか）》を両手に備える。

双眸は決して彼女から離さず、常にその動きを見続ける。

直後、急加速で眼前へと接近、そのまま夜鷹を振るい福音のエネルギー翼を破壊していく。

一撃一撃がまるで必殺の意思を込めているかのように鋭く、そして鮮やかに翼を刈り取っていった。

「は、速い……！」
「まって、梟ってあんなに速く動けたの！？」

梟が褒められているような気がして、箒と鈴の声に思わず笑みを零す。

そのとき、なす術もなく攻撃を受けていた福音が動いた。

頭部の巨大なエネルギー翼を動かしたかと思うと、一瞬で香織を飲み込む。

「まずい、あれはっ！」

刹那、発射音が響くと同時――、

――鳥の囀りが辺りを包んだ。

「これは、なんだ？」

「鳥の声……」
「……綺麗」
「すげぇ……」

場違いな感想かもしれないが、彼ら彼女らは思わずそう呟いていた。
様々な種類の鳥の囀りが聞こえてきたかと思うと、エネルギー翼が徐々に消えていく。
まるで、囀りによって打ち消されるかのように。

「その攻撃は通用しないよ。その程度のエネルギーなら打ち消せる」
『単一技能（ワンオフ・アビリティー）、《とりのさえずり（バードエイク）》の発現を確認。成功です』
「うん、ありがとうイヴ」

梟の単一技能、《とりのさえずり》。
その能力は、鳥の囀りに聞こえる特殊な周波数の音波を発生させることで、あらゆるエネルギーを打ち消す能力。
それはつまり、相手の運動エネルギー、ＢＴエネルギー、あらゆるそれを封じる力に他ならず、力以外での戦いの終結を体現する力だった。
尤も、現在の《とりのさえずり》では稼働率が低く、ＢＴエネルギーを打ち消すので手一杯だが、今はそれで十二分。

「悪夢はおしまい、そろそろ幸せな夢に帰る時間だ」
『《夜羽》正常稼動。ウィングビット起動。《夜鷹》正常稼動、武装特性、《ナイトホーク》発動』

鳥の囀りが辺りを包み込む中、福音の目の前で夜羽の一部が外れていく。その数一〇個。四枚の羽のうちの二枚から、五枚ずつ羽が外れ、ビットとなる。

そして、それを覆い隠すのは《夜鷹》の特性。かつてステルス戦闘機に用いられたその名称の通り、その刃は使い手を夜の闇に隠す力を持つ。

それらは全て、梟と香織が互いを知り、理解し合い、その上で互いを翼としたゆえの力である。

ビットと本体、全ての姿が掻き消え、福音は目に見えて混乱しだした。

『目標消滅。シールドエネルギーの減衰は確認できず。状況変化、最大攻撃力を使用する』

その音声が響き渡った直後、三本の光の矢が福音を貫いた。

それを皮切りに次々と撃ち出される光の矢に混じり、時たま襲いくる斬撃。それは寸分狂わず装甲を叩き切り、シールドエネルギーだけを減らし操縦者に負担を掛けないよう計算されていた。

『継続してＢＴエネルギーの消滅を確認。最大攻撃力、使用不能』

エネルギーが消されれば、エネルギー翼を使用した攻撃は行えない。

福音はすぐさま戦闘行動を接近戦へ切り替えると、あらゆるレーダーを駆使して梟の居場所を探し始める。

しかしそれもむなしく、光の矢はいまや一度に多方向から六、七本が撃ち出されるほどとなっていた。

そして、その戦いは呆気なく終わりを告げる。

「これで――」

『――終わりです』

全ての装甲を破壊され、エネルギーが其処を尽きた福音は操縦者

から離れ、待機状態へと戻る。
《とりのさえずり》と《ナイトホーク》を解除し、危うく海に落ちかけた操縦者を両手の平でキャッチし、香織はようやく一息ついた。

「そうだ、ラウラとシャルロットさん、セシリアさんは！？」
「皆無事よ。浮かぶくらいのエネルギーは残ってるわ。おかえり、香織」
「……うん、ただいま、ふーちゃん」
「おかえりなさい……、香織……」
「ただいま、簪ちゃん。ちゃんと見てたよ、簪ちゃんが自分のＩＳで戦ってるとこ」

香織の言葉に、簪は頬を染めて微笑んだ。
箒と一夏はなんとなく自分達がここにいていいのかと一瞬疑問に思ったが、それよりもまず謝らなければと考えて香織の傍に寄る。

「その、香織。……すまなかった。私が驕っていたせいで、あんなことに……！」
「それを言うなら俺もだ。箒のことばかり考えてて、お前のこと見ててやれなかった」
「二人とも、謝罪は受け取りました。それに、一夏は自分の役目をやっただけです、気にしないでください。箒さんは……、まあ旅館に戻ってから話しましょうか」
「あ、ああ……」

実際は別になんとも思っていないが、今ここで話すことではないと考えてそう答える。
手の内にある福音の操縦者を見て、それから微笑む。

「さあ、帰ろうか」
「そうは行きませんわ、お兄様」

ぞくり、と。
背筋に悪寒が走った。

「初めまして、ですわね。香織お兄様？」
「……誰だ」
「そんな怖い声をお出しにならないでくださいませ。私はキティ、貴方の妹ですわ」

くすくすと笑いながら、キティと名乗った少女は裂けるような笑みを浮かべて香織を見る。

「残念だけど、人違いだ。僕に妹はいないよ」
「ふふっ、今は構いませんわ、分からずとも……」

じゃきん、と自らの身の丈ほどもある純白の刃を構え、灰色のISに身を預けた彼女は嗤う。
その顔は、香織と瓜二つな、しかし全く異質なものだった。

「さあ、踊りましょう？」

急接近し、一撃。
上段から振り下ろされた刃を辛うじて《夜鷹》で防ぐと、二枚の羽で福音の操縦者を保護しながら、もう片方の刃で真横から斬撃を放つ。
しかし、それはいとも容易く装甲によって阻まれた。

「なっ！？」

「ステップを進んでも、所詮一次移行しただけのＩＳではこの《灰狼（グレイウルフ）》は打ち破れませんわ」
『イヴ、ウィングビット！』
『はい！』

不敵に笑みを浮かべるキティと名乗った少女へ向け、ビットを展開し一斉に撃ち放つ。
しかし、それはその手に持った剣の一振りで容易くかき消されてしまう。

「無駄ですわ、尤も、私もお兄様と今争う気はありませんの。今日は顔見せ、また今度お会いしましょう？」

そう言うと、キティはからからと嗤いながらその姿を消した。まるで、最初から其処にはいなかったように。
香織は、それをまるで夢か何かのように見送っていた。

「香織、大丈夫！？」
「う、うん……。あれは、一体……」
「一度戻ろう……。これ以上ここに留まっている理由はない……」
「そ、そうだね……」

簪に促され、一同は旅館に戻ることにする。
尤も、その表情はあまり優れなかったが。

帰った私たちを待っていたのは、鬼でした。

「作戦完了――と言いたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

ううう、千冬さんが怖いです。

そんなことを考えていたら、突然ぽふっ、と私の頭に手が乗せられ、そのままわしゃわしゃと撫でられる。

「一之瀬……、よく無事に戻った」

「先生……」

「一之瀬以外は説教だ、全員正座！　一之瀬は先に診断を受けておけ」

「は、はい！」

千冬さん……。

あれ、でも私は普通に診断を受けるとまずいのでは？

「安心しろ、そっちは束がやる」

「……別の意味で安心できないのですが」

「諦めろ」

死刑宣告！？

でも、あれだな。帰ってきたって実感するね。

ちなみに、福音の操縦者さんはまだ気を失っているから、私が背負っています。背は高いけど結構軽いから背負いやすい。

『ちなみに、検査するまでもなくカオリの体調は万全ですが』
『書類作りとかあるんだよ、きっと』

イヴとそんな会話をしてから、私は操縦者さんと共に座敷へと通された。

そこで突然、耳に息が吹きかけられた。

「ひゃうっ！？」
「ふふっ、ほんとに女の子みたいな反応するのね」
「お、起きてらしたんですか！？」
「ええ。ありがとう、あの子を止めてくれて……」

誰もいない座敷で、彼女は私の背中からすとんと降りると、そのまま私を背中から抱きしめる。

……震えていた。寒いわけじゃないだろう、ただ震えて、ぎゅっと私を抱きしめている。

「……あなた、男の子なのよね」
「……福音が知らせてくれたんですか？」
「ええ。あの子は、私を守るために自分から戦いの場へ赴いた……。そのせいで、あの子は……」

後ろから涙で潤んだ声が聞こえ、そっと私の前にある手を握り締めた。

「……束ちゃん、いるでしょ？」
「うん。お帰り、香織ちゃん……」
「ねえ、福音のことを直してあげられる？　このままなんて……」

いつの間にか暗がりから現れた束ちゃんにそう尋ねる。
束ちゃんの目は赤く腫れていて、随分泣いたんだろうってことが良く分かった。

「……ナターシャ・ファイルス、アメリカのテストパイロットだね」
「……ええ。初めまして、篠ノ之博士」
「貴女には今二つの道がある。福音と共に私の元に来て、福音を助けるか、それともアメリカに戻って福音が初期化、凍結処理されるのを黙ってみているか」

ナターシャさんの前に立ち、束ちゃんがそう言った。
これって、つまり、ナターシャさんをヘッドハンティングしてるってこと？

「……貴女なら、あの子を助けられる？」
「あの子がこうなった責任の一端は私にある。私が暴走の振りなんて頼まなれば、こうならなかったかもしれない。だから、必ず助けるよ」
「……分かったわ。色々言いたいことはあるけど、それはあとで言わせてもらうことにする。あの子を苦しめた直接の原因を探れる？」
「もちろん。そろそろ目に余る行為が多くなってきたからね」
「なら、よろしくお願いするわ。あの子共々お世話になります。でも、どうやって引き抜くつもり？」

その言葉に、束ちゃんは不敵に笑ってみせる。
ああ、まあまたやるんだろうなぁ。ＩＳコアの制限とかどこにいったんだろうか。
えーっと。
どうやらうちの社員がもう一人増えるようです。

「それじゃあ、よろしくね。せ・ん・ぱ・い♪」
「え、えええっ!?　ちょ、僕がですか!?」
「そうだねぇ、そうなるね？」

あと、後輩になるようです。

「詳しい話はこの後また纏めようか。香織ちゃんたちへの纏まったお話は、また今度機会を設けるから、そのつもりでね？」
「はーい」

もう、置いてけぼりですねー。
あ、イヴの気持ちが分かったかもしれない。

夕食を食べ終えた後、僕はそっと旅館を抜け出して海へやってきていた。
ざぁん、ざぁん、と波の打ちつける音が心を落ち着かせてくれる。

「……あの子は一体、誰なんだろう」
『わかりません。しかし、これからも私たちの前に現れることだけは確かでしょう』

キティと名乗ったあの少女は、僕に瓜二つだった。
……一体、彼女は。

「いい男が一人で黄昏てるの？」
「ナターシャさん……。そっちこそどうしたんですか、こんなところで？」
「こそこそーっと宿を抜け出すいけない子を追いかけてたら、ここに着いたのよ。どうしたの？」
いつの間にか隣に立っていたナターシャさんは、僕の横に座るとこちらへ身を傾ける。
こてん、と顔を僕の肩に乗せてきた。
「……色んなことを、考えていたんです。世界のこととか、自分のこととか」
「彼女のこととか？」
「違います。というか彼女はいないんですけど」
「アプローチは一杯掛けられてるみたいだけどね。りんちゃんとかんちゃん、だっけ？　束から聞いたわよ」
あのウサギめ、話しおったな……。
まったくもう……。
「……まだ、僕は決められません。誰か一人を選ぶと、他を斬り捨てるような気がして」
「それでも、決めないといけないときが来るわ。……まあ、全員愛するってのも、アリかもしれないけど？」
「な、何を言ってるんですか！？」
「そうそう、ラウラちゃんだっけ。あの子も貴方のこと好きみたいね？　ちょくちょく見てたわよ」
妙な観察眼を持ってるなこの人……。

今はまだ、恋とか、そういうの分からないんだよな。

「まあ、ゆっくり考えなさい。時間はたっぷりあるわ。それに、もしあれならお姉さんが相談に乗ってあげるから」

……なんというか、こういうまともな人は久しぶりかもしれません。ええ。

束ちゃんはあんなんだし、同級生は皆ちょっと外れてるし。いや、いい人たちなんだけど。

千冬さんは……、なんか相談しづらい。どっちかって言うとふらっときて何かを学び取るような感じ。

お姉ちゃんは……、うん、ないな。頼りになるけどならない人だから。

「それで、処遇はどうなったんですか？」

「束が直々にアメリカのトップと交渉してるわ。多分、新品のＩＳコア渡すから福音と私を寄越せって言ってるんじゃないかしら。アメリカも今回の事件は公にはしたくないようだから、それで手を打つと思うわ」

「……まあ、こっちにお金も入るし、いいか」

「あら、何の話？」

疑問を浮かべた表情でこちらを見ていたので、出発前に僕が千冬さんにお願いした条件を話してみた。

最初は驚いていたけど、徐々に悪い笑みに変わっていくナターシャさん。……うん、そういう顔も綺麗。大人の女性って感じだ。

「中々がめつく持っていくじゃない？」

「命を張るんですから、当然ですよ。ともかく、これでしばらくお金には困りませんし」

「ふふっ、私好きよ？　そういう強い男の子って」
「茶化さないでくださいよ」
「はいはい♪」

楽しそうに笑いながら彼女は海を眺める。
……潮の香りが、心地よかった。

第３１話　黒の攻防（後書き）

はい、なぜかナターシャが社員になりました。しかしヒロインにはなりません。
ここの束さんだったら、コアを助けるためにこれくらいはするかな、ということで。
香織が男だということがコア・ネットワーク経由で福音とリンクしたナターシャにも流れ込んで知られている、ということです。
だんだんＩＳ原作と離れてきた拙作ですが、どうぞよろしく。
次回はバスの中から開始です。

第３２話　帰還　そして夏休みの始まり！（前書き）

今回、香織がちょっと人間離れします。

第３２話　帰還　そして夏休みの始まり！

「箒さん」

翌朝、私は朝食をとった後に箒さんを呼び止めた。
名を呼ばれた彼女はびくりと肩をすくめると、そっとこちらを向く。

「……香織」
「昨日言っていた、お説教。ちょっと簡単にですけど、ここで済ませますね」
「……ああ」

どんよりと暗くなった箒さんの顔を見て、ちょっと気の毒になる。
私自身はもう気にしていないけど、でもここできっちり言い聞かせた方が彼女のためになるし、彼女もそう望むだろう。
そう信じて、私は口を開く。

「貴女は『紅椿』を受け取ってから最初の作戦失敗まで、ずっと心が浮ついていましたね。命を掛けた戦いだというにも関わらず。それは許しがたいことですし、そのような心構えでは紅椿は力を貸してくれません。貴女が強くならなければ意味がないことは、貴女が一番わかっているでしょう？」
「……ああ」
「ですから、強くなりなさい。私だって強いとは言えませんが、それでも前に進むために努力なさい。それがいつか、貴女自身を助けることに繋がります」

……なんだか説教というより説法染みてきたなぁ。

よし、とっとと終わらせよう。武力行使で。

「なので。ふんっ！」

「っ！？　っぅぅ……！？」

「手っ取り早く言えばごちゃごちゃ考えるより歩け、走れってことです。失敗したなら倍働きなさい、納得いかないならいくまで行いなさい、それでも駄目ならその倍やってみなさい。駄目だ駄目だと言うのはそれが終わった後にすることです。って、これお姉ちゃんの受け売りなんですけど、そういうことです」

全力で拳骨を落としてから押し切る形で説教終了。浴衣姿の箒さんが頭を押さえて涙目で「痛い痛い」とアピールしているのが妙に印象的だった。しかし自重はしませんよ？

で、食事を終えた私たちはＩＳと専用装備の撤収作業に入ったわけなんですが。

「……あの、お三方」

「ん？」

「なにぃー？」

「……なに？」

「動けないんですけど」

現在、私はふーちゃん、のほほんさん、簪ちゃんの三名にそれぞれ首、右腕、左腕をホールドされています。

さすがに三人を引きずってまでは動けませんのことよ。

「ちゃんと言ってなかったなぁ、って。おかえり、かおりん」

「のほほんさん……」

「詳しいことは言えないんだろうけどー、でも、ちゃーんと帰ってきてくれたからいいのですー」

「……うん、ただいま」

右腕をがっちりホールドしたまま、むしろホールドをきつくしながらのほほんさんは私の腕に頬ずりをし始めた。……少し恥ずかしい。

なんて考えていると、ふーちゃんが私の顔の横に自分の顔をむぎゅっと押し出してきた。ちゃんと鎖骨辺りで腕を止めて、息苦しくならないようにしてる辺りすごいね。腕力ある。

「アタシも、あんまり言ってなかったわよね。お帰り、お疲れ様、ありがとう、香織」

「はは、どう致しまして、ただいま、ふーちゃん」

「……私も。お帰り、お疲れ様」

「うん、ただいま、ありがとう、簪ちゃん」

なんだろうね、この感謝&挨拶ラッシュ。

とりあえずそれが終わったところで私から三人が離れた。どうやらあれがやりたかっただけらしい。

「って、のほほんさんＩＳの撤収作業は？」

「もう終わったよー？　後はバスに乗るだけー」

「わかりました。それじゃあふーちゃん、簪ちゃん、また学校で」

「うん、また」

「ばいばい……」

各々自分のバスへと乗り込んでいく二人を見送った後、私とのほほんさんも揃ってバスへ乗り込み、そしてバスはＩＳ学園へと動き出した。

……動き出した、んだけど。

『おっかしいなー、ラウラ、この空気は何？』
『一夏が、セシリア、シャルロットの二人に昨日の夜、ＩＳを使用して追い掛け回されていたらしいです』
『また色恋沙汰か……。一夏も懲りないねぇ。それで、今なんであんなに干からびてるの？』
『さぁ？』

以上、ラウラと私の個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）での会話でした。
ふむ、仕方ないな。

「一夏」
「ん、あ、なんだ？」
「喉渇いてるの？」
「干乾びそうだよ……」

本当に干乾びそうな声を出すね、一夏。あ、知ってる？　ミイラって、木乃伊って書くんだよ。
出展は中学校の図書室にあった本。ミイラの歴史とか作り方とか書いてあった。

「……お茶いります？　ありますけど」
「くれるのか！？」
「う、うん。零さないようにしてくださいね？」
「ありがとう！　お前は命の恩人だ……！」

私が渡したお茶のペットボトルをありがたそうに受けとると、なぜか一度拝んでから一気に中身を飲み干した。
そんなに喉が渇いていたのか……。もう夏も近いし、熱中症になるといかんよね。脱水症状は危険だ。

「た、助かった……！」
「大袈裟、じゃないか。暑くなって来てるし、水分補給は小まめにしないと」
「ああ、ありがとな香織」
「どういたしまして」

女子の声で騒がしいバスの中で、小さくお辞儀をしあう私と一夏。
なんだけどなんだか三方から嫌な気配が……。
そんなバス移動も、まあ悪くはないかなと思った今日でした。

そして日にちはやや飛んで、八月入りしまして。

「疲れたぁ……」
「涼しーぃ……」
「……たれかおりん、たれりんいん」

簪ちゃん、人をたれパンダみたいに言わないでくださーい。
まあ、今そんな感じになってるんだけど。
八月に入り、ＩＳ学園は遅めの夏休みへと突入した。そんな中、私達は今日ようやく三日間にわたる補習授業が終わり、少し遅く夏休みへと開放されたのである。
で、今は私の部屋で涼んでいます。のほほんさんは現在帰省中だそうで、暫くは一人部屋。

と言っても、夏休みの間は寮の規則も若干緩むらしく、寮長に申し出てさえいればお泊りなんかもオッケーだそうです。
……お姉ちゃんが入り浸る未来が見えるよ。

「それで、夏休みどうする？」
「とりあえず……、家の掃除かなぁ。後は……梟の整備？」
「ほかにすることはないの！？　前から思ってたけど、趣味とかないわけ！？」
「趣味？　……おしゃれ、は違うな。主に楽しんでるのはお姉ちゃんだし」

趣味、趣味……。料理とか読書とか、機械弄りに二度寝？

「……なんか、辛うじて読書が引っかかってるレベルよね。女の子より女の子してるじゃない……」
「……機械弄りは、いい」
「ああ、そうね、あんたはそういうんだっけ……」
「……お泊り？」

ん、なんだかお話が妙な方向になってきたぞー？

「香織の家に、お泊り……」
「それはいいわね。ラウラも誘いましょうか」
「あれ、ちょっとまって、なにこの流れ」
「お泊りと聞いて」
「お姉ちゃん天井裏から降りて来るのやめて」

すとんっ、と天井の一部を外して降りてきたお姉ちゃん。このぐらいでは驚かないですよ、ええ。
簪ちゃんは驚いてるけど。

「で、お泊りだね！？　いいとも、ぜひとも！　とすると寝る場所は香織の部屋か、オッケー任せなさい！　ただしヤるのはいいけどひに」
「お姉ちゃん、ぶつよ」
「すいませんでした」
「……力関係、分かってきたかも」
「奇遇ね、私もよ」

全く、お姉ちゃんは暴走するとこれだから……。普段はいいお姉ちゃんなんだけどねぇ……。
それはともかくとしてだ、何をしようか。

「夏休み……、海はもう行ったって言うか、当分行きたくないって言うか？」
「……毎回思うけど、そのお話は私に流れていいものだったの？」
「知らなかったのか……？　束社長からは逃げられない……」
「大魔王ポジションなら仕方ないわね」

嫌な納得のされ方だけど、まあ魔王的なポジションだし。世の中引っ掻き回してるのは本当だし。
あ、ちなみに福音の話は束ちゃん経由でお姉ちゃんも知っています。秘匿はどうしたって？　束ちゃんもお姉ちゃんも機密云々は言われていないので、という屁理屈捏ねて相手に投げつけるらしい。酷い話だ。
そう言えば、銀行口座にはごそっと数億入ってるんだよねぇ……。欲しかった本がたくさん買えるじゃないか、素晴らしいね。

「そう言えば、バインド・カンパニーのお給料ってどうなってるんだろう」

「あ、それは気になるわね」
「この前、ちょっと口座確かめたら……、なんか数字の桁がいくつか違ってた……」
「……え」
「泣くかと思った」
「なにそれこわい」
「お姉ちゃんちょっと口座見てくるね！」

簪ちゃんの言葉に、お姉ちゃんが目を輝かせて天井から出て行った。だから入り口から入って入り口から出て行きなさいって。まあ天井はちゃんと直して行ったようだけど。……まあ大概出鱈目なんだよね、お姉ちゃんって。

ご近所さんで火事があった時には単身炎の中に突っ込んで、火傷一つ、かすり傷一つ負わずに取り残されてた大人三人を救出したり。ビルで立てこもり事件があった時にはショットガンやらマシンガンやらの弾丸を片っ端から回避、時にはそれを『素手で鷲掴み』ながら立てこもり犯全員をぶちのめしたりと。ちなみに、素手で掴む方法は『同じ速度に同じベクトルで同じ回転数に合わせて、円錐状に力を収めるだけ』と言っていた。意味分からん。

千冬さんも大概人間やめてる感じするけど、お姉ちゃんも大概だよね。同ランクと言うか、同じ匂いがするというか。

「で、どうするの？」
「とりあえず――」

「メイド、喫茶？」
「@クルーズって言うんだけど、お姉ちゃんの知り合いが経営してるんだ。どうせお金があるんだしさ」
「久しぶりに来たわねー。さて、食べましょうか！」
「食べ過ぎると太るけどね」
「分かってるわよ」
「うん……」

はい、@クルーズでございます。ちなみに、今は私服に着替えているのです。万が一、ないと思うけど中学時代の友達に見つかってもいいように。

「あれ、お嬢様！？　どうしてここに！？」
「あ、店長さん。お久しぶりです」
「……お嬢様、ねぇ」
「香織って……実は凄い家の出だったり……？」
「違う違う、お姉ちゃんの関係でさ。僕のこと知ってるのはあんまりいないけど」

この店の店長さん、昔お姉ちゃんとつるんでいた人なのである。しかも結構ぶいぶい言わせてたみたいなんだけど、お姉ちゃんに絡んで見事にぶちのめされてからお姉ちゃんに惚れ込んじゃったらしい。……一時期、うちに住み込んでハウスキーパーみたいなことしてたなぁ。

まさかあの頃は、店長さんやってたとは思わなかったけどさ。

「今日は一人の客としてきているので、お気遣いなく。あ、期間限定パフェ三つと……、あとアイスコーヒー、ミルクとガムシロで」

「私は……、紅茶を……」
「んー、サンドイッチセット、ドリンクはウーロン茶で」
「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

まさかの店長さん自らの接客の後、出てきたそれを三人揃ってパクつく。ふーちゃんは朝を抜いていたらしく、サンドイッチを平らげてからだった。
……それにしてもね？　時折見える金髪銀髪と時たま聞こえるあの声は、どう考えても……。

「ラウラとシャルがいるわね」
「……バレないように」
「まあ、バレてもいいんだけどさ」

シャルを巧く丸め込めればいいわけだし。
それにしても、なんだってここでアルバイトなんか……？　まあいいけど。
向こうも忙しいせいかこっちを向くことはない。そりゃあそうだ、ふーちゃんも簪ちゃんも私服なんだから。
ちなみに、ふーちゃんは普通のTシャツにジーパンという動きやすさを追求したような格好。……少しはおしゃれしたらどうかな。
簪ちゃんは、ちょっとはおしゃれしてるのかな。ワンピースにスカート。まあ暑いからね。仕方ない。
なんてことを考えつつ（ちなみに僕は決して変態じゃあないと言うことだけ言っておこう）、二〇分ほどが経過した頃。

「全員、動くんじゃねえ！」

ドタドタと店内に雪崩れ込んできた男達が、肩を怒らせ大声で喚いた。その手にあるのは、複数の火器。

直後、店内に響き渡る銃声に呼応するように甲高い悲鳴が上がる。

「きゃあああっ！？」

「騒ぐんじゃねえ！　静かにしろ！」

などと喚きたて、ジャンパージーンズ覆面装備の典型的な強盗犯は更に銃を構え威嚇する。背中のバッグから紙幣が飛び出している辺り、何処かから強盗して逃げてきた末の立てこもりなのだろう。

ただなぁ……。この人たち、分かってるのかな。ここでそういうことをすることのリスク。

考えながら強盗を眺めていると、外から拡声器によって音量を上げられた声が飛び込んできた。

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちは既に包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す――」

「……なんか」

「……警察の対応も」

「……古……」

うわぁ、警察の方々、今の言葉聞いたら泣くぞ？　僕は知らないけど。

それにしても、迷惑だなぁ。銀行強盗なんて、どうやったって捕まるってことぐらい分からないかな。分からないぐらいに追い詰められてるのか、それとも血迷ったのか。

まあどうでもいいけどさ。可哀想だけど、そう選択したのは彼らなんだし。

「ど、どうしましょう兄貴！　このままじゃ、俺たち全員――」

「うろたえるんじゃねえっ！　焦ることはねえ。こっちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

「う、うろたえるんじゃあないッ！　ドイツ軍人はうろたえないッ」

いやぁ、どうでしょうね。少なくとも僕はその『お約束（セオリー）』をぶん殴って蹴飛ばして、煮て焼いて食い散らかす人を一人知ってます。身内で。

そして簪ちゃん、小さくぼそぼそっとＪ○Ｊ○ネタを入れないで。ただでさえゆるい空気が筋弛緩剤飲んだみたいになるよ。

「へ、へへ、そうですよね。俺たちには高い金払って手に入れたコイツがあるし」

そう言って、一人の男がショットガンを無駄にリロードしてぶっ放す。バカだなぁ、弾丸が減るのに。

そして割れる蛍光灯、上がる悲鳴。

「大人しくしてな！　俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。分かったか？」

リーダー格らしき男の言葉に、コクコクとうなづく女性。ああ、可哀想に。

でもなぁ、この三人は死亡フラグのお花畑を全力疾走してるような気がするんだよなぁ。

「おい、聞こえるか警官ども！　人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！　もちろん、追跡者や発信機なんかつけるんじゃねえぞ！」

声を張り上げ、自慢げに一発を外へ撃つ。幸い被害はないようだけど……、ちょっとむかつく。

というか、ＩＳに乗るようになってから、ああいうものは更に脅

威に感じなくなってしまった。ＩＳの武器は怖いけど。
……それにね、争いは嫌いなんだよ。

「へへ、やつら大騒ぎしてますよ」
「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当ッスね！」
「まったくだ」

下卑た笑みを浮かべてそう言ってるけど、ごめんね。ここは違うんだ。
犯罪がないから平和なんじゃなく、犯罪が出来ないから平和なんだ。この街に限っては。
と、店内でただ一人立っていたラウラにそこで注目が集まる。まあ、なんかあるんだろうけど……。

「なんだ、お前。おとなしくしてろって言うのが聞こえなかったのか？」

いらだたしげにそう喚くが、ラウラは一瞬銃へと視線を向けただけで済ませる。あれは、銃の種類なんかを確認したのかな。

「おい、聞こえないのか！？　それとも日本語が通じないのか！？」
「まあまあ兄貴、いいじゃないッスか！　時間はたっぷりあるんスから、この子に接客してもらいましょうよ！」
「あぁ？　なに言ってるんだ、お前」

ええ、僕も思います。強盗して逃亡する最中とは思えないね。

「だって、ホラ！　すっげー可愛いッスよ！」
「お、俺も賛成っ。メイド喫茶って入ったことなくて……」

……いや、それは貴方がヘタレなだけです。残念ながら。中学ではこの地域一帯のメイド喫茶全て制覇してた人もいたんだよね。よくやるよ、ほんと。

というかさ、これって物凄い油断してない？　……やるか。このままでも大丈夫だろうけど、とっとと片付けた方がいい。

かさかさっと移動開始。決して隠密をしているだけで黒く光るあのおぞましい物体のようにではない。

ゆっくりと彼らの背後まで回る……、着いてしまった。警戒心無ッ！？　いや、僕も大分こういう場慣れしてるんだけど、それ以上に油断しすぎだよ……。

じゃあとりあえず、身を捻るように、腰を入れて、全身を使うように――、平手打ちっ！

「ぎぃっ！？」

凄まじい音とともにその一撃がしっかりと入り、男の手から拳銃が零れ落ちる。

耳は外したけど、首と顎の接点辺りを狙ったかから首とあご外れたかな。

手早く落ちた拳銃と懐のもう一丁、弾丸一しきりを掠め取るように回収すると、呆然としている他の男二人のうち、ショットガンをもっている方の男の腕を後ろへ回して極め、銃口をそいつのこめかみへと突きつけた。

「動くな。動けばこいつの脳漿が窓の飾りになるぞ。ついでにお前の目玉のデコレーション付でな」

「ひ、ひぃっ！？」

出来る限り冷たい声で言い放ってやると、ものの見事に情けない声を上げる人質。うわぁ。

ちなみに、さっきの平手打ちはお姉ちゃんの知り合いがよく使う技らしいんだけど……、お姉ちゃんに教えてもらった。凄い威力出るよね。その知り合いの人はコンクリートもやろうとすれば砕けるって。凄いね。

「そこのお前、銃を地面に置いて三歩下がり、腕を頭の上へ、うつ伏せになって地面へ伏せろ」

「テ、テメェ……！？」

「言う通りにしなければこいつの頭を吹き飛ばす」

「……ちくしょう……！」

銃を無造作に放り投げ、そのまま三歩下がって言う通りに伏せた。よし。

同じように人質にしていた男も伏せると、サブマシンガンとショットガンを回収する。さて、これでお仕事終了、っと。演技も終了、意外と疲れるなぁ……。

ちなみにこれ、おねえちゃんならもっと滅茶苦茶で、横暴で、最高に最短な始末を着ける筈だ。具体的に言うと、一秒で全員ノックアウトとか。そのぐらいなら一瞬で行える人だし。……ほんと、マジで死ぬんじゃないかなぁ、なんて思ったときがあったけど。

お姉ちゃんのことに関しては『お姉ちゃんだから』で片付けることにした。精神衛生的な意味で。ああ、だから束ちゃんと通じ合えたのかなぁ……。

「ふぅ……。さて、逃げようか」

『……今日初めてのセリフでなんですが、カオリは相変わらずバカですね』

ぐさっと来る一言を聞きながら、私は屋根裏へ逃げることにした。

……後で店長さんにお詫び言っとこう。

後日このお話はお姉ちゃんに伝わり、お説教を喰らいました。そしてふーちゃんと簪ちゃんからは「今度また埋め合わせ」だそうです。

んー、でも意外だなぁ。お姉ちゃんがあそこに出張ってこなかったなんて。

お姉ちゃん、出てきそうだったのに。

「香織、にしてもあんた凄いわね……。なんか、また動きに磨きがかかってなかった？」

「お姉ちゃんに振り回されれば強くなれるよ」

「遠慮するわ」

「……でも、危ない」

「うん、ごめん。でも、誰も傷つけないように、発砲させないようにするにはラウラがひきつけていたあの瞬間が一番だったんだ。ごめん」

それに、あそこで誰かが傷つくのは嫌だし、あのくらいの強盗なら僕も何度か片付けたことがある。お姉ちゃんの巻き添えで。

でもねぇ、さすがに特殊部隊相手とかは無理だよ？　ああいうのは素人相手だから出来ることであって、特殊部隊とか、そういうちゃんとした訓練を受けている人には勝てません。無理だから。

「まあ、お姉ちゃんはやってるんだけどねぇ……」
「香織？」
「ん、なんでもない」
……軍隊バーサスお姉ちゃんやって、勝ってるもんなぁ……。揉み消されたけど。
そんな夏休みの一日でした。ちゃんちゃん。……ヴァイオレンスだね、意外と。

第３２話　帰還　そして夏休みの始まり！（後書き）

お姉ちゃん、おねーちゃーん。
そういう回。お姉ちゃんやべえな、っていう回だったのに、香織が解決してしまった。
でも香織も体力とか腕力は普通の人間です、まだ発展途上ですから。
まあ技術が卓越してるだけで。
お姉ちゃんのチーとっぷりはまた後で出てきます。……のんびりした回書きたいなぁ。

ちなみに、今回出た香織の平手打ちは戯言シリーズから『匂宮出夢』の使う『一喰い（イーティングワン）』をモデルにしています。本人は……、出しても深く関わらないんだよね。出さないけど。出してもしゃーなし。
うーん、戯言系でネタ帳に詰めとくかな……。

第３３話　夏休みのとある日　不器用な黒（前書き）

今回は短いので注意。

第３３話　夏休みのとある日　不器用な黒

夏休みが始まり、あの「@クルーズ事件」から少しして、私は屋上にて自主練に励んでいた。
屋上の端から端までを全力疾走、つまりペースを無視したシャトルランだったり、逆立ちしての腕立て伏せだったりと色々だ。
体を鍛えると言うことは、要するに体を虐めると言うことに他ならない。なら、こういう無茶な特訓の方が個人的には性に合ってる。普通の練習じゃあんまり効果なくなってるし。

「……香織、自主トレか？」
「ああ、ラウラ。おはよう、じゃないか、こんにちは」

屋上にやってきたのは、銀髪の綺麗な女の子。ラウラだった。
そう言えば、ラウラとはあの@クルーズの一件以来話してなかったな。

「ああ。昼は食べたのか？」
「んー、あんまりお腹空いてないからいいかなって」
「そうか。なら買ってこよう。何がいい？　ここまで持ってくるとなると、購買になるが」
「え？　い、いいよ別に！　私、あんまり疲れてないし、お腹空いてないし！」
「む、そうか……」

しょぼん、と俯いたラウラは、残念そうにぺたりと座り込む。
夏真っ盛りのこの時期、一〇分も全力で動けばジャージは汗でびしょびしょだ。

「……しかし暑いな。日本の夏と言うのは恐ろしいものだ」
「ドイツって夏はどうなの？」
「暑いときもあれば寒いときもある。午前中は暑くても、午後になってから急に冷えだすと言うこともあるな」
「……日本のほうが楽そうだね」

間違いなく体調を崩すね、その気候だと。
体は頑丈な方だけど、内臓鍛えてるわけじゃないし。というか内臓って鍛えられるのかな。

「あまり根を詰めるなよ、倒れては元も子もない」
「わかってる。そろそろ休もうと思ってたし」
「そうか。……それなら、私の部屋で休まないか？　丁度シャルロットも出払っている」
「そう？　ならお邪魔するね」

疲れでだるくなっている体に力を込め、ぺたっと座っていたそこから腰を上げる。
この時間だと寮には余り人がいないし、ジャージ姿ならばれる心配もないだろうということで、この格好のままラウラの部屋へお邪魔することになった。

「お邪魔しまーす」
「先にシャワーを浴びたらどうだ？　着るものは……、確かバスローブが中に入っていたから、それを着ておけ」
「……ホテル？」
「？　なぜ宿泊施設の名前が出る？」
「……あ、ううん、なんでもないよ」

決していやらしい想像をしたわけではありませんよ、ええ。

ついでに言うと、私が「される」側なんじゃないかな、なんて想像したりもしてません。Mじゃないし。

……あ、ちが、顔真っ赤になってない？　大丈夫？　ううん、自分で何言ってるんだ私……。

「ど、どうした香織！？」

「へっ！？　な、なんでもないよ！？　うん！？」

がしっ、とラウラの肩を掴み、ああ顔が赤くなってるんだろうなぁ、などと思いながらそう言い聞かせる。

私は変態じゃない、私は変態じゃない、私は変態じゃない……！

絶対、違うっ！

「……ね？」

「ひいぃっ！？」

ラウラの情けない声を聞いてから三〇分ほどして、私はＩＳスーツの上にバスローブを羽織って、クーラーで風邪をひかないようにしてからラウラのベッドへと腰掛ける。前に尋ねたときにこっちのベッドだと言ってたから、場所は知ってる。

……ふぅ。うん、落ち着いた。

ラウラは私がシャワーを浴びている間に少し外に出ているらしく、テーブルに綺麗な形の日本語で「購買へ行ってくる。すぐ戻る」と書かれたメモが置かれていた。

購買、ね。気を使わなくてもよかったのに。

思案していると、ガチャリとドアが開いて、ビニール袋を片手に持ったラウラが入って来た。

「すまんな、遅くなった……、あ……」

「ん、おかえりなさいラウラ。どうしたの、ボーっとし、て……？」

ドサッ。
ビニール袋がラウラの手から落ち、持っていた彼女はぼんやりとした様子でこちらへふらふらと歩いてくる。
そのまま私の顔へと手を伸ばし、その指がゆっくりと私の頬を撫で上げ――。
「ひゃっ!?　ちょ、ラウラ、何を――!」
「香織、好きだ……」
「え……」
嘘、ちょ、まってまってストップ、だめだって!?
なんて私の心の声は知る由もなく、ラウラは私の両手首をぐっと掴むと、お腹の辺りに片膝を乗せてこっちの動きを封じてくる。
どうしよう、力任せには動けないし、って言うかちょっと苦しいし。
しかもラウラの私を見る目がなんだか怪しい、って言うか熱に浮かされたような目をしてる。
「ラウラ、痛い……っ!　手、痛いよ……!」
「香織……」
「ら、ラウラ、ねえ聞こえてる?!　ラウラ!?」
駄目だ、まるで聞こえてない。
まるで当たり前のように私の首筋へと顔を埋めると、スンスンとそこの匂いを嗅ぎだす、って何してるの!?
ちょっと、ラウラってばぁ!?
「あっ……!」
「ん、甘い……」

「な、なな、なんで、な、舐めっ！？」
「聞いたとおりだ……、甘い……」
「……ん？」

今、なんと言いましたかねこの子は。
聞いたとおり？　誰に？
……よし。

「ふぁっ……、ね、ねえっ、誰に聞いた、のっ？」
「ん、義姉上だが？　香織は押しに弱いから、少し乱暴に押していった方がいいと」

おお、律儀に答えてくれてありがとう。おかげでなんでこうなってるのか、大体の犯人がわかったよ。
というか、ラウラに何を教えてるんだあのバカ姉……！
とりあえずあのおばかなお姉ちゃんを叱るために、ラウラを押し戻す。

「そっか、ふーん……。ラウラ？」
「……は、はい？」
「お姉ちゃん、どこに行くって言ってた？」
「へ、部屋に戻る、と……」
「そっかぁ……。ラウラ、戻ってきたらお仕置きね」

びくびくとしているラウラをベッドに押し付けて、こめかみをヒクヒクさせながらジャージを持って自分の部屋へ。
汗まみれのジャージを洗濯機へ放り込んで制服に着替えると、そのまま二年生のお姉ちゃんの部屋を訪ねる。

「はーい？」

「お姉ちゃん、ちょーっとお話しよっか？」
「……あれ、香織？」
「ん、そうだよ？」

焦ったような声音ながらも、お姉ちゃんは扉の鍵を開ける。
私が扉を開けると、お姉ちゃんは大分後退した所でこちらを見ていた。

「さて、お姉ちゃん？　ラウラに変なこと教えたよね？」
「え、えーっと、な、なんのことかなー？」
「あはは、ごまかせると思ってる？」
「……思ってないで痛い痛い痛いっ！？　香織、いたっ、痛い？！　アイアンクローは、駄目、痛いからっ！？」
「純真無垢な女の子に下世話なことを教え込むんじゃありま、っせん！」

大股数歩で近づくと、顔面を右手で掴みこんでアイアンクロー。
さすがにあれはやりすぎというか、そもそもなんであんなったのか、全く検討もつかないんだけど。
お姉ちゃんは涙目になりながらもなんとか弁解を始めていた。アイアンクロー中に。

「だ、だって、ラウラちゃんがなんだか、不安そうだったんだよー！？」
「だからって、限度ってモノがあるでしょう！　あんなことを教えて、ラウラが変な勘違いしたらどうするつもり！？」
「ごめんなさーったい痛いいっ！？」
「反省しなさいっ！」

一通りのお仕置きを済ませた私は、大きなタンコブを頭部に三つほど作っているお姉ちゃんをその場に捨て置き、ラウラのところへと戻ることにした。

それにしても、廊下は暑い。とっとと部屋に入ることにしよう。

「戻ったよ、ラウラ」

「あ、ああ……」

「……もう怒ってないよ、ごめんね。私も大人気ないことして」

部屋に戻った私は、暗い表情でこちらを見るラウラにそう声を掛けた。

まあ、大人気ないことって言うか、突き飛ばしたことなんだけど。いや、押しのけたことなのか。

それはともかく、私はラウラの隣に座ると、彼女の頭を左腕で抱きかかえる。私の手が触れたとき、ビクリと彼女の体が震えた。

「ごめんね」

「……私の方こそ、すまなかった。幾ら義姉上の言ったことだからと言って、やっていいことと悪いことがある……」

「まあ、その、一回失敗しただけだし、さ。あんまり思い詰めないで」

ぎゅ、っと彼女の体を抱くと、ラウラは甘えるようにこちらへ寄りかかってくる。

「……ねえ、ラウラ」
「なんだ？」
「今日、一緒に寝よっか」
「あ、いや、だが……」
「いいから。そうだ、ふーちゃんと簪ちゃんも呼んで、パーティーしよっか。きっと楽しいよ」

突発的な出来事ではあったけど、でもまあ、切っ掛けできてよかったかな。
そんな、夏のある日の出来事。ちょっと危険だったかもしれない、一日でした。

「……ああ」

第３３話　夏休みのとある日　不器用な黒（後書き）

香織もちゃんと男の子してます、少しだけ。
ラウラのことは、今のところ妹とかそんな感じの感覚。背が小さいのも影響しています。
不器用なのです、二人とも。

第３４話　夏休みのとある日　鉄の力

ラウラたちとのパジャマパーティーから数日が経ち、私達は全員揃ってアリーナへとやってきていた。
自主錬も兼ねた模擬戦である。ファーストシフトした梟の感触にもなれないとだし。
一夏、箒さん、セシリアさん、シャルロットさん、ふーちゃん、簪ちゃん、ラウラ、そして私。以上が今ここに集まっているメンバーです。

「それで、誰とやるの？」
「簪ちゃんかなぁ？　ほら、『真打（しんうち）・鉄（くろがね）』も細かく見てないし」
「ん……、わかった……」

そう言うと、簪ちゃんはピットでＩＳを起動させる。一瞬の光と共に、簪ちゃんはその体をＩＳで包み込んでいた。

「先行ってる……」
「はーい」

その場から姿を消したかと思いきや、既にアリーナの中央に陣取って仁王立ちしている簪ちゃん。随分カッコいい待ち方ですね。
簪ちゃん、ＩＳに乗ったら性格変わる人とかじゃないよね？

『ま、とにかく。行こうかイヴ、梟』
『はい』

頭の中で梟の鳴き声が木霊した直後、私の体もＩＳに包み込まれる。

装備にかかる時間は0．3秒以下、相当時間の短縮が行えている。
これもファーストシフトの恩恵なのだろうか。

「それじゃ、一番手行ってきます」
「ええ、行ってらっしゃい」
「負けるなよ」

負けたくはないけど、どうだろうなぁ。頑張ろう。
ピットから飛び出して空中で姿勢を整える。空気が、一瞬で張り詰めたものへと変わった。
簪ちゃんは無言でこちらを見据えると、一瞬で右斜め下へと構えた手の内へ《朱鉄（あかがね）》を作り出す。

『――試合、開始ッ！』

お互いの個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）に流れたのはふーちゃんの声。
それを合図に、私はあらかじめ展開されていた《夜羽（よばね）》を広げ、《夜鷹（よたか）》を振りかざし一気に加速する。
まだワンオフや武器特性を使うような状態じゃない。あれは奥の手、序盤に使うものではない。
一瞬すらも間に合わぬその一撃が互いの腕に衝撃を伝え、アリーナ内に盛大な金属音を響かせる。
互いの一撃の速度は同じであっても、その重量分《朱鉄》の方が衝撃は重い。その一撃の響きを受け流すように剣を引くと、もう片方の《夜鷹》で真横から切りつける。
それを反射的に《朱鉄》を盾にすることで防いで見せた簪ちゃんが、更にそれを回すようにして振りかざし、こちらへ切り込む。
ガギンッ！　盛大な音と共に弾き返され、短時間で膨大となった熱量を伴って返しの刃が私へ迫る。
しかし、簡単に斬られはしない。

《夜羽》の耐物理装甲を重ねて防御、少々削られはしたがその程度ならば問題はない。

《夜羽》の羽は、ファーストシフトを終えたことで二枚から四枚に増え、その性能は二極化されている。つまり、背中から斜め上に浮いているのが耐物理、斜め下に浮いているのが耐エネルギー。両方が展開されているときには上と下で丁度『X』の形になっている。

そしてその耐エネルギー装甲はビットにも転用できる。それが《夜羽》の力なのだから。

「飛べ――ッ！」

指示よりも早く、私の思念を感じ取り《夜羽》がビットへとその身を変える。一瞬で簪ちゃんを取り囲むと、その鋭い先端から親指よりも少し太い程度のレーザーを撃ち出して行く。

このまま押し切れれば何よりも楽だ。だけど、簪ちゃんはビットを見てほくそ笑んでいた。何かやらかすつもりだ。

「鉄（くろがね）の武装が一つだと、私は一度も言ってない……！」

「……ってことは、まだ何かあるってことね」

「そういう……、ことっ……！　来て、《蒼鉄（あおがね）》！」

手に持った《朱鉄》を量子変換して収納せず、そのまま地面へ放り投げて突き刺すと、その名を呼ぶと共にその手に一振りの剣を呼び出した。

鮮烈に視界に張り付くその蒼が彩っているのは、一本の刀。しかし、その背部には横たわるように銃口が取り付けられていて、さながら剣を主体とした特殊な銃剣のような、むしろガンブレードとでも呼ぶべき代物だった。

その刀、《蒼鉄》を一度振るった簪ちゃんの顔つきが変わる。海に行く前は、あれ程楽しそうな顔はあまり見れなかった。

楽しいんだ。ＩＳと、自分の子供と一緒に戦えるのが。

「まだまだ、戦いは始まったばかり……！」

「その通りだよ。さあ、行くよ！」

「うん……！」

互いに継戦の意思を確認し合い、それからニッと笑みを浮かべてから切迫。

こちらのビットと一対の刃の猛攻を、簪ちゃんは片手に握ったその刃だけで凌いでいた。

振るい、切り払い、その刹那に幾度も引き金を引き、銃口から青い光を撃ち出してこちらのビットレーザーをことごとく撃ち落していく。

たった一本の刀でこれだ、なんと器用なんだろう。

刀の扱いは学んでいる人には及ばないかもしれないけど、簪ちゃんにはそれを補って余りある多様性がある。それをフルに生かした戦い方。

一つ一つを確認するのではなく、その感覚で感じ取る。言葉だけならまるで天才のようだけど、簪ちゃんはそれを努力で勝ち取り、宇宙で花開かせたのだ。

素直に凄いと思う。だから、答えなければならない。その努力に、その力に。

切り込んできた簪ちゃんの刃を耐物理装甲の羽で受け止めると、その背後へ向けてエネルギーを撃ち放つ。

それを簪ちゃんは上空へ飛ぶことで回避すると、更に回転して上空から切り落としてくる。

咄嗟に耐物理装甲で受け止めようとした直後、刀身が青く発光したのを見て真横に回避を試みる。無理な体勢からのそれを行ったせいで若干衝撃を受けたものの、辛うじて刃を避けることが出来た。

あの光……、違う。あれは物理装甲で受け止めてはいけない。

「よく避けたね……」
「光ったの見えたからね。それ、ＢＴエネルギーでしょ？」
「刃に纏わせてる……。装甲だけじゃ防げない……」
うわぁ、私の装甲が進化したのが仇になってるなぁ。
……仕方ない、こっちも使おう。出し惜しみとかしてられなさそうだ。

「じゃあ、こっちも本気で行くよ」
「……うん！」
「梟、イヴ、《とりのさえずり（バードエイク）》起動。平行起動、《夜鷹》武装特性、《ナイトホーク》」

ワンオフと《夜鷹》の武器特性を起動させ、姿を消す。同時にこちらの発生させる余剰エネルギーと相手のＢＴエネルギーをワンオフによって消滅させ、完全なステルスを得る。

「……来た」
『行くよ』

場所を悟られぬように音声は個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で伝え、一拍置く。
直後、無音で動き出した私は、最高速で簪ちゃんを切りつけた。
それと同時に全てのビットからレーザーを発射、装甲を削っていく。
しかし、それでも撃たれたレーザーのうち、三分の一は斬られたり撃ち落とされたりしてしまった。
簪ちゃん、ドンドン強くなるね。うかうかしてられないや。
さあ、行くよ。

「すげぇ……」

私、鈴の隣で、アホ面晒して口をぽかんと開けている一夏が言った。

まあ、確かに。簪の自作ＩＳ『真打・鉄』も、香織のファーストシフトした『梟』も、どちらも凄い。

でも、強いのはＩＳだけじゃない。あの二人自身の技量も尋常じゃなく高くなっている。それも、今まで以上にだ。

簪は今まで溜めていたものを全て出し切れているような感じで、いわばようやく咲いたところ、といった所か。これほどまでに生き生きと戦えるほどに力を蓄えていたとは、全く背筋が寒くなる。

こんな逸材を、日本は候補生に留めていたのか？　……なんとも、今更な話だ。私ももうあの国の候補生ではないのだし、別にどうでもいいか。

香織も、全く持って滅茶苦茶だ。

あの子は戦いが嫌いだ。争うのも、人を傷つけるのも。その香織があああして戦っているということには、ＩＳが兵器じゃないことを証明することにも繋がる。

香織は、ＩＳの声を聞いたと言っていた。最初は夢か何かだろうと思っていたけど、今の香織を見れば分かる。

あの子はきっと、ダンスをしているようなものなんだ。戦いではなく、互いを尊重し合い全力を出し切れるもの。世の中の大人たち、バカな女達が強欲丸出しで追い求めているＩＳは、戦いの道具にしてはいけない。

だって、こんなにも楽しそうに、踊れる役者がいるのだから。それをＩＳは楽しんでいる。だからああして動けるんだ。

……ほんと、凄いわよ。あんたたち。

「一夏、口閉じなさいよ」

「あ、ああ。わりい。けどほんとにすげえな……、束さんの会社の代表なんだろ、お前ら？」

「ええ。母さんの保護もしてくれるらしいし、断る理由なかったしね。大体、あの国も別に愛着あったわけじゃないのよ」

「そっか。しっかし、更識さんってすげえな。代表候補生ってやっぱり強いんだな」

感嘆してそう声をあげる一夏。

けどね、一夏。本当に凄いのは技量じゃなくて、簪のたった一つの才能なのよ。

そこにないなら、一から育ててしまえ。どれほど無能でも、突き詰めれば頂点へいける。その理論で繰り返された努力の結晶は、ただの天才では手に入らない最高の強さなんだから。

それに、簪よりも香織の方が凄い。別にえこひいきする訳じゃないわよ？　あの子、ここに入るまでまともにＩＳに触ったことなんてなかったっていうんだから。

束社長にＩＳの講習を受けていたみたいだけど、知識だけではＩＳは動かせない。長い時間を掛けて体に馴染ませないと、ＩＳはちゃんと言うことを聞いてくれない。

けど、香織は違う。一夏もそうだけど、初めてＩＳに触れてから半年足らずで私たちの領域まで辿り着いてしまった。あ、一夏はまだちょっと足りないみたいだけど。

「……悔しいな」

「何がよ？」

「どれだけいい機体をもらったとしても、今の香織達に勝てる気がしない」
「……まあ、それがわかってるなら大丈夫よ。あんたはもっと強くなれる」

一夏の隣で落ち込んでいた箒にそう声をかける。
箒の第四世代型ＩＳ、『紅椿』は確かに強い。だけど、その使い手によってその性能は大きく左右される。
まだ箒は『紅椿』に触れて一月も経っていないのだから、そう思うのも仕方のないことなんだろう。私も、あんまり勝てる気がしないのは内緒だ。

「……私よりも、ビットの扱いに慣れているようですわ」
「それは、まあ。お疲れ？」
「優しさはないのですか？」
「次回の入荷をお待ちください」

セシリアに突っ込みとボケをかましてみると、セシリアは大きく溜め息を吐いて額に手をやった。
もう、せっかく私の優しさの一パーセントくらいを見せてあげようかと思ったのに。品切れだけど。
でも確かに、香織のビットの扱いは圧倒的にセシリアよりうまい。まあ、多分香織のことだからビットの扱いとか考えてないんだろうなぁ。使えるからそれでいいや、みたいな思考パターン時々あるし。
……まあとりあえず、もうちょっと観戦していましょうか。

「……そこっ」
「っ！」

的確な射撃と斬撃によって二機のビットが落とされる。無論、あらゆるレーダーにも、視覚にも映らない状態だというのに。

あれかな、気配で斬ってるのかな。ビットにエネルギー向けられると、まだ出力の弱い《とりのさえずり》ではＢＴエネルギーの銃弾は掻き消せないし。

「そろそろ決める……」

ぼそりと呟いた直後、簪ちゃんは真っ逆さまに下へ、つまり急降下してから進行方向を上空へと引き上げる。

その手には、アリーナの地面に突き刺さっていた《朱鉄》がしっかりと握られていた。ああ、そういうことか。

「《朱鉄》、武装特性発動……。《紅蓮朱鉄（グレンノアカガネ）》……！」

そう呟くように宣言した瞬間。

《朱鉄》の纏っていた熱気は瞬く間に深紅の刀身へと変化していく。熱気自体が、質量を持って刃へと変わっていた。

全ての熱が質量へと変換されて尚も続く熱量の増大に伴って、刀身が蜃気楼のように揺らいでいる。その大きさは、『真打・鉄』自身を軽く凌駕するほどのものだった。

「……それって、アリですか？」
「うん……。大剣はロマンで、この子は私の娘だから……」

そういうことではないと思うけどあれ喰らったら死ぬんじゃないかな。一応簪ちゃんもこっちの絶対防御とシールドバリアが復活したことは知っているから、あれ使ってるわけで。

ああ、無かったら死ぬ威力なんだ。あってもやばい気がするんだけど。

「振りかぶって……」

「っ！？　梟、ワンオフ最大！　《夜羽》武装特性、《ウィングカーテン》起動！」

咄嗟に出力を二極端に回す。

あれは回避できない。というか回避した瞬間に横殴りに斬られて終わる気がするから。

今の《とりのさえずり》では精々熱量を半減させるのが精一杯だけど、やらないよりはましだ。というか質量化する熱量を無限発生させるって、それどういう原理になってるのかな？　この辺溶けるって言うか消滅しない？　まさか、また束ちゃん新技術開発した？

……もう驚かないよ、私は。驚かないって決めたんだ。

《ウィングカーテン》は完全な防御型武装特性になっていて、《夜羽》四枚を共鳴させることで音の壁を作り出す。

ビットがない分やや厚さは落ちるけど、それでもやらないよりましだ。……ああ、また修復作業かなぁ。

ごめんね、梟。これどうしようもないかも。

「叩き斬るっ！」

直後、私の眼前へ真っ赤な剣が迫ってきていた。

――で、その後。

「香織、梟大丈夫？」
「あ、うん。そこまで被害は無いよ」

戦いを終えた私たちは、少々息を切らせながらそんな会話を交わしていた。
あの一撃で私のシールドエネルギーは全て持っていかれてしまい、私の負け。音の壁があっても衝撃でエネルギーが持っていかれてしまった。
ただ、あの一撃は戦闘が始まってから相当時間が経たないと使えない上に、一度使うと全ての熱を排熱してしまうため、もう一度溜めなおさないといけないらしい。そりゃあ、あんなの何回も打たれたら溜まったもんじゃないよね。
今回は《啄木鳥》使ってあげられなかったなぁ。もうちょっと、高機動戦で当てる練習しないと。

「次は一夏とふーちゃんだっけ？」
「うん……。多分、鈴の勝ち」

『白式』は燃費悪いからなぁ……。
それにしても、今回の敗因は時間のかけすぎだったのかな。他にも色々原因ありそうだし、もっともっとがんばろう。
もっとたくさん梟と飛びたいし、もっともっと強くなりたい。そうすれば私は、僕として生きられる。

「……はい」

突然、簪ちゃんが正座した自分の太ももをぺちぺちと叩いて言った。
……膝枕？

「……うん」
「……いいの？」
「うん……」

で、では、お言葉に甘えて。
簪ちゃんが痛くならないようにきちんと場所を動かして、そこに頭を置く。
……暖かい。なんというか、ぽかぽかするね。夏だけど。

「……香織、難しい顔してた」
「え？」
「さっき。あんまり、考え込んじゃ駄目」

そう言って、簪ちゃんは儚げな笑みを浮かべる。
……ん、よし。ありがとう、簪ちゃん。

そんな、ロマンを追い求める一人の少女との、とある日の夏の思い出でした。

第３４話　夏休みのとある日　鉄の力（後書き）

ナチュラルに膝枕、香織ちゃんでした。
海の回でも出てきた『武装特性』ですが、完全なオリジナルです。
簡単に言えば、武装専用のワンオフアビリティー的なもの。ワンオフと平行使用できるものもあったりします。
発動条件はその武装を操縦者が完全に理解していること。なので、簪は『真打・鉄』の武装の武装特性は全て使えます。
そろそろオリジナル機体の一覧作ろうかな。

夏休みも終わってしまい、これからは普通の投稿ペースに戻ります。
というか進学のうんぬんがあるので、時間が取れないときもしばしばあるかもしれません。ご了承ください。

……箒がワンオフに目覚めず、一夏はセカンドシフトせず。まあ戦力的には五分五分かチョイ弱いくらいですが、大丈夫なんだろうか。
次回は……、お泊り会かな？

第３５話　夏休みのとある日　お泊り会！　前編（前書き）

エロではなく萌えを。
最近エロ投入しすぎだなぁ、と言う心の声にしたがって。

第３５話　夏休みのとある日　お泊り会！　前編

またまた夏休みのある日のこと。
随分前に誰かさんが言った通りに、僕の家でお泊り会が開かれることとなった。

「食材は後で買出しするとして、ゴミは……大丈夫かな。寝る場所も確保したし」

現在、僕は自宅にてワンピースとスカートを身につけてせっせと皆を迎え入れる準備をしていた。
ちなみに、ワープ装置は小型化機能がつけられているらしく、小さなインテリア程度の大きさに縮んで部屋の隅っこに片付けられている。
この状態だと向こう側のワープ装置からこちらへ飛ぶことが出来ない。そりゃそうだ、危険だし。
さて、現在午前一一時過ぎ、誰が最初に来るのかな？
ちなみに、来るメンバーはふーちゃん、簪ちゃん、ラウラの三人。
他の人も呼びたいけど、正体知ってる人しか呼べないからね。

『ご機嫌ですね、カオリ』
「ん、まあね。ほら、お泊りってあんまり無かったし」
『……なんだか釈然としません』
「なにが？」
『別に、何も』

なんだか、イヴがむすっとしてるんだけど。……何か嫌なことでもあったのかな。
梟の一次移行が終わってからは、イヴはネットワークを辿って他

の場所へ移ったり、赤外線やらのデータ回線を通じて別の端末に移ったりできるようになった。普段は梟の中にいるけど。
そんなことを考えていると、ドアのチャイムが鳴らされた。

「はーい、今行きますー」

玄関の鍵を開け、扉を開くとそこには、ラフな格好をしたふーちゃんが腰に手をやって立っていた。
荷物はスポーツバッグ一個と、お手軽装備。

「ああ、ふーちゃん。いらっしゃい」
「お世話になるわよ、香織♪」
「わっ、突然どうしたのさっ！？」
「いいじゃないいいじゃない、ほら、婚約者のハグよ、はぐーっ♪」

突然僕に飛びついてきたかと思うと、ぎゅーっと僕を抱きしめる。
な、なな、なにをしてるのかなこの子は！？
ふーちゃんはにひひ、と笑うと、振り子のように体を振って、器用に家の中へと飛び込んだ。しかも空中で靴を脱ぐと言う大道芸を見せ付けて。

「も、もう、ふーちゃんってば……。女の子なんだから、もうちょっと謹みをね？」
「いいじゃない、別に！　それにさ、しおれたアタシはアタシじゃないでしょ」
「……確かに」

そう言われてしまうと、確かに頷くしかなかった。
しょぼくれたふーちゃんはふーちゃんとは言えないだろうし、みたくもない。ふーちゃんは元気の塊みたいな子なんだし、そういう

風に居てくれた方が、僕も嬉しい。

「ひゃー、涼しいわねぇ。やっぱり日本の夏にはクーラーね」
「最近は気温も上がってるからね。麦茶入れるから、ソファー座っててていいよ」
「はーい」

ぼふっ、とソファーに身を投げたふーちゃんを眺めながら、冷蔵庫で冷やしておいた麦茶をコップに注ぐ。ちなみに今朝作って冷やしておいたものだから、結構冷えてるのですよ。

「ん、ありがと。ん……」

コップを口につけて大きく煽るふーちゃん。汗の流れる喉が艶めかしくコクコクと動き、思わず僕はその仕草をじーっと眺めていた。
……これじゃまるで変態じゃないか。まったく、なってないぞ僕。

「っぷはーっ！　やっぱり夏は冷たい飲み物に限るわね！」
「一応寝る場所は皆で一部屋にしておいたからね。寝る順番は応相談で」
「りょーかい。それにしても、あのワープ装置一つ無いだけで大分見た目が変わるわね。転校してから初めてよね、香織の家に来たのって」

ふむ、確かにそのとおりだ。
というか、それ以来人をまともに上げていなかったりする。だからちょっと緊張していたりもするわけだ。

「お昼は食べちゃったし、日が高いうちは中でだらだらする？」
「皆がそれでいいならね。二人が来たら相談しようか」

「おっけー」

そんなことを話している間に、またもや玄関のチャイムが鳴る。
はいはーい、と返事を返しながらドアを開けてみると。そこには可愛らしい服装の簪ちゃんが立っていた。ちょっとオシャレしてきたのね……。

「いらっしゃい、簪ちゃん。どうぞ、入って」
「お、お邪魔します……」
「……キャリーケース……」

ガラガラと黒いキャリーケースを引いて上がってくる簪ちゃん。
さっきのふーちゃんを見てる分、荷物が多いと感じてしまう。

「あ、来たわね。暑かったでしょ」
「すっごく……」
「今麦茶入れるね」

また棚からコップを一つ取りだして、麦茶を注ぐ。
それにしても簪ちゃん、出会ったころとはずいぶん印象が変わったなぁ。最初のころは、こういうとあれだけど、ちょっと暗めの子だったのに、今はそれが大人しい、清楚という印象に変わっている。

「あとはラウラだけか」
「ねえ簪、今日は家の中でだらだらしない？　せっかく香織の家に来たんだし、出かけるだけならいつでも行けるでしょ？」
「ん……、それがいいと思う」

おおう、これはラウラが来ても数で押されるフラグが立っていませんか？　まあいいや、僕も外に出るのは面倒だし。

でも、家の中で何するのかな。ゲームはあんまりないし、テレビぼーっと見るっていうのもなぁ……。

「……あの、簪ちゃん？」
「なに？」
「なんで僕に抱きついているんでしょうかね」
「なんとなく」
「あ、ずるい。私もー」

ああー、前からふーちゃん、後ろから簪ちゃんが僕をぎゅーっと。普通なら嬉しいとか感じるんだろうけど暑いです。クーラーの恩恵があっても暑くなってくる。

「あの、二人とも、暑いから」
「……むぅ」
「仕方ないわねー……」

名残惜しそうに離れた二人だったけど、なんで突然抱きついてきたのか。というか簪ちゃんはそういうキャラじゃないんじゃないかな。宇宙に行ってからなんか壊れ始めたのか？　……宇宙恐るべし。
そういえば、まだ月面コロニーにはいってないな。あとで連れて行ってもらおう。
なんて考えていると、またもやピンポーン。

「はーい」

ガチャ。

「はぁい♪」

バタン。

……おかしいな、なんであの人がここにいるんだろう。ほんとなんでなんだろう。なんで？

「ちょ、香織君!?　見た途端に閉めるなんてひどいと思うんだけど!?」

「いきなり人の家に押し掛けてこないでくださいっ?!」

「えーっ？　束ちゃんがオッケーって言ってたわよ！」

また　あ　の　人　か。

というか、束ちゃんって呼んでるんだ。他の人はさん付けとか社長とかなんだけどね。

ということでナターシャさんでした。いきなり人の家に押し掛けてくるのはどうかと思うんですが？

「まあまあ、いいじゃない。ほら、お泊りの道具も持ってきたし」

「あ、泊るんですか」

「もちろんよ。先輩の家にお邪魔するのは後輩の務めなんだから」

「そんな話聞いたことないんですが」

「じゃあ今知ったわね、また一つ賢くなれたわよ」

ああ言えばこういうというのはなんとも、なぁ。いや、楽しいしいい人なんだけども。

……まあ、仕方ないか。これで「ダメー」と追い出すのは簡単だけど、なんか嫌だし。

「まあ、いいですよ。どうぞ」

「わーいっ」

その言葉はあなたが発する言葉ではないのではないでしょうか。
けど言ったら怒られそうだから言わないことにする。うん。
で、再びリビング。行き来多いな。

「……え、っと、なんでいるの？　福音の操縦者さん」
「え？　なんでって、押し掛けたから？」
「いやいや、そうじゃなくて！　アンタアメリカのテストパイロットでしょ！？」
「ん、ああ！　そういうことね。私、アメリカ抜けてＢＣに入ったのよ。だから今は無国籍、アルカディア・？所属ってわけ。よろしくね、先輩方」
「……へ？」

ああ、束ちゃん。また連絡忘れてたね？　だからこういうことになるっていうのにもう……。
困惑している二人に、ナターシャさんがＢＣ所属になった経緯を話すと、なるほどという風にうなづく。

「そういうことね。なら、これからよろしくね、ナターシャ」
「よろ、しく……」
「ええ、よろしく。それと今日はお世話になるわね、香織君？」
「はいはい、布団用意しておきますね……」

お姉ちゃんの部屋でいいかな、あそこ広いし。
ということで、さらに布団を引っ張りだすために、とりあえずリビングを出ることにした。

「で」

にたり、と笑う。きょとんとこちらを見る鈴ちゃんと簪ちゃん。呼び方が以前と違うのは、束ちゃんとの差別化を図るためである。個性って大事よ？

「二人は香織君が好きなのよね？」

「そうだけど？」

「うん……」

「……むぅ、弄れそうにないか」

ここで少しでも恥ずかしそうに返してくれれば、全力で弄ったのに。でも仕方ないわね、うん。

しっかし、香織君も幸せ者ねぇ。こんなに可愛い子たちに慕われて。まあ、本人も好かれていることはわかってるみたいだし、というか婚約者らしいし。

「それで、何か進展させるつもり？」

「なにが？」

「だから、香織君との仲よ。さすがにヤッちゃうのはまずいけど、ちょっとえっちするくらいならいいと思わない？」

「え、えっち……」

あら、簪ちゃんは初心なのね？　それに比べて鈴ちゃんはあっけらかんと、……あ、赤くなった。二人とも初心、ってわけじゃなさそうね。鈴ちゃんはそういった類の思い出アリなのかしら？

「って、今日泊まるのはもう一人いるのよ？」
「なら四人で」
「やらないわよ！？」
「ジョークよジョーク、顔真っ赤にしちゃって可愛いわね」

まあ、半分くらい本気ではあったけど。ジョークが混じってるからジョークよ、ええ。

なんて話をしている間に、布団を出し終わったのであろう香織がリビングに入ってきた。銀髪の少女、ラウラと言ったか。その子と一緒に。

「もう来ていたのか。それと……、なぜ貴様がここにいる？」
「……ねえねえ香織君。ラウラちゃんはＢＣに入ってないの？」
「束さんにそれ言ったら、嬉々として引き抜くと思うんですけど。中国、日本、アメリカときて次はドイツですか？」
「もう半分ゲーム感覚よねぇ。ラウラちゃん、私は香織君の知り合いに聞いて泊りに来ただけよ、他意はないわ。アメリカも関係ないし、あなたたちの恋路を邪魔する気もないから、安心して」

ぼふんっ、とラウラちゃんの顔が赤くなる。あら、もっと初々しい子がいたわね。

ふふっ、楽しくなりそうだわ。

第３５話　夏休みのとある日　お泊り会！　前編（後書き）

誰が予想しただろうか、この段階でのナターシャおねーさんの登場を。
私は予想していなかった。
後編は皆でだらだらする様子や夕暮れ以降の皆の様子なんかを書くつもりです。
イベント……、起きるかな？

第３６話　夏休みのとある日　お泊り会！　後編の前編！（前書き）

終わらなかった。

第３６話　夏休みのとある日　お泊り会！　後編の前編！

お昼過ぎ。
皆揃ったところで、じゃあ何をするかと問われれば、何をしようかと返すほかないのです。

「なにする？」
「王様ゲームを」
「却下です」

ナターシャさんが提案するとなんか危ない気がする。こう、アルコール分的な意味で。

「じゃあ……、何する？」
「外には出たくないし……、あ、そうだ」

なんていいだして、ナターシャさんがＩＳの格納領域から何かを量子変換して取り出す。
……え、マット？　これはどこかでみたことがあるんですが。

「ツイスターゲーム！」
「ぶふぅ！？」
「それは……、ちょっと……」
「香織君と絡めるわよー」
「やる」
「あれ、簪ちゃん！？」
「よーし、ラウラ。テーブル片すわよ」
「お、おう」

ふーちゃんとラウラが、立ち上がってテーブルを片していく。あれ、皆やる気満々なのかな？

あー、これ押し切られそうな気がするんだけど。

見る間にあれよあれよとマットが広げられ、なんということでしょう。そこにはあっという間にツイスターゲーム会場に。

「え、ほんとにやるんですか？」

「もちのろんよ！　ちなみに、お姉さんはやってもおいしいところがないので、ルーレットを回しまーす」

「ちょっ！？」

「狭いし、二人ずつで行きましょうか。簪、ラウラ、じゃんけんして勝った人が最初に香織とやるってことで」

「ん……」

「いいぞ」

じゃーんけーんぽーん、ということで最初は鈴ちゃんに決定しました。どうやら、僕は三連続らしいです。

なんでこんなことに……。

「はい、じゃあ行くわよー。二人でじゃんけんして、負けた方から入ってね」

「……じゃーんけーん」

「「ぽん！」」

グーで負けました。うわっ、ふーちゃんものっすごい勝ち誇った顔してる。うわぁ、可愛いけど憎たらしい。

あとナターシャさんが満面の笑みでルーレット回してるんだけど。

「はい、じゃあ香織君は……、左足を緑に置いてねー」

「は、はぁ……」

とりあえず最初の一回なのでぽすっ、と。

「次、鈴ちゃんね。えーっと、右手を黄色に置いて」
「はーい」
「香織君、左手を赤に」
「よっ……、と」

既に体が引き伸ばされているんですが。赤と緑って端と端なんですけど。

「鈴ちゃん、左手青ね」
「ほっ」
「香織君、右足赤」
「なっ!?　くぐっ……！」

ぐおおぉぉっ、き、きつい……！　予想外にきつい……！

「鈴ちゃん、右足緑ー」
「まだ、大丈夫ね……！」
「香織君、右手緑」
「なあぁっ!?　っと、お、ぬっ!?」

で、三〇分後。

「はぁ、はぁ……」
「き、きつかった……っ！」
「んー、中々エロ、じゃなかった。良かったわよ、二人とも」

エロって言いかけてますよ。

とりあえずふーちゃんとのツイスターゲームは終わったけど、もう汗だくだく。最後のほうはくんずほぐれずだったし、なんかふーちゃん幸せそうに笑ってるし。

あ、ちなみに勝ちました。ほんと、これ結構しんどいんだけど。

「じゃあ次、ラウラちゃんと香織君ねー」

「……マジですか」

「……」

「おーい、生きてるか少年」

「……ご飯、作る体力がありません」

「あははー、ごめんごめん。ちょーっと調子に乗りすぎちゃった、かな？」

三人分のツイスターゲームを終え、僕はその場でうつぶせにぶっ倒れていた。

三人ぶっ続けって、これ無茶苦茶だと思うんですけど。汗凄いし……。

「っていうか、三時間ぶっ続けでやらされた僕の身にも、なってくださいよ……」

「だからごめんって。そうだ、今日は私が作るわ、材料はあるんでしょ？」

「あります、けど」
「じゃあ任せて。これでも基地では料理の上手いお姉さんとして知られてたのよ？」

本当かどうかは知らないが、そういうことなら任せてもいいかな。こうなってるのはナターシャさんのせいでもあるし。ほんと、もう動くの辛いです。
念のために、頭を動かして横に倒れている三人に尋ねる。

「……皆、それでいい？」
「あー、アタシらは文句言える立場じゃないので」
「同意……」
「ああ、それでいい」
「よし、決定ね」

ダルそうに答えた三人の言葉を聞いて、ナターシャさんは嬉しそうに答える。
まあ、食べられないものじゃなければ食べるし、今は贅沢言っていられない状態だからいいんだけど。
……あー、お風呂洗わなきゃ。

「ちょ、大丈夫なの香織？」
「お風呂洗ってくる……」
「ああもう、それならアタシがやるわ。香織は休んでて」
「でも……」
「倒れたりしたらまずいでしょうが。いいから休んでなさい、アタシたちのせいでもあるんだし」

いや、でも家主が家のことをお客さんにやらせるのはまずいと思うんだけども。

ただなぁ、体が恐ろしくだるいのも事実なんだよなぁ……。

「……じゃあ、お願いできる？」
「もちろん。それじゃあ行ってくるわね」
「香織は、任せて……」
「ちゃんと見ているから、心配するな」

簪ちゃんとラウラに見送られ、ふーちゃんは家のお風呂を洗いにリビングから出て行った。
あー、もう動く気力も体力もないです。

「ところで香織君、今日のメニューは何にするつもりだったの？」
「肉じゃがでも作ろうかと思ってたんですけど……、作れます？」
「もちろん。日本でいうお袋の味なのよね、肉じゃがって。よく練習したわ」

ナターシャさんって意外と料理好きなのかな。
エプロンが普通に似合ってるし、って言うかそのエプロン僕のなんですが。

「いいじゃない、減るもんじゃなし」
「ナターシャさんって、結構明け透けって言うか、大雑把ですよね」
「余裕のある大人の女性と言ってちょうだいな。そうだ、簪ちゃん。ちょっと一緒に手伝ってくれない？」
「私……？　いいけど……」
「ありがとねー。じゃ、ちょっと作ってくるわね」

そう言って、ナターシャさんは簪ちゃんを伴ってリビングを出て行った。
と、不意に背中がぐいっと押された。

「ふむ、随分凝っているな。どれ、マッサージでもしてやろう」
「あ、ありがとラウラ……」
うわっ、物凄い気持ちいい。そういえば、あんまり他人からマッサージされたりってなかったな。
……なんか、眠くなってきちゃった。
「ふわぁっ……」
「眠いのか？　晩御飯が出来たら起こすから、眠いのなら寝ていてもいいぞ」
「でも、ほら、家主がお客放置っていうのは……」
「普段頑張っている報酬とでも思っておけ」
「……じゃ、じゃあ、ちょっとだけ……」
「ああ、お休み香織」
はい、お休みなさいラウラ。
む、どうやら香織君は眠ったみたいね。
手ごろな大きさに野菜を切り分けながら、隣で野菜の皮むきを手伝ってもらっている簪ちゃんに声を掛ける。
「ねえ、簪ちゃん」

「なんですか……？」
「香織君のどこが好きなの？」
ぼふんっ、と簪ちゃんの顔が真っ赤に染まった。どっちかって言うと茹で上がった感じかな？
「え、えっと……、優しいところとか、カッコいいところとか」
「つまり全部、と」
「……はい」
ほっほー、愛されてるわねぇ香織君。もうベタぼめじゃない。鈴ちゃんに簪ちゃんにラウラちゃん、お姉さんもべったりみたいだし？　まあ、私は可愛い先輩みたいな感じかしらね。それにあの子の恩人でもあるわけだし。
「そうかそうか、なるほどねぇ」
「あ、あの、ナターシャさん……は」
「ん、なに？」
「束社長のところについて、良かったと思ってます、か？」
おや、意外にまじめな質問ね。
……元々束ちゃんがちょっかい出さなくても危険だったってことだし、それを学生に止めさせようとしたうちの連中にもちょっと愛想尽きちゃったしね。言いだしっぺはＩＳ学園の方だって話だけど、それだって普通止めるでしょ？
「まあ、良かったと思ってるわ。それに、私は元々アメリカって国自体に執着はないのよ。新しい職場は可愛い女の子が一杯いるし、社長は楽しいし、おまけに宇宙よ宇宙！」
「宇宙は……いい……」

ＩＳは元々宇宙で使用するパワードスーツ的な意味合いが強かったみたいだからね。束ちゃんも元々はそういう風に開発したみたいだし。

「それに、あの子も助けられたから。簪ちゃんのＩＳは宇宙で作ったんだっけ？」

「うん……。でも、まだまだ試作品の段階、完成ではあるけどまだ改良できる……」

「そう。なら、もっともっと頑張らないとね」

「……うん」

ん、本当にいい子だね、この子は。

香織君は幸せ者だ。

「さて、それじゃあパパッと作っちゃいましょうか！」

「うん……！」

頷いて、ぱぁっと笑った簪ちゃんは、なんとも可愛らしかったことだけは確かだ。

こんな可愛い子に慕ってもらえるとは、全く香織君は幸せ者だ。

全く。

「ごちそうさまでした」

合掌して、それから息を漏らす。

ナターシャさんの作った肉じゃがは、予想以上の出来だった。

「ふふん、どう？」

「ええ、とても美味しかったです」

「でしょう？　私だってふざけてるだけじゃないもの」

「お風呂はもうできてるから、順番に入っちゃいましょ」

お風呂かぁ……。湯船に浸かったのは臨海学校以来だな。ゆっくり浸かろうっと。

「香織、先に入ったらどうだ？　疲れているだろう」

「いいの？」

「たまのお風呂なんだから、一番風呂はいんなさいよ」

「……ん、わかった。ありがとね」

みんなの気遣いに感謝しつつ、パジャマとトランクスを持ってお風呂へ行くことにした。

いやぁ、ブラジャーつけなくてもいいって久しぶりだ。

リビングを出て一度自室へ入ると、寝巻きを持ってお風呂へ。おお、綺麗に洗われている。というか、僕はどれくらい眠っていたんだろうか。

「イヴ、僕どれくらい寝てた？」

『ざっと三時間です』

「えっ、あの肉じゃが仕込みに三時間も掛けたんだ……。だからあんなに美味しかったんだ」

って、そうじゃないそうじゃない。
僕三時間も寝てたのか。どれだけ疲れてたんだ……。

「と、とにかく、先にお湯頂いちゃおっと」

服を脱いで湯船へ。
おおー、久しぶりの我が家のお風呂……！　一時帰宅の時は時間がなくて入れなかったからなぁ……。

「うあー……、気持ちいいー……」
『そんなに気持ちいいものですか？』
「んー、まあねぇー……」
『快楽ですか』
「どっちかって言うと心地良いの方ね」

なーんかイヴは突然変なこと言い出すなぁ。いや、快楽って聞いてそういうこと思い浮かべちゃう僕も僕なんだけど、ホラ、最近立て続けに色々起こって疲れてるんだよ。うん。
……あー、気持ちいいねぇ……。
思えば、随分遠くまで来たもんだ。
束ちゃんと出会ってから、色んな人と友達になって、幼馴染にも再会して、許婚が三人も出来て。
しかもとうとう宇宙進出、どたばただけど楽しい日々だ。
もちろん、楽しいことだけじゃないことは分かってるけど、それでも。今このときを大切にしたいと思うのはいけないことじゃあないはずだ。
……うん、大丈夫。まだまだ頑張れるぞ、僕は。

「イヴ」
『なんですか？』

「もう少しだけ、僕についてきくれる？」
『……もう少しだなんて、今更ですね。何処までもついていきますよ。それが私なんですから』
「……ありがと、イヴ」
なんだか、しんみりしてしまった。
まったく。

第３６話　夏休みのとある日　お泊り会！　後編の前編！（後書き）

場面転換がごろごろ来てますが、次回で夏休み編が終わりです。
お風呂回、香織だとしんみりしてしまう……。

第３７話　夏休みのとある日　お泊り会！　後編の後編！（前書き）

遅れました、後編でございます。
まあ、大した事件はございませんが。

第37話　夏休みのとある日　お泊り会！　後編の後編！

夜である。
全員お風呂にも入り終わり、僕らはリビングに布団を敷いて雑魚寝することに。
ちなみに、ナターシャさんは「若い皆のお邪魔になるといけないから、葵ちゃんの部屋で寝るわね」なんて言って、お姉ちゃんの部屋に引っ込んでいった。
……何を期待しているのやら。

「じゃ、電気消すよー」

パチンッ、と電気を消してから皆を踏まないようにして布団へ戻る。
……どうしよう、ねむれないな。昼間に結構眠ってしまったから、まだ眠気がこない……。

「むぅ、どうしようか」

さすがに眠れないと困る。夜更かしというのも悪くないけど、一人だけ夜更かしするのもなんだか寂しいし。

「どうしたのよ、香織」

小さくぼそぼそとふーちゃんが話しかけてきた。ちなみに、寝方は僕とふーちゃんが隣同士、僕の頭の上に簪ちゃんの頭があって、その横、ふーちゃんの上にラウラが寝ている。
どうやら簪ちゃんはすでに寝入ってしまっているらしく、すやすやという寝息が聞こえてきていた。

「ん、ほら。お昼にちょっと寝ちゃったから、そのせいで」
「眠れないの？」
「お恥ずかしながら」
「まったくもう……。ん、しょ、と」
小さく溜め息を吐いたふーちゃんは、もぞもぞと布団の中で動いたかと思うと、僕の布団の中へと入ってくる。
……って、えぇっ！？
「ちょ、ふーちゃん！？」
「ん、暖かい。ほら、あんまりさわいじゃ駄目よ、簪ちゃんが起きちゃう」
「え、あ、う、うん……？　って、そうじゃなくっ――んぐっ！？」
たしなめられても尚声を上げようとしてしまった僕が、不意に口を噤む。
正確には、口を開いた途端にそれを止められた。
ぬるりと、口内に生暖かく、柔らかい感触が進入してくる。何をされているのか、分からなくなった。
「ん、ちゅ、んぁ」
「――？！」
耳を打つふーちゃんの声に、今自分が何をされているのか気づく。
気づきはすれど、どうすればいいか、まるでわからなかった。
ぴちゃぴちゃと、口の端から漏れる液体が音を立てて気泡を作る。
潤んだ瞳でこちらを見るふーちゃんの顔は少し赤らんでいて、それが妙に艶めかしい。

「……ぷはっ」
「……え、と」
「驚いた？」

ふふっと笑うふーちゃんが、妙に大人っぽく見える。
……えーっと、今僕はキスをされたのかな？　え？

「ほら、早く寝ましょ」

もう一度笑い、ふーちゃんはそう言ってから目を瞑った。
そんなことを言われても、その、ドキドキして眠れないんですが!?

「……そう、ありがとうたっちん」
『んーん、いいよ別に。葵ちゃんの頼みだしね』

電気もついていない、暗い部屋の中で私はモニターの向こうの東社長に頭を下げていた。
用件は、東社長も掴んでいた情報。私の父に関することだ。

「このこと、香織には……」
『わかってるよ。まだしばらくは言わない。けど、いつかは知らなければならないときが来る、それはわかるよね』

「……ええ」
『ん。それじゃあ、私は戻るからね』
「手間取らせて御免なさいね」

こちらを気遣うような笑みを浮かべるたっちんは、小さく頷いてディスプレイから姿を消す。
本当に、あの人には頭が上がらない。
私には力がある。だけど、情報操作うんぬんになると、私の力は途端に弱くなる。だから、あの人の力がどうしても必要になる。
ドアの近くまで行って部屋の電気をつけると、ベッドに腰掛けてから大きく息を吐き出す。同室の子は祖国へと帰省していて、今この部屋には私一人だ。がらんどうな部屋に私の視線が満たされて、私はどこか遠くへ行ってしまうような錯覚を覚える。
その錯覚のような感覚に吐き気すら覚え、いつから自分はロマンチストになったかと己を嘲笑するように口の端を吊り上げた。
ベッドの脇に立て掛けられている日本刀を鞘から抜くと、切っ先を腕に当ててすっと滑らせる。痺れるような感覚とともに皮膚が切り裂かれ、切れた血管から溢れ零れた赤い血液が腕を伝っていく。
しかし、それはほんの数秒。強い酸性で焼けるような音とともに皮膚についた傷が元に戻っていき、血液はあっという間に蒸発する。いつからか人間という種から離れ始めた私の体の、証明だった。
けれど、これを恨んだことはない。この体があってくれたから、私はここまで香りを守ってこれたのだ。世界は優しくない、だから力が必要なのだ。
刃を鞘に収めると、不意打ち気味に再度抜き放って天井を切りつける。無音とともに放たれた斬撃が天井に大きな傷跡を残し、上の階の床とここの天井の隙間にあった何かを、その熱量で持って蒸発させる。
誰かに見られていた。あんな狭いところにわざわざ忍び込ませられるのは、私の知りうる限りあいつしかいない。

――現生徒会長、更識楯無（さらしきたてなし）。

暗部に対抗するための暗部、更識家の現当主であり、学園最強と謳われる少女。自由国籍権を持ち、ロシアの国家代表を務めている。

……だが、それだけだ。

ＩＳ名は『ミステリアス・レイディ』、ナノマシンで構成された水を自在に操るという。さっき切り伏せた感覚はまさしく水だった。

「私のことを調べている、か」

くだらない。高々暗部の小娘程度が私を調べたところで、目ぼしい情報など出てくるわけもない。

だが。もしあの子たちに手を出そうというのなら、私は貴様を殺そう。一切の油断なく、一欠けらの慢心なく、全力をもって。

それだけの力が私にはあり、それだけの覚悟も私にはあるのだから。

カチン、と音を立てて刃を鞘へ再び戻すと、そばに立てかけ直してから息を吐き出す。どれ、少し私に目を向けておくか。

制服のままで部屋から出ると、三階へと上がる。向かうのは更識楯無の従者の元。

三階にいる二年生が珍しいのか、寮にいた三年生たちは揃ってこちらを見る。それを無視して彼女の部屋の前までやってくると、軽く扉をノックする。

「どちらさまでしょうか」

「えっと、二年の一之瀬と言います。布仏（のほとけ）先輩に折り入ってご相談があるんですけど……」

「……どうぞ、入ってください」

気弱な少女が思い切って話しているような、やや震えた声を部屋の中へと投げかけると、件の先輩は静かにそう告げて扉を開けてくれた。

ポニーテールで眼鏡をかけた、一つ上の女性。布仏虚（うつほ）、三年整備科のトップであり、香織の友達である本音ちゃんのお姉さん。そして、更識楯無の従者。

中に入ると、きれいに整頓された小物や掃除の行き届いた台所が目に入る。綺麗好きか。

「ルームメイトは帰省中ですから、今は私だけですよ。今紅茶を淹れますから、手前のベッドに座って待っていてください」

「あ、はい。すみません、突然押し掛けて……」

「熱心な後輩の相談をにべもなく断るほど、私は冷血ではありませんから」

にこりと微笑んでから、台所で紅茶を淹れ始める虚先輩。一応は警戒しているらしいが、それでも気を緩めている。どうやら、偵察用の水が消去されたことはまだ伝わっていないらしかった。

紅茶のいい香りが、すでに部屋中に流れている。そんな中で、虚先輩は両手に自分と私の分のカップを持ってベッドの傍の寝台に近づいてきた。

「それで、どんな相談？」

「えっと、その……」

「言いづらいこと、なのかしら？」

気遣わしげにそう言った虚先輩が、カップを寝台に置いたのを確認すると、虚先輩の喉元を片手で思い切り圧迫、気を失う寸前まで追い込みながら脱力した体を私の座っていたベッドへと押し倒した。

「な、にを――」
「喋るな、動くな、奇妙な動作をすれば殺す。わかったか」
殺気を迸らせ、目を細めて彼女の両手を頭の上で抑えながらそう伝える。
こちらが本気だと分かったのか、虚先輩は体の力を抜いてこちらを睨みつけた。

「私の言ったことを、一字一句違わず更識楯無に伝えろ。『一之瀬香織とその周囲の人間に手を出すようなら、容赦しない』と」
「……あなたは」
「確かに伝えたぞ」
「ぐぅ――っ！？」

一気に首を締め上げて意識を落とすと、掛け布団を掛けて衣服の乱れを直しておく。
あまり、こういうことはしたくないんだけどね。向こうがその気なら、それ相応のやり方ってものがあるのだから、それをわかってもらわないと。

「……まあ、ごめんなさいね。先輩」

小さく謝ってから、部屋を出た。
……まったく、嫌な女だな。私は。

「ん、ふわぁー……」

目を覚まし、大きく欠伸をかましてもぞもぞと布団から顔を出す。
隣に見えているのは、ぐっすりと眠り込んでいる香織の顔だった。
昨晩の自分の所業を思い出し、少しばかり頬を赤く染めながらもニヤニヤとした笑みを止められない。

「……えへへ」

ぐにゃぁ、と蕩けた笑いを浮かべ、それからはっと手で口を押さえた。
私は朝のこの静寂が好きだ。まだ時刻は五時を少し回ったところだから、誰も起きてきてはいない。
普段の香織ならこの時間には起き出しているらしいけど、昨日は寝るのが随分遅かったからなのか、香織はまだ夢の中だ。
少しだけ眠っている香織に擦り寄って、それからぎくりと体を止める。何か、視線が私の頭に突き刺さっている。

「……簪」
『……おはよう、鈴。なに、してるの？』
『えっと……、くっついてる？』

にこっと笑って、寝ぼけ眼ながら鋭い視線を向ける簪に笑みを向けてみる。
ジト目。我撃沈セリ。

『ずるい』
『あ、う、ごめん』

『ちなみに、昨日は香織とキスをしていたぞ』
『ら、ら、ラウラ!?　あんた起きてたの!?』
『無論だ。寝たふりをしていた』

ドヤ顔で言い放つラウラに、軽く殺意を覚えた。
ちなみに、香織を起こさないように全員個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で会話しているのは当たり前よね。
と、簪がぷくーっと頬を膨らませている。なにこれかわいい。

『私もしたい』
『だめー。私だけ香織にアピールしてないんだから、それぐらいいいじゃない』
『ふむ、まあ簪は料理でアピールしたし、私もやることはやったからな。仕方あるまい』
『……わかった。仕方ない』

分かってくれたみたい。
本当は香織がお風呂に入っているときに乱入しようかとも思ったけど、それは幾らなんでも可哀想だからやめたんだし。

「んぅ……」

隣から聞こえた可愛らしい声に、思わず目じりを緩めてにやにやとした笑いを零してしまう。
ああもう、可愛いなぁ……。

お泊り会はその朝で終わり、ナターシャはワープ装置で会社へ、私達は揃ってＩＳ学園へと戻っていった。
ちなみに、その間香織の顔がやや赤かったのは、きっと私たちしか知らない秘密である。

第３７話　夏休みのとある日　お泊り会！　後編の後編！（後書き）

今回で夏休み編が終了し、次回からは五巻の内容に入っていきます。
お楽しみに！

第３８話　二学期開始　ゲームスタート（前書き）

今回はちょっと短め。
その分早くあがりましたが。

第３８話　二学期開始　ゲームスタート

二学期である。
暑さも和らいできた九月三日、私たち一組と二組は合同授業を行っていた。

「でやあああああっ！！」

上空高く、一夏とふーちゃんが互いのＩＳを纏って対峙する。
互いに闘気は十全だが、シールドエネルギーは一夏の方が削られていた。

「くっ……！」
「逃さないわよ、一夏！　最初にシールドを使いすぎたわね！」
「まだまだぁっ！」

一夏の振るう刃にも既に輝きは無く、戦況はふーちゃんに有利に傾いていた。

「ムダっ！」

《雪片弐型》の刃を《双天牙月》で受け止めると、押し返し様に《龍砲》を撃ちこんでいく。
そして、少し離れたところで《双天牙月》を投擲、追撃すべく加速して上空を縦横無尽に飛んでいく。

「どっせぇぇぇぇぃぃぃ！！」
「ぐふぉぁぁぁ！？」

空高くに上がったふーちゃんは、太陽を背に一夏目掛け飛んで行き、途中でＰＩＣをカットして重力も加算した蹴りが炸裂した。
抉りこむようなその飛び蹴りがうまく決まり、更に後方へと吹っ飛んだ一夏目がけて、ふーちゃんが止めとばかりに龍砲を乱射。
残り少なかった『白式』のシールドエネルギーを完全に削りきっていた。

――そして、その後。

「夏が終わったといっても、まだまだ暑いですわね」
「今年は残暑もきついって言ってましたからね」
「でも、校内はクーラー付いてるから座学のときは楽よねー」

更衣室で着替え終えた私とふーちゃん、そしてセシリアさんは連絡通路のところで皆が出てくるのを待っていた。
連絡通路にはなぜかクーラーが入っていないんだけど、かといって更衣室にいると六〇人近くいる皆の邪魔になるから出てきたのです。

「それで、セシリアはなんか一夏と進展あったの？」
「へっ!?　あ、や、べ、べつになにも、ありませんわっ!?」
「……あったのかなかったのか、判別が難しい」
「いや、これはあったわね。夏休みに何したのよ？」
「その……、一夏さんに手料理を振舞う機会がありまして。まあ、箒さんやシャルロットさんも一緒だったのですが、美味しいと言ってくださって！」

……まって、セシリアさんって相当料理下手じゃなかった？　一夏……、どんまい。
とっても嬉しそうなセシリアさんの名誉のために、口には出さな

いことにしよう。うん。

「そ、そうなの、ヨカッタワネー……、アハ、アハハハー……」

ふーちゃんの固まった苦笑いが、むなしく響く。

『セシリア・オルコットの料理はそれほどなのですか？』

『……典型的な料理下手だと思う』

『それはそれは』

ご愁傷様です、と後に続けそうな雰囲気のイヴでした。

少し三人で話していると、皆に混じって着替え終わった箒さんとラウラ、のほほんさんが更衣室から出てきた。

「あ、皆さんお疲れ様です」

「ああ、お疲れ様。そう言えば、今日の午後から新しい先生が赴任するらしいが……、何か聞いてないか？」

「いえ、私は特に。皆は？」

反応、なし。ふむ、一体誰だろうか。二学期頭って、確かにキリがいいところだけど。

それにしても……、一体誰なんだろう。本当に。

「ま、いっか。皆さん、ご飯行きましょうか」

「さんせーぃ」

一夏も誘ってね。

香織達が昼食を楽しんでいる頃、簪は一人四組でＩＳの簡易調整に勤しんでいた。

（エネルギーバイパスの数が三倍になってる……。休暇中にコロニーで訓練したのが影響してるのかな。建設地の環境にも影響されたりするかもしれない、色々調査する必要があるかも。《朱鉄》と《蒼鉄》以外にも開発中の武装はあるし、エネルギーの割り振りを考えておこう。装甲の数は現状維持、必要に応じて展開装甲に変更するとして、射撃兵装に回すエネルギーは別種に確保しておいた方がいいかも。とすると、別途のエネルギーパックなんかもありかな）

時間が惜しいため食事は一〇秒チャージで済ませ、『モーティブ』を簡易起動モードで起動すると、周囲の迷惑にならない程度に広げて六枚のキーボードとディスプレイで次々にデータを整理していく。

これでも絶好調の時に比べれば、五分の一程度の速度しか出ていないというのだから恐ろしい。

一通りデータの整理を終えた簪は、軽く息を吐き出してから『モーティブ』を待機状態に戻す。と、突然肩を軽く叩かれた。

「ん……、なに……？」

「あの、生徒会長が……」

「……ありがと」

「ううん、どう致しまして」

クラスメイトの子に礼を言ってから、教室を出る。そこには、簪

と同じ色の髪を持った女性が立っていた。
彼女の名は、更識楯無。このＩＳ学園の生徒会長である。
楯無を見た簪は、特に何か動揺するようなことも無く、するすると近寄って声を掛けた。

「お姉ちゃん……なに……？」
「え、えっとね、簪ちゃん。お姉ちゃん、ちょっとお願いがあるんだけど――」
「……？」

――一之瀬香織とは、もう関わらないで。

その言葉を聞いた瞬間、簪の普段の無表情の中にあった感情の灯火が消えた。
そんな簪に気づかず、楯無は焦るように捲くし立てる。

「一之瀬香織は異常よ」

――やめろ。

「経歴不明、今までＩＳに触れた事だってろくに無いのにあれほどの才能を誇っている」

――やめろ……！

「それに、治癒能力だって尋常じゃない。はっきり言って人間の域じゃないわ」

――やめろ！

「それに、彼女の姉の葵は虚を通じて私を脅迫してきた。明らかに何かあるの。お願い簪ちゃん、あの子は危険なのよ、もう関わっちゃ駄目！」

「……ぉ姉ちゃんに」

「え……？」

「お姉ちゃんに何が分かるの！？」

今まで楯無が聞いたこともないような大きな声で怒鳴った簪は、明らかに怒気を発していた。

突然の簪の変貌に目を白黒させている間に、簪はさらに言葉を続ける。

「香織は私の恩人なの！　助けてくれたのは、何もしてくれなかったお姉ちゃんじゃなくて香織なの！　香織のこと、何にも知らないくせに、わかったようなこと言わないで！」

「なっ……、簪ちゃん、私は簪ちゃんのためを思って言ってるのよ！？」

それは本心からの言葉なのだろう。楯無は簪のことを妹として大切に思っているのだから、彼女からすれば当たり前のことだった。

しかし、簪にとっては好きな人をありったけ侮辱されたのと同じことだったことに、楯無は気づけなかった。

「私は香織といる、離れないから」

「お姉ちゃんの言うことが聞けないの！？　あの子は危険なの！　あんな子と関わったらいけないわ！」

「――ッ！」

直後、廊下に甲高く頬を打つ音が響き渡った。

熱を持った頬を押さえ、楯無は信じられないようなものを見るよ

うな目で簪を見る。明らかに動揺しているその姿を見て、簪のかっと熱くなった頭は思いのほかすんなりと冷めていく。

「……私の国籍が変わってることは知ってるよね」

「え……？」

「私、更識と縁を切るから。もうお姉ちゃんの妹やめるよ」

「か、簪、ちゃん……？　何、言ってるの……？」

「正真正銘、私は日本と何の関わりも無くなる。そうしたら、私が誰と関わろうと私の勝手だよね」

今までおどおどとしか喋れなかった簪が、はっきりと強い口調で話していることに驚き、そしてその内容に驚愕し、意味を理解した楯無は困惑した表情で簪の目を見る。

その目は、まるで人を見る目をしていなかった。

「私ね、お姉ちゃんのこと、尊敬してたんだよ。カッコいいって。でも、もうそんな感情なくなっちゃった」

ばいばい、と。

そう言い残して、簪は楯無の横をすり抜けていく。

簪にとって、既に姉はコンプレックスの対象にも、尊敬できる存在にもなりえなかった。

そして後には、呆然とした表情で立ち尽くす楯無の姿だけがあった。

「……ねえ。ふーちゃん」
「なに、香織」
「目の前にいるあの人は、まさか」
「まさか、でしょうね」

午後の実習が始まり、私達は再びグラウンドへと出てきていた。
しかし、しかしだ。千冬さんの隣にいるあの人は……。

「今回から、外での実習に講師として参加してくれる、ナターシャ・ファイルス先生だ。ナターシャ先生、自己紹介を」
「はい。えー、皆さん初めまして、ナターシャ・ファイルスです。二学期の間だけという事で、本日正午よりこのＩＳ学園での一年生の実習授業を総合して見させてもらうことになりました。以前はアメリカのテストパイロットを務めていましたから、実力は心配しなくてもいいですよ。それじゃあ今学期だけですが、皆よろしく！」

にっこりと笑う彼女に、思わず私たちは口の端をヒクヒクと痙攣させてしまう。
ナターシャ・ファイルス、元アメリカテストパイロットにして、現バインド・カンパニーテストパイロット、アルカディア・?の代表操縦者の一人。
一体、何がどうなってるのさ！?

第３８話　二学期開始　ゲームスタート（後書き）

空回ってしまった楯無。これから色々と原作乖離が始まります。

ナターシャ、びっくりした？　びっくりした？

ちなみに、詳細は次回。

第３９話　裏のお話（前書き）

ということで、活動報告でもある通り、まずはこの作品を完結させるべく書き進めることにしました。
更新はちょっとばらつきますが、進むときはガンガン進むのでよろしく。

第３９話　裏のお話

「却下」

乙女達の　ソニックブーム　！！

一夏は　耳を塞いだ　！！

なんてあほなことをしてみました。香織です。

今日は二つのイベントが生徒たちを活気付かせていた。

一つ目は、ナターシャさんが来訪した翌日、つまり今日の午前中の全校集会で生徒会長が発表した、『各部対抗織斑一夏争奪戦』。簡単に言うと、今月の学園祭で一番多く投票があった部活に、一夏を強制入部させるというもの。

話を聞けば一夏には全く話が通っていなかったようで、生徒会長権限とやらで推し進めていたらしい。……それは、まずいでしょう。

で、二つ目がナターシャさん。その全校集会の終わりの方で紹介された彼女は、あっという間に生徒のハートを鷲掴みにし、固定ファンを獲得していた。アイドルみたいな人である。

「あ、アホか！　誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！　女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「織斑一夏は共有財産である！」

「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思って！」

「メシア気取りで！」

で、ですよ。現在その学園祭を勝ち抜くために、色々と案が出ているのですが。

以下箇条書き。

・織斑一夏のホストクラブ
・織斑一夏とツイスター
・織斑一夏とポッキー遊び
・織斑一夏と王様ゲーム

と、軽くこれだけ出ました。いやいや、まずいでしょうこれは。

「えーっと、皆さん？　一応一夏もこのクラスの一員であって、これは一夏一人に負担が掛かりすぎると思うんです。皆さんの気持ちも、分からないわけではありませんが……」

「か、香織……！　お前って奴ぁ……！」

一夏、涙ぐんでないで自分で解決しようと……、無理か。女子のパワーは凄いもんね。

まあ、クラスの一押しを推して行きたいってのは分からないでもないけど、これはまずいでしょう。一夏死ぬよ？　特にツイスターゲームとか。

「確かにぃー、かおりんの意見も一理ありー、だよねぇー」

「むむむ、言われてみれば織斑君の負担が大きすぎるわね……。稼ぎたいけど、負担が大きすぎて稼ぎ頭が倒れたら本末転倒だし……」

ふぅ、とりあえず方向修正は出来たかな。

のほほんさんとちょっとアイコンタクト。

『ありがとうございます、のほほんさん』

『お気になさらずぅー』

うーん、アイコンタクトで会話って普通かな？　どうなんだろ。
しかし軌道修正できたはいいけど、それじゃあどうするかってことなんだけども。
意外な人物が、名乗りを上げた。
「メイド喫茶はどうだ」
そう言ったのは、なんとラウラだった。ああ、@クルーズでバイトしてたからか。
しかしそれを知らない皆は、きょとんというかぽかんというか、間の抜けた顔でラウラを見ている。まあ、普段はあの堅物だもんね。
「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるのだろう？　それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」
「うちのクラスは素材がいいですからね。ちょっと手を加えれば化けに化けますよ。メイド服の伝なら私がありますから、どうですか？　一夏の負担もそれほど大きくありませんし」
「え、えーと……みんなはどう思う？」
ラウラを援護するように続けた私の言葉を聞いて、一夏はラウラがこんなことを言ったことに衝撃を受けつつも皆に決を採る。
結果、全員一致で採用。一夏には執事を担当してもらうことになった。
「それじゃあ、俺はこれを織斑先生に伝えてくるよ」
「はい、お願いします。一夏」
「おう」
ということで。

メイド喫茶をやることになりました。

香織のそれから更に数日。

「――それで、何の用かな。生徒会長さん」

「あら、気づいていたのね」

殺気を滾らせてこちらを睨みつけていれば、どんなド素人だって尾行くらい気づけるだろうに。

確か少し前に、簪ちゃんに香織から離れるように言って、すげなく拒絶されたって話は聞いたけどね……。私が言うのもなんだけど、シスコンだわね。

物陰から出てきた更識楯無は、私、一之瀬葵へ向けてこう言い放った。

「単刀直入に言うわ。一之瀬香織は人間ではないわね？　そして、貴女は間違いなくそれを知っている」

「……そうだとしたら、貴女はどうする？」

「……貴女がどれほどの自信を持っているのか知らないけど、この日本で更識を敵にして無事で済むと思っているの？」

「ええ、思っているわ。その程度の組織ならね」

まったく、何を言うかと思えばそんなことか。

暗部の一つくらい、敵に回せなくて何が姉か。こいつは姉だというのにそこが分かっていない。

執着するだけで相手を知ろうとしない限り、それは愛ではないというのに。

「そう。なら、勝負しない？　貴女が勝てば私は貴女に手を出さないし、一之瀬香織達にも手は出さない。ただし、私が勝ったら洗いざらい情報を吐いてもらうわ」

「……まあ、いいわよ。貴女程度に負けるほど、私は弱くないのだから」

これ見よがしに挑発してやると、ひくりとこめかみを動かした。まだまだ青いな。

しかしこの条件はまず守られないだろう。生憎とこちらには情報統制にかけては宇宙一と呼ばれるかもしれないたっちんがいるのだから、情報を取られる危険性はゼロだけど、香織たちに近づかれると対処がしづらい。今のうちに始末も考えたが、後が面倒なのでやめておこう。

とりあえず、この戦いをおさめて伸すということで。

更識楯無の案内で無人の畳道場へ到着。向こうは胴着に着替えるらしいが、こちらはそんなもの必要ない。大体、これは勝負という体の私闘なのだから。

「準備はいいかしら、生徒会長さん」

「ええ。では三秒後に開始よ」

一方的に宣言し、三秒後には私の目の前まで接近してきた。

ちなみに、勝敗は「どちらかが戦闘不能」になることで決定する。

楯無はこちらに肘、肩、腹と軽く掌打を浴びせると、流れるような動作で両方の肺を真っ直ぐに掌底を放ってきた。

ドンッ！　と強い音がして、肺から空気が吐き出される。通常ならば。

「――それが、どうかしたか？」

「っ！？」

「その程度か。では次は――」

一切ダメージを負っていない私に動じたのか、楯無は一瞬型を崩す。

そこを見逃さず、一瞬で楯無の手の平を上へ飛ぶように蹴り上げた。直後、張り手をしたような高い音と共に楯無の体が宙へ浮く。

「ぁ――」

「こちらから行こう」

浮いた状態から攻撃に転じることなどできはしない。

割と強く、浮いた状態の楯無の背中を真横から蹴り上げる。バキッ、と骨から嫌な音がした。感触からして折れてはいないが、それでも相当なダメージだろう。体もまた浮き上がっている。

今度は叩き落すように楯無の腹の上から拳を放ち、彼女の体を畳へと沈める。何処かの内臓を傷つけたのか、楯無は口から血を吐いていた。

「ガハッ！？」

「もろいな」

体は鍛えているのだろうが、いいのをもらえば簡単に壊れる。

「まだやる？」

「ふ、な、舐めないでもらいたいわね……」

根性というか、意地だけで立ち上がってきているような気がするのは気のせいではないだろう。
しかしそれは私への対抗心から来ているのか。そこまでは推量の及ぶところではない。
向かってくるならば叩き潰すだけだ。

「はっ！」

まっすぐ向かってきた、と見せかけての足払いを回避ざま、真下に来た足を踏みぬく。ああ、折れたな。

「ぐぅ！？」
「挙動の一つ一つが遅い。蠅が止まるぞ」
「かふっ――！」

顎を蹴り上げ、折れた脚を鷲掴んで引き戻す。そして、そのまま腹部のさっきと同じ位置に三度拳を叩き込んだ。ぴったり骨の隙間、内臓器官へ衝撃を通しながら、地面に体をたたき落とす。
人体を壊さないよう、最小限の怪我で収めようと頑張ってはいるけれど……、彼女は死を垣間見たことがない。戦っていてよくわかる。
彼女の戦い方は制圧だ。出来る限り迅速に、かつ周囲に被害を出さないような戦い方。けれど、それがうまくいきすぎてその先へ進めていない。彼女の戦いは「殺しあい」ではあっても「壊しあい」ではないのだから。
人体は殺すのではなく壊す。指を逆に曲げればそれだけで壊れるほど、人間の体はもろい。溢れんばかりの間接がその証拠だ。

「そろそろ我慢が効かなくなる。これ以上やるなら、死を覚悟して

もらう」
「くっ……」

折れた脚を乱雑に扱ったせいで右足はズタズタだ。それでも必死に立とうとしているのは称賛に値する。するわけないが。

「参りました、と一言言ってくれれば、私はそれでいいんだが？」
「……いやよ」
「そうか」

まったく、往生際の悪い小娘だ。
脚を振り上げると、踵落としの要領で顔面へと足を――、

「そこまでだ」

下ろしたギリギリのところで、その脚が受け止められる。

「……織斑先生」
「喧嘩をするのは勝手だが、殺させるわけにはいかん。手を引け、一之瀬姉」
「……はい」

いつの間にかやってきていた織斑先生が私の足を掴んでいた。
気配がなかった。隠密は私と同レベルか。さすがは最強。

「一之瀬姉、部屋に戻れ。今回のことは目を瞑っておいてやる」
「……失礼します」

頭を下げ、そこから出ていくことにした。
後は織斑先生が何とかしてくれるだろう。さて、こっちも仕込み

を始めるか。

「さて」

一之瀬が行ったあと、倒れて息を荒くしている更識をぐっと抱え上げる。早めに医務室へ連れて行ったほうがいいだろうな。

脚の骨はひどいことになっているが、ほかはせいぜい打ち身程度だ。内臓器官へのダメージもそれほどではない。あいつめ、これでもまるで本気を出していないということか。

末恐ろしい奴め。

「今回の件、申し開きはあるか？」

「……すいません、織斑先生。すべて、私の独断です」

「今後、あまりあいつにちょっかいを出さん方がいいぞ。あいつは守るべきもののためなら何だってやってのける。更識家当主のお前がここまで一方的に、それもほとんど本気を出さずに叩き潰されたのだからな」

「……同い年でここまで差ができるなんて、ちょっとショックですね」

更識は当主として、あらゆる訓練を受け、あらゆる鍛錬に励んできただろう。しかし、それをあいつはやすやすと上回って見せた。

それだけの覚悟と力があるということが、それでわかる。

だがな、更識。お前の抱いた感想は、当主としてのものではなく、ごくごく普通の高校生の言葉だということに、気付けているか？

「……私、ダメな子だなぁ」

「更識……？」

「簪ちゃんには拒絶されちゃうし、必要な時に戦えないし、おまけにこんなズタボロにされちゃって……。どうして私、こんなことしてるんだろう」

俗に言うお姫様抱っこという形で抱き上げている更識が、鬱屈とした表情を見せていた。

今まで更識家当主として、そして学園最強の称号の持ち主として、常に明るく、一本芯の通った姿を見せてきた更識楯無が、まるで年頃の少女のように塞ぎ込んでしまっていた。

そのことに、私は少なからず驚きを感じる。あいつの行動がこいつの殻とも呼べるものを壊したのか。

更識は確かに頼れる大人の女性としての雰囲気があった。学生たちには特にそう感じられただろう。それが本当のものであったなら、私も感じていた。

しかし、それはこいつにとって重りや殻にもなっていたのだろう。その『強者の殻』を、一之瀬姉は壊して見せたのだ。まあ、あいつがそこまで考えていたわけではないのだろうが。

「……ねぇ、先生」

「なんだ」

「私……、会長辞めていいかなぁ……？」

涙を浮かべ、更識は私の胸に顔を埋めて言った。

……殻を壊したのはこいつのためになったのだろう。が、それと一緒に心にヒビが入ってしまったらしい……。

とにかく、早々に医務室へ連れて行くことにした。どうせこの状況を見たらキャーキャーと騒がれるのは目に見えているからな。

第３９話　裏のお話（後書き）

どうしてこうなった！

なんだか書いてるうちに楯無が弱気になったらいいんじゃないかな、なんて思ってしまってこうなってしまったのです。なぜなんだ。

ということで楯無の心が折れました。妹に拒絶された上に、焦って行動起こしたらぼこぼこにされてしまったたっちゃん、これからどうなるのか！

第４０話　学園最強の引き篭もり（前書き）

タイトルまんま。
後半はちょいエロ＆原作ブレイク。まあ今サラですけどね。

第４０話　学園最強の引き篭もり

「お嬢様……」

扉の前で、虚はただ立ち尽くしていた。

たった一枚の壁を隔てた先では、折れた足を庇いながらも小さく蹲って、涙を流して眠る楯無がいる。

今まで、彼女の主がこれほどに痛めつけられたことはなった。肉体的にも、そして精神的にも。

治療用のナノマシンを投与されているため、足の骨は数日で完治するだろうが、心はそうはいかない。

「私は……」

拳を握りこみ、涙を流す。食い込んだ爪が皮膚を破り、赤々とした血を流していた。

葵と楯無の戦いから一日、夜を迎えた今になっても、楯無は恐怖と苦痛の溢れる悪夢に苛まれていることだろう。

拷問に対抗するための訓練も受けているし、痛みに涙を流したことは一度や二度ではないはずだった。しかし、それはあくまで訓練、葵にこれでもかとやられたことは、楯無の柱を確かにへし折ってしまっていた。

けれど、虚の頭の中の理性はこれが自業自得だと理解していた。忠告されたにも拘らず請求に動いた結果であり、彼女を恨むのはお門違いであると。

しかしながら、虚も大人びているとは言ってもまだ一八である。理性のはじき出した結論を、感情がはいそうですかと受け止められるかといえば、その答えは否であった。

「……一之瀬、葵」

更識という名を持ってしても素性すら探れない謎の存在。そして、その庇護下にある一之瀬香織。今は手を出せずとも、いずれ必ずその正体を暴き立てる。

血を流しながら、虚は静かにそう決意した。

その一方で、楯無はというと。

「……ぁ」

ぼそぼそと何かを呟きながら、何もない場所をずっと見続けていた。

その瞳は濁りきっていて、何かを映すことはないだろうと思ってしまうほど。

「もう……やだぁ……、なんで、私ばっかりこんなことしないといけないのぉ……！」

その言葉を虚が聞けば、十中八九自分がおかしくなったのだと思うであろう言葉。それを、楯無は心の底から発していた。

最愛の妹には愛想をつかされ、焦って行動した結果、足の骨を無残にへし折られた。心の柱も、それと共に。

楯無は生来、気が強いという性質ではなかった。

双子の妹である簪を守る姉として、そして更識楯無の名を告ぐ少女としてそう育てられたというだけであって、彼女自身はどちらかといえば気弱な気質であった。

そんな彼女が暗部に対するための暗部の当主として、このＩＳ学園の中の最強としての顔を保つためには、人を食ったような、おちょくるような顔を持っていなければならなかった。

ならばこそ、彼女の今の状況は仕方がないこととも言えるだろう。

「なんで、なんでなの簪ちゃん……、私頑張ったよ、お姉ちゃん、頑張ったんだよ……？」

ここにいるはずのない妹の名を呼びながら、楯無はただベッドの中で蹲る。

壊れてしまいそうな自分を必死で守るために、ただ身じろぎもせずに。暗闇の中。

「生徒会長が引きこもったぁ！？」

「傷心で出てこないって、お姉ちゃんが言ってたぁー」

出し物が決まってから二日目。

私達が集まったところでのほほんさんから齎された情報は、頬を引きつらせてしまうようなものだった。

「……それ、ほんと？」

「うんー、なんか、一昨日の放課後に誰かと決闘して、ぼこぼこにやられたってー」

「生徒会長って、ＩＳ学園で最強なんじゃないの？　相手って千冬さん？」

「んーんー、同学年の生徒らしいんだけどぉー、詳細はありませー

ん」

簪ちゃんとふーちゃんの質問に答えるのほほんさん。
……私は、その条件に当てはまる人を一人知っているんですが。
これってもしかして……？

「ちょっと、電話してくるね」
「あ、うん……」

今はお昼時、食事をしながらお話中でした。
皆から離れて、携帯端末からお姉ちゃんの番号を呼び出すと、通話ボタンを押す。
二、三度の呼び出し音の後に繋がる音がなった。

「もしもし、お姉ちゃん？」
『なに、香織？　なにかあった？』
「あのさ。一昨日会長と戦った？」
『戦ったけど、それがどうかした？』

はい、お姉ちゃんでした。
だよねぇ、学園最強って言われてる人をぼこぼこに出来る候補って言ったら、千冬さんかこっちしかいないもんねぇ。いや、学校にいる人のことはよく知らないんだけどさ。

「会長、引きこもってるんだって」
『はぁ？　一回ボコボコにされたくらいで？　アホらし……』
「ちなみに、どれぐらいやったの？」
『精々足折ったくらいよ？　重症にすると面倒だもの』
「足の骨折は十分重傷ですが」

本当に、我が姉ながら常識の欠如が著しいなぁ……。
けど、仮にも生徒会長が一度負けたくらいで引き篭もるまでいくかなぁ？　ちょっと疑問が残るんだけど。

「まあ、いいや。ありがとね、お姉ちゃん」
『気にしないでいいわよ。それじゃ、私戻るわね』
「うん。ばいばい」

通話を切って皆の元へ戻る。食事はもう皆終わらせているから、ドリンクを飲みながら世間話に興じていた。

「おかえり、香織」
「やっぱりお姉ちゃんだった。ボッコボコにしたって」
「……凄い。更識先輩は強いのに」
「ん、簪ちゃん。前はお姉ちゃんって言ってなかったっけ？」
「妹、やめたから。もう更識じゃない」

清々しいくらいの笑顔で言ってくれた簪ちゃん。
あ、もしかしたらこっちも関係しているかもしれないね！

「簪ちゃん、ちょっと詳しくいい？」
「……？　いいけど……」

とりあえず状況を掴みたいので簪ちゃんからも「更識と妹やめた」発言を内容を確かめてみると、それはそれは不思議なものだった。
なんでも、私の周囲にいると危険だから早く離れるように言われた簪ちゃんが、「そんなこと言うなら妹やめる。更識もやめる」と言ったらしい。結構私のことぼろ糞に言ってたから、それでやめたんだとか。
うん、多分じゃなくてもそれだろうね。それとお姉ちゃんのフル

ボッコが重なって、ちょっとブルーになったのかな。そういう簡単な話じゃないかもしれないけど。

「でも、もう私には関係ないし、どうとも思わない……。少しは、出来ない人の苦しみってものも知るといい……」

小さな頃から何かと姉に負けてきた簪ちゃんから言わせればそうなんだろうなぁ……。

確かに、姉が偉大って言うか、何でもできると色々複雑だよね。私もお姉ちゃんのこと羨ましいって言うか、凄いって思ったことは何度もあるし。今は感謝してるけど。

しっかし、あれだ。会長が死んでなくて良かった。お姉ちゃんは平気で致死レベルの攻撃繰り出すからなぁ。

そんなことを考えていると、ぽんぽんと肩を叩かれる。

「やっ。ここいいかな？」

「あ、ナターシャ先生。どうぞどうぞ」

「今は先生じゃなくていいわよ」

ナターシャさんはそう言うと、自分の分の昼食を机においてから私の隣に座り込んだ。

突然教師としてやってきたナターシャさんには驚いたけど、案外うまくやっているらしい。大人の女性の余裕と言う奴かな。

「葵ちゃん、派手にやったみたいじゃない？」

「教師が笑って喧嘩を黙認するべきではないと思うんですが？」

「いいのよ、私臨時だから」

ひどい教師を見た。

「ん、おいしっ♪　ＩＳ学園っていいわねぇ、こんなに美味しいのが食べられるんだもの」
「軍だと違ったんですか？」
「味は二の次、まずいわけじゃないけど、まずは腹が膨れること最優先ね」
「あー、私のいたとこもそんな感じね。なんで軍って飯の味にこだわらないのかしら」

元軍人のナターシャさんと、軍で訓練を受けていたふーちゃんがいうならそうなんだろうな。
でもあれだってね、レーションとかって最近は美味しいんだって。昔は酷い味だったみたいだけど。

「午後の実践訓練は私も出るから、ちゃんと食べておきなさいよー？」
「一組と四組合同だったわよね」
「うん……。私が一緒……」
「私も一緒なのだよぉー」

にこにこしている簪ちゃんと、ふにゃっと垂れているのほほんさん。
うん、まあとにもかくにも、平和だ。多分。

「こんにちは、エム。いいえ、マドカと言った方がいいかしら」
「……キティか。なんの用だ」
「作戦行動前に集中している子に、ちょっかい出そうと思って」

悪びれる様子なく、キティが笑う。その様子を、マドカと呼ばれた少女は冷めた眼で眺めていた。
マンションの最上階に位置するここは彼女達の拠点のひとつとして使われているが、それが何処にあるのかは不明である。

「ねえマドカ、貴女の目的は復讐なのよね？」
「ああ」
「なら、それが終わったときには私のものにならない？」
「なに？」

するりと、気づけばキティはマドカを絡め取る様に後ろから抱き着いていた。
その艶めかしく撫でるような感触に、マドカは身を竦めるとキティから視線を外す。
今までもスコールとオータムがそのように絡み合う様を目の前で見せつけられたことはあったが、自分が標的にされたときのことは考えていなかった。
いや、考えないようにしていた、と言った方が正しいか。生理的嫌悪すら覚えていたのだから。

「離れろ」
「い・や・よ♪」
「貴様――ッ！」

力ずくで体を離そうとしたマドカの首筋へ向けて、キティは犬歯を突き立てた。つぷりと、マドカの柔らかな白い肌をキティの鋭い

歯が突き破り、血を溢れ出させる。
一瞬の痛みと、その後にきた壮絶な快楽にマドカは目を白黒させながらも何とか拘束から逃れようともがく。
しかし、緩く抱きしめているだけのはずのキティの両腕から、なぜかマドカは抜け出すことが出来なかった。

「は、なせ……！」
「力が抜けるでしょう？　気持ちいい？　気持ちいいわよね、そういう風にしてるもの」
「ひあぁっ！？」

ズルズルと血を啜りながら喋るキティの言葉を聞きながら、マドカは全身の力が抜けていくのを感じた。
それと共に、自分の中に何かが入ってくるのも感じていた。

「何を、している……！」
「ただのナノマシンよ。私に好意を持つように脳を弄くる、ね？」
「なんだと……！？」
「ふふっ、かーわいいっ……。食べちゃうわよ？」
「あ、ぁ……！」

何を言っているのか、何をされているのかが分からなくなってくる。
気味が悪いと嫌悪していたことが何故だか異様に愛おしくなり、力の抜けた体がゆっくりとキティの体を求め始める。
それに気づいたマドカは、うなじ辺りに口を寄せていたキティの顔面を殴りつけると、ベッドから立ち上がって何とか距離をとった。

「はぁっ……、はぁっ……！　なんだ、なんなんだ貴女は……！？」

それからはたと手を口元へやる。
先ほどまで貴様と呼んでいた自分の口が、喉が、勝手に「貴女」と呼び変えていた。まるでそれが当たり前のように。
気づいて愕然としたマドカは、自分の身を守るように抱いた。

「いやだ、違う……！　私は貴女のことなど……！」
「ふふ、そうやって葛藤し続けてね。葛藤すればするほど、こちらに堕ちた時は甘いのだから」
「ひぃっ……！　さ、触るなぁ！」

口から血を垂らしながら妖艶に笑っていたキティの手を払い、その場にへたり込む。

「あ、や、違う、ごめんなさい……！　違うの、私……！　あ、ああ、なんだ、なんなんだ私は！　あああああぁぁあああああ！！」
「ふ、ふふ、ふふふふ、あはははははは！」

キティに触れようと、キティに嫌われまいと擦り寄ろうとする自分を必死に抑え、マドカは慟哭する。
その声を掻き消すように、キティはただ笑っていた。

第４０話　学園最強の引き篭もり（後書き）

会長フルボッコの後遺症でござるの巻。
そして織斑マドカ、陥落までカウントダウン。
キティは順調に我が道を行っています。

第４１話　天才は天災へ（前書き）

復活イベント。一日かからずに書き終わりました。

第４１話　天才は天災へ

部屋に鍵を掛けて、光を締め切ってから、どれくらい経っただろう。

気づくと、私はぼんやりと鈍く光ることすらやめた果物ナイフの刃を眺めていた。

これを手首に押し付けて思い切り引けば、死ねるだろうか。考えてから、即座に蓄えられた知識が否と答えを弾き出す。

今の状態で出血多量のショック症状で死ぬことなんて、厳しいだろう。なら心臓にでも突き刺してやった方がよほど有用だ。

考えても、実行に移せなかった。

ナイフを放り投げると、それは絨毯の上に落ちて鈍い音を立てる。

「……」

それを見ても、まるで何も感じない。無感動にも程があった。

死にたいと願っても、死の間際にある痛みが邪魔をして自分を遠ざける。楯無は、生きて死んでいる状態にあった。

何も出来ず、何かをしようとする気概すら起こらない無気力状態の彼女の耳に、突然ノックの音が飛び込んできた。

「楯無、いるな？」

「……織斑、センセ？」

「そうだ。開けるぞ」

「ぁ……」

止める間もなく、千冬は合鍵を使って鍵を開けると扉を開き、中へ入ってくる。

ベッドの中で蹲る楯無は、足を自分の下へ引き寄せて体育座りの

ように身を固めると、目線だけをそちらへ向けた。

「どうだ楯無、具合は」

「……」

「それにしても酷い顔だな。髪もぼさぼさで、シャワーも浴びてないだろう」

「……」

反応を見せない楯無を見て、千冬はあからさまに溜め息をつくと腕を掴んだ。

反射的に跳ね除けようとした楯無を抑えると、千冬はそのまま彼女をベッドから引きずり出す。

「や、やだ、やめてっ！　やだぁ！」

「来い」

「センセ、やめてよ！　いやぁ！」

「いいから来い」

他人に触れられることすら恐れ怖がっている彼女をそのまま部屋から出すと、千冬は一直線に寮の大浴場へと歩いていく。

楯無はその間泣き喚いていたが、生憎今は真昼間であり、しかも学園祭の二日前。全生徒が校内で学園祭の準備にかかりきりになっているため、その声を聞く人間は千冬以外にいなかった。

「ほら、服を脱げ」

「ぐすっ……、センセ、脱がせて……？」

「……まったく」

幼児退行の状態も現れているのか、楯無は涙を指で払いながら千冬にそう言った。

ここで拒絶すれば、また泣き出してしまうかもしれないと考えた千冬は、仕方なしにそれを了承する。

少しして一糸纏わぬ姿になった楯無は、同じく裸になった千冬によって浴場の椅子に座らせられると、熱いシャワーを頭に浴びせられた。

「きゃっ！」

「じっとしていろ、洗ってやる」

ごわごわとした髪をシャワーで濡らした千冬は、手にシャンプーを二度、三度出すと髪を洗い始める。

目を閉じた楯無はそれを心地良さそうに受け入れながらも、終始疑問が尽きなかった。

「……センセ、なんで私のこと氣にするの？」

それは、今の彼女にとって当然の疑問。

何かを行うことを諦めていた彼女は、何かを行ってきたことを諦めることの対価にしようとした。そんな自分を俯瞰的に見つめ、なんと愚かなのだろうとあざ笑い、その価値をゼロ以下に見出したのだから。

そんなゼロ以下の自分を気にかける人間など、奇特にも程があった。天才ゆえに天災には近づけず、天災に接してきた天才の意図は掴めない。

「生徒の心のケアも教師の役目だ。気になったしな」

「……変な人だ」

「変人と付き合っているからな。影響も受けるさ」

楯無はそんな千冬の言葉を、心地良さそうに聞いていた。まるで、

今までの様が嘘であるかのように落ち着き、優雅さすら感じられるその姿の内側で、楯無は考える。

織斑千冬、彼女の傍に居るととても落ち着く。先ほどから、ぐしゃぐしゃになっていた心がゆっくり整理されているのが感じられていたから。

彼女にはあるのだろう、天才や天災を落ち着かせ、懐かせ、そして世界に適合させられるだけの資質と言うものが。

では何故天災は社会に適合できず、社会を適合させたのか。簡単だった、彼女はそれ以上に天才であり異常だっただけの話だ。

気が付くと、楯無は千冬の手を取っていた。

「どうした、楯無？」

「……んっ」

ぺろりと、お湯で洗い流されて清潔になった千冬の指を舐める。甘かった、まるで味わってはいけないもののように。

一度舐め始めると、止まらなかった。

二度三度、それ以上幾度も舌を這わせ、味を確かめる。その様子を、千冬は戸惑いながらもじっと眺めていた。

「……思い出すな」

「ふぇ？」

「やられたんだよ、昔。あのバカウサギにも同じことをな」

言われてから、楯無は自分が何をしていたのかを思い出す。けれど、不思議と罪悪感や忌避感、羞恥心を感じることはなかった。

あのバカウサギ、というのが誰を指すのか、楯無にはなんとなく分かった。篠ノ之束、世界を変えた天災。

「……先生」

「なんだ」
「抱きしめて、いいですか？」
「……ああ」

許可が出た途端に、楯無は千冬の体を真正面から抱きしめる。暖かく、生きていた。
愛しいと思う。思って、それから自分がどれほど酷いことを簪に言ってしまったのかということに気づいた。

（ああ、これは無理だ。離れることなんて出来やしない）

気づいてしまえば、楯無の傷は瞬く間に塞がった。
なんてことはない、自分も人間だったのだ。完璧を求めて仮面を被り続けるあまり見失っていた本質、あまりにも自分を過大評価しすぎていただけのこと。
まだやれる、まだ大丈夫、もう少し。そんな言葉で進んできたような道は脆く、簡単に崩れ去る。そして、その道を進んできた楯無の虚像もまた、脆く崩れ去っていた。
後に残ったのは、臆病な白兎。かくして。

天才は天災へと昇華する。まるで、蛹が蝶になるように。更識楯無という幼虫を内側から喰らい尽くして。

「……センセ、お風呂入りましょ？」

自分で彼女の手を引き、楯無は浴槽に身を浸ける。
その隣には、千冬もいた。そのことに、楯無は無性に歓喜を覚えた。なぜかという疑問は野暮なものだろう。

「私ね、センセ。何にも価値がないと思うんだ」

「楯無、お前……」
「だから、変わってみました。今、織斑先生がいてくれたから」
「……そうか」

たった今変わった彼女に対しても、千冬は揺らぐことはない。
まだまだ序の口である彼女に、それ以上に接してきた千冬が揺らぐ要素はなく、そのことが楯無には悔しかった。
だから。

「センセ」
「ん？　んっ……！？」

口付けた。
唇同士がしっかりとくっついたそれは、まるで恋人同士のように情熱的に、貪るように続けられた。

「――ぷはっ。えへへ、どうでした？　巧いでしょ？」
「……お前は」
「ファーストキスもセカンドキスも犠牲にして学んだんですから。えっへん！」
「楯無……」
「やぁん、それで呼ばないでください！　私の本当の名前、教えますから。千冬さんはそっちで呼んで？」

豹変した楯無は今までとまるで別人のように生き生きと話し出した。あるいは、病的なほどに明るく。そんな彼女を、千冬は受け入れた。
そうするのが当然だといわんばかりの姿勢で、当たり前のように。
だからこそ、楯無は口を開く。

「私のホントの名前は――」

そしてその日、更識恋華（れんげ）は、織斑千冬に恋をした。

「か、ん、ざ、し、ちゃあああああああんっ！！」

学園祭の準備も一息つき、さて帰ろうかと帰路に着いたとき、寮の方からそんな叫び声を上げながら走ってくる人影が見えた。

この感覚、束ちゃんに近いけど違う！？

なんて考えてると、瞬く間に接近してきたその人は、大きく踏み切ると空中で三回転半を決めながらジャンピング土下座を見せた。

「ごめんね、ごめんね簪ちゃん！　私、簪ちゃんのことも考えずにあんなこと言って！」

「……何しに来たんですか、生徒会長」

「あうっ、その、謝ろうと思って……。私、好きな人が出来たの！　それで、酷いことといったんだなってわかって……。本当にごめんなさい！」

「……え、はぁ？　好きな人？」

信じられないと言った様子の簪ちゃん。ちなみに、目の前で土下座しているのは生徒会長さんです。ほんと、すっごいシュールな光景なんですが。

「うん！　千冬さん！」
「ぶふぅっ！？」
「……お姉ちゃん、同性愛は非生産的だよ。私は否定できないけど……」
「愛に障害などないのよ、簪ちゃん！」
あまりのインパクトにお姉ちゃん呼びに戻ってしまっている簪ちゃんである。
いや、千冬さんは手ごわいと思うなぁ……。私も同性愛は否定しないけど。
「で、一之瀬香織さん、だったよね？」
「え、あ、はい。先日は姉がご迷惑をかけたようで、申し訳ありません……」
「いいのいいの、あの人のおかげで私はまた強くなれたわ。それでね、香織さん。ちょっと織斑一夏君に言伝を頼んでもいいかな？」
一夏に？　何のようだろうか。
「一夏君、ぶっちゃけ今の立場って結構やばいのよ。一夏君を酷い目に合わせて千冬さんの悲しむところは見たくないし……。だから鍛えることにしたわ。第三アリーナで待ってるから、すぐ来るように言ってくれないかしら？」
「は、はぁ……」
「それじゃ、頼んだわよ！」
しゅばっ！　と効果音が付きそうな勢いでまたもや走り去っていった生徒会長に、一同呆気に取られる。
……なんだったんだ、一体。

「……お姉ちゃん、ちょっと変わったかも」
「わ、わかるんだ……」
「……元姉妹だから」

で、とりあえず一夏をアリーナに行かせてその日は終わったわけですが。

私たちはまだ知らなかったのです。天災が二人に増えていたことを。

第４１話　天才は天災へ（後書き）

ということで、楯無が復活&千冬さんに惚れました。
理由としては「天災の素質があった楯無が、天災を惹き付ける千冬さんに会ったせい」です。ついでに天災として覚醒。
この作品内では天災は天才の上位系であり、下位系でもあります。
そんなこんなで、楯無はとにかく滅茶苦茶な存在へと変貌しました。
行動原理は自分の利益になるかと、千冬さんが喜ぶかどうかです。
ある意味人間として壊れました。
そしてそんな楯無さんを書いているのがとても楽しい。やっべー。

第４２話　学園祭（前書き）

ちょっと急ぎすぎたかもしれん。これでは学園祭が一話で終わってしまいそう。

第４２話　学園祭

学園祭当日。

「皆さん、ここまででやれることは全てやってきました。あとは皆さんの力を全て出し切って、この学園祭を成功させましょう！」

「「「「「おーっ！」」」」」

私の音頭で、全員が右腕を天高く突き上げる。

「あー、皆無理だけはしないようにな。辛かったらすぐに戻ってくれ」

「では皆さん、張り切ってまいりましょう！」

一夏と私の言葉で、扉が開く。

私が外に出て、盛大に。

「ＩＳ学園一年一組、『@クルーズ特別出張　ＩＳ学園店』、ただ今より開店でーす！」

「虚、準備は？」

「万事明瞭に整っております」

「そう。お疲れ様」

学園中が祭りに湧いている頃、恋華（れんげ）は愉しげに嗤っていた。

事実愉しくて仕方がない。この世の全てが新鮮に感じられて、どうしようもなく愉しいのだ。

無論、それを疑問ありげに見つめる虚もいたわけだが、恋華はそれを構うことなく嗤う。

恋華にとって、今の虚はちょっと手を出してみたい部下である。もちろんそれによって関係が悪化することも考えられ、そうなれば仕事能率の悪化は避けられないだろう。よって、少しばかり慎重にならざるを得ないのである。

「とりあえず、学園祭の仕事に戻ってもいいわ」

「はい。それでは」

ぺこりと綺麗に一礼してから、虚は生徒会室から出て行った。その直後、恋華はにへら、と嗤いをだらしない笑みへと変えて、懐から一枚の写真を取り出した。

それは、ＩＳ学園の裏ルートで売買されている織斑千冬の写真。凛々しく引き締まったその横顔が映し出されたそれを眺めて、恋華はにやにやとした笑みをだだもらしている。

『おーい、何ニヤニヤしてるんだい？』

「はっ？！　しまった、愛が漏れたわ」

『君も大概だね。まあいいけど？　恋華ちゃん』

声と共に現れたウィンドウに写っているのはウサ耳をつけた女性。本来ならば決して呼ばれない本名を呼ばれても、恋華は嫌悪感を醸し出すことすらせずに笑みを浮かべた。

「さて……。こんにちは、《人類最低》」
『やあ、こんにちは！　君は……、どう呼ぼうか？』
「名前なんて必要ないわよ、私には千冬さんに認識される名だけあればいい。それでも呼びたいなら、そうね。《恋愛中毒（ラブジャンキー）》でいいんじゃない？」
『まあ、私は昨日通り恋華ちゃんって呼ぶけどね、同類？』

天災同士の会合は、そう静かに始まった。

《人類最低》、篠ノ之束。
《恋愛中毒》、更識恋華。

互いは天災であり、天災であることは天災でしかわからない。
その二人がこうして連絡を取り合っているのには、一つの訳があった。

「それにしても、あの子が男ねぇ……」
『だから、あんまりちょっかい出しちゃ駄目だよ？』
「わかってるわ、君は私のことを一体なんだと思ってるんだい？」
『天災』
「素晴らしい、お友達になりましょう」

下らない言葉の掛け合い。けれど、二人ともそれには意味があると思っているわけではない。ただただ単純に、他人と言葉を交わすことが快感になっているだけだった。
天災は少ない。それこそ、ＩＳコアなど目ではない程に少ない。
それゆえに、今まで束はその誕生を感じ取ったことはあっても、出会ったことはなかった。
その矢先に新たな天災が覚醒したのだから、束がそこに手を出すのは至極当たり前のことと言えた。

「ところで、昨日の話だけど」
『ああ、《亡国機業（ファントム・タスク）》？　いやー、私の領域に手を出すなんてアホだね、バカだね、どうしようもないクズだねぇ。幾ら《彼ら》の影でコソコソやっていたからって、その程度のことがこちらにばれないなんて思っているのだったら、それは因果律への反逆と言ってもいいんだよ』

クスクスと嗤うそれはあまりに狂気染みていて、その様に恋華は頬を吊り上げた。
なんと愉しそうな同類だろう。見ろ、同類。世界はこんなに愉しいぞ。

『襲撃をかけるのは四名、情報はそっちに放り込んだから、あーちゃんと一緒に対応してね！』
「え、私殴られたんだけど」
『でも治ったでしょ？　今の恋華ちゃんなら簡単に治るくせに』
「おいおい、私を見くびるなよ。恋愛ゲージ二六〇〇％なんだぜ？　首が跳んだって生えてくるね」

誇らしげに首を刎ねるような動作をしてみせる恋華。
犬歯を剥き出しに、彼女は嗤う。

「まあいいわ、おっけー。大体把握したから。それじゃあ、また連絡するわね《天災》」
『はいはーい。ばいちー《天災》』

ぶつりと通信が途切れ、ノイズだけになったウィンドウを操作して閉じる。
残されたそこには、歪な笑みを浮かべた天災が残された。

「三番テーブルご案内ですー！」
「当店限定ミックスパフェでございますね！　かしこまりました、少々お待ちください！」
「ご来店ありがとうございましたー！」

少女たちの明るい声が響く中、私は何とか休みをとることができた。
開店してから数時間、やはり人の出入りは激しく、そして店内の回転もすさまじい。

「鷹月さん、休憩入りますね」
「あ、うん！　お疲れ様ー！」

ぺこりと頭を下げてから、私はメイド服姿のまま教室を出る。
と、そこでは既にチャイナドレス姿のふーちゃん、制服の簪ちゃんが待っていた。

「お待たせ、二人とも」
「ラウラは？」
「まだお仕事中。三人で行って来てくれって」
「大変そう……」

ああ、うん。すっごい大変ですとも。
一夏目当てのお客さんが山のように来てる上に、@クルーズの知名度が上乗せされてるから混雑度は三〇〇%。これが丸一日続くとなれば、そりゃあ大変だろう。
私も一時間休んだらまたこの地獄へ逆戻りだ、頑張らねば。
しかも、一夏は先日の一件以来ずっと箒さんと一緒に楯無さんに鍛えられているらしく、全身筋肉痛で尋常でない痛みらしい。ご愁傷様。
そう言えば、一夏は全然戻ってこないなぁ……。なにしてるんだろ。

「それにしても、ふーちゃん可愛いねぇ」
「ありがと。シニョンなんて久しぶりに付けたわよ」
「似合ってる……」
「ん、ありがと。それじゃ、とりあえず行きましょうか」
「「おー」」

この時間中に、私はふーちゃんと簪ちゃんの二人と学園祭を回ることになっていた。
さて、何処へいこうか。
校舎の外に出て出店を見て回っていると、突然ふーちゃんが目を輝かせる。視線の先にあったのは、透明のビニールが被せられたわたあめだった。

「あ、わたあめ！！」
「あ、ちょっと！　もう、行こう簪ちゃん」
「うん……」

猛然とダッシュを始めたふーちゃんを追って、私は簪ちゃんの手を取ると走り出す。

すぐそこだというのに止まらない理由はといえば、ふーちゃんの好物がわたあめだからだね。
追いつくと、既にふーちゃんはわたあめを三つ購入したところだった。なんという早業……。

「はい、二人とも」
「あ、ありがと」
「ありがとう……、鈴……」
「アタシの奢りだから気にしないで。んーっ、あんまいっ！」

一舐めする度に頬が落ちる様な顔を浮かべ、それはそれは幸せそうにわたあめを食べるふーちゃん。まあ、わたあめに限らずこういったふわふわした甘いものはふーちゃんの好みだ。

「あ、簪ちゃん」
「え？」

私の声に反応してこちらを向いた簪ちゃんの、鼻の頭に乗っかっていたわたあめを舌で掬って舐め取る。ん、甘い。
しかし、私もこういうこと慣れてきちゃったなぁ……。

「あ、あ、ああっ！？」
「えっと、嫌だった……？」

顔を真っ赤にしながらもぶんぶんと首を横に振る簪ちゃん。
それを見て、ふーちゃんも急いで鼻の頭にわたあめをちょこんと乗っけると、アピールするようにこちらへ突き出してくる。

「えーっと……」
「ん！」

「……ぺろっ」

まあ、やれってことだろうから。

ぺろりと舐め取って、それからこれでいいかとふーちゃんの方を見やった。うん、いいらしい。

けど、どうせならラウラもこれたらよかったのに。今ラウラは別のシフトで入ってるから、私と行動を共にすることは出来ないのです。もったいない。

「聞いた？　生徒会の出し物！」

「聞いた聞いた！　織斑君が出てるんだって！　早く見に行こうよ！」

……おい？　何してるんですかあれは。

「あのー、すいません。その出し物って何処でやってます？」

「え？　ああ、第四アリーナだよ。シンデレラで演劇やるんだって！」

「ありがとうございます」

近くにいた女性とにペコリと頭を下げ、それからこれが誰が原因なのかを思案する。二秒で弾き出せた。

「先日生徒会長から感じたあの感じが、束さんと同様のものだとすれば……」

十中八九これは生徒会長のやったことだろう。

全く、なんちゅうことを……。ただでさえうちは回しづらいっていうのに！

「お姉ちゃん、また何かやらかしてるんだ……」
「で、行くの？」
「もちろん」

とりあえず、何をしているのかを見に行くことに致しましょうか。
そしてやってきた第四アリーナ。凄まじい人だかりの中を抜けていくと、そこには王子様スタイルに変身した一夏が立っていた。頭に王冠乗っけて。

「……これ、シンデレラ？」
『否、それは最早名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵を薙ぎ倒し、灰燼を纏うことさえ厭わぬ地上最強の兵士達！　彼女らを呼ぶにふさわしい称号……それが！　『灰被り姫（シンデレラ）』！』
「そうみたいね。設定改悪ってレベルじゃないけど」
「お姉ちゃん……、悪乗りのレベル上がりすぎ……」

ポカーンとする一夏と私。うん、一夏、君の気持ち、今だけは分かる。代弁しよう。

……え？

『今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る！』

放送が続く。

「は、はぁっ！？」

一夏がそう言った直後、一夏の足元で銃弾が爆ぜた。跳弾の仕方

と角度から言ってスナイパーライフル系のはずだ。っていうか、学校内でそれは……、いいのか。ＩＳ学園は何処の国でもないんだから。

だからってそれはどうかと思うんだけど！？

『っていうかイヴ！　久しぶりだけどさっきの跳弾角度から射手の位置の割り出し！』

『埋め合わせはまだですかねー……。っと、でました。ここから三五度上方、左方五度です』

そこをじっと見つめると……、きらりと光が反射する金髪。まあ、ここであんなことしてるのってセシリアさんしかいないよねぇ。

まあ、セシリアさんの腕ならまちがって脳天ぶち抜いたりなんてないだろうし、大丈夫だろう。多分。

なんて言ってると、瞬く間に人が増えていった。どうやら、フリーエントリー組も参入してきたらしい。ちなみに、ラウラも参加していた。なにか考えがあるんだろうと思っているうちに、一夏が消えた。

「……ねえ、一夏いないわよね」

「いない……。消えた？」

「いや、そんなまさか」

どうせどこかに身を隠しているだけだろうと、笑い飛ばそうとした直後。

アリーナ全体を強烈な爆発音と地鳴りが襲った。

第４２話　学園祭（後書き）

香織ちゃんが男だということが恋華にばれました。束ちゃんが問題なしと判断してばらしただけですが、和解はすぐにされますのでご安心を。

西尾維新成分が入りだしております。苦手な方はご注意を。

第４３話　襲撃　？

突然の爆音と共に、そこら中から火の手が上がる。
何が起きたのかを把握しようと周囲を見渡せば、空から三機のＩＳが飛び込んでくるのが見えた。

「あれは……！」

そのうちの一機には、見覚えがあった。臨海学校での事件の折、私たちが最後に遭遇した謎の機体。
確か、彼女はキティと名乗った。私の、妹だと。
……いや、今はいい。そんなことは。

「ふーちゃん、簪ちゃん！」
「オッケー。避難誘導は先生たちに任せましょ」
「私たちは、あっちを……！」

戦意十分な二人に頷いて、静かに目を閉じる。

『イヴ、行こう』
『はい、カオリ！』

直後、私たち三人は光に包まれたかと思えば、次の瞬間にはそれぞれのＩＳに身を包まれていた。
と、突然通信回線が開いてそこに束ちゃんの顔が映し出される。

『聞こえてるかな、皆？』
「束ちゃん、どうしたの？」
『今そっちで襲撃あったでしょ？　いっくんが狙いみたいなんだけ

ど、そっちは生徒会長さんが片付けるから、皆は他の三機を担当してね！』

「でも、見えただけで三機よ？　まだいるの？　っていうか、それ一夏が狙われてるってこと！？」

『まだド素人のうちに白式を奪うつもりなんだろうけど、束さんを出し抜けるとか思ってたら大間違いなんだぜ！　とりあえずよろしくね！　くれぐれも怪我だけはしないように！』

「わかった……。行ってきます、社長……」

ぶつん、と通信が切れた。

襲撃してきたのは全部で四機、そのうち一機は一夏が狙いだけど、生徒会長が止めるらしい。束ちゃん情報ならほぼ間違いないと言っても大丈夫かな？

けど、一体他の三人はどういう目的で……。まさか撹乱ってだけじゃないよね。

「とにかく、行ってみよう。一機叩くよ！」

「りょーかい！」

「うん……！」

一斉に飛び立ち、シールドの割れたアリーナを越えてその向こう側へ飛ぶ。

先生たちは訓練機に乗って一般客や一般生徒の避難誘導を行っているらしく、その様子が空からも見える。

と、視界の端にこちらへ飛んでくる一機のＩＳが見えた。咄嗟にハイパーセンサーを確認。

『カオリ、所属不明機！　エネミーです！』

「ッ！　待ちなさい！」

「あら、可愛い子が三人も。そこを退いてくれないかしら？」

開放通信（オープンチャネル）から聞こえてきたのは、背筋に怖気が走るほど美しい声だった。

ギリッ、と奥歯を食い縛ってそちらを睨みつける。負けるな、気圧されるな。

「ＩＳを解除して、投降して下さい！」

「ふふ、絶対に聞き入れられないと知っていても、そう言うのね？」

「お決まりですから。投降の意思はないんですね？」

「ええ。ないわよ」

答えた瞬間に《夜鷹（よたか）》を呼び出（コール）す。両腕で構えを取る。

それと同時に、ふーちゃんが《双天牙月（そうてんがげつ）》を、簪ちゃんが《朱鉄（あかがね）》を呼び出（コール）して構える。

にやりと、彼女が笑った。

「だから、墜として通るわね？」

咄嗟に《夜羽（よばね）》を交差させて銃弾を防いだ。見えなかった。

まるで初めからそこに弾があったように、当たり前のように《夜羽》によって防がれる。いつだ、いつ撃った！？

「あら、いい反応ね」

「はっ！」

コメントしながらも、ふーちゃんの撃ち出している衝撃砲を軽々と避けてみせる。見ていない、感覚だけで避けているのか。

一気に接近を試みてはいるが、その度に牽制するように撃ち出される弾丸を防いでいるせいで今一距離を詰められない。これは、使うしかないか。

『《ナイトホーク》で仕掛けるよ。援護よろしく』
『了解！』
『わかった……！』

二人に個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で伝えた後、即座に《夜鷹》の武装特性、《ナイトホーク》を起動させて接近していく。
各種ステルス類はきちんと起動している。偶然でもない限り当たる事は――、

「そこね」
「っ！？」

ないと思っていた。それを嘲笑うように、無数の弾丸が《夜羽》へと撃ちこまれていく。しかも、その合間合間に撃ち込まれる衝撃砲も見えているように避けていっている。
どういうこと、何で見えてるの？！

「はあああああっ！」
「ここっ……！」
「残念、外れよ？」

狙い澄ました二人の一撃が、スルリと避けられた。
なんだ、この人。当たるどころか、一発もかすらないなんて！
しかも、こっちは下にいる人たちを気にしているからあまり大きな攻撃は行えない。あまりにハンデが大きすぎる。

「そろそろ終わりにしてくれないかしら？　私にもやることがあるのよ」
「もうちょっと構ってもらうわよ！」

「行かせない……！」
「そういうことだから、行かせる訳にはいきません！」
「そう。なら……ここで墜ちなさい！」

ＩＳのスペックは負けていない。少なくとも速度はこちらの方が上だ。けれど、明らかに戦い方は向こうの方が巧かった。
この人、こうした混乱の中での戦い方が分かってる。一体どうすれば……！

「きゃあああ！」
「っ、ふーちゃん！」
「かはっ……！」
「簪ちゃん！」
「さて、次は貴女ね？」

一瞬で二人が倒された。瞬く間にシールドエネルギーが消滅したのが見えていたけど、あれほど苛烈な攻撃をあの一瞬で二度も繰り出すなんて、やっぱり只者じゃなさそうだ。
けど、まあ。二人をやってくれたお礼はしないとね……！

「はあっ！」
「あら、まだやるの？」
「当然！　ウィングビット、《ナイトホーク》！」

一〇基のウィングビットと《夜羽》の武装特性を起動させ、更に接近しながらオールレンジ攻撃を仕掛ける。
やはり向こうはこちらの動きが見えているかのように弾丸を浴びせてくるが、それでも一〇基のビットによる一斉攻撃は防ぎづらいらしく、若干動きがぎこちなくなっていた。
けれど、これにも死角がある。相手が下方を背にしたら、私は上

空からの攻撃を行えなくなる。彼女がこちらを向いていてくれるからこうして戦えているが、まだ避難が済んでいない下へ行かれればウィングビットは使えない。

恐ろしいことに、彼女はその状況下でビットを狙い撃つだけの余裕を持っていた。ダメージは少ないが、当たる回数は増えてきている。このままではまずい。

だから、その前にケリをつけてやる！

「そこォ！」

「しまったっ！？」

一気に接近し、《夜鷹》を振りぬく。装甲を切り裂いたが、トドメにまでは行かなかったらしい。向こうはこちらを面白そうに見やってから、急加速で私たちの来た方向へと飛んでいってしまった。

「ま、待て！」

『カオリ、危険です！　今までのダメージが蓄積しているせいで、ウィングビットの制御に支障が出ています！　一度修復を！』

「……くそっ」

イヴに止められ、パラメータグラフに目をやる。恐ろしいことに、《夜羽》とウィングビットの耐久度は二割以下に落ち込んでいた。たった数分の戦闘で、ここまで削られたのか。

『ふーちゃん、簪ちゃん、大丈夫！？』

『こっちは大丈夫よ！　簪も無事！　あいつは！？』

『ごめん、取り逃がした。一度戻って修復しないと。《夜羽》がぼろぼろだ』

『了解、こっちも修復中よ。降りてきて、簪の『モーティブ』で修復できるって』

どうやら二人は無事らしく、個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）できちんと応答してくれた。よかった、怪我はないみたい。

とにかく、《夜羽》を修復するために私は下へ降りることにした。

一体、何がどうなってるんだ……。

「ちくしょう、なんなんだクソがっ！」

「そう粗暴な言葉を使うと、品位が疑われるわよ？　亡国機業実働部隊（ファントム・タスク）、オータムさん？」

「下調べは済んでるってか？　ハッ、上等だ糞ガキ、ぶっ殺してそいつも頂くぜェ！」

へし折られた五本の装甲脚を蹴り飛ばし、場所を確保する。

目の前にいるのは残る三本の装甲脚を背中に背負い、こちらに相対するオータム。背後にいるのは、オータムを警戒している義弟である。あ、いやいや、織斑一夏クン。うん、義弟じゃないね、まだ。

けどゆくゆくは千冬さんと結ばれるわけだから、問題ないんじゃないかしら？

……ふぅ。よし、精神集中。私は出来る子危ない子！

「その前に、私も自己紹介しておきましょうか。名乗りって大切よ？」

「あぁ！？」

「私は《恋愛中毒（ラブジャンキー）》の更識楯無。そして私の専用ＩＳ、『ミステリアス・レディ』。以後よろしく？」
「けっ、今更名乗りだぁ？　舐めてんじゃねぇぞ糞ガキィ！」
装甲脚から撃ち出されたＢＴ弾を水で弾き、蛇腹剣である《ラスティー・ネイル》で斬り付ける。はい、これで六本目。
「おいおい、その程度かい？　そりゃあないぜ！」
「うるせぇって……、言ってんだろうが！」
一瞬、姿が消える。
その直後、私の上空で大量の弾薬を投下するオータムが見えた。
何処に隠し持っていたのやら。
「死ねェェェェ！」
「た、楯無さんっ！」
大量の弾薬が誘爆を引き起こし、瞬く間に私の体を爆発で包んでいく。
傍目から見れば、私はこれで死んだように見えただろう。絶対防御はあるが、ブラックアウトには十分すぎる量の爆発が起きている。
まあ、今までの私なら、こうさせる前にしとめるんだろうけどね？　私はそうじゃないわけだ。
「は、ははは！　バカが、図に乗るからこうなるんだぜ！」
「――おいおい、まさか知らなかったのか？」
「っ……！？」
粉塵の中から聞こえる声に、嗤っていたオータムが身構える。

「私は《恋愛中毒（ラブジャンキー）》なんだぜ？　愛ある限り私は死なねぇ、覚えとくといいわよ」
「て、メェ……！！」」

ぽかんとしている一夏クンと、歯を食い縛ってこちらを睨みつけているオータム。
彼女を見据え、言葉を紡ぐ。

「それではとくとご照覧あれ、愛と正義の舞踏会！」

さて、それじゃあ始めましょうか。
これも千冬さんのためだものね。

第４３話　襲撃　？（後書き）

やたらと強いこの人は亡国機業のあの人。
そしてぶっ飛んでいる楯無さん。一夏困惑。
次回も戦闘です。葵の戦闘シーンがやっと……！

「それでは更識を始めよう」

書いてるときにふと言わせたくなった。
このネタでネタ帳に投下するかも。

第４４話　襲撃　？

更識楯無がオータムを弄んでいた頃、葵は一人『レベル４』以上の権限を持つ物しか通れない扉の前に立っていた。
その手には一振りの刀を持ち、ただひたすらにそこへ至る階段を凝視する。

「……来たか」

呟いた直後、階段が吹き飛んだ。
強烈な爆風にも目を閉じず、飛んできた瓦礫を素手で打ち払ってそこをただ見つめる。
立ち込める粉塵が晴れると、そこには左腕の装甲に一筋の切れ目を入れたＩＳが立っていた。いや、正確には浮いているのだが。
それを見て、葵はようやくかと言わんばかりに刀を鞘から抜き放つ。光が漏れることもなく、気が狂わんばかりの妖気が溢れ出るということもなく、それは戒めより解き放たれた。

「久しぶりね、葵ちゃん」
「ああ、久しぶりだな。今はスコールだったか？」
「三年ぶり、と言ったところかしら。びっくりしたわ、まさか貴女ほどの女がこんな箱庭に入っているだなんて」
「事情があるのさ。のっぴきならない、な」

旧知の仲と言った様子で話す二人だったが、既に間合いを目測し、互いの喉笛を掻き切らんと視線を交差させていた。
重苦しいどころでない重圧が歓喜してその場を蹂躙する。威圧感という言葉をちんけに思わせるほどのプレッシャーが、互いから放たれていることを二人は感じた。

けれど、止まらない。

「それで、通してはくれないのでしょう？」

「無論だ。死合うぞ、スコール……ッ！」

瞬間、刃が交差した。

音も光も、存在すらも置き去りにするような速度で加速した両者はそのままにぶつかり合うと、「ただの刀」と「ＩＳのブレード」が同じだけの金音（かなおと）で泣き喚く。

一合、二合、更に増える。瞬きの一瞬の間に、五度は打ち合っていた。

しかし、それはほんの序章。体（エンジン）を暖めるために、ただ吹かしていただけに過ぎない。

「やはり、速い――！」

「全てを退けるために、私は強くなった！　心の通っていない木偶を使ったところで、勝ち目などないっ！」

言葉と共に、動作は更に加速する。

目で追うことすら出来なかった刃が、近くの外側に飛び出す。それを、スコールは確かに感じて受け止めていた。

スコールは思案する。目の前の少女は少女ではなく、もし少女と考えれば一瞬で体は赤い霧と消えるだろう。なればこそ、彼女はそれだけの実力を有していながら、今だ本気を出していない。

ＩＳの限界ですら彼女に追いつくのには相当な鍛錬が必要だった。けれど、今は追いつけている。自らの鍛錬の成果ではなく、彼女に加減されているせいで。

昔彼女と戦ったときに感じた、いっそ清々しいほどの恐怖を、目の前の迫り来る刃からは感じられない。少女が鈍ったわけではなく、それほどにスコールは目の前の少女、葵に加減されていた。

上段から繰り出される剣戟を受け止めようと構えた直後、あったはずのそれが消え、なかったはずの右下半身目掛けての刃が打ち上げられる。

それを左サイドと身を回すことで入れ替えて回避した刹那、今度は自身の背後というありえない場所からの突きがスコールを襲う。

「はぁっ！」

気迫と共にブレードを振り下ろし、回避されたと理解する前に刃を返して更に回避方向へ剣を進める。

傍目から見れば異常な光景だっただろう。

ただの鉄の塊であろう日本刀を振るう葵が、最強の兵器と目されるＩＳを駆るスコールを相手に一歩も引かぬ、むしろ三歩も四歩も踏み入った戦いを繰り広げているのだから。

けれど、スコールにとって見ればそんなことは当たり前のことだった。

彼女は葵のことをそれなりによく知っている。だからこそ、ＩＳを纏って彼女の前に立って尚、警戒を怠らず、一撃の下に沈めるだけの気迫を滾らせていたのだ。

だがしかし、彼女は読み違えた。三年、それだけの期間があって葵がどれほど生長したのか、その式の最後の空欄、答えの部分を読み違え、謝った解に導いてしまった。

「くぅっ！？」

「まず、一本」

その結果がこれだった。

一瞬の隙を突かれ、あろうことか唯一葵に追いつけたであろう刃を真横から斬り落とされる。

ギリッ、と奥歯を噛み、どうすべきかを頭の中で計算する。しか

し、ブレードを失った今のスコールでは、まず間違いなく向かっていけば殺される。そうなる確信が、スコールにはあった。
手持ちの武装はグレネードランチャーとマシンガン、そして防御兵装の盾のみ。
すぐさま撤退の二文字を弾き出すと、真っ直ぐな視線にありったけの敵意と殺意を乗せて葵を見据える。

「さて、どうする？」
「当然、逃げるわ」

言った直後、スコールはグレネードランチャーを狭い通路のそこら中に乱射すると、粉塵の煙幕を作り出し、それを収納（クローズ）すると同時にマシンガンと盾を展開（オープン）、煙幕の中に弾丸をありったけ撃ちこんでいく。
そうしながら徐々に上昇していくが、スコールの耳には確かに聞こえていた。
『銃弾を斬り裂いて疾駆する』葵の足音が。

「逃すと思うか？」

左腕で構えていた盾へ衝撃が走ったかと思えば、左腕の装甲ごと盾が斬り落ちされる。
煙を靡かせて跳んでいた葵は、落ちていく盾を踏み台にして更に跳躍を重ね、スコールの目の前へと到達した。

「コアはもらうぞ、スコール！」
「やれるものならねぇ！」

言葉と共にマシンガンを乱射するが、その弾丸の全てが刀によって叩き落され、残った弾丸はあろうことか葵が踏み台に使っている。

直後、スコールの首元へと、研ぎ澄まされた刃が迫った――。

一方その頃、ラウラ、セシリア、シャルロット、箒の四人は二対四の戦いの最中にいた。

一機は福音事件の折に現れた『灰狼（グレイウルフ）』、もう一機は、あろうことかイギリスより盗まれたもう一機のＢＴ兵器搭載型ＩＳ、『サイレント・ゼフィルス』だった。

「はあぁぁぁぁ！」

「遅いぞ、第四世代！」

「私もおりましてよ！」

「偏光制御射撃（フレキシブル）もできないクズが、私の前に立つな！」

戦いの中で四人は、『灰狼』はラウラとシャルロットが、『サイレント・ゼフィルス』はセシリアと箒が相手取るように動いていた。

尤も、それが相手に動かされているのか、相手を自分達が動かしているのか、それが分からないのが気になるところだったが。

「ちょこまかと……！」

「よく動くねっ！」

「ふふ、オオカミはそう簡単には捕まりませんわよ？」

『灰狼』の方は回避中心での、『サイレント・ゼフィルス』の方

はカウンター中心での戦闘が続いている。
　度々互いがすれ違うことはあったが、お互いに気を割いている余裕はなかった。
　代表候補生三名と第四世代が揃い、尚且つ二対一と言うこの状況下にあって、二の側であるラウラたちは圧倒的に追い詰められていた。

「マドカ、墜とさないの？」
「くっ、黙れ！　私に話しかけるな！」

　軽薄な笑いを顔に貼り付け、『灰狼』を駆るキティの言った言葉に、『サイレント・ゼフィルス』を操縦するマドカはイライラしながら吼えた。
　先ほどから頭の中をかき回す声に苛立ちながらも、マドカの操縦に危うさは全く感じられず、あまつさえ箒とセシリアの二人は追い詰められてきていた。

「早々に落として戻らせてもらうぞ……！」
「負けるものか……、私だって専用機持ちだ！」
「偏光制御射撃が出来なくても、貴女程度は！」
「吼えるな雑兵が！　貴様らは地に這いつくばっていろ！」

　六基のビットを繰り出し、更に正確無比な精密射撃を撃ち込んでくる彼女の標的は箒だった。
　例え第四世代を持っていても、その操縦技術は恐ろしく拙い。いまだ機体の性能に助けられてばかりの彼女にとって、六基のビットを手足のように使いこなし、その中で更に研ぎ澄まされた射撃を繰り出すマドカはとてつもない強敵だった。

「まずは足をもらうぞ！　そこだっ！」

「ぐっ、しまったっ！？」
「箒さん！？　それ以上はやらせませんわ！」
「ビットも碌に扱えない癖に！　墜ちろっ！」

一撃を受けた箒を見て、激昂したセシリアは咄嗟にビットを繰り出す。
しかし、それは先読みしていたマドカのビットによって撃ち落とされ、抱えていたＢＴライフルによって絶対防御を発動させられてしまう。
そのまま二度、三度と撃ち込まれ、セシリアは一瞬でシールドエネルギーをゼロにされてしまった。

「セシリア！？　貴様ァァァ！」
「動きが直線的だ、ド素人が！」
「がはっ！？」

突っ込んできた箒へ向けて無造作に弾丸を撃ち放ち、追い討ちにビットから繰り出されたＢＴエネルギー弾でシールドエネルギーを削り切る。
一瞬でエネルギーを空にされた箒もまた、戦う力を失いアリーナへと落ちていった。

「キティ、貴様はそこでそいつらと遊んでいろ！」
「あら、私を置いていってしまうの？」
「――ッ、だ、まれ……！　くそっ！」

キティの言葉に一瞬葛藤するような素振りを見せたマドカだったが、そう吐き捨てるとその場から姿を消す。
残されたのは、キティの乗る『灰狼』と、ラウラの乗る『シュヴァルツェア・レーゲン』、シャルロットの乗る『ラファール・リヴ

アイヴ・カスタム？』のみ。

「お仲間が行ってしまったようだが？」

「別にいいわよ、あの子にはあの子のやるべきことがあるもの。それまでは縛らないでいてあげるの」

「どうでもいいけど、投降するか帰るかしてくれないかな？」

「残念、撤退命令出るまで帰れないのよね。うちってほら、上が厳しいから」

まるで世間話でもしているかのような三人だが、その間にも戦いは続いていた。

ラウラの放ったＡＩＣをいとも容易く回避してみせると、そのオオカミにも似た姿のＩＳを持ってして、両腕に三枚ずつ取り付けられた刃で次々にシャルロットの放った弾丸を打ち払っていく。

それを行いながらも、ラウラのレールカノンを見切ってはそれすら回避し、隙間を縫って針を刺すように三角錐状のＢＴエネルギーを撃ち出してくる。

「そろそろ飽きてきたわ……」

「じゃあ、墜ちてくれないっ？」

「それはぁ……、む、り♪　《ウルフズ》、武装特性発動！　《狼（ウル）の咆哮（フ・ハウリング）》！」

叫んだ瞬間、甲高い共鳴音が《灰狼》の両腕に取り付けられた刃から発せられる。

耳を劈（つんざ）くようなその音が鳴り響くうちに、その刃は徐々に長さを伸ばしていった。

それを見たラウラは、信じられないような顔でそれを見た。

「バカな、武装特性だと！？」

「香織と簪ちゃんだけじゃなかったの!?」
「あら、お兄様たちだけが使えるわけではありませんのよ？　この子は私が生み出した娘、使えて当たり前ですわ」
「くっ……！　これはまずいか……！」

頬ずりするように刃に顔を近づけてウットリと眺めていたキティだったが、突如として不満そうな顔に戻った。
そして大きく溜め息をつくと、刃を元に戻して詰まらなそうに口を開いた。

「どうやら、作戦は失敗のようですわ。はぁ……。私はこれでお暇させていただきます、さようなら」
「な、逃さないよ！」
「よせシャルロット！　今追ってもやられるだけだ」
「……くっ」

先ほどまでの攻勢が嘘だったかのように静かとなった空で、ラウラとシャルロットは静かに唇を噛んだ。

第４４話　襲撃　？（後書き）

まだまだ続くよ襲撃事件。
オータムとスコールの顛末は次回に持ち越し。あれ、主人公出てない。

第45話　襲撃　？　そして……？

「コアはもらうぞ、スコール！」
「やれるものならねぇ！」

マシンガンの弾を裂き、踏み台にしてその首目掛け刃を振るう。
その刹那――、

「ッ、くっ！」

葵を狙って放たれた無数のＢＴエネルギー弾を刀で弾き、身を回転させて回避する。
傷は負わなかったが、そのせいで距離を随分と離されてしまった。
軽く舌打ちしながら空中で体を捻り、校舎の屋上へと着地する。
既に一般生徒や客は避難を完了しているらしく、屋上に人気はなかった。

「ちっ、外したか！」
「エム！？　貴女なぜここに！？」
「貴様の方があの猫科の地球外生命体よりよほどマシだ！　貴様こそ、あんな生身の女一人に何を苦戦している！」
「彼女を普通の人間だと思っては駄目、今回は退くわよ」
「なにっ！？　何故だ！」
「いいから言う事を聞いてちょうだい。これは命令よ」

しばらく迷っていたマドカだったが、仕方ないと溜め息をついてからチラリとアリーナ側を見る。

「貴様は先に行っていろ。私はオータムを拾ってくる。大方負けて

いる頃だろう」
「そうね……。お願いするわ」
エムは小さく頷き、一度葵の方へ目線を向けたかと思うと、そのままアリーナの方へと飛び去った。
「あら、見逃してくれるの？」
「もうそっちを追う手段がないからな。今日のところは見逃すさ」
「……ねえ、葵。本当にこちらに来る気はない？　貴女をこんなところにとどめてしまう世界なら……」
猫なで声でスコールは葵にそう言葉を掛ける。
しかし、葵は静かに首を横に振った。
「くどい、言った筈だ。私の答えは三年前から変わっていない」
「……そう」
スコールは酷く残念そうにそう言うと、ゆっくりとその場を離れていく。
その様子を、葵はどこか悲しそうな瞳で見つめていた。
「ガッ！？」

水を纏ったランスが。『アラクネ』の装甲を剥ぎ取っていく。
楯無は口元にくっきりと笑みを浮かべながら、オータムへの猛攻を続けていた。
その圧倒的な力に、一夏は驚愕から目を見開いてそれを見つめている。今まで訓練の相手にはなっていたが、きちんと相対したことのなかった彼女の強さに、驚きを隠せないでいた。
一方のオータムもまた、その強さに驚嘆していた。
ＩＳ学園の生徒会長が強いとは聞いていたが、これほど人間離れした強さだとは聞いていない。まるで人の皮を被った化け物と相対しているような感覚だった。
しかし、彼女も秘密結社の実働部隊の端くれであり、まずは生きて戻ることを最優先に考えることにした。

「ク、オラァ！」
「おっと」

投擲された二本のカタールを水のヴェールで弾いた隙に、オータムは懐から咄嗟に四〇センチほどの四足の機械を楯無の方へと放り投げる。
それは空中で器用に開くと、楯無の胸元へと装着され、がっちりと体を拘束した。

「あらら？」
「はっ、本当は白式の方に使う予定だったが……、まあいい。テメェのＩＳは頂くぜ！」
「ぇ？　きゃあああああああっ！」

オータムの言葉が終わった直後、楯無を電撃と激痛が襲った。
それは胸元の装置から発せられているらしく、激痛と共に徐々にＩＳが解除され始める。

「楯無さん！　くそ、白式！」
「おせぇんだよガキがっ！　おラァ！」
「ぐはっ！」

楯無を助けようと、『白式』を展開しようとした一夏をオータムが蹴り飛ばす。一夏の体は軽々と吹き飛び、ロッカーへと叩きつけられた。
その最中、楯無が動いた。ベキリ、と不穏な音を響かせて。

「――ぁ？」
「痛いわ、すっごい痛い。痛くて痛くて泣いちゃいそうなんだけど、ねえそこのところどう思う？」
「テメェ、なんで動ける！？　剥離材（リムーバー）はちゃんと機能してるはず――！？」

にぃ、と楯無は口を三日月に裂いて嗤う。
楯無が普通の最強であったなら、既に勝負は決していた。オータムの勝ちとして終われていただろう。
だがしかし、そうではないのが現実だった。

「痛いのは千冬さんに甘えれば治るけどぉ……。会長的には貴女をぶっ潰しておいた方がいいよね？　ということで大人しく捕縛されなさい、愛とか正義とかその辺の事情を考慮して」
「な、なんで動けるんだよテメェ！？」
「さっきも言ったじゃねーか、私は愛ある限り死なねぇ、ってよ。私は千冬さんへの愛と自己愛の塊だぜ？」
「わけわかんねぇこと、言ってんじゃねぇ！」

にやにやと嗤いながら言う楯無を、オータムはどこかおぞましい

気配を感じながら睨みつけた。
果たして、彼女がもう少し愚かしければ、あるいはもう少しばかりの思慮があったならば、彼女もその結末になることはなかっただろう。
楯無はランスを量子変換して収納（クローズ）すると、ヴェールを作り出していたアクアクリスタルを一箇所に集める。
そのままナノマシンによって操られた水で胸部に取り付けられた剥離材を包むと、ベキベキと水圧で押し潰し始めた。
ナノマシンによって操作されているそれはプレス機のような役割も果たすことが出来る。それでもってたった数秒のうちに剥離材をペシャンコのブロックに変えてしまった楯無は、それを摘み上げると一夏の方へと放った。

「一夏クン、それ持っててね。あとで調べるから」
「は、はい！」
「じゃあとりあえず……、君のＩＳ頂くね」
「ざっけんじゃ――――！」

言った直後、鋭く圧縮された水がオータムへと撃ち出され、四肢を壁へ固定する。
たったそれだけで動けなくなったオータムへと近づき、楯無は静かに片腕をオータムへ翳した。

「包め、アルカエスト」
「ッ！？　ガ、ゴハァッ！？」

翳した手の平を伝い、大量の水がオータムを包み込む。かと思いきや、恐ろしげなしゅうしゅうという音を立てて装甲を溶かし始めた。
どろどろと溶けていく装甲と、削られていくシールドエネルギー

に、オータムは今度こそ驚愕に目を見開いてパラメータを見続ける。
やがて完全に融解した装甲は消失し、強制的にＩＳは解除される。
ぼとっ、と待機状態である指輪に戻った『アラクネ』を拾い上げると、楯無は興味を失ったようにオータムを殴りつけた。

「がっ……！」
「はい、これでしゅーりょー。つまんねーし意外性ゼロだな、何か奥の手とか、こんなこともあろうかと！　とかないの？」
「た、楯無さん、そいつ……」
「ああ、死んでないわよ。とりあえずＩＳは回収したし……」
「ではそいつだけでも返してもらおうか」

壊れた壁から飛び込んできたのは、『サイレント・ゼフィルス』だった。
彼女は倒れているオータムの首を掴むと、顔の見えないバイザー状のそれの向こう側から楯無たちを睨みつけ、それから一瞬でそこから姿を消す。
嵐のような戦闘が、ようやく終わった。

戦いが終わった後、私達専用機持ちは生徒会室へと集められていた。
無論、一夏たちも一緒である。あと生徒会長たちも。

「で、会長。疲れている私たちをここに集めて何をするつもりですか？」
「香織ちゃん、ずばずば言っちゃやーよ。今説明してくれるわ」
してくれる、という言葉に疑問を抱いたものの、説明はあるということで納得しておくことにした。
疲れた体を椅子に預け、小さく溜め息を吐き出す。
と、全員に見えるほど大きな仮想ディスプレイが開き、そこにウサ耳の女性が映し出された。
「束ちゃん！？」
『はろーはろー、皆無事みたいで何よりだね！　恋華ちゃん、報告ヨロー』
「はいはーい♪　被害は建築物への影響以外なし、そっちも大した被害じゃないわ。あと、オータムって奴のＩＳを剥ぎ取ったわ」
『オータムって言うと、アラクネだね。アメリカの第二世代型ＩＳ』
手元のディスプレイをいじくりながら、束ちゃんが言った。
というか、生徒会長と束ちゃんってこんなに仲が良かったの？
というか面識あったの？　しかも別の名前で呼んでるし。
『おや、どうしたのだい香織ちゃん？　何か疑問でも？』
「あの、会長と束ちゃんって、面識あったの？」
『なるほど、言ってなかったね。私は『天災』という種類に属していてね、恋華ちゃんも同じ存在になったから、こうして仲良くしてるのだよ』
「『天災』は、まあそういうものだと思ってくれればいいわ。理不尽の塊。そちらのお姉さんには、敵わないけどねー♪」
その生徒会長の言葉に、壁にもたれかかって目を瞑っていた葵は

小さく頬を吊り上げた。

「あれほど死に急いでいた小娘とは思えないわね。立ち直った代わりに人をやめたか」

「いい気分よ？　千冬さんの膝枕♪」

「……おい一之瀬姉、コイツを退かせ」

……えー、現在会長は千冬さんの膝の上に頭を乗せています。俗に言う膝枕だね。

会長ってこういう感じじゃなかったような……？

「面倒なので嫌です。小娘、お前の名は？」

「《恋愛中毒（ラブジャンキー）》、よろしくね？」

「ふん。で、本名が恋華ね。暗部が本名を明かしてもいいの？」

「いいのよ別に。私にとって名前は千冬さんに呼ばれるための記号であって、知られたり教えたりすることで不利益を被るものではないわ。公の場では楯無で行くけど」

そ、そういうものなのかな。

まあそういうものだと納得しておこう。理不尽の塊にならほぼ毎日会っていた訳だし。

『そうそう、ちなみに私は《人類最低》だよ、あらためてよろしくね、《無色主義者（ノットマイン）》』

「……古臭い名前を穿り返すな、捻じ切るぞ《人類最低》」

ぞくりと、久しぶりにお姉ちゃんの殺意を感じた。

ああ、お姉ちゃんの『二つ名』か。しかもそれってかなり最初の頃のものだね。よく調べて出てきたもんだ。

『あはは、ごめんねあーちゃん。さて、それで話を戻すけど。君たち皆には、もっと強くなってもらわないと。亡国機業（ファントム・タスク）がこうして動き出している以上、いっくんというイレギュラー要素を狙っているのはまず間違いないから』

「俺が……。それにあいつら、昔の俺の誘拐事件の時も！」

『そう。ちょっと調べてみたけど、いっくんの誘拐を頼んだのはドイツみたい。全ては筋書き通り、自国に縛り付けてちーちゃんのデータ採取と、自軍ＩＳ部隊の強化を目論んでたらしいね』

「なっ、私の祖国がそんなことを……！？」

一夏の誘拐事件は、ラウラにも関係してくることだ。それが、ドイツの仕込んだ舞台の上で踊っていただけとは。

けれど、亡国機業はただ利用されるだけの相手じゃない。実際に戦ってみてそう感じた。

『おそらく連中は、誘拐したときにいっくんのデータを採ったんじゃないかな。だから、いっくんがＩＳを動かせるという何らかの確証を持っていた。そういうことだと思うんだ』

「ねえ束ちゃん、結局連中はなにがしたいわけ？」

『それがねぇ……、この束さんにも分からないんだ。データ、紙類はおろか、音声にだって組織の目的なんて一言も出てない。どうやって統率してるのかすら不明だよ。組織の規模もね』

ナターシャさんの言葉に、やれやれと言った様子で返す束ちゃん。

亡国機業……、得体の知れない相手であることに間違いはなさそうだ。

とそのとき、そろーっと手を上げる人が一人。

「あのー……」

「ん、なにかなシャルロットちゃん？」

「僕とラウラはあの『灰狼（グレイウルフ）』って機体と戦ったんです。そのときに、その操縦者が「お兄様」って……。臨海学校の時にもあったし、それは香織へ向けて言ってるみたいでした。あれは一体……」
「……そう言えば、香織の姿を大浴場で見かけたことはないな」
「確かに、言われて見ればそうでしたわ。香織さん、何かお風呂に入れない事情でも？」

おいーなんか変なところから綻び始めてるんだけどー。まさかこのタイミングで男バレの危機来るとは思わなかったわー。
ちなみに、疑惑の目を向けているのは一夏、箒さん、セシリアさん、シャルロットさんの四名。他は皆私が男だってことを知って……。
……会長知らないじゃん。

「そう言えば香織、お前ってあの戦いの時自分のことを僕って言ってたよな。普段は私なのに」

超絶鈍感朴念神一夏君ー！　どうして君はどうでもいいところでその無駄な記憶力が活用されるのー！？　いまだにＩＳの専門用語は怪しいところがあるというのに何故なの！？

「えっと、それは……」
「……もしかして香織って、男の子なの？」

――姉さん、ピンチです。

第４５話　襲撃　？　そして……？（後書き）

ということで香織ピンチ。
葵の人外っぷりと恋華の再起、おたのしみいただけましたでしょうか。
次回からはオリジナル展開が加速！　そしてとっとと六巻買わないと進められなくなる！　俺もピンチ！

第４６話　泣き落とせ！

どうも、香織です。
男性疑惑浮上しました。まあ、むしろ今までばれなかったことの方がすごいと思うんだけども。
今までがんばってきた身としては、ここは何とか切り抜けたいところだ。なのでなんとかしてみよう。

「……それって、私が可愛くないってことですか？　男臭いってことですか！？」
「えっ！？　い、いや、そういうことを言ってるんじゃなくてね！？　その」
「ひどいです！　シャルロットさんは私のこと男だと思ってたんですね！？」

ものすごい踏ん張って涙を溢れさせながら、シャルロットさんに詰め寄ってそう叫ぶ。
ちなみにこれ、中学校のときにも一回やりました。相手は泣いて謝った。嫌な思い出だけども、使わねば切り抜けられないだろう。

「ち、違うの！？」
「違いますっ！　ひどい、ひどすぎますっ！」

ばっ、と効果音がつきそうなぐらいの勢いで生徒会室を飛び出し、屋上までひた走る。

『イヴ、誰か追いかけてきてる？』
『鈴が来ています。他には誰も』

よかった、これで一夏たちの誰かが来てたらアウトだったかもしれないし。
というかあれやるのすっごい疲れるんだよね。もう涙かれました、今日はもう出ません。出したくもないし。
とりあえず屋上でぺたりと座り込むと、大きく息を吐き出した。すでに服は着替えているから、普段どおりの制服姿だ。

「香織、お疲れ」
「あ、ふーちゃん。参ったよ、まさかあそこでばれかけるなんて。皆は？」
「千冬さんに説教されてるわ。襲撃事件については、今度会社に行ったときにまた話し合うって」
「わかったー」

隣に座り込んだふーちゃんにそう返しながら、大きく溜息、というか息を吐き出した。
こうしてボーっとしていると、襲撃なんてなかったみたいに感じるねぇ。

「あー、かおりんと鈴ちゃんだぁー」
「のほほんさん、今朝ぶりですね」
「相変わらずゆったりしてるわねー」
「あははー、とーうー」

どこからか現れたのほほんさんが、突然私とふーちゃんのお腹の上に乗っかってきた。ちょうど布団に寝るようにうつ伏せに。しかも頭は私の方に。
のほほんさんって軽いなぁ。二人で支えてるみたいなものだから余計だろうけど。

「とりあえず、おかえりー」
「はい、ただいま」
「ただいまー」

柔らかな笑い顔ののほほんさんを眺めながら、私はそう言葉を返す。

あー……、平和っていいなぁ。

「なんだかかおりんも鈴ちゃんも、いっつも何かに巻き込まれてるねぇー」

それはいわないでくださいのほほんさん。自分でもなぜなのかわからないんですから。

いや、まあそういう人種ばかり集まっているからだと思うんですけど。そういう場に行くって選んだのも私ですけどね。

「そういう体質じゃない？」
「うわーいやだー」
「とにかく、今日も生きて帰ってこれてよかったって、感じかなー」

……ほんと、そうだよなぁー……。

「みなさん、先日の学園祭ではお疲れ様でした。それではこれより、

投票結果の発表を始めます」

時は流れて翌日。

出し物への投票の集計も完了したらしく、恋華（れんげ）さんの司会で集会が進行していく。

ちなみに、昨日の一件については翌朝に一夏たちから謝罪があったので水に流しました。これからはあまり疑われることもないだろう。大浴場に出てこないのは恥ずかしいからだということで押し通しました！　ええ！

「一位は、生徒会主催の観客参加型劇『シンデレラ』！」

「「「……え？」」」

……えーっと、シンデレラってそんな好評だったの？　というかあんな騒動あったのに投票ってちゃんとできたんだ。まあ、彼女たちが撤退してからも一応学園祭は続いてたし、いいのかな。

「卑怯！　ずるい！　イカサマ！」

「なんで生徒会なのよ！　おかしいわよ！」

「私たちがんばったのに！」

やんややんやと声を上げる生徒たちを手で制し、恋華さんはものすっごくめんどくさそうに言葉を続けた。

あ、ちなみに恋華さんって名前は恋華さん直々に「呼んでいいよー」とオッケーがでました。恋華さんいわく「恩人の妹さんだからね！」だそうです。お姉ちゃん何したの……！？

「劇の参加条件は『生徒会に投票すること』よ。でも、私たちは別に参加を強制したわけではないのだから、立派に民意と言えるわね」

それって生徒側が馬鹿なだけじゃないかな。
部の利益より自分の利益を優先させてしまうとこうなるのだね。
周りを見て行動しましょう。
けれどそれでもブーイングしたくなってしまうのが人の性、先ほどよりは静かになっていたけど、それでも声はやまなかった。

「はい、落ち着いて。生徒会メンバーになった織斑一夏君は、適宜各部活動に派遣します。男子なので大会参加は無理ですが、マネージャーや庶務をやらせてあげてください。それらの申請書は、生徒会に提出するようにお願いします」
「ま、まぁ、それなら……」
「し、仕方ないわね。納得してあげましょうか」
「うちの部活勝ち目なかったし、これはタナボタね！」
「じゃあまずはサッカー部に来てもらわないと！」
「何言ってんのよ、ラクロス部の方が先なんだから！」
「料理部もいますよ～」
「はい！　はいはい！　茶道部ここです！」
「剣道部は、まあ二番に来てくれればいいですよ？」
「柔道部！　寝技、あるよ！」
「それでは、特に問題もないようなので、織斑一夏クンは生徒会へ所属、以後は私の指示に従ってもらいます」

パンパン、と恋華さんがそう締めた。
一夏、大変だね……。
かくして大変なことになった一夏を眺めていると、クラスに戻る途中でナターシャさんがちょいちょい、と手招きしていた。

「えっと、なんですかナターシャ先生？」
「はい、恋華ちゃんの番号。渡してくれって頼まれたの。それと、昨日はお疲れ様。助けに入れなくてごめんね、ちょっと別行動して

たから」

そういってナターシャさんに渡されたのは、小さなデータチップだった。

それをポケットにしまいこむと、ナターシャさんは既に消えた後でした。……私の周囲の年上の人間って、何で半分人間やめてるんだろう。

っていうか別行動って、何してたんですかナターシャさん。

「んー、それはひ・み・つ♪」

「えー」

「いい女には秘密が多いものよ」

「っていうか一瞬で消えてまた戻ってきたりしないでください。物理法則に従って動いてください」

「はいはい。じゃーねー」

そしてまた消えるナターシャさん。なぜだ、なぜうちの人たちは……！

……いいや、考えても仕方ないし。

などと考えながら廊下を歩いていると突然端末に連絡が。ちなみに今日は集会だけでお休みです。昨日が平日で学園祭だったから、振り替え休日ってやつだね。

「はい、もしもし」

『もしもしー、恋華ちゃんだけどー』

「ああ、会長。私これの番号教えましたっけ……？」

『ウサギさんから聞いたのよ！　ちなみにあなたが男だってことも知ってるわ！　ばらす気はないから安心してねー』

……ばれてたぁぁぁぁ！？

まって、ってことは恋華さんもこっちの協力者になってくれるの？　お姉ちゃんとの仲とかいろいろ大丈夫？

『これだと話せないこととかもあるから、今日の夜、八時ぐらいに生徒会室に来てちょうだいな』

「え？　え、ちょっとまっ」

ぶつり。

……世の中って、忙しないね。

「はい、夜でーす」

「香織……大丈夫……？」

「ああうん、大丈夫」

最近なんだか疲れ気味なんだよねぇ……。

寮を出るところで簪ちゃんと会ったので、簪ちゃんと二人で生徒会室へと向かっております。

ってーか何で夜に呼び出すのかなぁ……。ほんとに。

「えっと、ノックした方がいいよね」

「……うん」

コンコン、と大きな扉をノックすると、中からどうぞ、と声がか

かった。うん、恋華さんの声だ。

「失礼します」

「します……」

中に入ると、生徒会長にお姉ちゃんが……、お姉ちゃん？　あれ？　あとナターシャさんもいるし。

「なんでお姉ちゃんとナターシャ先生がここに？」

「仲直りも兼ねて、話の翻訳にね」

「私顧問だから、生徒会の」

「は、はぁ……」

「まーまー、座って座って。ほら簪ちゃんも！」

促されるままに、私と簪ちゃんはペタリとパイプ椅子に座り込む。机の向かい側に恋華さんが座り、その横にナターシャさんが立って、私たちの側にはお姉ちゃんが立っているような形になった。

「で、話とは……？」

「うん、一夏クンにはもう話したんだけど、一応これ話しといたほうがいいかなーと思って。私たち更識家は、古くから裏の世界で暗躍する暗部に対抗する、専門の組織、いわば暗部用の暗部としての役割を持っているわ。私はその一七代目当主よ」

あ、恋華さんがまじめだ。

って、暗部？　暗部……、よくわからないね。

「つまり、ヤクザよ」

「なるほど」

「違うわよぅ！？」

「でもあながち間違ってはない……」

ってことは、恋華さんはヤクザの親分さんなのか。すごいなぁ。

「ま、冗談だけど。一般人に被害が及ばないよう、また他の暗部に情報を取られないようにしている、いわば現代版忍者って所ね」

「あー、なんとなくわかった気がする」

「……まあその説明でいいか。一応私はそういう役回りもあるから、何か困ったことがあればこっちにも相談してもらっていいわよ。ウサギさんと他ならぬ千冬さんの頼みだし」

恋華さんって、千冬さん大好きなのかな。すごい押してくるけど。というか簪ちゃん、その「うっぜぇぇぇ……」って目やめない？怖いよ。

「そういうことだから、私たちバインド・カンパニーとも共闘することがあるってことは覚えておいてね、香織君」

「あ、はい。けど、なんだか話が大きくなってきましたね」

「心配ないわ、ここにはほとんど世界最強が揃っているんだし。不本意ながら生徒会長も役に立ちそうだからね」

「あっ、ひっどーい！　恋華ちゃん傷ついちゃったなぁー……」

「じゃあ織斑先生のところにでもいってくれば？」

「オーケー！　じゃあ戸締りよろし」

く、まで言わずに恋華さんは扉から駆け出していった。寮の方向に。

……急展開過ぎませんか、これ。さすがに疲れた。

「……ガンバ」

簪ちゃん、その優しさが痛いです。

第４６話　泣き落とせ！（後書き）

ということで、若干疲れちゃった香織ちゃん。
いろいろな人が暗躍し始めて、私も混乱し始めました。

第47話　枷

「一之瀬」
「なんです、織斑先生？」

あの事件から数日が経った日曜日、私用で校舎を訪れていた私こと葵は、スーツ姿の織斑先生に出くわした。

「今暇か？」
「まあ、やることは特にありませんが」
「ではちょっとこい。模擬戦だ」
「……いやいやいやいや。話が見えないんですが」

何だこの人、脳筋にしか通じないような会話方法を選択するな。
私は脳筋じゃないぞ。
いろいろやることもあるだろうに、なぜ今模擬戦なんだ？

「お前の肉体スペックは私を超えていることはわかったが、ＩＳでどれほど戦えるのかを知りたい。この学園でお前の相手になるのは私くらいだろうからな」
「それを今やる理由は？」
「先日の襲撃事件も踏まえて、この学園の戦力を明確化させておきたい。いざというときに複数で攻め込まれて、一箇所の戦力が足りませんでした、では話にならないからな」

まあ、理由としては正しいだろうけど……。だからといってせっかくの休みを……。

『まあまあ、やってあげてよあーちゃん！』

「たっちん、するっと出てくるのってどうかな？」

突然目の前に開かれた仮想ディスプレイにそう突っ込む。本当にどこにでも出てくるな、たっちん。まあ天災ってそういうものだから慣れてるけど。

『ごみーん♪　でさ、一応こっちのデータ採りもしたいし、どうかな？』

「……まあ、そういうことなら。それで、どこでやるんです？」

そしてたっちん、てへぺろするな。それは君の妹の役目だ。

……はっ、私はいったい何を……。

「ああ、第一アリーナだ。今日はちょうど誰も使っていないからな」

「わかりました。ＩＳはどっちを？」

「私は『打鉄』を使う。お前はどうする？」

「では私も『打鉄』で」

「わかった。ではいくか」

そんなわけでアリーナへ。

お互いＩＳスーツに着替え、訓練機の『打鉄』を身に纏ってアリーナの中央に向かい合って立つ。

ちなみにたっちんの映ったディスプレイはすでに消えているが、アリーナの監視カメラでモニタリングしてるんだろう。あとは、この『打鉄』にハッキングしてデータ盗んでるか、コアネットワークから直接データもらってるか。どれもあり得るからすごいな……。

「準備はいいか？」

「はい。ルールはどうします？」

「シールドエネルギーが尽きるか、どちらかのギブアップで終了だ。

システム、カウントダウン」

――カウントダウンを開始します。戦闘開始まで、五、四、三……――

管制システムの機械的な音声が響き、今までの暖かな雰囲気が消える。

そこにあるのは、互いの隙を見出し、鋭く尖った一撃を加えんと牙を研ぐ、二人の闘志。

――二、一、戦闘開始――

言葉の意味が伝わる前に私と彼女は地を蹴った。

一息で音速を超えて斬り込んだ互いの刃がぶつかり合い、大きく甲高い金音を奏でる。

なるほど、やはりＩＳでは全力を出し切れないか。一瞬、極超音速を越えさせようかとしてみたが、専用機でもないこれでは間違いなく耐え切れないだろうと思いやめた。一撃で自分のＩＳを大破させました、となれば少々カッコがつかないだろう。

「はっ！」

考えながらも、動くことはやめない。壊れない程度に力を制御（セーブ）して刃を振るい、織斑先生の『打鉄』を破壊しないようにする。

繰り出される刃を次々に受け止めると、今度はこちらから打ち込んでいく。

織斑先生の打ち込みの速度は一秒間にせいぜい三回、これに耐えられるのなら、もう少し無理してもＩＳに影響はないだろう。

「では、いきます」

宣言するようにそう言って、手に持った刀を片手で打ち込んでいく。一秒間に一三回、無理をすれば倍以上だが、それをする必要はないだろう。というかそれをやったらＩＳがもたない。

「くっ！」

織斑先生は何とか凌いでいたが、やがて凌ぎきれなくなったのかバックステップでこちらから距離をとった。そこで私もようやく刃を仕舞う。

『打鉄』の装備は近接用ブレードと短距離射撃用拳銃（ハンドガン）のみ、そして離れた織斑先生の手にはそのハンドガンが握られていた。

「まさか剣で負けるとはな。いくぞっ！」

「律儀に宣言しなくていいのに……」

ぼやきつつ、ハンドガンの銃口から吐き出される弾丸をブレードで斬り落としていく。射撃速度はまあまあだが、この学園の誰よりも精確に狙いをつけていることだろう。しかも、三分の一ほどは意図的に位置をずらした弾丸を撃ち込んできている。

「なら、私もこっちで対応しましょうか」

片手でブレードを操りながら、もう片方の手にハンドガンを呼び出し、そっち側を前にすると同時に半身を後ろに下げ、こちらへ迫りくる弾丸に狙いをつけ、引き金を引く。

次から次へと弾丸を弾丸で撃ち潰しながら、時折その隙間を縫って本体の織斑先生に弾丸を放っていく。

「やれるだろうと思ったが、やはり相殺してくるか」

「この大きさの弾丸なら数百倍余裕ですね」
「私も斬ることはできるが、撃ち落すのは専門外だな」
「で、これでは決着がつかないのですが」
「……よし、私が許可を出す。全力で戦え。束、聞こえてるな？　打鉄が大破した場合は今晩修復だ、出て来い」
『私を鼻で使えるのはちーちゃんくらいだねっ！　まあこっちもデータ採りできるし、その代金分は働いてあげましょうっ！　にひひーっ』

音声だけのたっちんに苦笑いを浮かべながら、私はハンドガンを収納（クローズ）する。
次の瞬間には、残った弾丸をすべてブレードの腹で叩き落し、織斑先生の懐に飛び込んでいた。

「では、失礼っ」

ブレードを切り返すこと、一八回。一秒半程度で繰り出したその連続攻撃に、織斑先生のＩＳのシールドエネルギーは一瞬で消え去る。ついでに私の打鉄もブザー音とともに停止した。
……やっぱり無理だったか。一五回辺りで限界らしい。やはりＩＳは伽にしかならないか。少なくとも、このＩＳでは。

「……ふぅ。やはり私でも勝てないか。ＩＳの反応速度を超えるというのは滅茶苦茶だな」
「織斑先生こそ、ＩＳをつけない方が強いでしょう？　少なくとも訓練用では伽にしかならないはず」
「さてな。束、データ整理しながらでいいからとっとと来い」
『はいはーい。あーちゃん、今度会社に来るときまでに武装作っておくからねん！』
「ええ、よろしくね」

武装、専用機ではなく私が生身で使うものだ。
しばらくは専用機を持たず、生身で戦うことにした私がそのことをたっちんに伝えたら、「じゃあ生身で使う武装作るね！　後でデータ採りさせて！」ということだったので、丁度よかった。短時間とはいえ休みを潰されるとは思わなかったが。
しかしたっちん、指名手配されて全国的に探し人なのに、ひょこひょこ出てくるな。まあ、仕方ないか。たっちんだし。
そんな感じで休日が終わった。ちなみに、翌日には打鉄は完璧に直っていたらしい。

「おー、おーおーおー！　すっごいねさすがだよさすがの私でもこれほどとは思ってなかったって言うかもちろん想定はしていたけど想定外の予想外の範囲外だね！　うふふふ、うふふふふふふ！　ハル、ハルハルハールルーゥー！」
『はいはい、なんですかお母様』
「今すぐ今までの武装プランを片っ端から引き出して！　使えないってポイしたやつもバックアップあるから！」
『はい、ただいま』

月面コロニー『アルカディア・？』。そのＩＳ建造用アリーナで、束は一人狂喜乱舞していた。
葵の乗っていた打鉄から採れたデータは案の定常軌を逸したもの

だった。腕力、脚力、握力、人間のスペックとしてはあり得ない数値ばかりが並び、そしてそれすらも手加減したものだと知っている束は、その数値で扱える武装の二段階ほど上の武装を構想していた。

ハルは束の言葉通りにデータを引き出すと、彼女の前に羅列していく。

「やっぱり身に着けるタイプがいいよねとすると篭手とか甲冑とかでもそれだと武装って言うか防御用って感じだから剣とかにしとこうかなでもでも斧とか槍とかでもいいよねぐぬぬ決めづらいよあそうだ決められないなら全部作ってしまえばいいじゃないの精神が私にはあるじゃない的な！　ということでハル、全部作るよ！」

『はい！』

高らかに宣言すると、彼女はハルとともに製作に取り掛かった。

人外仕様の武装一覧が作られるまで、もう少しである。

さて寝ようかとしたとき、私の携帯端末に着信があった。こんにちは、鈴よ。ちなみにこの端末は束社長お手製の超高性能端末で、携帯より便利なのに携帯より小型。しかも深海だろうと大気圏外だろうと使用可能というスペシャル仕様よ。

「もしもし」

『もしもし、鳳鈴音（ふぁん・りんいん）元候補生ですか？』

端末から聞こえてきたのは、懐かしい女性の声。中国の代表候補生の管理をしている楊麗々（ヤン・レイレイ）さんだった。

「あれ、楊候補生管理官。なんで突然？」

『番号は変えていなかったようですね。そろそろ『キャノンボール・ファスト』の時期でしょう、こちらで開発途中だった高機動パッケージのデータを送ります』

「でも、私もう中国所属じゃ」

『これは貴女の『甲龍（シェンロン）』専用のパッケージです。貴女の所の社長なら簡単に完成させるでしょう。理由は知りませんが、上層部の指示ですから』

今まではガッチガチの軍人さんだと思ってたけど、彼女の言葉にはどこか柔らかな響きがあった。

……なんだか、印象と違うかも。

『それに』

一度言葉を区切って、楊さんが続ける。

『貴女の事は、嫌いではありませんでした。指示にはきちんと従い、自分を消さず、決して天狗になることもない。今まで指導してきた者の中で最上の部類に入るでしょう』

「楊さん……」

『……私情が入ってしまいました。ともかく、頑張りなさい。凰鈴音』

「楊さっ」

ぶつっ、と通信が切れた。

……楊さん、意外と私のこと良く見てくれてたんだな。向こうにいるときには怖いってイメージしかなかったから。

ともかく、キャノンボール・ファストに向けて、束社長にこれを仕上げてもらおう。

端末で回線を開き、私はメール画面を開いた。

第４７話　枷（後書き）

お姉ちゃんがんばる、束さん大喜び、楊さんデレる。以上の三本でお送りしました。

あれ、主人公出てないな。

次回から本格的に６巻の内容に入ります。今日買えたからね！

第４８話　身支度（前書き）

やべえ、六巻って意外と内容薄い……？

第４８話　身支度

「はい、それでは皆さーん。　今日は高速機動についての授業をしますよー」

我がクラスの副担任、山田真耶先生の声で、今日の授業は始まった。

ちなみに、今朝はセシリアさんが一夏の部屋に泊まったとかで大荒れだったのですよ。一夏はぐったり、セシリアさんはお肌つるつる。まあ、そういう行為には及んでないでしょう。一夏があれだから。うん。

「この第六アリーナでは中央タワーと繋がっていて、高速機動実習が可能であることは先週言いましたね？　それじゃあ、まずは専用機持ちの皆さんに実演してもらいましょう！」

山田先生の言葉でそこを見ると、一夏とセシリアさんが立っていた。

「まずは高速機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備したオルコットさん！」

四基のＢＴ射撃用ビットと二基のミサイルビットを全て脚部パーツに連結して、スラスターとして使用することで高速機動を実現させているらしい。さながら、それはスカートのように見えてなかなかにお洒落である。ところどころゴツゴツしていたり尖っていたりするけど。

セシリアさんはあの襲撃事件のときに『サイレント・ゼフィルス』と戦って、負けてしまったらしい。

サイレント・ゼフィルス、元々はＢＴ兵装を積んだイギリスの第三世代型ＩＳで、ブルー・ティアーズのデータを基盤とした二号機でもある。そのサイレント・ゼフィルスの操縦者が使いこなして見せた偏光制御射撃（フレキシブル）が使えないと悩んでいるらしい。

私は、たぶん一生しない悩みだろうなぁ。ＢＴエネルギーはよくわからないし。

「それと、通常装備ですが、スラスターに全出力を調整して仮想高速機動装備にした織斑君！　この二人に一周して来てもらいましょう！」

クラスメイトから飛んでくるがんばれーの声援に、二人は軽く手を上げて応えた。

少しして、山田先生がフラッグを掲げる。

「では、……三、二、一、ゴー！」

フラッグが振り下ろされると同時に二人が一気に飛翔し、そこから加速して音速を超える。

瞬く間に小さくなっていく二人を眺めていると、ちょんちょんと腕を引かれた。振り向くと、そこにはラウラの姿が。

『どうしたの？』

『香織は、超高速戦闘は行ったことがあるのか？』

『ううん、ないよ。福音のときにマッハ二ちょっとは出したけど、戦闘はほぼ無理だった。まあ、あの時はＩＳとしての形すら成してなかった頃だけどね。だから、たぶん初心者』

『そうか。では、私が教えてやろう』

『ありがとう、ラウラ』

軽く微笑むと、ラウラはたじろいだ様に顔を赤くする。可愛いなぁ、小動物チックで。

そんなことを考えていると、周回を終えた二人が戻ってきていた。

どうでもいいですが山田先生、揺れてます。そして視線が釘付けです。などと思っていたら、千冬さんが手を叩いて全員の意識を集める。

「いいか。今年は異例の一年生参加だが、やる以上は各自結果を残すように。キャノンボール・ファストでの経験は必ず生きてくるだろう。それでは訓練機組の選出を行うので、各自割り振られた機体に乗り込め。ぼやぼやするな。開始！」

その掛け声で皆がばらけていく。

キャノンボール・ファストは、要するにＩＳ同士でのレースだ。ただし妨害ありの。

市のＩＳアリーナを使用するイベントで、本来なら国際大会も開かれる競技だけど、ここＩＳ学園ではちょっと事情が違うらしい。

今までの襲撃事件のこともあり、今年は本来不参加の一年生も参加することになっている。だから、今日はその特訓第一回目というわけだ。

「よーし、勝つぞー」

「お姉さまにいいとこ見せなきゃ！」

「勝ったらデザート無料券！　これは本気にならざるを得ないわね！」

ものすごく気合が入っている女子たちに比例して、教師の皆さんのやる気も上がっている。やはりデザート無料券と織斑姉弟が効いているのだろうか。

誰だって、尊敬する、もしくは好きな人の前ではいい格好したい

ものだ。

「じゃ、ラウラ。よろしく」

「ああ、よろしく頼む。それで、香織はどうやってレースに出るつもりだ？」

「増設スラスターか、機体出力調整かだね。梟自体、高速戦闘にも使えるからパッケージはないし」

「そうか。私はドイツの姉妹機の高機動パッケージを調整して使用する。まあ、基本的には増設スラスターになるな」

なるほど……。

でも、この場合私は機体の出力調整かな。出力自体はあるし、スラスターは不用意に増やすとバランスとれなくなりそうだし。

そのことを伝えると、ラウラは小さく頷いた。

「では、どれをスラスターにするのか、攻撃に回すのか、いろいろ考えなければな」

で、それから数日。私はラウラに猛特訓を受けていた。

ふーちゃんは特注の高機動パッケージのテストで休日は会社に、簪ちゃんは『真打（しんうち）・鉄（くろがね）』に展開装甲を搭載するとかで月に行っているので不在なのです。

「そこだ、そこで曲がれ！　よし、そのままゆっくり速度を上げていけ！」

「よっ……、と。ここで……、こう！」

カーブの前に力を抜いて減速気味にカーブに突っ込むと、角度を変えたところで急加速。以前ゲームセンターでやった、ＶＲレーシングゲームを思い出すな。あれを全体的に加速させたような感じだ。

ＰＩＣのおかげで空気抵抗も感じずにスピードを上げていくけれど、コースアウトしそうになるとかならず警報が鳴り響くから速度と進路には注意しないといけない。

『初日より大分上達しています。この分なら、大会までに十分なタイムが期待できそうですね』

『ありがと、イヴ』

頭の中で礼を言いながら、コーナーを攻める。本番はこれの他に相手からの妨害の対処と相手への妨害の両方をこなさなければいけないのだから、大変だ。

それでも、生き死にを賭けた戦いでないだけマシというものだろう。

そんな訓練を続けること数時間、日も暮れてきたところでその日の特訓は終了となった。

「疲れたぁ……」

「大分動きがよくなってきたな。しっかり食べてゆっくり休めよ」

「うん、ありがとうラウラ」

「気にするな。嫁のサポートも夫の役目だ」

「あ、あはは……」

それはまだ続いていたのでございませうか。

そんな感想とともに、今日は終わりを告げたのであった。

「どう、束社長？」
「大体は完成済みみたいだねー。今の『甲龍』にこれ以上のものつけようとしてもオーバースペックになるだけだし、それだと扱いきれないでしょ？」
「そうね……。弄くれるところある？」
「全部弄くれるけど、それはだめ？」
「ダメー」

ところ変わってここはＢＣ本社。
改造ルームと化した整備室で言葉を交わしているのは、束の考案したＢＣの制服に身を包んだ鈴と、同じくその制服にウサ耳を装着した束だった。
束曰く「宇宙の会社には制服が必須なのだよ！」という理由から考案されたこの制服は、ベージュの下地に白いラインをあしらい、一見すると普通のスーツのように見えるものである。服はもちろんＩＳの技術や宇宙開発用のなんだかを流用しており、マシンガンをばら撒かれようと傷一つ付かず衝撃も通さない超防弾、防刃仕様なのである。
ちなみに、胸元には社員証が貼り付けられるようになっており、人目で名前と部署がわかるようになっていた。無駄に豪勢な服だが着心地は抜群で、下はズボンとスカートの両方が選べるようになっている。
余談だが、鈴はズボン、束はスカートである。余談だが。

「じゃあ、武装を改造しとこっか！　後々展開装甲も積みたいしー……、それに関してはかんちゃんが一歩リードだね！」
「オッケー、じゃあよろしく頼むわね」
「はいはーい、任せなさいっ！」

嬉々として二五個のモニターに向かい、三八枚のキーボードを移動式ＩＳラボ、『吾輩は猫である（名前はまだない）』の四本のメカアームを加えた六本の腕で叩いていく。

その姿にまるで無理している様子はなく、むしろ余裕すら感じられた。ともすればそれは片手間で済ませられそうなものだったが、鈴はそれに圧倒されることもなく静かに整備室から出て行く。

ここ最近、鈴の周辺に現れる大人は規格外ばかりだ。織斑千冬は中国に一度戻る前から半分人外の域に足を突っ込んでいるとわかっていたが、まさかそれ以上の規格外がぞろぞろ出てくるとは思いもしなかった。

それゆえに、高々二桁程度の部品の電子機器を操る程度の芸当は、規格外筆頭の束にとっては当たり前のことであり、鈴が驚く要素などまるでなかったのだ。

尤も、鈴本人はそのことにやや頭を悩ませているのだが、平然と量子変換転送装置などという、聞きようによっては物騒なものを利用している彼女もその異常が常識になりつつあるのだろう。

『一息入れますか？　鈴』

「ああ、ハル。そうね、ウーロン茶でも淹れてもらえる？」

『はい、では食堂へ』

会社の事業のほとんどを取り仕切っている『ＨＡＬ－３０００』に応え、鈴は軽い足取りで食堂の扉を潜る。

社内は一面銀風景で、一番近い言葉では『近未来』といったものだろう。

どちらかと言えばひんやりとしたイメージの椅子に腰掛けると、意外にもそれは冷たいと感じるほどの温度ではなかった。

少し待つと、天井から鈴用のマグカップを掴んだメカアームが降りてきて、ゆっくりと鈴の前にマグカップを置くと天井に引っ込ん

でいく。
　最初はこれにも戸惑ったものだが、今では当たり前のようにお茶を飲めるくらいにまで適応していた。

「ふぅー……。ところでハル、簪の作業は順調なの？」
『はい、もうしばらくするとお帰りになられると思いますが？』
「そう。じゃあ、ちょっと見に行ってくるわ。片付けお願いしていい？」
『はい、やっておきます。行ってらっしゃいませ』

　丁寧な言葉遣いで告げたハルに軽く微笑むと、鈴は残りのウーロン茶を一気に飲み干してからカツンッ、とテーブルに置き直して席を立つ。
　普段つけている『甲龍』の待機状態、黒のブレスレットは高機動パッケージを最高の状態に持っていくために、そしてついでの整備のためにと束に預けてあるため、普段はあったその感触がなくなっていることに、なんとなく不安感を覚えた。
　それを振り払うようにタタッとワープ装置にはいると、手元の装置を操作して月のコロニーに設置してあるワープ装置へ接続、数秒のカウントダウンの後に鈴の姿はそこから掻き消えた。
　そしてその直後、月のワープ装置へと到着した鈴は、簪がいるというＩＳ建造用アリーナに向かう。
　重力は月と同じになっているため、軽々と身を宙に浮かしながら走って、もとい跳んでいく。
　薄く青の塗装を施されたアリーナの扉を潜ると、そこには『モーティブ』を起動して『真打・鉄』の装甲を取り替えている簪の姿があった。

「簪、お疲れ」
「あ、鈴。うん、お疲れ」

「どう、順調に行ってる？」
「調度背面の装甲と脚部の装甲のパラメータ同期が終わったところ。何か用事？」

普段は常につけている小型ディスプレイ用眼鏡を外し、鋭い視線で仮想ディスプレイを睨んでいた簪は、訪ねてきた鈴を見ると目じりを落としてやんわりとした笑顔を作る。
その姿が香織にどことなく似ていて、鈴は抱きしめたくなる衝動をぐっと堪えた。傍から見れば立派な変態さんである。

「用事ってわけじゃないけど。にしてもいまだに信じられないわね、ここが月だなんて」
「……ねえ、コロニーの端っこ行ってみる？」
「時間はいいの？」
「後は片付けだけだから、大丈夫」
「じゃ、行ってみますか！」

パンッ、とハイタッチすると、反動でぐるんと回転しそうになって慌てて後方宙返り。月の重力の弱さはここでも現れていた。
簪も同様にして体勢を立て直すと、改めてアリーナを出て探検を始めることにした。

結局、その後二人は三時間近くアリーナを駆け回り、たっぷりと月を堪能したという。
未知の世界は人を魅了してやまない。彼女たちもその一人なのである。そして遅くなりすぎてハルに心配されたのは彼女たちだけの秘密である。

第４８話　身支度（後書き）

月を駆け回る少女たちのお話でした。
次回は本番、鈴と簪の高機動仕様お披露目です！

第４９話　キャノンボール・ファスト

やってきました、キャノンボール・ファスト本番。
現在は二年生のレースが行われていて、お姉ちゃんも出場している。見た感じぶっちぎりで『走ってる』。もう一回言おうか、『走ってる』。
皆唖然としてるけど、私はお姉ちゃんの速力に付いていけているＩＳの方にびっくりだ。

「違う……。あれ、バチバチいってる……。もう脚部パーツが機能してない……」
「えっ」
「つまり葵義姉さんは使えないＩＳ抱えて走ってるってこと！？」

頭を振るふーちゃんだけど、これは最早慣れるしかないのですよ。
そうかー、だからお姉ちゃんは一番最後のレースを希望したのか。
そりゃ無茶できないもんね、めっちゃ怒られそうなんだけど。
なんて思っている間に二〇〇メートル以上離してお姉ちゃんが単独トップゴールを果たす。……まあ、勝ったからいいの、かな？

「相変わらず義姉上は滅茶苦茶だな」
「まあ、お姉ちゃんだし」
「そうね、義姉さんだもんね」
「お義姉ちゃん……だし……」

はい、満場一致で仕方ないという結論に達したのでお話終わり！

「それでいいのか……」
「これに納得したら負けな気がする」

「しかし、なぜあれほどの方が燻っていらっしゃるのかしら……」
「そこなんだ、突っ込むところ……」

上から一夏、箒さん、セシリアさん、シャルロットさんです。仕方ないね！

で、次は私たち一年専用機組のレースなので、全員移動なのです。というか、全員すでにＩＳを纏って待機してるからね。

「それにしても、なんかごついな。鈴のパッケージ」
「もともとごつい奴を社長が更に改造したからね。速度だけなら簪にだって負けないわ」

ふーちゃんは、中国で開発されて束ちゃんが仕上げた高機動パッケージ『暴風（バオ・フェン）』を装備している。増設スラスター六基に全身に防御用装甲が追加され、生半可な攻撃ではびくともしないほどの強度を誇っている。更に衝撃砲は煌々と紅く煌いており、何か特別仕様になっていることが伺えた。ついでに随時ふーちゃんの周りをびゅんびゅん飛び回っているけど、あれはふーちゃんの意志で動くんだろう。

「私を忘れてもらっては困るな。戦いとは流れだ、全体を支配するものが勝つ」

ラウラはドイツから送られてきた三基の新型増設スラスターを装備しており、速度的には十分だろう。そこにラウラの操作技術が加わるのだから、油断ならない。

「流れは、断ち切るものだよ……」

簪ちゃんはと言えば、恐ろしいことに背面装甲と脚部装甲を全て

展開装甲に取り替え、《朱鉄（あかがね）》の灰熱エネルギーを展開装甲で取り込み、常時瞬時加速状態（イグニッション・ブースト）を作り出すらしい。しかもそれは超音速機動状態でのことだから、通常の云十倍の加速があるだろう。

しかも展開装甲によって脚部には何か武装を仕込んでいるとかで、そちらも恐ろしいところだ。

「私と同じ展開装甲……、油断ならない相手だな。簪、負けんぞ？」

「……うん」

箒さんと簪ちゃんが、互いの眼を見てにやりと笑う。おお、ライバル同士のアイコンタクトと言うやつか！？　いいなー、私もやってみたいものだ。

あ、のほほんさんとはできるけど、ライバルじゃないし。

私は中の出力を調整して使用するだけだけど、一次移行（ファースト・シフト）しただけあって速度もコントロールも抜群だ。負けるつもりはない。

「みなさーん、準備はいいですかー？　スタートポイントまで移動しますよー」

山田先生の声で、私たちはマーカー誘導に従ってスタート位置へと移動した。

この独特の緊張感、命を欠けなくていい戦いって、なんて良いんだろうね。……それはそれで気持ち悪いけど。

『それではみなさん、一年生の専用機持ち組のレースを開催します！』

アナウンスを合図に、私たちは一斉に高速機動用のハイパーセンサー・バイザーを下ろす。私以外。

梟にハイパーセンサー・バイザーは付いていない。ハイパーセン

サーはあるけど、通常状態で高速機動が可能なスペックのため、バイザーはないのだ。

――三――

スラスター音が鳴り響き、辺りに満ちる。

――二――

じわりと汗が出てきて、軽く頭を振った。

――一――

よし――、

――一……、ゴーッ！――

ドンッ！　と急速な加速で景色が飛び、一瞬一夏が戸惑った様子を見せる。もちろん、こっちはそんなこともなく全ての情報を取り込んで的確なコースに入っていく。

練習で何度も繰り返したスタートダッシュの成果が出て、出だしは上々。後はここからだ。

先頭はセシリアになっていたが、そこへふーちゃんが突っ込んでいく。

「オラオラオラァ！　当たると痛いわよォ！」

二基の衝撃砲から放たれる見えない弾丸は、予想以上の勢いで周囲の壁を削っていく。それと共にセシリア目掛けて撃ち放たれたそれは、見事にセシリアのスラスターにダメージを蓄積させていって

いた。

「くっ、さすがですわねっ！」

「もちのロンロン、あの人に手を加えてもらって、負けるわけにはいかないでしょうが！」

「私を、忘れるなよっ！」

そこへ、加速したラウラの大口径リボルバー・キャノンが撃ち込まれる。しかし、強化された防御の前に、弾丸はすげなく防御されてしまう。ダメ押しとばかりに衝撃すら吸収して見せたそれに目を見張ったラウラは、目標変更して防御装甲のない部分へと銃弾を浴びせていった。

「香織、ぼさっとしてると抜いちゃうよ！」

「させませんよ。はぁっ！」

ウィングビットを展開、肉薄してきたシャルロットさん目掛け次々と射撃を開始する。ちなみに、これはＢＴ兵器です。……うん、この前ＢＴとか良くわからないしって言ったのほんとだからね？だからエネルギーとか曲げられないし。

ちなみに、私のＢＴエネルギーは黒く輝いています。ちょっと不気味だけどかっこいいからいいや。

もちろん、ビットだけで落とせるとは思っていないけど、それでも足止めには十分すぎる！

「くっ、強いね！」

「それはどうも！」

その一方で、一夏と箒さん、そして簪ちゃんの方も接戦になっていた。

一夏の《雪片弐型（ゆきひらにがた）》と箒さんの刀は互いにレーザーを撃ち、あるいはそれを打ち消しながら戦っている。その中に、たびたび斬り込んでいるのは簪ちゃんだった。

《朱鉄（あかがね）》を片手で振り回しながら、恐ろしい速度で変幻自在に切っては離れ、切っては離れを繰り返している。……あの、すっごい怖いんですけど。

《朱鉄（あかがね）》はまだ発熱が初期状態だからいいけど、時間が経てば経つほど威力は上がる。早いところ離れたほうが良いかな。

そんな感じで一週目を終えた私たちだったが、唐突に穏やかな戦いは終わりを告げた。

上空から降り注いだＢＴエネルギーがトップ集団を撃ち抜かんとし、それに対してふーちゃんが装甲を盾にして防御する。さすがと言うべきか、ほとんどダメージはなさそうだった。

「!?　なんだっ!」

「あれは……『サイレント・ゼフィルス』！」

「それに『灰狼（グレイ・ウルフ）』まで!?　どうなってんのよ!」

一夏、セシリアさん、ふーちゃんの言葉で、全員が意識を戦闘へと切り替える。

――亡国機業（ファントム・タスク）の襲撃だった。

「今度は何が目的なの?」

「あら、随分と嫌われてしまいましたわね。今日はエムちゃんのお供ですわ」

警戒心を露わにして問うた香織に、『灰狼』の操縦者、キティは拗ねたような顔から一転、朗らかな笑みを浮かべてそう答えた。

香織の周囲には先頭集団に混ざっていた鈴とラウラ、後方で斬り合いを演じていた簪が集まっており、自然と『灰狼』は香織たちが、『サイレント・ゼフィルス』は一夏たちが担当するようになっている。

「まあ、なんでもいいわ。よくもぬけぬけと顔を出せたものね」

「ここで仕留めさせてもらおう。これ以上手出しされても面白くない」

「そういうことだから……」

一斉に武装を展開、臨戦態勢をとる。油断すればいかに装甲の厚い今の鈴ですら、たやすく落とされるだろう。相手はそれほどの実力者であり、香織たちはそれに対抗するだけの技術をいまだ身につけるには至っていなかった。

対するキティはといえば、実に楽しそうにカラカラと笑い、それからようやく武装を起動させた。腕部装甲に直接取り付けられた三本の爪のような、《ウルフズ》という名の近接兵装。

カチンカチンと互い違いに爪を打ち鳴らしながら、直後。

瞬く間もなく『灰狼』は距離を詰め、その鋭利な爪の切っ先を振るい突き立てた。

「ぐっ！？」

「香織！　このぉ！」

「あはは！　今の衝撃砲程度の速度では、この子は捕らえられませんわよ！」

縦横無尽、まさしくその言葉の通りに、キティは壁も天井も床も、重力など知ったことかと言わんばかりに駆け回り跳び回り、衝撃砲から吐き出される無色透明の弾丸を悉く回避していっていた。

「相変わらずちょこまかと飛び回りおって！　はっ！」
「っと、止められてしまいましたわ」
「これで、終わりっ！」

がくんっ、と唐突に灰狼の動きが止まる。中空で不自然に停止したそれを留めているのは、ラウラの操る『シュヴァルツェア・レーゲン』から発せられるＡＩＣだった。
いい的となった灰狼目がけ、今度はそれなりに排熱量が増した《朱鉄》を構えた『真打・鉄』が突っ込んでいく。
一息で斬り潰せるというところまで迫ったところで、キティはその頬を吊り上げ妖艶な笑みを浮かべた。

「で・も♪　《狼の咆哮（ウルフ・ハウリング）》！」
「また武装特性か！」
「何あいつ、そんなものまで使えるわけ！？」

襲撃事件の折には腰を折られて結局その正体を露わにすることはなかった武装特性が、今度こそ発動された。
狼の遠吠えのような奇怪な音が鳴り響く中、ＡＩＣが一瞬で破壊され、その危険性に気付いた簪は何とか後退する。

「バカなっ！？　ＡＩＣが！」
「《ウルフズ》の武装特性は超音波攻撃、停止結界程度の弱い力で留めることはできませんわ？」
「なんか話し方がむかつくわね……！　《龍砲》！」

あっけらかんと言い放ち、鈴の放ってくる龍砲をまるで見えているかのようにその爪で打ち払っていく。
見たところシールドエネルギーは減っていないため、鈴は早々に龍砲での射撃を諦めた。止められるとわかっていてリソースを消費するほど脳筋ではない。
その時、静かに香織が羽を開く。

「サンプリング完了、あれは破れるよ」
「ほんと!?」
「うん。梟、行くよ――っ!」

言葉が終ると共に四枚の羽根が振るえ、共鳴する。
そこで生まれた鳥のさえずりは、確かな力となって場内を駆け巡っていった。

「《狼の咆哮》を《とりのさえずり(バードエイク)》で中和しているのですわね？　さすがお兄様、サポートＡＩのレベルも高いご様子で」
「……どこまで知ってるのかな？」
「大体のことは知っていますわよ？　まあ、それはいいですわ。戦いましょう、お兄様！」

超音波を掻き消され、しかしキティに弱った様子はどこも見当たらなかった。
爛々と戦意に瞳を輝かせながら突っ込んでくるキティを迎え撃つべく、香織は《夜鷹(よたか)》を展開(オープン)して構える。
それと共に、鈴の衝撃砲、ラウラの砲撃、簪の《蒼鉄(あおがね)》の弾丸が飛んでくるキティ目掛け撃ち出された。

「はあぁぁぁ！」

「あはははは！」

三人の砲撃とも呼べるそれを身に受けてなお、キティは健在だった。

『灰狼』から煙を立ち上らせて『梟』と打ち合い、その速度は瞬く間に上がっていく。

戦いは、更に苛烈さを増していく。その場にいる全員がその予感を感じていた。

第４９話　キャノンボール・ファスト（後書き）

レース回なのに半分くらい戦闘でござる。
次回も戦闘続きです。

第５０話　二度目の襲撃戦

香織たちがコースで戦闘を行っていた頃、葵は一人換気口から管制室へと向かっていた。

二年生と言えど専用機がなければただの一般生徒であり、その戦力は大きく減少する。よって二年生も実技成績上位者を除いて非難しており、その実技成績上位者も非難誘導に当たっているのだが、葵にとってはそんなものはただの規則の域を出なかった。

「あの二人が来ているなら……、彼女も必ず」

それは殆ど確信ですらあった。

換気口の格子窓を音を立てずに外して中を覗くと、管制室は大わらわになっていた。

しかし、それは葵にとって好都合。音もなく彼らの背後に降り立つと、一人目を手刀を後頭部に叩き込むことで気絶させ、もう一人を上段蹴りで気絶させる。

一瞬で管制室を制圧すると、葵は迷わずコンソールへ向かった。

「上空部分のシールドバリアが破られてる……、あそこから侵入したのか。なら……！」

手元のコンソールのキーを何度か叩くと、配列された沢山のボタンのうちの一つを押し込む。すると、修復完了の文字と共にシールドバリア強度が最高まで引き上げられたことを示した。

それを確認した葵は、次に監視カメラの映像を次々に拡大していく。やがて、目当てのそれを見つけた葵は監視カメラの番号と、場内の監視カメラの番号が書き込まれた地図を見比べて、その位置を頭へと叩き込んだ。

「ビンゴ、やっぱり来てたのね――」

管制室を出てひた走りながら、葵は呟く。

金色の髪にそれを引き立たせる色のスーツ、人としての魅力に満ち溢れた彼女の名を呼ぶ。

無表情に、あるいはその中に苦々しげな色を隠して。

「――スコール」

「ふふ、エムもキティもさすがというべきかしら、あれだけの専用機持ちを相手に、よく立ち回るものだわ」

しかし、と彼女は続ける。

人気のなくなった客席の中で、優雅にもその椅子に腰掛けて。

「エムの方の相手は大した事ないわねぇ。篠ノ之博士の手掛けた機体、それも一機は第四世代。もっといい勝負になるかと思ったけど……」

「あら、イベントに強制参加しておいて評論家気分かしら」

「ＩＳ『モスクワの深い霧（グストーイ・トゥマン・モスクヴェ）』だったかしら？　あなたの機体は」

「それは前の名前、今は『ミステリアス・レイディ』と言うの」

「そう――」

振り向くと同時に、ゆっくりと手にした鞘から刃を抜き放つ。
スコール、彼女が自分自身の感覚を信じるならば、眼前の少女は人の領域から外れかけていた。故に、ＩＳを出してこない限りは生身で対応する。完全に人から外れた人を相手取るために強くなったその体は、未だやや不完全な『天災』を相手取るには十分であった。

「ならば、潔く散りなさい。そのＩＳを動かす前にね」
「……貴女は」
「……？」

突然俯いた楯無は、ぶつぶつと呟いていたかと思うと前髪を垂らして目を隠しながら突然スコールを見る。

「貴女は、千冬さんの邪魔をするのかな？」
「……そう、それが貴女というわけね。そうね、私が動けば彼女の仕事は増えるわ、どうする？」
「――なら容赦しねェな。《恋愛中毒（ラブジャンキー）》更識恋華、愛し尽くして枯らし尽くして嬲り尽くして殺し尽くしてやるわ」

目の色を変え、楯無もとい恋華がそう声を荒げた。
姿かたちは変わっていないというのに、雰囲気はまるで別人。それこそ仮面を付け替えた、否、仮面を外した彼女の姿なのだろうと、スコールは睨む。

「準備はいいかしら？」
「ええ、いつでも？」
「それでは――」

刹那、ドンッ！　と空気の押し出される音と共に二人はその力を

ぶつけ合う。
びりびりと大気が震え、最大まで引き上げられたシールドバリアですらギチギチと悲鳴を上げる。その中にあって、台風の目である彼女らは次々に刃と拳をぶつけ合っていた。

「本当に、滅茶苦茶なのね！　天災と言う人種は！」
「口を開くな言葉を発するな息をするなッ！」

どこか楽しそうなスコールとは対照的に、憎々しげな色を映して吐き捨てる恋華。
人から外れたものと戦うために人から外れかけた女性と、人であることを自ら捨て去った少女の戦いが更に加速せんとした、その直後。

「どけ、《恋愛中毒》」

ぞわりと、怖気立つ声音がその耳に音として伝わった瞬間、恋華は咄嗟にそこから飛び退いていた。
その直後に、一瞬前まで恋華が立っていた場所が破裂し、そこから一人の女性が飛び上がってきた。

「スコール、待たせたな。貴様の相手は私だ」
「葵ちゃん……、来てくれたのね。ええ、死合いましょう」
「待ちなさい、こいつは私が殺すのよ」
「貴様はコースの一年を助けろ。まだ未熟な彼女たちでは太刀打ちできないだろう」

その言葉に恐ろしい重圧を感じた恋華は、小さく溜め息を吐くとごねても仕方ないと考えたのか、葵の開けた穴を通って下へと降りていった。

確かに、恋華でもスコールを捕まえることはできただろう。だが、その場合恋華はスコールを間違いなく殺してしまうため、情報を引き出すことができない。そのぐらいならば、腕の一本でも奪っておとなしくさせられる葵の方が彼女の相手には適任だった。

それに、恋華はまだ天災となってから格上の存在との戦いを経験していない。その初戦がスコールでは荷が勝ちすぎていた。

「……行ったか」

「ええ、行ったわね」

二人してそう呟いた、そう互いが認識した瞬間、殺気にも似た色濃い闘気を放つ。

あまりに濃厚なそれは周囲の椅子や床をひしゃげさせ、どこからか亀裂の入る音すら聞こえてきた。

「安心しろ、監視カメラはここだけ止めてある」

「そう。なら安心して戦えるわね」

足場を確保するように踏ん張ると、べこりとその足元が円形に陥没した。

その刹那、二人は一息で互いの攻撃圏内に飛び込むと、スコールは元々持っていた刀で、葵はどこからか取り出した刀で打ち合う。それによって生み出された衝撃波で今度こそ、周囲に亀裂が走っていく。

一瞬にその一〇倍以上の打ち合いを繰り返す二人の感覚は、その一瞬ごとに鋭敏になっていく。

どこまでも鋭く、そしてどこまでも広くなっていくそれを感じながら、二人は確かに自らの刃から鳴った亀裂の音を聞いた。

「はぁっ！」

「くっ！」

葵の狙い澄ました一撃が確かにスコールの刃を捕らえ、パキリと砕ける音と共にスコールの刀が根元から折られ、吹き飛ばされる。
壁まで一直線に飛ばされたスコールは、そのまま壁にヒビを入れる勢いで激突した。

「かはっ……！」
「……ちっ、監視カメラの範囲内か。スコール、勝負は預ける」

心底残念そうにそう吐き捨てると、葵は出したときと同じようにどこかへと刀を消し去り、自分の開けた大穴から姿を消した。
その様子を見送り、スコールは一人ごちる。

「……無様ね。これほどになってもまだ勝てないだなんて」

自嘲し、それから痛みをこらえて立ち上がる。
その目は闘士ではなく亡国機業幹部の一人としての色に移り変わっていた。

「はあああ！」
「例え第四世代と言えど、乗り手がひよっこではな！」
「黙れっ！」

「箒、熱くなりすぎたらだめだよっ！」
「逃しませんわ！」
「セシリア、前に出すぎだっ！」

『サイレント・ゼフィルス』を相手取っている一夏たち四人は、相手に突っ込もうとする箒、セシリアと、それを抑えながら戦う一夏とシャルロットに分かれていた。
箒は自らの未熟さを指摘された怒りから、セシリアは二号機を取り戻そうとする使命感から先走りすぎており、そのことに一夏とシャルロットは歯噛みしながらも何とか戦線を維持している。

「二人とも突っ込みすぎだよっ！　戻って！」
「だがっ！」
「ですが！」
「それで二人が落とされたら元も子もないよ！　頭を冷やして！」

シャルロットは半ば悲鳴のように叫び、箒たちはようやくその動きを止める。
と、そこを『サイレント・ゼフィルス』のＢＴライフルが撃ち抜いた。

「ぐうっ！」
「箒！　てめぇ！」
「一夏、駄目だってば！　ああもう！」

大きなダメージを受けた箒を見て激昂した一夏が、《雪片弐型（ゆきひらにがた）》を手に《零落白夜（れいらくびゃくや）》を発動させて切り込む。
その様子を見たシャルロットは、最早悲鳴と変わらない声を上げながら仕方なく連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》でサポートに回ることにした。

「零落白夜、確かに当たれば恐ろしいが、当てられる腕を持っていないだろう」
「うるせぇよ、とっとと堕ちやがれ！」
「わたくしもお忘れにならないでくださいまし！」
「だから二人とも、突っ込みすぎだってばっ！」

《零落白夜》を発動させた『白式』、この中で最高性能を誇る『紅椿』、ＢＴライフルを構えた『ブルー・ティアーズ』の三機を相手取り、なおも『サイレント・ゼフィルス』は嘲笑うように回避しながらライフルで鋭い一撃を加えていく。
なんとかサポートに回ろうとするシャルロットだが、動き出すその隙を見逃さずに放たれるＢＴライフルを咄嗟に回避していくため、どうしても三人のサポートには回れなかった。
だが、次の瞬間、軽々と回避して攻撃を行っていた『サイレント・ゼフィルス』に無数の銃弾が撃ち放たれた。

「ちっ、増援か！」
「その通り。葵ちゃんに追い出されちゃったからね、貴女で憂さ晴らしさせてもらうわよ」

先ほどと違い生徒会長の目に戻った恋華が、にぃっ、と口端を吊り上げてぞっとするような笑みを浮かべる。
その身には、大量の水のヴェールを纏ったＩＳ『ミステリアス・レイディ』を纏い、四門のガトリングが装備されたランスを手にしていた。

「更識楯無……、いいだろう、この雑魚どもに加わってようやくまともに戦えそうじゃないか？」
「あら、私が加わったら戦力過多よ？　そんなに悠長にしていてい

いのかしら」
「ふん……、やってみればわかることだ！」

六基のビットと共にＢＴライフルを乱射するも、直進してくる『ミステリアス・レイディ』のヴェールに当たった途端にエネルギーが水に溶け込んでしまう。
水を操っているナノマシンがＢＴエネルギーを散らしていることに気付いたエムは、ピンク色のナイフを取り出して直接格闘戦を挑まんと加速を試みようとし――、

「――なんだ、スコール。……ああ、わかった」

そのまま取り出したばかりのナイフを量子変換して消滅させると、エムは興醒めだとばかりに五人の方へ眼を向けた。

「指示が出たのでな、撤退させてもらおう」
「逃がすとお思いですか？」
「私が、逃がしてもらうと思っているとでも？」
「よしなさい、セシリアちゃん。あの子は強い、準備のない現状では面倒よ」

食い下がろうとするセシリアを恋華が押し留め、その様子を眺めながらエムは一斉にＢＴエネルギーを撃ち放つと、エネルギーバリアを破って外へ逃げて行った。

「……くっ！」

一人、セシリアの心に苦い思いを残して。

第５０話　二度目の襲撃戦（後書き）

次回でキャノンボール・ファスト編、完全終了となります。
未だ勝ち星を収めていない専用機持ちたち、一体これからどうなるのか。
お楽しみに。

第５１話　一夏の誕生日

キティが突然引き上げていった時、私たちはすでに満身創痍だった。

なぜ撤退命令が出たのかはわからないけど、作戦時間が決まっていたりしたのかもしれない。あそこにはお姉ちゃんも恋華さんも千冬さんもいたわけだし。

「せーのっ」

私たち四人でもまともに相対するのは数分が限界だったキティに、一夏たちを圧倒したエム。……もっと強くならなきゃ、だめかな。

「一夏、お誕生日おめでとうっ！」

パンパァン！　とクラッカーが鳴り、皆が声を上げた。

ここは一夏の家、時刻は夕方五時丁度。

私たちはあの戦いの後、一夏の誕生日を祝うべく一夏の家にやってきていた。とは言っても、民間のＩＳドームで発生した事件だったため、私たち当事者は警察の取調べを受け、大分時間を使ってしまったのだが。

ちなみに私を担当した刑事さんはお姉ちゃんの関係で知り合いの方だったので、事情聴取はすぐに終わった。その後でふーちゃんから今日が一夏の誕生日だということを聞いて、わらわらとこの家に集まったというわけである。

「お、おう。サンキュ。しっかし……、この人数は何事だよ？」

「それだけ慕われているということで納得しておいたほうが良いですよ。薮蛇ですから」

「おう？　……おう」

アシカじゃないんだから、一夏。

ちなみにここにいるメンバーは、箒さん、セシリアさん、ふーちゃん、シャルロットさんにラウラ。

一夏の友人である五反田弾君に御手洗数馬君、そして弾君の妹さんの五反田蘭ちゃん。

生徒会メンバーである恋華さんにのほほんさん、会計にしてのほほんさんのお姉さんであるの布仏虚先輩、新聞部の黛薫子先輩。

そして私にお姉ちゃん、千冬さんになぜかいるナターシャさん。

……いや、教員だったし、流れで付いてきたってわかってはいるけどね。

「その辺はほら、おねーさん監視役だから。お酒とタバコはハタチになってからよー？」

「日本はその辺厳しいですからね。あとサラリと読心術使わないでください」

いつのまにか傍によって来ていたナターシャさんの言葉にすかさず返してみた。

あとナターシャさん、その手に持っている缶は……。

「おねーさんはハタチ超えてるのでいいんですぅー。大丈夫、おねーさんお酒強いから」

「だからって生徒の前で飲酒しないでくださいよ……。まあ、あんまり強く言いませんけど」

「一之瀬妹、言うだけ野暮という奴だ。今日くらい勘弁してやれ」

「……はぁ」

ニコニコと缶ビールを飲み下すナターシャさんと、ごろにゃーん

とばかりに胡坐で座る千冬さんの太ももに頭を乗せて寝転がっている恋華さんを見て、仕方ないかとあきらめることにした。
考えていたら、頭が痛くなりそうだったから。

「あ、あ、あのっ、一夏さん！　け、ケーキ焼いてきましたから！」
「おお、蘭。今日、どうだった？　楽しめたか？　って言っても、途中で滅茶苦茶になったけどよ」
「は、はい！　あの、かっこよかったです！　あっ、ケーキどうぞ！」
「サンキュ」

一夏にケーキを差し出す蘭ちゃんと、それを受け取る一夏。
それにしても、あれだね。学校外でもしっかり一夏の体質は機能しているようだ。迷惑極まりない。
さて、それじゃあちょっと一夏に惚れている女の子をピックアップしてみようか。
まず箒さん、セシリアさんにシャルロットさん、ここで蘭ちゃんが入ってと。計四人、一人に惚れる人数としては多いと言わざるを得ない。

「うまいなー、これ。蘭一人で作ったのか？」
「は、はい！」
「蘭って料理上手だよな。うん、いいお嫁さんになるぞ」
「お、お嫁っ……！？」

おおっとー、一夏のボディブローだー。蘭ちゃんが揺らいでいるぞー。

「見てみなさいよ箒たちったら。じーっと一夏と蘭のこと見つめてるわよ」

「嫉妬は醜い……」
「辛らつだね、簪ちゃん……」

皆でケーキをつまみながら、そんなことを話してみる。

「しかし香織、このケーキは美味いな！」
「ああほら、口についてるよ」

こっちを見てパァァ……、と顔を輝かせて言ったラウラの口周りを人差し指で拭い、ついていたクリームを自分の口に運ぶ。
うん、確かに美味しいです。だって私が追加で買ってきたものだもの。プロが作ってるからそりゃ美味しいですね。

「ああ、すまん」
「いえいえ。……あのー、そこのお三方？」
「……なんだ？」
「なんですの……？」
「なに……？」

暗い。ものすごく暗い！
一夏に惚れている蘭ちゃん以外の三人、つまり箒さんたちはどんよりと曇った顔でこちらを向いた。

「えっと、なぜそこまで暗いのですか……？」
「……まともに戦えもしなくてな。己の不甲斐無さを嘆いていたところだ……」
「……偏光制御射撃（フレキシブル）の特訓プランを立てなければと考えているのですわ」
「まあ……、イノシシ三匹制御するのは大変だなぁ、って。普通のライフルとか入れようかなって……」

「は、はぁ……」

えっと、箒さんはいいとして、セシリアさんは多分、『サイレント・ゼフィルス』が偏光制御射撃を使えるからいろいろ思うところがあるんだろうなぁ……。

「で、シャルロットさんはなぜにイノシシ云々なんです？」

「一夏も箒もセシリアも、なーぜかことごとく挑発に乗って突っ込んでいくんだよねぇ……。易々と、これ見よがしにっ、いとも簡単にっ！」

「……反省しています」

「……申し訳ありませんわ」

ああー、そういうことかぁ……。

まあ、そういう気性が寄り集まってる中で、シャルロットさんだけがちゃんと自分をセーブできていたと聞くし……、ほんと、お疲れ様です。

「でも、まだ時間はあるんですから、これから直して、もっと強くなればいいんですよ」

「そ、そうだな！　うむ！」

「そ、そうですわね！」

「……まあ、いいか」

逃げ道を見つけたとばかりに賛同して頷く箒さんとセシリアさん。

そしてそれを見て溜め息を吐くシャルロット。なんだかシャルロットさんが母親みたいに見えてくるねぇ、これは。

「千冬さん、あーん♪」

「……ぁーん」

視界の隅で、恋華さんがケーキを千冬さんに食べさせているのが見えた。
千冬さん、ちょっと頬染めてません？　まあ深くは突っ込みませんけど。

「こっちこっち、こっちよ弾！」
「虚、こっち……」
「待て待て、引っ張るなって！」
「お嬢様、待ってくださいっ」

で、なぜふーちゃんと簪ちゃんはその誰かを引き連れてきてるのでせうか？

「これが五反田弾よ、私の友達。弾、こっちは一之瀬香織、私の幼馴染よ」
「俺たち以外に友達いたんだな……」
「ぶっとばすわよ」
「すまん、すいませんした」

凶暴な笑みを浮かべて手を握り込むふーちゃんに、諸手を挙げて降参をアピールする弾君。なるほど、気のいいお調子者系か。

「あーっと、五反田弾だ。弾って呼んでくれ」
「一之瀬香織です、名前で良いですよ。よろしく、弾君」
「ああ、よろしくな」

ぐっ、と握手。ふむ、何かお料理をしている手かな。なんとなく傷の痕がある。
で、今度は簪ちゃんが引っ張ってきた女性。生徒会の会計担当、

布仏虚先輩その人であった。……ああ、一応お嬢様呼びなんだね。

「名前、知ってるよね……。香織……」

「布仏虚、三年よ。よろしくね」

「はい、よろしくお願いします。一之瀬香織、一年です。あのそれで……」

「……はい？」

そそくさと虚さんの傍により、頭を下げる。

「お姉ちゃんがご迷惑をかけて、すいませんでした。お姉ちゃんもいたずらにやっているわけじゃなくて、その……」

「……ええ、わかってるわ。こっちにこそ非があったのだし、お姉さんの行動も行き過ぎだとしてもこちらにそれを批判する権利はないもの。……お嬢様があなったのは、ちょっとあれだけれど」

「本当にすいません……」

向こうが頭を下げてきて、慌ててこっちも頭を深く下げる。

すると、虚先輩も更に頭を下げてきて、こっちもそれより深く頭を下げて、そうしたら虚先輩がもっと下げてきて、それよりも下に深く頭を下げて……。

「……そろそろ、やめましょうか」

「……そうですね」

「あ、これ私のアドレスです。もしお姉ちゃんがご迷惑をおかけしたときにはご一報を」

「これはどうもご丁寧に。私のアドレスです、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

またもや頭を下げあい、それからアドレスの書かれた紙を受け取

る。なんか、お見合いみたいなんですけど。

「おーい、終わったかしらー」

「あ、うん！　ごめんごめん」

まあ、そんな感じで、一夏の誕生日会は私たちの持ち込んだものもあったので、買い足しすることもなくつつがなく終わったのであった。

キャノンボール・ファストから数えて最初の日曜日、私たちＢＣ社員は本社へと出向いていた。

「やあやあ、よく来たね皆！」

「束ちゃん、何か用事があるって言ってたけど……」

「そう、そうなんだよ！　ようやくあーちゃん用の武装が出来上がったから、そのお披露目にね！」

意気揚々と言い放った束ちゃんは、そう言って片手を空高く上げる。

すると、近くの壁がパックリと開き、そこから銀色のアタッシュケースが押し出されてきた。それを軽々と取り出すと、床が押し出されてできたテーブルの上に乗せる。

「これが、束ちゃん特製、あーちゃん専用兵装だよん！　ささ、葵ちゃん、開けて開けてー！」

その言葉に、お姉ちゃんがアタッシュケースを押し開ける。そこには、『ＢＣ』と刻まれた武器たちが納められていた。

「ブレードにナックル、ランス、アックス、スナイパーライフルにナイフ、荷電粒子砲、と。随分作ったのねー」

「張り切ったからねん！　この『Ｂｉｎｄ　Ｃｏｌｌｅｃｔｉｏｎ　Ｓｅｒｉｅｓ』、略してＢＣシリーズはＩＳよりも頑丈だから安心していいよ！」

そう言うと、束ちゃんがブレードを取り出してさらに続ける。

「ブレードバージョンは切断に、ナックルバージョンは打撃に、ランスバージョンは刺突に、アックスバージョンとナイフバージョンはその他に応じてご利用あれ！　おまけでスナイパーライフルバージョンと荷電粒子砲バージョンもつけておいたから！」

「ありがと、さすがねたっちん」

「それほどでもー♪　それじゃ、先に渡しておいたＢＣリングに格納しておいてね」

「それじゃ、こっちは返しておくわ。私の全力には耐えられそうもないから」

お姉ちゃんが指輪から取り出したのは、ボロボロになった刀だった。たしか、キャノンボール・ファストのときに使ったって言ってたっけ。お姉ちゃんの使った武器がボロボロになるなんて、滅多にないことなのに。余程の相手と戦ったんだろう。

刀を受け取った束ちゃんは、それをどこかへと転送するとこちらへ向き直る。

というかお姉ちゃん、いつの間に量子変換機能のある指輪なんかもらってたんだろうか。

「BCリングは皆の分を作る予定だから、お楽しみにね！」
「もうなんでもござれね……」
「でもそこがいい……」
「服とかも格納できるの？」
「もっちろん！　生モノじゃない限り安全性は問題ないよ！」
「オッケー、助かるわね」

ふーちゃん、簪ちゃん、ナターシャさんが口々に漏らす。

『……常識ってなんだっけ』
『壊れゆくものでは？』

イヴ、それを言ったらどうしようもないでしょ。

第５１話　一夏の誕生日（後書き）

ということで、六巻の内容が終了です。

……早い、六巻早い。

第５２話　特訓

「特訓？」
「ああ。俺たちも力不足を痛感してさ……。香織たちさえよければ、一緒にどうかと思って」

とある日の放課後、すでに当たり前のように私の机の周りに集まっていたふーちゃんと簪ちゃん、そしてラウラを交えて、一夏たちからそんな話が持ちかけられた。

「私はかまいませんけど」
「アタシもいいわよ。簪とラウラは？」
「私も……いい……」
「構わん。あのメス猫に一撃くれてやらねば気が済まんしな」
「ということで、オッケーですよ」

ラウラだけなかなかに苛烈なお言葉だったけども、それぐらい腹が立っているんだろう。
いくら不意打ちで純粋な戦闘用装備ではなかったとはいえ、負ければ悔しい。まして、相手に情けをかけてもらったようなものなのだから。

「よし、それじゃあ早速アリーナに行こうぜ。第五アリーナを取ってあるから」

その一夏の言葉に頷いて、皆でアリーナまで出向く。アリーナに設置されているシールドエネルギー補給装置の傍で服を量子変換するのと同時にＩＳを身に纏うと、すぐに装置でシールドエネルギーを回復する。

これは基本的に授業と放課後に許可の出されているときにしか外に出されていない。理由としては盗難や悪用の防止、だそうだ。

「で、どういう訓練しましょうか。プランはあります？」

「それなら僕が作ってきたよ。香織たちのは大雑把になっちゃってるけど……」

「いえ、気にしないでください。それで、どういった訓練を？」

「じゃあ、まず一夏から言うね」

そう言ってシャルロットさんが出した案は以下のとおり。

一夏は射撃兵装の知識の復習、実戦で体に射撃兵装の動きを叩き込んで慣れさせる。

箒はまず単一技能（ワンオフ・アビリティー）を安定して起動させるために模擬戦、相手はセシリアが務める。

セシリアは偏光制御射撃（フレキシブル）の習得のため、箒に対して極力のみで模擬戦。

シャルロットは一応のラインには達しているので一夏の特訓相手。

とまあ、ざっとこんな感じだった。

「ん、良いんじゃないでしょうか。じゃあ私は……、近接戦闘スキルを上げるために、ふーちゃん。相手してもらえる？」

「オーケー、《ナイトホーク》はなしね」

「そりゃそうだよ。それで、簪ちゃんとラウラはどうするの？」

「ラウラと模擬戦……」

「よし、ではやるか。シャルロット、こちらも決まったぞ」

「うん、それじゃあ皆、それぞれがんばろう」

シャルロットさんの言葉で、皆がそれぞれに散らばっていく。

さて、がんばろうっと。

あー、その、ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐だ。
……こんな感じで、良いのか？　そ、そうか。いや、夏休みの間にクラリッサを筆頭とする私の部下たちと交流を深めたのだが……。その時に「話を始めるときには名前を言っておくと皆がわかりやすくて良いのでは？」と言われてな。何のことだと返したら、電波を受信したとか何とか。
まあ、皆良い隊員たちだということだ。うん。

「ラウラ……、大丈夫……？」
「あ、ああ、大丈夫だ。そっちの準備は終わったか？」
「うん……」

目の前の鎧武者が、巨大な鉄板のような赤黒い光を放つ剣、《朱鉄(あかがね)》を手に頷いた。
普段は小動物のような簪だったが、これほどの装備を整えていると恐ろしさすら感じてくる。しかも、背部と脚部は展開装甲のまま変えていないというのだからとんでもない代物だろう。
私は知らず知らずのうちに『シュヴァルツェア・レーゲン』に装備されているプラズマブレードを起動させ、戦闘体勢をとっていた。それほどの相手、ということなのだ。
簪は元日本代表候補生だと聞く、実力的に言えば五分五分かも知れず、ましてその機体が箒に勝らずとも劣らないものとするならば、やはり油断はできない。

ふと、視界にカウントダウンが映る。

――三、二、一、試合開始――

カウントダウン終了と同時に互いが空を裂き、一直線に相手へと向かっていく。

開始直後に急接近してのＡＩＣは真横への瞬時加速（イグニッション・ブースト）によって回避された。体への負荷をまるで感じていないかのような軌道を描き、《朱鉄》を振りかざしてこちらへ接近してくる。

背部の展開装甲で驚異的な推進力を、脚部の展開装甲で機動のほとんどの補助を行っている『真打（しんうち）・鉄（くろがね）』は、第三世代の『シュヴァルツェア・レーゲン』を軽々と越える機動性能をもっている上に、操縦者である簪の技術も高い。こちらも出し惜しみはできないな！

「いけっ！」

片目を隠している眼帯を量子変換して消し去り、奥の手である《越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）》を発動、反応速度を跳ね上げる。

それと同時に六本のワイヤーブレードを射出、手足を狙って次々に走らせていく。

「そう簡単には、捕まらない……！」

突然、蒼いエネルギー弾が一本のワイヤーブレードを弾き飛ばす。

みると、簪は空いていた片方の手に蒼い銃剣を装備していた。なるほど、《蒼鉄（あおがね）》の射撃でブレードを弾き飛ばしたのか。

あまり悠長に戦っていると《朱鉄》の武装特性を使われかねない上に、もしかすると《蒼鉄》の武装特性まで出てくるかもしれない。

そうでなくとも余裕がないのだ、もたもたしてはいられないだろう。

「早々にけりをつけさせてもらうぞ！」
「やれるものなら……！」

言葉が消えるのと同時に、全身を悪寒が包む。
咄嗟に身を引くと、すぐ目の前を赤黒い板が通り過ぎて行った。
何が起きたのかと簪の機体を確認すると、脚部と背部の展開装甲が完全に開いていた。あれを使って瞬時加速を超える速度を出しているのか。
しかし、あれほどの加速ならばエネルギー効率は悪いはず、そこが狙い目か。

「《紅蓮朱鉄（グレンノアカガネ）》……！」
「なっ！？」

武装特性を発動させた簪が、私の目の前でその刃を振り上げる。
爆発的に増えた熱量が質量へと変換され、ただでさえ巨大だった刃があっという間に自分の二倍以上の大きさへと膨れ上がる。
咄嗟に身を翻して後方へ飛ぶと、次の瞬間には背中を掠めるようにして膨大な熱が振り下ろされた。
圧倒的なその威圧感が突如として霧散し、武装特性の発現が終わったことを感じた私は、すぐさま振り返って攻撃に転じようとした。

「――武装特性、《蒼鋭蒼鉄（ソウエイノアオガネ）》」

その言葉が聞こえると同時に絶対防御が発動し、シールドエネルギーがごっそりと削られる。
驚愕とともに簪をみると、彼女の手に握られていた銃剣の銃口からは、蒼いＢＴエネルギーが剣のように伸び、実体剣の部分までを飲み込んで一振りの青い刃になっていた。
まったく、つくづく驚かされる。ここで《蒼鉄》の武装特性とは。

「……終わり」
「……面目丸つぶれだな、私は」
先ほどのダメージで機体の損傷はかなり大きくなった。今の距離から次の一撃を回避することは不可能だろう。
「だが、せめて一矢報いらせてもらうぞ！」
両腕のプラズマブレードを限界まで伸ばし、《蒼鉄》を構える簪へと突っ込む。
私は未だ、未熟だ。

「……ふぅ、これで今日の仕事も終わりか」
手続きを終えた書類をまとめ、重要書類と書かれたシールの貼ってある引き出しに入れる。
これを翌朝に他の先生が取り出して手続きを進めたりするわけだ。つまり、私は残業してでもこういった書類は仕上げないといけないわけだ。
ましして私はあの問題児だらけの一年一組の担任であるから、書く書類も多い。尤も、この学校の教師はみな多かれ少なかれ残業を行うことが多々あるのだが、私と山田先生の場合はそれが特に顕著だ。

「お疲れ様です、千冬さん！」
「織斑先生だ、バカ者。また来たのか」
ほとんどの電気が落とされた職員室で一人肩を揉んでいた私に抱きついてきたのは、このＩＳ学園の生徒会長、更識楯無だった。
後ろからぎゅーっと私を抱きしめているが、その顔は横から見ても至極幸せそうな笑みになっている。
こいつは私に懸想している。本人からそう伝えられたし、あの時からこいつは私に尽くしてくれていることからもそれはわかった。
しかし、私はこいつの愛に応えてやれる自信もないし、人を愛する、人に愛されるということも分からない。初恋だってない枯れた女なのだ。
女同士であることに偏見はないし、そもそもほとんど女しかいないこの環境で仕事をしてきた私は、散々女性同士の恋愛というものを見てきた。だから、まあ、そういった話も別にかまわないし、男だろうが女だろうが、真に好いた者同士ならば好きにすればいいと思っている。
だが、私は……。
「千冬さん、暗い顔してますよー？　だめだめ、ちゃんと笑ってなきゃ。ね？」
「……まったく。織斑先生と呼べと、言っているだろうが」
気遣わしげな楯無、いや、恋華（れんげ）の態度に強く怒ることもできず、やんわりとそう言うに留める。
「……本当にどうしたんですか？　いつもならゴチン、ってするのに」
「人を暴力教師のように言うな」

確かに手を上げることはあるが、それだって無闇やたらにやっているわけではない。
指導のためでもあるし、教師としてなめられない為でもある。ここは学校であると同時にＩＳという危険な道具の使い方を教えている学校なのだから、万が一を起こさない為にも教師は生徒の上でなければいけないのだ。
尤も、こいつはその例外なのだが。

「……恋華」
「はいっ。なんですか、千冬さん？」
「お前は、私が好き――、なんだよな？」
「はい！」

高らかに宣言された。満面の笑みで。

「……私は、お前のことを好ましいと思っている。だが、それが恋愛としての意味の好きかどうかがわからないんだ」

そう、私には恋愛感情が分からない。
一夏を狙っている女子どもに偉そうなことを言ってはいるが、おそらく色恋に関してはあいつらの方が上だろう。
人付き合いと恋愛をいっしょくたにしてしまう私のような人間よりも、ずっと。

「そうですか……」
「悪いな……」
「いえ！　それならそれでいいんです！」

にこりと笑みを浮かべた恋華は、そう言って頭を下げると職員室

を出て行った。
……悪いことをしてしまったな。
どことなくぱっとしないもやもやを抱えたまま寮に戻った私は、頭を下げて挨拶してくる生徒たちに挨拶を返しながら自室の扉をあける。

「おかえりなさい、千冬さん！」

裸エプロンの恋華がいた。
……ばたん。

「ふーっ……。あれか、疲れているのだな私は」

そうだ、ありえないだろう。私の部屋は寮長室、同室の人間もいない。
ということで、もう一度扉をあける。

「おかえりなさいぷぎゅっ！」
「でていけぃ！」

アイアンクローで頭を鷲掴み、盛大に外へ放り出す。あいつ、本当にエプロン一枚だったぞ……。

「まったく……」

がちゃり、と鍵を閉め、それからスーツをハンガーにかける。寮の就寝時間まで眠ることは出来ないが、少し休むくらいならスーツを脱いでいても問題はない。誰か尋ねてきたときはこのままでも問題はないのだし。
そんなことを考えていると、ふと乱雑に物が乗ったテーブルの上

に、湯気を立ち昇らせる黄色と濃いオレンジ色のコントラストが見えた。テーブルは其処だけが綺麗に片づけられている。

「これは……」

近づいてみてみると、それは綺麗に形作られたオムライスだった。ケチャップで器用にハートマークと文字が細く描かれており、わざわざこの為だけにケチャップの出し口を狭めるという器用なことをしていたことがわかる。

「千冬さん、お疲れ様です。恋華より……、か」

それは、恋華が私のために作ってくれたオムライスだった。ひらがなで書かれた文字が可愛らしく、思わずあいつがこれを作っているところを想像してしまう。

私は携帯を取り出すと、メール画面を開いて文面入力に切り替える。

『食事ありがとう。さっきはすまなかった』

誤字がないことを確認すると、出来るだけ見ないように送信を押す。

……オムライスは、予想以上に美味しかった。

第５２話　特訓（後書き）

簪、蒼鉄の武装特性を開放。ちなみにエネルギー刃は振れば飛びます。

そして千冬さんのフラグが進行しました。初恋もまだな千冬さんと恋華の仲は……？

第５３話　簪と代表候補生

それは、とある日の昼休みのこと。
食事を終えてクラスに戻ろうとした僕たちの前に立ちはだかったのは、一人の女子生徒でした。

「ちょっとよろしいかしら？」
「えっと、どちらさま？」
「私は天王寺葉桜（てんのうじはざくら）、二年の日本代表候補生よ。更識さん、貴女は一体どういうつもり？」

突然現れた、黒い髪を長く伸ばしたその少女は、不思議そうに彼女を見つめる簪ちゃんに詰め寄る。
まるで、親の敵でも見るかのような目で簪ちゃんを見ると、唾を吐きかけるような勢いで口を開いた。

「まるで捨てるように日本代表候補生をやめるどころか、日本国籍まで捨てるなんて！　なんて愚かなんですの！？」
「それが、何か」
「それが何か！？　貴女、今そうおっしゃいました！？　貴女には、日本人としての誇りはないのですか！？」
「……貴女には、あるの？」

呆れたように聞く簪ちゃんに向けて、天王寺さんはまるで芝居でもしているかのように大振りな仕草で続ける。

「ありますとも！　選ばれた人間、努力と優れた才能によって登り詰めた地位！　そこに誇りを持たずしてどうしますの？」
「……そう」

「……ふん、所詮は姉の七光りで選ばれただけの人間ですのね。更識の名だけで選ばれただけでは、誇りなどもてようはずもありませんわね！」

そう言うと、彼女は高らかに笑っていた。

……この人、滅茶苦茶嫌な感じだ。でも、簪ちゃんが黙っている以上私が怒るわけにはいかない。

けれどふーちゃんがキレそうです。

「あんたね、上級生だからって言っていいことと悪いことがあるでしょ！？」

「鈴、いい……」

「簪、でもっ！」

「弱い犬ほど良く吠える……。噛み付く牙すらもてないなら野垂れ死ね……」

訂正。ふーちゃんよりも簪ちゃんの方がカチンと来ているようです。

そして案の定、顔を真っ赤にした天王寺さん。見事な挑発でした。

「このっ……！　いいでしょう、どちらが優れているか、はっきりさせてあげますわ！　明日の放課後、第二アリーナでけりをつけさせていただきます！」

「上等……、獣が人に勝てないってことを教えてあげる……」

にやり、と恐ろしげな笑みを浮かべて言い放った簪ちゃんを見て、天王寺さんは顔を真っ赤にして自クラスへかけていった。

……簪ちゃん、笑顔が怒ったときの千冬さんのようでしたよ。

時間は飛んで翌日の放課後。
私は『真打・鉄』を身に纏って、天王寺さんの前に浮いていた。

「『打鉄・弐式』……、完成したんだ……」
「倉持技研の連中が、貴女が完成させられなかったからと、私に泣きついてきたのよ。それで？　あなたが自分で造ったとか言うＩＳはそれ？」
「『真打・鉄』、負けるつもりはないから……」
「どうせ出来損ないの機体なのでしょう？　それとも、それも更識の力で作り上げたのかしらね？」

ぎゃんぎゃんと良く吠える犬だ。まるでなっていない。

「相手を怒らせるならもう少し挑発の方法を考えたほうがいい……。程度が知れるよ……」
「何ですって……！　名前だけの小娘が、図に乗って！　叩き潰してあげますわ！」

『打鉄・弐式』の特徴はその機動性と遠距離用誘導弾頭型兵装《山嵐》。
当初のモデルでは《山嵐》は八門のミサイルポッドを六機搭載し、マルチロックオン・システムによって最大四八発の弾頭を一斉発射するものだった。
見たところその仕様は変わっていないようだから、確実に叩ける。

「両者、遺恨なく終わらせろ」

監督を頼んだ織斑先生の言葉に小さく頷く。

昨日の夜に立会いを頼んでおいてよかった。もし妙なことがあっても、織斑先生なら大丈夫だろう。

「では……、開始！」

放送でその言葉が響いた瞬間、天王寺さんが背中の荷電粒子砲を連射してくる。

次々と繰り出されるその攻撃を、左右へ揺れ動いてスレスレのところでかわしていく。

それにしても、『打鉄・弐式』は高機動型だったはず。どうして一歩も動かないんだろう。

「まあ、いいか」

《朱鉄（あかがね）》を呼び出し、一直線に天王寺さんへと駆ける。と、天王寺さんは荷電粒子砲《春雷（しゅんらい）》を撃ち放ちながら薙刀の様な形の《夢現（ゆめうつつ）》を手に迎え撃ってきた。

《夢現》は超振動する薙刀で、複合装甲に対して強力な威力を発揮する。けれど、この展開装甲や武装同士の打ち合いにはやや不利だ。

「ふっ」

「くっ……！　振った後が隙だらけですわよ！」

「そう思うならかかってくるといい……」

斬り返しは素早く、確実に。狙い澄ました一撃を装甲に食い込ま

せんと、刃が唸る。
対する天王寺さんはやや機動が不恰好だ。まだ『打鉄・弐式』に慣れていないのだろうか。なんにしても、手加減する要因には成り得ないのだけれど。
なにより、この戦いは香織達も見ている。そんなところで無様な姿を曝すなんて、耐え難い屈辱だ。
だから勝つ。

「はあああぁぁぁ！」
「一撃一撃が軽い……、やっぱり貴女は犬だ」
「黙りなさい！」

天王寺さんは私から離れると、こちらへ照準を定める。――危険、ロックされています！

「堕ちろっ！」

背中の《山嵐》から無数の弾頭が射出され、こちらへと一直線に飛んでくる。
それを見ながら、《蒼鉄（あおがね）》を呼び出す。この程度、物の数ではない。

「《蒼鋭蒼鉄（ソウエイノアオガネ）》」

《蒼鉄》の武装特性を発動させ、接近しすぎた弾頭を切り払うと、まだ遠くにある弾へ向けて刃を振るう。
空気を切り裂くように、三日月形の形を持って飛ぶＢＴエネルギーの刃が次々に弾を破壊していく。
それにしても、自分で作ったのなら武装特性くらい使えるはずなのに、なんで使えないんだろうか。

「な、なんなのそれは!?」
「……もしかして、武装特性を知らないの?」
「はぁ!? わけのわからないことを! もう手加減はやめですわ、堕ちなさい!」

怒ったのだろうか、顔を真っ赤にした天王寺さんはロックを完全にこちらへと集約させた。今までの三倍以上か。なら、こちらもそれなりの対応をさせてもらおう。

「《紅蓮朱鉄(グレンノアカガネ)》」

熱量を質量へと変換していき、巨大な刃へと変えていく。
さて、と。

「薙ぎ払え……、朱鉄ッ!」

近くにあった弾を《蒼鉄》で切り払い、片手で持っている《朱鉄》を大きく横に薙ぎ払う。
その進路上に存在した弾を全て爆破させると、余剰熱波が天王寺さんへと襲い掛かる。

「きゃあああああ!」

その熱量で殆どのシールドエネルギーが持っていかれた上、部品の一部は完全に逝かれたようだった。
なんにしてもこれで終わりだろう。いや、おわらせる。

「ふっ――!」

縦へ大きく振り下ろした《蒼鉄》から放たれたエネルギー刃が、しっかりと残りのエネルギーを奪い去る。

……さて、これで終わりだね。

「そこまで！　勝者、更識簪！」

「私の勝ち……」

「くっ……！」

悔しそうにこちらを見る天王寺さんだったけど、不思議とかわいそうだとかそういう気持ちにはならなかった。だって、清々堂々戦って勝った結果だから。

それに、この人はもっと強くなれる。『打鉄・弐式』の戦い方をちゃんとわかれば。

「ああ、そうだ」

「……？」

アリーナから出ようとして、一度振り返る。

これだけは、言いたかった。

「人と戦うためには、犬のままじゃ駄目だよ。もう一度、貴女が本当に強くなったときは、また戦おう」

もう一度ここまでくるのを、楽しみにしてるから。

「……更識、簪」

誰もが消え去った更衣室で、葉桜は小さくつぶやく。

自らが完成させた『打鉄・弐式』をもってしても打ち勝てない相手は確かに存在したし、自分がトップではないことぐらいはわかっている。

わかっていたが、同じ日本代表候補生でありながら安易にその地位を捨て、まるで何の努力もしていないかのように実態不明の会社へと移った簪のことが、彼女は許せなかった。

日本人としての誇り、天王寺家唯一の代表候補生としての誇り、そして同じ自作ＩＳを持っている者としての対抗心。全てがごちゃ混ぜになって、葉桜は思わず簪に喧嘩を吹っかけていたのだった。

ところがどうだ、戦ってみれば相手は自分より数枚上手どころか、まるで遊びのように戦っているではないか。おまけに自分の知らない技術すら使い、いとも簡単に勝って見せた。

「天王寺」

「織斑、先生……」

「強かっただろう、あいつは」

「……はい」

いつの間にかやってきていた千冬の言葉に、拳を握りながらも頷く。

どうしようもなく認めなければならないほど、葉桜と簪の力量差は圧倒的だった。

「なぜ負けたか、わかるか？」

「……機体の性能差、根本的な力量の違い、ですか」

「それもある。だが、本当に違っていたのは覚悟の差だ」

覚悟、その言葉を口内で反芻し、それから振り返るように千冬に聞く。

「それは、一体」

「確かにあいつの力量はずば抜けて高い。だが、あいつは戦うことに命と魂を賭けている。愛するもののために戦う覚悟を決めているのさ」

「戦う、覚悟……」

「……いずれ、お前もわかるときが来る。腐るなよ」

普段は厳しい千冬の優しい一言に、葉桜は思わず涙を溢れさせた。自分には、誇りはあってもそれだけだった。それをわかっていたはずなのに、どうしても認めたくなかっただけなのだ。

天王寺葉桜は、名門天王寺家の一人娘として育てられた。といっても、天王寺家は代々男系の家系であったため、ＩＳが出てきてからは衰退の一歩を辿っていたのだ。

葉桜はＩＳが出てきてからというもの、殆ど自由を与えられずに天王寺家を救うための才子となるべく育てられた。一流の教育を施され、レールに乗って進むことが当たり前の人生。いつしか葉桜は、自由を愛する自分を守るために、誇りを守るという名目で他人に当たるようになっていた。

だからこそ、簪はどうしても認められなかった。才覚ある姉をもち、自らも代表候補生だったはずが、あっさりとその地位を捨てられる、そのことを認めたくなかったのである。

だが、もうそれもなくなった。

「……簪さん。今度は、負けませんわ」

勝ちたいと、心から願う相手が生まれた。
この日から、天王寺葉桜は再び花開くその時を目指して走り出したのである。
彼女が日の目を見るときは、また後々のお話。

第５３話　簪と代表候補生（後書き）

簪主人公回でした。
葉桜ちゃんはまた後々出てきます。オリキャラですが。
一応これだけ強いんだよ、という目安回でもある。

第５４話　変わる心（前書き）

今回は少々短いです。

第５４話　変わる心

高層マンションの最上階の一室で、キティはベッドの上にいた。

「ふふ……、ここがいいの？」

「うく、ぁはぁっ！」

キティが体ごと這っているのは、一糸纏わぬ、生まれたままの姿となっているオータムの上だった。

オータムは頬を染め、まるで愛しい相手とまぐわうかのように甘い声を上げながら乱れている。その体躯へと、キティはこそまさしく愛しい物を見、愛でる様に指を這わせた。

荒事も多く経験していながら、オータムの肌はまるで赤ん坊のように一つの傷もなく、キティがその短く切りそろえられた爪を立てると、鮮やかな紅として残るほどに美しい。

「キティ、キティぃ……」

「あらあら、可愛い声を上げて。嫉妬と憎悪に狂ったメス猫はどこへ行ったのかしらね？」

「ご、ごめんなさい、私……！」

ころころと楽しげに言葉を並べるキティのそれを聞いて、オータムはまるで世界の終わりのような顔で謝罪の言葉を口にする。あたかもそれは、忠義に厚い犬が主へ許しを請うような、いっそ悲痛なまでの媚を含んでいた。

その言葉を聴きながら、しかしキティは人差し指を立ててオータムの唇へと添えて口を開く。

「いいのよ、オータム。今の貴女はおりこうさん、もうあんな愚か

な、愚鈍でおぞましい真似はしないわよね？」
「うん、うん……！　絶対しない……！　だから、だから捨てないでキティ……！」
「ええ、捨てやしないわ。私とスコールで、ずっと可愛がってあげる」

子供をあやすように猫撫で声でそう言うと、キティは片手で喉を圧迫しながらもう片方の手を下の泉へと伸ばしていく。くちゅりと、音が響いた。

「ふぁぁ！　そこ、そこぉ……！」
「んー？　なぁに、なにか言いたいのかしら？」
「いいっ……！　もっと、もっとしてぇ！」
「あはは、いいわよ。ほら、もっと乱れて……！」

それからしばらくの間、部屋から媚声がやむことはなかった。
やがて部屋が静まり返った頃、コンコンと部屋をノックする音。

「どうぞ」

扉を見ることなくキティが言うと、扉がそっと押し開けられる。
そこには、バスローブ一枚に身を包んだスコールの姿があった。
スコールは扉に鍵をかけると、ベッドの上で下半身をシーツで隠したキティの横に腰掛ける。

「お待たせ、キティ。待ったかしら」
「いいえ、大丈夫よ？」
「その割には、オータムが果て過ぎていない？」
「少し過激に可愛がってしまったの。新入りの奴隷はきっちり、主が誰か教えてあげなければね……。ふふ」

艶やかに、そしてどこか怖気の走る笑みを浮かべたキティを見てから、スコールは体を後ろへ倒す。丁度、キティの膝上へ後頭部が当たるように。

自分から絡め採られにきたスコールは、魔性の牙の施しを受けんとし、濁った目を眼前の子猫へ向けて身を委ねる。

喉笛を曝すスコールを前にちろりと舌なめずりをして見せたキティは、ゆっくりと顔を下ろす。それはあたかも恋人に口付けんとするように、妖艶なもので。

その口付けは、ゆっくりと首筋に牙を沈め、スコールの媚声が鳴り終えるまで続いた。

「違う……私はあのお方のことなど……、くそ、違う、私は、私は」

その頃、別の部屋ではマドカが一人、電気もつけずに蹲っていた。頭の中がかき乱され、まるで自分が自分ではないような感覚が四六時中続いているマドカの精神は、すでにほぼ限界に達していた。

キティの頭の中ではもう一人の自分が常時ささやいている。屈服しろと、体を明け渡せと。

「黙れ、黙れ……！」

『もういいでしょう、屈してしまっても。身を委ねれば、甘美な快楽が、支配される幸福がずっと続くのよ？　これほど幸せなものは

他にない……。あの方に身を委ねましょう、ずっと飼い殺されるのも、悪い選択ではないわ』

「うるさい……！　私は私だ……！　貴様の意見になど耳は貸さん！」

息を荒立て、精神を軋ませながら尚もマドカは抵抗を続ける。

今にも沈みそうな浮き舟は、寸でのところでまだ沈まずに保たれていた。

そんなマドカを、もう一人の自分は冷笑する。

『あっははは！　本当にお馬鹿さんなのね、『私』！　いいわ、そうやって拒絶していなさい。寵愛を受けるのは私の役目、甘美なる時をずっと待ち焦がれているから！　お前は所詮木偶人形、殺すことでしか自分を知ることができないのね！　ああ、可哀想な『私』！　なんて不幸なんでしょう！』

「うるさい！　黙れぇ！」

目の前の姿見を拳で叩き割る。割れた鏡が手を傷つけ、真っ赤な血を滴らせた。

――ああ、傷つけてしまった。あのお方に怒られてしまう。

思ってから気づく。自分は今何を思ったと。

『くすくす、貴女ももう持たないわね。ああ、安心して？　『私』の代わりに私がこの体を使ってあげる。精一杯、あのお方の役に立てるように、卑しい奴隷として、ね……♪』

「ぁ、あああああああああああああああああああああああ！！」

媚声と慟哭は交じり合い、やがて物語を乱す力となる。
しかし、それが露わとなるのは今しばらく先のことであった。

「ひっ……！？」
「ん、どうした一之瀬」

授業を受けていると、突然背筋が凍るような恐ろしさを感じた。
わ、皆に見られてるし。

「あ、い、いえ、なんでもありません。手の上にハエが止まってたので……。手を洗ってきても良いですか？」
「ああ、行って来い。では授業を続けるぞ……」

千冬さんに許可を貰って、ゆったりとした歩調で教室を出る。
なんというか、胸の奥をぐちゃぐちゃにかき回されたような気持ち悪さがする。変な物を食べたわけでもないのに、一体どういうことなんだろう。
洗面所まで辿り着くと、冷水機で冷たく冷やされた水を飲み込んで吐き気を抑えた。それでも、胸糞悪いというか、そんなような感じは消えなかった。

『イヴ、健康状態は大丈夫？』
『はい、特に異常はありませんが？』

『そう。ありがと』
『……あまり無理はしないでください。無茶はもう諦めましたが、平時くらい体に気を使ってください』
『あはは……、気をつけます』

イヴに叱られながらも、私は教室への帰路に着いた。
そして、時間は過ぎ去って午後の授業。

「では、私とナターシャ先生とで指導を行う。偶数は私、奇数はナターシャ先生の方へ行け。専用気持ちはいったん出ていろ。駆け足！」

珍しく一組と四組の合同実習となった今日の午後は、そんな言葉と共に始まった。
それにしても、ナターシャさんって意外と指導厳しいんだよね。元軍人だし、当たり前だけど。

「はーい、私語はやめなさい。今日は皆に遠距離武装と近距離武装の違いを実体験してもらいます」
「先生、それは一学期でもやったんじゃ……」

四組の生徒が質問する。

「そのことは聞いてるわ。けど、あなたたちがやったのは触りの部分。今日は二時間かけてみっちりと、その使い方を学んでもらうわ」
「あの、具体的には何を……」
「まず全員、ＩＳを装備してもらいます。こっちは装備の量が多いラファール・リヴァイヴよ。でも、量がないから半分ずつね。さ、まずは一組の生徒からやってもらいましょうか」

一組の生徒が『ラファール・リヴァイヴ』を装着し終えたところで、ナターシャさんがこちらを見た。

「それじゃあ、専用機持ちの皆はＩＳを装備している子達に指導する側よ。サポートするから、がんばってみて。さあ、それじゃあ均等にバラけてね」

はーい、とＩＳを装着した子達が返事をしてから、手際よくバラけていく。さすが織斑先生が一学期間みっちりやっただけあって、移動はスムーズだ。

「私のところは六人か。皆、よろしくね」
「はーい！」
「よろしくね、一之瀬さん」
「よろしくー！」
「よろしくお願いします」

口々にそう言う皆。
そんな中、ナターシャさんが声を上げた。

「それじゃ、まずは射撃兵装から行きましょうか！」
「はい。それじゃあ皆、マシンガンを呼び出して」

私の言葉に従って、慣れないながらも量子変換されているマシンガンを呼び出す六人。ちなみに、私もすでに『梟』に乗っております。
で、私も《夜雀（よじゃく）》を呼び出して、肩に構える。

「撃ち方は一学期やったとおり、肩に当てるか腰溜めに撃つかです。片手で伸ばして撃ってもいいですが、その場合は命中率が落ちるこ

とを忘れずに。それじゃあ、的を出すので一人ずつ射撃してみましょう。六つ出すので、半分は肩、半分は腰でやってみてください。忘れずに、モードは単発にしておいてくださいね」

よし、がんばろう。

第５４話　変わる心（後書き）

がっつり危ない描写をいれてみました。
さて、そろそろ七巻の話に入れるだろうか……？

第５５話　ずれる歯車

その知らせが来たのは、普段通りの授業の途中だった。
突然第二会議室へ集められた一年の専用機持ちたちは、揃ってそこの椅子に並んで腰掛けるよう言われた。

「突然招集をかけてすまない。緊急事態だ」
「……夏のメンバーと同じということは、またそう言った事態ですか？」
「そういうことだ。全員、くれぐれもこの内容は漏らすな。良いな」

織斑先生が、表情をより一層引き締めて言った。
ここにいる教員は織斑先生に山田先生、そしてナターシャさんの三人。バックアップには他の先生も入るんだろうけど……、一体何が起きたんだろう。

「今から一〇分ほど前、ここＩＳ学園へ向けて時速四〇〇〇キロを超える速度で進む三機のＩＳを確認した。ここへの到達時刻は今から一〇分後、上層部は夏のメンバーと我々三人でその三機を押さえろと言ってきた」
「……一〇分あれば、この学園の生徒なら全員逃げられますよね。それに、この学園には自衛用の装備もある。時間稼ぎぐらいはできるはずです」
「だろうな。だが、上層部は懲りずにやれとのお達しだ。全員、準備を整えてアリーナへ向かえ。万一外に出た場合は深追いしなくていい、今回の目的は学園の防衛だ」

夏のあれでもまだ懲りてなかったのか……。
それにしても、一体どこの誰が……？

「相手の情報はどうなっていますの？」
「……驚かずに聞け。相手は三人とも、男のＩＳ操縦者だ」
「なっ……！？」
「男ですって！？　そんなばかな！」

男のＩＳ操縦者は、私と一夏の二人だけ。
ここに来ていきなり三人も、しかも全員ＩＳに乗ってここを目指しているなんて……。束ちゃんからの連絡はないから、たぶんこれは束ちゃんのやっていることじゃない。
けど、本当に一体どういうこと……？

「生徒会も動いているから、一般への被害は最小限に抑えられるだろう。しかし、万が一もある。注意して戦闘を行ってくれ」
「織斑先生、報酬は出るんですか？」
「くると思っていたさ。今回は出さないそうだ」

……おーい、ちょっと待てって。

「それは、私たちに喧嘩を売っているということでいいんでしょうか？」
「まて、落ち着け。その代わり、私の個人資産と、楯無を通じて日本政府から報奨金が出る。全員合わせて二億程度だが……、いいか？」
「……まあ、良いでしょう。私自身は非常に不満ですが、他の皆がやる気になっているので」

それに、焦った千冬さんが見られてちょっと楽しかったりしますし。
けど、これはつまり「自分の通ってる学校守るんだし、お金要ら

ないよねー？」ということでいいんですね？　よーし、後で覚えとけよ。

『イヴ、記録録った？』
『ばっちりです』
『ナイス』

音声ログもばっちり残ったし、これでもし「私たちが出しました」と言っても言い逃れはできない。
さて、それはともかくとして。

「それで、相手の機体情報はありますか？」
「……いや、ない。全て未確認の機体だ」
「独力でコア三つと完全なアンノウンの機体を揃えられる国か組織が絡んでるってことですか」
「だろうな。殆ど不確定要素ばかりだが、よろしく頼む」

そう言って、千冬さんはこちらへ頭を下げた。
……本当に珍しい。千冬さんが頭を下げるなんて。

「それじゃあ、ブリーフィングを始めますね。皆さん」

そんな山田先生の言葉と共に、私たちは一層気を引き締めた。
どうなることやら……。

その頃、ＩＳ学園より六〇〇キロメートル強の地点にて、三人の男が言葉を交わしていた。

「ったく、親父殿も扱いが荒いぜ。ポッドから出していきなり「死んで来い」だぜ？」

ケラケラと軽く笑いながら、漆黒の機体に身を包んだ少年はつまらなそうにそう言う。

その言葉に、隣を飛ぶ青年は諦めたような溜め息を吐きながら返す。

「それが父上だ、仕方あるまい。あの人は生粋の研究者でもあるからな」

「どうでもいいけどさぁ、殺しちゃ駄目なんだろー？　つまんねー仕事……」

「ケヒャーハハハァ！　別にいいじゃねーか、泣き叫ぶ顔を堪能させてもらおうぜ？」

「まあ、それもいいかぁ……。ぶち殺せないのはつまらないけど」

「全く、お前たちは……」

高校生くらいの少年が高笑い、それよりも幼い少年は裂けるような笑みを浮かべる。

その様子を見て、青年はそんなことを呟きながら頭に手をやって頭を振った。

「まっ、いっちょ派手に打ち上げようぜ？」

――世界に、反撃の狼煙をよぉ？

三機は飛ぶ。
世界に、新たな風を吹かせるために。

『アンノウン一、二、三、到達しました！　エンゲージまでカウントダウン！』
『各員、死ぬことは私が許さん！　相手が撤退を始めたら深追いはするな、いいな！』
「はいっ！」
『了解』
『……うん』
『了解、千冬姉！』
『了解です』
『わかっていますわ！』
『はいっ』

開放通信（オープンチャネル）から聞こえる千冬さんの声に、皆が口々に応える。
目標が降り立つであろうアリーナには、私たち全員が待機していた。
張り詰めた緊張感が、まるで釣り糸のようにぴんと張り巡らされる。直後、肌が逆立つようなおぞましい感覚と共に、アリーナのシールドバリアが砲撃によって砕かれた。

「よォーＩＳ操縦者諸君！　元気でやってるかァー！？」
「あまり派手なのは好みではないが……、まあよかろう。諸君、我々は一般生徒に危害を加える気はない。それは我々としても不本意だ。専用機持ちの諸君とだけ戦えれば、それでいい」
「どうでもいいけど、不慮の事故なら殺しても良いよね」

地に降り立った三機のＩＳを見た途端、背筋が凍るような感覚に襲われる。
殺気だった。いっそ純粋なほどの殺意の鎧に身を包んだ三人の男たちの中の一人、やたらとテンションの高い青年が前へ一歩進み出た。

「さて、それで？　誰が相手してくれるんだ？　まさかテメェらがやるんじゃぁねぇよなぁ？」
「残念ですが、わたくし達ですわ」
「セシリア・オルコット、イギリスの候補生だな。出来損ないの遠隔装備」
「カッ！　そんな糞ガキに用はねーんだよ！　福音の操縦者、テメェならまだやれんだろ？　いっちょかまそうじゃねぇの？」
「あら、ダンスのお誘い？　良いわよ、あなたの相手は私がしてあげる」

糞ガキと呼ばれて若干切れているセシリアさんを尻目に、ナターシャさんは相手の殺気とプレッシャーをものともせずにやんわりと返した。

「他に被害を出したくないのでしょう？　なら、それぞれ別のアリーナでやり合わない？」
「……そうだな。我々としてもその申し出はありがたい。だが、ナターシャ嬢はともかく、君達学生が私たちと対等に渡り合えるなど

とは思い上がらないほうがいい。死ぬぞ」
「なんだと……！」
「聞き捨てなりませんわね……！」
「熱くなるな、バカどもめ。相手の実力は未知数、この殺気から言ってもあの余裕の元は見て取れるだろう。うかつに挑発に乗るな」
穏やかそうな男性の言葉に激昂した二人をラウラがたしなめると、頬を吊り上げて眼帯を格納領域へ転送した。
うわぁ、ばっちりやる気になってるねラウラ。
「どうでもいいからさぁ、やるの？　やらないの？　はっきりしてよ」
『……皆さん、あの口の悪い人は私とナターシャさん、簪ちゃんで。男性の方は一夏、セシリアさん、シャルロットさんが。残った彼はふーちゃんとラウラ、箒さんでお願いできますか？』
『私は賛成よ』
『問題……ない……』
『ああ、いいぜ』
『……わかりましたわ』
『オッケ、暴走しないように見張るのも含めてね』
『余りものって気に食わないけど……、りょーかいよ』
『了解だ！』
『承知！』
全員分の返答が返ってきた次の瞬間には、それぞれがそれぞれの相手へ向けて武装を構える。
その様子を見て向こうも此方の意図を察したのか、口の悪い青年はにやりと嫌な笑みを浮かべた。
「いいねえ、じゃあ始めるとしようかァ！　ローウェン、テメェは

五番だ。アルファ、テメェは三番、行け！」
「了解した。では、行くとしよう」
「命令するなよ……。別にいいけど」

男性と少年が飛び去り、それを追って皆もそれぞれの相手を追って飛び去る。
残ったのは、私と簪ちゃん、そしてナターシャさん。ちなみに、ナターシャさんはまだＩＳを起動していない。

「……さってと。テメェらが俺の相手ってわけだな？」
「そうよ。お互い名乗りを上げておきましょうか、様式美としてね？」

言ってから、静かにＩＳを起動させる。
現れたのは、新調され更に銀の輝きが増した『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』を纏った姿のナターシャさん。

「私はナターシャ・ファイルス、バインド・カンパニー所属よ。はい次、香織ちゃん」
「はぁ……、緊張感に欠けますね。私は一之瀬香織、バインド・カンパニー所属です。よろしく」
「……ああ、親父殿の言ってたプロトタイプってのはテメェのことか！　ハッハァー！　なるほど、そういうことか、カカカカカカ！　おもしれぇな！」
「何を言ってるんです？」
「ああ？　あー、テメェはまだしらねぇのか。まあいいや、そのうち嫌でも知ることになるぜ。今知りたいなら、まず俺を倒すんだな？　クキカカカケキクケカカ！」

なんだこの人は……、なんだか気味が悪い。

どこかずれていると言うか、なんだか違うんだ。何か、何かが。

「……私は更識簪、バインド・カンパニー所属。覚悟して」

「ああ、お前はいいや。興味ねーし」

「……あなた、友達少ない？」

「うるッせェーよ！　まあいいや、俺の名はグリム、そしてこいつが――」

肩辺りまで伸びた黒髪を振り乱し、獰猛な視線で私たちを見る。

全身を覆ったその装甲をふわりと浮かせ、牙を剥き出しにして笑みを浮かべた。

「――、『ニュクス』だ。死なねえ程度に殺してやっから、覚悟しとけよ？　クキカカカケコカケキクケカキケカカコキカカッッ！！」

第５５話　ずれる歯車（後書き）

はい、原作崩壊開始。
突然現れた三人の男性ＩＳ操縦者、その正体と目的とは。
次回もお楽しみに！

第５６話　死神たち（前書き）

今回は途中経過です。

第５６話　死神たち

「ッァシャッハァ！！」
「くっ……！　はあっ！」
「ハンッ、良い打ち込みだが、そんなもんじゃ『ニュクス』の防御は破れねぇぞォ！」

戦闘が始まってから数分、香織達とグリムの戦闘は互いに傷を与えることなく続いていた。
と言っても、互いの消耗具合は大きく違う。香織達がやや汗ばんでいるのにもかかわらず、グリムは汗一つかいていない。
この数分間を全力で攻め立てていると言うのに、グリムの操る『ニュクス』の装甲には傷一つつけられていなかった。

「なんて硬さなの……！」
「硬いだけじゃない、まるでアレ自体で弾かれてるみたいな……」
「ＢＴエネルギーも実弾も通用しない、か。なんて滅茶苦茶なのかしらね」

そう言いながらも、攻撃の手を休めることはしない三人に、グリムはにやりと笑みを送る。
まるで、破られないことが確実だと言うかのようなその笑みに、三人は更に攻め手を苛烈に加速させていく。

「そらそらどうしたァ！　まるで通ってねェぞ！」
「こうなったら……！　《紅蓮朱鉄（グレンノアカガネ）》！」
「ッ、ナターシャさん！」
「おーけー、下がるわよ！」

香織とナターシャが後方へ下がり、簪が前線へ残る。
数分ではあるがたまった熱量をすべて物質化すると、防御を固める『ニュクス』目掛けてその刃を振り下ろした。
が。

「……おいおい、効いてねェぞォ！　ふざけてんのか、糞ガキがァ！」
「簪ちゃん、下がって！　次は私がいく！」

タッチするかのように前後を替わると、香織は突撃姿勢へと体を構える。
そしてゆっくりと呼吸を整え、静かにグリムの方へと視線を向けた。

「――《啄木鳥（きつつき）》、武装特性、《ピンポイントクエイカー》起動！」

声に反応し、左腕の装甲に隠れていた《啄木鳥》が大仰に展開されていく。
やがてそこに残ったのは、恐ろしいほどに巨大な一つのパイルバンカー。《啄木鳥》の優に五倍はあるだろうそれに加え、巨大な鉄杭の後ろには火薬を爆破させる大きなカートリッジが装填されていた。

「おおおおおっ！」
「ハッ、貫けんのか、そんなもんでッ！」
「打ち――」

火薬に引火、接敵した瞬間に杭が打ち出される。

「――貫くッ！」

直後、金属同士が激突する悲鳴のような音と共に、装甲がべこんと凹んだ。
けれど、それだけ。その結果に、香織は思わずそこから飛び退いてグリムを睨みつける。

『イヴ、解析は後どれくらいで終わる？』
『後五分は必要です、稼いでください』
『りょーかい』

五分間というその長さが、今は恐ろしく長く感じられることだろう。
香織たちが警戒しながら武装を整えているあいだ、グリムは不気味に香織たちの方を見つめ続けていた。

その頃、第五アリーナへ到着した男性と一夏たち三人は、互いに相向かっていた。

「織斑一夏、セシリア・オルコット、シャルロット・デュノア。なるほど、安定はしているようだな」
「どういう意味だ？」
「戦闘陣形としてはいい形だということだ。だが、それだけでは勝てないな」

そういうと、男性はあまりにも軽装なそのＩＳを軽く動かし、戦闘態勢に入る。

「私の名はローウェン、そしてこいつは『ヒュプノス』。苦しみなき死をもたらす力だ。お前たちはどれほどこの眠りに抗えるか……、試してみるか？」

「その言葉、後悔させてあげますわ！」

「二人とも、あまり前に出すぎないように！」

三人も臨戦態勢へと突入したその直後、ローウェンは『ヒュプノス』と共に飛び上がる。

しかし、『ヒュプノス』は次の瞬間、その姿をかき消した。

「なっ！？」

「消えた！？」

「ここだ」

声が聞こえたと同時にセシリアの背部装甲が打撃され、ぐらりとセシリアの体が揺れる。

いつ現れたのかもわからないローウェンは、またもや姿を消した。

「消えてるわけじゃない、知覚できないスピードで動いてるだけだよ！」

「けど、ハイパーセンサーでも捉えられないってどうなってんだ！？」

「くっ……！　逃がしませんわ！」

当惑する二人の影から、セシリアは《ブルー・ティアーズ》を繰り出す。

なんとかしてローウェンの姿を捉えようと、四滴の蒼い雫を飛ばすセシリアだったが、その直後にそのうちの一基が『蹴り砕かれた』。

「なぁっ!?」

パキャン、と情けないほどに呆気ない音を立てて砕けたそれは、光となって格納領域へ戻される。

それを見て、セシリアは戦慄した。相手が、確実に装甲を砕くだけの力を、その脚に持っていることを確信したから。

ただの蹴りだったはずのそれで武器が砕けるということはつまり、蹴られればそれ以上の衝撃が加わる。

思わず絶対防御が働かなかったらという想像をしてしまい、セシリアはふるふると顔を左右に振り、歯を食いしばってそこにいない相手を見据えた。

「セシリア、大丈夫?」

「え、ええ。けれど、油断ならない相手だというのははっきりしましたわね……」

「もとよりそのつもりで掛かって来い。ＩＳに乗っていると、いかな武人と言えどもその感覚は鈍る。あまりに利便性の高いそれのせいで、己の技が鈍る故にな」

再び目の前に姿を現したローウェンはそう言い放ち、再び姿を消す。

猛然と繰り出される蹴りを回避すべく空へ飛んだ三人だったが、次の瞬間にはシャルロットが地面へと叩き落されていた。

「シャル!」

「くッ!!　二人ともとにかく飛んで!　出来る限り速く!」

「わ、わかりましたわ！」

シャルロットの指示に従い、全速力での回避機動を開始する二人に対して、ローウェンはただその冷めた瞳をむけるだけだった。

第三アリーナへと飛んだ黒いＩＳの少年と、鈴、ラウラ、箒はそこへと到着すると、互いに向き合うようにして戦闘意欲をむき出しにしていた。

ただし、鈴と箒は闘気、少年とラウラは殺意と言う違いはあったが。

「あーあ、戦えそうなのは皆向こうに取られちゃったな」

「へぇ、私たちは戦えないっての？」

「……そっちの遺伝子強化素体（アドヴァンスド）はまだやれそうだね？　僕らよりも不完全だけど」

「……やはり貴様達、バイオノイドか」

「わかってたんだ。まあ、あれだけ情報出してたし、そりゃそうか。グリムもバカだよね、いくら発言許可が下りてるからって」

ラウラと少年は、互いに殺気と言葉をぶつけ合う。その視線は、相手の一挙手一投足をしっかりと監視するように向けられていた。

互いの素性を知ったのは、ラウラと少年のみ。しかし、鈴と箒はそれに気をとられることなく警戒を続ける。

目の前の相手は注意を散らして勝てる相手ではない。それをわかっているからこそ、不可解なことがあったとしても、決してそれに気をとられることはなかった。

やがて、少年はにやりと頬を吊り上げて笑う。その途端に、今までの殺気が嘘だったように濃密な殺気が溢れ出して来た。

「いいね、ようやく楽しめそうだ。僕の名はアルファ、そしてこいつは『タナトス』。僕の一撃を受け止められるかな？」

「上等だ、掛かって来い！」

「負けるわけには行かないのよ！」

「聞かせてもらうぞ、貴様らのことを！」

直後、互いは一斉に空を蹴る。

手を翳して放たれたラウラのＡＩＣを急なバックターンからの急上昇で回避すると、追い討ちをかけるように放たれた鈴の《龍砲》を三基のスラスターを使用した短距離の瞬時加速（イグニッション・ブースト）、個別連続瞬時加速（イグニッション・ブースト）によって回避してみせる。

その姿をもしナターシャが見ていれば、驚愕したことだろう。彼女の元パートナーだったイーリス・コーリングの使用した技術を、完全な形で見せ付けられたのだから。もっとも、スラスターの数はイーリスよりも一つ少なかったが、それでも恐ろしく繊細で超絶的な技術には変わりなかった。

その技術力の高さを目の前で見せ付けられた三人だったが、それでも闘気が落ちることはなく、むしろ高まりさえしていた。

「斬るッ！」

「のろまが、斬るって言うのはこうやるんだよッ！」

「なっ！？」

「箒！」

鋭く斬り込んだその一撃をいとも簡単に回避して見せたアルファは、振り返りざまに瞬時加速（イグニッション・ブースト）を発動させて急接近し、手にした大鎌を大きく振りぬく。

装甲を大きく斬り削られた箒は、その衝撃を逃がすように後方へと吹き飛ばされた。

「ぐっ……！　なんだ、あの鎌は……！？　斬られた痛みが、確かに……！」

「あっははは！　こいつは《デスサイズ》、その武装特性は斬った相手にその痛みを与えることさ！　ほらほら、いつショック死するかな！」

「悪趣味な武装だこと」

「まったくだ。箒、やれるか？」

「ああ、大丈夫だ……！　一度斬られたくらいで、落とされるものか！」

三人が、アルファを囲むようにして宙を舞う。

その中で、アルファはにやりと頬を吊り上げた。

「恋華（れんげ）、状況はどうなっている」

「ベリーバッド、とても悪いわ。生徒は全員地下シェルターに避難させたけど……、相手のＩＳはデータなし、操縦者の戸籍もなし」

香織達がそれぞれの戦いを始めた頃、恋華と千冬、真耶は管制室に集まっていた。

「私の《アルカエスト》は相手が弱ってないと取れないし……、私でも真っ当に戦えるレベルの相手を三人も揃えるなんて」

恋華はそう言って歯噛みする。学園祭の折に『ミステリアス・レイディ』が剥離剤（リムーバー）の機能を取り込んだことで発生したナノマシン、《アルカエスト》は、相手のＩＳを強制解除し手に入れることができるが、それは相手のＩＳのシールドエネルギーが二桁以下であり、武装や装甲が相当破壊されていないといけないため、かなり使い勝手は悪い。

それに加えて今はあれほど溺愛していた妹が戦っている上に、愛する千冬は手を煩わされている。これで彼女がまともに黙っているわけがなかった。

「……彼女を頼りましょう」

「……それしかないか。あいつには私から連絡を入れる。お前は織斑たちのところへ行ってやれ。あそこが一番不利だ。私もあいつを呼んだら『打鉄』で出る」

「いいんですか、千冬さん？　そんなことすれば、委員会が……」

現在、出撃指令が降りているのは一年生の専用機持ちとナターシャのみ。

しかし恋華は生徒会長であるため問題はないが、千冬は一教師である。いかに特別待遇とはいえ、身勝手な行動を行えばどうなるかわからない。

そのことを聞いた恋華に、千冬はいつもと変わらぬ不敵な笑みを浮かべて見せた。

「教え子を守れぬ教師など、死ぬべきだ。私はまだ死にたくないからな。山田君、管制は頼むぞ」

「――はい、任せてください」

力強く頷いた真耶を見ながら、千冬は堂々と携帯端末を取り出す。

ここに、世界最強たちが動き出した。

第５６話　死神たち（後書き）

それぞれを圧倒する三機のＩＳと、動き出した千冬さん達。
次回もお楽しみに！

第57話　勇気の雫（前書き）

どうしてこうなった！

第57話　勇気の雫

「おおおおおっ！」
「攻撃が大振りすぎるぞ」
《零落白夜（れいらくびゃくや）》を発動した《雪片弐型（ゆきひらにがた）》を振りかざした一夏の一閃を、ローウェンはいとも簡単に回避し、お返しとばかりに蹴り付ける。
バキッ、と装甲の軋む音とともに一夏が吹き飛ばされると、その隙を突いてセシリアとシャルロットの射撃が飛んでくるが、その全てを蹴りの一撃で叩き落とした。
「出鱈目ですわね……！」
「一夏、大丈夫！？」
「おう、なんとかな……。けど、もうシールドエネルギーも少ないぜ」
「……そろそろ決めるとしよう。行くぞ」
ローウェンの声が聞こえた瞬間に、全員の動きが止まる。
正確には、止められていた。人の知覚もハイパーセンサーも完全に超えた速度で三人を蹴り続けているせいで、一切の身動きが取れなくなってしまっていた。
「ぐあぁ……っ！？」
「こんな、もので……っ！」
三人のシールドエネルギーは瞬く間に減っていき、中でも初めからかなり減っていた一夏のシールドエネルギーは、ほとんど切れかかっている。

次の瞬間、一際強力な一撃が一夏の腹部に突き刺さり、一夏は衝撃とともにアリーナの壁に激突し、意識を失った。

「一夏さん！」
「一夏！　この……ぉぉぉおおっ！」
「怒るか。だが、それでも足りんぞ」

気絶した一夏を見て頭に血が上ったシャルロットは、加速をつけてローウェンに接近すると、勢いに乗って近接ブレード《ブレッド・スライサー》を振りかざす。
しかし、当たる間際で回避され咄嗟にそこから飛び退いたシャルロットの背部を、『ヒュプノス』の一撃が襲った。

「きゃあああ！」
「シャルロットさん！」
「これで二機。さて、どうする？　セシリア・オルコット」

後部からの一撃で落とされたシャルロットを庇う暇もなく、残されたセシリアの前にローウェンが立ちはだかった。
一撃をかすらせることもできず、あっという間に一夏とシャルロットを落としたローウェンだったが、そこに疲れた様子はまるでない。そんなローウェンをみて、セシリアは今度こそ『恐怖』で心が震えた。
今まで、ＩＳに乗って恐怖を感じたことなどなかった。そこには確かに『絶対防御』という壁があり、命までは落とさないという妄信にも似た確信があったから。

――もしＩＳが何かの拍子に動かなくなってしまえば、それはイコール死に結ばれるんですよ！？

セシリアが思い出したのは、夏の戦いの折に聞いた、香織の悲痛な叫び。

あの時はまだ、本当に分かっていたわけではなかった。そのことに、今になって気づいたセシリアの眼からは、押し出されるようにして涙が溢れ出した。

ただ、怖い。その思いで溢れ出た涙は、次々に頬を伝って落ちていく。

「泣いているのか」

「ぁ……」

「……その恐怖も、すぐに終わる。祈れ」

いっそ思いやりの心すら伝わりそうな優しい声に、しかしセシリアは身を震わせる。

先ほどまでの挙動が嘘のようにゆっくりとした仕草で近づいてくるローウェンの足が、ざりざりと砂を踏みしめる。その音で、自分がいつの間にか地上に降りていたことに気付いたセシリアは、思わず腰を抜かして地面に座り込んでしまった。

「いや……こないでぇ……！」

セシリアは必死に手と足で体を押して後ずさるが、その距離は一向に縮まることがない。ローウェンが決して付かず離れず、ぴったりと数十メートルの距離をとって歩いているせいで。

やがてＩＳの装甲とアリーナの壁がぶつかり、ガチンと音が立つ。その音で、セシリアは自分の逃げ場がなくなってしまったことを知る。

涙が、止まった。

「……いや」

「安らかに眠れ。永久に」
「……いや、ですわ……」

消える。涙も、恐怖もすべて。いつの間にか、セシリアの心には一つの的だけが現れていた。

――さあ、撃て。

声が、セシリアの頭の中に響く。

いつの間にか、世界は止まっていた。その中で、主の命を待つ三滴の雫。それが視界に収まり、セシリアはゆっくりと腕を持ち上げる。

――ブルー・ティアーズ、その名の意味は。

「そこに込められた、思いは……！」

止まった世界の中で、セシリアは思い出す。まだ両親が生きていた頃、父が生き生きと話していた話題を。

そこで、出会ったのだ。

「思い出しましたわ……！」

イギリスの第三世代ＩＳ、『ブルー・ティアーズ』。その初期構想は、セシリアの父、ブラウン・オルコットの発案したものだった。

ＩＳという、言わばロマンを追い求められるそれが登場してから、父は卑屈にはなっていたがそれ以上に夢を追っていた。だからこそ、母も父のことを見離さず、時折熱に浮かされたような眼で見ていたのだと、セシリアはその時ようやく悟る。

時を隔て、意図せずに父の夢を受け継いだセシリアの心は、不思

議と温かかった。

「まったく、娘にはまるでそんな姿を見せないのですから……。困った父親ですわ」

――ねぇ、お父様？

今まで一度も口にしなかったその言葉を、嫌悪していたその言葉を、セシリアは困ったように口にした。

忌避感はなく、ただただそこにあるのは、溢れんばかりの家族への愛。

止まった世界で、セシリアは思う。もっと早くに気付けていれば、思い出せていれば、あるいはこのブルー・ティアーズの意味にも気づけたのではないかと。

しかし、いまさらそれを言ったところで仕方のないことだというのもまた分かっていること。

決して流さなかったその涙によって、その意味に気づけたのだから。

「お父様が『ブルー・ティアーズ』の名に込めたその思いは、涙を流す者たちの、その思いを背負う力となること。悲しみも、苦しみも、全てを打ち払う雫となること！」

――然り。今こそ発せよ、汝に受け継がれるべき、その名を！

頭の中に響く声に動揺することもなく、セシリアは止まった世界の中で口を開く。

その相貌を見開き、悠然と迫りくる形のまま止まったローウェンへ向けて。

「その涙を払いましょう。目覚めなさい、『ブレイブ・ティアーズ』！」

父が思い描き、そしてイギリス政府がその思いを汲んで作りだした『ブルー・ティアーズ』は、その声を聞き届けたように光を発する。

装甲は全てがシールドビットへと変わり、ＢＴビットは三倍の数である一二基、ミサイルビットは六基に増設され、装甲自体も水を切り払うような鋭い姿へと移り変わっていった。

全ての変化が終わった時、ようやく止まっていた時が動き出す。

時間にすればほんの一瞬であったそれは数千倍、数万倍に引き伸ばされ、その中で起こった変化を見届けたローウェンは驚きに目を見開いていた。

「ほう、ここで二次移行（セカンド・シフト）を遂げるか。私にどれだけ通用するか、試してみるがいい」

「……ええ、そうさせていただきますわ。《ブルー・ティアーズ》！」

セシリアの声で、大破したはずの一機を加えた一二基全てが宙に浮かぶ。手元に《スターダストｍｋ？》を呼び出すと、出来なかった筈の並列武装操作を軽々とこなして見せた。

ビットそれぞれを操りながら、《スターダストｍｋ？》で正確に狙いを定め引き金を引く。それを異常な速度で回避して見せたローウェン目掛け、全てのビットからコンマ数秒ずらして射撃する。

「だが、手数が増えただけでは勝てんぞ！」

「残念ですが、それだけではありませんのよ！」

またもやその射撃を回避したローウェンの背部を、捻じ曲がった

ＢＴエネルギー弾が撃ち抜き、それを皮切りに体が揺らいだローウェンを次々と打ち抜く。
偏光制御射撃（フレキシブル）と呼ばれる高等技法ですら、今のセシリアには児戯に等しかった。

「なるほど、ようやくまともに戦える力を得たと言うことか。いいだろう、こい！」

直後、ローウェンとセシリアは互い目掛け加速した。

戦いが始まってから既に二〇分以上が経つ。
その中で、互いのシールドエネルギーは一たりとも減ってはいなかった。

「おいおいおい、テメェらまじで火力不足かぁ？」
「硬すぎ……」
「《啄木鳥（きつつき）》の武装特性で凹ませるだけって、どれだけ防御固めたんだ……？」
「ねえ、貴方も飽きてこない？」

皆一様に若干の疲れをにじませながらも、やはり闘気を衰えさせることはない。
そんな中で、グリムは全身に纏っている装甲をゆっくりと開いて

いった。

「しかたねぇ、ボーナスステージだ。今度は攻めに出てやる、ちったぁ楽しませろよ？」

グリムの言葉と共に、防御兵装であったはずのその装甲の一つ一つを構成している六角形のパネルがバラけていく。

それは複数枚がまるでパズルのように組み合わさると、ビットのようにグリムの周囲を飛び回っていた。

「『ニュクス』の防御兵装、《ブラックカーテン》。そして、その武装特性は、《ブラッドカーテン》！　その名の通り、テメェらの血でカーテンを引いてやるってェことだよ！　まさに幕引き、そら行くぞォ！」

「ッ！　ウィングビット！」

「援護するわ！　《銀の鐘（シルバー・ベル）》！」

「近距離は……任せて……！」

数十基のビットへと変化した《ブラックカーテン》は、真っ黒なそれとなって宙に舞い、香織達へと向かっていった。

対する香織達も黙ってやられるばかりではない。香織はウィングビットを、ナターシャは『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』の新規武装、束が手ずから作成したそれを、そして簪は《朱鉄（あかがね）》を振りかざして、それぞれの戦い方でもって挑んでいく。

このときの香織達は知る由もなかったが、『ニュクス』に装備された《ブラックカーテン》には二つの特徴があった。

一つは、防御兵装である本来の状態であれば、磁気の反発力によって殆どの実弾系兵装を無力化できる他、エネルギー類もあっさりと霧散するほどの強固な壁であること。

そしてもう一つは、《ブラッドカーテン》を発動させているとき

には、その防御力の殆どは攻撃のためのエネルギーに回されるため、大した力は発揮できないと言うことだった。

「ビットの扱いなら……、負けないっ！」

「弾幕戦は私の本領発揮よ！　派手にやりましょう、『ゴスペル』！」

「はぁぁ……！」

ビットを打ち払い、切り払い、そして時には殴り、蹴り壊しながら、三人は目を瞠（みは）るような美しい連携を見せて進んでいく。

斬り込んだ簪の合間を縫うように香織のウィングビットが簪を囲むビットを打ち抜き、さらにその上空からはナターシャが、滅茶苦茶に威力が引き上げられた大口径レールカノン《銀の鐘》を連射して弾丸の雨を降らせていた。

しかし、そこまでの猛攻の中でもグリムの操る『ニュクス』には傷一つつけられないでいる。そこからも、グリムの操縦技術がずば抜けて高いということが三人にはよく理解できた。

「それでも、負けられない！」

戦いは、いまだ終わる気配を見せない。

「ああもうっ、なんなのこいつら……！？」

その頃、一夏たちの元へ向かうはずだった恋華は、何者かに追われていた。

部屋を出てしばらく行った所で突然教員用の《ラファール・リヴァイヴ》三体が立ち塞がったのだ。

ＩＳ同士の戦闘では恋華が勝利したが、今度はロケットランチャーだの対戦車ライフルだの対物ライフルだのと言った重火器を持ち出してきたため、とにかく学校を傷つけないように誘導しながら逃げていた。

生身相手にＩＳを使えば後々が面倒だと言うことが考えられているあたりまだまだ余裕なのだろうが、やはり恋華にとっては一分一秒が惜しい。

千冬の頼みごとを遂行できないと言うのは、恋華にとっては万死に値する行為だ。それ故に、逃げれば逃げるほど相手への殺意は高まっていた。

「もう、いいや。殺してやろう」

そして、その時は不意に訪れる。

アクアクリスタルだけを量子変換した恋華は、音速を超えた速度で水を動かし、ばっさりと生身の人間を一人斬り殺す。

恋華が突然その行動に移ったのがよほど拍子抜けだったのか、追っ手の残り二人は目を丸くして恋華のほうを見つめる。

「……そうか、殺されることも予期していなかったのね。いいわ、貴方達はなるべく惨たらしく殺してあげる。千冬さんの頼みを遅らせようとした罰よ」

次の瞬間、再びＩＳを纏った恋華は猛然とその二人に向かっていった。

第57話　勇気の雫（後書き）

はい、なぜかセシリアが二次移行しました。
おっかしいなー、そんなはずじゃなかったのに。
ちなみに、『ブレイブ・ティアーズ』の裏話はこれから話されますので、お楽しみに。
ほんとにどうしてこうなった……？

第５８話　紅椿（前書き）

こっちはちゃんと考えていたプロット通り！　うん！

第５８話　紅椿

「たあああぁぁっ！！」

大気を押し潰すようにして撃ち出されていく《龍砲》の弾丸を斬り裂き、アルファの操る『タナトス』の凶刃が迫る。

咄嗟に『甲龍』の《双天牙月（そうてんがげつ）》によってその刃を受け止めると、甲高い金属音を響かせながらギリギリと鍔迫り合う。

「あははは、僕の《デスサイズ》を受け止めて踏ん張れるなんて、タフネスだねぇ？」

「うっさい……、わよっ！」

「動きを止めればどうということはない！」

「あっはっはっは、止まらないよ！」

「ちょこまかと、動くなァ！」

飛び退いたアルファ目掛けて飛ばされた、『紅椿』のエネルギー刃を《デスサイズ》で切り裂き、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で箒へと接近する。

「箒、避けて！　下よ！」

「遅ォい！　ハッハァ！」

最初の頃の億劫とした姿はどこへ消えたのか、やたらと高いテンションで斬り込んでくるアルファのそれを避けようとした箒だったが、鈴の一声で咄嗟に下へ刃を構える。

次の瞬間、ちょうどそこへ打ち付けられた大鎌と刀がぶつかり、さらに金属音を響かせた。

「いつの間に！？」

「箒、鎌の動きは円運動よ！　振り被っていても下から来ることだってあるわ！」
「賢い子だ、そのとぉーり！　でもそれだけじゃあない、『タナトス』のトリック、見破れるかな？」
「ふざけたことを！　鈴、箒、とっとと片付けるぞ！」

ケタケタと笑って鎌を操るアルファは、まるで道化のように鈴たちを見据える。
その姿を見て、いの一番に飛び出したのは箒だった。

「はあああぁぁぁっ！」
「攻撃が直線的すぎるねっ、ほらほら、切り刻むよおバカさん！」
「この……っ！　貴様っ！」
「箒、挑発に乗るな！　ああくそっ、鈴！　サポートを頼む！」
「わかったわ！　箒、ちょっとなにしてるの！」

挑発に乗って飛び出していった箒を追って、鈴が飛んでいく。
苛立たしげに舌打ちして見せながら、鈴は《双天牙月》を思い切りよく振り上げ、投げる。円を描き飛んでいく《双天牙月》を鎌の刃で捕まえ受け流したアルファは、斬り込んできた箒の腕部目掛け鎌を振り下ろした。
ガチンッ！　と甲高い音を立てて装甲に突き立てられたその刃に抵抗できたのは一瞬、瞬きの間もなく振り抜かれる。

「ガッ！？　ぁあああああ！」
「あはははは！　どうだい、腕を切り取られた痛みは！？　爽快だろォ？！」
「あ、ああっ！　あああああっ！」
「貴様……！　鈴、箒を頼む！」
「ラウラ！？　ちょ、まちなさい！　ああもうっ！」

悲鳴を上げて痛みに悶える箒と、それを嘲笑うアルファを見てぶちぎれたラウラは、憤怒の表情を隠そうともせずに加速していった。
鈴はとにかく箒の元へ飛ぶと、箒の体を抱きかかえるようにしてアルファとラウラの元から離れていった。
それを見届けた後、ラウラは武装を全開にしてアルファを見据える。その目には、確かな怒りがあった。

「君は戦えるのかな？」
「御託を並べるのが貴様の言う戦いか？　なら貴様の勝ちだろうな、私は貴様と無駄話をする気はない」
「……まあいいや、死んじゃえよ出来損ない！」

次の瞬間、互いの刃が激突した。
ラウラの操る『シュヴァルツェア・レーゲン』のプラズマ手刀と『タナトス』の《デスサイズ》が言い知れぬ不快な音を奏でながら鍔迫り合う。
その中で、ラウラは背部のワイヤーブレードを全て射出し、アルファを捕らえるべく空を走らせた。

「あはは、無駄だよ！」

そう言った直後、ワイヤーブレードは全て細切れに変えられる。
それと共に、プラズマ手刀と競り合っていた《デスサイズ》は大きく上へ跳ね上げられ、瞬きの間に下からの斬撃が繰り出される。

「くっ……！　やはり、手元で回転させていたか！」
「あら、ばれちゃった？　でも、『タナトス』のトリックを見破った気になるのはまだ早いよ！　そら、踊れ踊れ！」

笑いながら《デスサイズ》を駆るアルファへ向け、ラウラは手を翳す。
友が戻ってくるまでのしばしの時間、眼前の敵を縛り付けるために。

「あ、ああ、腕が、私の腕が……！」
「落ち着きなさい！　大丈夫、腕は残ってるから！　箒、箒ってば！」

着地して箒を抱きしめ、落ち着かせるように声をかける。
ガタガタと震えるせいで装甲同士がこすれ、ぶつかり、がちゃがちゃとうるさく音を立てる。それがたまらなく鈴の心を焦らせていた。
命を掛けて戦うことの意味を、箒は本当の意味では知らなかった。だからこそ失う痛みにもがき苦しんで、痛みから逃れようと必死になる。
その様子を、鈴は痛々しそうに見つめ、それからさらにきつく抱きしめた。
それから腕のアーム部分だけを消すと、箒の手をアーム部分から抜き出してぎゅっと握りこむ。

「箒、落ち着いて……。ほら、腕はある、私の手を握ってるわ。ね」
「り、ん……？」

「そうよ。だから落ち着いて、大丈夫だから」
「……あ、ああ……」
ぞっとするほど冷たくなった肌に、暖かいそれが伝わる。恐る恐るなくなった感触のあった右腕でそれに触れると、自分が涙を流していたことを知った。
「私は……」
「大丈夫よ、大丈夫。……戦える？」
「……ああ、大丈夫だ。大丈夫だと、思う」
まだ震えてはいたが、しっかりと頷く。
「無理なら下がってもいいのよ？」
「……いや、下がらない。これ以上、自分を無様にしたくはない……！」
それは、涙まで流してしまった箒の矜持でもあった。
ぎりっと奥歯を噛み締め、睨みつけるようにラウラと戦うアルファを見据える。そこには、まるで遊んでいるかのようなアルファの姿が見える。
姉からもらった力を使いこなすこともできず、いまだ勝ち星を収めることも難しい。そんな自分が、涙など流すことは許し難かった。何よりも、己が。
「どんな感情を持っていても、私の姉から受け取った力だ。それを使いこなせぬまま、負けを認めてたまるものか……！」
「箒……」
勝ちたい。

涙まで流し、無様に倒れかけた自分が情けない。わざわざ機械の右腕までくれてやったのだ、次は自分が奪い取る番だと。箒はただひたすらに思う。勝利を。

「私は、勝ちたいのだ。この機体で」
「なら、勝てばいいじゃない。箒ならできるわ」

優しく微笑んでそう声をかけた鈴は、まるで聖母のような笑みを浮かべて、それから箒の手を引いて立ち上がった。
普段は鈴を見下ろしている形の箒の目には、鈴が自分よりもずっと背が高いような錯覚が見え、それから納得する。
鈴は己よりもずっと強いのだと、自らの力の一部を失った箒は得心した。

「……鈴」
「なに？」
「……ありがとう」
「ええ、どういたしまして」

パシンッ、と素手同士で音を立ててハイタッチしてから、箒は再びアーム部分を作り出す。が、やはり右腕の部分は無様に切り落とされていた。
だが、箒はそれに目もくれず、先に飛び上がった鈴と共に空へ戻る。

「ラウラ、お待たせ」
「遅いぞ鈴。箒も……、大丈夫なようだな？」
「ああ、心配を掛けた。もう大丈夫だ」
「あらら、戻ってきたんだ。まあいいや、また戦えるんだろ？　ほらほら、殺しあおう！　さあ！」

無邪気に笑うアルファを、射るような視線と共に見る箒。
その目には、先ほどの痛みに怯えた輝きはなかった。

「あれ、あれれ？　珍しいね、確かに片腕ふっ飛ばしたのに。怖くないの？」
「ふん、恐怖心はとうに失せたわ。貴様程度に姉さんの作った機体が負けるなど、あってたまるものか」

まるで箒の怒気そのもののように『紅椿』の紅い装甲が明滅しだす。
それに気づかぬまま、箒はその手に再び《空裂（からわれ）》を作り出し、静かに構える。
次の瞬間、紅蓮に染まったエネルギー光が箒の周りに溢れ出していった。

「……つまんないな。いいや、あんたはもう死ね。ここで、死にさらせェ！」

一瞬で箒の目の前に移動したアルファが、落胆気味に言い放って刃を振り上げる。
その直後、アルファがさっきと同じように手元で鎌の柄を回し、箒の真下から大鎌の刃を襲わせる。
ガギンッ！　と甲高い金属音が響き、確実に命中したと確信できたその瞬間――、

「――もう、見えたぞ」
「――ッ！？　くっ、このぉっ！」

凛と響いた箒の言葉に怖気が走ったアルファは、咄嗟に弾かれた

刃を上から思い切り落とす。
ところが、今までは面白いように当たっていたその攻撃が、今度は持ち上げられただけの《空裂》の刃で受け止められた。
「なんだ、なんだなんだよっ！　弱いくせに、粋がりやがって！　雑魚は死ね、死ねェ！！」
「貴様に私の欲を満たせるか？」
「……ぁ？」
いっそ凍てつくほどの怒気が込められた一言に、駄々をこねる子供のようだったアルファは思わず言葉をとめる。
「私は、勝ちたい」
地上に降りる前とはあまりに違うその姿に、アルファは少しだけ後ろに下がる。
それを見ながら、箒は続けた。
「この力で、この機体で、何よりも勝利を。強者と打ち合い、掴み取る、その欲を貴様程度が満たせるか？」
「うる……せェんだよ出来損ないがァ！　第四世代だからっていい気になるなよ、どうせ使えもしないくせに！」
「使えるさ。何せ今の私は――」
その直後、紅いエネルギー光はずたずたに切り裂かれた『紅椿』の右腕へと集っていく。
やがて、そこには切り落とされる前となんら変わらない右腕部があった。
それと共に、箒は願う。ただ無心に、勝利だけを。

「――最強を目指す身だ」

口にした瞬間、全身を力が満たす。

――Ｓｙｓｔｅｍ　ａｌｌ　ｇｒｅｅｎ.

――Ｏｐｅｎ　ａｂｉｌｉｔｙ.

それと同時に『紅椿』の削られていたシールドエネルギーも上昇していき、数秒ほどでマックスの八〇〇まで戻った。

ＩＳのシールドエネルギーを無限大に増大させる、『紅椿』の単一技能（ワン・オフ・アビリティ）。それこそが、《絢爛舞踏（けんらんぶとう）》だった。

――ようやくか、おぼこい娘子め。

「ああ、すまないな。――共に行こう」

どこからか頭の中に聞こえたその言葉に答え、それから悠然と現れた右腕に《雨月（あまづき）》を呼び出す。

そうしていつものように構えを取り、箒は今度こそまっすぐにアルファを見据えた。

「さあ、仕切り直しだ。その刃がこの身に届くというのならば、掛かってくるがいい！」

「ふざけやがって……、ぶっ殺してやるよォォォ！！」

鈴とラウラの二人がまるで消え去ったかのような存在感を発し、箒は絶叫して突っ込んでくるアルファを迎え撃つべくその身を動かした。

第５８話　紅椿（後書き）

はい、と言うことで箒ちゃん覚醒の回でした。
これにより、箒ちゃんも天災の領域がわかるようになりました。あと、《絢爛舞踏》の発動条件が『勝利への欲』に変更。強い相手と戦っていないと発動できないくせっけのある子に変身。
ま、いいよね！　元々力に溺れやすいなら、その力も全部使いこなせるようにすればいいじゃないという、そんな感じ。
鈴はオカン、ラウラはオトン。箒ちゃんは多感な一人娘、書いていてなんだかそんな感じがしました。

第59話　大人たち

『――ということだ』
「なるほど、つまり……、助けが必要だと」

一年の専用機持ちたちがアリーナで奮戦している頃、葵は地下シェルターの隅で端末の向こう側の女性と話していた。
生徒への避難の話が来たのが三五分ほど前、その中でも飛びきり優れたもの達はそれが『ただの避難訓練』ではなく、何か『緊急の要件に関係した避難』であるということに気づいている。
その『何か』を知らされ、葵は思わず歯噛みした。

「わかった、何とかして出てみる。学園の換気口の配線図は頭に入っているから、そこから行くわ」
『こちらも『打鉄』で出る。そっちも気をつけろ』
「了解」

端末の通信を切り、それから軽く周囲を見渡す。
生徒達の大半は友人達との歓談に興じているが、そのうちの数人は周囲に鋭い視線を送っていた。
それをみて、葵は端末を操ると二人の女性の名を分割表示で呼び出す。

『はいはい、なんスか？』
『なぁに、葵？　どうしたの？』
「二人とも、すぐに右奥の私のところまで来て、すぐに。周囲に気取られないように」
『……なーんかヤバげな話っすね？　オッケーッス』
『わかったわ、すぐ行く』

呼び出した二人は、それから三〇秒と立たずにやってきた。葵の注文通りに周囲の視線を引いていないところから、それなりの実力者であることがうかがえた。

一人はフォルテ・サファイア。専用ＩＳ『コールド・ブラッド』を所持しているが、どこの代表候補なのか、それとも企業代表なのかすら不明である。もっとも、その防御を葵の生身の蹴りの一撃だけでぶち抜かれてからは、葵のことを姉御と慕うようになってしまったが。

そしてもう一人はサラ・ウェルキン。セシリアと同じイギリス代表候補生ではあるが、専用機はない。しかしその操縦技術は高く、セシリアに指導したこともあるという。

始めの頃は衝突することもあったが、今では葵の良き友の一人となっていた。

「おまたせっス、姉御」

「おまたせ、葵。それで、何の用なの？」

「これからここをこっそり抜け出さないといけないわ。手伝ってくれない？」

「了解っス！　任せてくださいっ！」

「また厄介ごとなのね……。もう慣れたけど」

フォルテは本当に楽しそうに、サラは苦笑い気味ながらも了承する。

二人から良しの答えを受け取った葵は、唇の端を歪めながら手早く周囲を再確認し、それからシェルターの上部にある換気口の位置を確認すると、二人に上を見るように指差した。

「あそこから行くわ。サラは残ってオペレート、フォルテは着いてきて。専用機は持ってるわよね？」

「もちのロンロンっス！　サラ、頼むっすよ！」
「わかったわ。くれぐれもやばいと思ったら逃げてね、データを揉み消すのって意外と大変なんだから」

ちなみに、一年生の頃に葵が伝説を作らなかったのは、サラが必死にデータや噂の揉み消しに走っていたからである。自重していてもその超人ぶりは隠せない葵であった。

二人は頷いてから軽々と跳び上がり、頭上数メートルのところにある溝に手を掛けると、螺子で止められた部分を量子変換して取り出したドライバーで外して換気口の中に入る。

内部はきちんと掃除されているらしく、中に入っても汚れは見当たらない。

「フォルテ、大丈夫？」
「問題ないっス！」
「よし、このまま進むわよ。この先には少し開けた場所があるから、そこで一旦通信」
「了解！」

指示を出してから二人は四つん這いで先へ進んで行く。

しばらく進んだところで、パイプがやや膨らんだところに辿り着き、そこで一度歩みを止めて端末を操作する。

「もしもし、サラ？　聞こえる？」
『ええ、大丈夫よ。フォルテは通常回線を開いておいて、これからはこのチャンネルを使うわ』
『りょーかい』

葵は懐からインカムを取り出すと、端末に端子を接続し、無線式のインカムを耳に取り付けてから端末を懐にしまいこんだ。

「これで問題なし、と。サラ、そっちに送った見取り図は使える？」
『ええ、ばっちり。そこは……、少し進めば換気口が丁度上にあるから、そっちに入って。次は追って指示するわ』
「了解。行きましょ、フォルテ」
「ういっス」

サラの指示の元、二人は換気口のパイプの中を進んでいく。
千冬の頼みは、アリーナで戦っている一年生の助けに入ってほしいというものだった。そのためにシェルターを脱出し、こうして換気口を通り外へ脱出する計画を立てたのである。
二〇〇メートルほど進むと、丁度上に円形の金網があたり、それを手で押しあけて上のパイプへ移動する。
幸い音の反響は鈍く、大きな音を立てても外に響くことはなさそうだった。

「サラ、着いたわ。次は？」
『じゃあ、そのパイプを進んでいってちょうだい。そうすれば三階の女子トイレに出るから、そこから進んで』
「よりにもよってトイレなの？」
『文句なら設計者に言ってちょうだい。気をつけてね』

インカムからのサラの声が途切れる。
本当に、なぜトイレに繋げているのかが不思議でならなかったが、のっぴきならない事情でもあったのだろうと無理やり納得し、二人はそのパイプの中を進んでいく。
今度は少し短めだったらしく、五分も進んだところで出口の金網にぶつかった。
それを音をたてないように外すと、脇に寄せて顔だけを出し、外を探る。

人の気配はおろかネズミ一匹感じ取ることができず、葵はそっとその身を外へ出した。

「……よし、いいわよ」
「うぃーっス、よっと」

ストン、と軽い音を立てて着地した葵とフォルテは、周囲を見渡しながらゆっくりとトイレの入り口まで移動すると、葵がインカムでサラに呼びかけた。

「サラ、外に出たわ」
『いい調子ね、今近くの監視カメラをハックしたわ。学校の構造は覚えてるわよね？　そこからアリーナ入り口を目指して』
「了解」

インカムからの声に従って、二人は廊下を進んでいく。と、その途中で突然インカムから大きめの声が響く。

『待って！　待って、ストップよ……』
「どうしたの？」
『これ……、今そっちに映像回すわ。とにかく見て』

サラの声とともに、端末に映し出された映像には、廊下を進む黒ずくめの男たちが映っていた。
手には銃器を所持しており、明らかに一般の人間ではないことがよくわかる。
それを見て、葵は軽く眉を顰めながらサラに声をかけた。

「サラ、大丈夫。私なら大丈夫よ。フォルテ、いける？」
「普通の銃器なら問題ないっス。専用機もあるっスから」

「そういうことよ。ナビよろしく、ただしあまり戦闘はないようにお願い」
『……まったく、了解。貴女といると退屈しなくていいわね。そこから一番東の階段を二階に下りて、そこから最初の窓から飛び降りて』
『……は？』

呆れながらも嬉しそうに答えたサラの声に、思わずフォルテはそう声を返す。
普通であれば専用機もちでない葵の方の反応であろうが、残念ながら葵が常識の適応外にあると知っているサラはあっさりと言ってのけてしまった。

『まさか、アタシは生身でっスか！？』
『そうよ？　ＩＳを展開したらばれちゃうじゃない』
「大丈夫よ、私が抱えてあげるわ」
「あ、姉御に抱いてもらえるんだったら、そのぉ……」
『……葵、フォルテは放って先に進んでちょうだい』

突然真っ赤になってにやけながらくねくねしだしたフォルテに、それを監視カメラで見ていたサラは辛らつに言い放つ。明らかに呆れているように聞こえたのは気のせいではないだろう。

「……フォルテ、行くわよ」
「あ、待ってくれっス姉御ー！」

二人して音をたてないように廊下を進んでいくと、一番端にある階段をゆっくりと降りていく。二階にも見たところ人影はなく、障害なく降りて行った。
二階の階段から一番近い窓を開けると、下と周囲を確認して、そ

こにも人影がないことをしっかりと確認する。

「……ほんとに飛び降りるんスか？」

「当然。怖いなら残る？」

「……えっと、抱きかかえてくれるなら」

「はいはい」

またもや頬を染めて言ったフォルテを軽々と抱き抱える葵。誰が見てもお姫様だっこだと答えるそれをされたフォルテは、今度こそ顔を真っ赤にしてオーバーヒートした。

「……フォルテ、フォルテ？」

「あ、姉御が、姉御が私のことをぉぉぉ……！　え、えへへぇ……」

「まったく……。ほら、行くわよ！」

反応しそうにないフォルテを抱いたまま窓から飛び降りた葵は、そのまま一切の衝撃も音も立てずに着地する。人一人を抱えて五、六メートルの所から飛び降りたとはとても思えない状態だった。

「フォルテ、そろそろ行くわよ？」

「へっ？　あ、はいっス！」

ようやく戻ってきたフォルテとともに走りだし、アリーナ目指して走っていく。

と、そこでサラの通信が入った。

『二人とも、無事に出たみたいね。今は外の監視カメラからモニターしてるわ。そこからアリーナの来賓入り口に向かってちょうだい。第一アリーナに出るはずよ』

「了解。ここからは通信なしでいいわ。オペありがと」

『どう致しまして。それじゃ、気をつけて』

それきりサラの声が消え、二人は周囲を警戒しながら進んでいく。外に黒ずくめの連中はいないらしく、まるで何事もない昼下がりのように進んでいけた。

アリーナの扉を開け、中に人影がいないことを確認してから内部に体を滑り込ませる。

「敵影なし、と。フォルテ、いいわよ」

扉の外で待っていたフォルテを中に呼び込み、ゆっくりとアリーナの内部へ歩を進めていく。すると、奥の方からはＩＳの駆動音が聞こえてきた。

葵は手の仕草でフォルテにＩＳを装着するように言うと、自分も指にはめたＢＣリングからブレードを呼び出（コール）して身構え、ゆっくりとアリーナの通用口からアリーナの中心部へ進む。

すると、そこには特徴的なフォルムをもった一機のＩＳの姿があった。

「……恋華（れんげ）？」

「その声……、葵ちゃん？　ちゃんと出てこれたのね。それで、そちらは……、フォルテ・サファイアさんね」

「な、なんで知ってるんスか」

「全生徒の名前はちゃんと覚えてるわ。で、葵ちゃん。ここに来たってことは、状況はわかってるわよね」

生徒会長である恋華は、人を魅了するようなその笑みを葵たちに向けながら近づいてくる。

目の前まで来たところで、葵は口を開いた。

「ええ。フォルテに説明よろしく、私は面倒だから。それで、戦闘はどこで起こってるの？」
「第六、第五、第三アリーナよ。第六アリーナのシールドバリアが砲撃一回で破られたわ」
「また高出力な武装ね。わかった、私が第五に行く。恋華は第三に行って。フォルテはここで待機よ」
指示を飛ばし、空いている片手にナイフをコール。それだけで、葵の支度は済んだ。
葵に命じられたフォルテはこくりと頷くと、宙に浮いてごろりと寝転がる。フォルテのいつもの待機スタイルだった。
「ところで、千冬さんは？」
「もうすぐ来るわ。今教員用の『打鉄（うちがね）』の最適化（フィッティング）中よ」
「――すまん、待たせた」
その言葉とともに奥からやってきたのは、『打鉄』に身を包んだ織斑千冬だった。
装備はハンドガンが取り外され、刀一本に最適化されている他、動きやすさを考慮してか装甲もやや少なめになっていた。
「それでは、行くとしよう――」
その一言で、二人も頷く。
「――さあ、反撃開始だ」
最強たちが、動き出した。

第５９話　大人たち（後書き）

初出演のフォルテ・サファイアとサラ・ウェルキンでした。
だいぶキャラ変ってるのは許してください。サラは原作で名前しか出ていないのをいいことに好き勝手やりました。フォルテはもっと好き勝手やりました。
あ、フォルテは葵ラヴです。はい。

最強たちが立ち上がった次回、とうとう決着か？

第６０話　幕引き

強烈な爆風が三人を襲い、大きく距離を引き離す。
その爆発は、《ブラック・カーテン》の武装特性、《ブラッド・カーテン》によってビットへと変わった《ブラック・カーテン》が自爆したものだった。

「くぅ……！」
「二人とも、大丈夫！？」
「私は、大丈夫……！」
「私も大丈夫です！　けど、あの攻撃は……」

歯噛みするように香織が言う。
グリムの防御壁であった《ブラック・カーテン》が事実上失われた今になっても香織たち三人が攻め立てられない理由は、単（ひとえ）にその攻撃性能の高さと厄介さにあった。

「近づけば任意で起爆できるうえに、自己再生もちの攻撃ビットかぁー……、厄介なことこの上ないわね」
「おいおい、せっかく防御をやめてやったのに、これでしまいじゃねェだろ？」
「もちろんよ。ダンスはまだまだ序章だもの」
「そうこなくっちゃぁ、なァ！」

一つ吼え、グリムはビットと化した《ブラック・カーテン》を引き連れて突っ込む。
香織の連撃を流れるように回避し、簪の一撃を受け流し、もっとも脅威度の高いナターシャ目掛け突進していく。
それを迎え撃つように、ナターシャは《銀の鐘（シルバー・ベル）》を構えると、弾

数を気にすることなく滅茶苦茶に乱射していくが、その悉くをグリムは次々に避けていった。

「これなら、どうっ！？」

その言葉とともに繰り出されたのは、左腕部に格納されたエネルギーブレード《銀の刃（シルバー・ブレード）》の刃だった。

銀色に輝くそれをグリム目掛け放つナターシャ。確実にそれが当たったと思われた、その瞬間。盛大な爆発音とともにナターシャが吹き飛ばされる。

「がは――っ！」

「ナターシャさんッ！」

「アメーのよ、武器はいくらでも元に戻せるんだからなァ！」

真横から接近していた一基のビットの爆発によって吹き飛ばされたナターシャは、咄嗟に空中で姿勢を制御すると斜めに地面を見つめる姿勢のまま《銀の鐘》を次々に打ちはなつ。

弾丸によって抉られた大地が土煙を巻き起こし、更に視界を悪化させたところで、ナターシャはようやくその手を休めた。

「はぁっ……、はぁっ……！」

「一撃くらいは……、入った……？」

「――ヵ、カカカカカカカアアアアアアアッ！！」

『敵機健在、ダメージが通っていませんっ！』

甲高い笑い声と同時に、全員の個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）に響いたイヴの言葉でナターシャは咄嗟に防御姿勢をとる。

土煙を突き破り、その向こうから二本のブレードをその手に備えたグリムが、恐ろしい笑いを顔に貼り付けてナターシャへと突き進

んで行く。

――いけない、アレは！

「絶（た）ァァァァアァァァアアアアァァァアアァアァアアアッッッッッッッッッつッッッ！！」

ナターシャの頭の中に声が聞こえたその刹那、雄叫びと共に両肩に叩き込まれる金属刀。

肩の装甲を砕き、骨まで衝撃を伝えたそれは、斬られずにあったものの、その中にある骨はぐしゃぐしゃに砕いていた。

「グッ、ガアアアァァァァアァアァアァアアァアアァッ！！」

「な、ナターシャさん！？　お前……！！」

「クク、カカカカカカカ！　肩の骨をぶち壊した！　もうテメェは戦えねェ！」

「ぐぅ、ううぅぅうう……！！」

宙に浮いてはいるものの、激痛と呼ぶことすら生ぬるいであろうそれに苛まれ、ナターシャは脂汗を滲ませながら呻いた。

「さァて……、トドメといこうかァ！」

「させるかっ！　《夜雀》武装特性起動！　《クリア・スピック・オール》！」

「《蒼鉄（あおがね）》、《蒼鋭蒼鉄（ソウエイノアオガネ）》……ッ！」

咄嗟に《夜雀》を呼び出して武装特性を発動、無数の見えない弾丸を一斉に撃ち出す香織と、《蒼鋭蒼鉄》を発動して刃を飛ばす簪だが、そのどちらもが突然現れた《ブラッド・カーテン》に阻まれてグリムの元へは届かない。

「無駄だぜェ……、逝ィィッちまいなァァァァァ！！」
「くぅ――――！」

――ダメェェェェ！

振り下ろされる双刃がナターシャへと迫る。
もう駄目かと、目を閉じ覚悟した刹那――。

ヒーローは、遅れて現れる。

「……ァア？」
「ふむ、同僚に好き勝手してくれたようだな。この代償は支払ってもらわねば」

斬られていないその感触と、聞き慣れた友の声に、恐る恐る目を開く。

「――間に合ったようだな。全員無事、ではなさそうだが。まあ、少し待て、すぐに片付ける」

そこには、『打鉄』を纏った『ブリュンヒルデ』がたたずんでいた。

「テメェ、邪魔してくれてんじゃねェよ糞が……」
「すまないな、私は今――」

刃を押し返し、片腕でそれを軽々と使いこなしてみせる千冬。数年も前線に立っていないなどというブランクは感じさせることもなく、千冬はその一本だけで次々と剣を弾いていく。

そこには、澄み渡り研ぎ澄まされた殺意が篭っていた。

「――無性に貴様を斬りたくて堪らんのだ、童（わっぱ）」

「……ちっ、共鳴してやガラァ……。こいつぁ、やべぇな」

目を見開き猛攻を仕掛ける千冬に対し、先ほどまでの余裕を完全になくしたグリムは全ての武装を千冬に大して使用することで何とかその猛攻を凌いでいた。

そんなグリムが零した一言には誰かが気づくこともなく、ただの刀剣であるはずの『打鉄』の基本兵装にグリムの《ブラッド・カーテン》を発動させた《ブラック・カーテン》は次々に破壊され、爆破する暇すらない。

「アルファ、ローウェン、セカンドフェイズだ！　俺は離脱するぜェ！」

「させると思うか？　せめて首は貰い受けるぞ……！　斬ッ！」

「チィィ！　量産機と共鳴した程度で、只の人間が粋がってんじゃねェぞォ！　《ブラッド・カーテン》、カーテンコォォォォォォルだァァァァァッッ！！」

直後、残っていた《ブラック・カーテン》は熱湯に入れられたように膨張し、そして盛大な爆発音と共に金片を散らして爆散する。

飛んできたそれを刀で全て叩き落した千冬が見たものは、遥か遠くに飛び去る『ニュクス』の機影だった。

「……ちっ。全員戻るぞ！」

舌打ちした千冬は、そう声をかけてからナターシャの体に負担を与えないようにナターシャを抱えると、そのまま香織と簪と共にアリーナの入り口へと戻っていった。

一方、それよりも少し前、葵は第五アリーナへと到着した。

「逃しませんわ！」

「しかしこれでは千日手、互いに消耗を続けるだけだな」

そこにいたのは、今までとは全く違う形の、一二基に増えたビットを操りながら狙撃用エネルギーライフルを高速機動で引き金を引くセシリアと、それを恐ろしい速度で回避していくローウェン。

その様子を少しの間見ていた葵は、ふと自分のやるべきことを思い出してアリーナの中へと足を踏み入れた。

「そこの二人、止まれ」

ギシリ、とその場が止まり、歪む。

冷酷なほどに強烈で重い言葉は、空間すらも停止させるほどの重みを含んでいた。

「一之瀬葵……、姉君か」

「……その口ぶり、やはり貴様『人形』か」

「貴女がでてくるとは……、そろそろ幕引き、ということか」

言葉を交わす二人を、セシリアはただ見つめる。自分が口を出す

ところではないと、雰囲気でわかっていた。
と、ローウェンはセシリアの方をまっすぐに見つめて声を上げる。
「セシリア・オルコット！　なかなかに好ましい死合手（しあいて）であった！　次にまみえる時が来るとするならば、その時こそはこの決着、つけさせてもらおう！」
「……ええ、私の名において約束致しましょう。いずれ、またいずれ！」
互いにそう言葉を交わすと、ローウェンはゆっくりと空へあがっていく。
その顔には、穏やかな笑みが浮かんでいた。
「では諸君、私はここでお別れだ。良き日々を！」
「ローウェン……、何を――！？」
「まずい、退避しなさい！」
葵の叫びも遅く、アリーナ全体を恐ろしいほどの爆発が包み込んだ。
「このおおおお！」
「遅いぞ」

上段から落とされた刃を紙一重で見事に避け、手首へ向けて逆刃になった《空裂（からわれ）》が下から襲う。

それをギリギリのところで《デスサイズ》の柄をずらし対応して見せたアルファだったが、《空裂》はその刀身に紅いエネルギーを宿したかと思えば、恐ろしい勢いで細振動し、あっという間にその柄を切断してしまった。

「ふざけるなよ糞ッ！　ただの人間に、共鳴したくらいで負けるなんてあるもんか！」

「貴様が何を口走っているのかは知らんが……、無駄口を叩いている暇があるか？」

「このっ……！　《デスサイズ》武装特性起動！　《魂狩（タマガ）リ》！」

目の前でそう叫んだアルファの手にあった《デスサイズ》が、その言葉を発した途端にがちゃがちゃと震えだす。

次の瞬間、アルファは今までとはまるで違う速度で斬り込んで来た。

「くっ……」

「はは、あははははは！　どうだ、武装特性も使えないくせに、いきがるなよ！」

「……なるほど、今のがそうか。常々、香織達のあの力がどうやって引き出されているのか疑問だったが……」

――もう覚えたぞ。

にぃ……、と深く笑った箒は、次々に斬り込み装甲に傷をつけている《デスサイズ》を足で蹴り飛ばすと、空裂を鞘へと収める。

前傾姿勢へと変わった箒は、鋭くアルファへと視線を固定すると、息を止め言葉を吐き出した。

「《空裂》、武装特性起動……！　《空海断絶（チヘイヲワル）》！」

その直後、紅い閃光と共に放たれた『刃の残滓』がアルファと『タナトス』に一瞬で到達、片腕を紙切れのように斬り落としてアリーナの壁を縦に裂いて消え去った。

装甲はおろか絶対防御すら発動させず、あらゆる物を切り裂くその武装特性を受けたアルファは、痛みすら感じさせる憎悪をこめて箒を睨みつけると、おもむろに自分の胸へと残った片腕を突き立てた。

ぞぶり、と肉を裂くおぞましい音が辺りに響き渡る。

「予想外だよ、天災の妹なら警戒しておくべきだった……。まあ、それも終わりだ、僕はここで幕引きだからね……！」

「貴様、何を……？」

「こういう、ことさぁぁぁぁ！」

「熱量増大!?　くっ、ＡＩＣでは！」

「箒、逃げてっ！」

「遅ォい！　地獄で会おうぜベイビィィィィィ！」

吠える声と共に、辺り一体を爆発の熱と風が包む。

それは奇しくも、ローウェンのものと全く同じ瞬間だった。

第６０話　幕引き（後書き）

自爆に巻き込まれた第五と第三アリーナの彼女達の安否やいかに！
そして彼らの目的とはなんだったのか。
次回も乞うご期待！

次回終わったら7巻かも……。今から進め方考えておかないと。

第６１話　その後

医務室。

立ち入った途端に鼻を突く薬品の臭いに顔を顰めながら、箒はそこを進んでいった。

医務室のベッドを占拠しているのは、先刻の戦いで重傷ではないにしろ怪我を負った者達、箒の級友達であった。

あの戦いの最後、自爆を行ったローウェンとアルファに相対していた者達のうち、身動きの取れなかった一夏、シャルロットは絶対防御もあり軽傷、至近距離で受けたセシリアは火傷と咄嗟の自身の能力以上の過剰使用による頭痛に悩まされていた。

また、グリムの攻撃によって両肩を破壊されたナターシャは集中治療室に入れられているが、既に三時間になる。束の特製ナノマシンの投与の甲斐もあってか、既に快方に向かっているようだった。

結局、無事だったのは箒、ラウラ、鈴、香織、簪の五名。助けに入った千冬と葵に怪我はなかった。

では、あの至近距離で箒たち三人が爆発から逃れられたのはなぜか。答えは、目の前で一夏の傍に座る女性だった。

「……あら、こんにちは箒ちゃん」

「どうも」

軽く会釈するように頭を下げてから、向かい合うように椅子に座る。

生徒会長、更識楯無。暗部『更識』の一七代目当主に当たり、本名は恋華。そして、箒にとっては姉の同類という認識もある。

彼女の遣わした水のヴェールによって爆発は無効化され、その場にいた者達は怪我を負わずに済んだのだ。

「先ほどはありがとうございました。貴女の助力がなければ、どうなっていたか」
「……箒ちゃん、変わったわね」
「……ええ。自分が真に求むるものを見つけた、まさにそんなところです」

そう答えた彼女の姿は、特に変わるところはなかった。自然体でそこにあり、背筋が伸び、まさに武人と言う言葉をその身で表しているような少女。

しかし、確かに彼女の中は変わっていた。あの時、『紅椿』がなんなのか、自らが何を欲しているのかを確かに見つけていた。

だからこそ彼女は《空裂(からわれ)》の武装特性を手に出来たのであり、それこそ彼女が本物となった証拠である。

「それじゃ、私は千冬さんのところに行ってくるわねー」

ひらひらと片手を幾度か翻し、医務室から出て行った恋華。

その背中を見送った箒は、そっと眠っている一夏の額に掛かっている髪を払うと、その手を膝まで戻してから口を開く。

「……一夏」

呼びかけた声が帰ってくることはない。強烈なダメージがいまだ体の中に残っているらしく、それが抜ける深夜辺りまでは目を覚まさないだろうと言う葵の診断だった。

箒が触れてみた限りでは、自身も葵と全く同じ判断をした。彼女は信用できる人でもあるため、箒はその答えに確かな自身を持っていた。

だから、その呼びかけは無駄なものだと知っている。

「私は、まだお前と共には生けない」

それ故に、箒は自分に誓うように続ける。

「この戦いで、私は己が思う以上に未熟であることに気づいた。私がもっと強くなったとき、そのときには……」

――想いを、告げよう。

心のうちの恋慕を、しかし箒は吐き出すことを是としなかった。自らのそれを持ったまま、武の道を極める。その決意を持って、箒は口を噤む。

「……ではな、一夏。早く起きろよ」

小さな笑みを口元に浮かべ、箒はその場を後にした。紅椿の待機状態である赤い紐に付いている金と銀の鈴が、小さく奏でた音を置き土産に。

「……まったく、素直なのかそうでないのか」

箒が去った後、そこに小さく呟く者がいた。

金色の髪を揺らし、頭痛に苛まれながらも箒と同じように小さな笑みを浮かべるのは、セシリア・オルコットだった。

ベッドに預けていた身を起こすと、耳に付けられている『ブレイブ・ティアーズ』を外して手の平に乗せ、優しげな笑みでそれを見つめる。

『ブルー・ティアーズ』の二次移行形態、『ブレイブ・ティアーズ』。その待機形態は以前と変わらぬものの、それが確かに変わっていることを、セシリアははっきり知っていた。

「次の休みには、取り急いでお墓参りに行かなければ参りませんわね。かっこつけのお父様に、文句を付けなければなりませんから」

――ねぇ、ブレイブ・ティアーズ？

最後の言葉は心の中で呟く。

あの戦いの中で確かに頭の中に響いた、力強い女性の声。母に似た、暖かさと厳しさを持ったそれに、きっとその声は届いていると信じている。

セシリアは一度目を瞑り、それから少しの間音のしない医務室の空気に耳を澄ませ、それから再び瞼を持ち上げる。

それから『ブレイブ・ティアーズ』を耳に付け直し、頭を襲う鈍痛が無くなっていることに気が付いた。

「あら……」

後は火傷を治すだけか、とぼんやり思いながら、セシリアは再びベッドに身を預け、目を閉じた。

「結論から言えば……、あいつらは人ではない」

会議室では、その一言で会議が始まっていた。

あの戦いの後、私たちを除く一般生徒は全員が寮に帰され、アリーナでは職員達が急ピッチでアリーナの修復に当たっている。
この会議室にいるのは、怪我のなかった専用機持ちと、お姉ちゃんに協力してくれたフォルテ先輩、サラ先輩、助けに駆けつけてくれた千冬さんに恋華さん、お姉ちゃんの計一〇名。
円卓を囲むように座った私たちの前で、千冬さんだけがそこに立っている。山田先生は修復班に回されてしまっているせいで出席できていなかった。

「人ではない？　どういうことです？」
「彼らはＩＳコアを心臓部として生み出された、完全なバイオノイドよ。簡単に言えば人造人間ね」
「さらに言えば、ＩＳコア自体も残骸から解析した結果、束の作ったものではないことが判明した」

お姉ちゃんと千冬さんが話を進めていると、突然中央に仮想ディスプレイが映し出され、そこに束ちゃんの顔が浮かんでくる。

『私自身が解析したからね。皆、今回はお疲れ様。あれは厳密にはＩＳコアではなく、量産と人体への結合を最重要視した劣化コピーだよ。だけど、あれほどのクオリティを保って再現するなんて……』
「さすがのお前も凹んでいるようだな？」
『まあ、それ以上にぷっつんしてるけどね。ああ、これは亡国機業（ファントム・タスク）の仕業じゃあない、これが出来るならＩＳを奪う必要はないからね』
「そうでしょうね。たっちん、これをやったのがどこの誰か調べはつきそう？」

ニコニコしながらも怒気を隠そうとしない束ちゃんを見ながら、お姉ちゃんが苦々しい顔で言う。
束ちゃんはこくりと頷くと、既にやっていると、四〇枚近くの仮

想ディスプレイを指し示した。

「ありがとう、たっちん。それじゃあ、そっちはよろしく」

『はいはーい。皆、無理しちゃ駄目だぞっ』

きゃぴきゃぴとした雰囲気を全力で撒き散らしながら、束ちゃんの映ったディスプレイが閉じられる。

……なんていうか、束ちゃんって見てると癒されるなぁ。ほら、子供見てるみたいで。

「さて、フォルテ・サファイア、サラ・ウェルキン。ここでのことは戒厳令が敷かれる他、上にバレれば別口で罰則が入る危険性がある。くれぐれも言動と取り扱うデータには注意するように。いいな？」

「は、はいっス！」

「了解しました」

「……まあ、細かい話はここまでだ。恋華、この二人と一之瀬姉の分もやれるか？」

「もちろんですよ、千冬さん！　任せてください！」

ぶんぶんと振られる尻尾が見えそうなくらいに満面の笑みを浮かべる恋華さんだった。

「では、これで会議は終了とする。皆、不審な点があれば逐一報告するように。また、来週には専用機持ちのみのタッグマッチトーナメントが開催される予定だ。各員とも注意を怠るな」

その言葉と共に、千冬さんは恋華さんを伴って会議室から出て行った。

それに続く人はおらず、皆がようやっと一息つけた、といったと

ころだった。

「……はぁー、まだまだね、アタシ」

「私もだ。一対三で手も足も出ないとは……」

「一年生、今から落ち込んでもしょうがないっスよ。まずはどうやったら強くなれるのかを考えるほうが有意義っス」

愚痴るふーちゃんとラウラに声を掛けたのは、フォルテ先輩だった。

決して軽い空気を崩してはいないが、それでも気遣っていることがわかる声音で言った先輩は、ぐっと椅子から立ち上がると、会議室の入り口まで歩いていく。

「アタシには、一年生達がどういう戦いをしてきたかってのは知らないっス。けど、肝心なのは止まることじゃなくて進むことっスよ。アタシたちにはまだまだ時間があるんスから」

「そういうことね。聞きたいことがあればいつでもいらっしゃい、二〇四二号室にいるから」

「あ、ならアタシのとこにも聞きに来るといいっス。隣の二〇四一号室っスよ」

そういい残して去っていったフォルテ先輩と、その後を追って出て行ったサラ先輩。

後には、お姉ちゃんと一年生陣が残される。

その中で席を立ったのは、箒さんとお姉ちゃんだった。

「私はそろそろ戻ろう。明日もあるからな」

「私も戻ろうかな。皆、夜更かししちゃ駄目よ」

そそくさと立ち去った二人もいなくなり、残ったのはいつものメ

ンバー。

「……私たちも戻りましょうか」
「そうだな」
「同意……」
「そうだね」

ふーちゃんの言葉に三者三様で頷いた私たちは、そのまま会議室を後にすることにした。
なんか、しまらないなぁ……。

会議が終わった後、束は普段の姿からは想像もつかないほどに顔を歪めながら無数のディスプレイと向き合っていた。

「あの組織構成、どこかで見覚えがある……。もっと昔に見た、何か……」

そのディスプレイの一つに映し出されているのは、ＤＮＡの構成図とＩＳコアのフラグメントマップだった。
束と限られた研究者しか知らないことだが、ＤＮＡとフラグメントマップは元々互換性を持っていた。それ故に、フラグメントマップをＤＮＡの代わりとして人間に移植することも、ＤＮＡをＩＳコアにフラグメントマップの代わりとして入力することも可能ではあ

った。

しかし、それを行う労力の割りに得られる成果はまるで代わり映えしないもののため、束はそれを企画倒れとして記憶の片隅に追いやっていたのだ。

「それを、ここまで発展させる人がいるなんて……」

人間のＤＮＡを全てフラグメントマップで代替し、心臓部位を全てＩＳコアで代用する。それを見る限り、束に言わせればあれは人間に限りなく近い人造人間ではなく、人間に限りなく近いＩＳであった。

「……もう少しで思い出せそうなんだけど」

こつこつと金属製の机を指先で叩きながら呟いた束の声は、誰が返すこともなく暗闇に吸い込まれるだけであった。

第６１話　その後（後書き）

オリジナル設定爆☆誕っ！

さて、次回から七巻の内容に入っていきますよー！　多分ね！

第62話　タッグマッチのお話

あの襲撃事件から数日、ＩＳ学園はようやく平和な日常に戻った。
私たち専用機持ちも、そんな穏やかな日々を享受していた。

「それで香織、今週末のあれ、どうするの？」

お昼休み、一夏たちと共に屋上で食事を取っていた私に、ふーちゃんがそう聞いてきた。
ちなみに、今この場には一年生の専用機持ちは全員揃ってます。
国一つくらい一瞬で滅ぼせる戦力だね。お姉ちゃんがいたら一瞬でこっちが滅ぶけど。

「そうだねぇー……。どうしたもんか」
「ねえ、一夏は誰と組むの？　もう目星付けてる？」
「……いや、全く」

シャルロットさんの言葉に、一夏も首を振る。
そう、困ったことに今週末の全学年合同タッグマッチ、その中の専用機部門で出ることになっている私たちだけど、その肝心のタッグが決まっていないのです。

「なあ、箒はもう決めたのか？」
「……ああ。セシリア、組まないか？」
「わたくしですの？　珍しいですわね、箒さんがそんなことを言い出すなんて。てっきりわたくしは……」
「誓いを自ら破るわけにも行くまい。また強くなったのだろう、是非とも見てみたい」
「ふふ、いいですわよ。そうも情熱的な申し入れ、断っては名が廃

りますもの」

……あれ、なんかあの二人やたら仲がいい？

そういえば、あの戦いで二次移行したんだよね、セシリアさんの機体。箒さんも何か掴んだみたいだし、一歩進んだ者同士気が合うのかな。

「ということで一夏さん、わたくしと箒さんは先約済みですわ」

「おう、わかった。それじゃあ……」

「あ、い、一夏！　僕と組まない！？」

「んー……、そうだな。いいぜ」

「ほ、ほんと！？　やたっ……！」

シャルロットさんが物凄く喜んでいるけど、一夏の場合は「前も組んだし、やりやすいだろ」みたいな感じだろうね。賭けてもいい。

さて、上級生と組むわけにも行かないし……、またいつものメンバーで組むってことになりそうだ。

「よーし、じゃあジャンケンよジャンケン。勝った人が香織と組むってことで」

「あれ、私の意志は？」

「いいだろう、ドイツの意地というものを見せてやろう」

「あのー？」

「ふっふっふ……、あまり私を舐めない方がいい……。これでも私は昔、巷でジャンケン界にこの人在りと謳われたのだ……」

「……もういいですよぅ」

――五分後。

「「「あいこでしょっ！　あいこでしょっ！　あいこでしょっ！」」」

」

――更に五分後。

「いよっしゃあぁあぁあ！」

「くっ……！　まさかあそこでパーを出すとは……！」

「私の負け……。二代目ジャンケンチャンピオンの座は、鈴にあげる……」

ということで、私のパートナーはふーちゃんに決定しました。

……いや、あれでよかったのか？

その日の放課後、箒はセシリアとタッグの特訓を積むためにアリーナにやってきていた。

『しかし、本当に良かったのか？』

『何がですの？』

『一夏に立候補しなくて、ということだ』

『それを言うなら箒さんこそ。何か思うところがあったのでしょう？』

互いに相棒を身に纏ってアリーナの片隅に佇む二人は、個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で声を交しあう。

元々は同じ相手に恋したライバル同士であり、犬猿の仲でもあった二人だったが、今の二人を見る限りそのような気配はまるでなかった。

『私は、私が更なる高みへ昇るその時まで、恋慕の情は封ずる事にした。『紅椿』と真剣に向き合ったときにわかったのだ、色恋にかまけている限り、この力は私のほうを向いてはくれないと』

『隣へ立つ為に離れる、ということですか。……気高い心意気ですわ』

『そんなものではないさ。私は、ただ勝利を得るために強くなりたいだけだ』

『それでも、ですわ』

優しげな声音を返すセシリア。

その声にほんのわずか口端を持ち上げた箒は、取って返すように声を上げる。

『それで、お前はなぜだ?』

『わたくしは……、彼との約束を果たすために、この力を、お父様から継いだ遺志を、更に強固にしたいのです』

『父の遺志……。彼というのは、例の襲撃者か』

『彼は自爆という手をとりましたが……、なぜか、死んだように思えないのです』

『……なら、再び見える時が来るといいな』

『ええ』

言葉を切り、そしてどちらからともなく武装を構える。

二人とも、強くなりたいという願望に見合うだけの確固たる理由を見つけ、それを叶えるために一夏と相対することとなっただけのこと。

今の二人は同じ人を想う少女ではなく、自分の想いによって立ち、その手に武器を携える戦士であった。

「行くぞ、『紅椿』」

「行きましょう、『ブレイブ・ティアーズ』」

直後、セシリアの《ブルー・ティアーズ》が放った一二の光を、箒が《空裂（からわれ）》の刀身で掻き消していく。その刀身には紅いエネルギーが纏われており、それが微細な振動によってＢＴエネルギーを打ち消していた。

「不意打ちか」

「卑怯だなんて申しませんわよね？」

「理解するためには刃を交えること。卑怯などという言葉で覆い隠す気はないっ！」

ＢＴエネルギー弾を《空裂》で打ち消しながら距離を詰めていく箒に対して、セシリアは徹底した中、遠距離戦闘を続けていく。

近づけばミサイルとＢＴライフルによる狙撃の雨が降り注ぐ中、箒は器用にも片手に《空裂》を、もう片手に《雨月（あまづき）》を持ってその弾のことごとくを打ち消し、切り払いながら突き進む。

接近して一太刀を浴びせんと刃を振るった直後、それを食い止めるように《空裂》に打ち付けられたのは、『ブルー・ティアーズ』の頃からセシリアの機体に搭載されている唯一の実体近距離用刀剣型兵装、《インターセプター》であった。

「近接武装は苦手ではなかったか？」

「克服したのですわ、使えないなんてわがままは言っていられませんもの！」

「それは結構、だっ！」

セシリアをその剣ごと断ち切らんと、大きく振り切ったその手へ目掛けて撃ち放たれる六つの光の矢を、腕部の展開装甲を開き、上方へ加速させることで無理やり回避する。

その程度の急加速では痛みを感じることがないくらいには、箒は自身を鍛えていた。

無論、その回避が行われた瞬間にはセシリアも次の攻撃に移っている。

回避されたはずの光の矢を、セシリアは無意識のうちに箒へ向けて捻じ曲げる。武器として扱うのではなく、自分の一部として、自由に使えるものとしてそれを認識することで、偏光制御射撃（フレキシブル）を使いこなしていた。

曲げられた光弾を一つ、二つと切り捨て、箒は進む。空を蹴るように急な方向転換を重ねながら、その機体の特性である全身の展開装甲をフルに使用して、箒はその技法、不確定三次元攻法（ランダム・トリック）を少しずつ完成の形へと突き詰めていく。

あの戦いの中で、一瞬のうちにアルファが見せた鎌の扱い方。現れたと思えばそこにはなく、思いもよらぬところからの強烈な一撃が襲いくるそれを思い浮かべながら、箒はそれを自分の体全体で行っていく。

最初の頃は捻じ曲がったＢＴエネルギー弾がかすっていたため、強制的に展開装甲からエネルギーを噴射して回避していたが、一〇分も経った頃には箒の動きはなかなか様になってきていた。

「まったく、奇妙な機動ですわね！」

「それが売りでな！　散々やられた相手から何も学ばずにいるのでは、意味がない！」

上段と見せかけた下段からの突き上げを《インターセプター》で受け止めると、間髪いれずに引き金を引かれた《スターダストｍｋ

?》から吐き出された光弾が、ビットからのものと合わさり太い帯となって箒を付け狙う。

「ではそろそろ――！」

それを箒の眼前で一気に一三個の光弾に拡散させると、その中心を突くように《スターダストｍｋ?》の引き金を更に二度引く。

「閉幕ですわ！」

合わせて一五となった光弾は交わり、時に弾けながら箒の周囲を付かず離れず飛び続ける。

その直後、箒が構えに入った瞬間にセシリアが叫んだ。

「《ブルー・ティアーズ》武装特性起動！　《そのなみだをはらいましょう（Blow Off Tears）》……！」

「使えるようになったか……！　いいだろう、篠ノ之箒、『紅椿』！　推して参る！」

《ブルー・ティアーズ》の武装特性を起動させ、ほぼ全てのＢＴエネルギーを辺り一帯に散布したセシリアは、その二次段階として八基のＢＴビットをその周囲に配置、中に入れた四基のビットから残りのＢＴエネルギーを更に散布し、内部のエネルギー密度を高めていく。

ＢＴエネルギーはその特性上、相手に触れていれば触れているだけダメージを蓄積させる。そのＢＴエネルギーの霧ともなれば、ダメージ量は生半可なものではすまないだろう。無論、それは全てのＢＴビットが健在であるときの話ではあるが、今はそれが真となっていた。

「終幕（フィナーレ）ですわっ……！」

その直後、大気を揺らすほどの大爆発が巻き起こる。それは、限定空間内で飽和状態となったＢＴエネルギーが逃げ場を失って暴発したものだった。

これほどの爆発の中で、なおなお生き残っているとするならば、それは。

「……さすがに、負けたかと思ったぞ」

「……さすがに、倒したと思いましたわ」

煙の中から現れたのは、《絢爛舞踏》を発動させ、エネルギーを常にフルチャージ状態にした『紅椿』だった。

箒はゆっくりと居合いの形に刃を構えると、まっすぐにセシリアを見つめる。

「――《空海断絶（チヘイヲワル）》」

呟くと、暴風のように吹き荒れる紅いエネルギーが一点に収束していく。

これからしばらくの間、共に戦う戦友への選別として、箒は全力を魅せることを選んだ。

己はこれほどのものだと、知ってもらうことで高みへ上るための糧となってもらうために。そして、彼女自身が戦うときに、真っ向から打ち破ったのだと言う証明のために。

「斬り捨て……っ！」

煌々と輝く紅を抜き放ち、箒は叫んだ。

「御ォォめェェェェェェェんッッ！」

直後、全てを消し飛ばすような紅い斬撃が、セシリアの全身を覆い尽くした。

「あれが、『紅椿』。それに『ブレイブ・ティアーズ』……」

その戦いをモニターしていた一人の少女が、ポツリと呟く。

天王寺葉桜（てんのうじはざくら）、簪に叩き潰され、更なる高みへ上り詰めることを望んだ少女だった。

「……私だけのＩＳを、もっともっと強く……」

そして、私自身も。

最後にそう付け加え、彼女はぐっと拳を握り締めた。

彼女の願いがかなう日は、いつのことか。

第６２話　タッグマッチのお話（後書き）

ということで、箒とセシリアが覚醒したもの同士で組みました。理由は違いますが、一夏争奪戦からは一旦離脱、強くなるための修行タイムです。
そしてセシリアも武装特性が機動可能に、箒はアルファの戦い方を覚えました。
さて、次回はどうなることやら。

簪ちゃん大暴走の回だったりする。

第６３話　フランスへ（前書き）

突発的＆オリジナルイベントです。
あと短めです。

第６３話　フランスへ

「フランスに行くですってぇ？」

朝一番に聞いた香織の言葉に、アタシは思わずそう声を上げた。

なんでも、シャルロットがフランスへ一度戻るから、その付き添いで行ってやってほしいという千冬さんの頼みなんだそうだ。……いや、この時期に？　タッグマッチまでもう四日しかないのよ？

「うん。だから、ふーちゃんにも付いてきてほしいんだけど……」

だめかな？

くいっと首を傾げて聞いてくる香織に、思わず鼻血が出そうになった。

どうしてこの子はこういう動作が似合うのかしらねぇ……！

でも、正直言うと行かせたくはない。そもそもシャルロットは元々二人目の男性ＩＳ操縦者として入学してきたのに、当時そのことは全く聞かなかった。噂一つないなんて、普通はあり得ない。

このことから、シャルロットは男とは考えられないというのがアタシの意見だったわけだけど、まあどんピシャリだったわけよ。どうしてそういうこととしてたのかっていうのは知らないけどね。

で、そのシャルロットがこの時期にフランスからの呼び出し。明らかに何かあるわ。

「……だめ？」

かはっ。危ない危ない、血が飛びそうになったわ。

……仕方ないわね。

「いいわ、その代わり簪も連れて行くわよ。戦力は多い方がいいんだから。束社長にも話を通さなきゃ」
「ほんとっ!?　ありがとう、ふーちゃん！」

ぎゅっ、と抱きしめてくる香織。
ほら、愛が溢れちゃうから。

『話は聞かせてもらった！　人類は滅亡する！』
「ノストラダムスのせいね」
『そんなわけだから、パスポート作っとくねー。みんなのＩＳの格納領域に送っとくから！』
「あ、はい。ありがとう、束ちゃん」
『なんのなんの！　それじゃーねー！』

ぶつり、と青い仮想ディスプレイが消え去る。
束社長、相変わらず嵐みたいな人ね。

時は流れて一時間後、アタシたちは空港へやってきていた。
メンバーはアタシ、香織、簪、一夏、シャルロットの五人に、怪我が治りたてのナターシャ。肩ぶっ壊されて数日で治るって、さすがよねナノマシン。
ほかの面々は国籍や特訓やらで不参加である。まあ、それでも多いわけだけど。

「こんなに付いてこなくてもよかったのに……」
「厚意は素直に受け取っときなさい。それで、向かうのは本社なのよね？」
「うん、呼び出しはそっちだったから」
「それじゃ、飛行機に乗りましょうか！」

ナターシャの一声で検査を通り、飛行機へ搭乗する。
待機状態のＩＳはほとんどの検問に引っかからないから、金属探知機なんかにも全く引っかからない。
それぞれが持ち前の資金でファーストクラスに搭乗を済ませると、飛行機が動き出した。

「……それにしても、こんな急な呼び出しってあるの？」
「何か急に伝えないといけないことが出来たって言ってたけど……、よくわからない」

香織の言葉に、シャルロットは首をかしげながら答える。
その動きはどこかぎこちなくて、何となく違和感を覚えさせるものだった。
それきり、皆は大したことを喋ることもなくフランスへの旅路をゆったりと過ごすのであった。
……で、フランスに着いたわけだけど。

「動くな。全員こちらへ従ってもらおう」
「フランス流の出迎えってこういうのなのかしら」
「違うと思うよ。少なくとも僕はこういう教育は受けてないから」

出迎えたのは、防弾チョッキを着込んでアサルトライフルを構えた男たち十数人だった。

嫌な予感はしてたんだけどね、フランス到着してからすぐこれってどうなの？

「あんたたち、誰に銃向けてるか分かってる？　バインド・カンパニーの代表操縦者四名に世界で唯一の男性ＩＳ操縦者、ついでにデュノアの御曹司。これだけの面子相手に豆鉄砲構えて何のつもり？」

とりあえず軽くメンチ切ってそう言ってみると、数名の男が鼻で笑って口を開いた。

「死んでしまえば、ただの肉塊だろう？」

「やれるもんなら、ねっ！」

言った直後、示し合わせたように一夏以外の五人が一斉に動き出す。

私が近くの男の股間を蹴り上げ、うずくまったところで顔面に香織の膝が叩き込まれる。バキッ、と何かの折れるような音がした。

「がぁっ！？」

「この……、小娘どもが！」

「あら、おねーさんも小娘なの？　ありがと、お礼に鉛弾をご馳走してあげるわ！」

ナターシャが小さなハンドガンを量子変換して取り出すと、近くの男の脳天に弾丸を撃ち込む。脳髄を撒き散らして後ろに吹き飛んだ男からするりとアサルトライフルを抜き取ったシャルロットが、丁度銃を構えた男たち数人にマガジンが空になるまで銃弾をバラまいた。

「くそ、なんだこいつら！　話と違う！」

「あら、どういう話を聞いてたのかしら？」
「ひぃっ！　た、たすけて――」
「問答無用……」

パァン、と音高く空港内に響く銃声と共に吐き出された弾丸が、男の頭蓋を打ち砕いた。ぴちゃっ、と近くにいたアタシの頬に血が乗る。

これで半分と少し、残りは四人。

「くっ、男とデュノアの娘だけ生きていればいい！　他は殺せ！」
「やっぱり僕と一夏が狙い……！」
「残念だけど、それは無理よ。ここであんたたちはゲームオーバーなんだからっ！」

残った四人を、痺れを切らしたアタシが呼び出した《龍砲（コール）》で吹き飛ばす。これでおわり、っと。

「全員無事？」
「それは敵さんに聞いたほうがいいわねー。っと、一夏君無事？」
「え、ええ……。これは、いったい？」
「敵襲……少なくとも組織の……」
「そうだね。狙いは僕と一夏だったわけだし、家庭の事情に他人を巻き込みたくはないから。本当は一人で行くつもりだったけど、向こうはこっちの事情もわかってることかな……」

シャルロットが悲痛な面持ちでそう呟く。
あの、それはいいんだけどさ。こっちはこっちでまずいわよ。とっとと行かないと。

「皆、行くわよ。いつまでも留まっていられないわ」

「さっきの銃撃戦で私たちまで面倒ごとに巻き込まれてるからね。急ごう」
「わかった。皆、付いてきて」

アタシと香織の言葉に頷いたシャルロットの先導で、とりあえず空港から脱出することにした。

「それで、どこへ向かうつもり？」
「とりあえず本社へ。相手もデュノア社本社の中では仕掛けてこないと思う。まあ、これが父の仕業でなければ、だけど」

悲しそうに呟いたシャルロット。だけど、それに対する答えを私たちは持ち合わせていなかった。
近くでタクシーを拾った私たちは、その足でデュノア社の本社へと向かう。
寄り道すれば狙われる危険性もあったし、なによりも時間を掛けたくはないというシャルロットの要望によるものだった。
けれど、デュノア社に向かうにつれて隣に座るシャルロットの顔が暗くなっていく。
ちなみに、タクシーは二台。さすがに一台に六人は無理だったからね。前にはシャルロット、アタシ、香織。後ろには簪、ナターシャ、一夏が乗っている。

「やっぱり心配なの？」
「……うん。怖い、かな」

ちらりと、タクシーの運転手がミラー越しにこちらを見て、口を開いた。

「お嬢ちゃん、なんかあったのかい？」

「……父と、ちょっと。喧嘩と言うか、なんと言うか……」

喧嘩、ね。明らかに喧嘩じゃないけど、運転手のおじさんは何かを知り得て得心するように頷いた。

「まあ、お父さんは大切にしてやんな。俺にも子供がいるが、これがまた可愛くねェ奴でな。口を開けばくそ親父だなんだって。でもな、そんなあいつが俺は大切だし、あいつも心のどっかでは俺のことをちゃんと認めてくれてるってわかってるから、真っ向から喧嘩することもできるんだわ」

嬢ちゃんのお父さんも、きっとお嬢ちゃんのことを大切に思ってるだろうよ。

運転手のおじさんはニカッと笑いながらそう言った。

その言葉を、シャルロットは車中でずっと考えていたらしかった。

タクシーから降りてデュノア社にやってきたアタシたちだったけど、どうも雰囲気がおかしなことに気づいた。

「どういうことだろ、いつもは人がたくさんいるのに……」

「何かあったのかもしれないわね。行ってみましょう」

ナターシャの言葉で、アタシ達はデュノア社の中へと入っていく。

中には人の気配がなく、不気味な静寂だけが鎮座していた。受付の人も姿が見えないのは、さすがにおかしいでしょ？

「これ、どうなってんだ……？」

「とりあえず、社長室まで行ってみましょう」

「そうだね……。社長室は一五階にあるから、エレベーターで昇った方が早いよ」

「オッケー、それじゃあそれで行きましょうか」

頷いてから、シャルロットの案内でエレベーターへの道を歩いていく。電気はちゃんと通っているから、何かの事故というわけではなさそうだ。

エレベーターのボタンを押して待つ間、アタシは軽く周囲に目を配る。

すると、綺麗に掃除された床にいくつかの泥の足跡が残っているのが見えた。もちろん、アタシ達の足跡じゃあない。もっと別の、誰かの……。

「来たよ」

チンッ、と音がして、エレベーターの扉が開く。

そこに見えたのは――。

「なんだよ、これ……！」

「死んでる……！」

一夏とシャルロットの声が、辺りに響く。

エレベーターの中には、壁に付いている鏡にもたれかかるように座っている、血まみれの男性がいた。

そして、その鏡には、血文字ではっきりと『I Kill You』と記されていた。

第６３話　フランスへ（後書き）

この中途半端な時期に娘を呼びつけた社長の意図は？　そして今デュノア社で何が起きているのか。
突然のお話ですが、お付き合いいただければ幸いです。

ちなみに、シャルロットは彼らを殺さないように防弾チョッキの部分を撃っています。鈴と簪は、香織に銃を向けた時点で抹殺確定。
しかもためらっていないのでちょっと人間の道を踏み外していたり。
それでは、次回もお楽しみに。

第６４話　デュノア社の異変（前書き）

また短いです。

第６４話　デュノア社の異変

「胸糞悪いわね……」
「一体、誰があんなことを……」
「許せねぇ……、人間をあんな風に……！」

ポツリと呟いたアタシの言葉に応じるように、シャルロットと一夏が声を出す。
あの死体のあったエレベーターに乗る気にはなれなかったため、あの後アタシたちは辺りを警戒しつつ階段で進むことを選択していた。
二人一組の二列になって並んでいて、一番前がナターシャと簪、二番目がシャルロットと一夏、最後尾はアタシと香織が担当して進んでいる。
空気は重苦しく、一夏とシャルロットはあの死体が相当ダメージになっているようだ。
アタシと簪は曲がりなりにもそういった訓練は受けているし、香織がいる以上へこたれてなんていられない。好きな人に無様な姿は見せたくないもの。
ナターシャは元軍人だけあってこういうのには慣れているけど、不快感は隠そうとしていない。そうすることで一夏とシャルロットの心の痛みを軽減するつもりなんだろう。自分だけが辛いわけじゃないという風に痛みを分け合うことで軽減する、集団心理のようなものだ。
不思議なのは香織よ。まるで辛い様子は見せないけど、慣れているわけでもなさそうだった。不思議そうな顔をしていたけど……。

「香織、アンタは大丈夫？」
「え？　あ、うん。血塗れはお姉ちゃんがヤンチャしてる頃に見慣

れちゃったから。思ったより大変なことになりそうだなぁーってだけで」

「……アンタも大概大物よね」

でも、葵義姉（ねえ）さんだったら仕方ないわね。

それにしても、あれほど派手に殺しておいてまるで手を出してこないってどういうことかしら。向こうはアタシたちが来ているのに気付いているはずなのに。

そんな疑問は、六階に差し掛かったところで見事に霧散することとなった。

「っ、全員伏せて！」

思いもよらぬ簪の声に咄嗟に反応したアタシたちの頭の上を、無数の弾丸が通り過ぎていく。

相変わらず熱烈な歓迎でありがたい限りね、まったく。

「いい？　合図したら一斉にＩＳを起動させて。そのまま通らせてもらうわよ」

「わ、わかった！」

「おう！」

「了解……」

「りょーかいですっ」

「はいはーい」

それぞれが返事をしたところで階段から顔だけをひょこっと出して、壁が弾丸で削られたせいで出来た粉塵の向こう側の人影を確認する。

数は大したことないけど、武装は空港の連中よりもしっかりしている。ただのテロリストや強盗じゃなさそうね。

息を整え、向こうがこちらを覗きこんでくるのを待つ。あまり殺すと後でうるさそうだし、出来る限り無力化で納めないと。アタシだって積極的に殺したいわけじゃないし。

「……よし、いくわよっ」

言うと同時に『甲龍（シェンロン）』を起動して衝撃砲を撃ち放つ。出来る限り出力は抑えたが、それでもまともに食らった数人は壁にめり込んで意識を落としていた。心臓が止まっていなければいいけど。

「くっ、撃て！」
「効かないわよー。それっ」
「がはぁっ！？」

悠々と近づいて行ったナターシャが、俗にヤクザキックと呼ばれるらしい蹴り方で数人を蹴り飛ばす。足の部分だけ補助動力を切っていたらしく、ダメージは動けない程度に抑えられていた。補助動力ありなら軽々と体が吹き飛び、壁が砕け散ったことだろう。

残りの二人は簪が後頭部にチョップを入れて意識を落とした。あっちは補助動力いれてるのに綺麗に気絶だけさせてるわね。器用なもんだわ。

「身元が割れるもの持ってないの？」
「んー……、ダメね。武器しか持ってないわ。それと交通費」
「交通費ぃ？　この格好で地下鉄にでも乗るっての？」
「この装備品、全部ひっくるめても大きめのスポーツバッグ一つに納まる規模よ。電車でやってきて、どこかで着替えて襲撃、終わったらまた着替えて何事もなかったかのように悠々と出て行く。よくやる手よ」

なにそのスパイ映画。
けど、これで少なくとも個人規模じゃないだろうって事ははっきりした。落ち目とはいえまだ第二世代のＩＳシェアを一手に握ってるここを、個人で襲撃しようなんて馬鹿はそういないもの。

「とにかく、早く社長さんに会いに行くわよ。直通エレベーターとかないの？」
「ごめん、そういうのはないんだ……」
「ぼやいても仕方ないよ。階段以外は危険だし、上がどうなってるかもわからないんだから」
「そうだな……、とにかくＩＳを着けた状態で進まないと。またいきなり銃撃なんて洒落にならないぜ」
「それじゃ、とっとと行きましょ。いつまでもここに留まってやる必要もないんだし」

ナターシャが締め、それから同じ隊列で上へ向かう階段を進むこととなった。
それにしても、本当に人気がない。というか、あの空港にいた奴らとさっきの奴らが繋がっているだろうって事は想像できるけど……、デュノア社に一体何の用なのよ？
そんなことを考えながらデュノア社内部を進んでいくと、突然階段が吹き飛んだ。

「な、なんだぁ！？」
「なんだ、この数は？　織斑一夏にシャルロット・デュノアだけのはずだろうに」
「な、なんなんですか貴女は！？」

吹き飛んだ階段の残りカスを消し飛ばすように現れたそれは、冷徹な声を響かせた。

どこかで聞いたような声、それにその機体。

「ラウ、ラ……？」

「ラウラ？　ああ、オリジナルか。主様の恩寵を受けられぬ哀れな亡霊」

「……あんた、何者よ」

ハイパーセンサー用のバイザーで目元を隠してはいるものの、その冷徹さは私たちと出会って最初のころのラウラにそっくりだった。

主様、と言った所でどこか陶酔したようなそぶりを見せていたが、突然武器を構えると、頬を吊り上げて恐ろしげな笑みを浮かべる。

「私はアイン、主様の御子、改変遺伝子強化素体（ハイ・アドヴァンスド）だ！」

「どうやら、まともな相手じゃなさそうね……。とっとと畳むわよ！」

先手を打って《龍砲》を叩き込むが、アインにはまるで効いている様子がなかった。

「ふん、まるでお遊びだな」

「どうしてここを襲撃したの！」

「……ああ、ああっ！　お兄様！　お兄様なのですね！　お会いしとうございました！」

香織の声を聞いた途端に、先ほどまでの冷徹な態度を消し去って嬉しそうに、無防備にこちらへ歩いてくるアイン。

どこか不気味なその姿に、アタシたちは思わず攻撃の手を止めてしまう。

「君は、一体……？」

「最初に生み出されたお兄様から連なる『ドール』の系譜、その先で生み出されたのが私たちなのです」
「生み出された……？　何の事を言ってるんだ!？」
「……ああ、そういうことでしたか。あの雌狐、お兄様の記憶を弄ったのですね……！　許せない……！」
アインは近くの壁を殴りつけると、粉微塵に吹き飛ばす。
あいつのＩＳ、補助動力があるってレベルじゃない。肉体的にも明らかに人間の範疇を超えてる……！
「さあお兄様、ともに帰りましょう！　お父様もいらっしゃいます！」
「僕の父は物心着いた頃に事故で死んだんだよ？　君みたいな妹はいないし、君のお父さんは僕の父じゃない」
「ああ、なんてお可哀想な！　記憶を改変されたばかりに自らの出自すら偽られ……！　大丈夫ですお兄様、アインがお兄様をお守りいたしますから……！」
言った直後、アタシたちへ向けて手にしていたショットガンを乱射してくる。
明らかに競技用ではなく軍用として調整されたＩＳの攻撃は、普段の数十倍は強烈なものだった。
それを香織は《夜羽（よばね）》で防ぐと、お返しとばかりに《夜雀（よじゃく）》を撃ち込んでいく。
厚い装甲に覆われたアインにはダメージは通らなかったようだけど、それでも彼女の動きを止めるには十分だったらしい。
「なぜ……、なぜ私を撃つのですか……？　お兄様……！」
「なぜ、って……」
「お兄様は私を嫌いに……、あ、あああああァァァぁあああああ

ああっ！」
「っ！？　待っ――！」

パァン、と音が響く。
目の前で、アインと名乗ったラウラによく似た少女は、慟哭の中で自らの脳天に銃口を突き付け、引き金を引いてその命を絶った。
出会って数分、たったそれだけの時間で、彼女は死んだ。
がしゃがしゃとうるさい音を立てて、装甲ごと彼女が倒れる。
それを、アタシは咄嗟に抱きとめていた。

「ちょっと、しっかりしなさいよ！　ねぇ！」

思いのほか動揺しているようで、声が震えていた。
拳を交わした友と瓜二つの少女が、心を壊して死ぬ様を見せつけられて、アタシは。

「……ちゃん、ふーちゃん！」
「――はぁっ、はぁっ……！　ラウ、ラぁ……！」
「ラウラじゃない、違う人だから。大丈夫、大丈夫だよ」

いつの間にかＩＳを解いていた私を、同じようにＩＳを解いていた香織が抱きしめる。
その体をぎゅっと抱いて、アタシは恥も外聞もなく泣き喚いていた。

――アインの奴、しくじったな？

――仕方あるまい、彼女は生まれて間もなかった。父上、同胞に被害は？

「ない。全て予定通りだ」

緑色が光る培養ポッドに囲まれた部屋の中で、男が声を発する。話しかけているのは、培養ポッドに取り付けられた特殊なスピーカーから発せられる音声だった。

――あんな出来損ないを使って、俺達の存在を示す必要なんてあったのかよ？

「既にドイツからデータは拝借した。フランスのデータは既に送られてきている」

――アメリカ、イギリス、中国も同様にデータを入手している。完成は時間の問題だ。

――世界中のＩＳデータ、篠ノ之束の手元にあるもの以外は全て手に入れるつもりなんだろ？　後どれくらいなんだ？

「半年……、あるいはそれ以上か」

呟くように言った男は、黒い髪を撫でつけながらキーボードを叩く。その速度は、彼の天災にも劣らないものであった。

――まあ、楽しみにしてるぜ。

それきり、そのスピーカーから声は聞こえなくなった。
男は一枚の紙を手に取ると、にやりと頬を吊り上げる。

「……お前は私に従うか、それとも対するか？　……結末は見えているのだがな」

どこか遠い目をしながら笑みを浮かべた男は、それきりまたディスプレイに視線を戻し、黙り込んでしまった。

第６４話　デュノア社の異変（後書き）

突然出てきて突然パァンしたアインちゃん。
さて、デュノア社は一体どうなっているのか、次回もお楽しみに！

第６５話　親子（前書き）

急☆展☆開！

第６５話　親子

ＩＳに乗ったまま、最上階である一五階まで辿り着いたアタシ達は、革張りの重厚な扉の前に立っていた。
まだアタシの目は赤く腫れているけど、もう心の整理はついている。全く、アタシもまだまだね。

「シャルロット、心の準備はいい？」
「……うん。大丈夫」

ごくりと生唾を飲み込み、シャルロットが頷く。
さて、それじゃあご対面と行きましょうか。ついでに何でこんなことがおきているのかも説明してもらわないといけないしね。
アタシと簪が両側の扉を開き、中へ踏み込んでいく。

「……来たか、シャルロット。無事でよかった」
「父さん……」

そこの一番奥、社長椅子に座っている男性は、苦しそうに顔を歪めながらも優しげな声音でそう告げた。
……まずいわ、撃たれてる。
周りに倒れている男達の様子から見て、ここで銃撃戦があったんだろう。倒したのはいいけど、お返しとばかりに一発貰ってしまったのか。

「無傷で切り抜けられると思っていたが……、やはり私も衰えたな……。まだ生きているうちに会えて良かった」
「今更何を……！」
「お前を今日呼びつけたのは、お前に全てを話し、贈り物をしたか

ったからだ。状況が変わってな……」

時折顔を顰めながら話す彼を見て、シャルロットは見る間に表情を変えていく。

最初は憤怒、次は困惑。ほんの数秒でころころと表情を変えるシャルロットを見つめながら、彼は更に口を開いた。

「元々、私も妻も、お前を嫌ってなどいない。むしろ愛していたのだ。だからこそ、守るために冷たく当たり、私たちを脅すのにシャルロットは使えないと見せかけた。どこに監視の目があるかわからんからな……」

「……そんなの、いまさら言われても信じられない！　母が死んだ時だって、貴方は涙の一つも流さなかったじゃないか！　今更、愛しているだって……、そんなの……っ！」

あからさまに動揺しながら、それでも否定するシャルロット。……なんかあるんでしょうね、これ。

そんな親父さんのことを、一夏は不可解な目で見ている。あの様子だと何か事情を知っているみたいね。そして、それは千冬さんも知っていて香織に同行を頼んだ。なら何かあるのは当然か。

「一夏」

「な、なんだ？　鈴」

「どういうことなのか、説明してもらえる？　シャルロットが男として学校に来たことと関係があるんでしょ？」

「……シャル、いいか？」

「……うん。知ってもらわないと、意味がわからないだろうから」

「わかった。実はな……」

一夏から語られたことは、アタシにとっては大体予想できたもの

だった。
　さて、それで彼の様子を見る限りでは……、と。
「なるほどね……。社長さん、貴方の話を信じるなら、貴方はどこかから脅されていたのね？　ＩＳに関係することか、家庭の事情か、それは知らないけど、自分を脅すのにシャルロットが危険に曝される可能性があった。貴方の言うとおり監視の目がどこにあるのかがわからない以上、家庭内でも愛情をもって接することが出来ない。自分と奥さんをシャルロットが敬遠する様になれば、シャルロットが狙われることもなくなる。そして念のために、非情な社長を装ってシャルロットをＩＳ学園に送った。アタシの憶測が半分以上だけど、合ってるかしら？」
　長々としたアタシの言葉に、社長は小さく一つ頷いた。やっぱりね……。
　ＩＳ適正がいくら高いからって、本当に無関心なら認知もしないはずだろうしね。
「だが、憎んでもらえてよかった……。苦労した甲斐が、あったというものだ」
「でも、なんで今になって……！」
「……奴らはデュノアを潰すつもりだ。奴らが欲していたのはＩＳのデータだ、コアじゃなく、な。そのデータを、さっき奪われた。もうここは用済みと言うわけだ……」
「巨大企業デュノアでも太刀打ちできない相手ってことねー……。簪ちゃん、ここのデータバンクにハッキング掛けて、全データ吸い上げておいて。狙いを割り出さないと」
「了解……。モーティブ」
　部屋の隅で、ナターシャの指示を受けた簪が『モーティブ』を展

開する。
さて、シャルロットはどうするのかしら。

「……僕への贈り物ってなに？」
「私とクラリス、そして社員の一部が総力を挙げて作り上げた、デュノア社最後のＩＳだ。地下の第三整備室に保管してあるから、データごともって行きなさい……。それと、私とクラリスの遺産だ。どこへ行ってもやっていけるくらいの額はある……」

歯を食いしばりながらもそう伝える彼の額には、脂汗すら滲み出ていた。
もう長くはないだろう。けれど、アタシ達に手当てをする用意はない。医療キットは今はないし、どうしようもなかった。

「……今更、父親面しないでよ！　僕がどんな思いで、これまで生きてきたのか！　貴方にわかる！？」
「……今更済まないとは言わない。だが、これだけは言わせてくれ。――愛している、シャルロット」

罵声すら心地いい音楽のように聴き、彼はそっと目を伏せる。

「織斑一夏君。娘を、頼む」
「……はい。絶対に守ります」
「ねえ、待って……！　勝手に終わりにしないでよ！　僕をおいていかないで！　ねえ！　嫌だ、もう一人にしないでよぉ！」

ＩＳを解除し、机の向こうの父親に駆け寄るシャルロット。
けれど、彼女の手が届くよりも少し早く、彼は――。

ここは……。

「あら、アル。久しぶりね」

「シルヴィ！？　なぜお前が……！　……いや、これは夢か？」

目の前にいたのは、ずっと昔に死んでしまった、私の愛した人だった。

最後に見た光景は、私の愛する娘が此方へ駆け寄ってくるその姿。

それで、私の意識は途切れている。

気が付くと、周囲は真っ白になっていて、私がそこにいた。

「夢じゃないわ。そうね、夢と現の狭間、あの世とこの世の境目よ。私は、貴方と親友を迎えに来たの」

「私と、クラリスを？　……では、やはり死んだのか、私たちは」

襲撃者達が入ってきたとき、私はクラリスをかばって体に一発銃弾を受けた。

致命傷ではなかったが、確実に命を削り取ったそれはクラリスにも貫通していて、二人揃って銃弾をその身に受けてしまった結果になった。

しかも、私が庇ったせいで弾速が遅くなったのか、弾はクラリスの体内に残留してしまっていた。

その後、私よりも早くクラリスが逝き、シャルロットたちがやってきた。……無事に言葉を伝えられてよかった。

「さて、アル。一発殴らせてもらえるかしら」
「え？　おごふぁ！？」

ボゴッ！　と顔面を殴られた割にはありえない音と共に私が吹き飛ぶ。私は全裸だったが、シルヴィも同じく全裸だった。その状態でぶん殴られた。

「ふぅ、すっきりした。今のは寂しい思いをした娘の分よ。……でも、ありがとう。あの子を守ってくれて」

綺麗な笑みを浮かべてそう言ったシルヴィ。
シルヴィは、昔に私と付き合っていた女性だった。
気立てがよく明るく、大切なときにはぐいぐいと引っ張る強さも持った女性。しかし、私は彼女ではなく彼女の親友であるクラリスを選んだ。
互いによく話し合い、クラリスを交えた三人で話し合ったこともある。そして、私抜きで二人が話し合ったこともあったという。
私はデュノア社の一人息子で跡取りだ。シルヴィは町娘、クラリスは小さいながらも財閥の娘であることが絡み、二人は親友だったこともあってクラリスが私と結ばれたほうが世間的にも安心するだろうと、シルヴィの方から離れていったのだ。
尤も、その前にすることを致してしまっていた為、シルヴィと私の娘、シャルロットの養育費や生活費など、支援できるなら何だってやった。クラリスも進んで協力してくれたが、いつしかシルヴィは不治の病に掛かっていた。
私とクラリスは経営の傍ら、必死になって以前愛した人を、大親友を救うための方法を探したが……、願いも叶わず彼女は逝ってしまった。

「あの時、最後にした約束。覚えてる？」
「クラリスと私で、君と私の子供を守ってほしい、だったか。……最後まで見てやれなくてすまない」
「いいのよ、もうあの子の周りには、守ってくれる人たちがたくさんいるわ。だから大丈夫」

そういって微笑んだ彼女は、小さく頷く。
全く、いつも彼女には敵わなかった。軍に所属していた経験のある私が、彼女にだけはどうしても敵わなかったのだ。

「アルフォンス」
「クラリス。お前も来たのか」
「ええ。どうして素っ裸なのかって言うのは疑問視せざるを得ないのだけれどね。久しぶりね、シルヴィ」
「久しぶり、クラリス」

突然現れ、力強く握手を交わしたクラリスとシルヴィは、揃って私の手を引いた。
シャルロット……、強くなれ。お前は私と同じ道を行く必要などないのだから。

愛されていないと思っていた。
母が亡くなってから、僕は一人ぼっちだと。

「……父さん」

冷たくなりだした体を抱きしめて、僕は小さく呼ぶ。今まで、あの人や父親としか呼ばず、面と向かっても社長としか呼ばなかった彼を、初めてそう呼んだ。

……不思議だった。目の前が滲む。どうしたんだろう。

「シャル、お前……」

「あ、あれ、おかしいな。目の前がぐちゃぐちゃなんだ」

「シャルロット……」

「ねえ、なにかおかしいかな？」

力が入らない、どうしてだろう。

父さんと呼んだのは、これが初めてだった。

母さん、本当の母さんじゃない母さん。僕を愛していたなんて、そんなこと信じられるわけないじゃないか。

でも、彼女は僕を愛していたらしい。最初にぶたれてから、一度も会った事のないあの人。ちゃんと話せば、彼女は僕の母親になってくれたんだろうか。

「……シャルロット、これ」

いつの間にか近くに来ていた簪ちゃんが、僕に仮想ディスプレイに表示された手紙を見せてくれた。

差出人は『アルフォンス・デュノア、クラリス・デュノア』、宛先は……、僕だった。

シャルロットへ。

これを読んでいるということは、きっと私と妻は死んでいること

だろう。
私たちがお前にした仕打ちの数々は許されるものではないし、守るためだと言ってもきっと信じてくれないだろう。
私たちはお前の母親であるシルヴィに託されたお前を、絶対に権力抗争に巻き込むわけにはいかなかった。
そのために、私たちは全力を尽くした。
私たちがシルヴィの願いを破らなかったことだけは、覚えておいてほしい。
遺産相続については既に全ての手続きが済んでいるから、役所に届出を出せばすぐにでも遺産相続が完了する。
そのための書類は引き出しの上から二番目に入っているからもっていくように。
健康に気をつけて、友達は大切にしなさい。
どういう風に生きていきたいか、これからは自分で決められるんだから。

愛する娘に幸あれ。

「……父さん、母さん……！」

愛されて、いたんだ。
二人には二人の考えがあって、僕を守るために必死になって。
自分の目で見たもの以外のことを考えられずに、勝手に判断して恨んで憎んで。それでも、あの人たちは僕を愛している、と。

「父さん……！」

もっと、話したかった。
お父さんって呼びたかったのに……！
ぴちゃっ、と床に水が落ちる。

ああ、そうか。
私は、泣いているんだ。

第６５話　親子（後書き）

お父さんいい人だったよ、お母さんもいい人だったよ！　な今回でした。

若い頃はシャルの母親と付き合っていたけど、体裁とかを考えてその親友と結婚したお父さんのアルフォンス。

友情と愛情と約束と責任感、義務感で必死になってシャルを守ってたお母さんのクラリス。

シャルに愛情を向けられなかったのはデュノア社を脅していた何者かに狙われないため、権力抗争に巻き込まないためだった、と言う設定。原作だとシャルの親子関連は二巻以降ぜんぜん触れられていませんのであしからず。

って言うかクラリスのセリフが死んだ後にしか出せなかった。ごめんねクラリス、オリキャラなのに。

第６６話　新たな力

「シャル、大丈夫か？」
「うん、もう大丈夫。皆ごめん、心配掛けて」
一夏にそう答えて皆に謝ると、皆は構わないと返してくれた。
あれから一〇分余りが経ち、僕はようやく涙を抑えて立ち上がることが出来た。
父の遺体は、後でちゃんと埋葬する。母も一緒に。お葬式のために、何日かＩＳ学園を休むことになるだろう。
でも、今は。

「地下に行こう」
「ああ。親父さんの贈り物、ちゃんと受け取らないとな」
机の引き出しにあった書類を手にして、再びＩＳを纏う。
そこで、簪が声を上げた。

「一〇階の会議室に、ここの人が捕らえられてる……」
「それじゃあ、アタシと香織と簪で拘束されている人たちを助けに行くわね。エントランスで落ち合いましょう」
「わかった。三人とも、気をつけて」
「そっちこそ。一夏、ちゃんと守んなさいよ」
「おう、任せとけ！」

ガチンッ！　とＩＳの手の平に拳を叩きつけ、重々しい音を立てながら一夏が頷く。
その様子を見た鈴たちは、一つ頷くと先に部屋を出て行った。
僕達も周囲を警戒しながら三人で社長室を出ると、そのまま元来

た階段を戻る。
途中で出会った、ラウラに似たアインという少女は、あの後粒子となって消え去ってしまっていた。一体、どういうことだったのだろうか。
ともかく、警戒を怠らないように、けれどなるべく急いで階段を下がっていく。目指すは地下二階だ。
すると、五階まで降りたところで、上の方の階から爆発音が聞こえてきた。

「なんだ！？」
「また敵襲……！？　助けに――！」
「待ちなさい。あそこには鈴ちゃん達がいるわ、大丈夫よ。それよりも、こっちは早く贈り物とやらを受け取りに行きましょう」

僕と一夏を止めたのは、あの三人と親しそうだったナターシャさんだった。
その彼女が、鋭い視線で此方を見つめて口を開く。

「それとも、あの三人が信じられない？」
「……でも……」
「大丈夫、あの三人なら最悪逃げ切れるわ。それに、私たちが行っても社員の人たちを危険に曝してしまう可能性を上げてしまうだけよ。こんな閉所でのＩＳ戦闘なんて危険すぎるもの」

確かに、ナターシャさんの言うとおりだった。
あの三人は基本的に近接戦闘中心だけど、僕とナターシャさんは射撃中心だ。一夏に至っては閉所でのＩＳ戦闘の訓練すらしていない。

「……わかりました。すいません、我侭言って」

「気にしないでいいわよ。ありがとうね、あの子達を気に掛けてくれて」

そういったナターシャさんは、とても穏やかな笑顔だった。

凄いな。信じてるんだ、香織達を。

「一夏、行こう。僕らも急がなきゃ」

「そうだな。とっとと贈り物を受け取って、あいつらを待っててやらないとな」

こくりと頷き、それから更に階段を下っていく。

数分で地下二階まで到着すると、中に入るための重厚な扉にパスワードが掛かっていることに気づいた。

「これは……」

「パスワードね。ハッキングは無理だし……、シャルロットちゃん、知らない？」

「……もしかして」

ここに僕への贈り物があって、僕のことを愛していて。

それなら、もしかして。

そう思って投影式仮想キーボードに打ち込んだその単語で、扉のロックが開いた。

「開いたわね。やるじゃない、シャルロットちゃん」

「……は、はい」

笑ってそう言ってくれたナターシャさんは、僕の手元を見ていたからわかったのだろう。

打ち込んだ文字は「ｃｈａｒｌｏｔｔｅ（シャルロット）」、つまり僕の名前だっ

た。

「よし、それじゃ行ってみようぜ」

「そ、そうだね！　うん！」

ちょっと泣きそうになってしまった僕の背中をバンッ、と叩いて、一夏が扉を押し開ける。

そこには、一台のＩＳが鎮座していた。そして、それに繋がれている沢山のタワー型サーバ。その全てを使って余りあるほどのデータ量が、それには収められていた。

「これが、贈り物……、デュノア最後のＩＳ」

『カスタム？』を待機状態に戻してから傍に寄る。

カラーは『カスタム？』と同じくオレンジと白のコントラスト。けれど、一番特徴的なのはその左腕だった。

巨大なメカアームとも形容できるそれが特徴的な機体にゆっくりと乗り込むと、目の前に文字が表示された。

『声紋認証、指紋認証、虹彩認証を行います。そのままでじっとして、何か喋ってください』

「ええと……、こ、こんにちは」

『認証中……。認証完了、本人と確認しました。こんにちは、シャルロット。デュノア社最新型ＩＳ、『ミストラル・リヴァイヴ』の受領、おめでとうございます』

そんな文字が躍り、機体のスペックデータやなんかが一面に表示される。

『なお、このメッセージは自動的に消滅します。『ミストラル・リ

ヴァイヴ』をどう扱うかは貴女次第です』

次の瞬間、メッセージはパチンと弾けて消え去り、代わりに武装一覧が表示される。

スペックデータの中でも特別目を引いたのは、とんでもなく大きい拡張領域（バススロット）だった。

拡張領域は『カスタム？』の三倍、武装は最低六〇個は搭載できるトンでもサイズだけど、その半分は第三世代の特殊兵装の処理領域に使われていた。

「この武装……、こんなものが作れたなんて」

「シャル、どうだ？」

「……ちょっと悔しいけど、このＩＳは凄いよ。本当に、凄い」

基礎スペックも『カスタム？』を大きく上回っている。第三世代の名は伊達じゃないってことか……。

「よし、それじゃあ初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）しながら一階まで戻りましょうか。それが終わったら、三人を助けに行きましょう」

「はい！」

「はいっ」

ＩＳに乗りながら、僕と一夏はそう答えて頷いた。

待ってて、三人とも。すぐに行くからね。

「なによこいつら！」
「さあ、ねっ！」

近くの黒いＩＳを横薙ぎに二閃、一気に吹き飛ばす。
ふーちゃんと簪ちゃんと共に、三人で会議室へ向かっていた僕たちの前に立ちはだかったのは、五体の黒いＩＳ。
二体は動物のように四足歩行になっていて、残りの三体は四肢と頭部が大きく膨れ上がっている不格好な姿。クラス代表戦のときに束ちゃんの送りこんだものに似ているけど、それとは明らかに違う感じがする。
明らかに、殺すために作られたものだ。さっき回避した腕の一撃は一瞬で壁をぶち壊したくらいなんだから。あんなものが当たれば、例え絶対防御があってもただでは済まない。

「束ちゃん、聞こえる！？　こいつらどうなってるの！？」
『それも疑似ＩＳコアを核にした無人機だよ！　私の作品じゃない！』
「弱点わかる、社長！？」
『コアを消し飛ばすくらいの一撃を加えれば止まるはず！　今解析してるから持ちこたえて！』

それきり音声が途切れた代わりに、猛然と仮想キーボードをタイプする音が聞こえてくる。
とりあえず、束ちゃんのものじゃないってことがわかっただけで十分。とにかく壊せばいいんだから。

「イヴ、《とりのさえずり（バードエイク）》！」
『了解です！』

装甲同士を震わせて特殊な音波を発生、獣のようなＩＳのビーム攻撃を弱めていく。

それでも壁をがりがりと削るほどの威力を有するそれに当たらないようにしつつ、吹き飛ばした人型のＩＳへと一気に接近、《啄木鳥（きつつき）》を打ち込んでいく。

三発目で装甲を貫通し、その穴へさらにもう一撃《啄木鳥》を打ち込むと、パキンッという音と共に内部のコアが弾け飛んだ。

「よし、一機撃破っ！」

さすがにリミッターを解除した攻撃には耐えきれなかったのか、それともただこのＩＳがもろいのか。

僕たちＢＣ所属の機体にはリミッターのオンオフ機能が隠されている。束ちゃんがもしもの時のためにと付けたものだけど、こんなに早く使うことになるとは思わなかった。

けど、一体どうなっているんだろう。アインって少女にこの黒いＩＳとＩＳモドキ。何かが起きているのかもしれない。

「こっちも、はぁぁっ……！」

考えながら剣を振るっていると、真横に接近してきていた獣型を簪ちゃんが《朱鉄（あかがね）》で真っ二つにしていた。

相変わらずえぐい威力だなぁ。あまり食らいたくはない。

「くぉのっ！」

廊下の向こう側でも、ふーちゃんが《双天牙月（そうてんがげつ）》を振るって更に一機、人型のＩＳを破壊した。

これで残りは人型と獣型が一機ずつ。

そう思った直後、人型と獣型はがしゃがしゃと不規則に震えだしたかと思うと、突然部品が宙に浮き、それぞれのコアが露出する。

「何……！？」

「これは……まさか……！」

ふーちゃんは怪訝そうな、簪ちゃんは若干ワクワクしながらそれを見つめている。

そんな中、人型と獣型はコアを上下に配置すると、その周囲に次々と組み上げられるようにくっついていく。

それどころか、壊したはずのＩＳの部品までもが吸い寄せられ、コアを中心に大きく組み立てられていった。

そうして出来上がったのは、とても巨大な人型のＩＳ。クラス代表戦で出てきたものですら見劣りしてしまいそうなほどに大きな、いっそ本当にロボットといっていい大きさのものだった。

「合体したぁぁぁぁ……！！」

「簪ちゃん、そんなきらきらした目で見ないでっ！？　あれ敵だから！」

「っつっても、寄り集まっただけでしょ！　とっととぶっ壊すわよ！」

《龍砲》を次々に撃ち放ちながら斬りかかったふーちゃんだったが、全ての攻撃が弾かれてしまう。

「なぁっ！？　なによこの堅さ！　集まっただけじゃないの！？」

『悔しいけど目茶苦茶かっこいい！』

「束ちゃん喜んでないで解析ーっ！」

「合体ロボはなぜか強くなる法則……、理由なんてない……！」

「いや、あってもらわないと困るのはこっちなの！　ってこっち来

たぁぁぁぁ！！」

がしょんがしょんとこちらへ歩いてくる合体ＩＳだけど、なぜ飛んでこないんだろう。まあ、ただでさえ天井が壊れてしまっている状況だし、飛んでも意味がないと言えば意味がないんだけど。

と思ったら、こっちへ腕を向けて腕のクリスタルが紅く発光して――！？

「まずっ、避けて！」

「ぬおおおおおっ！？　ちょ、シャレにならないわよあの極太ビーム！」

「ギリギリ……！」

寸でのところでモロに食らうことは避けられたけど、それでも装甲が少しダメージを負った。リミッターを外しているおかげでシールドエネルギーの残量は大きく増えているけど、それでもダメージは大きい。

そんなことを考えている間にクリスタルが紅く発光しだした直後、そこへ強烈な威力を伴った弾丸が撃ち込まれる。

「今のは……」

「はろー、皆お待たせ。ナターシャお姉さんと愉快な仲間たちの到着よ♪」

「皆、大丈夫！？」

「間に合ったか！　ってなんだありゃあ！？」

僕たちの後ろから現れたのは、それぞれがＩＳを纏ったナターシャさん、シャルロットさん、一夏の三人だった。

シャルロットさんが纏っているＩＳは『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』ではない別のものだったから、それがデュノア社長か

ら彼女へのプレゼントだということはすぐに分かった。
今撃ち込まれたのは、構え方からしてナターシャさんの《銀の鐘（シルバー・ベル）》だろう。あの強固な装甲も、やたらに改造されたあれを撃ち込まれればさすがにへこむらしい。いや、凹むだけっていうのもすごいんだけど。

「細かい話はあと、とにかくぶっ壊すわよ！　会議室はこの向こうなんだから！」
「わ、わかった！」
「僕に任せて。こういう手合いは僕の方がやりやすいそうだから」

そういうと、シャルロットさんが前へ進み出て、前傾姿勢をとる。
その直後、瞬時加速（イグニッション・ブースト）によって一気に加速して合体したＩＳへ突っ込んだシャルロットさんは、その左腕で胴体をがっしりと掴んだ。

「これが、『暴風の再誕（ミストラル・リヴァイヴ）』の第三世代兵装……！」

黒いＩＳの動きが、急に停止する。
その止まり方は、ＩＳがエネルギーを失った時とまるで同じだった。

「《デュノア・オルグイユ》！」

その直後、黒いＩＳを掴んでいた『ミストラル・リヴァイヴ』のメカアームからオレンジ色の光が溢れ、やがてそれは光の束となって黒いＩＳを飲み込む砲撃と化した。
その光が止んだ時、そこには焦げた壁や床、天井のほかには何もなく、通路の向こう側には外の景色が映っていた。

「……すっげぇ」

「こんなに威力があるなんて……」
「一体どういう武装なんですか？　掴んだ途端に動きが止まったところをみると、スタン兵装とか？」

そう聞くと、シャルロットさんは呆然としながらも首を振った。
じゃあ、一体どういう武装なんだろう。砲撃系だと思うんだけど。

「仕様書には、相手のシールドエネルギーの部分に無理やりバイパス通してエネルギーを抜き取って、それを攻撃エネルギーに変換して砲撃する、って」
「なによそのえぐ過ぎる武装……。目茶苦茶ってレベルじゃないわね」
「でも、相手を掴まないとバイパス接続出来ない上に、エネルギータンクが満タンにならないと攻撃エネルギーへの変換ができないから、使い勝手は悪いけどね」

いえ、それでも十分すぎるほど強力です。
だって、強制的にシールドエネルギー吸い上げるうえに、からっからになったところでやたら強力な砲撃をゼロ距離で叩き込めるんだから。

「って、その話は学校に帰ってからにしよう。今は会社の人を助けなきゃ」
「そうね。よし、行くわよ！」

そう言って、ふーちゃんが先陣を切って歩きだす。
とりあえず、ようやく動乱のフランス訪問は終わりを迎えてくれそうなことに、僕は何とか一息ついていた。

第６６話　新たな力（後書き）

ということでチート武装を得たシャルの回でした。
しかもまだ強化フラグ建てられるんだ。ＢＣ関係じゃないけどね！
さて、次回からはまたＩＳ学園に戻ります。やっと七巻の内容の本筋に戻れるよ。

第67話　ただいま　そしてお熱

「帰ってこれたぁ……」
「ほんと目茶苦茶な一日だったわね。うわっ、もう三時よ？」
現在時刻、午前三時。午後八時時に出発して、ようやく日本の空港に到着しました。何この弾丸日程。
昔はフランスまで一三時間以上かかっていたみたいだけど、今では各国が日本に交流を持とうとするほかに科学技術の急速な発展に伴って、なんと日本とフランスの直通便が七時間で空の旅を終えられるという素晴らしい時代になったのです。ほんと、すごいね科学。
「肩凝ったー……」
「あとでマッサージしてあげようか？」
「お、それじゃ頼むぜシャル」
「ほくほく」
「んー、さすがジャパニメーション、レベル高かったわねー」
「こいつらほんとに満喫したわね」
七時間に渡る快適な空の旅の中で、一夏は普通に眠っていたせいか肩が凝り、シャルとそんなことを話していた。
簪ちゃんはナターシャさんと一緒に携行していたＨＤＤから仮想ディスプレイにデータを流してアニメを楽しんでいたから、簪ちゃんもナターシャさんも非常に楽しそうで何よりでした。
えっと、私はですね。アインというあの少女のことを考えてました。
……私と彼女たちが同じって、どういうことなんだろう。それに『ドール』って。

「こら、香織。しんみりしないっ」
「あ、ごめん」

そうだ、ちゃんと皆無事で帰ってこれたんだし、しんみりするところじゃないな。

あの後、社員の皆さんを無事救出した私たちは、その場でデュノア社がシャルロットさんのものとなったことを聞かされた。

副社長であるアンナ・ラフォンさんによると、すでにデュノア社は数日前にシャルロットさんのものとなっていて、それを知らせるのは全てのごたごたが終わった後だと社長のアルフォンスさんが決めていたらしい。

アルフォンスさんの後輩でもあったアンナさんがこれからの経営などを引き受けるつもりではあるが、デュノア社はその規模を大きく縮小、町工場より少し小さなサイズに縮めるんだそうだ。

実験用のコアとして『カスタム?』と『ミストラル・オルグイユ』の二つを所持するという体裁をとるためにＩＳの武装の開発をメインとした事業に移るらしい。

シャルロットさんは社長の座をアンナさんに渡してもいいし、自分で社長となってもいいと、アンナさんが言っていたけど、あの様子だと会社を継ぐんだろう。

「ん、どうしたの香織?」
「あ、ううん。なんでもない」

おっと、いつの間にか彼女を見つめてしまっていたらしい。

慌ててそう返すと、眠い目をこすりながらも人気の少ない空港を歩いていく。

私たちがこの時間に戻るのは千冬さんも知っているから、今頃学校で待ってくれていることだろう。

「さあ、帰りましょうか。私たちの学校に」
「ああっ」
「うん！」
「そーねっ」
「ん……」
「よーし、しゅっぱーつっ！」

とにかく、皆無事でよかった。

「只今帰りましたー……」

それから少し時間は移って、午前三時半ごろ。
寮の入り口で待っていた千冬さんは、眠いだろうから緊急の話がないなら詳しい話は明日に回すということで、千冬さんのご厚意で私たちはすぐに部屋に戻ることができた。
今頃は皆それぞれのベッドで疲れを癒していることだろう。
と、部屋に入ったところで、机に突っ伏して小さな寝息を立てているのほほんさんが目に入った。
黄色いきぐるみのパジャマを着ているところをみると、お風呂に入ってから私のことをずっと待っていたんだろう。

「……ありがとうございます、のほほんさん」

やわらかな髪をゆっくりと撫でてから、彼女の体をぐっと持ち上げる。
予想以上に軽い彼女をお姫さま抱っこのような形で抱き上げると、そのまま入口に近い方のベッドに起こさないようにゆっくりと降ろした。

「ゆっくり休んでくださいね」

布団をかけてそう呟くと、心なしかのほほんさんが笑ったように見えた。

……ただいま、のほほんさん。

「つまり、縮小したデュノアを継いで、社長と企業代表を兼任するということでいいんだな？」

「はい。政府には既に話が付いているとのことでしたから、代表候補生ではなく企業代表として二つのコアを所有するということで話がつきました」

翌朝、昨日のメンツを呼び出した私は会議室でデュノアからそんな話を聞いていた。

両親が死んだ、か。今のこいつには重い話だろうな。だが、乗り越えなければならないものだ。

「……わかった。こちらではそのように手続きしておこう」

「すいません、織斑先生」

「気にするな。なんにしても、うちの生徒と教師に怪我がなくてよかった、といったところか。皆ご苦労だった。午後からの授業にはきっちり出ろよ」

そう言い残し、私は会議室から出ていく。

と、いつの間にか私の傍には恋華が歩いていた。……本当に呼吸するように出てくるな。

「とりあえず前回の襲撃相手の撃退報酬搾り取れました！　一人頭五〇〇〇万、ざっとこのくらいですね」

「ふむ……、わかった。ご苦労だったな、恋華」

「いーえー、千冬さんのためですもの♪　いつでもなんでも、言ってくださいね！」

馬鹿みたいに明るく答えた恋華だったが、突然俯いたかと思うとぶつぶつと呟きだした。

「千冬さんのために動いているのにあの禿げオヤジども、あれこれ言ってきやがって……。こっちはテメェらの利権のためにやってんじゃねぇんだよ糞が」

「恋華、あまり苛立つな」

「あ、はいっ！　ふぁ、え、えへへ……」

ぽんっ、と恋華の頭に手を乗せて軽く撫でてやると、恋華はまるでさっきまでのイライラが嘘のように機嫌を取り戻した。

……本当に、私のことを好いてくれているのか。その想いに応えてやれない自分が、本当に嫌になる。

まだ昼前ではあったが、やはり今朝方まで起きて徹夜で出てきているのが祟ったのか、少々足元が覚束ない。

今までの疲れもあるのだろうが、私も衰えたものだ。この程度で体が音を上げるとは。

「危ないっ！」

ふらっ、と視界がぶれたところで、そんな声とともに体が支えら

れる。

「大丈夫ですか？　千冬さん……。今日は休んだ方が……」

こちらを下から覗き込む形になっている恋華を見て、ようやく自分が倒れ掛かっていることに気付き、足に力を込めて何とか持ち直す。

「いや、私がこの程度で倒れていては……」

「……ちょっと失礼」

そういうや否や、私の額に手を当てる恋華。ひんやりとしていて、とても心地いい。

数秒手を当ててからすぐに手を離した彼女は、やや怒った様子で切り出した。

「千冬さん、お熱です」

「……は？」

「だーかーらーっ！　お熱があります、風邪引いてるんです！」

「何を馬鹿な、そんなに柔な体じゃ」

「そういう事言ってるから体調崩すんですよ？　ほら、部屋に戻りますよ」

そう言って私の手を引いて歩きだす恋華になぜか抗うこともできず、そのままバランスを崩しながら歩きだしてしまう。

「いや、しかし仕事が――」

「仕事なら生徒会やほかの先生が受け持ちますから！　それよりも今は体を休めてください！」

私の手を引く恋華の強い口調に気圧され、私は反論することもできずに頷いてしまった。
……うむ、これでは私はヘタレのようだな。……いやいや、私がか？
確かに恋愛は奥手だし、よくわからんが……。
いかん、考えているとまたボーっとして……。

「っと、大丈夫ですか？」
「ぁ……、あ、ありがとぅ……」
「いえいえ。……本格的に風邪ですね。顔真っ赤です。早く寮に戻りましょう、ほら」
「ああ……」

ふらふらしながらも恋華に支えられ、何とか学校を出て寮の自室まで戻る。
敷きっ放しになっていた布団に横になると、恋華はごそごそと押入れの中から私の寝巻き代わりのYシャツを取り出して広げていた。

「今濡れタオルを作りますから、千冬さんは寝ていてください。その間に冷えピタ買ってきますから」
「いや、そこまでやらせるわけには……」
「いいから寝ててくださいっ、きゃっ！？」

ぐいっ、と布団に押し返された拍子に恋華がバランスを崩し、此方へ倒れこんでくる。
突然のことで対応できなかった私は、私の上に落ちてきた恋華の体をもろに受けてしまった。

「ぐっ……！」
「あ、ご、ごめんなさい千冬さん！　痛かったですよね……？　ご

めんなさい……！」
「い、いや、大丈夫、だ。少し息が、詰まったがな」
やや痛みはあるが、耐えられないほどではない。
大丈夫だとアピールしていると、恋華が此方を見つめていた。
「……千冬さん」
「な、なんだ？」
「可愛いです……、潤んだ目が小動物みたいで」
「は、はぁ！？　なにをいきなり……ぃ……」
思わず起き上がろうとしたところで体にどっと疲労感が押し寄せてくる。
それと同時に眠気も。
「れん、げ……、後は、頼んだ……」
「……千冬さん？　……寝ちゃった」
もう、限界、だ……。
穏やかな寝息を立てる千冬さんの寝顔をしばし見つめた後、私ははたと我に返って台所へ向かう。
水を桶に汲むと、冷凍庫から氷を取り出して桶に浮かべてからタ

オルを水に濡らしてきつく絞って、千冬さんの額に乗せた。
ざっと見た限り結構な熱が出ているから、こっちで仕事を済ませておくべきだろう。
それとともに購買に冷えピタを買いに行かなければ。生徒会の物は既に在庫切れだ。

「ふふっ、かーわぃっ……♪」

にんまりと笑みを浮かべ、あどけない寝顔を浮かべる千冬さんを見る。
こんなに頑張らなくても、周りの人に頼ってもいいんですよ。
支えてくれる人は、いっぱいいますから。私も、いますから。

「千冬さん……」

想いは、声と一緒で届かない。
何かを振り払うように頭を振ると、私は購買へ向けて駆け出した。

第67話　ただいま　そしてお熱（後書き）

過労で倒れた千冬さんと、かいがいしく看病しようとする恋華のお話でした。
そしてシャルロットは社長令嬢から社長へ、会社は小さくなりましたがこれから頑張っていくようです。

第６８話　トーナメント開始……？（前書き）

引っ越しに伴う一時的なネット環境の消滅で、連続更新が途絶えてしまいました。無念。
今回こそ、目指せ連続更新一か月。
そんな感じで、今回は二話連続でお届けします。

第６８話　トーナメント開始……？

香織達がフランスへ飛んでいた頃、ラウラは一人部屋で通信回線を開いていた。

『こちら、クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』

「クラリッサか」

『隊長！？　突然どうされました？』

「ああ、いや、その……」

普段のようにはきはきと喋ることが出来ず、ラウラは自分で考えて動くことがこれほど大変なことだとは思いもよらなんだ、と頭を振りそうになりながらも、ラウラはなんとか言葉を搾り出そうと必死になっていた。

というのも、なぜこんなことになっているのかと言えば、今朝方のラウラの思いつきが原因だった。

今日は同室のシャルロットがいない。

なら、私の用事も済ませられるのでは。

そんな思いで、今まで冷たく接してきた部下達に謝って、関係改善を図ろうと考えた小さな上司ラウラは、色々と考えた末にまずは副官との関係を修復しようと考えたわけである。

で、色々考えながら通信回線を開いたのが今の状態であった。

ぶっちゃけ、考えなしに告白に来た中学生みたいになっている。

きっと誰かが見れば相当面白い光景だろうが、残念ながらそれを見ているのはクラリッサただ一人であった。

『あの、隊長……？』

「す、すまん！　その、色々考えていたんだが、頭が真っ白になってしまって……。とりあえず、私の話を、聞いてくれない、か？」
『あ、は、はい』

あからさまに困惑するクラリッサだが、心中ではかなり色々な気持ちが交錯していた。
何があったのかと心配する部下としての心ももちろんあるのだが、最も大きい心は「何この可愛い生き物」だった。
それもそのはず、クラリッサは日本のカルチャー文化、いわゆるアニメや漫画などに多大な影響を受けている。その上で隊長であり上司であるラウラを見てみればどうだろう、見目麗しい美少女以外の何者でもないではないか。
そんな彼女であるからして、今までのように傲岸不遜、威風堂々、鉄の女とまで呼ばれそうなほどにお堅かったラウラがこれほど戸惑い、ともすれば泣き出してしまいそうに目を潤ませていては、そりゃあ彼女の心中穏やかではなかった。

「……おほん。その、今まで色々と冷たく当たってしまって、すまなかったな」
『……え？』
「お、怒っているか？　あ、いや、怒っているよな、今まで私はお前達よりも年下でありながら散々なことを言ってきたわけだし……。いくら上司といっても不愉快だっただろう……？」
『い、いえ、そんなことは！　隊長、何かあったのですか？』

シュヴァルツェ・ハーゼの隊長であるという責任感からもあったのだろう、彼女は少女ではなく常に軍人としての行動を肝に銘じていた。
ＩＳ学園に行ってから少しして、定期報告のときの彼女の様子がやや変わっていたことに気づいていたクラリッサだったが、何か心

境の変化でもあったのだろうと考えてはいた。
しかし、しかしである。彼女はこのように弱々しく謝るような性格であっただろうかと、心中でクラリッサは思わず首をかしげた。

「いや、そういうわけではないのだ。ただ、最近色々と考えることがあってな……。私は今までお前達部下に冷たく当たってきただろう。何も知ってやれなかった。それを謝りたかったのだ」

『ボーデヴィッヒ隊長……』

「本当に、すまなかった。本来なら部下一人一人にこうして謝って回るべきなのだがな……。勇気が、出ないのだ」

目の端から涙を溢れさせ、ラウラはそう零すように言う。
そんな彼女を、クラリッサは隊長ではなくただの年下の少女としか見られなかった。
だからこそ、彼女はラウラのことを糾弾するわけでもなく、ただ淡々とその謝罪を受け入れることにした。

『……いえ、構いません。隊長の謝罪、確かに受け取りました』

「クラリッサ……」

驚いたように目を開いたラウラだったが、やがて嬉しそうに顔を綻ばせる。それがやはり少女然としていて、クラリッサは神妙にしていたその顔に思わず笑みを浮かべた。
それに気づき、今度はラウラが慌てたように顔を引き締める。

「な、何かおかしいところがあったか？」

『いえ、なにも？　隊長もそんな可愛らしい顔をするんだな、と思っていただけです』

「か、可愛いっ！？　ば、バカを言うなクラリッサ！　私は別に……！」

あたふたと言葉にならない言葉を並べ立てるラウラを眺めながら、クラリッサは静かに微笑む。
それを見て、ラウラは顔を真っ赤にして俯いてしまった。
失敗したかと内心苦笑気味に思うと、彼女は俯いたままで口を開いた。

「クラリッサは……意地悪なのだな。初めて知ったぞ……」
『もしかしたらそうかもしれませんね。ふふっ、私のこと、少しわかりました？　隊長？』
「あ……」

そう言うと、ラウラはやられたと言った表情でクラリッサの方を見返す。
クラリッサは、いたずらが成功したような顔で微笑みを返した。

『今まで知れなかったなら、これから知っていけばいいんです。そうでしょう？　隊長』
「クラリッサ……。　あ、ああ、そうだな……」

どんなことがあったのかはまた追々聞くとして、今はこの可愛い隊長さんとの会話を楽しむこととしよう。
そんな、半分我欲の塊のような思いを抱いて、クラリッサは口を開くのであった。

なおやたらと楽しそうに話すばかりか自分達のちょっと見られたくない一面をぼろぼろ話しやがる副隊長に、他の隊員が気づかないわけもなく。
ほんの十数分でシュヴァルツェ・ハーゼの通信室が満杯になったのは余談である。

日本への帰国から数日が経ち、私たち専用機持ちの出場する『専用機持ちタッグマッチトーナメント』の当日がやってきた。
私たちはそれぞれの立ち位置でその場所に立ち、生徒会長たる恋華さんの開会宣言を待っていた。

「どうも、皆さん。今日は専用機持ちのタッグマッチトーナメントですが、試合内容は生徒の皆さんにとってとても勉強になると思います。しっかりと見ていてください」

凛と淀みない声でそう宣言する恋華さん。
けれど、多分彼女も実際にはそうは思っていないだろう。何せ、今回の大会に出場する専用機持ちは全員が全員どこかぶっ飛んでいる。

近接装備とチート能力だけしかない、半素人『織斑一夏』。

束ちゃんお手製の第四世代に、また一段と我が道を行くを極めだした『篠ノ之箒』。

世界でも数少ない偏光制御射撃会得者にして、この学園の専用機持ち唯一の二次移行者『セシリア・オルコット』。

独自の技能である《高速切替（ラピッド・スイッチ）》によって多種多様な武装を次々に使いこなすばかりか、強力な第三世代兵装も手に入れた『シャルロット・デュノア』。

広い射程を誇る武装《龍砲》と安定した継戦能力が特徴の機体を操る『凰鈴音』。

慣性制御型特殊兵装《ＡＩＣ》を操り、その高い戦闘能力を遺憾なく発揮できる『ラウラ・ボーデヴィッヒ』。

自らが月のコロニー『アルカディア・？』で作り上げた第三世代と第四世代の狭間とも呼べる機体を操る『更識簪』。

そして、突出した防御性能を誇る《夜羽》と単一技能（ワンオフ・アビリティ）を持つ私、『一之瀬香織』。

一年生だけでもこれだけ癖のある専用機持ちが揃っている上、その半数が『武装特性』の起動を行えるというのだから、おそらく参考になる動きなど一握りだろう。

そして、それを見抜けるものはきっと相当な腕の持ち主だ。……まあ、これだけ束になってもお姉ちゃんには勝てないんだけどね。

「まあ、それはそれとして！」

……はあ、嫌な予感。

「今日は生徒全員に楽しんでもらうために、生徒会である企画を考えました。名づけて『優勝ペア予想応援・食券争奪戦』！」

一斉に周りが盛り上がり、そして私は盛り下がる。

あー、やっぱり恋華さんは恋華さんでしたね。やな予感してたんだー。

一夏が壇上で何か恋華さんと喋ってるけど、無駄だぜ一夏クン。ああなったらあの人種は止まらない。静止されないように周りを動かすから。厄介だけどとっても世渡り上手なんだ。

「では、対戦表を発表します！」

声がしてからほんのわずかで、恋華さんの背後の仮想ディスプレイにババンッ、と文字が展開される。

そこには――、

『第一試合　篠ノ之箒、セシリア・オルコットペア　ＶＳ　フォルテ・サファイア、ダリル・ケイシーペア』

表示されたその直後、前方で恐ろしいまでの闘気があふれ出る。

「いの一番とは幸先がいいな……」

「ええ、胸を借りると致しましょう」

周りの生徒が気圧される中、箒さんとセシリアさんは背筋が凍るような美しい笑みを浮かべていた。

「セシリア」

試合予定の発表から少し経ち、私は選手控え室で精神統一をしているセシリアに声を掛ける。

タッグを組んだ後の模擬戦以降、私たちの間にあった壁はまるで元からそんなものはなかったかのように消え去っていた。

「箒さん、どうしました？」

「いや、いつも通りコンディションの確認だ。いけるか？」

「もちろんですわ。箒さんこそ大丈夫ですの？」

「ふっ、見くびってくれるなよ」

私の答えに満足げに頷くと、セシリアは再び目を閉じる。

その中で、セシリアが口を開いた。

「――いい空気ですわ。まるで、元から貴女と共にいた様です」

「私もだ。お前の周りの空気は澄み渡っていて好ましい」

セシリアの後ろ、ベンチの空きに背中合わせに座り込み、そう答える。

互いに目を閉じて互いの体温を感じ、言葉を交わして意思を通じさせる。私とセシリアが模擬戦の前には必ずやっていることだった。

こうすると、互いの考えが多少なりとも読めるようになる。思い込みかもしれないが、あるいは本当にそういうことが起きているのやも知れない。

重要なのは、私とセシリアはこうすることで意思疎通が図れるということだった。

「……勝つぞ」

「ええ」

それだけを発し、ただひたすらに思いを高める。
そうして、幾許かの時が過ぎた、その瞬間――、
――学校中に、爆音が鳴り響いた。

第６８話　トーナメント開始……？（後書き）

トーナメント改め戦闘開始ー。

第６９話　トーナメント襲撃（前書き）

連続投稿二話目です。

第69話　トーナメント襲撃

「織斑先生！」

既に管制室に入っていた私の元に、山田先生が駆けつけた。

「山田先生、状況は何が起こっている？」

「襲撃です、この画像を！」

そういって山田先生が私に見せたのは、アリーナの監視カメラから山田先生の携帯端末に送られてきた、鮮明な画像。

束が以前使った無人機、それを発展させたもののようだったが……。

「無人機か……！」

「はい、数は八基、空中に待機していたらしく、急降下からの強襲によって出現、各ピットに待機中だった専用機持ちたちが襲撃を受けています！」

このタイミングで襲撃……、束がこんな意味のないことをするか？

いくら実験といっても、他にやりようがあるはずだ。あいつには協力してくれる人間がいるのだし……。

……呼んでみるか。

「山田先生、これから見ることは他言無用でお願いします」

「え？　は、はいっ」

一瞬あっけにとられた彼女は、それから真剣な顔になって頷く。

それを見届けると、私は口を開いてあいつを呼ぶことにした。

「束」

『呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃじゃーん！　皆のアイドル束ちゃん、ただいま推参！　それで何か用かな、ちーちゃん？』

「この事態はお前の仕業ではないんだな？」

『この事態？　ああー、ゴーレムちゃんの開発はとっくに終わってるから、今更そこで実験しようなんて思わないよ？　どこかの誰かさんじゃぁないかな』

そのことを認めたくはなかったが、どうやら事実らしいと言うことに思わず歯噛みする。

こいつの話が本当なら、束クラスでないにしろそれに近い天才がまだこの学園を狙っていることになる。冗談じゃないぞ、全く。

「じゃあ、もしかして以前の擬似コアを作った誰かが……？」

『鋭いねぇ、おっぱい魔人ちゃん！』

「お、おっぱっ！？　なんですかその嫌な名前ーっ！」

「束、今回襲ってきたそのゴーレムとやらの偽者のコアと、以前の擬似コアが同一かどうか、確かめられるか？」

『もちのロンロンだよ！　まっかせなさーいっ！』

通信回線の向こうで胸を叩く束。……その大きな胸が揺れた。

「るるるー……、私はスルーなんですねー……」

山田先生、疲れているのだろうか。

……それはそれとして、だ。

やはり私も、もう一度剣を握るべきだな。教え子に頼りきりでは、私は我慢できんらしい。

「束、これが終わったら一つ、頼みがある――」

「また無人機かぁぁぁぁ！」

「ふーちゃん、どうどう」

すらりとした美しいフォルムの無人機と、後退しつつ交戦中の私とふーちゃん。

ほんと、私たちって無人機に縁があるね。嫌になりそう。

「ってーか、フランスのとは違う見たいね、これ！」

「この数日でバージョンアップしたのかは知らないけど、これはなんとも……、面倒くさい！」

《夜雀（よじゃく）》で弾をばら撒いているけど、一向にダメージを与えている様子が見られない。装甲は尋常じゃなく硬いらしい。

「ふーちゃん、《龍砲（りゅうほう）》で動きを止めて！　《啄木鳥（きつつき）》で一気に終わらせるから！」

「りょー……、かいっ！」

ふーちゃんが最大出力の衝撃砲でその巨大な図体の上半身を重点的に狙い撃つと、ぐらりと大きく後ろへ揺らぐ。

その黒いＩＳへ向けて瞬時加速（イグニッション・ブースト）で突っ込むと、左腕を大きく突き

出した。

「《啄木鳥》、武装特性起動！　《ピンポイントクエイカー》ッ！」

単純計算で十数倍の威力を発揮するその一撃が、ものの見事に黒い無人機の腹部に叩き込まれる。

轟音と共にその杭の先端が叩き込まれ――。

『損傷軽微。戦闘行動続行』

『シールドエネルギーの減衰、確認できず！　まだ動きます！』

「なぁっ！？」

イヴの声に驚きを隠せないまま、咄嗟に真横へ飛び退く。

その直後、さっきまで自分が立っていたその場所に、強烈な斬撃の軌跡が描かれた。

『久しぶりの登場ですが、かなりまずいですね』

「《ピンポイントクエイカー》が通じないなんて……。『ニュクス』の装甲も凹ませる位にはいったのに……！」

「つまりそれより堅い、防御重視型ってことでしょ。無人機だから操縦者への負担を考えなくていいから、どんな素材でもどんな構造でも問題ないし」

『つまり超強敵ってことです。どうやら襲撃を掛けたのは八機、こちらにはそのうちの一機がやってきているようですね』

冷静な意見ありがとう、とってもまずい状況だってことは良くわかった。

とにかく攻撃し続けるしかないか。と思った瞬間に飛んでくる熱線。威力はかなり上昇している、もろに受ければただではすまないだろう。

「なら、斬れるまで斬るしかないか！　イヴ、リミッター解除！　ワンオフで仕掛ける！」
『了解！　リミット・オフ！　単一技能（ワンオフ・アビリティ）、《とりのさえずり（バードエイク）》起動！』
「《ナイトホーク》起動！」
梟（ふくろう）のリミッターを外し、ワンオフと《夜鷹（よたか）》の武装特性を起動させる。
あらゆるセンサー機器から姿を消した私は、一気に接近して次々に別の場所を切りつけていく。
けれど、その半分以上は装甲で弾かれ、数少ない有効打もあまり効いているとはいえない現状だった。
「さすがに堅い……！」
「香織、ひたすら一点だけを狙うわよ！　いくら堅いって言ったって、過負荷を掛ければ壊れるはず！」
「オッケー！　イヴ、どの部分が一番薄いかスキャンお願い！」
『了解です！　……でました、胸部中央右寄り！』
「「了解！」」
イヴの声に応え、私とふーちゃんは共に地を蹴る。
私の《啄木鳥》とふーちゃんの《双天牙月（そうてんがげつ）》が僅かなずれと共にイヴの指定したポイントに叩きつけられると、轟音の後にピシッ、という音が鳴った。
「効いてる！」
『シールドエネルギー減少、いけます！』
「よし、とっとと片付けるわよ！」

ふーちゃんの一声で、私はふーちゃんと同時に攻勢に打って出た。

轟音が収まらない内に、私たちの前に現れたのは二機の人型のフォルムを持った黒いＩＳだった。

一目で無人機であることがわかるそれを見て、私は無意識に舌打ちを、そしてセシリアは不愉快そうに眉を潜める。

「……セシリア」

「ええ、ええ。わかっていますわ、けれどこれは余りに馬鹿にしていませんこと？」

「ああ。私たちの初陣だったと言うのに――」

同時にＩＳを纏い、殺意にも近い闘気を垂れ流す。

心なしか、無人機の動きが鈍った。

「――このような木偶の坊に台無しにされるとはな……！」

「これが誰の仕業であれ、許すわけには参りませんわね」

ガシャン。音と共にこちらへ銃口を向ける二機。

その直後、一機は一瞬で腕が破裂し、もう一機は四つの穴がちょうど全て真っ二つになるように切り裂かれる。

前者はセシリアがレーザーで銃口の内部を狙い撃ち、後者は私がそうなるように斬り裂いた結果だった。

余りにもろい。
機械は人を超えられない。人の脳のスペックを全て使えれば、どんなコンピュータよりも速い処理速度を持ち、どんなコンピュータよりも容量の大きな記憶装置のある万能コンピュータへと早変わりするのだから。
そんな人間相手に、無人機とは。舐めた真似をしてくれる。

「そう急くな。貴様らの相手はたっぷりとしてやるさ」
「情熱的に嬲り尽くした後で、ですが」

その直後、二機は咄嗟にその場を飛び退いた。今度はセンサーが感知できたらしく、一瞬前にいた場所を私の斬撃が抉り取る。
しかし、攻撃に転じさせることなどさせはしない。

「咲きなさい――ッ！」

三基の《ブルー・ティアーズ》から撃ち出されたレーザーが、そのセシリアの声を合図に無数の細い線へと分裂する。
まさしく花開くように四方八方へ分かれた無数のレーザーは、セシリアの意思に導かれて相手の装甲と装甲の隙間へと入り込んでいき、その直後、弾けるように一機が四散した。

「一丁上がり、ですわね」
「ふむ、私も負けてはいられないようだ……！」

《空裂（からわれ）》の武装特性、《空海断絶（チヘイヲワル）》を発動させようとした瞬間、瞬時加速（イグニッション・ブースト）を併用した踏み込みで無人機が切り込んでくる。
咄嗟に腕で防御するが、そこで腕に恐ろしいまでの衝撃が走り、思わず口の端を歪める。
ダメージが通っている。絶対防御が発動していなかった。

「これが、実戦……！　本物の傷み……！」
「箒さん！」
「心配無用だ、委細問題ない！」

戦いが、ここにあった。
私が無意識に願っていた戦いが、血生臭い斬り合いが、ここにあった。
そのことに無上の喜びを覚えるも、その相手が無人であることにまた不機嫌さを増す結果となった。
だが、それでもこれは殺し合いであり、箒が欲していたのは強者との戦い、そして命をとしたギリギリの戦いであった。

「面白い……！」

更なる踏み込みを、上から足を踏みつけることで阻止し、裏拳気味に拳（こぶし）でバイザーごと顔面に当たる部分を横から殴りつける。
メシャッ、と音が鳴ったが、やはりその程度では止まらない。
だが、一瞬隙が出来ただけで十分だった。

「《雨月（あまづき）》、武装特性……！　《万障一穿（スベテヲウガツ）》！」

《絢爛舞踏（けんらんぶとう）》と同時で発動させた《雨月》の武装特性の型は、ただ突くこと。
それだけに特化した武装特性は、あらゆる装甲も障壁も、関係なしに貫いていく。
故に、どれほど強固な装甲であっても、私の《雨月》の前には無力だった。
無人機の装甲ごと胴体に穴を開け、バランスを崩した無人機へ向けて、更に《雨月》を収納（クローズ）して居合いの形をとる。

「《空海断絶》！　斬り捨て御めェェェェんッッ！」

ギュィィッ！　という甲高い音と共に、無人機を半分に割った斬撃はそのまま控え室の壁を切り裂いてその向こう側まで消えていく。

……倒したはいいが、やりすぎたか？

「そうですわね、ちょっとやりすぎですわ」

うむ、そうだな。ちょっとやりすぎたな。いくら憂さ晴らしとはいえ。

第６９話　トーナメント襲撃（後書き）

セシリアと箒がやたら強くなっている。そろそろ自重させよう。
次回は誰かな……？

第７０話　絶体絶命（前書き）

タイトルがネタばれ！
今日から自宅のネットがつながったので、ようやくまともに更新できそうです。
ネットの使えない二、三日、辛かった……！
やっぱり、ネットは世界とつながっていると言うのを実感しました。
そんな感じでどうぞ。

第７０話　絶体絶命

「こいつらは……！？」
「フランスに出た機体と似てる……、発展形……？」

私とラウラが試合の準備をしていた時、突然現れたそのＩＳは能面のように気味の悪い姿をしていた。
明らかに無人機であるとわかるそれを見て、私たちはとっさにＩＳを身につける。

「一体、何の目的で……？」
「少なくとも友好的な相手ではないことは確かだろうっ！　くるぞ！」

《朱鉄（あかがね）》を呼び出し、突っ込んできたＩＳの刃を受けきる。凄まじい衝撃が、腕を通して私に伝わってきた。
けれど、耐え切れないほどじゃない。そう思った次の瞬間、ビクンッとその巨体が震えた。

『五号機、六号機大破。『ブレイブ・ティアーズ』及び『紅椿』のデータ収集不完全。大破前のデータから自己成長促進プログラムに書き込みを行います』

直後に鳴り響く、おそらくは内部の処理によって発生しているのであろう音。
ほんの数秒でそれが済んだ時、無人機は明らかに違う挙動で刃を引き戻し――、まるで刀を納めるようにその肘から延びる剣を左の懐、腕と胴体の間へと差し込む。
ピクリと動いた瞬間、私は背筋を駆け巡るおぞましい程の悪寒に

従って《朱鉄》を斜めに、盾にするように動かす。
その直後、轟音と共に私の腕に伝わる衝撃。先ほどのものとは比べ物にならない、まるで素手で飛んでくる大砲を受け止めたようなそれがびりびりと伝わってくる。

「ぐ、あっ……！！」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）を踏み込みに使用し、その勢いを一切殺さずに、重心を全て剣に乗せての居合い。その形だけは、以前箒がやって見せた武装特性に良く似ていた。
尤も、箒の場合はただその場での居合いだけで刃を届かせる点だけが違ってはいたが、その威力は劣化しているとはいえやはり驚異的なものがあった。
私は呻きながらも必死にその場でこらえると、横っ面を張り倒すようにラウラのワイヤーブレードが真横から無数に飛んできた。
確実にはいったと思ったそれを、無人機は後ろへ下がることで回避すると、そこから流れるように全てのワイヤーブレードを断ち切る。

「無事か、簪！」
「うん……、なんとか……。でも、《朱鉄》が……」
「無事ならばいい、武装は改修すれば直せるが、体はそう簡単には治らんからな」
「ラウラ……」
「さて、反撃するぞ。奴め、見たところさっきのデータの書き込みで『ブレイブ・ティアーズ』と『紅椿』の動きを使えるようになっているらしい。幸い、奴にビット兵器は詰まれていないようだがな」
だとしても厄介には違いない、と笑うラウラだけど、その笑みはとても心強く見えた。

ラウラの推測が正しければ、相手は『紅椿』と同じ威力、同じ技巧の技を使ってくることになる。……気は抜けそうにない。

「私は《蒼鉄（あおがね）》で叩くから……、ラウラは」

「ああ、私は《ＡＩＣ》が仕掛けられないか試してみよう。力づくで抜けられる可能性のほうが高いだろうがな」

頷いてから、《蒼鉄》をコールし、《蒼鋭蒼鉄（ソウエイノアオガネ）》を発動させる。

青いＢＴエネルギーが刃を形作り、ぼんやりと手元を青く照らした。

「あいつの攻撃は、出来る限り回避して……。まともに受ければ墜とされる……！」

「了解だ！　とっとと潰すとしよう！」

私たちの気配を感じ取ったのだろう、その場で静かに佇んでいただけの無人機は、そのモノアイを光らせてこちらを見る。

刹那、私たちは大気を押し出して前進する。

それを皮切りに、音速という区切りを一瞬で置き去りにした私たちの戦いが幕を開けた。

「はあああああっ！」

一夏の雄叫びと共に振り下ろされた《雪片弐型（ゆきひらにがた）》を、無人機は軽々と回避してみせる。

そこへ目掛け、正確無比なシャルロットのライフルによる射撃が突き刺さるが、そのダメージは軽微たるもので、その勢いを殺ぐには余りに非力なものだった。

しかし、シャルロットの狙いはそこではなかった。

『一夏、《零落白夜》の脅威がある限り、相手はそれを目ざとく見つけて回避しようとするはず。逃げ道を一箇所に絞って。そうすれば僕がそっちから回りこむよ』

『わかった、やってみるぜ！』

今のシャルロットの機体は、捕まえてしまえばもうそれでゲームオーバー、確実に落とせる威力の武装を持った機体である。

それ故に、いかに扱いに慣れているとはいってもいまだ素人の一夏よりも、人並み以上にＩＳを扱えるシャルロットがその一撃必殺を担った方がよほど効率的であることは、二人ともが納得していた。

「だあ畜生！　ふらふらふら避けやがって！」

「一般の生徒に被害が出なければ問題ないよ、落ち着いていこう！」

「おう、しっかしなんだってこんなに無人機が多いんだ？　一体誰が……」

「ストップ、今は目の前の相手に集中しよう。」

「……だな、わりぃ」

一通り言葉を交わし終えた後、一夏とシャルロットは再び息を整えて刃と銃を構える。

次の瞬間、一夏が不意打ち気味の瞬時加速（イグニッション・ブースト）で接近し、大きく刃を振り上げる。それを待ち構えていたかのように自らの腕から伸びる剣を振るおうと動き、そして飛来する無数の榴弾を受けて斜め後ろ

へと吹き飛ばされた。
その爆風の中を、刃の切っ先で粉塵を蹴散らしながら突き進む一夏は、爆発によって押し出された無人機の胸部の装甲目掛け、左下から勢いよく切り上げる。
ギィンッ！　と甲高い音でその刃を阻んだ左腕の砲身には大きく切り込まれた刃が食い込み、離れようとしなかった。

「ここだ、シャルッ！」
「うん！　行くよっ！」

大きく頷くと共に接近したシャルの左腕が、がしっと無人機の胴体を掴み取る。
異常を感知した無人機は咄嗟にもがこうとするが、それよりも早くシールドエネルギーの吸収が開始された。

『異常事態発生、異常事態発生！　シールドエネルギーのコアバイパスに不正アクセス！　エネルギー流出中！』
「もう遅いよ、丸ごと消し飛ばしてやる！」
『警告、警告！　直ちにアクセスを中止しなさい！　直ちにアクセスを――』

機械音声を意にも介さず、シャルロットは満タンになったエネルギータンク内のエネルギーを攻性エネルギーへと変換していく。
そして、エネルギーの変換が終了したその瞬間。

『警告、けいこ――。――対象のシールドエネルギーの消滅、及び生命活動の停止を行動目標に再設定。リミッターオフ』
「え――？」
『対象、シャルロット・デュノア。抹殺開始』

ドスッ。
突き刺さったブレードはシャルロットの装甲を突き破り、肩を貫通していた。

「……ぐ、あああああああああっ！？」
「シャルーッ！　くそっ、テメェ！」
『対象の血液反応を確認。アタックに成功』

無機質な反応を返すそれに怒った一夏が、《雪片弐型》を《零落白夜》を発動させた状態で振り切る。
ガシャン、と左腕が斬り落とされるが、まるで意に介さずに無人機はシャルロットの肩の傷口を抉っていく。

「あ、あああああ！」
「やめろよ、やめろっつってんだろう、がァッ！」

硬い音を響かせて、一夏の刃がシャルロットに突き刺さっていた刃を肘先から切り落とす。
そうしてシャルロットはようやくその刃を引き抜くと、肩で荒く息をしながらも力強い目で無人機を見据えた。

「いち、か……。僕の腕を支えて、一人じゃ持ち上がらないんだ……！」
「けど、シャル！」
「いいから……！　これが終わったら医務室に行くから、今は……！」
「……わかった。必ずいけよ……！」

シャルロットの思いに応え、一夏はその腕を支えて砲台のように据える。

痛みを堪えて顔を顰めていたシャルロットは、それでも皮肉気に口元を歪めると、頭の中でその引き金を引いた。
ギュオッ、とオレンジ色のエネルギーの奔流が無人機を飲み込み、壁ごと駆逐して行く。
その向こう側には、これ以上動かしようのない残骸となった無人機が打ち捨てられるように転がっていた。

「ハァ……ハァッ……！」
「お疲れ、シャル……！　早く医務室へ！」
「うん……」

ダメージを負った方とは逆の肩を抱き上げ、一歩足を踏み出す。
その直後、その目の前に熱線が降り注ぐ。

「糞ッ、まだいるのかよ！」

そんな悪態を聞き届ける相手は、丁度さっきの相手を吹き飛ばしたその向こう側からやってきていた。
先ほどまでと全く同じ、外傷のない綺麗な風貌で。

「……シャル、少し待っててくれ。すぐ片付ける」
「一夏、無理しないでね……」
「おう」

無理しないというのは無理だろう。
一夏は心の中でそんなことを考えつつ、静かに《雪片弐型》を構えた。

「ちょこまかと動きおって……！」
「次右、ブレード！」
「了解、だっ！」

簪の指示に従って、私はプラズマ手刀で相手の刃を受け止める。
その超至近距離の状態から、右肩に搭載されているレールカノンの発射口を無人機の顔面へと突きつけ、そのまま撃ち放つ。
しかし、弾丸が接触するほんのコンマ数秒前というところで真横に回避した無人機は、明らかに人間が可能な動きの範疇を超えていた。
まったくもって、面倒なことこの上ない相手ではある。だが、どうやって戦うか……。

「まずい……そろそろＢＴエネルギーが」
「……わかった、次で落とすぞ」
「了解」

確かに、戦いだしてからそれなりに時間が経過している。
エネルギーを使う武装ではない私はともかく、簪の《蒼鉄》はＢＴエネルギーを使用する武装だ。であれば、長時間の戦闘はエネルギー補給経路を確保していなければ不利になるばかりだった。
私は何度か手を開き、閉じを繰り返し、静かに《ＡＩＣ》のタイミングを計る。

「熱線が来たら回避、踏み込みに合わせて《ＡＩＣ》を当てるから、

そこに刃を叩き込め」
「了解、がんばろう……」
「ああ」

言葉を交わし終え、意識の全てを無人機へ傾ける。
それが、あだとなった。

「――がぁ……っ！？」
「ッ！？　簪！」

背後から近づいてきていた無人機は、確かにハイパーセンサーに反応していた。それに気づかなかったのは、相手が一機だという思い込みと、集中力を一機だけに傾けてしまった故。
ぞぶり、と叫びだしたくなるようなおぞましい音を響かせ、簪の腹部に突き刺さり、その血で真っ赤に彩られた刃を引き抜いたもう一機の無人機は、無機質なそのバイザーを輝かせてこちらを見た。

「がはっ……！　ぐ、うぅぅ……！」
「簪！　くそ、貴様ら……、ぐぅっ！？」

警戒しながらも睨みつけると、次の瞬間には八本分の熱線がこちらへ迫ってくる。
それを回避しようと斜め前方へ動いた瞬間、文字通り熱線がねじ曲がって私の装甲を次々に焼いていった。

「な、曲がった！？　そんな、馬鹿な……？！」

肌もだいぶ焼かれたらしく、火傷に伴う相当な痛みがじくじくと私を苛んでいる。
そのせいで集中できず、《ＡＩＣ》も使えそうになかった。

と、無人機の一機がガツン、と簪を蹴り飛ばす。力なく蹴り飛ばされた簪は、壁に叩きつけられた衝撃で血を吐きだした。

「かふっ……！」

「よせ、やめろぉ！　がはっ！」

声をあげた私を熱線が狙い、回避したその場所にねじ曲がった熱線が叩き込まれる。

あっという間にシールドエネルギーは削られていき、すでに二ケタ台にまで落ち込んでいた。

そこでようやく気付く、自分と簪のＩＳの絶対防御が発動していないことに。

「うぐっ……」

簪の呻き声が木霊する中、私は焦燥感に歯噛みしていた。

このままでは――。

第７０話　絶体絶命（後書き）

ぼろぼろの一夏&シャルロットペアと、ラウラ&簪ペア。
果たしてどうなるのか！　次回お楽しみに！

第７１話　力の意味（前書き）

ちょっと短めです。

第７１話　力の意味

状況は最悪だった。
簪は腹部に大きく傷を付けられ、私も無事とはいえない状態。
反撃の最中に何とか片方のブレードは破壊したが、それでも曲がる熱線と強烈な踏み込みによる一撃は残っている。
歯軋りする間もなく迫り来る熱線を何とか回避しながら、突破口を必死になって探し続ける。

「ぐ、うぐぁぁ……！」
「くっ……！　簪、耐えてくれ……！」

うめき声を上げる簪に狙いを定めないのが、唯一の救いか。
しかし、既に周囲はぼろぼろに破壊され、がらんどうの通路まで見えている。このままこの無人機が通路を進んで行ってしまえば、他の一般生徒達の元まで行ってしまうだろう。
それだけは、避けなければならない。
そんなことを考えていたからなのだろうか。接近するブレード持ちに気づけなかったのは。

「しまっ！？　ガハァッ！」
『敵性ＩＳの沈黙を確認』

踏み込みに耐え切れずに壁に叩きつけられた私のシールドエネルギーが底をつく。
それを確認した無人機は、私に背を向けてゆっくりと動き出した。
痛みで朦朧とする意識の中、私は必死に瞼を閉じまいと足掻く。
そんな私の耳に、その声は聞こえた。

「に、げて……！」

『『真打（しんうち）・鉄（くろがね）』のシールドエネルギーの残留を確認、排除します』

――よせ、やめてくれ。

声も虚しく、静かに構えられた八つの銃口に赤い光が溜まっていく。

私は、香織どころか仲間一人満足に守れないのか。遺伝子強化素体（アドヴァンスド）が聞いて呆れる。

頼む、『シュヴァルツェア・レーゲン』。私に、力をくれ。

力を――！

かちり。かちり。

音がして、私は目が覚めた。

ぼーっとした感覚のまま周囲を見渡すと、そこはレンガ造りの小さな家だった。

フリルの付いたテーブルクロスに、マフィンと紅茶がそっと置かれている。

目の前には、白い肌に黒い髪をした女性が座っていた。

「……ここ、は」

声を出してから、自分がどういう状況に置かれているのかを悟る。
理解できたわけでも、納得できたわけでもなく、ただ解った。

「お前の中、か」
「そう。初めまして、もしくはこんにちは、戦友（カメラード）」

シュヴァルツェア・レーゲン。彼女はそのコアの人格だった。でなければ、私を戦友だなどとは呼ばないだろうし、私をこのような不可解な場所につれてこられるはずもない。
彼女は紅茶の香りを楽しみながらスコーンを頬張ると、美味しそうに口を動かした。

「それで、なぜ私はここに？」
「んくっ……。っぷはー。力、ほしいんでしょ？」

さも当たり前のように口にした彼女が手を振るうと、テーブルクロスの上にかちゃん、と二つのビンが現れた。
小さな薬瓶くらいの大きさのそれは、片方は白、片方は黒に染め上げられている。
それを指先で撫でながら、彼女が言った。

「白い方を飲めば守る力。黒い方を飲めば壊す力。どちらか好きな方を選びなさい」

私は選択には口を出さない。
笑みを形作りながらそう言った彼女は、それきり口を閉じた。
守る力と、壊す力。その選択肢を作るということは、それによって何かが変わるかもしれないということ。
そして、その変化を恐れないものが、力を掴み取れる。……きっと、以前の私なら迷わず黒いビンだけを飲んでいただろう。

「……シュヴァルツェア・レーゲン。一つだけはっきりさせておこう」
「……？」
「私は愚か者で世間知らずな糞ガキだ。今はまだ誰かを守ること一つ満足に出来ない」
たとえＩＳを持っていても、優秀な力があっても、子供は子供だった。
結局私は私から抜け出すことはできない、けれど、周囲が私を知ってくれる。私は周囲を知ることが出来る。だから、私は私を変えられる。
「だが、そんな私に手を差し伸べてくれる人がいた。目を上げれば、沢山な」
「……そう」
その沢山の人たちの思いを背負って、私はこうして生きている。遺伝子強化素体（アドヴァンスド）だからではなく、『ラウラ・ボーデヴィッヒ』だから生きている。
だから、それを守るための力ならば。私が使う力ならば、それこそが相応しいだろう。
「だからこそ。私はこの道をとらせてもらう」
そう言って、私は黒い薬瓶を手に取ると、中身を一気に飲み干す。胃がムカつくような感覚に、ぐらりと視界が揺れるが、必死にその場に踏ん張った。
彼女は、悲しそうにこちらを見る。

「そう……。それが、あなたの選択……」
「だれが、これだけだと言った？」
「え――？」

やや体の力が抜けた状態で、白い薬瓶を鷲掴むと、また一気にそれを飲み干した。すると、さっきまでの体の異常が瞬く間に治っていく。

驚いた顔の彼女を見据え、ニヤリと皮肉気に笑ってみる。上手く笑えただろうか。

「守る力も壊す力も、共に力だ。力の意味を変えるのはいつだって人だ。私はそれを今までの戦い、人との触れ合いで知った。ならば、両方を飲み下すことこそ、前へ進む道だろう？」
「……驚いた、まさかそんな無茶をしてみせるなんて」

力に貴賤はなく、故に力はただ力でしかない。
私はもう、力の意味を見失わない。強さの意味を、見間違えない。
まだ私は見つけていないが――、いつか見つけてみせてやろうじゃないか。そのための力だ。
だから、そのために今は、仲間を守る力になってくれ。

「いくぞ、暖かな夢は終わりだ」
「……ええ、戦友」

頬を吊り上げた笑いを見せると、ゆっくりと私の意識が遠のいていく。
そして、次の瞬間にはぼろぼろになっていた私の周囲が完全に止まっていた。
光を放つ私のレッグバンドに触れると、勝手にＩＳが起動し、次々にウィンドウを開いては処理を終えていく。

数秒で処理を終えたあと、目の前には一つのウィンドウが表示されていた。

『二次移行処理が終了しました。完了を押して二次移行を完了してください』

迷わず完了を押すと、私のＩＳが穏やかな光を放ちだす。装甲は形を変えていき、武装もその数や種類を変えて行った。

その光が収まったとき、そこにあったのは『シュヴァルツェア・レーゲン』であって『シュヴァルツェア・レーゲン』でないもの。

二門となったレールカノンに、倍以上の数に増殖したワイヤーブレード。プラズマ手刀は大きく強化され、普通の装甲なら一瞬で切り裂けるプラズマブレードになっている。そして装甲は、四肢と胸部を守るように増えていた。

全てのスペックを読み解きながら、私は静かに目を開く。そこに輝いているのは、二つの金の瞳。

ＩＳと共に、私も進化した。自らを進化させ、本当の『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』を手に入れ、ようやく私は『私』になれた。

自分で望んで手に入れた力だ、二度と誤ってなるものか。

そう決意し、私は無意識的に発動させている《ＡＩＣ》を意識的に切り替える。そうすることで、簪の周囲一帯を対象としていた《ＡＩＣ》は、無人機たちだけに限定された。

「遅くなった、簪」

「ラウ、ラ……」

「すぐに片付ける。待っていろ」

冷徹に無人機を睨みつけながら、出来るだけ優しく簪に声をかける。

簪と鈴は、言わばライバルでもあり、未来の家族でもあるのだ。

邪険にする理由などない。
それに、私は友は助ける。

「さあ……、いくぞ木偶人形。エネルギーの貯蔵は十分か？」

尤も、すぐに尽き果てることになるだろうがな。
吐き捨てるように言い放ち、私はワイヤーブレードを撃ち出した。
空を裂き疾駆するそれを操作し、四〇にも及ぶワイヤーブレードでブレードのない無人機の左腕に装着されている砲塔を絡め捕る。
そのままそれを引きずってこちらへ引き倒すと、両肩に備え付けられたレールカノンで次々に無人機へ弾丸を撃ち込んでいく。
耳障りな機械音を掻き消すように射撃は苛烈さを増していき、やがて装甲がぼろぼろに壊れたところで片腕のプラズマブレードをその装甲を潰すように突き刺した。
バギッ、と堅い音が響き、コアが壊れる感触がブレードを伝わってこの手に広がる。
コアを壊された無人機は溶けるように消滅する。その様を、私は冷たい視線のままで見ていた。
見届けた後、もう一機のブレード持ちの方へと向き直る。簪の方を向いて銃口を突き付けた状態で固まっているそいつへワイヤーブレードを繰り出すと、切っ先を全て装甲へ突き立てる。
その状態でワイヤーブレードを大きく振り回し、次々に地面や天井へと叩きつけていく。その度にシールドエネルギーがガリガリと削れ、バイザーの奥のモノアイが鈍く光る。

「貴様らは……、ここで潰す！　シュヴァルツェア・レーゲン！」

次の瞬間、全てのワイヤーブレードの剣先からプラズマブレードが形作られ、絡みついている無人機を一斉に貫く。
そのうちの何本かがコアに達したのだろう、無人機の挙動がおか

しくなってきた。やがて何か言葉を吐き出すこともできなくなった無人機は、ゆっくりと溶解していった。

そこまでやって、私はようやく息を吐き出すと、すぐに簪の元まで駆け寄って横抱きに抱き上げた。

「すぐに医務室に連れて行くからな。耐えろよ」

「うん……、あり、がとう……」

苦痛に眉を顰めながら、それでも無理矢理に笑みを形作る簪を見て、私は思った。

仲間を、家族を、守れる自分になろうと。せめて手の届くものたちだけは守れるようになろうと。

……強さの意味が、ほんの少しだけわかった気がした。

第７１話　力の意味（後書き）

ラウラ覚醒回。目新しい武装はありませんが、格段に強化。ラウラが見た目イノベイター化しました。

次回こそ一夏、かなぁ。

第７２話　白き力

次々に繰り出される打ち込みを必死にいなしながら、一夏はなんとか反撃の糸口を見つけ出そうとしていた。

《零落白夜（れいらくびゃくや）》を発動させようとしても、それを阻むように繰り出される鋭い一撃に対応するために《雪片弐型（ゆきひらにがた）》を振るうために集中もできず、ひたすら攻撃に対して対応するだけのため、発動することはおろか攻めに転じることすらできていなかった。

ただでさえシャルロットの怪我のせいで焦っている一夏は、時折掛かる強烈な衝撃を堪えながら刃を振るっていた。

「どうにかして、隙を見つけ出さないと……！」

考えながらも剣を振るう手は止められない。

と、突然がくん、と無人機が動きを止める。その挙動に不審なものを感じた一夏は、油断なく無人機を見据えて《雪片弐型》を構え直す。

心配そうにシャルロットが見つめている中で、無人機はおもむろにその機械じみた音声を流しだした。

『二号機、三号機大破。『真打（しんうち）・鉄（くろがね）』及び『シュヴァルツェア・レーゲン』のデータ収集不完全。『シュヴァルツェア・レーゲン』の二次移行（セカンドシフト）を確認。大破前のデータから自己成長促進プログラムに書き込みを行います』

「自己成長……！？　さっきと同じだ、一夏！」

「なら、ここで倒せば問題ねぇ！　うおおおおぉぉぉお！」

シャルロットの焦った声に応え、一夏は《零落白夜》を発動させて大振りに斬り込む。

その瞬間、一夏の体がピシリと固まった。

「なっ、に……！？」

「これは……！」

バイザーの奥のモノアイが鈍く赤い光を放っている。明らかに何かの武装を使用しているが、それは本来この無人機には積まれているはずのないものだった。

「《ＡＩＣ》……！？　そんな！」

「体が……！　ちくしょう、またこれかよ……！」

『《Ａｃｔｉｖｅ　Ｉｎｅｒｔｉａｌ　Ｃａｎｃｅｌｅｒ》正常稼働』

動かない体で必死にもがきながら、一夏は何とか抜け出そうとする。

しかし、既にボロボロになっている『白式』にも、そして一夏自身にもこの事態を打破する手は残されていなかった。

ゆっくりと、空中で静止する一夏へ向けて四つの砲門の取り付けられた右腕の熱線砲を構える。

「やめて、やめてよっ！」

涙を溢れさせながら、しかしシャルロットはそう叫ぶことしか出来ない。

自分の無力さに打ちひしがれながら、シャルロットはただただ叫んだ。

やがて、熱線砲の光が砲門から溢れ出していく。

次の瞬間、一夏の意識はぶつりと途切れ闇におちた。

穏やかな歌が聞こえた。
気が付くと、一夏はどこかの浜辺に横たわっていた。横になっている場所は芝生になっていて、太陽の光を遮るようにヤシの葉が頭上に広がっている。
体を起こして歌の主を探してみれば、大きな流木の端に立って歌う彼女が見えた。

「この歌……」

それは、とても暖かな印象を受ける穏やかな歌だった。
しばらくの間ゆっくりとそれを眺めていた一夏だったが、少女が歌うことを止めたところでハッと我に返る。
少女は穏やかな歌声と同じような、温かな目を一夏に向けてきていた。

「君は……？」
「それは、一夏。貴方がもう知っているはず」

やはりと言うべきか、声も暖かなものだった。
真っ白い髪に白のワンピースで身を包み、笑みを崩さない少女。
見たことはなかったが、一夏の胸の中にはどこか暖かい懐かしさのようなものが灯っていた。

「力を、欲しますか？」
「――ああ」
今までと違う、斬りこまれる様な鋭い一言に、一夏は躊躇いなく頷いた。
そのさまを見て、少女は更に言葉を続ける。
「なんのために？」
「仲間を、守りたい」
一夏はシャルロットの涙を見て思った。自分は、また誰かに心配をかけて、悲しませて、それで終わりなのかと。
それは、とてもいやなことだった。
だからこそ、守りたいと強く願った。
「俺の友達を、仲間を、家族を、守れるだけの力が欲しい――！」
「……その言葉に、偽りなきことを誓うか？」
いつの間にか、少女の後ろには白い騎士が立っていた。
どこかで見た覚えのある甲冑姿の、女性の姿。それはとても誰かに良く似ていた。
「ああ」
けれど、それに思いを馳せることもなく、一夏はまたもや躊躇いなく頷く。
その答えが正しかったのか、白い騎士は小さく頷くと少女の肩に手を置いた。
「わかりました。既に、貴方には力を扱うだけの思いと素質があり

ます。この力を、どうか誤らずに」
「……ありがとう」
光を放つ何かを少女の手から受け取った一夏は、ようやく笑みを浮かべる。
いつの間にか感じていたもどかしさが、ようやく消えた感じがしたから。
「――ありがとう、白式」
「……どういたしまして、一夏」
最後にそう礼を言って、一夏はその場から消えていく。
後には、白式と呼ばれた少女と、白い騎士の女性だけが残された。
「一夏ぁぁぁぁ！」
強烈な爆発と共に、辺りに煙が立ち込める。
凄まじい煙で視界が悪いその向こう側にいるはずの、好きな人の名前を呼び続けた。
シャルロットの目の前で起きたことが、彼女にとっては信じられないことだったから。
「嘘、嘘だよね……？　いちか、一夏ぁっ！」

必死に呼ぶも、反応はない。
ただ、キィン――、と言う音が響く、だけ。
――なんだ、この音。
ふと疑問に思った次の瞬間、轟っ！　と風が吹き荒れる。
その中心には――。

「間一髪、間に合ったか」
「一夏！」

ニヤリと笑みを浮かべた一夏の姿があった。
その左腕は巨大な腕部パーツへと変貌しているほか、背中には四基のウィングスラスターが作り出されていた。
その姿を見て、シャルロットは瞬時に一夏の『白式』が二次移行（セカンドシフト）を遂げたのだと悟る。土壇場での二次移行なんて、ずいぶん主人公らしいな、と、シャルロットはそんなことを考えていた。

「シャルロット、すぐに片付けるから、ちょっと待っててくれよな」

闘志を漲らせ、一夏はそう宣言する。
その直後、一夏は瞬時加速（イグニッション・ブースト）で無人機へと突撃していく。
即座に熱線が迫るが、それはメカアームを振りかざすことによって掻き消された。

『熱線の消滅を確認、原因不明』

不可解そうに機械音声でそう告げる無人機へ向けて、一夏は明け透けな笑みを浮かべながら《零落白夜》を発動させた《雪片弐型》

を振りかざす。
体をくねらせて回避しようとした無人機だったが、そこへもう一本の刃が迫る。メカアームの先端から伸びたエネルギーブレードだった。
多機能武装腕《雪羅（せつら）》、それが一夏の新たな武装である。
大型荷電粒子砲、エネルギーブレードに零落白夜のエネルギー爪などを搭載し、零落白夜のエネルギーを防御用のバリアとして展開できる機能も持っている。
その《雪羅》の先端からブレードを展開している一夏の一撃が、熱線を繰り出し続けていた左腕の砲身を肩口から切り落とした。
ガシャン、と大きな音を立てて地面に落ちた砲身に目もくれず、一夏はブレードを収めると《雪片弐型》の刃を一気に叩きつける。
頑丈なブレードによってそれを受け止めた無人機へ向けて左腕を掲げた一夏が、にっと笑みを浮かべた。

「行くぜ、黒尽くめ野郎！」

次の瞬間、エネルギー充填の終わった荷電粒子砲が至近距離から無人機に撃ち込まれる。
無人機の強固な装甲を次々に溶かし尽くしていくその弾丸が消え去り、ようやく反撃だと動き出そうとした刹那、その無人機の頭上から光の刃が叩きつけられ、ばっさりと切り捨てられた。
そこでようやく《零落白夜》を解いた一夏は、無人機が沈黙したのを見てやっと安堵したように息を吐きだす。

「シャル、大丈夫か！？」
「うん、まだ痛いけど、生命維持がフルで稼働してるから大丈夫……。よかった、無事で……」
「それをシャルが言うかよ……。とにかく、早く医務室に行かないと」

念のために『白式』の第二形態、『雪羅』を身に纏ったままでシャルロットに近づく一夏。
肩の怪我はある程度出血が抑えられているらしく、時折痛みに顔を顰めるものの意識ははっきりしていた。

「えっと、一夏……。もしよかったらで、いいんだけど」
「ん？」

突然、頬を染めてもじもじしながら、シャルロットが続ける。

「医務室まで、運んでくれないかな？　肩が痛くて……」
「おう、いいぜ」

簡単に頷いた一夏は、四肢の武装だけを解除して、最低限の機能使用に必要な分だけＩＳを残したシャルロットをそっと抱きあげる。
それは、俗にお姫様だっこといわれるものであった。
あんな戦闘のあったすぐ後に何をしているのかと言われればそれまでだが、これも恋する少女の強さであるのだろう。
一夏とシャルロットは、そのうち来るはずの整備班に後を任せ、医務室へと急いだ。

「千冬さん、恋華（れんげ）。やっぱりここにいたのね」

その頃、葵（あおい）は一人管制室にやってきていた。
アリーナにあるすべての監視カメラの映像が流れてくる管制室にいたのは、数日前にあった襲撃事件の折、管制と助太刀を行った山田真耶（まだまや）、織斑千冬（おりむらちふゆ）、更識恋華（さらしきこいか）の三名。
その中に一切の躊躇いなく入っていった葵は、我が物顔で近くの椅子に腰かけると言葉を続けた。

「ほかの教師はどうしたの？」
「みな警備や生徒の誘導に回っている。いつ奴らが増援で現れるともわからんからな」
「こっちは何が起きてもいいようにここに詰めてるってわけよ」
「なんだか、もう今年は滅茶苦茶ですね……。穏やかな日々というのはいつ来るんでしょうか」

理知的な声を響かせる二人とは対照的に、真耶は疲れ切った様子でそうこぼした。
その様子に千冬が苦笑し、それを見て真耶に恋華が嫉妬するという一幕があったが、それは取り立てて言うべきことでもないだろう。
葵はふぅん、と一言つぶやくと、それきり黙りこくる。
嵐はいまだ収まらず、これからの何かを予見しているようにも思えた。

第７２話　白き力（後書き）

やっと一夏覚醒！
次回はようやく香織サイドに戻ります。
あ、雪羅は特に変わらないですのであしからず。

第７３話　終結……？

「いやー、長いっスね先輩」
「そうだなー、反撃してねえもんなー」

皆が戦っているなか、無人機の一機に襲われた専用機持ちの三年、ダリル・ケイシーと二年、フォルテ・サファイアの二人は、熱線と強烈な踏み込みの全てを、防御と回避に専念することで全て受け流していた。

そういってしまえばまるで怠けているようだが、適度に小突いてターゲットを変更させないことで二人に攻撃を集中させ、周辺に残っていた一般生徒へ攻撃させないと言う意味もあった。

その一般生徒達の非難も終了した今、本来なら反撃しても問題ないわけなのだが。

「けど殴るのもアレっスよねー」
「そうだなー、疲れたくねえもんなー」

ご覧の有様である。

しかもフォルテに至っては今回の『無人機の強襲』という事態を目の当たりにして、学園側のこの反応の遅さからこのようなことが一学期にもあったなと思い出していた。

一学期のクラス代表戦での『試験機の暴走』に始まり、その後の学園別タッグトーナメントでのドイツ代表候補生の専用機の暴走。

二学期に入ったところで今度は謎に満ちた男性ＩＳ操縦者三名が襲撃、内二名は木っ端微塵に自爆すると言う過激な最期を遂げている。

さてさて、そこまでを含めてこれを考えてみよう。数日前には五〇〇〇万と少し、例の件の『報酬』とやらがフォルテの講座に振り

込まれていた。しかもそれは日本政府から楯無会長が搾り取り、そこに織斑千冬の個人資産から彼女自身が厚意と善意で提供した資金である。

報酬もろくに出さず、命を懸けろと何度も何度も戦場に連れ出す。確かにＩＳ操縦者はいざそうなったときには戦力として扱われるが、ここは学校である。そんな扱いをして何の見返りもなければ、それはそれは大いに叩かれることだろう。

ここまで考えてから、改めてフォルテは思った。ここやばい、と。おそらく委員会の子飼いであろう黒尽くめ集団はいるわ、やたらと狙われて命が危ないわ、もうまともな生活なんて期待できもしない。

そのことは大体の範囲でダリルも解っていたため、二人して戦うこと自体が面倒になっていた。

「けどなぁー、やらねぇとおわんねーしなぁー」
「そっスねー。んじゃー、まあ」

面倒ではある。あるのだが、それを面倒くさがって委員会に目をつけられでもすれば非常にめんどくさい事態になりかねない。というか目をつけられれば間違いなく面倒なことになる。

であるからして、そんな結論に至ったフォルテとダリルは。

「いっちょ」
「反撃しまスか――」

その声とともに攻撃に転じようとしたその瞬間、無人機のブレード部分を荷電粒子砲の砲撃が消し飛ばしていった。

「余計なお世話だったかしら」
「あ、姉御！？」

ぶち破られたその壁の向こう側に立っていたのは、巨大な荷電粒子砲を片腕で担ぎあげている葵だった。
その姿を見たフォルテは、驚きの声を上げる。

「おいおい、生身でそんな物騒なもん使えるやつがいたのか……」
「一之瀬葵、二年よ。よろしく」
「ああ、三年のダリル・ケイシーだ。よろしくな」

呆れ半分驚愕半分と言った様子ながら、葵に近づいて行ったダリルは腕の部分のＩＳを解除して軽く握手を交わす。物騒な代物に見合わない柔らかな葵の手に、ダリルは少なからず驚きを見せた。
そんな中で、無人機はようやくダメージの後遺症から抜けきったのだろう。ガチャガチャと耳障りな音を響かせながら三人の方へ左腕の銃口を振りかざしてみせる。
その様子を、葵はただただ見つめていた。

「なんとも不格好ね。似合わないわよ、それ」

次の瞬間にＢＣブレードから軽口の音とともに放たれた神速の斬撃が、衝撃波となって無人機の左肩へと食らい付く。
音もなくその部分を裂いた斬撃が後方へ消え去り、無人機は何が起きたのかもわからないままその左腕に取り付けられた砲塔を地面に落した。

「うん、いい感じだわ。スマートよ」
「……おい後輩、これほんとに人間か？」
「あたしの知る限りでは織斑先生に勝てる唯一の存在っス」
「マジかよ……」

葵のそばで二人がそんなことを呟いていたが、葵はあえて聞いていないことにした。

「さて、と。これで破壊を確認したのは七体ね」
「全部で何体来てるんスか？」
「八体よ。そのうち六体はさっきまでで破壊されたし、今のので七体目よ」
「ってことは残り一体か。場所はわかるのか？」
「ええ。ここからはかなり遠いけど」

そう言って葵は端末の情報を仮想ディスプレイに映し出す。
そこには、ＩＳコアの反応に似たものがチカチカと点滅していた。
残っているのは、第三選手控室の一点のみ。

「すでにナターシャ先生が向かってるから、二人は一度戻ってきて。案内するわ」
「了解ッス！」
「おう、わかった」

ＩＳを身につけたままの二人を先導して、葵は管制室へと歩き出した。

一方その頃。

「っだぁっ、堅すぎよっ！」
「狙って叩いてるのに、効かないなんて……！」
『内部にもシールドビットを配置しているようです。衝撃はそれで吸収されてしまっています！』

件の第三選手控室にて戦闘を続けていた香織と鈴、そしてそのサポートを行っているイヴの二人と一機は、予想外の強敵に苦戦していた。

ほかの無人機と違いシールドビットを備え、内外にシールドを張り巡らせている相手とあっては、自慢の攻撃力も半減させられてしまう。

かといって無茶苦茶に高威力な武器と言ってもあるわけなく、二人はイヴのサポートを受けながら時間を稼ぐのが精いっぱいだった。

「こうなったら一か八か、賭けてみる？」
「……でも、どうやって？」
『二人とも、無理は禁物です。アウェイでない以上勝機はもぎ取れます。なにより、私のサポートで負けを経験させるわけにはいきません』
「イヴ、随分張り切ってる、ねっ」
『最近めっきり出番が減りましたから、この辺で存在感を出しておかないと』
「……イヴ、貴女疲れてるのよ」
『鈴、今私のことをバカにしませんでしたか？』
「してないしてない」

和気藹々（わきあいあい）と言葉を交わしあいながら、相手を警戒することは忘れない。

鋭い踏み込みの一瞬を狙って鈴が言って早く切り込むも、シール

ドビットのエネルギー場によってそれは阻まれ、踏み込みの後の隙を狙って香織が《啄木鳥》を突き立てれば、コアに届く寸前で内部のシールドビットのシールドによって止められてしまう。

ぎりっ、と奥歯を噛み締めながらも必死に攻勢を維持しようとするが、一対二という比較的有利な状態にもかかわらず、香織と鈴の攻撃はまるで歯が立っていなかった。

と、突然無人機に降り注ぐ銀色のエネルギー弾。その豪雨に晒され、シールドビットで防ぎきれなかった二割ほどがその装甲に大きく傷を付けた。

「これは!?」

「ハロー、お待たせ二人とも。皆大好きナターシャお姉さん、参上よ!」

「ナターシャぁ!?　ま、まあいいわ、助かる!」

現れたのは、銀色のＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』をその身に纏ったナターシャだった。

その手に備えた《銀の鐘（シルバー・ベル）》のカノンタイプと、頭部に備え付けられている本来の広域射撃武器である《銀の鐘》から純白のエネルギー光を溢れさせ、にやりと笑みを浮かべる。

「さて、それじゃあとっとと終わらせましょうか！　《銀の翼の奏でる鐘（Silver Wing Bell）》！」

その声に反応し、頭部の《銀の鐘》にカノンタイプがドッキングしていく。

二枚の羽を補強する形で装着し終えたそれが、眩い白の光を溢れ出させた。

「これって、《銀の鐘》の武装特性」!?」

「ナターシャさん、使えるようになったんですね！」
「まーねぇ、お姉さんは何でも出来なきゃ。ってことで、行くわよーっ！　歌い奏でましょう、『ゴスペル』！」

直後、十数倍に広がった一対の白い羽。
光を放ちながら羽ばたくそれからは、一度羽ばたく度に目も眩むような弾幕が振るい出されていく。
金属質な音を響かせながら、無人機はシールドビットのシールドとその機動性を持って何とか回避していくが、やはり回避しきれない弾幕の一部が無人機へと降り注いだ。

『危険！　危険！　損傷増大！』

銀の鐘の音に叩きのめされながらも、無人機は熱線で壁を抜くと更に広いアリーナへと逃げていく。
しかし、背を向けたその隙を、ナターシャが逃すはずもなかった。

「あまぁーい♪　《銀色の鐘の音》（Dies Irae）！」

白く大きくなった羽はそのままに、右腕に装着された《銀の鐘》は、カノンタイプに切り替わりエネルギーを一瞬でマックスにまで跳ね上げる。
次の瞬間、《銀の鐘》から研ぎ澄まされた一撃が撃ち放たれ、無人機の下半身をごっそり抉り取っていった。

「どんなもんよ！」
「滅茶苦茶ね……」
「ありがとうございます、ナターシャさん。助かりまし――」

『――全機撃墜を確認。これより最終フェイズへ移行します』

ぞわり、背筋に怖気が走った。
それがなんだったのか、その答えはすぐにやってくる。
勝利に湧いていた三人の目の前で、下半身の消し飛んだ無人機がＰＩＣによって宙に浮くと、がぱっ、とその口を開いた。

「なに……！？」
「おーいこういうの前にも一回あったわよね……！？」
「ってことは、つまり……？」

『全ての機体を量子変換。結合プロセスへ移行します』

次の瞬間、香織達三人の目の前に現れたのは大量の無人機の残骸。
何事かとそれを見つめていると、残った一機はあろうことか、その口を大きく開いてがつがつとその残骸を喰らい始める。
いっそ清々しいほどにおぞましい、吐き気を催すようなその光景を目の当たりにして、香織と鈴は思わず嗚咽を漏らし、ナターシャは不愉快そうに眉を潜めた。

『――全機体との結合、情報同期完了。システム再起動、『ゴーレム？』、再起動完了』

ゴーレム？。
自らをそう言ったそれは、左腕に九つの砲門を備え、右腕には地面まで着かんとするほど巨大な刃が取り付けられていた。
その体躯はＩＳを装備した香織達の優に三倍はあるだろう。
八つのモノアイが不規則に蠢き、粘ついたオイルを垂れ流すその口が動く。

『殲滅対象、ＩＳ学園。殲滅を開始します』

直後、背中から大量のレーザービットが吐き出された。

「まずっ――！」

終わったはずの戦いが、再び始まる。

それは、長い嵐の始まりを告げる鐘の音であった。

第７３話　終結……？（後書き）

ナターシャがまた強くなり、ゴーレムが進化しました。
全長約１０メートルのゴーレム（今までの戦闘経験と戦闘装備殆ど完備）を前に、彼女たちはどう戦うのか！

第７４話　終結

「か、回避ーっ！」
『射撃』

咄嗟に飛び上がると、それを追いかけるようにして目の前のデカブツが左腕の九門熱線砲をぶっ放してくる。
ただでさえ堅かったのに、多分もっと堅くなっているだろう。それでは攻撃も通せない。

「なんなのよアイツーっ！　無人機は皆合体しなきゃいけない法律でも出来たわけ！？」
「単純に考えれば例の無人機の発展系ってことなんでしょうけど、こりゃ滅茶苦茶ね！」

ふーちゃんとナターシャさんもそれぞれバラバラに飛んでいるけど、ぐねぐねとうねる三本の熱線がそれぞれを狙っていた。
それどころか、時折一、二本が追尾から外れては外壁を溶かし、破壊行為に逸れていることがあるから性質が悪い。

「ナターシャさん、通信は！？」
「……よし、繋がるわ！　管制室、聞こえてる！？」
『通信来ました！　はい、聞こえてますナターシャ先生！』

通信回線の向こう側にいたのは山田先生だった。
音声通信だけの状況でも、向こうが混乱していたことは容易に伝わってくる声音で、山田先生が応答する。

「そっちからこっちの状況はわかる！？」

『ナターシャ、千冬だ。今すぐ今動ける専用機持ちに通信を繋げ、そっちに行ってもらう。それまで堪えろ』
「千冬！　その答えってことはモニターできてるのね！」
『ああ。凰、一之瀬、聞こえているか？』
「は、はいっ！」
「はい、聞こえてますっ」

通信を代わった千冬さんの声に、私とふーちゃんが頷かず声だけで返答した。

『お前たちには辛い戦いを強いるが……、すまん。しばらく堪えろ』
「大丈夫よ、千冬さん！　このぐらいどーってことないわ！」
「ちょっと大変ですけど、やれないことはありませんから。それより、早く救援を頼みます！」
『あ、ああ。死ぬなよ、三人とも』

それを最後に、通信が切れる。
全く、最後に「死ぬな」なんて、どこの映画のシーンなんだろうね。全く。

「さて、それじゃあ何とかやりますか！」
「ビットは今のところ待機状態です、一気に破壊しましょう！」
「それは香織、アンタに任せるわ。アタシはアイツの注意を引くから！」
「じゃ、私は両方のサポートに回るとしますか。さあ、ちゃっちゃか叩くわよ！」

ナターシャさんのその言葉を合図に、私たちはいっせいに動き出した。
ウィングビットを起動し、《夜雀（よじゃく）》と《夜鷹（よたか）》の片方を展開（オープン）し構

える。
　ふーちゃんが衝撃砲で本体に射撃し続ける中を掻い潜り、熱線の嵐を避けながら無数のシールドビットを破壊していく。

『香織！　後方です！』
「なぁっ！？　んのぉっ！」

　突然後方からエネルギー反応を感知し、咄嗟に耐エネルギー加工を施してある方の《夜羽（よばね）》を振るう。
　パンッ！　と高い音が響き、小さなエネルギー弾が弾けた。
　その先にあったのは、小さな銃口を煌かせて浮遊するビット。マジですか？

『間違いなくビット兵器ですね。注意してください。シールドビットの中に無数に紛れています』
「最悪の展開ってこういうことを言うのかな？」
『かも知れませんね。　きます！』
「あああもうっ、なんて数だよ！」

　悪態を吐きながらも休むことは許されていなかった。
　ぞっとするような数のシールドビットと射撃用ビットの群れへ、文字通り雀の涙ほどの弾丸をばら撒いて、私は一度解除していた《ナイトホーク》を発動、同じように《とりのさえずり（バードエイク）》を再度起動する。
　全てのエネルギー反応と姿を消した私は、傍にあったビットを叩き潰すと、加速をつけてその群れの周囲を周りながら攻撃を加えていく。
　目の端ではガスガスと衝撃砲をぶっ放すふーちゃんの姿と、それを受けて微量ながらもダメージを蓄積させるゴーレム？の姿が……？

「あれ、衝撃砲が当たってない……？」
『……これは……っ！　香織、ゴーレム？は《ＡＩＣ》を使用しています！　それで衝撃砲の弾丸を停止させているんです！』
「はいぃっ！？　な、なんであのゴーレムに！？」
『このビットや、あの姿になる前の踏み込みの速度を考えると……、おそらくは戦った相手の技や武装を合体したときに生成しているのかもしれません』

イヴの話したとんでもない事実に、私は頬を引きつらせながらビットへの攻撃を続ける。
あのタイミングでやってきたということは、最悪ほぼ全員分の武装や技能があるってことだ。それも計算に入れて戦っていないと、あっという間に潰されてしまうだろう。
本当に、滅茶苦茶だ。
心なしか徐々にこちらを補足するようになってきつつあるレーザーを回避しながら、《夜鷹》とウィングビット、《夜雀》で次々にビットを破壊していく。
時折銀の弾丸がビットを撃ち抜いていく光景も繰り広げられる中、突然蠢いていたビットたちはピシリと固まった。
その光景にどこかおぞましいものを感じた私へ向けて、ぎょろりとその銃口を向けた射撃用ビットが一斉に赤黒い光を放つ。
咄嗟に回避機動へ移った私だったが、それを嘲笑うように全てのレーザーが曲がった。

「なっ！？」
『避けてください、香織っ！』

全方位から迫るそれに気圧されたのか、私の体は動かない。
《夜羽》で身を覆うしか出来ずに、私は思わず瞼を閉じ、衝撃に備え――、

「そこまでですわ」

――果たして、その衝撃は一つたりともやってくることはなかった。

キュキュイィ！　とガラスを擦るような奇妙な音と共に全ての赤黒いレーザーが美しい青い光によって打ち消される。

「ご無事ですか、香織さん？」

「セシリア、さん……！？」

「ええ。それと、わたくしだけではございませんことよ？」

宙を漂うようにふわふわと浮かぶセシリアさんは、私の上に佇んでいた。

蟲惑的な笑みを浮かべる彼女の傍には、一二基に増えた《ブルー・ティアーズ》、そしてその手に携えているのは《スターライトｍｋ？》。

執拗にレーザーを放つビットへ向けて、セシリアさんは無造作についい、と指を動かした。

刹那、視認できない速度で放たれた一本のレーザーが、次々と直角に曲がって全てのレーザーを掻き消し、その半数の発射元を撃ち貫く。

「す、すごい……！」

「うふふ、お褒めの言葉ありがとうございます」

口元で小さく笑みを形作るセシリアさんは、なぜか同い年のはずなのに私よりうんと年上の、お姉さんのように見えてしまう。

と、私の目の端を真っ赤な線が通り過ぎていった。……ん？

「箒！？」
「そいつとの試合は譲ってもらうぞ、鈴！」
「え、いや、いいけど……」

困惑するふーちゃんを尻目に、《空裂（からわれ）》と《雨月（あまづき）》を両手に備えた箒さんは、獰猛な笑みと共に本体へ斬撃を浴びせていく。
時折繰り出される九本の熱線を、あろうことか《空裂》の一閃ですべて斬り伏せながら、箒さんは片手に大きなブレードを構えたゴーレム？と真正面から打ち合っていた。
獰猛な闘争心を滾らせ、まるで本当の斬り合いのごとくその身を削って斬り合っているかのように、私には見えた。

「……えー……」
『多少人間離れしてきましたね、彼女は』

多少なのかな、アレは。
なんて考えている間にも、ゴーレムと赤椿の戦いは激化していく。
青く光を放っているゴーレムの刃と紅く染まっている赤椿の刃が接するたびに火花を散らし、離れれば互いがそれぞれの色のエネルギー刃を飛ばして応戦する。
思い出したように時々撃ち出される熱線は《雨月》から放たれるエネルギーによって相殺され、お返しとばかりに放たれる《ＡＩＣ》は高速機動によって回避されていた。

「楽しそうですわね、箒さんったら」
「……いや、まあ笑ってますけどね」

なんでそんなに「あらあらまあまあ」みたいな顔して微笑んでるんですか、セシリアさん。
それはともかく、セシリアさんもなかなかに滅茶苦茶だ。

殆ど意識を向けていないのに、撃ち出されるレーザーを全て撃ち落し、発射したビットを全く同じ経路を辿って打ち抜いているんだから。

なんてことを考えていると、おもむろにセシリアさんがライフルを構え、数発撃ち放つ。

その直後、発射されたＢＴエネルギー弾は避けるように無数の線へと変わり、宙を漂う無数のシールドビットを残らず撃ち抜いていった。

「これで仕上げですわ。箒さん、こちらは終わりましてよ」

「ならばこちらも終いにするとしよう！」

轟っ、と響くその声の後、箒さんの勢いが突然消える。

それを幸いとばかりに攻め込もうとしたゴーレム?だったが、それよりも早く箒さんは構えの姿勢に入っていた。

「ああ、これは決まったわね」

ぽつりとふーちゃんが呟き、いつの間にか傍に来ていたナターシャさんと共に頷く。

その直後、箒さんが口を開いた。

「行くぞ。《万障一穿（スペテヲウガツ）》……！」

音高く響いた、鉄の音。

肩口にその突きの一撃を受けたゴーレム?は、ぐらりとその身を大きく揺らした。

「《空海断絶（チヘイヲワル）》！　行くぞ、斬り捨て……、御免ッ！」

振り抜かれた刃は、音すら立てずに装甲を滑らせ、そしてゆっくりと斬り落とす。

アレほど頑丈だった、冗談の様な装甲を誇ったあのゴーレムが、まるで熱された飴細工のように簡単に斬りおとされて行った。

べしゃりと、地面に落ちる音がする。

それで、全てが終わった。

ＩＳ学園より二〇〇キロ離れた沖合い、その上空に浮かぶ人影があった。

「……どうやら、失敗に終わったようですわね。ふふ、当たり前ですわ。あんな偽者でお兄様たちを殺せるだなんて、喜劇もいいところですもの」

愉悦に口を歪ませ、少女、キティはカタカタと嗤った。

それから一転して、彼女は真面目な表情に切り替えて更に言葉を紡ぐ。

「それにしても、なんて面白い方なんでしょう……！　彼の織斑千冬がこれほどだなんて……！」

口にしたのは、今回の襲撃では戦わなかったはずの一人の女性の

名。

彼女の兄と姉、その二人と同じほどに、彼女に強烈な興味をそそられた。

「篠ノ之束、更識楯無、篠ノ之箒、セシリア・オルコット……、彼女はやはり、真理に近づくことの出来る存在なのかもしれませんわ……」

とするのならば、いずれ兄も自身のことを思い出すだろう。

そうなった時が本当の再会のときだと、彼女は胸を躍らせる。

まるで恋する乙女のように頬を染め、しかしその手には死を齎す爪を備えて。

彼女は、ただ嗤っていた。

第７４話　終結（後書き）

相変わらずやたら強い箒さんとセシリアさんがウサ晴らしにやってきて終わりました。他の人は管制室でもしもの事態に備えて待機してたり、一般生徒のいる地下シェルターへの道を警備していました。ゴーレム来たら抑えられないので。

でも一番の要因は「あのぐらいなら出なくても大丈夫」という姉貴の言葉である。

そして最後に不気味な登場を見せたキティ。

さて、これからどうなることやら。

第７５話　日常に戻るひとつ前

「さて」

以前もお世話になった会議室。その一番奥側で千冬さんがそう口を開いた。

「皆、昨日はご苦労だった。怪我をした者もいる中、よくやってくれた」

『昨日のゴーレムの残骸データを解析した結果、間違いなく例の擬似ＩＳコアと同一のものだってことが判明したよ。差し向けた奴も同一犯である可能性が高いね』

束ちゃんが細々とした表を指で示しながらそう告げる。

一体、どこの誰があんなことを……。襲撃はいいけど、その意図がまるでわからない。

『あの無人機、私たちの動きや武装データを取り込んでた……。もしあれが相手のデータバンクに送られていたら……』

『大変なことだね……。どれぐらい持って行かれてるのか……』

医務室から仮想ディスプレイを通じて会議に参加している簪ちゃんとシャルロットさん。あの戦いで負傷して、今はナノマシンで治療中。今日一日かければ速攻で治せるらしいから、ナノマシンも凄いものだ。

「わたくしも調査に協力致しましょう。今のわたくしの立場なら、それなりのところまで食い込めますわ」

「日本とロシアは私、イギリスはセシリアちゃん、と。他に探せる

場所はある？」
「ドイツの方は私が話してみよう。私の隊の者と、そこに繋がりのある者なら動かせる」
『フランスは任せて。もしデュノア社を襲った連中がこれと繋がってるなら、必ず暴き立ててやる』

セシリアさん、恋華さん、ラウラ、シャルロットさんがそれぞれに発言する。

けれど、調査の手はこれ以上には伸ばせない。前回の男性操縦者襲撃事件のときに動いていた黒尽くめの集団がまだ残っている以上、委員会自体が敵である可能性もあるんだから、感づかれないようにしなければならない。

まあ、他に調査できる場所があるかって言うと、とっても怪しいわけだけど。

「姉さん。姉さんの力で探し出せないのか？」
『うーん、それがね？　いないんだよ、どこ探しても。私は道がなくっても飛んだり跳ねたりして先へ進めるけど、世界がそこでぷっつり終わってちゃあ、さしもの束ちゃんもお手上げ侍なのですよ、箒ちゃん』
「そうか……」

それと、なぜか箒さんと束ちゃんが仲直りしていました。なぜだ。いや、兄弟姉妹は仲がいい方がいいよね。ぎくしゃくしなくて。

「ここで話されたこと、及び今回の一件は全て口外厳禁という事を忘れないように。では解散！」

特に話すこともなくなったため、私たちはぞろぞろと会議室から出て行く。

ぶっちゃけると、今は色々考えるよりも休みたかった。一日経ったくらいじゃあの疲れは抜けそうにないです。それに、二人も負傷者が出てるし……。

「香織、大丈夫？　顔色悪いわよ？」
「あ、うん。大丈夫。簪ちゃんとシャルロットさんのお見舞いいこっか」
「そうねー。ラウラもくるでしょ？」
「ああ。もちろんだ」

そんな調子でふーちゃん、ラウラと共に医務室へ。そこには、先に来ていたであろう一夏たちの姿もあった。

「ぁ、香織……」
「昨日は絶対安静だったから会いに来れなくてごめんね。どう、具合は？」
「うん、大分楽になってる。……香織、そっちこそ大丈夫？」
「え？」
「顔が真っ青だし、ちょっと震えてる……」

ベッドに横になっている簪ちゃんが、そう言って傍に座った私の顔に手を伸ばす。
少し冷えた指先が頬に触れて、それで私はようやく自分が震えていることに気づいた。
ぴちゃっと、水滴が眼から零れる。

「……ごめ、私……！」
「香織……。ごめんね、心配かけて。もう大丈夫だよ」

恐ろしかった。

命には関わらないと言っても、それでも怪我をしていたのは事実で、もしかしたら失われてしまうんじゃないかと、心底恐ろしくて。
それに今更気がついて、私はベッドの空いている場所に思わず突っ伏していた。
ただただ泣き続ける私を、簪ちゃんが頭を撫で、ふーちゃんとラウラが手を握ってくれていた。

――いつからだっただろう。私が姉さんを嫌うようになっていたのは。

問いは自分の中へ投げかけられ、そして返答もまた、自分の中からやってくる。

――あの頃からだ、私が人を、殺めかけてしまった時。

私が力を手にしたのは、剣道を始めて大分経った頃だった。
元より剣の才があったのであろう私は、周りの子供たちよりも頭二つ以上も抜きん出た実力を持っていた。
そんな私はあるとき、まだＩＳが出てきていない頃に、中学生くらいの男たちに囲まれたことがあった。相手は三人だったが、いちゃもんをつけて突っかかってきた彼らを、私は近くにあった木の枝で滅多打ちにした。
木の枝が頑丈だったこともあって、男たちは額から血を流し、腕

や足を折る大怪我を負った。だが、私はそれでは止まらずに徹底的に痛めつけたのだ。

誰かが通報したのだろう、救急車で運ばれていった彼らを見て、私はひどくすっきりとした気分だった。自分は強いのだ、あの程度の奴は簡単にやっつけられる。そう思い上がって、現実を見ずに。

彼らのうちの一人が神経麻痺による半身不随、もう一人が脳へのダメージで言語障害を負い、残った一人も数十箇所の骨折で半年の入院生活を余儀なくされたと後から聞かされたとき、私はぞっとした。自分はなんておぞましいことをしてしまったのだろうと。

両親が私を叱り、私も自分を殺してしまいたいと思っていたとき、姉さんだけはにこやかな笑みを浮かべていった。

――「箒ちゃんは悪くないよ？　悪いのは、箒ちゃんより弱いあいつらだもん」

その言葉を吐いた姉の笑みをみて、私は寒気すら覚えた。

その当時の私からすれば、姉の言ったことは理解しがたかったことだっただろう。だから、姉さんを遠ざけ、自分の罪から目をそらそうとした。

「……とんだ道化だな、私は」

皮肉気に口を歪め、私は胴着の襟を正しながら呟いた。

私は一夏には付いていかず、あの会議の後一人で剣道場にやってきていた。

放課後も大分時間を過ぎている今では、そこにいるのは私一人。

竹刀ではなく木刀を両手に構え、私はある人を思い描き対峙していた。

私の父、篠ノ之柳韻（りゅういん）。

父さんの剣には、私はいまだ達していない。
だからこそ、超えたいと願う。その剣を、いつか。
ひたすらに打ち合うようにして剣を振るう。切っ先に反射した夕日が軌跡を描いていく。
どれくらい続けただろうか、いつしか夕日の光も沈みだした頃、剣道場にパチパチと拍手の音が響いていた。

「おみごとだね？　篠ノ之さん？」
「部長……。すみません、勝手に使用して」

入り口に立っていたのは、胴着姿の剣道部部長だった。
今まで走りこみでもしていたのか、額には随分と汗をかいている。胴着姿でやっていたのだろうか。

「いやいや、かまわないよ？　……それより」

嬉しそうな笑みを浮かべていた部長は、私の隙間を突くようにして目の前に現れる。……見えなかった、足運びですらほんの僅かに感じただけ。

「今の、殺しの剣だね？」
「……っ！」

顔を突き合わせるように下から迫ってきた部長は、まるで猫のような笑みを浮かべながら――、

ギュンッ！　と顎を掠め、突きを放ってきた。

咄嗟に木刀で逸らすと、上がりきったその腕の真横からもう片手

が突き出される。
　掌底の形で突き出されたそれを小刀の方の木刀で受け止め、後ろに飛び退く。
「何を……！」
「ようやくまともな顔になったね？　箒ちゃん？」
　問い詰めようとしたところに被せるようにして、部長が言った。
「なんだかんだ言っても、結局ここってＩＳを使えるようにするための学校だからね？　私たちみたいに、一つ危ない人たちのための学校じゃあないわけだね？」
　突きを放ったその木刀を片手でくるくると縦横無尽に回しながら、部長は楽しそうに続ける。
「そんな中でそういう殺しの剣を使えるようになるのは、ほんの一握りの人だけなんだね？　だから……、手合わせ、しない？」
　ぴたり。
　先ほどまで重さを感じさせないほどに軽々と手元で回していたその木刀を、手首と手のひらの力だけで止め、部長は猫の笑みを深くして問うた。
　その笑みに、私は心の中の歓喜を抑えきれずに刃を構える。
　笑みを見て悟った、この人も同じだと。
「――ええ」
　直後、剣道場に複数の剣のぶつかる音が鳴り響く。
　私の振り下ろした刃を部長が受け止め、下に流した返しの刃での

突きを私が小刀で逸らし、首元目掛けもう一度振るった刃を、あろうことか手元を片手で握ることで受け止めた。
……強い。
「さすがですね」
「それほどでも？　ないけどね？」
話しながらも手を休めず。
打ち合う音は、その後も途切れることはなく――。
「強いですね、部長」
「あははー、そりゃあ部長だからね？　まだまだ部員には負けられないってことだね？　ま、ＩＳ使われたら一瞬だけどね？」
胴着を片付けて、私は部長と共に外を歩いていた。
一時間以上も全力で打ち合っていた私たちは汗だくになっていたため、部室棟のシャワールームで汗を流した後、制服に着替えて外で涼みながら帰っているわけである。
ちなみに、試合の結果は私の負け。喉元に切っ先を突きつけられて降参した。
まだまだ私は弱い。だが、毎日とはいかずとも放課後に時間が空けばし合ってくれるということだったから、私はまだまだ強くなれるだろう。

「……入った頃とは随分変わったね？　箒ちゃん？」
「そうでしょうか。……私は、まだ何も」
「そう思えるのが変わったということだね？」

私よりも背が低い部長だったが、よしよしと私の頭を撫で、ようとして届かなかったので私の膝に裏からケリを入れてきた。

「撫でられないんだね？」
「だからといって強引に屈ませようとしないでくれませんか。私倒れるので」
「じゃあしゃがむといいね？」
「はいはい」

あれほどの強者だったというのに、こうしていると本当に普通の女子学生だった。
……こういう普通の日々も、悪くないかな。
そう思った一時だった。

第７５話　日常に戻るひとつ前（後書き）

両親の残した篠ノ之流の看板を背負い、失踪した姉の手がかりを求めて箒がやってきたのはＩＳ学園。
その剣道部で紡がれるドラマ、そして部長と箒との間に隠された、驚きの真実とは！？

次回からは「剣戟少女『箒』」、始まるよ！

嘘だよ！　始まらないよ！
ちょっと書きたくなったからね！　やっちゃっただけ！
っていうか部長のキャラ濃すぎじゃね？　身長低めで某カエル顔の医師のような口調で箒より剣術強いとか。いや、いいんですけどね。ちなみに、部長はＩＳ苦手です。生身じゃないと違和感あるわーって人なので。

よーし、次回から少し日常回書こうかな。ぜんぜんヒロイン押ししてないし。むしろ箒ばっかり活躍してない？

第７６話　少しだけ変わってしまった日常

あの襲撃戦から数日が経って、学校はとても静かだった。
なぜかって？　そりゃ、あんなに大規模だった襲撃が外に漏れないはずがない。各国からの問い合わせや「おんどりゃあ隠しとるとタメにならんぞ我ェ」というちょっとした脅しによってあっさりと情報を漏らしたＩＳ委員会のおかげで、襲撃情報は手を離したボールの様にあっさりと零れてしまっていた。
そのせいで、それを知った親や各国政府が自分の娘や自国の代表候補生なんかを呼び戻す事態が相次ぎ、結果として学校に残っているのは日本や他の国の数少ない代表候補生、親が寛容な子たちくらいだった。
ちなみに、私たちの仲間内はみんな残っている。それぞれ圧力かけたりしてるみたいだけど……、大丈夫なんだろうか。

「香織、どうかしたか？」
「ああ、いえ。随分減ってしまったなと」

昼食時、閑散としている食堂で、私たちは食事をとっていた。
あの賑やかだった食堂も、いまではちらほらと人影が見えるくらい。その人たちも、広すぎるように感じる食堂のせいで騒ぐこともできずに、静かに食事をとっているようだった。

「まあ、仕方ないっちゃ仕方ないけどな」
「心配するのが親心というものだろうな。いかにＩＳがあっても、全員が持っているわけではないからな」
「でも、なんだか寂しいね。人がいた時は騒々しいくらいだったけど、こうなっちゃうと」

一夏に続くように、箒さんと復帰したシャルロットさんが話す。

「ま、それを今アタシたちが話してもしょうがないでしょ。とっとと食べて、次の授業の準備しましょ」

それをバッサリと切って、ふーちゃんはかつ丼をがつがつと胃袋に掻き込んでいく。うん、あいも変わらずいい食べっぷりだ。

ちなみに、やけに日本人の多い我が一組はほぼ半数以上が残っている。そりゃ、専用機持ちが六人もいればそんなに怖くはないわなー。

なんて考えていると、突然私の背中にぼふっ、という重みが。

「ご飯中にお行儀悪いですよ、のほほんさん」

「んー、かおりんに最近抱きついてなかったからぁ、エネルギー補給中なのだぁー」

はしっ、と背中にしがみついているのほほんさんが、もぞもぞと私の顔の横に自分の顔を突き出してくる。ふんわりと、優しいシャンプーの匂いが漂ってきた。

「あれ、シャンプー変えましたか？」

「おおー、よくぞ気づいたぁー。っていうかねぇ、どうしてかおりんは私にだけ敬語が外れてないのかなぁー？」

「なんだか、敬語じゃないといけない気がするので。嫌なら変えますよ？」

「んー、やっぱりいいやぁー。んにぃー」

むにぃ。

私の頬に自分の頬を押し付けたのほほんさんは、嬉しそうに笑う。

まったくもう、この子ってば。

「……っかしいなー、負けた気がする」
「本音……ずるい……」
「ふむ、私も今度やってみるか」

……まったくもう、この子たちってば。
そう言っておけばいいのでしょうか。

「ただいま帰りましたー」
「ただいまぁー、そしておかえりぃー」
「はい、ただいま。のほほんさん」

久しぶりに穏やかなその日を終え、私はのほほんさんと共に部屋へ戻ってきた。
のほほんさんは帰り道も私の背中に乗っていたので、今も乗りっぱなしだ。

「とぉー」

ゆるゆると私の背から降りたのほほんさんは、のろのろと自分のベッドへダイブする。妙に滞空時間が長かった気がするのは気のせいなんだろうか。
なんて考えていると、のほほんさんが両手を広げこちらを見ていた。

「……えっと」
「おいでおいでぇー」

にへらぁ、と笑って言うのほほんさん。……なんだか逃げたらいけないというか、逃げられない空気。

とりあえずおずおずと近くに座ると、のほほんさんははしっ、と私のことを抱きしめた。

「……あんまり、無理しちゃあだめだよぉ？」

「な、なんのことで――」

「一杯泣いて、一杯痛い思いして、それでもがんばるんなら、せめて無理だけはしちゃあ駄目。ゆっくり、ね？」

ぽんぽん、ぽんぽん、と私の背を手のひらで軽く叩きながら言うのほほんさん。

なんだかあやされている様なその感じが、不思議と嫌じゃなかった。なんだか、ほっとするような。そんな感覚だった。

「私は何にもできないけど……、それでも、こうしてかおりんと一緒にいてあげられるから。無理しちゃいけないよ」

「のほほんさん……」

同い年のはずなのに、なぜか彼女の方が一つの二つも年上のように感じる。お姉ちゃんと一緒にいるときとは、また違う感じ。

「今日は、一緒に寝ようか？」

穏やかなその問いかけに、私は小さく頷いていた。

深夜を過ぎて、私は目を覚ました。
目の前には、可愛らしい寝顔を見せる友の姿。いつもぼろぼろになって帰ってくる、どうしようもなくバカな、愛しい友人。
守りたいと思った。守られるだけではなく、ただ私の本心から、守りたいと。
だから随分前になるだろう、箒さんにも酷いことを言ってしまった。もちろん、あの後きちんと謝って仲直りはしたけど。
私にはなんにも力なんてない。ＩＳも持っていないし、せいぜい出来るとしたら整備くらい。
だけど、それでも香織を守りたい。あの笑顔を曇らせるなんて、したくない。
今はまだ力はない。だから、見守ることにした。
香織の帰ってこられる日常を私が続けていれば、香織はちゃんと帰ってこれる。その場所を、私が作る。
もしかすると、私が彼女に抱いている思いは何か別のものなのかもしれない。許されないものかもしれないけれど、それだって構わない。

「……愛しているのかもしれないね、かおりん？」

ちゅっ、と。
私の口付けの音が、夜闇に溶けた。

「香織」
「え？　んうっ！？」

翌朝。
出会い頭にふーちゃんにキスされた。

「んぁ、ふっ、あふっ……！」
「ぷぁっ……、フフッ、どう？」

しかもディープな方を。
口元を拭ってニヤリと笑ったふーちゃんは、なんだかエロティックな魅力に溢れていました。
……え、え？

「鈴も……！　か、香織！」
「は、はいんむぅ！？」

その様子を見ていた簪ちゃんに呼ばれ、慌てて振り向いたらまたマウストゥマウス。
っていうか簪ちゃん耳真っ赤ですが。大丈夫？

「だ、だだ、大好きっ！」
「あ、ありが、とう？」
「くっ、これほど先を越されるとは……！　香織！」
「もう流れが見えたよんむっ！？」

溜め息すら吐かせてもらえずにラウラからもキスが来ました。
えっと、ですね、これどういう状況？
ああ、ちなみにふーちゃん以外はディープじゃありませんでした。

むしろ皆ディープで来たら怖いんですけどね。

「なんだかのほほんさんにとられそうな感じがしたからね！」
「唾、付けとく」
「先を越されるわけにはいかんからな」

堂々と言ってのける三人ですが、その理由で道の往来でディープキスやらなんやらかまさないでいただきたい！
と言ってもおそらく効果はないので軽く諌めるだけにした。

「まあ、ほどほどにね？」
「わかってるわよ」
「多分」
「だな」

解っている上で破る気満々な三名でしたとさ。
……いや、それも困るんだけどなぁ。

「かーおーりーんっ♪」
「わっ！？」

と、突然背中に走る衝撃。
見ると、のほほんさんが背中に抱きついてきていた。

「んー、お日様の匂いだぁー」
「干しましたからねー。はい、背中から降りてくださいね」
「ははーい」

そう言ってピョンと飛び降りるのほほんさん、相変わらずのフットワークの軽さである。

降りたかと思ったら、今度は前から飛びついてきた。こう、首にぶら下がる感じで。

「おっとっと」

「へへー、かおりんたかーいっ」

「どうしたんですか、のほほんさん？　今日はなんだかいつもと違いますよ？」

「んふふー、かおりん？」

「はい？　っ！？」

突然、唇が触れ合った。

それだけでは飽き足らずに、のほほんさんはするりと舌を入れてくると私の口の中を蹂躙していく。

たったそれだけのことのはずなのに、私は足の力が抜けて、ぺたりとコンクリートの上に座り込んでしまった。

のほほんさんはそれでもやめずに、キスを続ける。

徐々に息が出来なくなってきて、目の前が潤んで――、

「はい、おしまい」

「――はぁ、はぁ……。の、のほほんさん……？」

目の前に立っている少女は、いたずらげにちろりと舌を出すと、彼女らしい柔らかな笑みを浮かべて走り去ってしまった。

……のほほんさん……。

……せっかく真剣になっていたので、道の端で両手と両膝を突いてうなだれている三名の女子のことは、この空気と彼女たちの名誉のために伏せておこうと思った。

第７６話　少しだけ変わってしまった日常（後書き）

のほほんさんとののんびり回を書こうとしたらシリアスになっていた。
何を言っているの（ｒｙ。
そんな感じで、微妙に入れるかわからない日常編突入でーす。

第７７話　準備（前書き）

戯言シリーズの成分が混入しています。注意。

第７７話　準備

電気の消された寮の一室で、三人は集まっていた。

「さて、と。集まったわね」
「うん」
「ああ」

三者三様に頷くなりなんなりと返答する。
集まっているその場所は、鈴の自室。相部屋であった谷津坂（やつさか）楓（かえで）は親に呼び戻されて実家へ強制送還されているため、現在は鈴一人であった。
楓が持って帰っていなかった、ベッドの裏に隠していたお菓子類をごそごそとひっぱりだすと、そのうちの一袋を開けてから再度座りなおす。
この場にいるのは、鈴、簪、ラウラの三人だった。
わざわざ電気を落としカーテンを引いてまで雰囲気作りをした理由はと言えば、至極単純。

「それでは第一回、デートプランニング会議を開きます」
「どんどんぱふぱふ」

簪の相の手で、ぐいっと胸を張る鈴。無い胸で必死に自己主張しているところが悲しい現実だった。
しかし、この場にそれを指摘するほど空気の読めない者はおらず、慎ましやかに会議は進行する。
この会議を開いた理由は全く持って単純明快、香織と本音の仲が妙に進展しているように見えたからである。
ただそれだけだと言いたくなるものだが、恋する乙女たちにとって

は地球が滅ぶよりも大変なことであった。

「なぜのほほんさんが香織とあんなに仲がいいのかは……、まあなんとなくわかるわ。アタシものほほんさんにはあんまりぎゃんぎゃん言えないし」

「本音は昔から、他人に好かれるタイプ……。でも、あんなに積極的なのは見たことない……」

「他人に好かれるタイプの人間が自分から行動しているということか。中々に強敵だな」

スナック菓子を摘まみながら真面目腐った顔で話し合う三人。

しかし、本音のことを決して悪い意味での敵としては見ない辺り、彼女たちの人の良さが窺えるだろう。

「ということで、私たちも早急に動くべきよ。いくら許嫁と言えど、相手は寝所を共にしているわ。何か手を打たないと……」

「本音も、ライバル……？」

「だな。それで、具体的にはどうする？　……寝床に潜り込むか」

「とても魅力的な案だけどナシよ。香織はそういうのに弱くはあるけど、もう少し関係を深めてからの方がいいわ」

「そうか……」

すでにやる気でいたのだろうか、ラウラはやや落ち込んだ様子で答える。

そんなラウラの頭を撫でながら、簪は鋭い視線を鈴へと向けた。

「鈴は、もう考えてあるんでしょ……？」

「ええ。だからこそのこの会議名なのよ」

そう言って鈴が持ち出してきた仮想ディスプレイに表示されてい

るのは、修飾された『デートプランニング会議』の文字。

「私たち三人、それぞれ一人ずつ香織とデートするのよ。順番はクジ引きで、週一回のお休みの日ごとに」

「香織の予定は大丈夫なのか？」

「しばらくは静養したいって言ってたから、予定は入ってないはずよ？」

「それなら大丈夫そう……。でも、どこでデートするの……？」

その簪の言葉に、鈴は指先でディスプレイを操作する。

修飾された題名が消え、そこには街全体の立体図面が投影された。

「本当はちょっと遠出したいところだけど、今までのことも考えてこの街でデートした方がいいと思うの。それに、ラウラなんかは街に馴染みが無いから新鮮でいいだろうし」

「でも……、香織の友達と会うかも……」

「だから、全員私服よ。キチンとコーディネートしなさいね？」

にやりと笑って見せる鈴とは対称的に、その言葉を聞いたラウラはあたふたと慌てだす。

「ま、まてっ！　私は私服は一着しか持っていないぞ!?」

「なら明日にでも買いに行くわよ！　っていうかあのイブニングドレスみたいな服じゃ気軽に着れないわよね……。簪、一緒に行くわよね？」

「うん……。私もデートに向けて下調べしたいし……」

「し、しかし、私にお前たちを付き合わせるわけには……」

「友達でしょうが、いいってのよ！　それに、もしかしたら家族になるかもしれないんだから、今のうちに迷惑のかけ方覚えときなさいな」

「り、鈴……」

うるうると目を潤ませて呟いたラウラの頭を、鈴と簪が一緒に撫でる。それはさながら小動物と戯れる二人の少女のようだったが、残念ながらまたもや彼女たちを見ている者はいないのだった。

「よし、それじゃあ今日はこれで解散ね。明日の放課後に校門前で待ち合わせってことで」

「了解だ」

「らじゃ」

かくして、三人はそれぞれ自室へと戻っていくのであった。

なんだかんだいって、香織がいなくてもこの三人はとても仲が良かったりする。

同時刻。

葵は一人ＢＣ本社へと出向いていた。

ワープ装置から出てきた葵を出迎えたのは、白い煙を立ち上らせるＴシャツ姿のナターシャだった。

「ナターシャ……？　っていうかどうしたのその格好は」

「お風呂上りよ。最近徹夜続きでお風呂もまともに入れなかったんだもの。ちょっと休憩。それに、束ちゃんに呼ばれてるしね？」

「そういうこと。二人とも、こっち来て」

執務室へと繋がる廊下だけが照らし出され、奥から声が響く。普段のどこか浮かれた束の声ではなく、落ち着いた年長者の声。

その声を追うように部屋へと入った二人の前には、いつものアリス姿で機械のウサギの耳をつけた束が社長椅子に座っていた。

「来てくれてありがとうね。とりあえず座ってよ」

そんな束の言葉に従って、二人は近くのソファーに相対するように腰掛ける。

それを見届けた束は、つい、と指先を動かして仮想ディスプレイを呼び出した。

「あーちゃんを呼び出したのは他でもないの。例の擬似ＩＳコアの製作者、わかったよ。ナターシャちゃんにも教えておこうと思ってね」

そう言った束の顔が、いらだたしげに歪む。それは、果たしてどんな感情によって歪められたものなのか。二人には判別することは出来そうになかった。

そんな二人を尻目に、束はディスプレイに映し出されている情報を切り替える。

そこには、葵が望んでいた情報があった。

「これは……！」

「擬似ＩＳコアの製作者は一之瀬巌隆（いわたか）。それだけが、コアの残骸の情報蓄積層部分に残されてた。……知らせているつもりなんだろうね、自分を」

その名を目にした途端、葵の表情は一変した。
憎悪と憤怒を浮かべてソファーの革部分を握ると、我慢できないようにぐっと握り締める。それだけで、中に握り込まれた革はばらばらに潰れ砕けた。

「巌隆……！　やっぱり生きていたのか……！」
「……お父さん、みたいね」

事情を察したのか、ナターシャは辛そうに眉を寄せてそう呟く。
ひたすらにその名を睨みつけていた葵も、その声でふっと気配を消した。

「……ごめんなさい、見苦しいところを」
「構わないわよ。誰にだってそういうところはあるもの」
「まあ、そのことを頭に入れておいてね。……これは、ひょっとしなくても戦争になるかも知れない。《狐と鷹の大戦争》以来の、ね」

《狐と鷹の大戦争》、《大戦争》と略されることもあるそれは、かつて《人類最悪》と《人類最強》が繰り広げた壮大な戦いのことを指している。
最高に最悪な暗部《殺し名》や《呪い名》達に、日本財政界のトップたる《四神一鏡》、財閥家系の最上モデル《玖渚機関》に多大な損害を与えた大戦争であり、その傷跡は今なお一部に残っている。

「……それほどのことに？」
「《世界大戦（ワールド・ウォー）》なんて比べ物にならない。本当に戦争をするなら、こちらもそれなりに支度をしなければならなくなる」

そこで言葉を区切り、束はそこで初めて嗤った。
凄惨に、唾棄すべく、下劣に、歓迎すべく、壮絶に、蹂躙すべく、

嗤った。
《人類最低》、篠ノ之束。その笑みが持つ意味を読み取ることは叶わずとも、そのおぞましさだけはひしひしと伝わる。
その中で、葵は平然とした表情で立っていた。
「なら、早めに始めましょう」
――今度こそ、殺そう。この手で。
その言葉を受けて、ウサギは、頷いた。

時間は流れて翌日の放課後。
鈴たち三人は念のために私服でＩＳ学園の入り口にやってきていた。
鈴は大き目のカーキのパーカーに黒いＴシャツ、薄い青のジーンズに大き目のバックルの白いベルトを締めている。
その横では簪が普段着ている茶色のＴシャツにフリルをあしらった長いスカート、シャツの上にはオレンジのダウンジャケットを羽織っていた。
「なるほど、こういうのもあるのだな」
「アタシのちっちゃくない？」
「いや、大丈夫だ。暖かいぞ」

「そ。よかった」

そういった鈴の目線の先には、鈴から借りた暗めの若草色のサファリジャケットを上に着て、シャルロットと共に夏に購入した服一式を身に纏っているラウラがいた。

所在なさげにそわそわしていたラウラだったが、時折嬉しそうにジャケットに顔を伏せている。

「香織の匂いはしないわよー？」

「あ、いや、そういうわけでなくな！？　ちょっと、その……」

「別に、変とか思わないから、大丈夫……」

「そ、そう、か？　……うむぅ……」

ラウラの着ているジャケットは、鈴が香織からお下がりで貰い受けたものだった。どうせならと言うことで経緯込みで聞かせてもらってから借りたため、ラウラは時折ジャケットの匂いを嗅ぐように顔をうずめることがあった。

傍から見れば服の臭いを確認する少女に見えなくもないし、鈴も簪もラウラの行為を否定できるほどではないのは自覚しているため、特に苦言を呈する者もいなかったのである。

「よーし、それじゃあカジュアルショップにでも行きましょうか。今年は冷えるって言ってたからねー、暖かいやつ買いましょ」

「資金には事欠かんからな」

「久しぶりのお買い物……」

そんな三人のお買い物の結果は、また後日。

第７７話　準備（後書き）

二つの意味での準備開始！
果たして、束のいう戦争とはどういうものなのか。
とうとう現れた葵と香織の父親、その目的とは？
そして三人のデートのご予定は！？
次回も乞うご期待です！

第78話　デート　簪編

時間はさらに流れて、土曜日。
食堂で夕食をとっていた香織の元に訪れた鈴たちは、いつものように食事の乗ったお盆を手に香織の近くに座りこんだ。

「お疲れ様、香織」
「うん、お疲れ様ふーちゃん。簪ちゃんも、ラウラも、お疲れ様」
「うん……」
「ああ、そっちもな」

互いにそんな事を話して食事を続けながら、突然鈴が話題を切り出す。

「香織、アンタしばらくはゆっくりするのよね？」
「うん、そのつもりだけど……？」
「じゃ、明日の日曜日から毎週、アタシ達と順番でデートね」
「……はい！？　ちょ、なに、どういうこと！？」

突然話されたそれについていけずに目を白黒させる香織だったが、それに構わずに鈴たちは香織を見据えてさらに続ける。

「ちょっと相談したんだけど、アタシ達って許嫁なわけじゃない？　ならそれなりに触れ合いを持つべきだと思うのよ」
「だから、デート」
「順番は既に決めてあるから、あとは香織の都合だけだぞ」
「え、ちょ、ええっ！？」

にこやかに話す三人とは対称的に、何が何だかわかっていない香

織はパニックになりつつもなんとか言葉を探す。
幸いだったのは、比較的遅い時間のため食堂に人影はほとんどなかったことだろう。

「あ、えっと、うん。わ、わかった。僕はいい、よ？」
「香織、一人称戻ってるわよ」
「あ、ご、ごめん……」

周囲に人がいなかったため、鈴は周囲を見回してほっと一息ついてから更に言葉を続けた。

「さっきも言った通り、順番は決めてあるわ。明日の朝九時に学園入口に私服で集合すること、オッケー？」
「わ、わかった。でも、友達に会ったらどうするの？」
「同じ学校の友達とでも言っときなさい。後は……、葵義姉さんの決めた許嫁って言っとけば大概は大丈夫よ」

一之瀬葵という存在は彼女たちの中でどうなっているのかと考えそうになったが、それを考え出すと三日三晩程度では終わらない気がしたのであえて考えないことにした。

「それじゃ、私たちはこれでいくわね。明日楽しみにしてなさいな」
「う、うん。それじゃあね、お休み」
「おやすみ……」
「ああ、良い夜を」

鈴たちが去った後、香織は一人中空を見つめていた。
その様子はどこか絵になっているものではあったが、その様子を見た生徒たちは皆「疲れ切った眼をしていた」と語っていたという。

翌朝。

私、いや僕は普段通りTシャツにジャンバー、ジーンズにスニーカーという姿で校門の前にやってきていた。

相手は後から来るって言ってたけど……。

「香織、待った……？」

そんなことを考えながら待っていると、突然後ろから声をかけられた。

振り向くと、そこには胸元にワンポイントのロゴが入った茶色のTシャツにオレンジのダウンジャケットを羽織り、茶色のジーンズを履いている簪ちゃんが。

……惜しい、なんかジーンズの辺りがすごく惜しい！

って、そうじゃなくて。

「あ、ううん、大丈夫。今来たところだから」

「そ、そう……？　変じゃない……？」

「大丈夫、かわいいよ」

「えっ……！？　か、かわいい……？」

「うん」

ぼふんっ、と顔を真っ赤にする簪ちゃん。あれ、僕何かへんなこと言ったかな？

「あ、ああ、ありがとう……！」
「どういたしまして。さてと、ここでボーっとしててもアレだし、早く行こうか。案内してくれるんだよね？」
「う、うん！　任せて……！」

拳を握り込んで頷いた簪ちゃんに手を引かれ、僕は久しぶりに『僕』として外に遊びにいくこととなった。
本当に久しぶりである。
それにしても、なんでいきなりデートなんだろ。ちょうど一段落してるし、落ち着いてるときにってことなのかな。
まあ、一夏ほど朴念仁であるつもりもないし、好意を向けられているのは解ってる、というか表明されたし。
……難しいこと考えずに楽しめばいいのかな。
そんなことをぼんやりと考えながら、じっと僕の手を見つめる簪ちゃんを眺めつつモノレールから降車。

「っと、はぐれたらアレだし、手、繋ごうか」
「え！？　あ、う、うん！」

ぎゅっと僕の右手を掴んだ簪ちゃんは、嬉しそうに頬を染めながらはにかんだ。

「ところで、どこにいくの？」
「えっと、香織はこの辺よく知ってる……？」
「そうだね、昔から良く遊んでたし。でも最近は来れてないから、新しいお店とかは解らないかも」
「えっと、それじゃ……」

あまり強くはない力で僕の手を引いた簪ちゃんの足が向いたのは、

割と大きなゲームセンター。
その中でも一際大きな筐体に向かっていった簪ちゃんの雰囲気が、一変する。

「あれって……、ＩＳ（インフィニッド・ストラトス）／ＶＳ？」
「私の、一番の特技。誰にも見せたことないから……」

香織が初めてだよ。
言ってから、簪ちゃんは明るく微笑んで筐体の前へ座り込む。しばらくしてから、そこの空気が徐々におかしくなっていった。
何事かと簪ちゃんの傍に近寄って見ると、そこには「アイ・サズナック」という名が表示されていた。

「おい、まじかよ……！」
「表記も全く同じ……、マジもんだぜ！？」

筐体の周囲で話していた青年たちが、途端に筐体に目線を釘付けにする。
目線を辿っていくと、そこにはハンドルネームの横のランキングの数字が記されていた。
その数字は――、

「ランカーズ？、最初の五人の一人が、なんでこんなとこに……！？」
「んなこたぁどうだっていい！　あのランカーズと戦えるチャンスなんて滅多にねぇんだ、俺はやるぜ！」
「お、俺もだ！」
「私も次入るわ！」

突然がやがやが広がる。あっという間に熱はゲームセンター中に

広まり、なぜか店員は実況まで始めていた。

「これは、一体……？」

「若いの、彼女を知らんのかな？」

状況に困惑していると、近くにいた腰の曲がったおじいさんが突然話しかけてきた。

「え？　友達ですけど……」

人の良さそうな、和服を着たおじいさんはそれを聞くと、楽しそうに笑った。

「ほっほっほ、なるほど。ではよくお聞き、彼女のハンドルネーム「アイ・サズナック」というのは、わし等ＶＳゲーマーの中では神、そして越えるべき壁として存在しておるのじゃ」

「壁……？」

「うむ、ちょいと昔の話になるが、聞く気はあるかな？」

「あ、はい」

ゲームを始めた簪ちゃんの視線は鋭く、戦闘時とまるで変わらない集中力を見せている。

っていうか、ゲームの中素人目に見てもワンサイドゲームじゃありませんか？

「このゲームが発売された当初、あらゆるバージョンで無類の強さを誇る者達がおった。彼らの尽力のおかげでＶＳはあらゆる枠を超えて楽しめる最高のゲームとして認められ、こうして世界に普及するに至ったのじゃ。無論、家庭用では各国のバージョンごとに性能が変えられた機体が使われておるが、この筐体版、俗に全世界版と

呼ばれる方は違う。全ての機体がそれぞれの持ち味をそのままに一定ライン以上まで性能を引き上げられ、万人に楽しめるゲームとなっておる。その中でも最強を誇るのが、『最初の五人』と呼ばれる上位ランカーなのじゃよ」

長いお話でした。

要するに、簪ちゃんは最強のプレイヤーの一人としてこのゲームの普及に協力したってことかな。……まった、このゲームの発売って四年前だよね？　小学校のときくらいからやってるんだ……。

「彼女、「アイ・サズナック」の特徴はその恐ろしいまでの機動予測じゃ。相手の動きに合わせるのではなく、相手が次に行う動きに必ず合わせて行動する。故に相手は自分が彼女の術中に嵌っていることにも気づかずに落とされる、というわけじゃ」

そんな話をしている間に、並んでいた数人のゲーマーたちは軒並み倒されたらしい。……あの、ノーダメですか。このゲームやってるけど初めてみた……。

嬉しそうに小さくガッツポーズを見せた簪ちゃんが、嬉しそうにこちらを振り向く。

「凄いね、簪ちゃん……」

「昔からやってたから。……変？」

「ううん、凄いよ。僕もやってるけど、ぜんぜんレベルが違うし、自慢していいと思うよ」

素直にそう思った。

途中でちらちら画面を見ていたけど、見たことないようなコンボが次々に繋がっていた。あのレベルに達するには一体どれほどやりこめばいいのか、気が遠くなりそうだったくらい。

だから、多分。それぐらいのものなら自慢しても誰も笑わないと思うのですよ。

「……香織、今から帰ってゲームする？」

「え、でもいいの？」

「うん。外で遊ぶより、そっちの方が多分、楽しいから」

そう言ってはにかんだ簪ちゃんはとっても綺麗で、なんだか勝った女性というのは美しいものだと、そう感じた。

「……勝てない」

「えへへ……」

その後、部屋に戻った僕と簪ちゃんは、制服に着替えてから簪ちゃんの部屋でゲームに興じていましたのです。

もちろんソフトはＩＳ／ＶＳ、内部情報は簪ちゃんが全世界版と全く同じに調整した仕様。ちなみにこのタイプは来年にでも全世界版として発売されて、これからは世界大会も開かれるんだそうだ。

で、戦ってみた結果がこれ。

一一七戦、一一六敗、一引き分け。最後の一回で何とか引き分けた。……それでも余裕そうな辺り、まだまだ本気じゃないんだろう。

ちなみに、簪ちゃんも僕も『打鉄』を使っていたけど、コンボも機動もあらゆるものが上だった。やっぱり、実際に戦うのとではぜ

んぜん違うな。

「でも、なんだかいいな。こういうの」
「え……？」
「休日に二人でゲーム三昧って、意外と楽しいね」
「あ、う、うん……！」

僕の腕を掴んで嬉しそうに笑った簪ちゃん。
デートとは言えないかも知れないけど、簪ちゃんの新しい一面が見られたので、満足といえば満足です。

「じゃあ……もう一回……」
「お、おー……」

結果、この日僕は二三八戦、二三六敗、二引き分けだった。
……強すぎだよ、簪ちゃん。

第７８話　デート　簪編（後書き）

出かけるよりゲームしましょになった簪ちゃん。
ＩＳ／ＶＳの中でも最強の一角だと言うことが発覚しました。
『最初の五人』はＡＣから名称をお借りいたしました。
さて、次回は……？

第７９話　デート　ラウラ編（前書き）

最後の方にネタを仕込んでしまった。

第79話　デート　ラウラ編

時間は更に流れて翌週の日曜日である。
とりあえず先週と同じ服装でＩＳ学園の入り口で待機。……そろそろ一〇月も半ばだからなぁ、ちょっと冷えるかも。

「待ったか、香織？」
「あ、ラウラ。ううん、今来たところ」

なんて考えていると、またもや後ろから声をかけられた。
振り返りながらそう答え、やってきたラウラの姿をその目に収める。
灰色のキャスケットを深めに被り、薄いカーキのダッフルコートを上に纏っている。茶色のロングブーツを履き、スカートは膝上までの短い黒を使っていた。

「ん、どうした香織。何か変か？」
「あ、ううん。綺麗だなと思って」
「き、綺麗！？　私がか……！？」
「うん。とっても似合ってるよ」

すぐそばにやってきたラウラは、耳を赤くして俯いてしまった。
先週も同じ光景を見た気がする。

「あ、ありがとう……」
「はい、どういたしまして」

お礼を言うと、ラウラは嬉しそうな笑みを浮かべて頬を染める。
なんていうか、年相応な姿だと安心するなぁ。

そんなことを考えながら、僕はそっとラウラの手をとる。外の冷気に中てられてか、その手は早速冷たくなっていた。

「ぁ……」

「寒いでしょ？　今日はすごく冷えるって言ってたから」

「ああ。……暖かいな、香織は」

「ありがと。さっ、早くいこう？　どこか回るの？」

「うむ、実はな……、特に決めていないのだ」

そう言うと、ラウラは僕のことを上目づかいに見上げると、小さくはにかんで言う。

「私はこの辺りのことはよくわからん。だから、香織が案内してくれないか？」

「え、でも、いいの？」

「私が案内するよりよほど楽しめるだろう。なにより私は満足に知識がないまま戦場を歩き回ることはしないぞ」

「そ、そう……」

例えはアレだけど、要するに不安だということらしい。

僕は小さく頷くと、少し強めにラウラの手を握る。はぐれたら大変だし。

「ラウラは、神社とかは好き？」

「ああ、日本の文化は総じて気に入っている。あの何とも言えぬ味わいが好きだ」

「それじゃあ、年末年始に必ず行ってる神社があるから、そっちに行かない？」

「うむ！」

大きく頷いた拍子にキャスケットが飛び降りかけ、それを慌てて押さえる。

それから、僕らは二人で近所の神社へと歩き出した。

その神社はＩＳ学園からモノレールで街に戻り、そこから少し歩いた郊外にある。名前もわからない寂れた神社だけど、僕はよくお姉ちゃんに連れられて行っていた。

友達とよく遊んだ場所でもあるけど、最近の子はあまり近寄らないらしいと聞く。

「はい、到着」

「なんだか、寂れたところだな……」

「でも静かで気持ちいいんだ。ほら、こっち」

呟きながらも街の喧騒が嘘のように消えていることに驚いているラウラの手を引いて、神社の裏に回る。

そこには、不器用ながらも手作りされた小さな扉が神社の下、人の手で掘られている階段の突き当りにあった。

「これは……、塹壕か何かか？」

「あはは、違うよ。これは僕らが小さい頃に作った秘密基地。僕とふーちゃんと、友達二人で」

「秘密基地か……！　何だかわくわくしてくるな！」

事実を教えてあげると、ラウラは途端に目を輝かせてくる。

やっぱり秘密基地とかそういうものが好きだったらしい。僕の勘は当たっていたようだ。

「入ってみる？」

「いいのか！？」

「うん、もちろん」

そう言いながら、ラウラと一緒に扉の中に入る。
中は割と広かったけれど、それでも僕は少しだけ屈まないと頭がぶつかってしまうくらいの広さだった。

「おお、なかなか広いな」
「ふーちゃんと友達の一人が張り切っちゃって。脚立まで持ち出してきたからね」

最初はシャベルだけでやっていたけど、だんだん本格的になってきて、最終的にはここで一夜を明かせるくらいまで改良していったのである。
中にはたくさんの小物と内部を掘り進めたりするための道具があった。その中の一つ、壊れかけているランタンを手に取ったラウラは、にっ、と笑った。

「これは、まだ使えるな」
「え？　でももう壊れてるよ？」
「そう見えるだけだ。見ているといい」

そう言って懐から大きめのアーミーナイフを取り出すと、ドライバーで内部をふさいでいるふたのネジを外し、ナイフで中を弄っていく。
それにしてもごっついナイフだなぁ……。ラウラってあんなの使ってるのかな。

「……よし、出来た。つけるぞ」

ラウラはそう言って懐から今度はオイルとジッポライターを取り出すと、ランタンにオイルを入れてから火口に火をつける。

すると、あっという間に火がついてしまった。凄いな、直るんだ。
「あとは掃除すればまだ使えるな。香織、これはどうする？」
「そうだね……、持っていてもしょうがないし、ラウラが欲しいならあげるよ？」
「いいのか！？」
「あ、うん」
僕が頷くと、ラウラは嬉しそうにランタンの火を消してＩＳの格納領域へと放り込んだ。
ただのランタンだけど……骨董品とか？　いや、それはないか。
「そういえば、ラウラってあんなに太いナイフ使うの？」
「いや、アレは隊員から送られてきたものだ。これからは、私も部下との意思疎通をきちんと図ろうと思ってな……。話しているうちに色々送られてきた」
「そ、そうなんだ……」
でもまあ、仲良くできることはいいことだね、うん。
だからと言ってアーミーナイフを贈り物にするのはどうかと思うけど。
「今度、鈴と簪もつれてもう一度ここへ来ないか？　お前と一緒にいられるのは嬉しいのだが、楽しいことは皆の方がいい」
「ラウラ……」
「……よし、では次にいくぞ！」
照れを隠すようにコートの襟に顔を埋めたラウラは、そう言って外へと出て行く。
それを追って外に出ると、ラウラの後に続いて少しばかり足早に

歩いていった。

それから少しの間、二人して特に喋ることもしないまま歩いていたけれど、ふと気が付くと川縁の土手にまでやってきていた。

「ラウラは、土手は初めて？」
「ああ。いいものだな、心地いい景色だ」

草に座り込んだ僕とラウラは、ぼーっと夕日を見つめる。
そうか、もうそんな時間だったんだ。

「香織」
「なに？」
「……この景色を、私は守りたいと思う。お前と、皆と、そしてこの景色と、全てひっくるめて守ってみせる」

呟くように言ったその言葉は、大気に溶けていく。
ぐっ、と、ラウラが拳を握りこんだ。

「……正直言って私は、まだ色恋というものはよくわからん。だが、その、なんだ。お前と一緒にいると心が温かくなる……。皆一緒だと、もっと温かくなるんだ……。だから……」

そう言ったラウラに、もう最初の頃の面影は残っていなかった。
人として生き、願いを見つけた一人の少女。そう見える。

「香織。もし私が色恋をわかって、そのときまたお前に恋することがあれば、お前を愛することがあれば。その時は、もう一度告白させてくれ」
「……うん。待ってるよ、楽しみにしてる」
「そうか……、ありがとう」

少しだけ笑い、それからラウラは跳ね上がるように立ち上がった。

「お、アイスクリーム屋があるぞ？　香織、食べるか！」
「でも今日寒いよ？」
「寒くなったならくっつけばいいじゃないか」
「まったくもう。お腹壊さないようにね！」
「わかっている！　よし、行くぞ！」

一目散に駆け出すラウラの後を追いながら思った。
こんな日常も悪くないな、なんて。

「ち、ふ、ゆ、さーん！」
「夜なんだから静かにしろばか者！」
「うきゅっ！？　ご、ごめんなさい……」

「それで？　今日はどうした？」
「一緒に寝ましょ！」
「……お前な」
「だめ……？」
「……わかった、わかったからその顔で見つめるな！」
「わーい♪」

ラウラたちが帰宅した後の寮長室の様子であった。

「織斑先生×生徒会長……、先生がまさかのネコ！？　いけるわ、いけるわぁぁぁぁ！」

そしてその電波を受信したのが、一時期一夏×シャルロット（男装版）で本を出していた生徒だったことは、その本が寮内に出回る来年になってわかったことであった。

第７９話　デート　ラウラ編（後書き）

はい、最後の方はほんとすいませんｗ
どうしても電波が、ね？
しかし恋愛って難しい。

第８０話　デート　鈴編（前書き）

今回でデート終了です。これだけで三週間が内部時間で経過中。

第８０話　デート　鈴編

「さあ、いくわよ！」
「あの、まだ八時なんですが……」

更に翌週。
校門にまで僕を引っ張ってきたふーちゃんでしたが……、現在時刻午前八時。予定時刻より二時間も早いのです。
そんなふーちゃんは、少し大きめの茶色のパーカーに深い緑のＴシャツを中に着て、バックルの太い白のベルトをジーンズに通している。薄い黒のレンズが入った細見のサングラスがまた似合っていた。

「ん、これ？　顔バレ防止よ」
「ああ、そういえばモデルとかやってるんだっけ？」
「今はもうやってないけど、その分ばれると面倒だしね」

薄く笑ったふーちゃんは、頭にかぶったフードをとってから僕の手に自分の手を絡める。

「とりあえず買い物行きましょ」
「わかったから、少しゆっくりいこうよ。まだ八時だよ？」
「はいはい。っていうか、この前秘密基地行ったのよね？」
「なんで知ってるのさ？」
「一昨日ラウラに教えてもらったのよ。嬉しそうにランタン抱えてね」

ラウラ、そんなに嬉しかったんだ……。
僕もプレゼントくらい買っておくべきかな。

「まあ、それはさておいて。買い物行くわよー」
「え、秘密基地の話は……？」
「したかっただけよ」
「さいですか……」

道を歩きながらそんなことを話している僕らの目の前に、突然人影が。

「わっ！？」
「きゃあっ！？」
「おっとぉぉ！？」

避けきれずにぶつかってしまったふーちゃんとその人はぐらりと揺れ、それに引っ張られて僕も後ろへ倒れていく。
頭をぶつけるのは回避できたけど、その分したたかに体を打ち付けてしまった。

「いたたた……」
「っつぅー……、あの、大丈夫ですか？」
「あ、は、はい、すいません……。そちらの方は大丈夫ですか？」
「平気よ平気。それにしても、そんなに焦ってどうしたの？」

全員がそれぞれに声を掛けながら立ち上がると、ぶつかってしまった人を見る。
赤毛の目立つ制服の子だけど、少しそわそわしているようだった。
ん、この子どこかで……？

「実は、友達とはぐれちゃって……。あの子方向音痴だし、ここ三回くらいしか来たことないんです」

「……あれ、蘭？」
「え？　なんで私の名前……」

蘭、蘭……、ああ！　この前一夏の誕生日会にケーキ持ってきてた子か！　すごいすっきりした、思い出せなくてもやもやしてたからね。

けど、件の蘭ちゃんはふーちゃんのことが分からずに頭の上にハテナマークを躍らせている。

その様子を楽しそうに見つめながら、ふーちゃんはサングラスを外した。

「ばぁ、アタシよ、蘭」
「り、鈴さん!?　わ、すごい……全然気付かなかった……。あの、こちらの方は……？」
「一之瀬香織、私の幼馴染よ。ほら、誕生日会の時にいたじゃない」
「……ああっ、す、すいません！　あの時は、その……」

僕が誕生日会にいたことを思い出した蘭ちゃんは、わたわたと頭を下げながら言ってくる。

「いいよいいよ、あの時は一夏一直線だったみたいだし」
「あぅ……」
「改めて、一之瀬香織です。よろしくね、蘭ちゃん」
「あ、は、はい！　五反田蘭です、よろしくおねがいしますっ！」

顔を真っ赤にした蘭ちゃんが、取り繕うように大声で答える。その様子がなんだか初々しくて、僕は思わずくすりと笑ってしまった。

「ま、それはともかく。友達探してるの？」
「あ、は、はい。あの子本当にいろんなとこに行っちゃって……」

「しょうがないわね、皆で探せばすぐに見つかるでしょ」

この時間なら空いてる店少ないし、と続けたふーちゃんのことを、びっくりしたような顔で見つめる蘭ちゃん。

するすると携帯端末を取り出すと、蘭ちゃんへ突き出した。

「ほら、画像持ってたら送って。早く探さないと、お店開いちゃうわよ」

「でも、いいんですか……？」

「いいわよ、遠慮しなくても」

「じゃ、じゃあお願いしますっ」

「私も手伝うよ。いいかな、蘭ちゃん」

「は、はいっ！」

困っている人を放ってデートなんて、ちょっと後味悪いしね。

ふーちゃん経由で画像を受け取った僕は、それを頭の中に叩き込んでおく。さて、どこに行ったのやら。

「それじゃ、私は西のほうを探してみますね」

「アタシは東行ってみるわ。蘭は北をお願い」

「は、はいっ！　お願いします！」

もう一度ばさっ、と頭を下げた蘭ちゃんへ向けて、僕らはそろって笑みを返していた。

それから少ししして、僕はショッピングモール『レゾナンス』の中を走り回っていた。

そばに浮かんでいる仮想ディスプレイには、蘭ちゃんの友人の画像が映し出されている。

それにしても、一体どこへ行ったんだろうか。大体探したけど、残っているのは路地裏辺りだ。

この辺りは観光名所でもあると同時に、ここからつながる路地裏は不良やちょっと危ない系の人たちの溜まり場になっている。僕は大丈夫だけど、他の人が行くと危ないかな……。

「……一応行っておくか」

路地裏へ踏み入ろうとしたところで、突然端末から着信音が鳴り響いた。

『レゾナンス』自体は早い時間帯からやっているけど、人はそんなに来ていない。九時近くになった今でも、来ているのは店員さんくらいのものだ。

だから、そんな伽藍堂のモール内に響き渡った着信音が妙に物悲しくて、僕は二コール目に入る前に端末をとった。

「もしもし」

『あ、香織？　ごめん、デートだったのに勝手に引き受けて』

「ううん、いいよ別に。困ってる人を見捨てられないもんね」

『終わったら喫茶店に入りましょ、まだまだ朝早いんだし』

「うん。それじゃ、見つかったらまた」

ぶつっ、と音声が切れる。

端末をしまいこむと、気を改めて路地裏へと一歩を踏みいれた。

空調の利いているモール内と違い、路地裏に空調設備はない。そのせいか、どこかじめじめとした空気が漂っていた。
こんなところに来ているとは考えたくないけど……。

「美雪(みゆき)さーん、いませんかー!?」

かー……。
反響するも、返事はない。
やはり杞憂だったかと踵を返そうとした直後、ごそごそと物音が聞こえた。

「誰かいるの!?」
「んー……、だぁれぇー……?」
「……ん!?」

声は、奥の段ボールの塊のあたりから聞こえてきていた。
どこか聞き覚えのあるその声の主を探ろうと、折り重なっている段ボールを剥いでいく。
一〇枚と少しの段ボールをすべて排除すると、そこにいたのは……、メイド喫茶『@クルーズ』の店長さんだった。

「あらぁー?　お嬢様ぁー」
「うわっ……、酔っぱらってるの?」
「あはは、おひゃけのんれまーすぅ!」
「しかも泥酔状態……。ほら美華(みか)さん、起きて」
「んにゅぅー……」

口元から涎を垂らしながら酔っぱらっている店長さん、藤島美華さんを引っ張り上げると、腕をこっちの肩に回して担ぎ上げる。
と、美華さんが仮想ディスプレイに表示されている画像を見たと

たんに目を見開いた。

「み、美雪!?　お嬢様がなんで美雪のことを!?」

「まってまって、どういうこと?　美雪さんのこと知ってるんですか?」

「美雪は、私の妹よ!　美雪になにかあったの!?」

なんと、美華さんは美雪さんのお姉さんだったのか。確かに、言われてみれば目元とか似てるな。

って、そうじゃないそうじゃない。

酔いが完全に醒めた美華さんの肩を掴んで、視線を合わせて口を開く。

「落ち着いてください、美華さん。美雪さんはお友達と来ていて迷子になっただけです。僕は今、その子を手伝って美雪さんを探してるんです」

「そ、そういうことだったの……。よかった、美雪に何かあったのかと……」

ようやく息を吐き出して安堵のため息もついでに漏らした美華さんは、どさっとその場に座り込んだ。

「で、なんでこんなところで寝てたんですか?」

「んー、昨日従業員の皆と飲みに行って、皆ぐでんぐでんに酔っぱらって散り散りに帰ってったのよ。だから、そのせいじゃない?」

「はぁー……。それじゃ、僕はまた美雪さんを探しに行きますから。美華さんは早く家に帰ってくださいね」

「でも、私も探さなくていいの?」

「『@クルーズ』はどうするんですか?　僕らが見つけておきますから、大丈夫です」

「そ、そう？　それじゃあ、頼んだわね」

お願いねー、なんて叫びながら走って行く美華さん。さっきまでぐでんぐでんだったのに元気ですね。

さて、それはさておいて美雪さんを探さなければ。

こっちにはいないようだし、一体どこに――。

「きゃっ、いや、放して！」

「うっせぇな、とっととこいよ！」

声が聞こえた直後、僕は駆け出していた。

美雪さんらしき人影が、大柄な男にその細い手首を掴み上げられているのを視界に収めると、一気に加速してその手を素手で打ち払った。

パァン、と高い音が響く。

「ぐっ！？　なんだよテメェ！？」

「嫌だって言ってるんだから、放してあげなよ。今消えれば酷いことはしないから」

「ふざけやがって、ぶっ殺してや――」

最後まで言わせずに中心線に沿って掌底を打ちはなっていく。

一撃一撃に全体重の七割ほどを乗せているため、そのダメージは目を覆うようなものになっているだろう。

内臓にも酷いダメージを負わせているだろうけど、そんなことは僕の知ったことじゃないね。

「がはぁっ……！」

「ぶっ殺してやるっていう言葉は、終わってから使うものですよ。君、大丈夫？」

「……」
「あの、大丈夫？　どこか痛い？」
「え？　あ、ああ、大丈夫です！　あ、ありがとうございます！」
頬を紅潮させた少女は、ほっとしたように笑みを浮かべる。
制服は……どこだったか。確か結構レベル高い学校だったと思うんだけど。
「道に迷っていたら突然連れ込まれて、どうしようかって……」
「ってことは、君が美雪さんでいいのかな？　蘭ちゃんから頼まれて探しに来たんですよ」
「え、蘭ちゃんのお知り合いの方、ですか？」
「彼女の思い人の友人です。いま連絡しますね」
軽くウィンクを返してから、端末で蘭ちゃんに繋いだ。
『もしもし？』
三コールの半ばくらいで繋がった回線の向こう側で、蘭ちゃんの声がした。
「えと、香織です。美雪ちゃん見つかりましたよ」
『本当ですか！？　今どこに！？』
「西区画の……、ハンバーガーショップの前。待ってますね」
『わかりました、すぐ行きますね！』
音の切れた端末を操作して、ふーちゃんにも同様の情報を伝える。
それから十数分後、二人してやってきた蘭ちゃんとふーちゃんはほっとした表情を浮かべていた。

「もうすっかり夕方ねー」

あの後、美雪ちゃんの手をはしっと握って遊びに出かけていった蘭ちゃんを見送り、僕らも元々予定していた喫茶店に入って少し休み、そのあと映画を堪能していた。

映画館に一緒に入っている小さなゲームセンターでクレーンゲームを堪能してから出てきたときには既に日も大分暮れていたから、そろそろ帰ろうかという話になっていた。

「でも結局、デートらしいデートってやらなかったなぁ」

「……それがアタシ達ってことじゃない？　少しあせってたのかもね」

明るい笑みを浮かべてそう告げるふーちゃん。

何をあせっていたのかは解らないけれど、それでも皆と過ごす時間は楽しいと再認識して。

「さて、帰りましょうか！」

「そう、だね」

この人たちが一緒にいてくれることが、本当に幸せなことなのだと、そう感じた。

――そしてそれから幾許かの日が過ぎ、世界は悲鳴に包まれることも、その時はまだ知らずに。

第８０話　デート　鈴編（後書き）

不穏な引きと共に終了した今回でした。
……誰一人としてまともにデートしてない。と言うか鈴が一番不憫か？
やはりラブコメは書き難いです。

第８１話　変わりゆく世界（前書き）

っつーことでオリジナル展開に突入。
お楽しみにね！

第８１話　変わりゆく世界

普段通りの風景、普段通りの会話、普段通りの命。
そんなものは、一瞬で崩れる。それを知らないものたちは、戦争を知らないものたちでもある。
亡国機業（ファントムタスク）は、そんな世界への憎悪が作り出した、亡き国を想う者たちの力。

「さあ、始めましょう。私たちの思いを知らしめるために」

日本から二〇〇キロほど離れた海の上で、それは始動していた。
全長横幅五キロ、縦幅四〇メートル。巨大なバーのようなそれの中心核となっているのは擬似ＩＳコアだった。
その中の操縦区画の一つにいたスコールは、静かにコンソールへとその手を伸ばす。

「主砲発射準備」

その言葉に、全面に浮かんでいる仮想ディスプレイにカウントダウンが表示される。
周辺には誰もおらず、ただスコールが一人いるだけ。それだけで、この巨大なＩＳは動かせた。

「逝きましょう、『ファントム』」
『二、一……、主砲発射』

カウントダウンが終わる。
直後、直線状にあった一つの町が、消えた。
圧倒的なエネルギーの奔流に包まれ、瞬く間に消滅していくそれ

を眺めながら、スコールは唇を歪め笑う。

「充填率三パーセントではこの程度ね。皆、準備はいいかしら？」

『おう、いつでもいいぜ』

『やるならば早くしろ……、長くは持たん……！』

『あらあら、せっかちさん。いいわよ、スコール』

総勢、四名。それがこの巨大すぎるＩＳに搭乗している人員だった。

「始めましょう、戦争よ」

もう一度、スコールは笑みを浮かべ言う。

ＩＳの安全神話は、この日崩れることとなった。

「一体どうしたんですか、専用機持ちだけを緊急招集だなんて」

「また厄介ごとなわけ？」

私とふーちゃんの声に、千冬さんは思いつめた表情で頷く。

出来るだけ軽く言ったつもりだったが、その様子を見て私たちも意識を切り替えた。どうやら相当にまずいことになっているらしい。

「今より一時間前、太平洋沿岸の、ＩＳ学園所有のドームが設置さ

れていた町が消滅した」
「え……？」
「……生存者はなし、消滅範囲は半径約一二キロ、観測されたエネルギーはＩＳの射撃兵装用エネルギーだったそうだ」
せいぜい襲撃が確認された程度だろうと想っていたところに、とんでもない爆弾が落とされた。
……え、消滅って何？　どうなってるの？
「日本政府もこの事態にはさすがに重い腰を上げるらしい。日本の代表と学園の専用機持ちでこの事態に当たれと言うことだ」
「……さすがに出ないとまずい、ですよね」
「だろうな。正直私もお前たちを行かせたくはないが……」
苦々しげに奥歯を噛み締める千冬さんに、そっと恋華さんが寄り添う。……いつの間にか間柄が進展しているんじゃないかな、というのはスルーで。
「やるのでしたら早めに動きましょう。織斑先生、相手のデータはありますか？」
「画像データと相手の主砲と思しき武装の攻撃データなら残っている。とりあえず見てくれ」
千冬さんは手元の端末を操作し、会議室中央に映像を映し出す。
そこにあったのは、縮尺された謎の機体と、砲撃の放たれた瞬間の画像。縦から見た宇宙戦艦的な何かを横に引き伸ばしたようなそれの下には、縮尺前の原寸を示す、地図に良く付いているあれがあった。
それを使って全長を計算してみると。

「五、五キロ……？」
「そうだ。横幅全長五キロ、縦幅全長四〇メートル。全体的に見れば薄く長くだが、こちらから見れば驚異的な大きさだ。装甲もそれなりのものだろう」
「まるでロボットアニメの要塞だな……」
「見たことあるんですか？」
「昔、弾にちょっとな。けど、これってどこを叩けばいいんだ？」
「こういうものを作る場合、核は複数個所設置している可能性がある……。叩くときには部隊を複数に分けたほうがいい……」
「核を複数……、例の擬似コアも使われている可能性があるね」
「この砲撃、エネルギー体である以上、私の《ＡＩＣ》では止められないな。香織、《夜羽》で防げるか？」
「リミッターを解除すれば、三度くらいならいけますが……、相手も軍用をはるかに超えた代物でしょうから、防ぐより逸らしたり、回避したりした方がいいですね」

ずらずらと会話を続ける私たちを見つめている二年と三年の専用機持ちさんたちがじーっと見つめていた。

……なんでしょうか。

「なあ、後輩」
「なんスか」
「こいつら、なんでこんな場慣れしてんの？」
「今までも色々あったからッス。私はでてないけど」
「そうかー」
「そうッス」
「そこの二人、現実逃避してないで話に参加しろ。死ぬぞ」
「うぃッス」
「了解……」

千冬さんに言われ、仕方なく話し合いに参加してきた二人も含め、ここにいる専用機持ちは一二人。日本の代表も含めると一三人だけど、やはりあのデカブツに対応するには少ない気がする。

せめてもう七人くらい、ね。無理だろうけど。

「けど、あれがＩＳなら絶対防御はあるのよね……。破壊は出来るの？」

『そのことについてだけど、私から話があるよ』

「束ちゃん、出てくるならもうちょっと心臓に優しい出現の仕方をしてくれないかな」

『善処します。で、あのＩＳなんだけど、解析したらコアも擬似コアを使用しているから、絶対防御はないよ。最低限の生態維持機能は付いているようだけど、擬似コアの解析情報からすれば絶対防御は付いてないみたい』

ってことは、前に来たあの無人機もグリム達も絶対防御はなかったってことか……。

擬似コアの方が安全性は下なんだ……。

「それなら戦いようもあるわね」

『でも、あの外装は通常の兵器じゃ傷一つ付かないね。ＩＳじゃないと』

「やはりそうか……。ともかく、あれはまだ海の上だ。そこで仕留めるぞ」

「射撃班と近接班に分かれた方がいいかも知れないわね。それぞれ分かれたら三つくらいの班にしましょ」

そのふーちゃんの言葉に全員が頷き、会議室の中でそれぞれ分かれる。

近接系は私とふーちゃん、簪ちゃんに一夏に箒さん。射撃系はセ

シリアさん。他の人たちは大体どちらもこなせるから、基本的に射撃形に回ってもらうことになる。

「本丸、主砲のある部分の上に操縦部分があるようですから、そこは箒さん、セシリアさん、私とラウラの四人で担当させてもらっていいでしょうか」

「妥当だな。現状で一番強力なメンバーだろう。では残りの八名を二組に分けるとするぞ」

千冬さんの言葉で編成が開始された。

結果は以下の通り。

一斑、本丸攻略組：篠ノ之箒、セシリア・オルコット、一之瀬香織、ラウラ・ボーデヴィッヒ。

二班、左翼攻略組：織斑一夏、シャルロット・デュノア、更識恋華、フォルテ・サファイア。

三班、右翼攻略組：更識簪、凰鈴音、ダリル・ケイシー、ナターシャ・ファイルス。

「よろしく、箒さん、セシリアさん」

「そろそろさん付けはいいぞ。戦いの最中にいちいちさん付けも面倒だろう」

「わたくしもさん付けはいりませんわ。その代わり、こちらも呼び捨てでかまいませんこと？」

「うん、もちろん。よろしく、箒、セシリア」

「私もよろしく頼むぞ。このメンバーならそう負けはすまい」

それぞれが挨拶を交わし終えると、丁度束ちゃんが口を開く。

『内部構造の把握は難しいけど、入り口くらいは一時間で割り出して見せるよ。それまでにＩＳの整備やっておいてね』
「わかった。それじゃあよろしくね」
「皆さんのオペレートは私たちは必ず遂行しますから、大船に乗った気持ちでいてくださいね！」
「ありがとうございます、山田先生」

どんっ、という効果音が鳴り響きそうなくらいに胸を張る山田先生。
と、突然会議室の扉が開いた。
そこにいたのは。

「お姉ちゃん！？」
「一之瀬姉か。今回は招集はかけていないが？」
「私の意志よ。足さえ用意してくれれば私も出るわ」
「だが、相手は今までのものとは――」

違う、と千冬さんが言おうとした直後、その顔面にいつ展開されたかもわからない荷電粒子砲が突きつけられた。

「スコールと名乗っている彼女とだけは、私がけりをつけなければならない。そこに、国も人種も、何も関係ない」
「……だがっ」
「安心して。バレはしないわ」
『ちーちゃん、あーちゃんはやるっていったらやるよ。あーちゃん、足はこっちで用意するから安心して』
「そう。……ありがとうたっちん。千冬さんも、物騒なことして悪かったわね」

荷電粒子砲を量子変換して指輪に格納しなおすと、お姉ちゃんは優しい笑顔を浮かべて近くの椅子に腰掛ける。
その様子を見て、千冬さんは表情を暗くした。

「お前とあいつの間に、一体何が……」
「……くだらない感傷よ。貴女が知るようなことじゃない」

千冬さんの言葉をばっさりと切り捨て、それから束ちゃんに向き直る。

「たっちん、彼女の機体はどうなってるの？」
『無論完成済みだよん、今そっちに郵送中ー。あと二〇分もすれば着くから』
「何の話だ、束？」
『ちーちゃんの、新しい専用機のお話だよー？　前に言ってたじゃないかよー！』

ぶーぶーとブーイングする束ちゃんを、疲れたような顔で見る千冬さん。
まあ、気持ちはわかりますけど。

「わかった、到着次第受領しよう。あとは仕事に戻ってくれ」
『ういういー、ほいじゃねー』

ぶつりと通信が切れ、会議室に静寂が訪れる。
そこに、千冬さんの咳払いが響き渡った。

「あー、各自調整に入ってくれ。後続の支援には私が入るから安心してほしい。……以上だ」
「そ、それじゃあ皆さん、それぞれ調整に行きましょうか！　ね！」

「そ、そーね！　そうしましょ！」
「よーし、いくわよ少年少女たち！」
千冬さんの疲れたような声のあとに、私とふーちゃん、ナターシャさんの声が響く。
千冬さん、お疲れ様です……！

第８１話　変わりゆく世界（後書き）

突然現れた戦艦規模の巨大ＩＳ。
町一つを一瞬で消し飛ばしたそれを相手に、香織達が立つ！
そして、日本の代表とは一体だれなのか。
次回をお楽しみに！

巨大ＩＳの姿は横長の円盤に砲塔が満載されているような感じです。
まさしく空中要塞。主砲はど真ん中です。

第８２話　要塞内部へ

一時間後、私たちは第六アリーナに立っていた。

「私たちの目的はあのデカブツを止め、周囲に被害を出さぬよう破壊することだ。まあ、委員会からは『出来る限り捕獲しろ』という指令だが……、かまわん。潰せ」

「元よりそのつもりです、織斑先生」

この中で一番闘志をむき出しにしている箒がそう言い切る。

全員ＩＳを展開して、しかも全員がリミッター解除状態。渋っているところは今回だけ束ちゃんが解除しました。黙ってりゃばれねーんだよとは、束ちゃんの談。

「束の割り出した進入口のデータを送っておいた。各自、無事に内部に辿り着き動力部分を破壊してくれ」

「オペレーションは一斑を私が、二班を榊原先生が、三班をフランシィ先生が担当します」

「部活やってる子は会ったことあるかもしれないわね。榊原菜月（さかきばらなつき）よ、普段は部活棟の管理をしてるわ。よろしく」

「数学のエドワース・フランシィです。一年生の皆さんは数学の時間にお会いしていますね。今日は尽力させていただきます」

山田先生の紹介で、二人の先生が軽く会釈した。

それでも私たちより緊張した面持ちなのは、こう言った命懸けの事態に出くわした事は余りないからなのだろうか。

「それと、今回共に行動することになっている、日本代表の倉持早百合（くらもちさゆり）だ」

「倉持です。今日はよろしくお願いします」

千冬さんの横に立っていた和風美人さんがそう言って頭を下げた。

倉持早百合……、もしかして倉持技研と何か関係があるのかな。

「ですが織斑先生、倉持さんが入るとバランスが……」

「倉持には最初は遊撃、私と葵が行く時についてきてもらう。何か質問は？」

その言葉に反応するものは誰もいなかった。

千冬さんが小さく一つ頷くと、各自飛翔する姿勢をとる。

「では、一つだけ私から言葉を。……死ぬな、必ず生きて帰って来い！」

右手を挙げ敬礼を見せた千冬さんに親指を上に立てて突きつけると、私たちは一斉に飛び立った。

――戦うために。

一気に空を突き抜けた香織たちの前に現れたのは、恐ろしく巨大なそれだった。

まさしく要塞のごとく空に鎮座するそれを見て、各々戦意を昂ぶらせていく。

「それじゃ、まず開戦の狼煙といきましょうか！　《銀の翼の奏で(Silver Wing)る鐘(Bell)》！」

大きさだけで横幅直径五キロに達するそれに向けて、最初の一撃を撃ち放つのはナターシャだった。

《銀の鐘(シルバー・ベル)》の武装特性を起動させ、視界いっぱいに銀色の弾丸をばら撒いていく。

「ついでに持ってきなさい、《銀色の鐘の音(Ding Ingisvec or)》！」

その弾幕が着弾するよりも早く、カノンタイプの《銀の鐘》の武装特性を起動させ撃ち放つ。

音速を超えたその弾丸たちが悉く要塞型ＩＳとも呼べるそれにぶつかり、粉塵を巻き上げた。

「どう？　やった？」

「……だめです、損傷なし！」

「うそーん」

粉塵が晴れ、そこにあったのは全く傷のついていない装甲だった。

かなり攻撃力の高い《銀の鐘》でもまるで効果が見られないことに落胆しつつ、当初の予定通りに内部に入り込むことにした。

「それじゃ、皆死なないように！　いくわよ！」

ナターシャの掛け声で、それぞれがマップに表示された進入口へと飛んでいく。

香織達一斑が向かったのは、中央の巨大砲塔脇の空いている部分。

そこから内部に侵入すると、各々武装を構えながら内部を進んでい

った。

「本当に要塞みたい……」
「人気はないな。電子制御か？」
「どちらにしても破壊するだけだがな」
「周囲への警戒は忘れずにですわ、箒さん」
「わかっているさ」

言葉を交わしながら進んでいくと、丁度Ｔ字路に突き当たった。
配線がむき出しになっている壁を見ると、多くの配線は左へと向かっているように見える。
配線の行き先につられてそちらを向いた四人の目に飛び込んできたのは、どこかで見たことがあるような黒いＩＳたち。

「またですか……」
「木偶どもが何匹集まろうと、なんら問題はない」
「ですわね。どうしましょうか？」
「なら、先に私が行こう」

黒いＩＳの群れを鼻で笑った箒とセシリアの隣で、ラウラがワイヤーブレードを射出する。
四〇本のワイヤーブレードが群れの中へと入り込むと、ラウラは軽く拳を握りこむ。

「どうやらこいつは、好きな場所から刃を出せるようでな」

普段つけていた眼帯を量子変換して取り外すと、黄金の双眸で黒の群れを見やりながらそこへ《ＡＩＣ》を放ち、動きを止める。

「こういうことも出来るわけだ」

握りこんだ拳を一気に開いた直後、ワイヤーブレードのワイヤーの部分から、エネルギーブレードが無数に突き出される。
滅多刺しにされた黒い無人機たちは、それだけで活動を停止してどろりと溶けた。

「ワイヤーブレード型遠隔兵装、《シュヴァルツ・ドラート》の武装特性、《ウン・ハイル・ドルン》。よく味わえよ」
「ふむ、便利だな」
「ですわね」
「そういう感想でいいのかな」

やや緊張感を失いながらも、香織達四人は黒いＩＳの群れがいた通路を通って先へ進んでいく。
時折感じる振動が、この静寂の中でも化け物じみたこのＩＳの鼓動を感じさせている。

『皆さん、周辺の解析が終わったのでマップデータを送りますね』
「あ、はい」

通信回線が開いたと同時に真耶の声が飛び込んでくる。香織の返事でファイルが解凍されると、目の前に半透明のマップデータが展開された。
それによれば、この周囲は複雑な迷路のように入り組んでおり、スイッチでルートを切り替えながら進む必要があるようだ。

「うんざりしそうな地図だな」
「何を想ってこんな構造に……」
「多分偶然じゃないですか。多分」

口々に感想を呟くも、やはりマップの通りに進むのはとても面倒である。
そんな思いを抱いた四人の中で、箒が言い出した。
「……別にバカ丁寧に道を通ってやらずとも、壁をぶち破って道を通せばいいではないか」
「それもそうですわね。箒さん、よろしくお願いいたします」
「え、ちょ」
「では行くぞ。衝撃に備えておけよ」
犬歯をむき出しにして笑った箒は、止める間もなく刃を構える。
紅いエネルギーが《空裂（からわれ）》を収める鞘から迸り、腕部までもが紅く発光し始める。
「斬り捨て御免ッ、《空海断絶（チヘイヲワル）》ッ！」
直後、目の眩むような紅い閃光と共に抜き放たれた刃は、目の前にあった壁も通路も、何もかもを剣圧で巻き込んで消し去っていく。
数秒後には、斬撃の通ったあとにはぽっかりと穴が開いていた。
「……うわぁ」
「なんという威力だ……」
「殆ど制限無しで撃ち出しただけあって、恐ろしい威力ですわね……」
「さて、進むとしよう」
その絶大な威力に頬を引きつらせながらも、四人は開いた穴を通って先へと進む。
直線距離で五〇〇メートルほど進んだ辺りで、突然先頭を行っていた箒が立ち止まると、鋭い視線を奥へ向けると共に刃を構えた。

「出て来い。隠れていても無駄だぞ」
「あらあら、ばれてしまいましたの。皆さんごきげんよう、先ほどのパフォーマンスはいかがでしたか？」
「キティ！」
通路の奥から現れたのは、『灰狼（グレイウルフ）』を纏ったキティだった。
無邪気に微笑んだキティは、カチカチと左右の爪を打ち鳴らしながら言葉を続ける。
「あの威力でも一割も出していないんですのよ？　ふふ、あれが国の首都に撃ち込まれたらどうなるでしょうね？」
「そうさせんために私たちがここにいる」
「なぜ貴女たちが命を張る必要があるのです？　貴女方は全員、日本という国に恩義などないでしょうに」
「国が問題なのではありませんわ。このような危険極まりない代物を、貴女たちのような存在に持たせておくわけには参りませんもの」
「私はどうでもいいがな……、強者と戦えればそれでいい」
それはどうなんだろうと思った香織だったが、ここでその突込みを入れるのは余りに空気を呼んでいないんだろうなと思いやめておいた。
そんな香織を見ながら、キティは更にカチカチと爪を打ち鳴らす。
「まあ、それはともかく。この先にはこの機体の心臓部の一つがありますわ。私を倒せたら、どうぞ壊していってくださいな」
「それはつまり、挑戦と言うことでいいんだな？」
「ええ。ただし――」
銀色に鈍く光る爪に舌を這わせ、熱に浮かされたような目で香織

を見るキティ。
その様子に、香織は背筋を舐め上げられたような生理的なおぞましさを感じた。

「私が勝ったときには、お兄様をいただきますわ」
「なっ……！　ふざけるなよ、誰がやらせるか……！」
「ふふっ、では試してくださいまし。ああお兄様、もうすぐ思い出させて差し上げますわ……！」

直後、笑みを浮かべるキティを紅と青のエネルギーが襲った。

第８２話　要塞内部へ（後書き）

キティ再登場。
というわけで今回から要塞攻略戦闘に。箒さん力技。もし普通の箒だったらちゃんと迷路入りました。

第８３話　戦う者たち

キティを襲った二つの力。
『紅椿』の斬撃と『ブレイブ・ティアーズ』の銃撃が重なり合い、キティの小さな体躯へと吸い込まれていく、が。

「ふふっ、その程度では墜ちませんわよ？」
「止めた、か」

妖しげな笑みを浮かべたキティは、赤と青のエネルギーを振り払うと静かに爪を構える。
それを見て、四人は今度こそ臨戦態勢に入った。

「行くぞっ」

先陣を切ったのは箒だった。
音速で接近し、滑るように刃を振りぬく。しかし、その刃をキティは片腕の爪で受け止めた。

「残念」

笑い、自分を中心にして回りだす。
瞬く間に回転数を上げていくキティの近くにいた『紅椿』の装甲が、ガリガリと削られていく。
と、回っているキティの周囲に、徐々に青い光が纏わりついてきた。

「逃しませんわ」
「こちらも忘れるなよ」

「おまけにこっちもね」

その青い光を追うようにして、四〇本のワイヤーブレード、《シュヴァルツ・ドラート》と、香織の操る一〇基のウィングビットが飛ぶ。

回転するキティへ向けて、一斉にそれぞれの光が放たれた。

「撃ち抜きますわ……！」

「《ウン・ハイル・ドルン》！」

「ウィングビットッ！」

ＢＴエネルギーが二二発、ワイヤーブレードから発生した長いプラズマブレードが一〇〇本余り。

まともな相手ならばこれでも十分すぎるほどだが、ラウラと香織はダメ押しとばかりに背負った二門のレールカノンと《夜雀》の弾丸をありったけ撃ち放つ。

直後、粉塵が立ち込めるそこから、大きな爆発が巻き起こった。

しかし。

「いい攻撃ですわね。ですが……」

「っ！　《とりのさえずり（バードエイク）》！」

「《狼の咆哮（ウルフ・ハウリング）》！」

ぐわん、と空間が歪む。

出力の拮抗した二つの音がぶつかり合い、大気もそれに覆い隠された其処すらも歪めていく。

「ぐっ……！」

「あはははっ！　これほどまでに力を上げていらしたのですね！　ふふ、あはははははは！」

「皆、大丈夫……！？」

甲高い笑い声を上げて喜ぶキティとは対称的に、その顔を苦痛に歪める香織。

いかにＩＳの保護があるとしても、二つの破壊的な周波数の音を目の前でぶつけ、その余波をもろに受けているとあっては、身体に大きな影響を受けていることは確実だった。

そんな中で、香織は歯を食いしばりながらもそう声を上げる。

「ああっ、こちらへの余波は私が《ＡＩＣ》で食い止めている！」

「そ、っか、よかった……！」

「香織だけに負担をかけるわけには参りませんわね。箒さん、やりますわよ！」

「委細承知！　ラウラ、《ＡＩＣ》を解いてくれ！」

「やられるなよ！」

「わかっている！」

《ＡＩＣ》が消滅した途端、二人に襲い掛かってくる衝撃に、二人は顔を顰めながらもそれぞれの獲物を手にキティを睨む。

時折撃ち出されてくるＢＴエネルギーをラウラが《シュヴァルツ・ドラート》で打ち払いつつ、箒が接近戦を、セシリアが中距離戦を仕掛けていく。

「《蒼と紅の輪舞曲（Sky and Scarlet Rondo）》、共に踊りましょう？」

そう歌う様に口ずさみ、その直後には紅と蒼のエネルギー光が途切れることなく打ち出されていく。

《スターライトｍｋ？》から撃ち出された弾丸はホウセンカのように無数の細い糸に分かれ、《雨月（あまづき）》の生み出した紅いエネルギーを守るように取り巻き、手が無数に見えるほどに刺突を繰り返す箒

はひたすらにキティを睨みつける。
　指向性を持たせて範囲を限定した《とりのさえずり》を避けるように動くそれは、殆どがキティのＩＳから伸びる《尾》によって叩き落とされてしまっているが、そのせいもあってかキティの集中力が僅かに鈍ってきていた。

「さっきからちょろちょろと……！　邪魔ですわ！　《断罪のため（テイル・フォア・ジャッジメント）の尾》！」

　ギュルン！　と《尾》が唸りを上げ、鈍色（にびいろ）の光が《尾》を包む。
　その直後、飛び回っていた箒とセシリアへ向けてそれが叩きつけられた。

「やるぞ、セシリア！」
「ええ！」

　間近へと迫ってくるそれを見据え、セシリアは九基の《ブルー・ティアーズ》を呼び戻し、八基からＢＴエネルギーを放って八角形を形作り、その上に残る一基を配置することで八角錐を作り出す。更に、その隙間を埋めるように全てのシールドビットとなっている装甲を配置していった。

「その程度で止められませんわ！」
「誰が終わりだと言った！　おおおおおぉぉぉ！！」

　その八角錐の中へと『紅椿』の《絢爛舞踏（けんらんぶとう）》によって作り出した無限大のエネルギーを注ぎ込むと、それは《尾》へ向けられた巨大で鋭い傘のように形作られた。
　次の瞬間、轟音を立てて《尾》が傘へと接触する。エネルギーが迸り、鈍色と紅と蒼が交じり合うようにして弾け合う。

その中で、セシリアは更に《スターライトｍｋ？》を構えた。

「お楽しみは、これからですわ！　箒！」

「わかっている！　エネルギーへの干渉を開始、構成情報を変換、全てのエネルギーの構成情報を『ブレイブ・ティアーズ』の制御下へ――！」

「まさか、エネルギーの制御権を無理やり奪い取るつもりですの！？」

「ここだっ……！　《とりのさえずり》出力最大！」

「しまっ！？」

動揺を見せたその一瞬の隙を突いて、香織は全力で《狼の咆哮》を押し返す。

咄嗟にそれに対応して見せたキティだったが、そのせいでエネルギー制御がおろそかになってしまう。

「いただくぞ、貴様の力！　やれ、セシリア！」

「エネルギーの全制御権獲得……、始めますわよ、《スターライトｍｋ？》！」

色とりどりのエネルギーが発光しだし、次々に蒼く変色したかと思えば、セシリアのエネルギーライフルの銃口へと集っていく。

箒もまた刃を鞘に戻し、《絢爛舞踏》を完全発動させていた。

そして、次の瞬間。

「撃ち貫きなさい――、《星明かりの一撃（Star Right Strike）》！」

銃口の十数倍はあるだろう大きさへと膨れ上がったその光が、流れ星となって撃ち出される。

ぐねぐねと不規則な軌道を描いて大気を裂くそれが、キティの《

尾》へと確かに命中し、目も眩むような青い光を放つ。

「くっ、この程度で！」

「それだけではないということだ」

悪態を吐こうと口を開いたキティの右肩から先の感覚が消える。余りの衝撃に、其処にあったという感覚自体が死んだことに気づいたのは、紅の一撃が胸を突いたときだった。

「《万障一穿（スベテヲウガツ）》、《空海断絶（チヘイヲワル）》――！」

「がはっ……！？」

血反吐を吐いて吹き飛ぶキティ目掛け、完全な不確定三次元攻法（ランダム・トリック）で接近していく箒。

「我流、千一閃（いっせんいっせん）！」

――その直後、キティの体を文字通り千の刃が切り刻んだ。

一方その頃、左翼攻略の二班。

「それにしても、こんな大きなものがＩＳだなんて……」

「ま、元々ブラックボックスだらけ何だから、作れても不思議じゃ

ぁねーっス」
「そーそっ。さて、大分進んだけど……」
「さっきから無人機は来てるけど、進んでる実感しないな……」

時折攻撃を仕掛けてくる無人機を破壊しながら、一夏たちは内部を進んでいた。
時折入る榊原（さかきばら）からの通信を頼りに進んでいってはいるが、やはり風景が変わらないと精神的な疲労は募る。それ正規の訓練を受けていない一夏ともなればひとしおだった。
一瞬だけ一夏が周辺から注意を逸らした、その瞬間。

「っ……！」
「くっ、誰っスか！？」
「『サイレント・ゼフィルス』……、キャノンボール・ファストのときの！」
「久しぶりだな、織斑一夏」
「やっぱり出てきやがったか……！」

姿を現した『サイレント・ゼフィルス』を見て、即座に全員が戦闘態勢へ移行する。
それを見て、『サイレント・ゼフィルス』の操縦者、マドカは唇を歪め笑った。

「貴様を、殺せるなら……！　私が消えようとかまう物か！　最後の仕事だ、ゼフィルス！」
「何を言ってやがる！」
「まあなんでもいいわ、殺すわよ」

直後、『サイレント・ゼフィルス』を無数の水の槍が襲う。
それを器用に避けながら、マドカはビットを射出する。射撃用の

BTビットとBTライフル、そして片手にはピンク色に発光するナイフを持ち、マドカはまるで死に急ぐように突進してくる。
しかし、その攻撃は巧みに計算されたもの。接近戦での一撃をかわせば、隙間を縫うようにBTエネルギーの弾丸が降り注ぎ、それに気をとられれば零落白夜を打ち消す謎のナイフが突き立てられる。

「つよっ！？　強くないッスかこいつ！？」
「そういう相手なんです！　はぁっ！」
「ええい、ちょこまかとぉ！」
「くそっ、当たらない！」

口々に悪態を吐きながら、更に攻撃を仕掛ける四人。
それを嘲笑うかのようにマドカは悉く避け続け、お返しとばかりに弾丸の雨を降らせていく。
しかし、その動きはどこか精彩を欠いていた。まるで、出来の悪い人形のように歪な動き。
その答えがすぐそこで大口を開けて待っていることを、五人はまだ知らずにいた。

第８３話　戦う者たち（後書き）

箒とセシリアが更にパワーアップ。
まあ前回から一ヶ月近く経っているので、その間の訓練の結果です。
この二人、いい加減強くなるのやめてくれないだろうか。書いてると勝手に強くなるんだが。

第８４話　さらに戦う者たち（前書き）

今回は落とし所が見つからずにいたので短くなっています。

第８４話　さらに戦う者たち

それなりに広くなっている通路の中で、五人は刃を振るい、引き金を引く。

正確には四人と一人、戦線から外れた恋華は一人後ろに下がって集中力を高めていた。

ＩＳを強制的に融解させ、一気に引き剥がす特殊兵装、《アルカエスト》。あらゆる物質を『第一質料』と呼ばれる存在に融解することのできる万物溶解剤からその名がとられたそれは、その強力な性能と引き換えに大量のエネルギーを必要とし、制御には尋常でない集中力が必要だった。

いかに天災である恋華であっても、それは変わらない。むしろ、天災という歪ながらも基礎スペックが高いからこそ戦闘中に使用準備を整えることができるのである。

「剥離剤（リムーバー）を取り込んだという兵器……！　使用させるものか！」

「お前の！」

「相手は！」

「アタシらっスよ！」

『白式』の第二形態『雪羅』と同じ名を持つ多機能武装腕《雪羅（せつら）》、『ミストラル・リヴァイヴ』の左腕となっている第三世代兵装、《デュノア・オルグイユ》、フォルテの第三世代型ＩＳ『コールド・ブラッド』の特殊兵装、《アイス・メイカー》の弾丸が同時に迫る。

マドカはその三人の同時攻撃を、あろうことか片手のナイフを突き刺して《雪羅》を、もう片方のＢＴライフルで《デュノア・オルグイユ》を撃ち抜いて止め、残った《アイス・メイカー》の弾丸をＢＴビットで撃ち抜いて破壊した。

「くっ、やっぱつえぇ……！」
「しかも、スピードもパワーも上がってる……。あの時は手加減してたってこと！？」
「どっちにしても、倒すだけっスよ。まずは私が行くっスから、見てるっスよ後輩！」

マドカを睨みつけた二人に対して、フォルテがそう声をかける。
この相手と対したのは初めてだったが、フォルテの心の内は冷静だった。
なにせ、相手は素手でＩＳを撃破出来るほどの強者ではない。ならば、さして何かを恐れる必要もなかった。
それは、葵という絶対強者を相手にしたことのある者だけが持てる心の余裕。それを心のうちに秘め、『イージス』と呼ばれるタッグ時専用の作戦を崩した、単独戦闘用の戦闘プランを脳内に作成した。

「さて、とっとと潰させてもらうっス」

ざわ……っ、と空気が変わる。
次の瞬間、フォルテの姿はマドカの眼前に迫っていた。

「ッ！？　くっ！」
「おっと」

咄嗟に振るわれたナイフを避ける様に上へ飛んだフォルテが、その最中に右腕部から突き出ている銃口から幾つかの弾丸を周囲に吐き出す。
円を描くように横へ飛んだフォルテはまたもやギリギリまで接近すると、反撃を避けて周囲へと弾丸をばら撒いていく。
接近しては避けて弾をばら撒く、その行為を何度か続けていると、

次第にマドカの方が反撃を過激にするようになっていった。
それもそうだろう、何の意味もなく接近しては離れて弾をばら撒いていく姿を見て、彼女は予想以上にいらだっていた。
だが、それこそフォルテの狙い。一夏とシャルロットを置き去りにしてまで単独で動いた理由は、其処にある。

「さっきから、目の前をちょろちょろと！　落ちろ！」
「先輩！？」
「危ない、よけて！」

痺れを切らしたマドカが、六基のＢＴビットとＢＴライフルから一斉に銃弾を撃ち放つ。
それは偏光制御射撃（フレキシブル）によってぐにゃりとその進路を捻じ曲げ、フォルテへと殺到する。

「残念。墜ちるのは――」

七本のＢＴエネルギーの矢がうなりをあげて迫る中、フォルテは静かに笑った。
その直後、各機の大気モニターに異常を示すブザーが鳴り響く。
その視界には、霜と霧がひしめいていた。

「お前っス！　《アイシング・ジャングル》！」

《アイシング・ジャングル》。
それは、《アイス・メイカー》によってばら撒かれた弾丸から冷気を発生させ、周囲の大気の温度を急激に下げる、『コールド・ブラッド』に搭載された第三世代兵装。
その急激な温度低下に伴って生じた霜などは、光の屈折率を変化させ、幻覚さえ見せると言う。

それが、カナダ代表候補のフォルテの専用ＩＳ、『コールド・ブラッド』の力だった。
大気中に大量の霜を生み出したそれは、霜を集めて氷を生み出す。その氷の鏡にぶつかったＢＴエネルギーは、あらぬ角度へと捻じ曲げられてしまった。

「なっ！？」
「極寒の地で凍りつくがいいっス！　《アイシング・ジャングル》全開！」
「くそっ、この程度で！　この……っ！」

動こうとしたマドカだったが、自身の周囲に撃ち込まれた弾丸の発生させる冷気は、最早地球上に存在できるあらゆる物質を凍らせるレベルにまで冷たくなっていた。
その様子を見て、フォルテが小さく嘆息する。

「マイナスケルビンよりも低い、あらゆる物質を停止させる温度っス。まっ、まだ実験段階っスけど。後輩、あとはパスするっスよー」
「はいっ！　行くぞ、白式！」
「行こう、ミストラル・リヴァイヴ！」

その直後、青白い《零落白夜》の光と《デュノア・オルグイユ》の拳が叩き込まれ、マドカは小さなその身を地面へと投げ出す。
その顔を見て、三人は思わず息を呑んだ。

「千冬、ねぇ……！？」
「そんな、どういうこと！？」
「予想外すぎるっスよ……」
「……ふっ、あははははは！　私はお前だよ。私は織村マドカ、ドイツに作られた千冬姉さんのクローンさ」

観念したのか、高く笑ったマドカは人を食ったような笑みで一夏へと話しかける。
そのとき、マドカは鈍痛を堪えるように時折眉を潜めた。
「くっ……！　……まあ、どうせこの言葉ももう意味のないものだ」
「え――？」
カチン、とマドカの懐から音が鳴る。
其処にあったのは、いつかみた剥離剤に似た謎の物体。その天辺から何かが引き抜かれたあとがあるのを見て、いの一番にシャルロットが叫ぶ。
「まずっ、逃げて！」
その直後、四人の体を壮絶な爆発が包み込んだ。

その頃、地上。
「えっと、改めまして。倉持早百合です。よろしく」
「一之瀬葵よ、今日はよろしく」
ＢＣリングから武装を出して点検していた葵の元に歩み寄ってき

た早百合は、小さく頭を下げると険しそうに眉を潜めて、巨大なＩＳがいるであろう空の向こうを睨む。

「いるんですよね、向こうに」

「ええ。怖い？」

「怖いです。ですが、これで怖気づいて逃げたら意味がありませんから」

自身もＩＳのチェックを始めた早百合だったが、その表情はどこか浮かない顔だった。

どうしたのかと聞けば、本当の戦い、恐怖を持った戦いは初めてなのだと語る。

それもそうだろう、このご時勢に本当に命を懸けて戦うことなど早々ありはしない。だが、葵はそんな当たり前のことは口にしなかった。

「恐がることから逃げてはダメよ。怖いって感情は、必ず自分を強くするから」

「……まるで知っているように話すんですね」

「知っているもの」

呟くようなその会話の中にも、葵の気遣わしげな声色が見えて、早百合はやや安堵した。

ＩＳ学園に行っていたのは昔の話だが、今でもこうして暖かな会話を交わせる心を持った人がいるのだと、そう感じて。

と、其処へようやく千冬がやってくる。

その手に美しい指輪をはめて。

「準備は出来ているか？」

「ええ。あとは先生だけよ」

「そうか。二人とも、よろしく頼む」
「はいっ」
「ええ」

その言葉が途切れると共に、葵はＢＣリングに脳内で指令を送る。
すると、ＢＣリングの中から薄い茶色の、流線型の物体が引きずり出されてきた。
名はフライト・ボード、葵を空へ上げるためだけに束が特注したものである。

「では、行くとしよう」

光に包まれた千冬がそう言うと共に、三人は同時に地を蹴った。

第８４話　さらに戦う者たち（後書き）

次回は鈴たちの方をクローズアップ！

第８５話　さらにさらに戦う者たち（前書き）

二時間で頑張って書いた。
そのせいで量が少ないよ！　ぐすん。

第85話　さらにさらに戦う者たち

「くそったれ、どうなってるのよこれはーっ！」
「そんなこと言ってもっ、しょうがないっ」
「そーゆーことよ、とにかく戦うっ！」
「にしてもうんざりする量だなっ」

それぞれがそれぞれの戦いをしている頃、右翼攻略を任されていた三班の面々は黒い無人機の群れに進路を阻まれていた。
ありったけの武装を駆使してその猛攻を凌いではいるものの、現状擬似第四世代の『真打・鉄（しんうち・くろがね）』以外は、全てリミッターを外しているとはいえスポーツレベルに調整された、二次移行（セカンドシフト）も遂げていない第三世代である。何十と続く無人機の波の前にはさすがに手を焼いていた。
おまけに、接敵した段階で通信はジャミングされて使い物になっていない。

「皆下がって、朱鉄を使うからっ」
「りょーかいっ！」
「わかったわ、ダリル、下がるわよ」
「なんだか知らんが、わかった！」

簪の声で三人が後ろへと退避する。その直後、簪の手に握られた《朱鉄（あかがね）》が暴力的なまでの熱量を解き放ち、巨大な刃を形成して行く。
《紅蓮朱鉄（グレンノアカガネ）》を発動させた簪は、それをバットのように握りこむと、横薙ぎに一閃する。
『真打・鉄』の背丈の倍以上の長さを持った刃が通路を真横に薙ぎ払い、そこにいた無人機たちを圧倒的な熱量によって焼ききって

いく。否、むしろ溶かし切っていく、という方が正しいだろうか。
ともかく、それによって二〇機余りが撃破されたが、未だにその数は減ったように感じられないほどに残っていた。

「げんなりするわね……」
「『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』もデチューンしちゃってるから、一掃もできないしねぇ。三年生、何かいい案ない？」
「なんで私に振るんですか……。あー、特攻？」
「却下ねー。簪ちゃん、なんかないー？」
「あったら……苦労しない……」

なんともいえない空気が辺りを包むが、その直後、無数の無人機が一斉に爆発しそこらじゅうに飛び散っていく。

「なに！？」
「こんなもんぞろぞろ出してちんたらやるくらいなら、とっとと潰しちまった方が早いじゃねーか……」

道の奥から聞こえてきた声は、べっとりとまとわりつくような気味悪さを持ったものだった。
がしゃがしゃと音を響かせ、ＩＳを纏ってわざわざ歩いてくるその女性は、三日月形に口を歪め、愉悦の笑みを漏らす。

「アンタは……！」
「亡国機業実働部隊所属、オータム。ＩＳコアはないはずだから、擬似コアを使ったんでしょうね」
「正解だよ、クソババァ。とっととテメェらをミンチにさせてもらうぜ」

啖呵を切ったオータムが身に纏っているのは、アラクネと全く同

じものだった。
　擬似ＩＳコアにオリジナルの『アラクネ』のデータを読み込ませて作り出したそれの性能は、オリジナルと遜色ないものである。
　その『アラクネ』を身に纏い、オータムは臨戦態勢に入る。

「死ねやコルァァァァァ！」
「簪、前っ！」
「わかって、るっ！」

　直後、簪の初期状態に戻った《朱鉄》とオータムの両手に握られたカタールがぶつかり合い、耳を劈く金属音が鳴り響く。
　その音が連続して響き渡り、簪はあっという間に防勢に押し込まれてしまっていた。

「退きなさいよっ！」
「はぁぁっ！」
「はっ、当たるかヨォ！」

　鈴の衝撃砲を、背部に設置された八本のメカアームの先端に取り付けられたエネルギー射撃兵装のうち、二本で迎撃し、ナターシャの弾幕をあろうことか六本のメカアームの先端を繋げて盾とすることで防いだオータムは、苛烈なまでの連撃を更に押し通そうとする。
　《朱鉄》を盾としてその猛攻を受け止めている簪の額に、一筋の汗が流れた。

「死ね！　死ね！　死ね！　死ね！　死ね死ね死ね死ね死ね死ねェ！　死んじまえよォ、クソガキがァァァァ！」
「ぐぅ、ぅぅ……！」

　笑い声と共に刃を振るい、二人の攻撃を完璧にいなしていくオー

タムと対称的に、簪の眉間には多くの皺が刻まれていく。
圧倒的に不利かと思われたその刹那、その声が響き渡った。

「死ね死ねうるせぇな、スマートにできねぇのかテメェは」

ガチリと音が響き、オータムは宙高く吹き飛ばされる。
その真後ろにいたのは、自身の第三世代型ＩＳ『ヘル・ハウンドｖｅｒ２．５』を装着し、ボウガン型の射撃兵装を片手に構えたダリルだった。
ダリルは気だるそうにボウガン型遠距離兵装《Ａ＆Ａ（アポロン・アルテミス クローズ）》を収納すると、大剣型近距離兵装、《アレス》を呼び出した（コール）。

「餓鬼が、ふざけんなよ、調子に乗ってんじゃねぇぞォォォ！」
「危ない、先輩！」

鈴が叫ぶのとオータムが肉薄するのは同時だった。
振り抜かれた二本のカタールと八本のメカアームが静止し、オータムの口が歪む。

「は、粋がるからこういう目に――」
「なんだって？　私は耳が悪いんだ、もうちょっとはっきり喋れよ」

そしてその歪みは驚愕によって更に歪に歪められた。
瞬く間すらなく全ての攻撃を回避して見せたダリルは、その一瞬で片方のカタールを斬りおとしていた。
カラン、と音を立ててこれ見よがしに地面へカタールの刃を落としたダリルは、今だだるそうに手にした刃を振るうと、肩に乗せて踵を鳴らす。

「テ、メェ……！　この、クソガキがァァァァ！」

「今度はうるせェよ、クソが」

またもや一瞬で接近したダリルが、そのままの速度で足の裏で蹴りを入れる。やくざキックやなんだと言われる蹴り方でオータムを吹き飛ばすと、そこへすかさず鈴、ナターシャが引き金を引き、簪が刃を振るった。

その直後、衝撃砲とエネルギーカノンの弾頭、そして青いエネルギー刃がオータムへと殺到し、恐ろしいまでの爆発を引き起こす。

通路が、びりびりと揺れた。

「……さすがにこれだけやれば終わったでしょ」

「多分……」

「三年生、なかなか強いじゃない」

「まあ、それなりに」

ちょっと会話しただけでまたもや微妙な空気になったそこへ、獣のうなり声のようなものが響く。

声の主は、オータムのすぐ横に立っていた。四つ足で。

「……ちょっと、まさか――！」

脳内で連想されたことを肯定するように、黒い四つ足のＩＳは牙を剥いて嗤った。

「おい、マジかよ」

「Ｒ－１８指定」

「グロそうね」

口々に言うも、ナターシャですら引き気味になっている。

その中で、獣は一つ吠えた後、オータムの腕を喰らった。

ガキャ、ぶつり。音が響く。

「ぐぁっ……、ぁぁがっ、ぐぅぅぁぁあああ！　ぐ、く、そっ、何しやがるクソがッ！」

オータムが吠えるが、まるで意に介さずに獣はその口を蠢かせる。ごくり、とそれを腹へ溜め込んだあとで、獣はその気味の悪い大口を開けてオータムへと迫った。

「は――？　おい、まて、なんのじょうだ――」

今度こそ、オータムが食われる。まるで最初から其処にいなかったようにほぼ丸ごと口の中に収められたオータムの悲鳴が、何度か獣が咀嚼の度に口を開くごとに辺りへ響いた。

その様子を見て、鈴は思わず胃の中のものを吐き出してしまった。前回戦ったときには捕食対象が機械だったからまだ耐えられたものの、今度のはさすがに耐え切れない。

そんな鈴を横目に、咀嚼を終えた獣は静かに鈴たちの方を向いて後ろの二本で立ち上がる。

その直後、獣の全身をぼこぼこと波打って、様々な器官が突き出してきた。

「おぇ……！？」

『キ、ギギ、ガ、キシ、ガ、ギヒ、グヒヒャ、ガジ、ギヒャ』

「何……！？　なんなのアイツ……！？」

「薄気味悪ぃ奴だな、こりゃ」

武装のようなものが全身のところどころに出現する中、それは徐々に人型のＩＳとして完成されていく。

そして最後に残ったのは、人に似た仮面のような顔だった。

「顔が……できてる……」
「おはようございます、下等種族の皆様」
「喋った！？」

にたぁ、と嗤ったそれは、中性的な声でもってそんなことを言い出す。
それが、四人にはたまらなく気味悪いものに感じられた。

「本来ならば私本来の仕事に入るところですが、せっかく血肉となってくれた下等種族の願いくらいは叶えてあげましょう」

そう言うと、左腕を巨大な砲塔に、右腕を巨大なブレードに変え、背部から一六本のメカアームを出現させる。
それは、まるで虫が変態するときのようだった。

「眼前の敵の抹殺を開始します」
「っ、全員散開！　くるわよ！」

ナターシャが咄嗟に指示を出すと同時、四人を一六本のエネルギー弾が襲う。
捻じ曲がって追ってくるそれを迎撃する四人を眺めながら、そのＩＳは嗤った。

「逃げ切れませんよ、ギシ、ゲヒヒャヒャ！」

第８５話　さらにさらに戦う者たち（後書き）

もうＩＳって括りにしちゃいけないかもしれない、この作品。
とうとう人を食って進化した無人機を相手に、四人はどう戦うのか！
次回をお楽しみに！

第８６話　関わり（前書き）

ちょっとややこしい話なのでかなり短めになりました。

前回は話を読んだ方に不快な思いを抱かせてしまって申し訳ありませんでした。

次回からはこうした描写が出ることを前書きで注意していきたいと思います。

第８６話　関わり

「我流、千一閃！」

文字通りの千の刃がキティの体に傷跡を刻み付けて行く。
凄まじい猛攻によってその体から徐々に力が抜けて行くのを見て、箒は最後の一撃を叩き込まんと刃を振り上げる。
その刃が煌くと同時、キティが嗤った。

「甘すぎますわ、貴女たちって」
「っ！？　ガハァッ！？」

長く伸びた双手の爪、《ウルフズ》によって両腕を刺し貫かれた箒が、蹴り飛ばされて壁面へ減り込む。

「箒！？　くっ、《ブルー・ティアーズ》！」
「《シュヴァルツ・ドラート》ッ！」

血反吐を吐いて目を見開いた箒を見て激昂したセシリアとラウラが、それぞれの武装を一斉に飛ばす。しかし、それを全て双爪で弾き飛ばすと、一瞬でセシリアの目の前へと接近、瞬く間にセシリアの装甲に傷をつけていった。

「くうぅ……！」
「セシリア！　貴様ぁ！」
「遅いですわよ、ウサギさん」

《尾》の一撃がラウラの視認速度よりも速く迫り、ラウラの小さな体躯がくの字に折り曲げられ吹き飛ばされる。

たった数秒で、攻勢に出ていた香織達四人のうち二人が倒され、残る二人のうちの一人も猛攻に晒されていた。

まさしく圧倒的。その言葉そのもののように攻撃を続けるキティが、突然笑いを止める。

それと全く同じ瞬間に、香織を耐え難い頭痛と吐き気が襲った。

「……この感じ、ああ、なるほど。生まれたのですね、一人目が」

「ぐぁ……！　げほっ、おぇっ……！　な、に、これ……っ！」

頭の中をかき回されるような激痛と、喉の奥に手を入れられたような猛烈な吐き気を堪えようと必死になるが、そのせいで涙が溢れてくる。

目を見開いて何とか呼吸しようと口を開くが、ただえづくことしか出来なかった。

「香織！？　大丈夫ですの！？」

「お兄様！　邪魔です、わっ！」

「きゃあっ！」

異変をきたした香織に、セシリアを吹き飛ばしたキティが慌てて近寄ってきた。

その様子はまるで本当に兄を心配する妹のようで、先ほどまでの恐ろしさは微塵も感じられない。

そのことに、呻きながらも意識を保っていたセシリアは少なからず驚いていた。

「お兄様、気をしっかり持ってくださいませ！　お兄様！」

相当負荷が高いのか、香織はとうとうその場に蹲って呻く。その香織の肩を、キティは優しく抱きかかえるとそっと地面に座らせて

声をかけ続ける。
その様子を、意識の戻った箒とラウラ、そしてセシリアの三人は唖然とした様子で見つめていたが、やっと意識の戻ってきたラウラは急いで香織の傍に駆け寄った。

「香織、しっかりしろ！　くそっ、どうなってるんだ！　お前は何か知らないのか！？」
「おそらく、先ほどの進化情報がお兄様の脳内に流れ込んでいるのです。ついさっき、無人機のうちの一機が人間を食らって進化いたしましたわ」
「なっ！？　いや、今はいい、それよりも香織は！？」
「情報を整理できれば……！　こうなったら、私が直接お兄様とシンクロして情報整理を行いますわ。一時休戦しますわよ」

キティは愛する兄のために、そしてラウラは守ると誓った彼のため、二人は互いにその言葉を信じて頷く。
元より、キティは香織を必要以上に傷つける気はない。キティの存在理由そのものといってもいい香織を守るためならば、キティはどんなこともしてみせるだろう。
そして、ラウラはそのキティのことを、同じ者を愛する人として信じることにした。

「ラウラ、いいのか？」
「今はいがみ合っている場合ではない。キティ、それをやれば必ず助かるんだな？」
「助かるのではありませんわ、助けるのです。私に不可能はありませんわ」

箒に素早く切り返すと、ラウラの問いにキティが力強く頷いて答えた。

そっとキティが呻く香織の額に手を翳すと、ゆっくりと目を閉じる。

「潜行、開始――！」

直後、キティの意識は香織の中へと潜っていった。

「……ここが、お兄様の中ですか」

気が付くと、私は空の上に浮かんでいました。

ここがお兄様の中、なんだか暖かな場所ですわね。

と、そんなことを考えている場合ではありませんわ。早くお兄様に目覚めていただかなければ。

私はお兄様の後に生み出された、数少ないバイオノイドの生き残り。創造主たる巌隆（いわたか）の元を逃げ出してＩＳを強奪し、こうしてしがない秘密結社に身を寄せていましたが……。

ようやくここまで来たのです、せっかくですから少しお兄様の思い出も覗いていきましょうか。

「まずは脳内区画に入らないといけませんわね」

呟いてから、思考をパラメータ化した仮想ディスプレイを起動させる。

私は精神調整に重点をおかれて開発されましたから、このくらいの精神活動はお茶の子さいさいですの。それにしても……。

「どうしてこんなに不安定なのでしょうか、お兄様の記憶保存回路は」

そう、お兄様の記憶を保存する道筋、つまり末端から情報を拾って脳の最深部まで届けるその道がずたずたになっているのです。新しい記憶はきちんと保存されているようですが……、これは一体。

少しばかり探ってみる必要がありそうですわね。

空を飛ぶように中を進んで行くと、突然そこに現れた鉄の箱。それに触れると、それが解体されていくようにカタカタと片付いて行く。

そうして其処に残ったのは、小さなメモリーチップ。手のひらで握りつぶせてしまうほどの大きさのそれを手に取ると、途端に私の中にお兄様の記憶が流れ込んできた。

「これはっ……！」

お兄様の消されていた記憶、それがそこに封じ込められていた。流れ込んできたそれを読み取りながら思案する。このタイプの記憶改竄装置は巌隆が使っていたこともある。とすると、これを使ったのは……。

「お姉様……。お兄様を戦いの道に招かぬように、ずっとお一人で……」

一之瀬葵、出自から言えば私と血のつながりはないが、それでもお兄様の姉なのだからお姉様だ。

お姉様はお兄様を戦いに巻き込まないように記憶を改竄していた。

それの副作用で記憶保存回路まで損傷を受けていたらしい。

「解いてしもうたか、写し身の娘」

「……貴女は、梟ですのね」

突然声がした方を向くと、其処には黒く艶やかな髪を伸ばした女性が立っていた。

お兄様の専用ＩＳ『梟』、そのＩＳコア人格もあの情報を受けて行動を開始しているらしい。

「然様。あの偽者がおぞましき姿に変わったことは、香織に送られてきた情報から読み取った。主は香織をあの戦場へ行かせる気か？」

「いいえ、そんなことはいたしませんわ。けれど、もしお兄様が自らの意志で決めたのでしたら、私は……」

「……ふむ。わかった、主の言葉を信用しよう。だが、今日のところは矛を引いて欲しい。お主とて弱った相手と戦って勝っても、嬉しくもなんともなかろう？」

頷いた梟が、かつんとかかとを鳴らす。そこに、小さな光で照らされた道が出来る。

それを指し示しながら、梟はちいさく頷く。

「この先に送られてきた情報がある。主を頼むぞ」

何かを語ることもなく、梟はすぅ、と消えて行く。

それを見送りながら、私は小さく息を吐き出した。

「親父殿、こいつ使うのかよ？」

モニターの並ぶ部屋の中で、グリムの声が響く。

指し示しているのは、モニターの群れのうちの一つに映る黒いＩＳもどき。

オータムを食らって強化されたそれは、もはやＩＳという名を使って示してはいけないほどにおぞましい存在へと変わっていた。

「必要なことだ」

「ふーん……。まあいいけどよ」

甲高い笑い声を漏らしながら、グリムは静かに笑みを浮かべた。

ただ、嗤っていた。

第８６話　関わり（後書き）

キティの正体がようやく普通にばれた今回。
せっかくの戦闘が台無しになった原因の情報がなぜ香織に流れ込んできたのか。
次回もお楽しみに。

第87話　起死回生

撃ち、避け、撃ち、防ぎ、撃ち、避け、撃ち、撃ち、撃ち、そして防ぐ。

それが、私たちの目の前で無重力にすら縛られることなく動き続ける無人機（あれを無人機と呼んでいいならばだが）の行動の一部始終だった。

「どうしましたか、逃げてばかりですよ？」

「うるっさいわね！　とっとと墜ちなさいよ！」

二年の鈴が全開で衝撃砲を撃ち放つも、それはあっさりと装甲に受け止められ、大したダメージも入れられていないようだった。まったく、大した装甲だ。あいつは確か、元は中国の候補生だったはず、その機体となればそれなりの威力だろうに。

っと、自己紹介がまだだったか。私はダリル・ケイシー、ギリシャの代表候補生だ。

まあ、それはいい。今は目の前のことに集中しよう。

「装甲に自信があるらしいな？」

「すくなくとも、貴女方程度ではこの装甲は貫けませんよ。グギヒャヒャ！」

「不愉快な笑い方だ。《Ａ＆Ａ（アポロン・アルテミス）》……！」

《Ａ＆Ａ》、正式名称《Ａｐｏｌｌｏｎ&ａｍｐ;Ａｒｔｅｍｉｓ》はギリシャ神話の双子神『アポロン』と『アルテミス』から名をとった、ボウガン型の中・遠距離用兵装だ。

一点集中型の『シフト・アポロン』と拡散型の『シフト・アルテミス』の二種類が存在しているが、こいつにアルテミスをぶつけて

も弾かれるだけだろう。
思考操作でシフトチェンジすると、『シフト・アポロン』で照準を合わせ、引き金を引く。
エネルギー兵装であるこいつのエネルギーはＢＴではなく、それ以前に使われていた射撃用エネルギーだ。曲げたりは出来ないが、補給用のエネルギーパックも開発されているため持久力は高い。

「そんな武装では壊せません。壊せないのが私なのですよ！　ギヒハハハハ！」
「うるさい……、壊れろ……ッ！」

平手で《Ａ＆Ａ》の弾丸を全て握り潰して高笑いする無人機へ向けて、今度は簪とやらがバカみたいに分厚く、更に熱まで放つ《朱鉄》とかいう武装を振り下ろす。
あの武装、ぱっと見た感じエネルギーを消費しているように見えない。ＢＴでもないし、今まであんな武器は見たこともない。それに、さっき一度サーモグラフィーで確認したら、あの大剣の周辺は温度が上がったり下がったりしていた。反対に、あの刀身は周囲が下がれば温度が上がり、上がれば下がっている。
……まさか、な。そんな馬鹿なことがあって堪るか。

「ギヒィーハハハハハハ！　効かない効かない、無駄ですよ！」
「腹立つわねぇー……！」

二学期から学校へやってきた元軍人でもある、ナターシャ先生がイライラしながらそう漏らした。
だが、その言葉には全く持って同意したいところだ。あの異常なまでに堅い装甲、そして私たちのうちの誰よりも高い機動力。そしてなによりもイライラさせられるのは、あの人をおちょくったようなエセ敬語だ。願わくば、あの頭を吹き飛ばしてやりたいが、今の

装備では無理だ。

私のＩＳ『ヘル・ハウンドｖｅｒ２．５』に収められている武装は全部で三つ。《Ａ＆Ａ》と《アレス》、そして脚部装甲と同化している《ヘルメス》。

《アレス》は近接用の大型ブレードで、相手にもよるが大概の装甲を叩き割れる威力の物理ダメージを弾き出せる。

もっとも、『シフト・アポロン』に耐えるような相手ではとても有効とはいえないが。

そして《ヘルメス》は、加速用の補助スラスター内蔵型脚部武装。要するに加速装置という奴だ。地面を蹴って瞬時加速（イグニッション・ブースト）よりも強い加速を叩きだせる。もちろんそれは数秒だけだが、有用な装備ではある。

さて、ざっと見たがこれであの装甲を叩き割ることは無理だろう。かといって装甲の隙間に攻撃を入れるのも無理、そもそも当てることと自体が至難の業だ。

「どうするか……」

「手詰まりですか？　ギヒハハ、では――」

嗤っていた無人機の腕が、うぞうぞと動く。

気味の悪さに思わず顔を顰めたが、次の瞬間にはその腕から血の色をしたオイルらしき液体を流しながら、巨大な砲塔を出現させた。

「吹き飛ばして、血肉をバラけさせてあげマしょウ！　ギヒハハハハァー！　イッツ、ショウタァーインムッ！」

「やばいな」

「やばいわね」

「激ヤバ……？」

「喋ってないで下がる！」

ナターシャ先生の声で全員が後方へスラスターを吹かす。と、目の前で気味の悪い巨大な砲塔をこちらへ向けた無人機が馬鹿でかい笑い声を上げながらエネルギーの充填を開始した。

頭の中でガンガンと警報が鳴り響く。ＩＳが相手のエネルギーチャージを感知して鳴らしているんだろうが、わかり切っていることを言われるとさすがにいらだつな。

下がりながら『サイド・アポロン』を撃ちだしたが、チャージ中のエネルギーで掻き消された。まずいな、アレを撃たれればここは消し炭だ。

「なにか止める方法はないの！？」

「ない！　とっとと下がるわよ！」

「断言しなくても……」

「お前ら余裕だな……。くるぞっ！」

ほんの十数秒の間にチャージは殆ど完了していた。

トリガーを引かれる前に叩き潰す必要があるが、ここからでは……！

「グッバイガールズ！　来世ではせめて苦しまないよう、ミジンコなどに生まれてみることをお勧めしましょう！　ギヒャーハハハハァ！　ブラストカノン、トリガー！」

「くそっ……！」

「こんなとこで終わりなんて、冗談じゃないわよ……！」

鈴と共に悪態をつきながらも、奴の攻撃を防ぐことは出来そうになかった。

迫りくるエネルギー光を前に、私たちはもうだめかと目を閉じ――、

「またこういうタイミングか。まあ、嫌いではないがな」
刃が何かを断ち切る鋭い音で、その目を開くことになった。

「さて」
私のために束が作り直した、新たな刃を片手に携えて、私はようやく其処へやってきていた。
それにしても、なんとも悪趣味な代物だな。もはや無人機とも呼べまい。

「千冬、さん……！？」
「来てくれたのね……！　全く、いくらヒーローだからって寝坊しすぎよ」
「だが、いいタイミングだったろう」
凰（ふぁん）とナターシャの言葉に、皮肉気に唇を吊り上げながらそう答える。
と、目の前で無人機……いや、デビルとでも呼称しておくか。わかりやすい名だろう。デビルが音声を響かせる。

「織斑千冬、機体情報無し。なるほど、貴女が共鳴者ですね？」
「なんのことだかさっぱりだが……、貴様は斬っていい相手だろう。

とっとと終わらせよう」

新たな刃、《雪片零型（ゆきひられいがた）》を構え、精神を集中させる。

束の手によって作り直された私の新たなＩＳが私の体に良く馴染んでいることもあるのか、相手の動きは手によるようにわかった。

「では――、斬り殺しましょう！」

直後、両手の武器を刃へと変えてデビルが突っ込んでくる。

両手の猛攻を片腕の刃で受けきりながら、私は静かにその動きを観察していた。

「動き自体は本物だが……、破壊に囚われただけの存在か」

確かに、生半可な相手ではない。が、常軌を逸してはいても常識から逸脱しきっているわけではない。なら十分対処できる。

少なくとも、今の私と、私の専用ＩＳ『散桜（ちりざくら）』ならば。

「凄い、あの猛攻を軽々と……」

「やっぱり強いわね、千冬……」

更識妹とナターシャが何か言っているが、まあいい。

この『散桜』は私に不要な機能を極力排し、徹底的に私が刃を振るうためだけの機体に調整してある。故に、ＩＳの特徴である視界の広さなどもなくなっているが、それでいいのだ。

カチリ、カチリと頭の中に響く音。不思議と、私はそれが何なのかがわかる。たしか、以前グリム達三人が襲撃した際に『打鉄』に乗った際にもほんの僅かに聞こえた気がする音だった。

それは、共鳴の波長。私とＩＳコアの共鳴の音。

その歯車が噛み合ったとき、私はようやくこいつを使いこなせる

ようになる。
ならば、その調整のためにこいつには踊ってもらうとしよう。

「さあ、ゆくぞ《雪片零型》。奴を切り伏せる」
「面白い、いいですよ貴様！　返り討ちでサンプルにしてあげましょう！　ギヒヒャヒャハハハハーハハァー！」

不愉快な笑い声が響く中、私とデビルが激突する。
切り伏せる、この力で。

第８７話　起死回生（後書き）

千冬さん、新ＩＳと共に前線復帰。そして新たな力の覚醒も間近に。
新たなＩＳのワンオフをお楽しみに！

第８８話　超常の戦い

二度、三度と斬りあう中で、『散桜』と私はゆっくりと重なって行っていた。

デビルの刃は大して速く感じない。速いはずなのだが、こちらの知覚の速度自体が増しているような感覚だった。

「死ぬがいい、旧世代！」

「黙って斬られることもできないのか、ポンコツめ」

罵倒とも取れるような言葉を一息で斬り捨てながら、私は更に《雪片零型（ゆきひられいがた）》を振るい装甲を刻んでいく。

まるで熱されたナイフでバターを切るようにあっさりと切り裂かれて行く装甲を足で蹴飛ばしながら、剣道の型に嵌っているようで嵌っていない、半ば本能に従った刃を振りぬいていくうちに、私の視界が徐々に二重に見えてくる。

――これは……。

最初に『白騎士』に乗ったときに、私は不思議な感覚を感じたことを覚えている。

それと同じものが、たった今私の体の中から沸き起こってきている。とても奇妙だが、嫌な感じではなかった。

――貴女が、わたしのご主人様？

――お前は？

――私は散桜。貴女の名前は？

散桜、私のＩＳの名。ということは、この声の主はＩＳコアなの

か。
　ＩＳコアには人格のようなものがある、という話は有名だが……。なるほどな、こういうことになっているのか。
　しかし、なんというか。戦っているのに戦っている実感が湧かないというのも不思議なものだ。
――私は織斑千冬。知っているか？
――うん、知ってる！　お母さんも皆も言ってる人だ！
　お母さん、というのはおそらく束のことだろう。アイツが母親とは、なんとも不思議なものだ。
　そして皆……、他のＩＳコアのことだろうか。
――それなら、私もちゃんと使ってくれる？
――ああ。そのために私がここにいる。
――そっか！　それじゃあ、一緒に戦おう！　よろしくね、ご主人様！
　そう聞こえた直後、二重にダブっていた視界が唐突にクリアになる。
　脳内のあらゆるデータが統合され、私に最適化されたものへと変化して行くのが自分でも解った。
　そのデータによれば、自身のＩＳと共鳴し合い、能力を相乗的に高める力。それが、私のものなのだという。
　だが、まあいい。なぜそんなデータがあるのかも、データ自身の信頼性もどうだっていい。
　唯一つ、奴を切り伏せるだけの力があれば、それでいいのだ。使い道は私が決める。
「……気配が変わりましたね？　まあ、斬ることに変わりはないの

ですが」
「斬れるか、私が」
すっと目を細め、刃に手をかける。
もはや、こいつを斬ることに何かを感じることすらない。そういう風に出来上がったのだから。
「グギガ、ギヒャハハハハ！　斬れますとも、柔らかな肉を切断することに大仰なナイフなど必要ありませんがねぇ！」
「……愚かな。武装特性、単一技能同時発動。《剣舞（ツルギノマイ）》！」
口にするかしないかといったところで、手にしていた《雪片零型》の刃が細分化されていく。
それは一つ一つがエネルギーを刀身とした刃の核となっていき、私の周囲へと配置されていった。
一夏の《零落白夜》の反シールドエネルギーを刀身に仕立て、それを五〇の小さな刃へと変える。それが私の単一技能（ワンオフ・アビリティ）の力だった。
根元すら残らなくなった《雪片零型》は、その刀身が全て反シールドエネルギーで形成され、細く鋭い刀の形へと変貌する。
「さて、散るがいい」
刹那、踏み込みに殆どのエネルギーを注ぎ込んだ私は、五〇の剣軍を引き連れてデビルへと刃を叩き込む。
一撃目、肩。二撃目、胸。三撃目、腕。四撃目、足。
そこから数えて合計五一の刃を突き立てられたデビルは、こちらへとそののっぺりとした口しかない頭部を向けてくる。
「ギ、きさ、まァァァ……！」
「まだ動けるのか、頑丈な奴め」

恨み言を言おうとしたその頭部を、《雪片零型》で真っ二つにぶった切ってやる。
その衝撃でコア部分が崩壊したらしく、デビルの体は一瞬で溶け黒い液体へと変わった。

「か、勝っちゃった……」
「っていうか、そのＩＳは……？」
「束に依頼したものだ。誰にも言うなよ、四人とも」

ナターシャと凰の言葉にそう返すと、二人は猛烈な勢いで首を縦に振っていた。隣にいた二人も、ゆっくりだが焦ったように。
さて、まあ。終わったようだな。
そう思っていたとき、どこかからとんでもない爆音が鳴り響いた。

「なにが……っ！？」
「全員付いて来い、すぐに脱出するぞ！」

私の声に首をかしげているが、説明している時間はない。
この爆発は、十中八九アイツのせいだからな。

「ぐうぅっ！」

刀身が爆ぜ、勢い良く吹き飛ばされる体。
その髪は金色に輝き、その目には無心で力を振るう女性の姿があった。

「どうした、そんなものか」
「まだ、まだ……っ！」
「……そうか」

何とか立ち上がってその女性、葵と対峙したスコールの目に、淀みは欠片もなかった。
彼女と相対するときに必要なのは、壮絶なまでの覚悟である。
それを持つことはすなわち、命の取り合いを是とする者であることを証明することに他ならない。
であるならば、己の心を曇らせるものは全て思考から排除することなど、スコールのような『高み』に魅入られた存在にとっては容易なものだった。
それこそ、脳内を書き換えるナノマシンを自力で駆除できてしまうほどに。

「はあぁぁぁぁ！」
「踏み込みが足りん！」

腕部だけを具現化し、一振りのブレードでもって斬りこんで来たその一撃を、葵は同じく呼び出した《ブレード》でもって打ち返す。
痺れなど、感覚などとうに忘れた。あるのはただ、打倒の気迫、それだけだった。

「おおおおおっ！」
「甘いっ！」

喉を狙った突きからなだれ込む様に胸への袈裟切りへと形を変えたそれを、葵は横笛のように口にくわえた《ナイフ》の切っ先で受け止め、そのままの体勢から独楽（こま）が歪に回るように、呼び出し（コール）した《アックス》の刃を下方から競り上げる。

「まだ、だっ！」

ガギャン、と音高く跳ね上げられた斧を、あろうことか右腕の装甲に食い込ませることで文字通り食い止めたスコールが、激痛に苛まれている右腕の手中へとマシンガンを呼び出す。

咄嗟の行為だったが、その目的は確かに達せられた。

葵の心臓と銃口が直線で結ばれた刹那、スコールは手中のそれを握り潰すかのごとく握り締める。金属の歪む音と共に引き絞られた引き金が、その銃口へと弾丸を送り出す。

乱雑な火薬の爆ぜる音。それに混じってスコールが確かにその耳で聞き取ったのは、『金属同士のぶつかり合う音』だった。

「――甘いと、言ったぞ」

「く……っ！」

互いにそれはわかりきっていたこと。

銃口より大気を疾駆せんと飛び出した全ての弾丸を、葵は瞬時に展開（オープン）した『ナックル』によって弾き落としていた。

麻痺していたせいで感じなかったのだ、巨大な斧の柄には、誰の手も添えられていないことに。

そしてその手にはナックルが展開され、弾丸を阻んでいる。次の瞬間には、両者の位置関係は逆転していた。

「まだ、まだぁぁぁぁぁぁ！！」

上から押される位置に動いても、いまだスコールの意気は途絶えない。むしろ、追い込まれれば追い込まれるほどに、その眼に灯る輝きは強く増していっているようにすら見えた。

片手ではブレード同士の競り合いを、もう片方の手ではナイフと拳での斬りあい、殴り合いを。時折役目を逆に変えながら、二人はひたすら戦っていた。

（ああ、貴女とこうしていられる日が来るなんて――）

戦いの最中、スコールは想起する。彼女が葵と出会った日のこと、そして決別した日のことを。

昔、スコールはとある任務の都合上、葵の中学に教師として赴任していた。

その頃の葵はただひたすらに自らを鍛えていた少女だったが、既にその強さはスコールを超えていた。

そんな彼女とたった一度だけ言葉を交わしたスコールは、すでにそのとき彼女に想いを囚われていたのだろう。気づけば戦いを挑み、そして敗北した。

それから、彼女とスコールはたまに話をしては戦い、そしてスコールがぼろ負けするという不思議な関係になっていた。

一月も経った頃だろうか、任務の終了したスコールは、迷わず葵を勧誘した。だが、彼女はその誘いに乗らなかった。

そのとき、スコールは悟った。彼女と自分の歩む道は、寄り添ってはいても交わることはないのだと。分岐点はなく、交差点もない、平行した一本の道。

だからこそスコールは彼女の人柄、そして強さに惹かれたのだ。

その思いが果たされることがないと知ったから。

決して手に入ることのないものを、追い求めたくなってしまったから。

「だから、私は――ッ！」
「おおおおおおおおおおっ！」

愚かだと笑いたければ笑うがいい。
そう言うかのごとく、スコールはその胸に吸い込まれるように突き立てられる刃を、おかしそうに見つめ、受け入れていた。
背中からまっすぐに血のりのべっとりとついた刃を生やし、スコールは力なく葵にその身を預ける。当たり所が悪かったのか、視界がかすんでいた。
温かさだけを頼りに体を預け、スコールは必死に待機状態に戻った、ネックレス状態のＩＳを葵の手に握らせる。その手にも、既に武器は握られていなかった。

「――どうして」
「ん……？」
「どうして、さっき避けなかった。避けられたはずだ、貴様なら」

託したように手に握らせた自らの手を、葵は放さなかった。
そのことに少しばかりの喜びを覚えながら、スコールは言葉を紡ごうと口を開く。
彼女の生の中に、己が存在したことの証明のために。

「――だって、愛して、しまったんだ、もの……」

既に視界が効かなくなってきたスコールは、抱きつくように葵に手を回しながらそう言った。
それから、その温もりに安堵を感じ。
最後に彼女は、微笑んで逝った。

愛に縛られ。

高みに魅入られ。
何も手に入れられず。
そうしてようやく、季節外れの土砂降りは――――、

――終わりを迎えた。

第８８話　超常の戦い（後書き）

無人機、スコール撃破。ちなみに葵は操縦区画に直接突っ込んでおります。
次回は日本代表と他の仲間たち。

第89話　退避

「っ、はぁ……はぁ……」

香織の脳内に侵入してから現実世界で数分が経った頃、キティはその額にうっすらと汗をかきながらも意識を取り戻した。

荒い息を吐きながら床に膝をついたキティは、心配そうに香織とキティを見つめるラウラへと視線を向ける。

「とりあえず、脳内の情報処理回路の強化は済ませましたわ……。害はありませんが、目覚めるのに時間を必要とするかもしれませんわ」

「だが、もう苦しむことはないんだな？」

「ええ。ただ……、回路の修復と強化のために、封印された記憶も開放してしまいましたが……」

そういって俯くキティに、ラウラはそっと手をかける。

今の状況で戦うことは、誰にも出来そうになかった。

「香織がそんなことで変わるものか。大丈夫だ」

「……そう、ですわね。私としたことが、しおらしくなってしまいましたわ」

「それで、これからどうする？」

キティが脳内に侵入している間に体力を回復させた箒が、セシリアに肩を貸して近寄ってくる。

ところどころから血を流してはいるが、命に別状はない。

「この先のコアを破壊しなければいけませんわ。キティさん、何か

知っていませんか？」
「どうして私に？」
「それほど体力を消耗している状態で、三対一で戦うわけでもないだろう？　少なくとも私は遠慮させてもらうぞ」
軽く肩を竦めて言った箒に、キティは苦笑しながらも仕方無しと言う風に頷いた。
と、そこで突然箒の通信回線が開く。そこに映し出されたのは、千冬の顔だった。
『全員無事か？』
「織斑先生？　ええ、少し事情が込み入ってますが無事です。それより、そっちは――」
言葉を続けようとした瞬間、機体全体が大きく揺れ、爆音が鳴り響く。
さっきも同じような爆発があったが、そのときには周囲を警戒していたせいで深くは考えていなかった。
「これは、いったい！？」
『詳しい話は後だ！　全員急ぎ機体を離脱するぞ！　コアは一之瀬姉が破壊している！』
「承知しました！　皆、すぐに脱出だ！」
「ええ！　……いえ、お待ちになってください、箒！　あれを！」
『どうした、何がっ――』
セシリアの声に疑問を投げかけた千冬だったが、唐突にノイズが走ったせいで通信が切れる。
通信回線を妨害したのは、突然通路の奥から現れた黒い影。無数の無人機たち。

それを確認した箒は、即座に両手の剣を構えて迎え撃つ姿勢をとった。明らかに、相手はこちらを叩くつもりだろう。

「キティ、ラウラ、セシリア。香織を連れて退避しろ」

「箒、お前はどうする!?　まさか戦うつもりか!?」

「案ずるな、この『紅椿』はこの状況では一番戦闘に向いている」

言葉と共に《絢爛舞踏（けんらんぶとう）》を発動させ、シールドエネルギーを回復させる。

次の瞬間には、箒の視線は黒の群れへと注がれていた。

その様子を見て、言葉は無駄だと悟ったのか。ラウラとキティが香織を担ぎ、セシリアは周囲を警戒すべく《ブルー・ティアーズ》を空に舞わせる。

「洗礼だ、必ず生きて戻れよ」

その言葉で、三人のＩＳのシールドエネルギーが全て回復する。紅と黄金の混じった粒子が、シールドエネルギーを回復させていた。

「……私まで、なぜ？」

「香織が何者なのか、お前が何者なのか、そんなことはどうでもいい。お前は香織を助けた、なら一度助けられても文句を言うな」

滅茶苦茶な理屈だったが、箒はそれだけを言い残してそれきり口を噤む。かちりと、刃を返す音がした。

「……お前こそ、死ぬなよ」

「ふ、無論だ。さあ……、――行け！」

言葉を聞くか聞かないかのうちに、三人は香織を担いで走り抜け

て行く。
それをＩＳの視界で捉えた箒は、軽く二、三度床を踏みしめてから刃を煌かせる。
直後、黒い群れと一筋の紅が激突した。

煙を噴き上げて崩壊する通路。その瓦礫の山が、僅かに震える。
次の瞬間、中から巨大なメカアームが突き出され、穴を開けるようにがしゃがしゃとせわしなく動かした。
そうして出来た穴の中から何とか身を乗り出した少年、織斑一夏は、行き着く暇もなくもう片方の武装していない手を引き上げる。その装甲で覆われた手の先には、シャッロット・デュノアの手が握られていた。

「無事か、シャル？」
「うん、何とか……。それより、会長と先輩は！？」
「生きてるわよー、ぶいぶい」
「こっちも問題ないっス。にしても小型爆弾の威力じゃないっスよ、今の……」

瓦礫の上で集合した四人は、それぞれ互いが無事なことを確認してから廊下を見渡す。
とんでもない威力の爆発のせいで廊下は殆どが吹き飛び、大穴が開いている。ＩＳなら移動は問題ないにしろ、先ほどまで戦ってい

た相手は最早生死不明と判断するしかなかった。

「とにかく、先へ進まないと――」

「っと新手ッス！」

恋華がほぅ、と息を吐きながら話していた途中で、唐突にフォルテが《アイス・メイカー》の弾丸を撃ち放つ。

着弾地点にいた黒いＩＳ、無人機に弾丸が当たり、続け様に発砲された次の弾丸がそれを装甲の内部へと打ち込んで行く。

一瞬で破壊された無人機を踏み倒すようにして、その後ろからぞろぞろと次の相手が現れてくる。まるで、昆虫か何かのように。

「こりゃ、まずいわね……。アルカエストは使えるけど、もう剥がす人いないでしょ？」

「撤退するしかないッスね」

「まって、後ろからも来てる！　今のエネルギーじゃ……！」

「くそっ、ここで終わりなのかよ！？」

それぞれのシールドエネルギーは限界値の三分の一を大きく下回り、『白式』に至っては一桁に大きく迫っているほど。この状態で交戦したとしても、まともな戦果は到底期待できないだろう。

しかし、戦わなければ逃げることも出来ない。完全な詰みの状態だった。

少なくとも、盤をひっくり返されない限りは。

「《一・渦（ひとつめうず）》」

凛とした声。

響き渡ったそれと共に、後ろから迫ってきていた無人機の一団が

斬り捨てられる。横凪の一撃が、廊下の壁面に一文字の傷跡を刻み付ける。

「皆さん、無事ですか！」

刃を片手に辿り着いた早百合（さゆり）が声を上げる。

『打鉄』によく似た姿だったが、赤いラインが所々に入れられているのは専用機の証だろうか。訓練機のそれよりも攻撃的な流線型のフォルムも特徴的だった。

「早百合さん！」

「全員無事みたいですね。私が殿を務めます、撤退しましょう！」

「でも、まだコアが！」

「今は全員の命の方が優先です！　急いで！」

「仕方ないわ、全員行くわよ！」

早百合に同調した恋華の言葉で、全員が頷く。冷静にならずとも、今の状況で正面突破は不可能だとわかったのだろう。

恋華を先頭に、ダリル、一夏、シャル、そして殿に早百合を置いて一向は撤退を開始した。

後方から迫ってくる黒い群れを斬り伏せながら、時には飛んでくる熱線やレーザーを実体シールドで防いでいく。その最中、恋華の元に通信回線が開いた。

『全員無事か！？』

「千冬さん！　どうしたの！？」

『ついさっき、篠ノ之達の班と連絡がつかなくなった。私はこちらの班を外へ出した後、中心部分から再突入を仕掛ける。お前たちは外で凰たちと合流して学園へ戻れ。いいな』

「わかったわ。気をつけて」

『ああ』

やや焦った様子の千冬の顔が消え、今度は別の顔、榊原の顔が映し出された。

『織斑先生の通信は聞いた？』

「ええ、聞いたわよ」

『貴女たちも気をつけてね、まだ相手はたんまり残ってるみたいだから』

「りょーかい」

榊原の声に軽く返答すると、回線を閉じる。

とにかくここから早く出なければならない。その想いを新たに。

スコールとの戦いの後、コアの一つを破壊した葵はメインフレームにアクセスしていた。

少しでも情報を得るために、わざわざ破壊せずにいたそれの内容を見て、思わず葵は歯噛みする。

――大規模殲滅型ＩＳ『ファントム』のコアは三つ、全てを擬似コアで代用可能。

それはつまり、このふざけたデカブツがあらゆる戦争に誰でも利

用できてしまうということだった。
その事実を見つけた葵は、更に何か情報がないか探して行く。
すると、かなり奥の方に小さく隠された情報が残されていた。

「コアの、自爆？　これはまさか……！」

――コアの破壊、及びメインフレームへの不正アクセスが確認された場合、作成者の権限により当機は爆破されます。爆破の範囲は半径十数キロに及び、主要都市内で爆破させることで、その国の継戦機能を麻痺させることが出来ます。

その情報を表示させた数秒後に、画面全体に大きく赤い文字が映し出される。
それは、紛れもなく爆破へのカウントダウンだった。

――主幹コアの破壊、メインフレームへの不正アクセスを確認。全システムを破棄した上で自爆シークエンスに入ります。職員は至急退去してください。繰り返します――

「ちくしょう、ふざけやがるクソ親父が！　コンピュータ、爆破を停止させる手段は！」

――回答。存在しません。爆破まで、残り九分四八秒。

無常な答えに、思わず歯噛みする。
と、その爆破のカウントダウンの下に小さく表示されている文字があった。
それをみて、葵は思わず眩暈すら覚えてしまう。

――自爆に際し、標的の首都近辺まで移動します。尚、移動して

いる間もカウントダウンは進行します。

標的の首都、つまり東京。

日本の首都である東京の上空で、この巨大なＩＳが爆発すれば、日本は壊滅的どころではない被害を被ることになる。

「上等だ、とめてやるよクソ親父」

吐き捨てるように呟き、葵は通信回線を開いた。

――爆発まで、残り九分二七秒。

第８９話　退避（後書き）

巨大ＩＳは量産爆弾に出来たでござるの巻。
果たして単身残った箒はいかに。
そして日本はどうなるのか。乞うご期待！

第９０話　脱出路（前書き）

ちょっと短めです。

第９０話　脱出路

――爆破まで、残り八分二四秒。

黒い群れと戦っている最中、そんな放送が流れてくる。

自爆か、一体何があったのか。

少なくとも、早いところ活動をとめなければ危ないことだけは確かなようだ。

「はぁぁっ！」

一振りで数体を一斉になぎ倒しながら、更に奥へと進んで行く。

大分先まで進んできたおかげか、心なし敵の数も少なくなってきたように思える。

帰りの時間も考えれば、せいぜいあと二分が限界か、急がなければ。

シールドエネルギーは《絢爛舞踏（けんらんぶとう）》で回復させているから、あとは私の気力と体力次第ということだ。

「それにしても、まるでゴキブ……」

言いかけて口を閉ざした。いくら戦士と言えど、アレはダメだ。

あの黒くて楕円形の生命体、台所や風呂場、トイレなんかによく出没する。

……意識を切り替えよう。

ここから先はほぼ一本道だろう、連中の湧いてくる方向に進めば辿り着けるはずだ。

ただ問題もある。それは、連中の数が心持減ってきているとはいえ、それでも十分すぎるほどに多いということだ。全くうんざりす

る。

『箒、箒聞こえる！？』

「ああ、なんだ？　どうした鈴」

突然開いた通信回線の向こう側には、鈴の顔が映し出される。

どうやら随分と焦っているようだが。

『どうしたじゃないわ、急いで脱出して！　爆破予告は聞いたでしょ！？』

「コアを全て壊せば止まるだろう、動力源を失っても動き続ける機械などあって堪るか」

『そ、それはそうだけど！　危険よ！』

「元より承知の上さ。話はそれだけか？」

『ああもうっ！　わかったわよ、好きにしなさい！　けど、いい？　絶対に生きて戻ってくること、指一本でも落としてきたら私がぶっ飛ばすからね！』

怒鳴りながらも、そう言った鈴は溜め息をつきながらそう締めた。

ふむ、それではもう少しがんばらなければな。

「わかったわかった。そっちも、合流したら香織達を頼むぞ」

『任せといて。気をつけてね』

「ああ。そっちもな」

通信を切り、わざわざ待っていたらしい無人機たちへと視線を向ける。

すると、突然無人機たちがガチャガチャと震えだし、次々に分解されていく。

ああ、前言撤回だ。こいつらこのために待っていたのか。

「全く、お前たちは合体が趣味なのか？　まあどうでもいいがな」

言いながら手近な数体を一斉に切り伏せる。その間も、合体は止まらなかった。いい隙だ。

そう思いながら斬っていくと、十数体目で合体が終わっていた。

ふむ、私の背丈の数倍はあるようだが……。

――武器情報を更新、対象に最も有効的な武装を使用します。

音声が鳴り響き、奴の背から数十基ものビットが展開される。全てが射撃用のＢＴビットか、面倒な。

「まあいいさ。やれるならやってみろ、木偶の坊が」

刃を構え、まっすぐに相手を見つめる。

さて、やるか。

「くそっ、なんという数だ！」

「キティさん、香織を放してはいけませんわよ！」

「解っていますわ！　私がお兄様を放すとお思いですの！？」

「喋ってないで戦え！　くっ！」

プラズマブレードで一気に二体を切り裂きながら、熱線を《ＡＩＣ》で停止させて砲身を《シュヴァルツ・ドラート》で貫く。
その爆発でもう一体を破壊すると、私の背後にいた三体を《ブルー・ティアーズ》の閃光が貫いた。

「いい腕だな！」
「お褒めの言葉ありがとうございますわ！　キティさん、後ろです！」
「見えてますわよっ！」

軽口を叩きながらも、背部に取り付けられた特殊武装《尾》によって、キティの背後にいた二体が一斉に破壊される。
まったく、なんでこんなに敵がいるんだ？　行きの通路を遡っているだけのはずなのだが。

「キティ、なんでこんなに敵がいる？」
「擬似コアは既に量産体勢に入っているということですわ！　乗ったときにデータを見ましたが、五〇〇〇はいましたから！」
「ふざけてますわね……！　いくら絶対防御がないとはいえ……」

全くだ。ＩＳコアは五〇〇もないというのに。

「って、まて。量産だと！？　なら、まさか！」
「ええ……。戦争が起こりますわよ、確実に」

ああ、くそっ。
擬似ＩＳコアは厳密にはＩＳコアとは違うものだろうから、ＩＳを戦争に使用しないというアラスカ条例は無視できる。
真っ先に擬似コアを手に入れた国がどう動くか……。まあ、小さな国辺りならまだいいが、それなりに力がある国が手に入れてしま

ってはお終いだ。

「お二人とも、話は後で！　今は脱出が先決ですわ！　箒にどやされますわよ！」

「呼び捨てにしたのか？」

「ええ、いつまでもパートナーをさん付けというのもあれでしょう？」

「話は後でと言ったのは貴女でしょう、セシリア・オルコット！　お兄様を危険な目に遭わせたくて！？」

「ああ、わかったキティ！　そうカッカするな！　突破するぞ！」

「ちょっとした世間話でしょう！　甲高い声で叫ばないでくださらない！？」

「なんですって！？」

「セシリア、突っかかるんじゃない！　いいから先を急ぐぞ！　キティも反応するな！」

「「でも向こうが！」」

「黙って進めないのかお前たちは！？」

随分息が合ってるな。そういえば喋り方も良く似ているし。

この二人が一斉に喋ったら何を言っているかわからなくなりそうだな。

……いや、わかるか。声が違う。というかなんでこいつらはこんなに仲がいいんだ？　あ、いや、悪いのか？

「セシリア、前方を吹き飛ばす！　手伝え！　キティは香織を頼む！」

「わかりましたわ！」

「お任せくださいな！」

レールカノンに弾丸を装填し、次々に前方の黒い群れへと撃ち放

っていく。
《ブルー・ティアーズ》の光線と《スターライトｍｋ？》の武装特性、《星明かりの一撃（Star Light Strike）》の援護もあり、眼前で壁となっていた群れは殆ど一掃できた。
残りを《シュヴァルツ・ドラート》で破壊しながら先を急ぐ。
にしてもこいつら、仲が悪いな。

複数の仮想ディスプレイに巨大ＩＳの姿を映し出しながら、束は一人キーボードを叩いていた。

「一之瀬厳隆……、これを狼煙にするつもりか」

その目は『天才』篠ノ之束ではなく、『天災』《人類最低》としてのもの。
ディスプレイには覆いかぶさるにして情報が乱舞していた。
片手間でシミュレートした、都心を中心とした爆発のシミュレーション情報もその中に含まれている。
それによれば、爆心地は数十年は人が住めなくなる土地になるとされていた。

「東京がどうなろうと知ったことじゃあないけどね……。私の子供たちを巻き添えになんてさせないよ」
『データの収集が完了しました。次は何を？』

「みんなのＩＳの強化のためにデータを引き出して。あーちゃんが使えるＩＳの設計もしなきゃ」
『擬似コアを使用した巨大ＩＳはどうしますか？』
「必要ないよ、すぐ壊れるから」

その言葉にこめられているのは、友人たちへの無償の信頼。
だからこそ、束はこの事件が終わった後のことを考えていた。

「とかく、まずは戦力を増やさなきゃね……。けど、あんまりコアを増やしてもあれだし」
『お母様、彼らに助力を頼んでみては？』
「彼ら？　……ああ、あの子達か。ふふ、いいかもね」

そう言って笑った束は、ディスプレイをもう一つ呼び出して、どこかへと連絡を繋ぐ。
戦いが終わるまで、もう少し。

第９０話　脱出路（後書き）

セシリアとキティは似たもの同士、無意識にキャラ被りを意識しています。
そしてラウラに苦労人フラグが。
更に、束の連絡している者とは一体？
事件の終了にはあと少し掛かりそうです。

次回も乞うご期待。

第９１話　作戦終了（前書き）

切りのいいところで止めたので、ちょっと短め。

第９１話　作戦終了

「鈴、簪、ナターシャ！」
「先輩も、皆さんご無事のようで」
無数の黒いＩＳを破壊しながら、なんとか逃走路を突破した私たちを待っていたのは、丁度こちらへ飛んできていた鈴たちだった。
こちらをみて安堵のため息をついたような鈴たちだったが、キティが香織を担いでいるのを見て表情を硬くする。
「アンタ……！　なんでいるのよ！」
「色々話さなければいけないことはありますが、とりあえず今私が貴女方と戦うつもりはございませんわ……」
「な、なによアンタ……。急にしおらしくなっちゃって……」
「鈴、キティは香織が突然倒れた時に香織を助けたのだ。今のところは敵ではないから、そう睨むな」
「……わかったわ。けど、香織は私が担ぐから。ほら、こっちに」
「ええ、どうぞ」
ゆっくりと、キティが鈴に香織の体を預ける。
まだ少し睨んではいるが、仕方あるまい。あの取り乱しようを見なければ、とてもキティが敵ではないとは信じられんだろうからな。
「ところでキティ、他の連中はまだいるのか？」
「スコールは恐らく死んでしまいましたわ。……きっと、お姉様に気持ちを伝えられたでしょうね」
「なぜわかる？」
「この戦いが始まる前に、スコールの中にいたナノマシンは彼女自身が駆逐してしまいましたから。そんなことができるほどの覚悟で

臨んだ戦いの相手がお姉様では、もう……」

キティいわく、自身の体内には様々なナノマシンが入っているらしい。私の唾液にも自然治癒を少しだけ促進させるナノマシンが含まれているが、それをめちゃくちゃに多くしたような状態だな。

その中に、脳を弄って自分への好意を増すナノマシンがあるらしく、スコールとオータム、そしてエムと名乗っていた少女の中に入れたらしい。

今反応が確認されているのはエムだけだという。……そうか。

「……やはり、辛いものですわね。自分で捻じ曲げたとはいえ、愛してくれた人が死ぬのは」

「意外だな。お前はそんなこと考えないと思っていた」

「私だって、そのぐらい思いますわ」

「それじゃあ、オータムが死んだことも知ってるのね？」

「ええ……。素直ないい子だったのに……」

鈴の言葉にそう返したキティの目じりに、少しだけ光る涙が見えた。

……泣けるのだな、こいつも。

「オータムは、どんな最期を？」

「悲惨だったわ。黒いＩＳに喰われてね……」

「喰われた！？　まさか、奴らは人を喰うのか！？」

「多分……。人を喰って進化してたから……。千冬さんに、斬られたけど」

教官、いや、織斑先生が……。

それにしても、なんという相手だ。人を喰うなど、機械の域を超えている……。

「そう言えば、織斑先生はどうしたんですの？」
「千冬さんならとっくに真ん中の突入経路に突っ込んでいったわ。すれ違わなかったの？」
「いえ、まったく」
「……まあいいわ、とにかく私たちは何が起きてもいいように待機しておきましょう。キティ、もしものときには協力してもらうわよ」

それぞれが言葉を交わす中で、私はそっと目を伏せた。
箒、帰ってこいよ。

「ずぇあああああああ！」

気迫の一閃が合体したＩＳを真っ二つに斬り裂く。
その直後、私の背後でそれが盛大に爆発した。……よし、倒したな。
残された時間は六分と少し、その間にコアに到達し、破壊して退避しなければならない。

「いけるか、紅椿」

きらりと、問いに答えるように装甲が光る。
体がやや重い、やはり実戦の空気が体に負担をかけているんだろ

う。だが、ここでへばってもいられん。
ドンッ、と空気を蹴りだして群れへと突っ込む。
すれ違いざまに数体を斬り捨てながら、通路を突き進んでいく。
残るコアは二つ、破壊できるか……！
通路を進み、邪魔な壁を切り払ってさらに進む。そうしていくうちに、目の前に巨大な空間が広がっているのが見えてきた。

「ここか！」

とても巨大な空間の中心には、手の平大の大きさの丸いコアのようなものが浮かんでいる。
本物のＩＳコアが透き通った水晶なら、あれは少し曇っていた。
フィルターを通して見ると、そこから膨大なエネルギーがこの機体全体に供給されているのが視覚化される。
まるで生きた爆弾だ。こんなものが爆発すれば、ドカンではすまないぞ……。

「解体か、破壊か。どちらがお好みかな？」
――警告！　ここは現在立ち入り禁止区画に指定されています！　直ちに退去しなさい！　指示に従わない場合は排除します！
「ほう、面白い。やってみろ！」
――排除決定、ハイゴーレム、起動します。

その音声の直後、コアの向こう側の壁が開く。
その向こうから出てきたのは、ＩＳと同じ大きさの黒と白のコントラストで配色された機体。
一目でわかった。これは今までのものとはまるで違うと。

「当該対象、確認。排除行動を開始します」
「切り刻んでやるさ」

直後、私の《空裂（からわれ）》と奴の刃が交差し、金切り声を上げた。
踏み込みの速度、角度、威力、どれも私と全く同じだ。こいつ、今までの私の戦闘データを総合したものを使っているのか。

「はぁっ！」

人間ならすぐには反応できない角度から突き上げた《雨月（あまづき）》を簡単に止めたハイゴーレムとやらが、返しの刃で冗談から斬りつけんと、その腕と一体化した刃を振り上げる。
そこへ《空裂》の切っ先を振りぬき、腕を一本斬り飛ばした。

「ふん、その程度か！」
「当該対象の戦闘能力、確認完了。武装特性の再現を開始します」
「なんだと……？」

言葉を発しながら、奴が刃を脇に構える。ばちばちと気味の悪い黄土色のエネルギー光が漏れ出してきていた。
それを見て、私もすぐさま《空裂》を鞘に戻す。
そして、その直後。

「武装特性、《空海断絶（チヘイヲワル）》発動」
「舐めるなよ……！　切捨て御免ッ！　《空海断絶（チヘイヲワル）》！」

奴のエネルギー刃とこちらのエネルギー刃がぶつかり合い、轟音を撒き散らしてぶつかりあう。
その直後、奴の刃の後ろから更にもう一撃が放たれた。
クソ、負担を考えなくていいから連発できるのか！

「万事休すか……！」

「馬鹿者、まだ早いぞ」

こちらへ迫る攻撃の最中、硬直の最中に聞こえた声。

その直後、全てのエネルギー刃が桜色の斬撃で消し飛ばされた。

「この声は……」

「無事のようだな。とっとと片付けるぞ」

声の主は、白と桜色の装甲に身を包み、体の周囲に無数の刃を浮かべながらやってきていた。

皮肉気な笑みを浮かべながら、刃を軽く振るった千冬さんは、瞬きの間に接近すると、一息でそれを切り裂いて行く。

「ふん、この程度か。やはり人為的な進化を遂げた程度では」

「なぜ、ここに？」

「バカが残っているだろうと思ってな。とっとと破壊するぞ」

「もう一つのコアは？」

「葵が破壊した。既に脱出しているから、急ぐぞ」

一之瀬先輩、やはりあの人が一番の規格外だ。ＩＳに生身で勝てる人間なんてあの人くらいだろう。

と、喋っているうちにコアに刃を食い込ませ、木っ端微塵に破壊する。これで止まるはずだ。

――エネルギーの供給停止を確認。現時点の残量エネルギーでこの機体を爆破します。

……止まるんじゃないのか、最悪だ。

「まあ、予想できたがな。行くぞ！」

「はいっ」

真剣な表情を浮かべた千冬さんに付いて、脱出を開始する。

さて、とっとと逃げるとするか。

「箒！」

「千冬さんも！」

「すまん、遅れた。すぐ逃げるぞ、もうすぐ爆発する」

千冬と箒が脱出した直後、ゆっくりと端の方から巨大ＩＳが爆発して行くのが全員の視界に入る。

それを目にした全員が、その言葉に大きく頷いた。

「千冬、コアを破壊できたのね」

「お前が二つ壊してくれたおかげさ」

「っていうか千冬姉、そのＩＳ……」

「詳しくは戻ってからだ。全員飛ぶぞ！」

声が響いた直後、皆の背後から揺れが伝わってきそうなほどの爆音が響く。

日本まで残り三〇キロ地点の海上にて、巨大ＩＳは巨大な爆発と共に海に沈むこととなった。

第９１話　作戦終了（後書き）

ということで巨大ＩＳ攻略戦終了。
次回からはまた新たな展開が……？

第９２話　終わりの始まり

「皆さん！　ご無事でしたかぁぁぁ！」
「山田先生、泣かなくても……」

学園に帰ってきた一行を出迎えた真耶、榊原、エドワースの三人の元に駆け寄った一行は、しかしその表情を少し暗く俯かせた。

「あれ、皆さんどうし……た……」
「一之瀬さん……？　織斑先生、一之瀬さんは一体……？」
「昏睡状態だ。脳の処理が追いつかないほどの過負荷が掛かったらしい。いつ目覚める？」
「早ければ今晩にでも。長ければ……、年単位で眠り続けますわ」

千冬にそう答えたキティの言葉に、香織にとても近しかった者たちはもちろん、他の仲間も言葉を詰まらせる。
その中で口火を切ったのは、簪だった。

「でも、生きてる」
「簪ちゃん……」
「生きてるなら、起きるはずだよ。ずっと待ってる」
「……そうね。生きてるんだから大丈夫、腹に穴が開いたわけでもないし！」
「そう、だな。ああ、そうだとも」

鈴とラウラが互いにそう声を掛け合う。その目には涙が見えたが、それを問う者は誰一人としていなかった。

「倉持君も、今回はありがとう」

「いえ、こちらこそ。それにしても、無人機なんて代物がいるとは聞いていましたが、トンでもないものですね……」

深刻そうに手を顎に当てて考え込む早百合。

その様子を見て、千冬は小さく笑みを零し、次の瞬間には後ろから恋華に飛び掛られていた。

「こら、恋華」

「んーっ、千冬さん千冬さん千冬さん千冬さん！　今日は一緒に寝ましょ！」

「ったく……。わかったからひっつくな！　仕事が終わったらな」

「はーいっ！」

はしゃぐ恋華を見やり、簪は小さく溜め息をついた。

それに連鎖するように、鈴も同じように息を吐き出す。

「向こうは元気……」

「こちとらえらくグロいもん見せられて、ちょっとグロッキーだってのに……」

地面に座り込んでそんなことを零した二人のそばに、キティが近寄ってくる。

その顔は、どこか儚げな色を残していた。

「……鈴さん、簪さん」

「どったのよ、キティ。そんな顔して」

「ごめんなさい。お兄様をこんな風にしてしまって……」

「ラウラから聞いてるわよ。苦しんでた香織を助けたのはあんただって。死んでないんだからそれでいいじゃない」

「ですが……っ！」

辛そうな顔で反論しようとしたキティの顔を両手で挟み込むと、鈴は真っ直ぐに目を見つめて笑った。
キティのきょとんとしたその顔が本当に香織に良く似ていることに、鈴は不思議な感覚を覚えた。

「今は仲間でしょ？」
「鈴、さん……」
「いつまでも憎むのも、恨むのも、疲れるよ……」
「簪さん……。……ありがとう、ございます」

小さく頭を下げたキティ。
それから皆は、生きている今をしばしの間噛み締めるのであった。

その翌日。
私たちは寮の食堂で食事をとっていた。
つかの間の休息というべきか、昨日のこともあり今日は一日休みになっている。もちろん昨日参加した連中だけだけど。
っと、自己紹介してなかったっけ。鈴よ、ハロー。
昨日から香織は医務室で眠ってる。いつ目覚めるかはわからないけど、イヴとは会話できたからまだましね。
イヴによれば、今香織は脳内で自分の記憶やいろんな情報を整理しているところらしい。それがいつまで続くかは全くわからないけ

ど、とも。
　ちなみに、キティには香織がここで女性と偽っていることを話してあるから、ちゃんと話は合わせられる。はずだ。

「しっかし、あれよね。平和そのもの」
「ようやく片付いたのだから、少しくらい休んでも罰は当たらんさ」
「そうは言うけどねぇ、大元がつぶれたわけじゃないんだし、やっぱり気になっちゃうのよ」

　そう、まだ事件は終わったわけじゃない。あの疑似コアの大元が見つかったわけでもなければ、亡国機業（ファントムタスク）もつぶれたわけじゃない。
　なんとかしなきゃいけないって思うのは、高々学生のばかな思い上がりなんだろうか。

「……はぁ、なんでご飯の時にこんなこと考えてんだろ」
「鈴、お揚げべちゃべちゃ」
「え？　……んぎゃぁぁぁぁ！？　ア、アタシのおあ、お揚げがぁぁぁぁ！」

　なんということだ、ちょっと趣向を変えて頼んでみた私のかき揚げそばが……！
　考え事をしているうちに麺はのびのびになり、かき揚げはべっちゃべちゃに……！
　最悪だ、終わった……。

「はぁ……。鈴さん」
「んぅー……？」
「はい」

　この世の終わりのような表情で、アタシを呼んだキティの方を向

くと、仕方なさそうに自分のかき揚げを私のそばの上へと放った。
かき揚げはまだサクサクで、汁に浸けていなかっただろうことは容易にわかる。

「キティ、これ……！」
「あげますわ。私はそばだけでいいですもの」
「で、でも……」
「ほらほら、それまでべちゃべちゃにするつもりですの？」
「うぅ……。あ、ありがと……」

礼を言ってから、サクサクのかき揚げを口に運ぶ。からっと揚げられた衣がいい触感を作り上げていて、思わず頬を釣り上げてしまった。
そんな時、突然食堂にあったすべてのモニターの電源がつけられる。誰もそんな行動を起こしてはいないのに。

『ＩＳ学園の諸君、昨日はご苦労だった。私は一之瀬巌隆、科学者だ』

声の直後、アタシの少し後ろから何かが壊れる音が聞こえた。
驚いて振り向いて、そして固まる。壮絶な顔でモニターを睨みつける、葵義姉さんがいたから。

『私の作品を随分と破壊してくれたようだな。亡国機業の連中はやはり使い方が下手だ、あれはもっと頭のいい使い方をするべきだというのに』
「巌隆……っ！　今度は何をするつもりだ！」
『そこにいたか、私の娘』
「黙れっ！　貴様は私の父でもなんでもない！」
『ふっ、まあいい。今回、ＩＳ学園の諸君には正しい擬似コアの戦

い方という奴を教えて差し上げようと思ってな。試験運用も兼ねている、せいぜい足掻いてもらいたい。では』

ぶつり、と音が途切れる。数秒の嫌な沈黙のあと、静かに葵義姉さんが立ち上がった。

少し離れているのに、その怒気のようなものが肌を撫で付ける。吐きそうになるのを、必死で堪えていた。

「……全員アリーナへ。攻めてくるわ」

「え――」

一夏が何かを言おうとした直後、食堂の半分が消し飛んだ。

……え？

「くそっ、全員ＩＳを起動させろ！　お出ましだ！」

「皆、校舎に侵入されたら一巻の終わりだよ！」

「ちくしょう、何でもありかよ！」

それぞれが毒を吐きながらＩＳを装着していく。

その中で、動揺しながら私も『甲龍』を身に着けて《双天牙月（そうてんがげつ）》を呼び出す。

「どこにいけば！？」

「ツーマンセルで動いて！　私は一人でいい！」

「わ、わかった！」

「セシリア、行くぞ！」

「ええ！」

いの一番に飛び出していったのは箒とセシリアだった。

やや嬉しそうな箒と、苦笑しながらもはっきりと頷いたセシリア

が食堂から飛び去ると、続けて一夏とシャルロットのペアが飛んでいく。

……さて、アタシもがんばらないとね。

「キティ、組まない？」

「構いませんわよ」

「では、私は簪と組もう」

「わかった……」

キティと軽くハイタッチして、それから食堂を出る。

それにしても、一体なんでここを……。

「邪魔だ、どけっ！」

手近な三体を一閃して切り崩すと、背後にいる生徒にちらりと視線を向けてから嘆息する。

さっきの放送といい、一体何がどうなっている。あの巨大ＩＳはデモンストレーションだったとでも言うつもりか？

とにかく、通信を――。

「っと、失せろ！」

しようとしたところで、飛んできた奴を切り捨てる。

よし、これで通信が出来そうだな。

「誰か、管制室誰かいないか！」

……だめか。やはり通信妨害されているようだな。

「あの、織斑先生、一体何が……」

「わからん。だが非常事態だ、地下の非常シェルターまで急ぐぞ。全員遅れずに付いてこい！」

「「「「「は、はいっ！」」」」」

生徒たちに声をかけ、廊下を進んで行く。

こちらの方にはあまり来ていないようだが、ところどころ壁に穴が開いている。そこから進入してきたのだろう。

シェルターの入り口のある一階まで降りると、すでに正面玄関は崩壊し、ところどころで教員との戦闘が行われていた。

「全員シェルターの中へ、急げ！」

途中で拾った生徒も含め、約八〇人ほどの生徒をシェルターに押し込むと、外からロックをかける。大規模な爆弾でも吹き飛ばないほどの頑丈なシェルターだが、それでも奴らの攻撃をいつまでも凌げるとは思えない。

最悪、学園を放棄することも考えなければな……。

「千冬さん！」

「恋華か。状況はどうなってる？」

「まさに最悪、襲撃の数は一〇〇〇を超えてるわ。けど、上層部はここを放棄するって考えはないみたい」

近づいてきた恋華と言葉を交わしながら、数体を切り裂く。
しかし、千か。多いな。

「例の黒尽くめといい、一体ここの上層部はどうなっているんだ？」
「さぁ？　とりあえず仕事を片付けましょ！」
「……だな」

背中合わせになりながら、周囲に目を走らせる。
これは、大仕事になりそうだ。

第９２話　終わりの始まり（後書き）

さて、一難去ってまた一難。一夜明けてすぐにえらいことが起こりました。
一体ＩＳ学園はどうなるのか？
乞うご期待！

第９３話　校舎内の戦い

「はぁぁぁ！」

「箒、武装特性は控えるようにしてくださいね！　周囲に被害が出ます！」

「解っているさ！　しかし、相変わらず滅茶苦茶な数だ、なっ！」

箒の一撃で数体がバラバラに吹き飛ばされ、周囲に当たりそうになったものをリミッターを解除した《ブルー・ティアーズ》で狙撃して消滅させる。

それにしても、確かに滅茶苦茶ですわね。相手の本拠地でもないのにこれほどの数。量産されているというのは本当のようですわ。

それに加えて、今回は侵攻作戦ではなく防衛作戦。どれほどしのげるか……。

「それで、どこへ向かう？」

「マップも通信も機能しませんわ、とにかく道なりにすすんでみるしか」

「わかった」

頷いた箒の背後に忍び寄っていた一体を撃ち抜き、それから道を進んでいく。

廊下に響いているのは戦闘の音とどこかが破壊される音だけ、人気なんてまるで感じられない。

無人機を斬り払い、撃ち抜きながら進んでいくと、エントランスの辺りで数体が固まっているのが見えた。

「あれは……？」

「あそこはシェルターの入り口ですわ！　箒！」

「応！」

《スターライトｍｋ？》のエネルギー光と箒の刃の一閃が無人機に食い込み、爆発音を轟かせる。

周囲に敵がいないことを確認したわたくし達は、素早くシェルターのロックを解除して中を覗き込んだ。

「みなさん、無事ですか！？」

「セッシー、今どうなってるの……？」

「わかりませんが……、大丈夫です。皆さんは私たちが守りますから」

中で顔を見せたのは本音さんだった。

不安げな顔の本音さんにそう声をかけると、箒も同じように声をかける。

「本音、お前はシェルター内でパニックが起きないよう、目を光らせておいてくれ」

「わかった、気をつけてね……」

「ああ」

「ええ」

心配そうに言った本音さんにそう答え、シャッターを改めてロックする。これでしばらくは大丈夫だと思いたいですわね。

そう考えていたとき、私たちの視界の前方奥の方に二機が降りてきた。

けれど、それはどう見ても周囲のずんぐりしたような体系でも、四足でも、ましてすらりとした人型でもない。

一機はわたくしの『ブレイブ・ティアーズ』と、もう一機は箒の『紅椿』とまったく同じ形をして、色だけが黒で塗りつぶされている。

中の人間のようなものは黒尽くめで、マネキンや人形のような感じを受けた。

「私たちの模造品か」

「不愉快ですわね」

武装を全て展開し、静かにその二体を睨みつける。

わたくしの『ブレイブ・ティアーズ』も箒の『紅椿』も、肉親から授けられた大切な機体だ。それの模造品など、へどが出る。

「箒、お互い自分の偽物を叩き潰しませんこと？」

「ああ、その案乗ろう」

軽く手を打ち合わせ、次の瞬間には箒と共に空を蹴りつける。

――オリジナルを確認、破壊します。

「黙りなさい」

《ブルー・ティアーズ》と《スターライトｍｋ？》を一斉に撃ち放ち、相手が同じように撃ちだしてきたエネルギー弾を相殺する。と、その後ろから次の波がやってきていた。

「不意を打った程度で、わたくしを落とせるとお思いですの？」

唯一残っていた近接武装、《インターセプター》を展開（オープン）し、すべての弾丸を斬り払う。

その最中に《ブルー・ティアーズ》から放たれた一二の光線と六のミサイルが一斉に相手へと押し寄せていく。

レーザーは花開くように分裂し、一二本のレーザーは一瞬で数え切れないほど細かなものへと変わっていく。その全ての挙動を脳内

で制御しながら、相手を取り囲むように動かして行った。
次の瞬間、無数の爆発が相手を覆い尽くして行く。……終わってませんわね。
――ＢＴ兵器の挙動、威力を修正。オリジナルの抹殺を再開します。
「物騒だこと」
音声が流された刹那、視界の前方を覆うほどに黒く濁りの入った青いＢＴエネルギーが撃ち放たれる。
これは、まずいですわ――！
「はぁっ！」
甲高い音を立てて、私の《空裂（からわれ）》と偽者の刃がぶつかり合う。
くやしいが、その力は同等。少なくとも、腕力で押し切ることは出来そうにない。ならば、技で押し切ればいいだけの話だ――！
「ふっ……！」
ドンッ！
強い踏み込みと共に倒れ込み、倒れるギリギリのところで二歩目を踏み出す。この体勢からならば、振り下ろされるよりも速く懐に

入れる。
悲鳴を上げる床を気にも留めず、ぐるりと回るようにして逆袈裟からの一閃を解き放った。
しかし。
「なっ！？」
――対象の速度との適応完了。
適応だと、舐めたことを……！
……いや、熱くなるな。冷静になれ。あんなもの、容易に突き崩せるだろう。
構えを取り、息を整える。
刃を振り上げて迫る偽者に対して、その双眸で睨みを効かせ、一拍。
「我流、千一閃（いっせんいっせん）！」
音速の壁を一瞬で踏み砕いた私の踏み込みと共に刃を繰り出す。
合計一〇〇〇もの斬撃を全てその装甲に叩き込んでいく。装甲の奏でる甲高い悲鳴が耳に障る中で、一つだけ別の音がした。
たとえるならば、そう。
刃で刃を受け止める、鋭い音が。
――攻撃パターン確認完了。
「カハ……ァ……ッ！？」
音が聞こえるか否かといったところで、その一撃が私の体に突き刺さる。

鋭い刃の切っ先は腹部の展開装甲に食い込み、その衝撃を体に伝えていた。

ぐらりと世界が揺れたのを、必死で歯を食いしばることで堪える。

世界は、傾いた状態で静止した。

そのまま、朦朧とする頭を必死に首の力で支えて敵を見やる。

感情のないその瞳に、酷く腹が立った。こんなものに、私の刃が阻まれたのかと。

「――いくぞ、木偶」

音も、色も、全てが失せた世界の中で一人、私は呟く。

刹那、双手に携えた長さの違う刃を煌かせ、一筋の紅色と化した私は、くすんだ紅の私の偽者と衝突した。

「おおおおおおっ！」

「はぁぁぁぁぁっ！」

医務室へのルートを進んでいた鈴とキティもまた、偽物と相対していた。

「くっそ、なんなのよこいつら！」

「私たちの機体を無人機で再現したようですわ！　尤も、私のものまで再現されているとは思いませんでしたけど！」

撃ち放たれる数々の弾丸を避け、時には自身の衝撃砲で相殺しつつ攻撃を仕掛けていく。

相対しているのはシャルロットの『ミストラル・リヴァイヴ』、そしてキティの『灰狼（グレイウルフ）』の偽者だった。

キティの操る『灰狼（グレイウルフ）』には遠距離、中距離用武装が搭載されていなかったのが功を奏したのか、二人は比較的優位に戦いを進めていた。

「シャルロットのは厄介、ねっ！」

「私のものは基本力押しですから構いませんけど、あちらは苦労させられそうですわ！」

攻撃を何とか回避しつつ、偽の『ミストラル・リヴァイヴ』の肩口の装甲へ鈴の《双天牙月》を大きくたたき付ける。が、装甲が硬くなっているのか、少しへこんだ程度だった。

「なんなのよこいつら！　堅すぎじゃないの！？」

「とにかく叩くしかありませんわ！　大技使いますわよ！」

「オッケー！」

とんっ、と下がった鈴と入れ替わるようにしてキティが前へ出る。

「《断罪のための尾（テイル・フォア・ジャッジメント）》！」

そのままぐるんと大きく旋回すると同時に発動させた武装特性によって膨大なエネルギーを逆らせる凶暴な武器と化した《尾》を偽者の『ミストラル・リヴァイヴ』へと叩きつける。轟音と共に機体が吹き飛び、それを追い撃つように鈴の衝撃砲が放たれた。

「どんなもんよ！」

粉塵を舞い上げながら壁にめり込んでいる偽者に向けて、鈴が言った。

が、次の瞬間、恐ろしいほどの衝撃と共に体を捕まれる。模倣された《デュノア・オルグイユ》が、がっしりと鈴の細い体躯と装甲を丸ごと掴んでいた。

「こ、の、放しなさいよっ！」

「鈴さん！」

――エネルギーバイパス形成、シールドエネルギーの吸収を開始します。

機械音声が流れる中、鈴の脳内にシャルロットが見せたあの一撃が蘇る。

あんなものを受ければ、たとえ絶対防御があっても命に危険が及ぶだろう。二門ある衝撃砲を両方とも『ミストラル・リヴァイヴ』へ向け、フルパワーで撃ち放つ。

しかし、どれほど装甲がめくれ上がっても一向に放そうとはしなかった。それどころか、締め付けはよりきつく苦しくなり、エネルギーの吸収速度も上がっていっている。

余りにきつい締め付けに、鈴は自分の意識が朦朧としかけているのに気づく。それほど強力な力で締め付けられているのだと気づいたときには、手足への血流は止まり感覚は麻痺しかけていた。

「くっ、《ウルフズ》！」

ダメかと考えていた直後、エネルギーの吸収を続ける偽者の腕を、叫んだキティの一撃が粉砕した。

何とかぐらぐらとゆれる意識を繋ぎ止めながらも、鈴は落ちかか

った自分の体をＰＩＣで支えて姿勢を保つ。
後ろから手を回したキティは、気遣わしげに鈴を見やり口を開いた。

「大丈夫ですか、鈴さん？」
「え、ええ、なんとかね……。ごめん、助かったわ」
「気にしないでくださいませ。それより、来ますわよ！」

さっきの恐怖がまだとれないのか、少しだけ体を震わせる鈴に向けてキティが言う。
その言葉の通り、相手はまだ二体とも健在だった。

戦いは、まだまだ終わりを見せない。

第９３話　校舎内の戦い（後書き）

専用機を模倣し、同じかそれ以上の強さを持ってやってきた無人機たち。
果たして戦いの行方やいかに！

第９４話　いまだ終わらず（前書き）

ちょっと短いです。

第９４話　いまだ終わらず

「なんスかこいつらアアア！」
「知るかァァァ！　気になるなら尋ねてみろ後輩ィィィ！」
「無理ッスゥゥゥ！」

ＩＳでめちゃくちゃに校舎内を飛び回りながら、私たちは無人機から発射される無数の弾丸を避け続ける。
私たちの姿を模倣しているらしい無人機たちだったが、その力は間違いなく私たちと同等かそれ以上だ。なにしろ、向こうは負担を気にせず全力でＩＳを使えるんだからな。

「この、《アイシング・ジャングル》！」

後輩、フォルテが特殊兵装を発動させるが、向こうも同じものを発動させて相殺してくる。
つくづく厄介だな、こういう相手は。

「だぁぁぁぁ！　なんなんスか！」
「とにかくお前も撃ち返せ！　こっちも、やるだけやる！」

言いながら《Ａ＆Ａ（アポロン・アルテミス）》を『シフト・アルテミス』に切り替えて盛大に弾をばら撒く。
が、それを私とフォルテの偽物はあろうことか、『シフト・アポロン』の狙い撃ちと速射、《アイスメイカー》の狙い撃ちですべての弾をたたき落としてきた。

「めちゃくちゃだな、こいつら……！！」
「近接戦で仕留めるしかなさそうっスね」

「だな」

フォルテは片手に近接用のブレードを展開（オープン）する。それと同じようにして、私も《アレス》を呼び出し（コール）た。

軽く振ってから身構えると、向こうは銃撃で応戦する気なのか、武装を展開する気配は見られない。

「よし、行くぞ」

「ういっス」

直後、一気に接近して《アレス》を叩きつける。その一撃は、一瞬にして展開された偽物の《アレス》によって阻まれた。

こいつ、展開速度も並みじゃない……！

「フォルテ、気をつけ――！」

「きゃぁぁぁあああ！」

私の真横で、赤い血を噴き出してフォルテが吹き飛ばされる。

その目の前には、《アイス・メイカー》の銃口を赤く濡らした偽物の『コールド・ブラッド』が――、

「――っぁぁぁあああああああああああああ！」

瞬時加速（イグニッションブースト）で偽物の首をつかむと、脳天にあたる部分に《Ａ＆Ａ》の銃口を突き付ける。

『シフト・アルテミス』を零距離で撃ったことなどないが、少なくともこのふざけた能面の顔面を砕くには十分すぎる威力を発揮してくれるだろうことはわかる。

こいつらには絶対防御がないが、私たちのものもこいつらのせいで消えているだろう。そのせいで、フォルテが。

後輩をやられて黙って見ているなど、冗談じゃない……！

「失せろぉぉぉぉ！」

――機体情報以上の加速を確認！　危険！

がちり、音が響く。

その直後、偽物の『コールド・ブラッド』の頭部から、けたたましい炸裂音が鳴り響いた。

その頃、ラウラと簪は部室棟の中を駆けていた。

部室棟に人がいるかもしれないという簪の言葉に同意したラウラが先導し、マップが使えないため目視で一部屋一部屋を確認していく。

時折襲ってくる無人機を破壊しながら進んでいた二人だったが、途中の部屋でぴたりと足を止めた。

耳を澄ますと、遠くから聞こえてくる戦闘音に混じって何かを振る音が聞こえてくる。それはその部屋、剣道場の中から聞こえてくるようだった。

「誰かいるのか！？」

声を上げながら剣道場の扉を開いたラウラの視界に入ったのは、黙々と竹刀で素振りを続ける一人の女性の姿だった。

「無事のようだな……。済まない、少しいいか」
「……うん、なにかな？　ＩＳまで装着して」
「詳しい事情はあとで、今は私たちの言う事を聞いてほしい。すぐにシェルターに避難してくれ、私たちが護衛しよう」
「今、ここは襲われてるから……」
「ふぅん、わかったよ？　それじゃ、ちょっと待っててくれるかな？」

彼女は笑みを浮かべて小さく頷くと、近くにあったバッグを担ぎ上げる。
竹刀を袋に入れて肩に担ぐと、ラウラたちの方へと近づいてきた。

「よし、準備完了だね？　護衛よろしく頼むよ？」
「簪、いけるか」
「うん。……まって、音が――」

歩き出そうとした直後、簪の制止で三人の足が止まる。
次の瞬間、剣道場の天井から熱線が降り注ぎ、さっきまで彼女がいた場所を的確に吹き飛ばした。
苦々しげにそれを見つめるラウラと簪の目の前に現れたのは――、三機の無人機を伴った『シュヴァルツェア・レーゲン』と『真打（しんうち）・鉄（くろがね）』の偽物だった。

「なん、だと……！？」
「偽物……、無人機？」
「……私は離れていた方がいいね？」
「……ああ、そうしてくれ。これは甘く考えていい相手ではないだろうな」

それは自らを過大評価しているわけではない、真っ当な理屈だった。

ただでさえ二次移行したおかげで性能の上がっている『シュヴァルツェア・レーゲン』に、疑似第四世代といってもいい『真打・鉄』の偽物となれば、生半可な相手ではない。

模倣品によくある性能の低下を期待したい二人だったが、幾度となく無人機とぶつかりあった彼女たちは無人機の性能が十分に高いと理解してしまっていた。

それゆえに、二人は鋭い視線を向けながら静かに刃と弾丸を構える。

「――行くぞ」

「うん。はぁぁぁぁぁぁあああ！」

次の瞬間、四〇の刃を携えた《シュヴァルツ・ドラート》と、《朱鉄（あかがね）》を携えた簪が吶喊（とっかん）する。

装甲と刃のぶつかり合う音を響かせながら激突する簪とその偽者の横で、ワイヤーブレードをプラズマブレードで切り裂き始めたラウラの偽者。それに向けて、ラウラの二門のレールカノンが撃ち放たれた。

「行けぃ！」

――攻撃判定、武装選択。反撃します。

音声が流れた瞬間に、偽者が消える。

それに驚いたラウラの顎を、偽者のつま先が蹴りぬいた。

「ガッ、ァ……ッ！？」

力なく宙に投げられた体へ、偽者が更に拳を叩き込む。

左からのフックで体を浮かせ、右の拳を撃ち下ろして体をバウン

ドさせる。少しだけ浮いたラウラを更につま先でもう一度蹴り上げると、首元を右腕で掴み勢いよく壁へと叩き付けた。

「カハッ……！」

――オリジナルの弱体化を確認。生命活動を停止させます。

「ラウラぁ！　こ、のぉ……っ！」

一瞬で叩きのめされたラウラの姿を見て激昂した簪が刃を振り上げるが、感情に任せて動いたせいか、やや動きが大振りになっている。

次の瞬間、横殴りに偽の《朱鉄》の腹が叩き込まれ、灼熱の刃が押し付けられる激痛と共に壁へ吹き飛ばされる。

「きゃぁっ……！」

「ぐっ、簪……っ！」

共に身動きの取れなくなった二人へ向けて、静かに偽者の《シュヴァルツ・ドラート》が迫りくる。

終わったかと、心の隅で思ってしまった、その刹那。

キィン、と甲高い音で、その刃の進攻は食い止められる。

「私の後輩に、手を出さないでもらえるかな？」

日本刀を片手に《シュヴァルツ・ドラート》を阻んだ彼女が、静かに言葉を発する。

その威圧感に、機械であるはずの彼らは自らがきしむのをその回路で感じていた。

ぎしりと、鎧と化している偽者のＩＳの外装が軋みを上げる。

「と言っても、私もそう凌げるわけじゃあないんだけどね？　早く立ち上がりなさい？」
「せん、ぱい……？」
「ただの刀で、《シュヴァルツ・ドラート》を止めたのか……！？」

驚異的なまでの動体視力と身体能力を一瞬で発揮した彼女だったが、しかしその手に握られた刃は既にぼろぼろになっている。
ただでさえ通常の兵器を上回るＩＳの攻撃を凌いだのだから、砕けていないだけマシというものだが、それでもこの状態でいつまでも凌げるわけではない。
二人はそれを悟り、稼いでもらった時間を使って何とか体を起こす。

「ラウラ、時間稼いで……。《朱鉄》で止めを……！」
「わかった、気をつけろ。先輩、ありがとうございます」
「気にしないでね？　これも先輩の務めだからね？」

ニコニコと笑みを浮かべた彼女と入れ替わり、二人は再度戦闘態勢に入る。
シールドエネルギーは大分削られてしまったが、それでもまだ二人の意気は消えてはいなかった。

第９４話　いまだ終わらず（後書き）

先輩がつよーい。
でも受け止められるだけ、攻撃は出来ません。
設定では、世界の裏側には割りとこういう感じの人はごろごろしてます。
出てこないのは、出てくる必要性を感じないから。

第９５話　反撃の兆し（前書き）

でも反撃した人がキーパーソンだなんていうわけじゃない。

第９５話　反撃の兆し

「うおぉぉぉ！」
「はぁぁぁぁ！」

一夏とシャルロットの声が響き、『甲龍』の偽者が大きく弾き飛ばされる。

まともに入った《零落白夜》が効いているのか、『甲龍』の偽者は動く様子がない。

しかし、二人はそれに油断することなくそれぞれの獲物を構えて『白式』の偽者へと視線を向けた。

「無人機もここまで来ると滅茶苦茶だね」
「全くだ。早いとこ片付けようぜ」

多機能武装腕《雪羅》のビームクローと《雪片弐型》を両手に携えた一夏と、六二口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタディ》を両手に構えるシャルロットが、それぞれ頷いてから臨戦態勢に入っている体を新たにする。

廊下での戦闘はかなり機動が制限されるが、それゆえに上下左右への回避行動は難しい。基本的に回避することが望まれるショットガンも一夏の武装も、偽者の『白式』は全て防御するしかない状況に陥っていた。

しかし、一夏もシャルロットもだからと言って油断することはない。その程度の状況の有利不利を己が腕一つであっけなくひっくり返せるものを、二人ともごまんと見てきたのだから。

特に一夏はそれが多い。自らの武装はまさしく諸刃の剣と呼べ、姉は数や力の有利不利など簡単に覆してみせる。それ故に、油断の二文字は極力意識から排していた。

「――よし、行くぞっ」

一夏の一言で、互い違いに二人は疾駆する。

暖房の聞いた室内の大気に外の冷気が流れ込むことで出来た生ぬるい風を受けながら、戦闘に立ったのはシャルロットだった。

両手のショットガンを、弾数をまるで気にせずに撃ち放っていく。

《雪羅》を模した腕でシールドを作り、それをガードする偽者に弾丸が食い込んでいく。ガンガンと、鉄を金槌で思い切りよく叩いたときのような音が無数に広がり、じりじりとシールドエネルギーが削られていく。

無人機の活動停止条件は二つだけ、完全な自身の崩壊か、シールドエネルギーの枯渇。だが、無人機にシールドバリアはなく、絶対防御も存在しない。つまり、シールドエネルギーを削って活動停止に追い込むことはかなり難しくなっている。だからこそ、シールドにもシールドエネルギー自体が使われ、高性能な防御機能を実現させていた。

これは『白式』に装備されている《雪羅》のシールド能力を模したものであり、それ自体が『単一技能（ワンオフ・アビリティ）はコピーできていない』ことの証明でもある。

しかし、その防御が堅牢であることに変わりはない。

だが、それ自体を削り取る力が、『白式』、そして《雪羅》には備わっている。

「いまだよ、一夏！」

「応！　ォォォぉぉぉおおおおおおおお！！」

シャルロットの合図で、黄金の輝きに身を包んだ一夏が風を切り飛んで行く。

青白い刃を両手に携えて飛ぶ一夏へ向けて、再び動き出した偽の

『甲龍』の《龍砲》が撃ち放たれるが、器用にも空中で回避行動を取ることで殆どを避け、残った数発も装甲を掠めるに止まった。

「いっけぇぇぇぇぇぇぇ！」

肉薄し、二閃。

《零落白夜》の青白い光を纏ったビームクローと《雪片弐型》が『白式』の偽者に叩き込まれた。

金属を引っかくような耳障りな音を響かせて装甲を吹き飛ばされた偽者は、不可解な電子音を吐き出しながら大きく後方へと後退する。

シールドエネルギーは一〇〇を下回っているようだったが、それでも止めを刺すことはできないようだった。そのことをいまだ動くそれをみて察した一夏は、思わず顔を顰める。

「悪い、シャル」

「気にしないで。くるよ！」

言葉少なに謝罪を受け取ったシャルロットの一声と共に、左右を繋げられ一本の刀身となった《双天牙月（そうてんがげつ）》が大気を切り裂き飛んでくる。

それを即座に呼び出（コール）した巨大な実体シールドで防いだシャルロットの背後で、エネルギーをチャージした一夏が身を乗り出し、《雪羅》に備えられた荷電粒子砲を発射する。

しかし、その砲弾はギリギリで動いた偽の『白式』の《雪羅》から放たれた同じ砲弾によって相殺されてしまった。

「まじかよ……！？」

「さすがにコンピュータ制御は狙いが精確だね。けど、その砲弾じゃこれは防げないでしょ！」

驚愕の表情を浮かべて呟いた一夏に対して、シャルロットはそう言葉を返してから更に武装を変える。

呼び出したのは二丁の《デザート・フォックス》。五九口径重機関銃、その銃口を偽の『白式』へ向け構えると、一気に引き金を引き弾丸を吐き出していく。

咄嗟に《雪羅》のシールドを発動させたが、それが仇となって瞬く間にシールドエネルギーは弾丸に削られ消失した。

がくん、と巨大な体躯を地面に落として活動を止めた偽の『白式』を見届けた直後、背後から戻ってきた《双天牙月》を回避したシャルロットは、いまだ宙に止まるそれへ向けて残弾をありったけ撃ち出していく。

ところが、その残弾は一瞬で《双天牙月》を手の内に収めた偽の『甲龍』によって叩き落された。

「まだ、終わっちゃいないってことか……」

毒づくように吐き出した一夏が、再度武装を構えなおす。

戦闘は、まだまだ終わらない。

白刃が煌き、数体の無人機を一気に切り伏せる。

《ブレード》を手に静かに切り下ろした状態から立ち上がった葵は、自らを取り囲んでいた無人機の残骸を見て嘆息した。

斬外の数は、組み合わせれば総勢六〇以上にのぼる。その全てを、葵は単身傷つくこともなく倒して見せたのだ。

量産型のＩＳと比べても遜色なく、絶対防御がないといってもその性能に違いはない。まともな人間なら攻撃する前に殺されてしまうだろう相手に対して。

しかし、葵の目つきは和らぐことなく一点を見つめていた。

その直後、そこから紫電が迸り、エネルギーの砲弾が撃ち出される。

音速を超えたその砲弾を片手で握った《ブレード》の一閃で下から上へと切り上げると、左右に分かれたそれは丁度葵を避けるようにして後ろへ飛んでいった。

「やはり、この程度では無駄でしたか」

「……出てきなさい」

葵がきつめにそう声を掛けると、その声の主は静かに姿を現した。まるで、風景から溶け出てくるように、いつからそこにいたのかもわからないほど自然に。

見てくれは葵とよく似ていた。茶色の髪を短く切り揃えていて、背丈も葵と大差ない。

まるで、葵自身の模造品のような。

「貴様は、アイツの作った作品か」

「そう。貴女を殺すために作られた、『貴女』」

同じ声、しかし同じ声色でなく、気味が悪いほどに優しい猫撫で声で告げた彼女は、シャン、と鈴の音がなるような音と共にどこからか刃を抜き出す。

「貴女を殺して、私はお父様に認めていただく。そのために――」

言葉が途切れると同時に、彼女の姿が消える。
しかし、その消えたはずの彼女の体が葵にははっきりと見えていた。
後方からの切り上げ、ありえない位置から繰り出されたその一撃を、葵はいとも簡単に同じ刃で阻んでみせる。

「――死んでもらうわ」

声も顔も、どこまでも優しさしか感じさせない、いっそ不気味な位に、憎悪も、嫌悪も、負の感情の一欠けらも見せずにそう言った彼女の動きが、突如として変わる。
先ほどまでも十分早かった速度は数倍に跳ね上がり、雰囲気だけはそのままに凶刃を煌かせた。
次々と繰り出される刃を片腕の《ブレード》で防ぎながら、葵は言葉を投げかける。

「貴様は疑問を持たないのか？　奴に使われるだけの命に」
「それが私の生まれた意味、作られた意味。なぜ創造主に従わない人形が生かされる道理がありますか？」

当たり前のことを、分からず屋の子どもに優しく説き伏せるような声音で彼女が言葉を返す。
それを聞いて、葵は眉をピクリとも動かさずに声を発した。

「自らを人形と称するか。哀れな」
「香織様だって、人形でしょう。貴女が弟と可愛がっているあの方がお父様に従わないことが、私には不思議でなりません。あれほど良くできたお人形が創造主をないがしろにするだなんて……、まあ、貴女が何かしたということは検討が付きますけど」

「あの子は、人形じゃない……！」
「いいえ、人形です。可愛い可愛いお人形、誰かに道を示してもらわなければ歩くことも、立つこともできない。愛しい、ただの木偶人形」
「貴様……」
薄気味悪い猫撫で声で歌うように話す彼女を、葵は憎々しげに睨み付ける。
しかし、彼女の方はそれすら心地よさげに受け止めながら更に刃を振るった。

「貴女はあのお人形をみすぼらしい人間のように仕立て上げ、あたかも自分の意思で生きているように細工して。ああ、なんと可哀相なお人形なのでしょう！　お父様の元にいれば、人間の振りをして苦痛を味わうことなどないというのに！」
「黙れ……！」
「そうだわ、貴女を殺して『貴女』が貴女になってあげればいい！　そうすれば香織様はみすぼらしい肉塊でなく、立派なお人形さんとして私が導いて差し上げられる！」
「黙れっ！！」
「そうと決まれば、貴女に生きていてもらう必要なんてありませんね？　死んでください、香織様のために！」

けたたましい音を立てて、刃が交差する。
それは、初めて気味の悪い優しい迷彩が溶け、中にあった怖気の走るほどの憎悪が溢れ出た瞬間でもあった。
音高く刃を打ち付け、今度は攻勢へと回った葵が口を開く。

「殺すと言ったな、私を？　やってみせろ木偶人形が！　己の意思を持たず、貫かず、ただ従うことしか出来ないクズ共め！」

「それが私たちの正しい姿、貴女のような出来損ないではない、完璧な存在の在り方！」
「あの子を導くだと？　ふざけたことを滑らせる口だな！　あの子は導かれて素直に進むような意思の弱い子じゃない、はっきりと自らの進むべき道を、進みたい道を指し示せる！　貴様が前に立つなら、押しのけて進むほどには強い！」
「あの子は私の弟だ！　貴女を殺して『貴女』が貴女になる！　貴女を私にする！」
「はっ、結局は独占欲か！　その思考がある限り、貴様は私には勝てん！」

苛烈に鳴り出した攻勢の音に、彼女は思わず歯噛みした。
まさしく圧倒的。擬似コアを核に作られた人造人間たちの身体能力は高いはずだったが、それをまるで遊んでいるかのように上回って戦う葵は、優しさと憎悪の二つの感情しか見せなかった彼女に初めて焦りという感情を感じさせていた。

「偽者の弟と偽者の姉、どちらも偽者なら本物になれるのに！　貴女はなんでわからない！」
「出自であの子を決め付けるな。あの子は本物として生きている、偽者として諦めているお前とは、釣り合うわけがないだろう？」

独占欲をむき出しにして自らこそが本当の姉になれると語る彼女だったが、その言葉を葵は爪の先ほども聞き入れようとはしなかった。
彼女が持っている理想、夢、それらは全て作られる過程で埋め込まれたもの。自らが偽者であるとわかっているが故に、香織の姉である葵を殺し、そこに自らを置こうと考えたのか。
彼女は葵の模倣品として作られた。だからこそ、そんな思考になってしまっているのだろう。姉であることと、自らの幸福を香織自

身に味わわせてやりたいという『優しさ』のために。
そんな彼女を、葵はいっそ不憫だとさえ思った。生まれてから行く道も理想も夢も、考え方も、何もかも決められた生、そんなうんざりしたものに付き合わされる位なら、いっそ死んだ方がマシだとも。
刃を最早目で追えないほどの速度で叩き付け合いながら、互いは空気の振動で位置を割り出し、そこへ刃を繰り出して対応し、更にそれより速く互いが互いを出し抜こうと刃を翻す。

「あの子は、あの子は私の弟だ！　返せ、あの子を！　返せぇぇぇぇ！」
「香織は、誰のものでもない」
「うるさい！　返せ、返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せェェェェ！」

徐々に彼女の動きが速くなっていく。
しかし、刃を振るうごとに彼女の皮膚が裂け、目や耳、口元からは血を垂らし、瞳は虚ろになりどこを見ているかすら分からなくなってくる。
鬼気迫る彼女を見ながらも、葵はその表情を変えなかった。

第９５話　反撃の兆し（後書き）

実は『彼女』についてはこの回でとっとと退場願うつもりだったんですが、あんまりに展開速すぎるのと、
「せっかく出てきたのに私の出番少ないよぅー！」
と『彼女』が頭の中でじたばたするので次回以降に退場を伸ばしました。

……ち、違うんだ、僕は変態じゃないよ！
仮に変態だとしても、変態と言う名の（ｒｙ。

えー、一夏とシャルがカップリングでいいんじゃねえかなこれ。
箒とセシリアくっつけちゃおうかな。
でもなぁ、でもなぁ。
……真面目に悩みどころです。ただでさえ原作殴り飛ばす勢いで百合ップル作ったので。
まあ、答えは続きで！

次回からは反撃編、かな？

第９６話　零の力

「はぁっ、はぁっ……、うっ、くぅっ……！」

青い装甲をぼろぼろにしながらも、セシリアは何とか宙に浮いていた。

朦朧とする頭で《ブルー・ティアーズ》を操り、相手のＢＴエネルギーを何とか相殺してはいるものの、既に彼女は死に体だった。

息は荒く視界は揺らぎ、集中力が途切れ始めているのか、いくつかのビットは量子変換されるときに出す光を時折撒き散らしている。

そんな中で彼女を支えているのは、ただ一つのプライドだった。

偽者に負けたとあっては、父から託されたこの力がその程度のものだったと証明してしまうことになる。それが、彼女は何よりも嫌だった。

「どれほど泥にまみれようとも、もう見失わないと決めたのですわ……！」

失いそうな意識の中で、セシリアはそう吐き出すように呟く。

貴族としての誇りではない。ただ、父と母が産んだ己が、自らを産んだ二人への敬意を忘れることなかれ、と。いつしか心に決めた言葉。

貴族でなくともいい。ただ、あの二人の娘であることを誇れれば。それでかまわなかった。

目の前の敵を見ろ、醜く模倣することしか出来ない者を。誇りを傷つけた痴れ物を。

「――ああ、腹立たしいですわね」

笑みすら形作らせた彼女の心に、恐れはない。
彼女が恐れるのは、自分を自分たらしめるそれを忘れてしまうことであり、眼前の憎むべき敵は恐れる対象にはなりえない。
それ故に、彼女の耳にはそれが届いた。

――誇りを守れ、そのために手にせよ。

「ええ、力を貸しなさい、『ブレイブ・ティアーズ』……！」

それは、自らのＩＳから聞こえてきた声だった。
澄み渡り凛とした、強く美しい女性の声。
それに母親の色を感じたセシリアは、小さく作っていた笑みを深めて、すっ、と息を吸い込む。
その直後、彼女の視界は白い閃光に覆われ、意識はそれによって連れ去られていった。

そこは、彼女の自室だった。
一体何がおきたのかと考えながら、自らのベッドから這い出た彼女は、そのままの姿で屋敷の中を歩き出した。
美しい絵画に一目見ただけで随分するだろうということがわかる花瓶など、見覚えのあるものが並ぶ中で、彼女は父親の書斎へと向かっていた。
殆ど家にいなかった父親、昔は嫌悪して近づきすらしなかったも

のだが、今となっては彼女にその気持ちはない。
そっと扉を押し開けると、金色の髪を長く伸ばした、セシリアによく似た女性が書斎の椅子に座っていた。

「よくここまで辿り着きましたね、セシリア」
「貴女は……？」
「私はブレイブ・ティアーズのコア人格、ずっと貴女を見ていましたよ」
「わたくし、を？」

気が付くと、本が乱雑に置かれていた書斎は綺麗に整頓され、書斎のテーブルの上には小さめのティーカップが二つ。セシリアと『ブレイブ・ティアーズ』と名乗る女性は向かい合うようにして座っていた。
ティーカップの中に入っている暖かなお茶で喉を潤した彼女は、また口を開く。

「父が貴女を思う気持ちは本物です。それに気づいてくれてありがとう」
「いえ、そんな……」
「ここはＩＳコア内部の特殊な空間。時間の流れ方も外とは違います。……少し、休んでいきなさい」
「ですが、外にはまだ助けを待っている人たちが！　それに、あの偽者を倒さなければ……」

声を上げるセシリアだったが、その瞬間に空間は違うものへと切り替わった。
大き目のソファー、セシリアの母がよく仕事で疲れたときに座っていたのを覚えているそれに、彼女とセシリアは座っていた。
余りに懐かしい感触に、セシリアは思わず目頭を熱くして俯いて

しまう。

「貴女がここでどれだけ休んでも、現実の時間は経過しません。少し、その磨り減らした心を、ここで休めていきなさい」

「でも……」

「……セシリア、貴女は良くがんばっています。私は貴女のお父様とお母様のお二人の意思によって生み出されたもの、この空間も、貴女のためだけに作られたものなのですよ」

「お父様と、お母様が……」

「お二人は、貴女がここへ辿り着くまでに、きっと沢山の苦労を経験するだろうとお考えでした。だからこそ、ここで一度羽をお休めなさい。立ち上がるための力を、もう一度生み出すために」

彼女はセシリアをぎゅっと抱きしめると、優しく頭を撫で付けた。その温かさが昔母親に同じようにされたことを思い出しながら、セシリアは口を開いた。

「貴女は、お母様の人格を参考にしていますの？」

「ええ。貴女の記憶にあるシャロン・オルコットと、お父様が設計段階で入力したシャロン・オルコットのデータを共に参考にして形成されています。貴女がここへきたとき、少しの間でも安らげるようにと」

そして、それは父の発案だと彼女は言った。

ずっとブラウンは娘の身を案じていた、そのことをセシリアは改めて伝えられ、今度こそ涙を堪えられずに目の端から流してしまう。

「……それでもわたくしは、行かなければ行けませんわ。例え安らぎがあったとしても、時にはそれに身を任せず、自ら前へ進むことも必要なはずです」

「……本当に、あのお二人と同じですね。お父様もお母様も、きっとそう言うだろうと言っていましたよ」
「そう、でしたか……」

しかし、セシリアはそこで休まないことを選び取った。
自分一人がそこで立ち止まっていていいはずがない。今の状況で危機に陥っているからこそ、セシリアは少しでも逃げる形になるようなことはしたくなかった。
その言葉を聞いて、彼女は優しげに微笑んでそう返してくる。
すると、風景はまた元の書斎へと移り変わり、座っている場所もさっきと変わらない位置に移動する。
さっき抱きしめられたときの温もりが不意になくなってしまったことで少しだけ切なくなりながらも、セシリアはその強い意志を瞳に現して口を開いた。

「わたくしは、どうすれば元に戻れますの？」
「ここへは、私が貴女に力を貸す準備として招いたのです。まだまだ貴女と私には距離がある、それを詰めるのにはもう少しの時間が要るでしょう。だから、それまでを生き抜くために、ブレイブ・ティアーズの本当の力をあなたに預けます」
「本当の、力？」
「今のブレイブ・ティアーズは、まだ機体のスペック的には全開ではない。一時的に、その全開のブレイブ・ティアーズを預けます。使いこなせるようならそれでよし、もしダメならばもう少し時間が必要ということです」

そっとセシリアと手を重ねた彼女は、そうしてから笑みを形作る。
暖かな手だと、セシリアは感じた。

「覚悟は、ありますか？」

「……ええ。この力を受け取ったときから、貴女と共に歩き始めたその日から、覚悟はとうに出来ていますわ」
「では、力を。信じています、セシリア」
最後に一度だけ微笑んだ彼女が言って、それから周囲は白の中に消えていく。
いつしかセシリアも、その中に溶けていっていた。

「……戻ってきましたのね」
夢から覚めたような心地で、セシリアが呟く。
眼前には変わらずレーザーを繰り出さんと浮かぶ偽者がいて、自分が身動きもとれず――。
そこで、目の前のウィンドウに気づく。
『操縦者の最終確認と同時に全リミッターを一時的に解除します。ＹｅｓかＮｏを選択してください』
そんな言葉が並べられていることに気づいたセシリアは、今のことが夢でないことを確信した。
そして、痛む腕を持ち上げ、指先でＹｅｓを選択する。
小さなブザー音が鳴り、全てのウィンドウが閉じられた次の瞬間、ブレイブ・ティアーズの装甲は更に蒼を深め、全てのエネルギーゲ

ージは満タンに溜まっていた。
そうして、小さくウィンドウが一つ開く。

『リミッターの解除に伴い、全ての損傷箇所を修復しました。戦闘続行可能です』
「全く、気が利きますのね……！」

ここまでお膳立てされて、戦わずにいられようか。
ここで逃げれば、セシリアのプライドなど粉みじんに砕けてしまう。だからこそ、セシリアは己の意思で戦いの構えを取った。
全ての装甲に使われているシールドビットもマニュアル操作に回し、セシリアはそこに座るようにゆったりと構える。

「さあ、かかっていらっしゃいませ。これ以上好き勝手はさせませんわよ」
――オリジナルのエネルギー回復を確認。再度攻撃に移ります。

音声が響き、くすんだ青色のＢＴレーザーが無数に飛んでくる。
その全てをセシリアはあろうことかマニュアル操作のシールドビットで防ぎきりながら、《ブルー・ティアーズ》のＢＴビットを射撃し、それを無数に細分化して細かなレーザーに変え、更にはその一本一本をでたらめに動かしながら相手に当てるという滅茶苦茶な芸当を見せつける。

「当たりませんわよ、へたくそさん！」

ビットの動きは徐々に機敏になっていき、射撃の狙いもそれに応じて精確になっていく。
ついには、絶えず止まることなく撃ち放たれるレーザーの嵐が偽者を覆い、偽者は対処することすら出来なくなっていた。

「さあ、フィナーレですわ。《そのなみだをはらいましょう（Blow off Tears）》！」

次の瞬間、ビットは一斉に位置に付き、偽者をＢＴレーザーの檻へと閉じ込める。

膨れ上がっていくＢＴエネルギーに偽者が警告音を上げるが、時既に遅し。瞬く間に膨れ上がったエネルギーに耐え切れなくなったレーザーの檻は一気に炸裂した。

「――全く、随分じゃじゃ馬ですこと」

ＢＴビットとシールドビット、合わせて八〇基近くの全てをマニュアル操作したセシリアは、ずきずきと痛みを訴える頭を抱えながらも、箒が戦っているであろう場所まで飛んでいくことにした。

枷から解き放たれた、本当の『ブレイブ・ティアーズ』と共に。

第９６話　零の力（後書き）

セシリアのリミッターが解除されました。
そして初めての対話。この中でＩＳの人格と対話しているのは香織、ラウラ、一夏、セシリアだけですね。これから増えるかなー？

第９７話　龍、爪を現す（前書き）

かなり短めです。私用で出かけていたり、やることあったりで大変……。

第97話　龍、爪を現す

《双天牙月（そうてんがげつ）》と偽の《ウルフズ》がぶつかり、《尾》と偽の《デュノア・オルグイユ》が激突する。
火花を散らしてぶつかり合う中で、互い違いに鈴とキティが視線を交わす。
その直後、互いの相手からすれ違うようにして、別の相手と刃をぶつけ合った。

「こんのぉっ！」

超至近距離からの《龍砲》の速射を受けて、僅かに偽の『ミストラル・リヴァイヴ』が後退する。それを見逃すことなく、鈴はその手に持った刃で円を描くようにして次々に攻撃を繰り出していく。
しかし相手もそれで落ちるほどではない。
姿勢を立て直した偽者は自らの腕を鈴と打ち合わせるようにして振るい、確実に攻撃をしのいでいる。
鈴がいくら出鱈目に攻撃を放っても、まったく同じ軌道を描いてその刃を止め、追い打ちとばかりに撃ち出される弾丸を、鈴が逆に必死になって相殺するという状況が続いていた。

「ああもうっ、なんなのよ一体！」
「防御はありませんけど、反応速度は滅茶苦茶ですわ！　鈴さん、まずどちらかを沈めた方がいいかも知れません！」
「同感ね！」

刃を交え、鈴とキティはそんな言葉を交わしながらどちらを潰すべきかを模索する。
とはいえ、結論はすぐさま出された。一撃必殺を持っている『ミ

ストラル・リヴァイヴ』の方が圧倒的に危険性は上だと判断した二人は、一斉にそちらへと攻撃を傾ける。

《龍砲》で援護しつつ、鈴の《双天牙月》とキティの《ウルフズ》の刃が迫るも、偽者は音声を響かせることもなくその全てを捌き続けていた。

「このままでは埒が明きませんわね……！」

「……キティ、私がおとりになるわ。その隙にアイツぶっ壊しなさい」

「しかし、もしミスすれば……！」

「ミスしなきゃいいのよ。やるしかない、埒が明かないわ」

忌々しそうに偽者を睨みつけた鈴が、《龍砲》を撃つ手を休めぬままにそう言い放つ。

互いに頷きあい、それきり口をつぐんだ二人目掛け、『ミストラル・リヴァイヴ』の弾丸が迫る。

「おおおおぉぉぉぉぉぉぉ！！」

《龍砲》の轟音を響かせ、全ての弾丸を叩き落した鈴が吶喊する。

その目に見据えているのは『ミストラル・リヴァイヴ』ただ一体のみ、離れた位置にいる『灰狼（グレイウルフ）』のことなど気にも留めていない。

それは、背を預けているキティへの信頼の証でもあった。自らが落とされるよりも早く『ミストラル・リヴァイヴ』を落とすと信じているが故の行動。

その信頼に応えるかのように、キティは無言で《狼の咆哮（ウルフ・ハウリング）》を起動させる。集中力が高まっているおかげか、指向性を持たせられた音の波は鈴を避けて確実に偽の『灰狼』と『ミストラル・リヴァイヴ』へと襲い掛かる。

――オリジナルの突撃を視認。排除します。

無慈悲な電子音声と共に動き出そうとした『ミストラル・リヴァイヴ』の片腕、ただ銃を持っていただけの細腕を奇妙な音と共にヒビが伝う。

それがなんなのかを感知する前に、その片腕はキティの全力のスイングによって吹き飛ばされた。

「まず一本！　まだ終わらせませんわ！」

振りぬいた形から黒尽くめの中身に肘鉄を浴びせ、衝撃と共に背後から胸元へ掛けてその爪を押し通す。生々しいぞぷりという音と、金属質な金音が同時に鳴り響き、悲鳴にも似た音が辺りに響く。

「そして、これで――！」

まだ終わりではないというように爪をもう一本突き立てると、左右に捌くように思いっきり引き裂く。

「終わりですわ！」

その一撃で、爪の一撃を浴びた擬似コアはあっけなく砕け散った。

それを確認した鈴は、即座に背中へと刃を回し、その爪の一撃を防いでみせる。後ろから追ってきていた偽『灰狼』のそれを、鈴はそのあらゆる角度を見通せるハイパーセンサー特有の視野によって見つけ出し、即座に対応して見せたのだった。

「悪いけど、アンタたちの攻撃は終わりよ」

次の瞬間、鈴を中心として溢れ出る紅蓮の闘気。紅く、黒く、そ

して何よりも鋭く、しかし研ぎ澄まされたわけでもないそれが、カタカタと《双天牙月》を震わせていた。

「《双天牙月》、武装特性起動……！　《三爪龍神（さんそうりゅうじん）》！」

言葉にした途端、溢れ出ていた闘気は龍の形をとって鈴の周りに纏わりつく。

鈴の鋭い視線ははっきりと真後ろの偽『灰狼』へと注がれていた。

「反撃開始よ、クソ野郎」

振り向きざまに片方の刃を叩き込むと、頭の上で大きく回すようにして逆側の刃を逆の側面へと叩き込む。その瞬間、丁度刃を刻まれた二つの部分を結ぶように、その中心に大きな衝撃が打ち込まれた。

何が起こったのかもわからずに、偽の『灰狼』は咄嗟に鈴へ《ウルフズ》を繰り出すも、ガンガンッ！　と《双天牙月》で二度爪の同じ場所に打ち込まれ、弾かれた途端にその打ち込まれた場所へまたも衝撃が打ち込まれる。

「《三爪龍神》の能力は、一撃目と二撃目の中間地点に、その両方の衝撃を掛けた分の衝撃を叩き込む。受ければ受けるほど、アンタは負けに近づくのよ」

一〇の力で一撃目を加え、一五の力で二撃目を加えると、二撃目が加わった瞬間に中間地点へ一〇×一五、計一五〇の衝撃が加わる。それが《三爪龍神》の力。

今までへこみもしなかった偽者の装甲がいとも簡単に吹き飛ばされていることからも、その強力さは伺える。

鈴は獰猛な視線を隠そうともせずに、黒と紅の入り混じる龍と共

に吠える。

「これで、終わりよ。はぁぁぁぁぁぁあああああああ！」

至近距離からの瞬時加速（イグニッション・ブースト）、その擦れ違う刹那の間に、刃を叩きつけること六回。衝撃を叩きつけること三回。

それだけで、偽の『灰狼』の装甲は木っ端微塵に砕け、コア部分が露出するほどのダメージを蓄積させた。

「砕け散れェェェェェェ！！」

鈍く煌く刃の一撃は、少女の雄叫びと共に振り下ろされる。

音高く、その割れる音が響いた。

「ァァァぁぁあああああああアアアア！！」

一撃、また一撃。振るうごとに血が撒き散らされ、悲鳴が上がる。

彼女を見つめながら、葵は悲しそうな目で刃を受け続けていた。

「まだ続けるのかしら」

「当たり、前だ！　あの子を、あの子を貴女から、取り戻すまでは……！」

既に満身創痍となり、立っていることさえ辛いはずの彼女の目が鋭い光を無くすことはない。
それほど妄信していながらも、自らの存在の答えだけははっきりと見えてしまっている彼女を、葵は酷く哀れだと感じていた。
それと共に、憎悪が募る。
たとえ人形としてもそこに命があることは変わらないというのに、命を命とも思わず、これほどに悲しい定めの生を生み出す。
そんなことのために優しい母が死んでしまったのだと考えると、葵の心中は穏やかではいられなかった。
そして、葵は決断する。どうせ血濡れの諸手、今更新たな血で上塗りしたところでさしたる意味などありはしないと自嘲して。

「もうお眠りなさい、永遠に」
「黙れ、だま――」

不意に、音が止む。
赤く彩られた《ブレード》の切っ先が、彼女の背中から競り出ていた。丁度、心臓の位置にある擬似コアの残骸をその身に帯びて。

「哀れな子……。けれど、いずれ私がそちらに逝った時には、きっと……」

刃を抜き取って指輪へ収め、それから葵は呟きながら彼女の亡骸、いや、残骸をおもむろに抱きしめた。
すると、小さく彼女の唇が動く。動くはずのない、電池の切れた人形の唇が。

「さよ……う……な……ら……、『私』――」

ぷつりと、言葉が途切れる。

今度こそ、その短い『生』を終えた彼女の唇は、ほんの少しだけ笑みを形作っていた。

第９７話　龍、爪を現す（後書き）

鈴が初めて武装特性に覚醒。
そして『彼女』がリタイアしました。

第９８話　戦いは未だ終らず

「ハァッ、ハァッ……！」

息も絶え絶えになりながら、ダリルは自らの偽者と対峙していた。

偽の『ヘル・ハウンドｖｅｒ２．５』は大したダメージも入っていないが、その一方でオリジナルであるダリルにはかなりのダメージが蓄積している。

絶対防御を無効化する何らかの機構を持っているらしい無人機たちのそれは、確かに偽物たちにも受け継がれているらしく、攻撃を受けても絶対防御は発動しなかった。

つまりそれは、如何なる攻撃からも操縦者を守るＩＳのウリだった鉄壁の盾がなくなった、死がぐっと近づいたということ。

それを知りながらも、ダリルの眼から光が失われることはなかった。

「おい、後輩……、いつまで寝てるつもりだ……。もう傷はふさがってんだろ……」

後ろを見ないまま、ハイパーセンサーで後方を『視認』して声をかける。

赤い液体をべったりと装甲にまき散らして倒れていたフォルテは、その声にピクリと体を動かした。

「無茶、言わないでくださいッス……。動くだけで腹よじれる位痛いんスよ？」

「動けるんだな、ならやるぞ」

「ほんと、無茶っスね」

「やれないわけじゃないだろ」

「……そっスね」

短い言葉を交わしあった二人は、ゆっくりと姿勢を立て直していく。

痛みを堪えながら浮き上がったフォルテがダリルの後ろにつき、息を長く細く吐き出して《アイス・メイカー》を片手に、実体シールドをもう片方の手に構える。

それをハイパーセンサーで確認したダリルも、《Ａ（アポロン・アルテミス）＆Ａ》を『シフト・アポロン』に切り替え、片手に《アレス》を携えて偽者を睨みつけた。

すでに偽の『コールド・ブラッド』は零距離からの『シフト・アルテミス』の一斉射撃によって破壊されているため、状況は二対一になっている。

しかし、ほぼ無傷の偽者に対して二人は満身創痍、まともな勝負になるかどうかも疑わしい状況にあって、二人の戦意は尚も高まっていた。

「じゃ、行くぞ」

「うぃっス」

たった一言の合図とともに、二人は一気に攻勢に出る。

撃ち、殴り、蹴り、斬り、また撃ち、さらに蹴り、斬り、殴り、撃ち、殴り。

二人が得意とする守りの陣形『イージス』とはまるで違う、圧倒的な攻撃の形。今はまだまだ名を持たない攻撃の嵐に晒され、偽者は瞬く間にその装甲を傷だらけのものに変えていく。

――オリジナル二機の攻勢への傾倒を確認。反撃します。

「そうは」

「させねぇっス！」

電子音声をかき消すかのように、二人の攻撃はさらに苛烈さを増していく。

その圧倒的なまでの力に押さえつけられた偽者は、反撃を許されぬままに《アレス》によってそのコアを貫かれた。

時間にしてほんの十数秒、たったそれだけで、二人を苦しめていた偽の『ヘル・ブラッドｖｅｒ２．５』は完全に破壊されることとなった。

「……なんかあっけないっスね」

「歯ごたえなんてない方がいいだろ」

「ま、同感っス」

武装を収納（クローズ）した二人は、ぼやくように互いにそう言葉をかける。

と、そこで力が抜けたのか、思わず背中を壁につけて二人同時に座り込んでしまった。

とにもかくにも、ようやく二人は安堵の溜め息をつく。

ようやく、二人の戦いは幕引きを迎えた。

「ふっ、はぁっ！」

一方その頃、恋華（れんげ）と千冬（ちふゆ）は『ミステリアス・レイディ』と『散桜』の偽者が率いる無人機の群れと戦っていた。

と言っても、その戦力差は圧倒的に恋華たちの方が勝っている。
その一つに、『散桜』の武装特性は単一技能（ワンオフ・アビリティ）と平行使用しなければ機能しないことがあった。
五〇人分の刃が余計に降り注ぐ中、他の教員の援護射撃もあって、恋華と千冬はたった二人で群れの中を踊っている。まるで、そこが専用に用意された舞台だとでも言うように。

――散桜、まだ尽きないのか？
――もう二〇〇機以上壊してるけど、波長はぜんぜん途切れてないよ？

脳内で散桜のコア人格と会話しつつ、千冬はたった一振りの刃を振るい手近な数体を一気に破壊していく。
『散桜』の単一技能である《剣舞（ツルギノマイ）》に使われているのは《零落白夜》と全く同じエネルギーであり、千冬と『散桜』との間にそれが生まれたのは全くの偶然だった。
しかし、元々千冬がただ斬り合うためだけに作り出された『散桜』にリミッターはなく、そのシールドエネルギーも軍用の更に十数倍という滅茶苦茶なものだったために、《零落白夜》と同じようにシールドエネルギーを攻撃用に転換しても全く問題はないほどに残っている。
それに加えて無人機たちは絶対防御を無効化する何かを発動させているため、攻撃を加えられても絶対防御でシールドエネルギーが持っていかれることもない。破壊せずに動きを止めるには最高の条件だった。

「恋華、ここを任せてもいいか」
「いいけれど、どうしたんですか？」
「嫌な予感がする、念のために地下から束の無人機に使われていたコアを回収してくる」

「解りましたー、行ってらっしゃーい！」

攻撃を捌き、反撃しながら明るい声でそう返した恋華に背を向け、千冬は一〇本ほどの小さな刃を引き連れて校舎の奥へと向かう。

それを見送ったあと、恋華は静かにアクアクリスタルから全ての水を流しだした。

「さて、それじゃとっとと終わりにしましょうか」

――オリジナルのナノマシン量増大。

偽の『ミステリアス・レイディ』から音声が流れた瞬間、恋華目掛け全ての無人機が一斉に砲身を向ける。

危険だということが解っているのだろう無人機たちが熱線を撃ち放とうとした、その瞬間。

「どかーん、てね」

言葉通り、全ての砲身が強烈な爆発を起こし消し飛ぶ。そこには、きらきらと光を受けて反射する水滴が全てに付着していた。

ナノマシンを含んだ水を操作して砲身の中に満たし、熱線を撃つのに合わせてナノマシンを超微細振動させることで温度を急激に上昇させ、気化熱によって爆破、熱線のエネルギーも加わって砲身をも吹き飛ばす高火力を実現させたのだ。

『ミステリアス・レイディ』の技、清き熱情（クリア・パッション）の応用によって全ての砲身を吹き飛ばした恋華は、思い出したように全てのナノマシンを自身の周囲へと集めていく。

「あんまり時間掛けててもつまらないでしょう？　ここで終わらせましょう」

言い放った恋華の瞳はあまりに冷たく、もしも誰かが見ていたらきっと、彼女であることを忘れてしまうほどに鋭かった。

右手を肩の高さまでゆっくりと伸ばすと、手の平を空へ向けて開く。そこへ、周囲を漂っていた全てのナノマシンと、それに引き連れられた大気中の水分、先ほどまで砲身に付着していた水滴が全てそこへ集う。

やがてそこに形作られたのは、巨大な、とても巨大な槍だった。

透き通った水色があやふやな光を放ち、手ごたえのない手ごたえを感じさせるような不可思議な感覚をその手に伝えて来る。

「いつまでも千冬さんの手を煩わせているようなクズ共は、要らないのよ」

言葉と共に具現化させた近距離用槍型兵装蒼流旋（そうりゅうせん）を、逆手にした左手に構えると、水の槍を保持したまま右手を前へ押し出すようにして蒼流旋を投げる形に構える。

次の瞬間、一瞬で手元から離れた蒼流旋は、目の前にあった水の槍を纏い、水自体が螺旋を描いて飛んでいく。

一直線に偽の『ミステリアス・レイディ』目掛けて飛んでいくその槍を、偽者はいとも簡単に避け――、

「後方注意ね」

その言葉の意味を問う前に、再度後ろから飛来した水を纏った蒼流旋によってコアを貫かれる。

バキッ、という音とともに、擬似コアは一瞬にして崩壊を始めた。

それを冷ややかな目で見つめながら、恋華は口の端だけを小さく歪める。残りは、有象無象だけだと。

「――強いな、木偶」

瞳を爛々と輝かせ、薄く切り裂かれた頬から血を垂れ流しながら箒は笑った。

刃を打ち合わせること二千と八九、切り裂かれること一三、切り裂くこと一三。

互いの力は全く持って拮抗していた。

本来ならば確実に勝てるよう人間の限界を超えてチューンアップされたはずの偽者相手に、この短時間の間に追いつくほどの成長を見せている箒の意思は今だ折れず、刃も力も尽き果てることはない。

歯をむき出しに獰猛な笑みを浮かべ、箒は叫んだ。

「まだやれるだろう、まだ斬り合えるだろう！　私を映したのだ、この程度でくたばってくれるなよ！」

既にストッパーは振り切り、エンジンは温まりきっている。この状態で止まるなど、今の箒には考えられなかった。

一拍置き、箒はその刃を翳し一直線に大気を切り疾駆する。

音速を容易に置き去りにして振るわれたそれをしかと受け止めた偽者は、お返しとばかりに《雨月（あまづき）》の偽者をまっすぐ突き出してくる。

それを身を翻すことによって回避すると、ぐるりと一回転すると共に下から《空裂（からわれ）》を腕目掛け振りぬく。

「ッァア！」

ガキンッ！

甲高い金音で食い止められたその刃のもち手へ向かい、更に別の角度から《雨月》の突きの一撃が放たれる。

それをありえない方向へ腕をひねり曲げることで回避した偽者は、更に速度を上げて蹴りを放ってきた。

「そう来るかっ！」

辛うじて身を捻ることでそれを避けて見せると、身を捻った体勢を戻す反動に乗って自らも蹴りを放つ。

己の上空から放たれた箒の蹴りを同じように振り上げた足で相殺した偽者が、電子音声でなく口を開いた。

――さすがはオリジナル、追いついてくるどころか、凌駕せんとするとは。感服します。

「……喋れたのか？」

――つい先ほど目覚めたのです。我が名は『鈍刀（どんとう）』、望みはただ狂おしき程の闘争也。貴女は我に死を超えた闘争を感じさせてくれますか？

流れてきたのは、美しい女性の声。

しかし、そこには確かに戦いを求める修羅の如き力があった。

言葉を聞き、箒はただ唇を歪め笑みを形作る。そして、ただ一度だけ頷いた。

――ああ、良かった。本当に良かった。ただ一度、闘争のために生み出された我が命。なればそのために磨り減らすことこそ我が本望……！

「――来い」

嬉しそうなその声に、箒は一言そう告げる。

箒は知らぬことだが、人格を与えられなかった擬似コアの構成体が人格を持つことは、本来有り得ないことだった。

それを可能としたのは、その場の空気の成せる業か、それとも第四世代という存在を模倣したが故の奇跡か。

一瞬にして、場の空気が静まる。常軌を逸したほどの静寂は、かえってその心をざわつかせる要因となることが頷けるように、それほどまでに大気は清と静まり返っていた。

互いが剣を鞘に収め、大気を切り裂かんばかりの眼光と共に諸手をそれぞれの柄に添える。

「では。いざ尋常に……」

――……勝負。

言葉と全く同じ瞬間、再度解き放たれた互いの刃が煌く。

決着の時は、刻一刻と近づいていた。

第９８話　戦いは未だ終らず（後書き）

最早ＩＳの原形をとどめていない今日この頃。
でも突っ走ります。原作を悉くぶっ壊すのは私の悪い癖のようです。

第９９話　終らせるとき（前書き）

ブレーカーが落ちて、一回半分以上文章消し飛びました。
おかげで超書けてた戦闘描写が駄文に……！
次こそもっと上手く書いてみせる！

第９９話　終らせるとき

それぞれの戦いが終盤に迫る頃、千冬は一人学園内を全速力で飛んでいた。

「邪魔だ！」

刃を疑似コアに突き刺し、それと同時に小さな刃をそこら中の無人機の疑似コアに突き立てて一斉に破壊する。

崩れ落ちる無人機の中を疾駆し、たどり着いた突き当りには、巨大な隔壁とその横に小さなドアが備え付けられていた。

指紋と声紋、虹彩認証によってドアのロックを解除すると、ＩＳを一度待機状態に戻して急ぎ中へと踏み入る。

中は透明の隔壁で中央が仕切られており、向こう側には未だ解体され内部を調査途中だった、束の制作した無人機が横たわっている。

コアは取り外され、無人機の残骸ともいえるものがあるフロアとは逆の場所、丁度今千冬が入ってきた部屋に安置されている。

ここにいた職員は調査の途中で慌てて飛び出していったのだろう、調査に使われていたと思わしき無人機の残骸に埋もれるようにして、コアの入った透明のカプセルのようなものが机の上に置かれていた。

「これか……」

コアの入ったカプセルを量子変換して拡張領域（バススロット）へと納めると、コアの状態を確認してから外へ出て扉をロックする。

ハッキングでもされない限りは破られないだろうが、この状況ではそれも怪しいだろう。

ため息をつきながら扉から目を離した、次の瞬間。

轟音とともに学園が揺れた。

「っ、なんだ!?」

――いや、いやぁ！　だめ、消えてるの、いやぁぁぁぁ！！

――どうした、散桜（ちりざくら）！　なにがあった!?

脳内に流れる悲痛な『散桜』の声に驚いた千冬だったが、直後には『散桜』を通して自分の頭に流れ込んでくる金切り声のような悲鳴に思わず耳をふさいでしまう。

「ぐ、ぁ、なんだ、これは……!?」

頭蓋を直接揺らされるような衝撃とともに流れ込んできたのは、何かがすり潰されるときにあげるような悲鳴。

目を見開いて必死に空気を吸い込む千冬の脳裏に、次々と手の平大の大きさの、六角形の疑似コアがひび割れ、崩壊していく様が再生される。

崩壊したコアからあふれ出すエネルギーは無人機の中だけに留まることなく、外へ漏れだした途端に恐ろしい威力の爆発を引き起こしていく。

――いっぱい消えてるの……、やだよぉ……！

――散桜、気をしっかり持て！　意識の流れに飲まれるな！

脳内に流れ込む『散桜』の悲痛な叫び声を振り払うように、必死で呼びかけながら何とか意識を保ち立ち上がる。

いまだに流れ込んでくるおぞましげな叫びのせいで少しばかり視界が揺れはするものの、まだまともに動けるくらいには保てていた。

「爆発……、自爆しているのか……!?」

その結論に至った千冬の脳裏に、昨日の巨大ＩＳの爆発が浮かび上がる。

エネルギーが不十分だったあのときですら半径八キロ圏内が軽々と吹き飛んだ。ここでそれが起これば、ただでは済まないだろう。

「まずい……！」

一気に廊下を抜け、正面玄関近くまで飛んでいく。

そこに広がっていたのは、ぼろぼろになった教員たちとかろうじて立っている蓮華、そして一面が焼け野原になった正面玄関だった。

残っていたのはほんの少しの建物の残骸だけ、あとはほとんどが融解してしまっている。

「みんな無事か！？」

「辛うじて、ですね……。織斑先生、コアの方は？」

「無事回収しました。それよりこれは……」

「突然爆発したの……。中はもっとひどいことになってると思う。しかも、連中まだまだ来てるわ」

恋華の言葉通り、空にはまだ数百体の無人機が今か今かと千冬たちへ視線を注いでいた。

それを苦々しげに見つめながらも、まだ続いている脳内に響く声に意識を持って行かれないように頭を振る。

「……限界だな、全員ここを離れるぞ！　私が生徒を先導する！早く！」

「千冬さん、専用機持ちは！？」

『それならこっちで何とかするよ』

恋華の言葉に答えたのは、突然開いた青い仮想ディスプレイに映

り込んだ束だった。

『これは専用機持ちだけに流してるよ。専用機持ちは沿岸部に集合、そこで全員拾って離脱するから！』

「わかった、私は生徒を先導して脱出する！　皆もよろしく頼む！」

「「「「は、はい！」」」」

「千冬さん、私も行くわ」

「……わかった。束、あいつらを頼むぞ」

『まっかせなさい！』

力強く頷いた束に頷いて返すと、ディスプレイが閉じてから千冬が声を張り上げる。

「これより、シェルター内の生徒を保護し、学園を脱出する！　全員遅れるな！」

その瞬間、爆音にも負けぬほどの返事が鳴り響いた。

香織の体を保護した鈴も、束からの放送を聴いた。

「沿岸部ね、キティ、急ぎましょ！」

「……いえ、貴女とはここでお別れですわ」

小さく微笑んで言ったキティは、香織を優しく撫でると身を翻す。
医務室から駆けて出て行ったキティを慌てて追った鈴は、出口で待ち受けていたキティによって頬に口付けられた。

「ふふ、お別れのキスですわ。お兄様をお願い致します」
「ど、どうしてよ！？　一緒に行けばいいじゃない！」
「私と貴女は元々敵同士、この辺りで元に戻りましょう。楽しかったですわ、とっても。ありがとう、鈴さん」

儚げな笑顔を見せてそう言ったキティに、何も言えず立ち尽くす鈴。
キティはそんな鈴から視線を外すと、一直線に外へ向けて飛んでいった。
それをぼーっと眺めているばかりだった鈴も、気を取り直すように一つ息を吐き出すと、沿岸部へと視線を向ける。

「ボーっとしてる場合じゃない、か」

頭を振り、それから宙を舞う。
別れを、振り切るように。

「おおおおぉぉオオオ！」
――ハァァァァ！！

金音と火花を撒き散らし、二人は疾駆する。
『紅椿』と『鈍刀』、二つの刃は互いに突き殺さんと、切り裂かんと喉笛を、或いは心の臓目掛け振るわれる。その度に、お互いの集中力が研ぎ澄まされていくような感覚に陥っていた。
長い斬り合いの中で、二人はそれぞれの形に進化していく。
『紅椿』は、装甲が壊されれば余剰エネルギーで補い、刃が折ればエネルギーで刃を形作る。
『鈍刀』はその強靭な装甲と刃でもって、無尽蔵の『紅椿』に挑んでいた。

「クク、アハハハハハハ！」
――フ、アハハハハ！」

『鈍刀』も箒も、いつしか笑っていた。それは互いの命を懸け、それを誇りとして斬り合う者同士だからこそ通じ合ったもの。
己の刃に一念を乗せ、全てを必殺の一撃として繰り出す。そうして、尚拮抗する両者の間には、いつしか奇妙な絆すら出来上がり始めていた。
そして、戦いあう中で、『鈍刀』の姿は徐々に変わっていく。
箒との斬り合いの最中、その意気に穿たれ、一対の眼が。
その気に当てられ、形作られた口からは美しい声が。
人により近くなった『鈍刀』との斬り合いは、その戦いを更に加速させていく。

「ああ楽しい、これほどに楽しいとは思わなかった！　どうだ、『鈍刀』！」
「ええ、とても楽しい！　これこそ闘争、求めていたもの！」
『鈍ら刀』と名づけられた彼女だったが、その刃は何よりも鋭く、

そして美しく磨き上げられていた。
その刃でもって彼女が切り裂くのは、箒という存在そのもの。それほどの思いを、彼女はこの戦いに賭けていた。
しかし、箒もそれで負ける程度のものではない。
一秒一秒を感じ取り、更にそれを細かくしていった、それすらも感じ取るその感覚は、更に鋭敏化を続けていた。
そして、次の瞬間。

ほんの僅か、『次の時』がその視界に映る。

その一瞬に従って振り下ろした刃は、確実に『鈍刀』の刃を断ち切っていた。

「くっ……！」
「今のは、一体……！？」

自らも理解できない現象だったが、それでもその一瞬の太刀は確かに今の自分を超えたものだと確信した箒。
それを目の当たりにしながら、『鈍刀』は突然胸を押さえその場で蹲ってしまう。

「どうした！？」
「くっ、うぅ……っ！　もう、限界のようです……！　いつまでも爆破しないことが気に障ったのでしょう、強制的に自爆プログラムが起動しました……！」
「なっ！？」

苦悶の表情で言葉を零すように呟きながら、彼女は更に続ける。
勝ち目がないと知りながらも挑んだ武士（もののふ）として、せめて最後くらいは望む最後を得たいと感じて。

「逃げなさい、箒……！　私が爆発すれば、この辺り一帯は吹き飛びます……！」
「しかし……！」
「行きなさい！　……ありがとう、もう十分よ。楽しかった……、生を受けた身として、これほど楽しい時はなかった……。もう、満足よ」

苦しみながら、それでも笑みを浮かべて言った彼女に、箒は歯を食いしばりながらも頷いて見せた。
背を向け飛び去っていく箒を見送りながら、彼女はその笑みを小さく、けれど消さずに保つ。せめてもの抵抗だった。

「――お願い、箒。私が望んだ高みへ……！」

願いは届いたのだろうか。

次の瞬間、当たり一帯を強烈な爆発と爆風とが包み込み、彼女の体躯はその中に消え去った。

第９９話　終らせるとき（後書き）

ということで、ＩＳ学園崩壊開始。
さて、どうなることやら。

第１００話　終わり、終る。（前書き）

祝、１００話！
けれどまだまだ終る兆しが見えません！

第１００話　終わり、終る。

「束社長！」
「りんちゃん、よかった、無事みたいだね。香織ちゃんは？」
「無事よ。まだ眠り続けているけど」

沿岸部で待っていた束の元に最初に到着したのは、香織を抱えた鈴だった。
疲れを見せながらも気丈に振舞う鈴を見ながら、束はその手で香織を抱き上げる。研究者であるはずの束が、その細腕で香織を軽々と持ち上げたことに、鈴は少なからず驚きを見せた。

「束社長、結構筋肉あるのね」
「まあねん。ほら、早く乗った乗った！」

束に急かされるままに乗ったそれは、巨大な戦艦だった。
戦艦と言っても形は奇妙で、本来あるはずの中央部分の突出した司令塔が存在せずに全体的に流線型の鋭い形を持っている。
それをいぶかしげに見つめながらも、鈴は束に続いて戦艦の甲板へと乗り上げた。

「私は皆を外で待つから、りんちゃんはあそこのドアから中に入ってね。はい、香織ちゃんをよろしく！」
「わかったわ」

再び腕の中に帰ってきた香織をいとおしげに見つめながら、鈴が頷く。
それを見て、束も頷いてから戦艦を降りる。そこで、爆発を続ける校舎から飛んでくる複数の影が見えた。

「社長……！」
「束さん！」
「かんちゃん、いっくん、おっかえりー！　そして他二名も不本意ながらお帰り」
「相変わらず拒絶されているな……」
「まあ、そういう人だって割り切っちゃえば、ほら」

やってきたのは、ボロボロになりながらも晴れ晴れとした顔の簪、ラウラ、一夏、シャルロットだった。
扱いに差はあるものの、ＩＳの生みの親にあったことで安堵したのだろう、全員の顔が柔らかく綻ぶ。

「束さん、これってどうなってるんだ？」
「さぁ？　とにかく皆中に入って！」
「お、おう」
「うん……」

言われるがままに四人を押し込むと、次にやってきたのは葵だった。
人力で無人機をなぎ倒しながらやってきた彼女は、疲れた様子もなくその場に降り立つ。文字通り、空から。

「たっちん、これは……」
「ちょっとした伝だよん。ほら、入って入って！　あとは箒ちゃんとイギリス娘だけだから！」

そういった直後、海の方から無数の熱線が降り注いだ。
甲板を貫通するかと思われたそれだったが、薄い青色のシールドバリアによって進路を阻まれる。

「おおう、早いねぇ。でも無駄だよ、このシールドバリアは特別製、そんなものじゃあ破れない」

にやりと笑った束だったが、そこに通信が飛び込んでくる。

通信の主は若い男だった。

『クイーン、悠長に構えてる場合じゃないぜ!?　このままうじゃうじゃ来たら、今度は進めなくなっちまう!』

「もうちょっと待てないの!?」

『いくらクイーンお手製の防衛システムっつっても限度がある!頼むから戻ってきてくれ!』

「……わかった。あーちゃん、乗って!」

「わかった!」

決断を下した束の声とともに、二人は戦艦の甲板へと上がる。

二人が上がりきったところで、甲板から続いていた階段が戦艦内に戻されていく。それで、陸との行き来は出来なくなった。

葵と共に司令部へと戻った束は、即座に通信回線を開いて今だ戻ってきていない専用機持ちへと連絡を入れる。

「箒ちゃん、イギリス娘、聞こえる?」

『姉さん。ああ、聞こえている』

『こちらも聞こえていますわ』

「これからこの島を脱出する、逃げられるなら、今すぐ沿岸部からこの船を追って!」

その言葉に、通信回線の向こう側にいるはずの二人の声が消える。

何事かといぶかしんだとき、静かに箒の声が流れてきた。

『私は、ここで奴らの動きを止める。追われては、満足に逃げられないでしょう』
「箒ちゃん！？　なに言ってるの！？」
『……姉さん、私は死にません。彼女との斬り合いに水を差した無粋者をこの手で切り裂くまで、死ぬわけには行かない』
「箒、ちゃん……」

静かに、しかしはっきりと伝わってくる箒の思い。
いつの間にか大きく成長した彼女を、束は確かに感じていた。

『篠ノ之束の妹を、信じてください』
「……わかった、ちゃんと戻ってきてね」
『ええ』

優しい笑みを浮かべ、束は通信を切る。
その目には、小さく涙が浮かんでいた。

「社長……」

簪の小さな言葉が、その場に響く。
と、後ろを振り向いた束の顔は笑顔に変わっていた。

「さて、皆に紹介しないとね！　この船とここを根城にしている仲間たちを！」

いつの間にか集まっていた全員にそう告げると、束はカツン、とつま先で床を叩く。
次の瞬間には、天井や床、壁の中から仕掛け扉で出てくる三人がいた。

「なっ！？」
「どういう演出よ……」
「やぁやぁ諸君、ご苦労さん！　俺はK・K（ケーケー）・、この船、蜘蛛の巣（スパイダーウェブ）の船長にしてリーダーさ！　よろしくな！」
中央にいた気さくな男がそう声を上げる。
人懐こそうな笑みだったが、どこか気味悪さを感じさせるそれに思わず一同は少しばかり足を引いてしまう。
それに続いて口を開いたのは、傍に座っていた黒人の男性。
「……クレイマンだ……。よろしく……」
「あ、ああ、よろしく」
がっしりしたその体躯と低く太い声、言葉少なにもその迫力は十二分に伝わってくる。
一夏だけがややびびりつつも声を返したが、他は思い思いのリアクションをとっていた。
「ベル・ル・ベルよ、ぶっ壊したいものがあれば何でも言ってねー！」
既に十分ぶっ壊れているんじゃないかというぐらいテンションの高い女性が、とても楽しそうに言った。
どう返していいのかわからずに苦笑いで返した一同だったが、どうやら言っただけで満足したらしく、立ち上がったままの体勢で椅子に再び座り込んだ。
「……えっと、個性的な人たちね？」
「ちなみにあと二人いるよ！　一人は腹痛でトイレ、もう一人は引きこもってるから！」

「ろくな奴がいない！？」
「これでも《彼ら》を除けば世界最高峰のハッカーとクラッカーなんだよ？」
「そ、そう……」

《彼ら》が誰なのかを聞きたかった鈴だったが、なんだか妙に疲れてしまったためやめておいた。

「それじゃあ、皆それぞれ一休みしてから会議室に来て。マップはこっちで皆の方に転送しておくから」
「解ったわ。ありがとう、社長」
「気にしないで」

朗らかな笑みでそう返すと、束はその場から立ち去る。
あとには、微妙な空気を漂わせる三名と一夏たち一同が残された。

「……どないせいっちゅうねん」

「良かったのか、セシリア？」

宙に浮き、箒はふと聞いた。
戦いを終えたあと、箒と合流したセシリア選んだのは、脱出ではなく足止め。箒と共にいるということだった。

「ええ。私の相棒は貴女ですわよ」
「……ふ、ああ。わかっているさ」

まんざらでもないような顔で微笑んだ箒は、軽くセシリアと手を合わせ音を鳴らす。
そんな二人の目の前には、一〇〇〇機を超える無人機の群れが浮かんでいた。
それをまっすぐに見据えながら、二人は頬を吊り上げる。次の瞬間、箒の《絢爛舞踏（けんらんぶとう）》が発動し、削り取られていたセシリアのダメージを一瞬で回復させる。

「アイツの弔い合戦でもある。派手にやるぞ」
「『鈍刀』、でしたわね。……ええ、貴女がそう言うのなら、それほどの相手だったのでしょう。その無念、私の推し量れるものではありませんが……」

リミッターの解けたセシリアが、『ブレイブ・ティアーズ』のシールドビットを全て宙に浮かせる。
その眼は、普段とはまるで違う猛々しい光を灯していた。

「せめて、ここで晴らしましょう」
「ああ」

紅と蒼、互い違いの色を撒き散らし、二人は学園中が吹き飛んでいく中で舞う。
近づいていた数機を一瞬で切り伏せ、その背後から迫る数体を撃ち抜き、入れ代わり立ち代わり壊していく。

「いざ――」

「――推して参るッ！」

刹那、紫色を持った一筋の光が敵の群れへと吶喊した。

そして、ついぞ彼女たちの消息は知れぬものとなることを、彼女たちはこのときはまだ知らずにいた。

翌朝、世界は混乱に包まれていた。

『世界中の諸君、おはよう。私の行ったデモンストレーションは見てもらえただろうか。ネットでも流れているから、是非見て欲しい。私の作り出した擬似ＩＳコアを使用したＩＳによって、ＩＳ学園は壊滅した。既に時代は女性優位ではない、新たな平等の時代がやってきたのだ』

混乱の原因である巌隆の放送は、いまや世界中で聴くことが出来る。

各国のニュースはこれを繰り返し報道し、男でも使える擬似ＩＳコアが作り出されたとテロップを躍らせている。

世の男たちがようやくまともな世界になるのかと考える一方で、有識者たちはその危うさに危機感を抱いていた。

今までは女性優位とはいえ戦争に使われぬよう条約が結ばれていたＩＳコアだったが、万人が使える擬似コアはその括りには入らな

い。まして同等の戦力がやり方次第でいくらでも手に入る可能性があると知り、自国拡大、軍備拡大を狙う者たちの思惑は錯綜していった。

その日までは。

『これより、世界は新たな時代を迎える。平等な、死を迎えられる世界へと』

その放送が流れた当日、世界中の首都を五〇〇機単位の無人機が襲撃、世界は未曾有の混沌へと落とされていく。

しかし、舞台の幕はようやく開けたばかりであった。

第１００話　終わり、終る。（後書き）

蜘蛛の巣、消えた箒とセシリア、そしてキティ。
混乱する世界の中で、束たちを乗せた船は一体どこへ向かうのか。
次回より第二幕の準備期間となります。どうぞお楽しみください。

第１０１話　旅の支度（前書き）

切りのいいところで切ったのでやや短め。

第１０１話　旅の支度

あの襲撃戦から数日が経ち、今日もまた変わらぬ太陽が上る。
その日差しの中、どこかの海を漂う『蜘蛛の巣（スパイダーウェブ）』の本拠地である戦艦の甲板に出た私、凰鈴音は大きく伸びをして燦々と降り注ぐ太陽光を一身に浴びていた。

「ふぅ……。……なんか、嘘みたい」

激動の日々を思い返し、鈴は一人ごちる。
戦いの連続だったあの日々から幾日がたった今、こうして平和な海を眺めているとそれも嘘だったように感じられてしまうのは、仕方のないことなのか。
そんなことを思って空を眺めていると、とつぜん頬にひやりとした感触が当てられ、飛び上がりそうになりながら振り返る。

「やっ」
「ナターシャ……。もう、脅かさないで」
「あら、ごめんなさい」

冷たく冷やされた水の入ったカップを渡され、鈴は苦笑いしながらもそれを受け取って一口呷る。
１２月の冷たい風も、朝の今は爽やかに感じられる。
そんななかで、ふと鈴が思い出した。

「そういえば、襲撃されたとき、ナターシャってどこにいたの？」
「ん、束ちゃんのお願いで情報収集に行ってたのよ」

ナターシャが合流したのは、ＩＳ学園から脱出した翌日のことだ

った。
彼女の持ち帰った情報によって巌隆（いわたか）の動きが表立って行われることを知った、その直後に各国の首都が攻撃されてしまったため、鈴たちは動くことが出来なかったのである。

「それで、これからどうするの？　もう三日以上海の上よ？」
「まずは北アメリカに移動するわ。北西部の軍の拠点の近くにゴーストタウンがあるの。そこで私の友人と落ち合うことになってるわ」
「ふんふん、それで？」
「動くには情報がいるわ、そのためにアメリカ軍の一部に協力してもらうのよ。私のこともあるし、色々と都合付くから」

ぐいっ、と一口で水を飲み干したナターシャは、タンクトップに押し込まれた胸を揺らして空を見上げる。
その胸を羨ましそうに見つめる鈴だったが、やがて溜め息をつくと、自身も空を見上げた。

「香織、まだ目が覚めないの」
「……色々、考えたりしてるんじゃない？　死んでないんだし、いつかは目覚めるわよ。私たちががんばってれば」
「……そう、ね」

とはいえ、やはり気分は沈む。
香織が意識不明のままな上、箒とセシリアまで消息不明になってしまっている今、皆やはり精神的に負担が大きくなっている。
そのことを感じ取ったナターシャは、水を飲み終えた鈴をぎゅっと横から抱きしめた。

「な、なによっ！？」
「無理したらダメよ、香織君が起きたら心配しちゃうもの」

「ナターシャ……」

あやすように手を動かすナターシャに、鈴は小さく溜め息をついて身を預ける。その目には、蒼く広がる空が映りこんでいた。

「……どうしてこんなことになっちゃったんだろ」

「さぁ。けど、世の中ってこういうものよ。理不尽そのものみたいなものだけど、私たちはその中で生きていくしかない。でしょう？」

どこか悟ったようなナターシャの言葉に、鈴は静かに頷く。しばらくの間そうしていたのか、気が付くと甲板にはひとりの男が出てきていた。

「あら、クレイマン。おはよう」

「おはよう……。早いな、二人とも……」

軽く挨拶を交わしたクレイマンは、燦々と降り注ぐ光に目を細めながら甲板の中心に座り込み、座禅を組む。

澄んだ朝の大気の中で黒人が座禅を組んでいるその光景は、なんともいえない違和感を醸し出している。

「……そろそろ皆を起こしてくるわ」

「そうね、うん。行ってらっしゃいな」

ナターシャに見送られ、鈴は再び船の中へと戻ることにした。

船の中は随分と広く、バインド・カンパニー本社と同じように銀色の塗装が施されている。さながら近未来の宇宙戦艦の中と言った所だろうか。

その中を歩いていく鈴が最初に叩いた扉には、「一〇一」というプレートが飾られている。

三度ほどノックすると、中から鍵が開けられ扉が押し開かれた。

「あ、鈴か。どうした？」

「起こしに来ただけよ。もう少ししたら朝ごはん作るから」

「おう、わかった」

中から顔を出したのは、Tシャツ姿の一夏だった。短く言葉を交わすと、再び扉を閉める。

次にあけたのは「一〇二」、一夏の部屋の隣の扉。

同じように三度ノックしたところで、ごそごそと物音がして扉が開かれる。

「ん……、ああ、おはよう鈴」

「おはよう、シャルロット。もうすぐご飯だからね」

「手伝う？」

「いいわよ、昨日食事当番だったでしょ」

「そう？　それじゃ、お言葉に甘えさせてもらおうかな」

「それじゃ」

扉を閉め、また歩き出す。

今日も、一日が始まった。

「さて、皆集まったね」

それから数時間後、艦内にいた全員が会議室に集まっていた。
その中で、束だけが立ち上がりモニターの前に陣取っている。
モニターには北アメリカの地形図が載せられており、複数の赤い点が各所に配置されているのが見えた。

「これから皆には、昼のうちにアメリカに渡って、夜になったら行動を開始してもらうことになる。K．K．説明」
「あいよ。まず今回の目的だが、情報の入手と物資の補給だ。ここからどう動くにも、まずは情報が必要だからな。しかも、情報化されていない生のものが。だから、このお嬢さんのお知り合いに協力してもらって軍から情報を貰うってわけだ」

そこでK．K．が言葉を切り、モニターを少し操作する。すると、沿岸部からやや離れた部分にあった赤い点が拡大され、「Ｇｈｏｓｔ　ｔｏｗｎ」の文字が綴られた。

「今回は班を二つに分けるわ。一つはここで船を守り、一つは私と共にここまで行って情報と物資を補給する。物資は仲間が横流ししてくれるから問題ないわ」
「横流しね、それ大丈夫なの？」
「ええ。あの基地は軍の中でも機密とされている場所だから、少しくらいおかしくても誰も気にしないわ」

疑問を投げかけたベル・ル・ベル、通称ベルに対してナターシャが返す。
と、そこで初めて葵が口を開いた。

「私はここに残るわ。香織を守らないといけないし」
「その方がいいわね。私と一緒に来るのは……、鈴ちゃん、簪ちゃ

ん。一緒に来てちょうだい」
「ん……」
「わかったわ。一夏、シャルロット。香織を頼んだわよ」
「ああ、任せとけ」
「大船に乗ったつもりでいてね。乗ってるけど」

勢い良く頷いた一夏とシャルロット。
この二人には都市襲撃が行われる前に香織が男であることをばらしてしまっているため、大して話がギクシャクすることもなくなった。
尤も、一番大事な部分はまだ束と葵の心の中に秘められているのだが。

「よし、それじゃあ束ちゃん、着岸次第行ってくるわね」
「頼んだよ」

先の一件以来、今までのような束は鳴りを潜め、どこか冷たい目をした彼女が言う。
その気持ちを知ってか知らずか、ナターシャは明るい笑みを浮かべて頷いた。
話が一段落したと思った途端、パタンと本を閉じる音が響く。そこには、冷めた目で一同を見つめる少女がいた。
名は空（くう）の一文字、性別は女。齢八つの幼子でありながら、ハッカーとクラッカーを兼任しあらゆる電子網を網羅する知識と腕を持つ異端児だった。
彼女は元々束が拾った少女だったが、一通りのことを学ばせたあとは『蜘蛛の巣』で経験を積ませるために束が送り込んだのだ。
彼女は、とかく人との交流を持たない。そんな彼女がこの場に出てきているのは、一重に束に出てきてくれと頼まれたからだった。

「終わりましたか」
「終わったわよー？」
「それじゃ」

ベルの返事に、空はつまらなそうに呟くと椅子から降りて歩き出す。

その背中は、万人を拒絶しているようにも思えるほどに寂しいものだった。

それから更に数時間後、あと二時間も経てば日も落ちるだろうという頃になって、一向は北アメリカ北西部の沿岸部に接岸していた。

束が移動用にと艦内で突貫で作り上げた『フロートボート』が陸に上げられ、物資運搬用のコンテナがその後ろに接続される。

「フロートボートには一応武装も積んであるけど、最悪の場合はISを展開してね」
「わかってるわよ。そっちも気をつけて。三日もあれば帰れるから」
「ん。了解」

ナターシャと束が手の平を打ち合わせ、音を弾けさせる。陸の乾いた大気と海からの湿った風が混じりあう中に、それは不思議な音色を響かせた。

薄いオープンカーのような形をした、金属製の『フロートボート』に乗り込んだナターシャ、鈴、簪の三人は、皆ジャケットとジーンズというラフな格好である。

着岸地点は、マカー湾とオゼット湖の丁度中間辺り。ここから森と山をGPSを頼りに突っ切って、あらかじめナターシャが座標を入力した位置、『地図にない基地（イレイズド）』近くにある山奥のゴーストタウンへと向かう予定になっていた。

「それじゃ、行ってきます」

「行ってきます、社長」
「行ってきます……」
「ん、皆行ってらっしゃい！　気をつけてね！」
束の声を背に受け、三人は一路廃墟の町へ向けて走り出した。

第１０２話　穏やかなひと時

北アメリカの肥沃な大地の上を、一台の奇妙な車両が走っていく。
それはスポーツカーを上から押し潰したような、流線型そのもののような形で、しかもタイヤではなく何かの力によって地面から浮いていた。
それに乗った三人の女性と少女が、風を切って走る中を心地よさそうに目を細めて息を吸い込む。

「いい風ねー！」
「ほんと、最高ね。これで戦争が起こらなければもっと最高」
「同感……」

向かい風に負けないように声を張り上げる鈴に、ナターシャと簪が小さく同意する。
無論その声は風によって掻き消されてしまっているが、それでも二人の表情を見て鈴が笑う。本当に、笑える日が来ればいいと、そんな願いをこめて。
木々の間を駆け抜ける『フロートボート』の速度は二〇〇キロを超えているが、防風はされているため身を乗り出さなければ風を浴びることはない。
しかし、鈴だけはそんなことお構い無しに防風用の透明な障壁から身を乗り出して風を一身に受けていた。
――そんなこんながあって、三人が人気の全くなくなったゴーストタウンにやってきたのは、日が落ちてからのことだった。

「んー、くらっ！」
「そりゃ夜だし、外灯ないんだから暗いでしょーよ、っと。はい簪、ライト」

「ありがと……」

至極当たり前のことを驚いたように言い放ったナターシャに、鈴がそんな言葉で返してバックパックからライトを取り出し、簪にも手渡す。

大き目のマグライトは意外と彼女たちの小さな手にも馴染み、いざというときはぶん殴っても故障しなさそうな程度に頑丈だった。

尤も、本当にいざというときには刃の雨あられが降り注ぐことになるだろうことは言うまでもない。

「それで、どこに行けばいいの？」

「とりあえず近くの廃屋に入りましょう、今日の寝床よ」

「うそっ、日帰りじゃなくて！？」

「そりゃ掛かるわよ……。もう真夜中よ、動くなら明日の夜ね」

電子情報網が発達した現代では、たとえ夜の暗闇に紛れ、月の明かりを頼りにしても見つかるときは見つかってしまう。夜を跋扈する魔物など、当の昔に消え去ってしまった。

しかし、そんな現代でもやはり夜闇というものは非常に隠密性に優れている。黒と白、どちらに溶け込みやすいかと問われれば断然黒と答える方が多いだろう。何しろ、黒は時間と共にやってくるが、白なんてものはやってこないのだから。

白夜という表現もあるが、あれはただ緯度の関係で太陽が沈まないだけであり、空や大気が白くなるわけではない。

しかし、真夜中を過ぎて時刻は深夜二時を回っている。この時間から動き出すのは体調的にも良くないだろう。

ナターシャは鈴をそう説得し、それから寝床探しに精を出すことにした。

「それにしても、凄い量の廃屋ね」

「頑丈そうなのを探してね」

ゴーストタウン、と一口に言っても、その朽ち方は様々である。自然災害で出て行かざるを得なくなってしまったものもあれば、戦争や政治によってそうせざるを得ない場所もある。もしくは、開拓期に作られた村々のうちのいくつかは、その後の次なる開拓地に移り住んだときにそうなってしまったものもあるだろう。

とにかく、共通しているのは人がいないということ。

それはつまり、殆ど物音がしないということでもある。それは、とても不気味なものだろう。事実、この三人の中で一番心霊的なものが苦手な鈴は、ややびくびくしながら散策していた。

そんな彼女は近くの廃屋を覗き込む。中は酒場として使われていたらしく、丸テーブルやカウンターなどが今なお形を残していた。座った途端に崩れ落ちそうなほどに脆くなっていそうなそれをみて、ここは無理だと判断し、早々に次の場所を探しに行く。

それから更に一〇分ほどして、三人は大きめの一軒家を寝床とすることに決めた。

「結構よさそうな場所じゃない」

「窓もあるし、身を隠す場所もある。フロートボートとコンテナは裏に隠してあるからね」

「……ご飯食べよう。お腹空いた」

「あはは、そうね。鈴ちゃん、バックパック貸して」

「ん、はい」

軽く床を足で払って埃をどかすと、近くにあった木材を壊してそこにくべる。

バックの中からライターと着火剤を取り出すと、くべた木材の中心に入るように入れて、そこにライターで火をつけた。

木材がからからに乾燥していたおかげで、火はあっさりと付き、

三人の体をゆっくりと温めていく。

「さて、とっととご飯食べて休みましょう。見張り番は私がやるから」

「大丈夫なの？」

「これでも前はモノホンの軍人さんだったのよ？　一徹くらいどうってことないわよ」

「それじゃあ……お願い……」

了解、と上機嫌に返したナターシャに笑みを向けながら、鈴はバックパックからレトルトの食材を取り出していく。

どこかキャンプを彷彿とさせる夜だった。

そして、翌朝。

目を覚ました鈴は、寝袋から這い出ると今だ寝ぼけ眼な自分をを起こすために、のそのそと家の外へ出る。

太陽は随分と高く上っていて、照りつけてくる日差しは起きたがらない瞼を引っ張り起こすのに十分な力を持っていた。

「んー……っ」

ぐいっ、と一杯に腕を上に伸ばし、体のコリを解す。ちなみに、今の鈴たちはそれぞれ束の用意した軽装のＢＣ制服を着ているので、

ぱっと見ただけではただキャンプに来た一学生にしか見えないだろう。

鈴が朝の日差しを浴びていると、後ろからナターシャがやってくる。手には、見慣れない黒い物体、拳銃が握られていた。

「ちょ、なにそれ？」

「護身用に持ってきておいたの。一応整備しておこうと思ってね。使う？」

「冗談よして。訓練は受けたけど、人に向ける勇気なんてないわ」

「あら、フランスの時には随分暴れたくせに」

「香織が絡めば別よ、別」

片手で銃をくるくると回しながら言うナターシャの言葉に、鈴は苦笑いしながら答える。

中国で代表候補生をやっていた頃、鈴は他の候補生と共に軍で一通りの訓練を受けていた。

かつては色々横暴を働いて鼻つまみ者になっていた中国だったが、それも今となっては昔の話であり、今ではまともな国としてキチンと成り立っている。

そんな中国の軍で訓練を受けていた鈴は、しっかり銃器を扱う訓練も受けていた。もちろんそれは万が一のときのためのものだったが、的に向けるのと人に向けるのでは天と地ほどの差がある。それこそ、フランスのときのように精神状態に一石を投じるような状況でなければ扱えないだろうということは、鈴もキチンとわかっていた。

当たり前の答えが返ってきたことにややつまらなそうな顔をしながらも、同僚にしてある意味先輩である鈴が自分のことをわかっていることに安堵し、ナターシャは銃に安全装置をかけるとベルトに仕舞いこむ。

上手い具合にベルトとズボン、そして上着に隠されて見えなくな

っている銃を確かめ、ナターシャは軽く鈴の背中を叩いて中に戻ろうと声をかけた。

「ん……、おはよう……」
「おはよう、簪ちゃん」
「よく寝てたわねー。ほら、寝癖。こっち来て」
「ん……」

中で起き出して来た簪を呼び寄せると、鈴はポケットに入っていた櫛とバックパックに入っていたスプレーを使って、簪の髪を整えていく。

ところどころが跳ねている簪の髪をゆっくりと水で濡らして櫛で梳かしていくと、簪は時折心地よさそうに目を細め「んぅ……」と声を漏らす。

その様子が鈴の琴線に触れたのか、鈴は笑みを漏らし楽しそうに髪を梳いている。

「気持ちよさそうねぇ。ね、鈴ちゃん。今度私もやってくれない？」
「いいわよ。あんまり上手くないけど」
「んーん、気持ちいい……。なんだかほっとする……」
「そ、そう？　ありがと……」

自分の体の中でも、首から上だったり下半身だったりといったところは、そう人の手が触れるところではない。まして、血の繋がっていない赤の他人が触れる機会など、そういう時でもない限りはないだろう。

だからこそ、他人に髪を梳いてもらったり、洗ってもらったりするのは、格別心地がいいものなのだろう。もちろん、それが上手い人でなければただ不愉快で終わってしまうが、幸い鈴はかなり上手い部類に入っていた。

というのも、鈴が中学生の頃は香織の髪をよく梳いていたのだ。
初めは鈴の寝癖を見つけて、香織が手持ちの櫛で髪を梳いたため、そのお返しとばかりに香織の髪を梳いていたところ、それを妙に鈴が気に入ってしまったらしく、それからというもの、時たま鈴は香織に頼んで彼の髪を梳くことがあった。
思い返してみればなんとも不思議な思い出だったが、そう言えばそんなこともあったなと鈴は小さくはにかむ。
遠い異国の地、しかも当の本人が眠り続けている今の状況でそんなことを思い出すのは、果たしてどんな意味があるのか。
とにもかくにも、鈴は香織が起きたら一番に髪を梳いてやろうと、そう思った。
それから日が沈んだ頃、ナターシャたちの元に一台の車がやってきていた。
軍用と見えるそれを、ナターシャは窓からそっと顔を覗かせ観察する。
窓は曇りガラスと防弾性向上のために厚くなって中が見えなかったが、その車のデザインは『地図にない基地（イレイズド）』独特のもので、それを確かめたナターシャは廃屋から出て行く。

「よう、ナタル。時間通りだな」
「久しぶりね、イーリ。そっちの二人も久しぶり」

ナターシャの言葉に敬礼で返した二人を見ながら、イーリ、イーリス・コーリングは軽く笑ってナターシャと握手を交わす。

「今日はよろしく頼むわね」
「おう、任せとけ。そっちの二人もな」
「ええ、よろしく」
「よろしく……」

アメリカ軍第一六国防戦略拠点、『地図にない基地（イレイズド）』のメンバーとの会合を果たした三人は、話し合いのために廃屋へと戻っていく。
戦いのための旅支度は、まだまだ始まったばかり。

「……」

ぼんやりとした明かりの中で、空（くう）は一人眠り続ける香織の元にいた。
じっと見つめるその瞳には、安らかに眠りにつく香織の顔が映り、それは布団が呼吸で動いていなければ死んでいるのだと錯覚してしまいそうだった。

「……温かい」

小さな手の平で、空は香織の頬に触れる。殆どの時間を冷たい機械と接してきた冷たい手に、じんわりとその温かさが広がっていくような錯覚を感じて、空は思わず目を細めた。
こうして香織に触れて、じっと彼を見つめるのは、香織が運び込まれてきてからの空の日課だった。
人を嫌う彼女が束以外に唯一心を許して接することが出来るのが、香織だったのだ。なぜなのかは彼女にもわからないが。
否、理解してはいるのだろう。ただ、気づけないだけで。

「……また来るね」

聞こえていないであろうことは百も承知で、空は表情を見せずに言う。

静かに席を立つと、医務室の扉を潜って外へ出る。人気のない廊下を、空はぽつぽつと歩いていく。

歩き通して出てきた場所は、船の甲板。今のところこの船はステルス状態となって隠されているため、あらゆるレーダーの探査範囲外になっている。

ステルスフィールドは束の作品であり、束はＩＳが出てすぐの頃、気まぐれで『蜘蛛の巣（スパイダーウェブ）』に船をくれてやったことがある。この船に搭載されているシールドバリアもその一つだった。

というよりは、この船を渡したのは空を守るためでもあった。この船は、束の作り出した空の盾なのだ。

「……青い」

空（そら）を見上げ、空（くう）はポツリと呟く。

空は、どこまでも青かった。

第１０２話　穏やかなひと時（後書き）

束さん万能説。っていうかもう説じゃなくて事実。

第１０３話　狼煙

「さて」

会議は、その一言で始まった。

ナターシャの両脇に鈴と簪、それと向かい合うようにして座るイーリスの両脇には二人の女性の軍人が座っている。

初めに口火を切ったのはナターシャだった。

「それで、どんな状況なの？」

「どんなもクソもあったもんじゃない、どこも酷いもんさ。あのゴキブリ野郎にケツ追い回されて、マシだった人間なんていやしない。食われるか殺されるかさ。運がよければ逃げ延びて生き残れるけどな」

「そりゃひどいわね。軍は？」

「まるで役立たず。考えても見ろ、相手は絶対防御がないとはいえ死ぬことを怖がらない無人機だ。しかもＩＳと同じ装甲だからマトモなオモチャじゃまるで歯が立たない。そのくせうちの国にあるＩＳはせいぜい六〇とちょっと、その中で開発に回されているのは二〇とちょっと。残りの四〇でアメリカの首都や他の大都市を全てカバーしろってのは、到底無理な話さ」

ＩＳの驚異的な機動性、火力、防衛力をもってしても、相手が同等の機体と数百倍から数千倍の数で押してくれば押し負ける。防衛面積の関係もあるだろうが、それでも押し負けずに何とか全員を脱出させたＩＳ学園の専用機持ちや教師たちは、その点で言えば相当おかしかっただろう。狂っていると形容してもいいくらいには。

そのことを知っているのか、イーリスは鈴と簪を賞賛するような視線で見ていた。それに気づき、鈴は小さく笑いかけてみる。

「今はゲリラ作戦で少しずつ相手の戦力を削る気らしいが……、こっちから言わせて貰えばそんなもん無駄だね」
「でしょうね。相手が人間でないのだから」

ゲリラは遊撃で相手を物的、心的に消耗させる戦い方。しかし、量が不明瞭な現在、無人機相手にそれを行うことは下策も下策だろう。

一体上が何を考えているかもわからないと言ったナターシャに、片方の軍人が慌てて言葉を伝えた。

「まずくないですかコーリング少佐。本当にこれ大丈夫なんですか？」
「少なくとも悪い方には転ばないさ。ここはもうとっくにどん底だからな」

カラカラと笑うイーリスだったが、彼女にナターシャはやや驚いたような顔を向けた。

「貴女、階級上がったの？」
「ああ、少し前にな」

ナターシャとイーリスが同じように軍属でいた頃、二人は共に大尉であり、またある種特別な権限を与えられていた。それはどちらもＩＳのパイロットとして優れた技能を持つからに他ならない。
友人の昇進を素直に喜ぶナターシャだったが、当のイーリスはつまらなそうだった。

「で、なんでそんなに不機嫌そうなの？」
「アタシは外出て戦ってる方がマシなの、知ってるだろ？　紙切れ

と格闘なんて冗談じゃない」
「あらあら」

書類整理や事務仕事の苦手なイーリスは、時折ナターシャにそれを手伝ってもらうことがあった。
親友のそんな性格をしっかり把握しているナターシャは、彼女にご愁傷様と言葉を投げかけてから真面目な顔に変わる。

「それで、物資はどれくらい用意できた？」
「結構な量だぜ。物資運搬用のワゴン車使って正解だった」
「ありがと。なぜか知らないけど黒幕に目をつけられてる上に、首都には顔出せないから買い物ってしづらいのよ」

あの戦い以降、巌隆は随分と束一向に注目しているらしく、買い物がおおっぴらに出来ないのもそのためだった。
相手は擬似コアを量産するほどの科学力の持ち主だ、電子の世界で何をされるかわかったものじゃない。
無論、電子の世界だけの戦いなら束たちに負けはないが、そこに現実の戦力が絡むとなると話は別だ。
こちらは電子制御の相手を軒並み破壊するだけの過負荷を掛けながら、相手のハッキングの進行を食い止めるなんてことをやらなければならないのに、相手はといえばこちらの居場所を突き止めるだけで勝負が付く。そんな賭けに出るほど、彼女たちは愚かではなかった。

「他の国のこと、何か知ってる？」
「ああ、フランスはやばいって聞いたな。何でも、トップが暗殺されるとかどうとかって」
「……それ、詳しく聞かせて」

さらりと流れ出た重要情報に、三人が軽く身を乗り出す。
その様子に若干苦笑いしながらも、イーリスは口を開いた。

「オーケー。まずフランスだが、どうにも雲行きが怪しい。さっきも言ったようにトップ、つまり大統領が暗殺されるんじゃないかって話も出てるし、委員会から重圧掛けられてるって話も聞いてる」
「ＩＳ委員会から？　なんで？」
「さぁな。情報公開せずに独断での第三世代型作成及び譲渡ってあたりじゃないか？」

イーリスの口調からは、明らかに彼女がシャルロットの『ミストラル・リヴァイヴ』のことを知っているように感じられる。いや、事実知っているのだろう。
予想よりもよほど雲行きが怪しくなってきているのを感じて、ナターシャは小さく歯噛みした。

「じゃ、どうして大統領暗殺なんて話がでてるの？」
「そこで、もう一つの国と組織が関わってくる。ドイツと、『亡国機業（ファントム・タスク）』だ」

待ってましたとばかりに手を打ち、音を響かせる。

「こっちの調査でもわかってきてることだが、ドイツの高官と連中の間には繋がりがある。連中を通じてドイツはフランスのトップに重圧を掛け、それに屈するなと脅しているのが委員会ってわけだ。両者共に大統領の部下たちを懐柔しに掛かってるだろうから、近々殺されるかもな」
「それって要するに、水面下で国取り合戦が始まってるってこと？」
「ああ。ドイツと『亡国機業』は、建前上で怪しまれない、自由に出来る場所が欲しい。委員会はそれを阻止したい。手っ取り早いの

は首を挿げ替えることだろ？」

ちくしょう、と鈴が毒づく。

世の中がどれほど汚いかはわかっているつもりだったが、これほどまでとは予想外だった。

しかし、なぜフランスなのか。そこだけが鈴やナターシャ、簪にとっての疑問点だった。

それを察し、イーリスが言葉を続ける。

「『ミストラル・リヴァイヴ』。こいつの武装は既に情報として流れてるが……、どうやら死の間際にデュノアは飛んだ化け物を生み出したらしいな？　強制的にコアにバイパスして、シールドエネルギーを吸い上げ、放射する武装。しかも連中にとって嬉しいことは、コイツがワンオフじゃないってことだ」

「そうね……。シャルロットのアレは喰らい掛けた私が一番よく知ってる。恐ろしいなんて代物じゃないわ」

同等以上の性能を誇る無人機に捕まれた経験のある鈴がそう漏らす。その言葉には、確かな実感と僅かな恐怖が滲み出ていた。

「委員会は公明正大を謳っちゃいるが、中身は俗物だらけさ。そんな連中に渡ってみろ、更に利権を得るために動くに決まってる」

「どっちにしても阻止しなきゃいけないわけね」

「ああ。手っ取り早いのは委員会と『亡国機業』を潰すことだ。ドイツは高官が集まって好き勝手してるだけだから、連中だけじゃ特に怖くない」

既に情報交換というレベルではなくなってきているが、ここでの音声は『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』、『甲龍（シェンロン）』、『真打（しんうち）・鉄（くろがね）』の音声ログに残るため、大切なことを聞き逃すこともない。

その中で、突然イーリスの通信機が鳴り響いた。

「わるい、ちょっと待っててくれ。……なんだ？　……なんだと！？　わかった、すぐに戻る！　それまで堪えろよ！」

「どうしたの？」

「襲撃だ。例の無人機、数は不明」

それを聞いたナターシャの顔がこわばる。その顔を見て、鈴と簪は示し合わせたように頷いた。

「……鈴、簪」

「わかってるわよ。ったく、お人よしめ」

「でも、いいところ……」

「イーリス、私たちも加勢するわ。無人機との戦闘経験は私達の方が上よ」

突然そんなことを言い出したナターシャに、イーリスは目を見開いて唖然とする。

既にナターシャは部外者だ、軍属でもなければアメリカ国民でもない。守る義務などないのだと言おうとしたイーリスに、ナターシャは続け様に言葉をぶつける。

「昔の祖国を守るのに、理由が必要？」

「ナターシャ……」

「それに、私はまだ守ってもらうほど弱くなったつもりはないわ。この子達だって、ね」

「そういうことよ、軍人さん。急がないと」

不敵な笑みを浮かべて言い放った鈴に、イーリスはさすがに舌を巻く。

しかし、数瞬の後には元の表情へと戻り、小さく頷いた。

「撃て、撃てーっ！」

「施設に近づけさせるな！　食い止めるぞ！」

第一六国防戦略拠点、『地図にない基地（イレイズド）』。そこでは、かつてないほど激しい戦闘が行われていた。

弾丸が飛び交い、時折飛び散る肉片と赤い液体、そして立ち上る炎が、寒々とした空と灰色の建物、コンクリートの地面を紅に染めていく。

その光景を目にしながらも、兵士たちは決して引こうとはしなかった。それが彼らの役割だったから。

世界最強の機動兵器に拒絶された彼らは、銃を取り祖国を愛する心に従ってその引き金を引くことを選んだ。

だからこそ、彼らは祖国を何の意味もなく、ただただ蹂躙せんとする者達が許せない。

無駄だと知りながらも銃弾を撃ち込み、せめて一瞬でも止まってくれと願う。それが、彼らに出来る最大限の抵抗だった。

果たして、それは正解だったのだろう。

無人機たちに下されていた指令は『追撃』。逃げるものの背中を撃ち抜けと言う非道だった。

だからこそ、向かってくる者達に対しては無防備であり、防備する必要性を感じない。それは己の任務ではないから。

「ちくしょう、なんだってこんなときに……！　少佐がいないってのに！」
「愚痴はいてる場合かっての！」
「わぁってるよ！　くそったれ！」

悪態をつきながらも、引き金を引く手は休めない。休めれば、それが死期となりえるだろう。
そんな彼らを、無人機たちは無感動にモノアイで眺め続ける。
次の瞬間、建物の一角を強烈な熱線が襲った。着弾したそれは恐ろしい温度でそこを融解させ、爆発させていく。
その光景を目の端に焼き付けながら、兵士たちはなおも撃ち続ける。
いい加減わずらわしいと思ったのか、そのとき無人機が唐突に兵士たちへと砲身を向けた。
これまでかと、息を呑んだ次の瞬間。

無人機が光の奔流に飲み込まれた。

「――これ、は……！？」
「はぁい、皆♪　元気してたぁ？」

現れたのは銀色の天使。その背後には、赤と黒で彩られた龍、少し薄くなった黒で染め上げられた武者。
そして、天使の横に座するのは、虎模様の野獣（タイガーストライプ）だった。

「ファイルス大尉！？」
「今はもう無所属よ？　さて、と。やりましょうか。行くわよ、『ゴスペル』」

La――……、と美しい声が響く。
その直後、ハンドカノンタイプの《銀の鐘（シルバー・ベル）》からとんでもない速度で弾丸が打ち出される。
進路上にいた無人機を次々と撃ち抜き、瞬く間に道を作り出した。

「も一発！　《銀の翼の奏でる鐘（Silver Wing Bell）》！」

ばさり、と羽が大きく羽ばたかれる。カノンタイプとドッキングした頭部の《銀の鐘》は、一瞬で数千、或いは万に及ぶかもわからぬ量の弾丸を撃ち出した。
その弾丸の嵐に紛れ、吶喊するは武者と龍。

「《紅蓮朱鉄（グレンノアカガネ）》……！」
「《三爪龍神（さんそうりゅうじん）》ッ！」

戦いの狼煙は、その一撃によって上げられた。

第１０３話　狼煙（後書き）

陰謀って苦手なんですよー。
いや、まじで。難しい話書きたいけど頭足りないから。ほんと、まじで。
だから矛盾点でたらあんまりひどいのじゃない限り目を瞑っていただけるとありがたいです。がんばるので。

第１０４話　発見！？

「チェストォォォォ！」

鈴の雄たけびとともに、数体の無人機が一瞬で破壊されていく。
荒れ狂う龍の顎（あぎと）があらゆるものを噛み砕くかのようにあっけなく、衝撃を受けた無人機たちが爆散していく中、身の丈の四倍はあろうかという赤い刃を振りかざし、簪が吼えた。

「ォォぉぉぉおおおおおおあああああああああああ！！」

右から左への薙ぎ払いは前面に展開していた数十機の無人機を圧倒的な熱量で焼き切っていき、振りぬいた直後にそのすべてが轟音を響かせて爆発していく。
その様を、イーリスは頬を引きつらせながら見つめていた。

「な、なんじゃそりゃぁ……！？　反則ってレベルじゃねぇぞありゃっ！？」
「でも溜めがいるのよ」
「それでもだっ！？　ってか、なんなんださっきの弾幕といい今の剣といい、ついでにあの龍！　もうＩＳなのかあれ！？」
「目の前の無人機さんよりはＩＳじゃない？」
「いやいや、そうじゃなくてだなぁ！？」

今までの常識を一瞬で覆されたようなイーリスは尚も食い下がり、その間にやってくる無人機をナターシャと共同で破壊していく。
やたらと手馴れたように行うナターシャに対して、イーリスは戸惑い気味だった。
それもそうだろう、いるはずのなかった無人機相手に、ナターシ

ャはまるで当たり前のように戦っているのだから。
一応ナターシャが無人機との戦闘経験があるということは知っていたが、これほどまでとは思っていなかった。

「ま、慣れてるならそれでいいか」
「なにが？」
「なんでもねぇ、よっ！」

イーリスの使う第三世代型ＩＳ『ファング・クエイク』に際立った武装はない。その機体そのものが武器となるためであり、『安定性と稼動効率』の極致、「武器使わなかったらエネルギー減らないんじゃね？」という滅茶苦茶な考えの下に考案されたためである。
しかし、そんなぶっ飛んだ機体は、肉弾戦がもっとも得意なイーリスにとっては非常に適していた。
そんなイーリスは、近寄ってきた一体を拳でぶち抜くと、続けざまに三体をその拳で破壊していく。その様子に、ナターシャは思わず苦笑いを見せた。

「いつもどおりだけど、相変わらずなのねそれ」
「仕方ないだろ、こういう戦い方のＩＳなんだから」

軽口を叩き合いながらも、敵を見据えるその双眸は鋭さを鈍らせない。
その一方で、鈴と簪はこの襲撃に不自然なものを感じていた。

「なんで、このタイミングなわけ？」
「わからない……。ナターシャ、他の拠点に襲撃は？」
「イーリス、どう？」
「……いや、ここだけらしいぞ」
「だって」

「……余計わからない。一体どうして？」

疑問を抱えながらも、簪の手が休まることはない。

そして、その手と同じように簪の頭もまたはっきりと動き出す。

なぜこのタイミングでの襲撃なのか、その意図は何なのか。あまりに明確すぎる違和感がはっきりと自己主張を重ねるうちに、簪の頭にはあってはならない可能性が浮かび上がってきた。

「……鈴、ナターシャさん、全力で蹴散らす」

「どうしたのよ、簪？」

「もしかすると、船が危ない！」

「なっ！？」

「そりゃまずいわね。とっとと片付けましょう！」

基地襲撃を陽動として、本体を叩く。早々に行われたその作戦にまんまと嵌ったことに気づいた簪は、ぎりっ、と音を立てて歯噛みしつつ、全力で《朱鉄（あかがね）》を振るい続ける。

この結論が杞憂で終わってほしいと、切に願いながら。

同じ頃、簪の予想はぴたりと的中していた。

『敵襲だ！　連中に嗅ぎ付けられたぞ！』

「くそっ、いこう皆！」

「あーちゃんは甲板で防衛お願い！　まだジェットパックの調整が終わってないの！」
「わかったわ！」

K．K．の艦内放送でいの一番に飛び出した一夏に続いて、シャルロットとラウラが飛び出していく。
それを追うようにして葵が甲板へ飛び出すと、そこにはすでに数十機の無人機が存在していた。

「畜生、囲まれてやがる……！」
「全て破壊すればいいだけだ！」
「だね！　いこう、二人とも！」

それぞれがＩＳを展開し、一時的にバリアが解除された空へと上がる。
艦内では空とクレイマンが全力でバリアの特定箇所への展開操作を行っているため、甲板以外の全ての場所にバリアが展開されている。それを読み取った無人機たちは、一夏たちの撃墜を優先させたのか、武装を一夏たちへと向け始めた。
と、そのうちの数機が一瞬で爆破する。弾道は甲板からのものだった。

「私を忘れてもらっちゃ困るわね」
「ありがとうございます、先輩！　よし、いくぜ『白式』！」

《荷電粒子砲》と《スナイパーライフル》を両手に携え、ニヒルな笑みを見せた葵に頭を下げると、一夏が《雪羅》の荷電粒子砲を撃ち放つ。
射線上にいた数体を一気に蹴散らすと、そこにぽっかりと空いた穴目掛け吶喊した。

それに続くシャルロットの後ろで、ラウラが両手を左右に広げ、大きく息を吸い込んでその両手を前へと振るう。

「行け、《シュヴァルツ・ドラート》！」

その音が響く中、四〇のワイヤーブレードが無人機の群れへと殺到する。

大気を切り裂かんばかりの鋭い切れ味を持った刃が装甲に傷をつけていくが、それはまだ序の口。次の瞬間、ラウラの声が響き渡る。

「《ウン・ハイル・ドルン》！」

刹那、ワイヤーとその先のブレードのあらゆる箇所から発生したプラズマブレードが、周囲にいた無人機を滅多ざしにしていく。

以前はせいぜい一〇〇本程度だったそれも、強くなり続けている今は五〇本ほど増えていた。

一気に爆散する群れの中を疾駆するは、巨大な腕を持った二機のＩＳ。

『ミストラル・リヴァイヴ』の第三世代兵装である《デュノア・オルグイユ》が無人機を鷲掴み、一気にシールドエネルギーを吸い上げる。

瞬く間にエネルギーをゼロにされた無人機は機能を停止し、シャルロットはその標的をいまだ残っている群れへと定めた。

「いっけぇぇぇぇ！」

直後、炸裂するオレンジのエネルギー光。

その奔流に飲み込まれた無人機は残らず融解していき、明らかな火力の違いを見せ付けていく。

そんな中、一夏は《零落白夜》の発動を限りなく短くすることで

継戦時間を延ばしている。そうでもしなければ、一番効率も腕も下な自分が先に落ちることがわかっているからだった。

「それにしても、さっきから数が減ってないように見えるな」

「同感。二〇機以上倒してるのに、全然減ってない。ううん、むしろ増えてる……？」

「ハハッ、ごめーとうっ！」

その声が聞こえた瞬間、各々が防御の体勢をとる。

そこには、変わらず『ニュクス』を操るグリムの姿があった。

「テメェ……！　これもテメェの仕業か！」

「今日はちょっとした挨拶だ、カッカすんなやガキ」

にぃ、と笑いを見せるグリムに、空へ上がっていた三人がその身を強張らせる。

挨拶という言葉とは裏腹に、びりびりと伝わってくるグリムの殺気がその原因だった。

「よくもまあ、あの襲撃から生き残れたもんだぜ、まったく。感嘆ものだね」

「お褒めの言葉ありがとう、お返しに鋼をくれてやろうか」

「おいおい、血の気の多いガキだな。今日は褒めにきてやったんだぜ、こいつらは偶然拾っただけ、俺の意思じゃない」

「なら素直に帰るか？」

「臨戦態勢で構えられて帰れって？　ハッ、冗談キツいぜ」

軽い口調で答え続けるグリムだったが、すでに戦闘態勢に入っているところを見る限り、おとなしく帰る気などさらさらないだろう。

そう判断したラウラは、先手必勝とばかりにワイヤーブレードを

全方位から繰り出していく。

「手がはえぇな？」

「なっ！？」

が、その全てを《ブラック・カーテン》で叩き落したグリムは、さらに笑みを深くして吼えた。

「オーケーオーケー、やっぱ俺たちは戦わなきゃあなぁ！　敵同士がツラ合わせてニコニコしてるなんざ、気色悪くてたまんねぇぜ！」

「やっぱりこうなるのかよ！」

「まあ、もともと向こうもやる気だったみたいだし、ね！」

《雪片弐型》を片手に携え、《雪羅》のブレードを展開して構える一夏と、片腕に《ガルム》を携えるシャルロット。

その後ろでは、再びワイヤーブレードを構えたラウラが、意識を集中させて《ＡＩＣ》とレールカノンを操っている。その目は左右ともに黄金に染まっていた。

「ここで落とさせてもらうぞ！」

「ハッ、やれるもんならやってみろやァァァァ！　行くぜェ、《ブラッド・カーテン》ッ！」

無数のビットへと変化した《ブラック・カーテン》を操り、グリムが吼える。

その四人の戦いは、いまだ尽きぬ無人機たちが葵によって落とされ、爆発するその音によって開幕となった。

第１０４話　発見！？（後書き）

再び始まってしまった二つの戦闘。
まあ、そんなに長引きませんが。ちゃんと進めていかないとお話終わらないもんね！

第１０５話　グリム

白刃と黒の塊が激突し、大きく火花を撒き散らす。
その中で、グリムと一夏は単身ぶつかり合っていた。

「はぁぁぁぁあああああ！」
「カハハハハハハーァッ！」

刃を振るう度に金音が響き、周囲に舞うその衝撃が無人機たちの装甲を揺らがせていく。
シャルロットとラウラが無人機を抑えている中で、一夏はひたすらにその刃を振るう。
次々に増える無人機以上にグリムのことを危険視する三人は、一番攻撃能力の高い一夏をグリムに当てていた。

「おいおいおい、その程度かよ少年？　何のための剣だ、殺すための剣だろうがァ！」
「うるせぇ！　黙って落とされやがれ！」
「ハッ！　やだね、バァーカ！　カッ、キヒャーハハハァー！　≪ブラッド・カーテン≫、モードブレイドォ！」

グリムの叫びと共に、今まで宙を漂っていたビットが一点に連なっていく。
それはまさしく一振りの刃の如く、守りではなく攻めの形として形成され、組みあがっていく。
やがて戦闘の中で組み上げられたその刃を手にし、グリムは笑みを深めた。

「打ち合おうぜ、織斑一夏！　テメェの剣と俺の剣、どっちが先に

切り殺せるか！」
「俺は、そんなことのために剣を振るってるんじゃないっ！」
「ガキが絵空事ほざいてんじゃねェ！　剣ってのはなァ、昔っからテメェの敵をぶち殺すためだけのもんなんだよォ！　それを今、教えてやらァァァ！」

轟ッ！　音がしたのは一瞬だったか、それとも数瞬の後だったか。瞬く間もなく接近したグリムは、目の前でその刃を大きく振るう。とっさに構えた《零落白夜》のシールドをいともたやすくぶち破り、金切り声を上げて刃が迫る。
刃が、上げたのだ。その音を。

「ぐっ！？」
――ッ、キィィィィィヤアアアアアアアアアッッ！！

その声は、果たして声ではなかった。音、金切り声のような音を伴って迫る刃を、一夏は身を翻すことで回避する。
直感的にその刃に当たればまずいと、一夏は言い知れぬおぞましい予感と共にその体を動かしていた。
そのことに、グリムはにぃ、と頬を吊り上げる。

「また防ぐんじゃねぇかと期待してたがなァ、どうやら外れちまったらしい」
「その剣……、な、なんなんだ！？」
「物同士をこすり合わせれば振動が起こる、そいつを最大限発揮するためには、どうしてもこういう音が出ちまうのさ。振動で切れ味を上げてるようなもんだ。当たれば、切れるぜ？」

がしゃん、がしゃんと肩の装甲に刃を軽くぶつけながら、グリムは楽しそうにそう言った。

金音の悲鳴は今は聞こえず、それだけに不気味。反り返ったその刃は、攻撃のときにだけその悲鳴を響かせるのだろうとあたりを付けた一夏は、心を新たにその手にある刃を構え直した。

幸い、他の無人機は手数が武器の一つであるシャルロットとラウラが抑えている上に、甲板からの援護射撃もある。

ならば、自身はその役目を果たすだけだと、その眼に意思を宿す。必倒の意思、必滅の意思を。

雰囲気が変わったことを悟り、グリムが静かに刃を構える。

刹那、一拍を置かずにぶつかり合う互いの刃。けれど、今度は一夏も不用意にぶつかり合うばかりではない。

一瞬だけ刃を重ね、それからすぐにそれを引き戻す。剣を振るう者の視覚、特に動体視力というものは非常に優れている。それを全力で活用し、刃の振動が始まる一瞬前に刃を引き戻すことで、相手の刃の勢いを止める剣を作り出していた。

一瞬、一瞬、そしてまた一瞬。

金音と火花と、そして視線が飛ぶ。飛び、交差する。

グリムの方はまだまだ余裕があるようだった。その証拠に、その視線は度々飛び散る火花に注がれたり、周囲を確認する仕草を見せたりしている。

対する一夏は、常に集中状態にあった。

一瞬の中に内包された情報を、音を、色を、形を、速度を、厚みを、重みを、全てを感じ取り、それを持って刃を重ね合わせることで、ようやく対等に渡り合っている。渡り合うことを許されている。

その事実を感じ取ってはいるものの、悔やむ間もなく次の刃が繰り出される。

とにかく、一夏の持つ剣、《雪片弐型》の刃では、相手の攻撃を阻み続けるのが精一杯だった。

それももう、長くは保たないだろう。そう考えながらも、手を休めることは許されない。

「ちくしょう……っ！」

ぼやくことで意識が散るのを防ぐ。はっきりと剣を見据え、それから、それから。

どうすればいい、どうすれば勝てる、突破口は、どこにある？

思案して、それから――、

「オラァ！」

はっ、とした。けれど、もう遅い。

声が聞こえたと思ったときには、その一撃は確かに右肩から袈裟に駆け抜けていた。

絶対防御のおかげで傷になることはないが、それでもその強烈な斬撃を受けて、それだけで済むはずもなく。

結果として、一夏は貫通した衝撃をもろに受けていた。

「がはっ――！」

「ちっ、おいおいぼさっとしてんじゃねぇよ」

興醒めしたとばかりに嘯く声。ああ、それなら帰ってくれないか、と軽口を叩くこともできず、ただその強烈過ぎる衝撃に呻くばかり。

それでも、決して剣は離さない。離してなるものかと、きつく柄を握り締めて、一夏は視線でグリムを貫いた。

「……はっ、いい面になったな。さっきの腑抜けた顔よりよっぽど良いぜ。かかってこいよ、人間。ぶった切ってやる」

「――上等だ、クソヤロウ」

体が痛む、もう止せ、戦う必要がどこにある。脳内で冷静になれと叫ぶ理性から、そんなことが伝わってくる。

しかし、止められない。止まってはならない。止まってしまえば、こいつは船に向かってしまう。

止めるのだ、ここで。

しかと意思を新たにし、一夏は一度息を吐く。そして、戦いの大気を胸一杯に吸い込み、肺をそれだけで満たしきる。

その刹那、大気を切り裂き疾駆した一夏の刃が、グリムの『刃』そのものへと突き刺さっていた。

「まだ、まだァ！」

咆哮は刃が取って代わり、突き崩した『刃』の残骸ごとグリムを斬り捨てんと迫る。

「舐めんな、オラァァァァ！！」

矜持も信念もかなぐり捨てた、『守るため』の一念。

それを間近に感じ取り、初めてグリムは本当の意味で、一夏を『脅威』と認識した。

『一之瀬葵』以外で、己に迫る力を持ち。

『一之瀬香織』以外で、己を殺す可能性を持ち。

それは、獣と見間違うほどの荒れ狂う意思を鋼へと変え、迫っていた。

しかし、しかし。グリムとてその刃に刺し貫かれるだけのか弱き小鳥ではない。狩猟者なのだ、故に彼は引き金を引き絞り、確実にその命を刈り取らんと弾丸を撃ちだしていく。

「ぶち抜くッ！」

グリムの一声によって再びビットに戻った《ブラッド・カーテン》より放たれた一〇と少しの光弾。

ぼさっとしていれば確実に全身を貫かれるであろうそれをみて、確かに一夏は笑みを零した。

「これなら、問題ないな」

「あぁ？」

グリムの声が響くかどうか、そんな瞬間に、一夏の左腕である《雪羅》から五本のビームクローが突出する。

ただし、普通のものではない。極限までその出力を抑えた《零落白夜》の光。それが細く鋭い爪となって《雪羅》を彩っていた。

一夏はハイパーセンサーで全ての光弾の位置を一瞬で把握すると、最短ルートを叩き出して《零落白夜》を発動させる。

振るわれた刃と爪は同じように青白い光を灯し、その軌跡が全ての光弾を一瞬にして打ち破る様を、グリムはしかと見つめていた。

「こんなもんか、グリム」

「ハッ、いい気になるのははえぇぞ。っつっても、今のまま戦うのもつまらねぇな……。どうせもうすぐテメェらの仲間も帰ってきちまうだろうし、俺はそろそろ引かせてもらうぜ」

「逃がすとでも思ってんのか？」

「おいおい、俺は見逃してやるっつってんだ。少なくとも、テメェ一人落とすなんざたいした苦労じゃねぇ。あの二人も同じだ。お荷物抱えてる相手に殺し合いを挑むほど、俺は非道じゃねーさ」

襲撃してきてどの口が言うかと思いはしたが、それでも引き下がってくれるならそれに越したことはない。

一夏は一瞬逡巡したものの、仕方なくビームクローを収めた。

「……テメェの名は覚えとくぜ、織斑一夏。世の中捨てたもんじゃねェ」

「うるせぇ、とっとと行きやがれ」
「ハッ、じゃあな織斑一夏！　次はマジで殺り合うとしようぜ！」
哄笑して去っていくグリムの背中を見つめながら、ようやく一夏は息を吐き出す。
と、そこでシャルロットが声をかけてきた。
「お疲れ様、一夏」
「あ、ああ。無人機は？」
「全て破壊した。甲板への被害もなし、最高の戦果だな」
ひょっこりと顔を出したラウラが、にっ、と笑って片腕の装甲を量子変換すると、ぐしゃぐしゃと一夏の頭を撫で付ける。
「な、なんだよラウラ」
「いや、ちょっとやってみたくなってな。ふむ、後で香織にもやるとしよう」
眼が覚めたら、という意味のその言葉からは、重い雰囲気はまるで感じられない。
いつ目覚めるかも知れない香織のことを案じていながら、決してそれを重荷と感じていないことは、それからよく伝わってきた。
一夏は小さくため息をつくと、肩口の痛みに顔を顰める。
「ぐっ……」
「一夏、どこか怪我した？」
「いや、ちょっとダメージ食らっただけ。後で診てもらうから」
「そう、ならいいけど……」
「とにかく船に戻るぞ。いつまでもここにいても仕方ない」

ラウラの言葉に二人が頷き、それでようやく、襲撃の幕が下ろされた。

それから三〇分ほどが過ぎ、鈴たちはフロートボートと運搬用コンテナを携え、焦った様子で戻ってきたものの、事のあらましを聞くとあからさまに安堵の溜め息をついた。

何はともあれ、補給と情報の入手を済ませた一行は、再び会議室に集まっていた。

そこには、青白い顔をした男もいる。

「えっと、彼は？」

「あ、俺はマックってんだ。システムの構築なんかを担当してる。よろしくな」

「彼、いっつも腹痛でトイレにこもってるの。で、あだ名がミスター・ストマックエイク」

「だからマックなのね……」

一夏の疑問も氷解したところで、全員が真面目な顔つきへと移り変わる。

口火を切ったのは束だった。

「情報によると、次の火種はフランスだね？」

「ええ、そうよ」

ナターシャが頷き、それからさらに続ける。

「フランスの大統領に何とかコンタクトを取るのと、委員会と亡国機業（ファント・タスク）が何を目的にしているのかを探る。この二点ね」

「あ、会社にも寄らせてもらえませんか？　補給なら僕の伝が使えるかもしれませんし」

「わかったよ。それじゃあ皆、出港準備！」

束の一声で全員が動き出す。

戦いは一時の間終わり、また海の旅が始まる。

次の目的地は、フランス。

第１０５話　グリム（後書き）

意外とあっけなく終わった戦い。ちなみに葵は常にサポートでした。
次の戦闘からは出せるかな。

第１０６話　紅と蒼のその後

ざざぁん、ざざぁん。静かな、とても穏やかな、波の音。
その音で、揺りかごの中にたゆたう私の意識は、目を覚ます。

「……ここは」

呟いて、ずきりと腕が痛んだ。
なんとか体を起こすと、そこが小さな寝室で、自分は硬いベッドに寝かせられていることがわかる。
痛みの元を見やると、体に着ているＩＳスーツに似ても似つかない白い包帯が、ぐるぐると右腕に巻きつけられていた。
その傷を見て、それから思い出す。自分があの戦いの中で足止めを終えた後、必死になって連中から逃げていたことを。
どれほど倒しても、倒しても、倒しても、倒しても。奴らは途切れることなく現れた。
その戦いがどれほどつらいものだったか。彼女が撤退を言い出さなければ、きっと死んでいただろう。それほどに、終わらない戦いはつらい。
一〇、二〇の数でも、決して勝てない相手ではない。しかし、それは勝てないわけではないだけで、余裕綽々（しゃくしゃく）に戦い続けられる相手ではなかった。
思い返して唇を噛んでいると、扉が軋み、そっと押し開ける音が響く。

「箒、起きていましたか」
「セシリア……。ここは……」
「ああ、いけません箒。まだ寝ていなくては」
「いや、しかしっ、――っぐ……！」

ベッドから降りようと身をよじった途端、全身に激痛が走る。
あまりの痛みに動きを止めたその隙に、セシリアはぐい、と私をベッドへと押し倒した。

「箒……、たまには言うことを聞いてくださいな」
「しかし……」
「お願いです、箒……」

息遣いが感じられるほどの距離で、セシリアが呟く。溜め息ほどに小さなその音は、するりと私の耳に入り込んで、ぐしゃぐしゃと意識をかき回す。
どきりと、どこかの高鳴る音が聞こえるような気がした。
ひんやりと冷たいセシリアの手が、私の頬を包む。熱くなっていた私の顔が、すっ、と冷えていく感覚。

「ぁ、ああ……」
「ああよかった、これで聞いてくれなければ、口付けの一つでもするところでしたわ」
「口づっ……!?　ば、何を馬鹿なことを言って――、っくぅ……！」
「ああほら、急に動いたら体に障りますわ。じっとして」

再び走った激痛に押し負けて、ベッドに身を預ける。
それにしても、さっきのは一体なんだったのか。まさか彼女に懸想しているわけでもあるまいに、馬鹿馬鹿しい。
それに、セシリアもセシリアだ。口付けなど、破廉恥な。……嫌と言う感情が出なかった自分が、はなはだ疑問だが。
とにかく、今は怪我を治すのが最優先らしい。

「で、私は一体……？」
「アバラが数本折れているのと、あと腕の傷ですわね。アバラは『ブレイブ・ティアーズ』の拡張領域（バススロット）に入っていた応急セットのナノマシンで手当てしましたから、もうしばらくすれば軽く動けるようになるはずですわ。腕の方はこちらを貸してくださった方が手当てしてくださいましたから、アバラが治ったらお礼を言っておいてくださいね？」
「ああ、わかった。すまなかったな、面倒をかけて」
「構いませんわ、相棒（パートナー）ですもの」

ふわりと笑った彼女は凛々しさが垣間見える笑顔で、そういう所はやはり貴族なのだと、そう感じさせる。
長々と私に言って聞かせたセシリアは、ぎしりとスプリングの軋むベッドに腰掛け、私の手をそっと握る。
ずっと掛け布団の中で温められていた手が、彼女の冷たい手と触れ合って。それはとても、心地のいいものだった。

「戦争ですって、箒」

ぽつりと、彼女が呟いた。
セシリアの話では、あの戦いの後、世界各国の主要都市にあの無人機が大挙して押し寄せてきて、各国は今大パニックらしい。
しかも、例の『亡国機業（ファントム・タスク）』とやらもまだ動いている。件の無人機を率いているのは、どうやら奴らではないらしかった。
しかしまあ、どうにも、世界と言うのは本当に、争いごとを好みとするらしい。
だって、ほら、歴史の教科書でも開いてみろ。世界中至る所で、日が昇り月が沈むまで、延々繰り返される血の宴。
これほど続くのなら、それはきっと、世界と言う奴がそれを好んでいるからに違いあるまい。

そんな戯言を浮かべてしまうほど、私は疲れているのだろう。

「……戦争か。嫌なものだな」

「わたくしは、もしかするとイギリスに帰らなければならないかもしれませんわ」

「義務、と言う奴か」

「ええ」

セシリアはひどく残念そうに答える。

彼女の肩書きは『国家代表候補生』、いざと言うときには兵役も生じる立場であり、そのいざと言うときは間近に迫ってもいるようで。

いやな世の中だと、つくづくそう思う。

「さて、箒。そろそろまた眠った方がいいですわ。傷に響きます」

「……ああ、そうさせてもらおう。お休み、セシリア」

「ええ。お休みなさい、箒」

名残惜しげに絡む私と彼女の指が、するりと互いの間を抜けて離れていく。手の温度は、二人とも同じくらいに。

扉から出て行くセシリアの背中を見送って、そっと目を閉じる。

悪夢から目をそらすのではない。一時、体を休めるだけ。

目覚めたときには、もう一度刃を振るう者として立ち上がれるよう、休むだけ。

そして、私は。

ゆっくりと、ゆっくりと。眠りの闇へ落ちていった。

「ふぅ……」

夜風に当たり、火照った頬がひやりと冷たくなっていくのを感じる。

造りのいいベランダからは丁度夜風が吹き込み、一人ワインを傾ける私の頬を優しく撫でてくれる。

この家は、私たちを助けてくださった人が貸してくれたものだ。まさか、家一軒を丸ごと貸してくださるとは思ってもみなかったが、本当にありがたい。

空になったワイングラスを丸いテーブルに置くと、もう少し夜風に当たろうとベランダに出る。

紅潮した頬は果たしてアルコールのせいなのか、それとも、箒と接したからなのか。

「……箒」

名を呟く。途端に、胸が跳ねた。

それで、ああ、と溜め息を漏らす。本当に、私は想っているのだと。

彼女のことをそう自覚したのは数日前。彼女の体がぼろぼろになっているとき、私も同じようにぼろぼろになっていた。

と言っても、やはり前衛と後衛の差はある。彼女の体に比べ、私は疲労困憊して各所に傷もできていたものの、休めば十分回復する程度のものだった。

だから、ここを借りてすぐに自分の体に鞭打って、箒の体にナノマシンを注入し、それから彼女の体を丁寧に洗ってベッドに眠らせ

たのだ。
そのときだろう、私が彼女の眠る姿に見惚れてしまったのは。
普段の力強く凛々しい顔とは違う、柔和であどけないその寝顔。
それを見たとき、私はじっと彼女の顔を見つめ、気づけば手を伸ばしていた。
はたと気づいてその手を引き戻したときには、もう、私は自分の心を偽ることなど忘れていた。だって、自分に嘘など吐けるはずがないのだから。

「……非生産的、ですわね。まったく」

ベランダから中に戻り、それからワインの瓶を傾けてワイングラスにたっぷりと赤ワインを注ぐ。
自分の中にあるもやもやを消し去ろうと、あるいは流してしまおうとするかのように、ぐいっとそれを飲み干していく。
そのせいで、また冷えたはずの体が熱を持ち始めた。

「これこれ、飲みすぎは体に悪いぞ」
「慣れていますから。こんばんは、いい夜ですわね」

唐突に現れたその人に驚くこともなく、私は言葉を返す。
黒い和服を身に纏った着流し姿で近づいてきた男性は、小さく笑うと瓶をその手にある小さな杯へ傾け、少しだけ注いで口に運ぶ。
その様子を眺めながら、私はぼーっと見えない月を眺めていた。

「月は見えないだろう？」
「それでも、見ようとすれば見えてきますわ。月以外にも」
「では星かな？」
「いえ、ただ見ていただけです。空を」

そして正しくは宇宙（そら）を。
言葉にせずとも、その言葉は伝わったらしい。
彼は空を眺めながら、小さく頷いた。

「この空は広い。なぜ人は、その向こう側の広大な世界に目を向けようとしないのかな」
「それが人、と言うことではありませんか」
「……そうでもないと、信じたいよ」

彼は溜め息をつくように言って、杯をテーブルの上に置く。カツ、と音が響く。
ここにはテレビも電話もない。外と連絡をとる手段と成りえる物は何も。けれど、私にとってはそれが有難かった。
きっと今は、そっとそこにいるべき時。今は、ただ。
ふと、彼がベランダに出ていた。
そして、空を見上げている。

「私の娘のうちの一人は眠り、もう一人は空を目指している。子供の夢くらい、叶えてやるのが世界ってものだろうに」

今度こそ、彼は大きな溜め息をついた。
娘、そう。彼には二人の娘がいる。知っていた。
だって、彼は随分と有名人になっているから。世界中で、その名前を目にできる。調べれば、いとも容易く。

「――箒が目を覚ましたら、稽古をつけてやるとするか」

何かを決めたような顔で、彼は言った。
彼、篠ノ之柳韻（しののの りゅういん）は。

第１０６話　紅と蒼のその後（後書き）

ということで篠ノ之家お父さん登場。
そしてセシリアと箒が本格的に百合始動！
これから少しの間はセシリアと箒のターンかもしれません。

第１０７話　秘伝

扉を開けると、そこは壁紙も貼られていない、コンクリートの壁だった。

ひやりと冷たい空気が張り詰める中、私は素足のままでペタペタと歩いていく。

どれくらい眠っていたのか、既にアバラに痛みは感じない。腕の痛みも大分治まっているから、随分と眠っていたのだろう。

そうあたりをつけて、またペタペタ、ペタペタ。

しばらくそうしていると、じっと目を閉じて佇むセシリアの姿が見えた。

比較的大きな部屋の中央で、部屋の隅にはテーブルと椅子が片付けられている。

清、と静まり返った部屋の中にあって、その空気を張り詰めたピアノ線のように変えているのは、ほかならぬ彼女であるらしい。

「……箒、おはようございます」

「ああ、おはよう。よく気づいたな」

「気配を読むくらいはできますわ。特に、慣れた貴方の気配なら」

目を瞑り、じっと下を向き続けるセシリアが言った。

気配を読むことは武術、武道において大切だ。相手の一手先を読むことと同義であり、また如何に相手に自らの気配を悟らせないかも重要となる。

それを読めるということはつまり、セシリアもその域に達してきているということで。

それは、彼女が恐ろしい速度で成長を遂げていることを指していた。

「いつからそうしている？」
「つい、二、三時間前ですわ」
「そうか」

短く言葉を交わし、私は片付けられた椅子を引っ張り出すと、セシリアの顔がよく見える位置に置いて腰掛けた。
ようやく目覚めたと言うのに、大した言葉を交わすこともない。けれど、それが私と彼女の関係。距離を近づけすぎないように、私は特に気を払う。
近すぎると、見えなくなってしまうものがあるから。
と、そこで感じ取る。誰かが来た、この建物に入ってくる。

「セシリア」
「ここを貸してくれた方です。大丈夫」

警戒する私を宥めすかすように、セシリアがやはり目を閉じたままで言う。
トントントントン、階段を上がる音が響き、やがてその音の主はこの部屋に入ってくる。
そこで、私の思考は停止した。

「――なんで」
「久しぶりだな、箒」

懐かしい声。幼い頃は姉と一緒にずっと聞いていたあの声。
でも、どうして。消えてしまったはずなのに。どこかに、いなくなってしまったはずだったのに。

「父、さん……」
「随分と、大きくなったな」

「なんで、ここに……」
「ここは僕の隠れ家だからな。もう歩いて平気なのか？」
「え、ええ……」

あまりに自然な言葉に、思わず頷く。
セシリアは、ただ見ているだけだった。
幼い頃の父の面影は、今の彼にはあまり残っていない。けれど、年老いたと言うよりは、成長したと言う言葉の方が似合いそうな姿。
髪は白髪混じりになって、顔の皺も増えたが、それすらも彼の強靭な気配をより強くするための素材に見える。

「……本当に、父さんなんですね」
「抱きつくか？　昔みたいに」
「まさか。セクハラですよ？」
「はは、だろうな」

快活に笑うその姿が、思い出にあるそれと重なる。
本当に、父さんなんだ。こんなところで会えるなんて、思っていなかったのに。
……けれど、今の私に再会を喜んでいる暇なんてない。まだやらなければ行けない事が残っているから。

「……体が治り次第、私は姉さんを追います」
「そうか。……なら、それを少し遅らせてくれ。お前に伝えるものがある」
「え？」

父さんの言葉が、途端に重くなる。視線が鋭く、身に纏う雰囲気も。

「篠ノ之流、その真髄は古武術であって古武術でなく、剣術であって剣術でない。唯一つの奥義を隠すためだけに生み出されたものだ」
「父さん、何を――？」
「お前には、それを知り、継ぐ権利がある。戦うのだろう、これからも」
「――っ」

真っ直ぐにこちらを見つめる目。それは私の目を見ているのではなく、私の心を見透かしている。
戦う力、殺す力、斬る力。それを得た私を、父さんは見つめている。
じっと見つめたまま、まだ言葉が続く。

「ならばその力を持って行きなさい。これから、戦はさらに酷くなる」
「なぜ、わかるのですか」
「血の臭いが、世界を覆い始めている。鉄と錆と、血と硝煙の臭い。お前には、その悉くを切り払う術(すべ)を継いでほしい」

今ですら世界は壊れかけている。なのに、まだ酷くなると。
父さん、篠ノ之柳韻は言う。
私などでいいんだろうか。けれど、その力が必要なのもまた事実。
足止めを買って出たときのように無様を晒さないためには、まだまだ私は弱い。
強くなるための、力が欲しい。溺れるほどの力など、今の私にはないのだから。

「……わかりました」
「お前は、力を嫌っているのに。済まないな」
「いえ、これでいいのです。いつまでも逃げることはできない、そ

れに。もう怖くはありませんから」

力に溺れることはない。私には、そうなったときに引き戻してくれる者がいる。

それに、そんな相手の前で無様を晒すのはこの上なく不愉快だ。だから、大丈夫。

そんな意思を込めて、私は小さく息を吸う。

彼が、頷いた。

それから数日後、セシリアと私、そして父さんは、隠れ家の地下にいた。

「そう言えば父さん、ここはどこなんです？」

「日本のとある廃村だよ。公共事業でビルが建てられたのはいいんだが、人が都会に行ってしまって、それきりさ。ゴーストタウンという奴だな」

「護衛はどうなさったのですか？　影も見えないようですが」

「撒いた。で、ここに逃げ込んで隠遁生活というわけだ」

その割には、地下室など作る余裕はあるらしい。

幸いにして村には田んぼも農場も残っていたらしく、そこを使って自給自足をしているそうだ。

ここに移ってきたのは数年前で、もうじき見つかってしまうかもしれないと考えていた矢先の、巌隆の世界への宣戦布告。さすがの父も肝を抜かれたらしい。

「で、なぜ地下に？」

「これから見せるのは純粋な『技』だ。あまり人目には付かない方がいい」

「では、わたくしも……」

「いや、君は見ていてくれ、セシリア・オルコット君。君も何かを

掴み取れるだろう」

その言葉に、セシリアが頷く。

しばらく階段を下りていくと、そこにはコンクリートで固められた大き目の部屋が広がっていた。

父曰く、ここは最初からスペースができていたらしく、それを使いやすいように改装したのだという。

「さて、箒。よく見ているんだ」

そう言って、父さんが静かに刃を構える。

いや、構えではないのかもしれない。手を柄に添えてはいるものの、引き抜く姿勢ではない。居合いでもない、別の形。

ぞわりと、視線を伝って何かが私の中に入ってくる。なんだ、この気味悪さは。嫌悪感、なぜ。

カタカタと手が震える。私の中の何かが叫ぶ、嫌だ、嫌だ嫌だ。見せるな、こんなものを。

吐き気と共に、何も入っていないはずの胃袋から得体の知れない何かが競りあがってくる。なんで、なんで。

「箒」

震える私の手を、冷たい彼女の手が握る。それだけで、不思議なことに。

自分でも分からないうちに、その震えも気分の悪さも、嫌悪感も吐き気も、すっと消えていく。

冷たい温もりが、私に伝わってくる。

「大丈夫。わたくしがいますわ」

「……ああ」

流れ込んできた気味悪さが薄れていく。こんなものを、父さんは使えるのか。

まだまだ遠い。私の目指す剣は、もっと先だ。

「古流」

静かに、父の声が聞こえる。

「篠ノ之流奥義」

次の瞬間、

「『拳（ツルギ）』――」

――『音』が、消えた。

世界が混沌に包まれ、鎧を背負った者たちは、各々の目的のために動いていく。

ある者は、ただひたすらに混沌を。

ある者は、羽ばたく夢のための戦争を。

ある者は、乱世を斬り捨てるための闘争を。

ある者は、己が信念の元に猛進を。

世界（ぶたい）は変わり、彼ら（やくしゃ）は変わらず。

そして、物語は一年後の春を持って幕開けとなる。

果たして、その果てに待つものとは、如何に。

さあ皆様、ご照覧あれ。

哀れで愚昧な人間の、願いを掛けた戦いを。

第１０７話　秘伝（後書き）

まさかの急展開。でももともとこういう予定でした。
まだ出てないあの人やこの人なんかは、次回以降に登場します。
でも章は変わらないのです。本当は章を分ける前にこういうのやるといいんですけどね。
それでは次回をお楽しみに。

第１０８話　一年後　春（前書き）

今回から一年後のお話です。
詳しい時間経過は本文にてどうぞ。

第１０８話　一年後　春

二〇四六年、四月一日。その日、変わってしまった世界を、もう一度変えようとする者たちがいた。

「皆、準備はいい？」
「ばっちりよ」
「問題ない」
「うん……」
「任せてください」
「いつでも行けるぜ」
「モチのロンよ♪」

うさ耳をつけ、明るい笑顔を浮かべた女性、篠ノ之束の声に応えたのは、五人の女性と一人の男。

凰鈴音、ラウラ・ボーデヴィッヒ、更識簪、シャルロット・デュノア、織斑一夏、ナターシャ・ファイルス。以上の六名が、それぞれ戦いへ向けて意欲を燃やしていた。

ここは束謹製戦艦の中。その中にいる人間は、この一年の間に倍以上にまで増えていた。

「隊長、我々はいつも通りに？」
「ああ。皆、よろしく頼む」

元ドイツ軍特殊部隊『黒ウサギ隊（シュヴァルツェ・ハーゼ）』副隊長、クラリッサ・ハルフォーフを初めとした特殊部隊員、総勢一二名。ラウラを含め一三名は、正式に束の率いる『バインド・カンパニー』との雇用契約を結んでいた。

半年ほど前、ドイツの現首相を救出した際の交渉によって、半ば

託されたような形でこの船に乗り込んだ彼女たちは、それまでと同じようにラウラを隊長として小隊で動くことになる。
　一年と少しの間に世界を巡り、コネクションを作っていった彼らの戦力は、ともすれば今世界を震撼させている無人機たちを殲滅しても余りあるほどだろう。敵が無人機だけならば。

「今回の目的は、全ての擬似コアの破壊と製造用基地の破壊。皆、しっかりね」
「破壊工作は我々が行う。そっちは連中を食い止めてほしい」
「分かった。よろしく頼むぜ」

　一年の間にまた一回り大きくなった一夏が、ラウラの言葉に強く頷く。
　二〇四四年、一一月二六日のＩＳ学園崩壊から、一年と四ヵ月と数日。人が成長するには、十分すぎる時間だった。
　しかし、いまだ香織の目は覚めていない。そのことに一抹の不安を覚えながらも、一行は今やるべきことを済ませるために戦いへと赴いていく。

「よし、行くぞ」
「了解」

　山中に作られた巌隆の『無人機製造プラント』の入り口に辿り着

いたラウラたち『黒ウサギ隊』は、マップを表示しながらそれぞれ頷く。

場所はフランス領南方の南極地域の小さな島。ケルゲレン諸島クールベ半島である。

現在束たちの活動を表立って支援しているのは、フランスとドイツ、中国、そして日本の四ヵ国だけである。しかし、それだけでも十分すぎる資産と装備を整えることができた。

何しろ、使う装備は全てオーダーメイドな上に、世界唯一のＩＳの生みの親である束がいるのだから、その後の関係を考えても支援した方が利益が出ると考えたのだろう。

束としても、使えるものは使ってしまった方がいいと考えたため、とりあえず思惑は置いておいて、骨の髄まですすり尽くすことにしたのである。

閑話休題。

それぞれＩＳを展開し終えている小隊は、ラウラを先頭にして基地内部へと潜入していく。入り口はＩＳが入ることを前提として設計されているのか、非常に広々としていた。

レーダーと自身の感覚、両方に気を張りながら、先頭をいくラウラはマップを確かめる。

構造は至極簡潔、上から下へと降りていくエレベーター式。元々まともに降りていく気などさらさらないラウラは、無造作に片腕を上げた。

「砲塔用意――」

それと共に、自身も、背に構えた二門のレールカノンの砲塔を、下へ。

その目には、気だるげな光すら宿るように見えて。

「――撃て」

直後、一三の機体より迫り出す、二六の砲門。その全てが火を吹き上げ、鋼鉄で組み上げられたその床へと弾丸を撃ち込む。

建物内に伝播するその轟音は耳を破壊するほどだったが、ここはＩＳを纏った戦士と、偽者しか存在しない。

故に、その心配など要らなかった。

けたたましい爆音、揺れる地面と、止まる空。その中で、ラウラはただただ、もうもうと立ち上がる煙の向こうを見透かそうと、その黄金の両目を輝かせる。

「……来るぞっ」

「総員戦闘体勢！」

ラウラの言葉でクラリッサが叫ぶ。その身に装着しているのは、『シュヴァルツェア・ツヴァイク』、『シュヴァルツェア・レーゲン』と対を成す、黒い枝。

そして、隊員たちが身に纏うのはその一世代前の機体、『ヴァイス・トロプフェン』、その名は白い滴（しずく）という。

全ての機体には二門のレールカノンが搭載されており、それによって撃ち放たれた弾丸は軽々と秒速二〇キロを超える。にも関わらず。

『ＧＲＲＲＲＵＵＵＵＵ……』

「《獣型（ビーストタイプ）》か、各機散開して撃破！」

「「「「了解！！」」」」

砲弾を堅牢な牙によって食い止め、強靭な顎で噛み砕いたその黒い獣は、爛々と輝く機械の瞳をもってして、一行をねめつける。

ここの主戦力は一夏たちが引き付けているものの、やはり内部の警備には引っかかってしまう。

小さく舌打ちしながら、ラウラは冷静に《シュヴァルツ・ドラート》を撃ち、数体を絡めとって破壊していく。

ラウラの呟いた言葉、《獣型》は、束の使い出した無人機の区分。四足で立ち、無機物も有機物も関係なしに喰らい尽くす獣のことを指す。

戦闘能力はそれなりだが、センサー類が異常に発達しており、簡単なステルス程度なら一瞬で嗅ぎ分けるほどである。

「だが、所詮獣だ」

ラウラの言葉通り、《獣型》の欠点はそのＡＩの能力の低さにある。

簡単な命令しか理解できず、時折命令を不要なプログラムとして消去してしまうバグを持っているせいで、都市の無血制圧が大虐殺へと変わりかけたこともあった。

幸いにして、そのときは束たちの救援の手が間に合ったため、それは防がれたのだが。

ラウラの撃ち出した《シュヴァルツ・ドラート》のエネルギーブレードによって数は減ったものの、やはり量産型、しかもそのプラントだけあって量はまだまだある。

「ちぃっ！　これでは埒が明かん……！　一気に突破するぞ！　続け！」

一つ吼え、ラウラは《ＡＩＣ》で動きを止めると、両手のプラズマブレードで道を作り出していく。

切り裂き、切り裂き、切り裂き。オイルの臭いが鼻をつく中で、ラウラ達一行は一直線に最下層へと向かう。

マップによれば、このプラントの動力源となっている擬似コアは最下層に四個。そこからエネルギーを取り出し、増幅させて擬似コアを活性化させ、量産型無人機を大量生産しているのだろう。

バイオノイドの技術が応用されたその生産過程には、バイオポッドが使用されている。その証拠に、ＳＦ染みた緑色の薬液の詰まった大きなポッドが、各階層に随分と並べられていた。

悪趣味だ、と一瞥してから、ぎりっと奥歯をかみ締める。これ以上災厄を増やさせてたまるものかと。

誓い、駆ける。開いた大きな穴の中を、その異形の目、《越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）》で把握し、的確に《ＡＩＣ》で敵の動きを絡め取っていく。

その最中、途中途中の階層で隊員たちは二人、三人と抜けていく。このプラントを崩壊させるためのタネを仕掛けるために。

最後にはラウラとクラリッサだけが残り、妨害に遭いながらも何とか最下層へと到着した。

周囲は血管を思わせる配線やパイプ管がやたらめったらに走っており、その中央には四つ寄り集まった球体の擬似コアが浮遊している。

「あれか。クラリッサ！」

「はい」

ラウラの指示を受け、クラリッサは拡張領域（バススロット）から小型の爆弾を取り出すと、コアの周辺に取り付けていく。

コアに直接取り付けた場合、コアからエネルギーが逆流して予期せぬ爆発が起こる危険性があるため、こうして周辺に設置していくようにと、束からの指示だった。

『全員準備はいいか？』

『『『はいっ』』』

隊員全員分の個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）を聞き終えたクラリッサがタイマーをセットすると、追ってきた《獣型》をラウラと共に《ＡＩＣ》で食い止めながら全速力で離脱を開始する。

残り時間は五〇秒、ぐんぐんと加速していく中で、隊員たちが次々に集合していく。

空を目指し、ただひたすらに飛び続ける。そして、そして。

ふっ――、と音が消えた直後、下に見える穴の奥底から、地鳴りのような爆発音が響き始める。

それを背にして、『黒ウサギ隊』は全速力で基地から離脱した。

「……そうか、破壊したか」

基地の崩壊から数時間後、一人の女性が携帯を片手に屋外でそう呟いた。

太陽は上がっているものの、雲がかかっているせいで日光は降り注いでいない。ここ数日、ずっとこんな様な日が続いている。

せっかくの春の幕開けも、こんな陽気ではがっかりだと、千冬は小さく心の中で呟いた。

『でも、まだまだありそうだよ。……どうするの？　そっちも大変でしょ？』

「ああ。教師はほとんど委員会に連れて行かれた。今は山田先生と私、残り少ない生徒たちで戦っている状態だ」

あれから一年以上が過ぎた今、千冬たち脱出者を取り巻く状況も変わってきている。
世界中が危険地帯となってしまった今となっては、残っている生徒は家に帰すより訓練をしながら逃亡を続けていた方が安全だと判断した教師陣が、それぞれの家に連絡を取って了解を得た上で共に行動している。
とはいえ、家に帰りたがる者もたくさんいた。その者達を帰しながら日本中を回っているうちに、いつしか人数は一〇人程度に減ってきていた。

『何かあったら、また連絡頂戴ね』
「ああ。それじゃあな、束」

通信を切り、千冬は空を見上げる。
雲のかかった、先の見えない空。まさしく今の世界にふさわしいもの。
暗澹とした気分で見上げていると、ふと千冬を呼ぶ声が聞こえた。

「千冬さん」
「ん、恋華か」
「そろそろご飯の時間ですよ。早くしないとなくなっちゃうかも？」
「それは困るな。すぐにいく」
「はーい」

ニコニコと、いつも笑顔を絶やさない楯無恋華。彼女の笑顔に、何度救われたことか。
そんな思いを抱いて、千冬は少しだけ大人っぽくなって髪の伸びた彼女の背を追った。

第１０８話　一年後　春（後書き）

さて、ここからまた戦いの連続です。のんびり描写、ぜんぜん書いてないや。
そろそろのほほんさんの出番も増やせるかなぁ……。
主人公とメインヒロインが出ないってどうなのよ……。

第１０９話　海戦

早朝、まだ日も昇りきらないうちから、彼女は目を覚ます。
寝るとき用のジャージを脱ぐと、染み一つない美しいアジア系の肌が大気に触れ、温まりきっていないそれに触れた彼女は目を細める。
すばやくバインド・カンパニーの制服を身に纏うと長く伸びた髪を両側で纏め、一年前からずっと使い続けている髪留めで留めると、二度、三度と頭を振って型崩れしないことを確かめてから部屋を出た。
艦内はまだ静かで、皆が夢の中にあることを教えてくれる。
彼女、鈴は足音を立てぬよう静かに歩き出すと、香織の眠っているメディカルルームの扉を潜った。

「おはよう、香織」

小さく声をかけても、やはり返事はない。今日も、香織は起きていなかった。
鈴は入り口の水道でタオルを濡らし、そっと香織を抱き起こすと、その顔を濡れタオルで拭いていく。
毎日毎朝、繰り返す。せめて清潔に、彼を不快にさせないように。そう思って。
体全体の殺菌は毎日、この船の管理を行っている『ＨＡＬ－３０００』がやっているから、これは気休め。分かっていても、彼女にとってはせめてもの行いだった。

「……ねえ、いつまで寝てるつもりなの。そろそろ起きて来てもいい頃よ？」

言葉に、返事はない。当たり前だ、まだ眠っているのだから。
鈴は小さく溜め息をつくと、また来るわ、とそれだけを言い残して部屋を出る。軋む扉の音が泣き声のように聞こえて、首を竦めながら。
医務室から出た鈴は、そこから階段を下って一つ下の階層へ。白と銀の風景が、途端に殺風景な鉄の色へと移り変わる。これも束の趣味なのだが、一年以上も過ごしていればいい加減慣れてしまった。

『おはようございます、鈴』
「おはよう、ハル。整備室のドア、開けてもらえる？」
『はい。……解錠しました、どうぞ』

『Ｍａｉｎｔｅｎａｎｃｅ　Ｒｏｏｍ』と記されたその扉のロックの解除をハルに要請した鈴は、数秒後に開いたそこを潜って中へと入る。そこには、さまざまな用途不明の機械に混じって鎮座する『甲龍』の姿があった。

「……こんにちは、半身（バンシェン）。調子はどう？」

言葉を投げかける。そこには、滲み出る暖かさと、信頼が見えた。ひやりと冷たい装甲に手をやり、寄り添うようにして身を預ける。トクン、トクン、と。鼓動のようなものが聞こえてくるような、そんな錯覚。

「今日も戦いよ。やれる？」

その問いにも、答えはない。もとより、応えることなど考えていない彼女は、それでも満足げに頷く。
何を期待したわけでもない。ただ、そうしたかっただけで。
少し前の戦闘で一部破損してしまった甲龍を修復するためにメン

テナンスに回していたのだが、やはり自分と甲龍とは切っても切れない関係にあるらしいと、そうはにかむ。
何せ、一日待機状態のブレスレットがなかっただけでこのざまだ。まったく。

「……今日もやるわよ」

カツン、と軽い握り拳を装甲に合わせるようにぶつけ、軽く笑う。
さて、がんばろうか。

数時間後。
鈴たち一行は、海上での戦闘を行っていた。

「ちくしょう、なんなんだこいつら！　次から次へと！」
「随分急な襲撃じゃない、何が目的かしらね！」

一夏の悪態にそう返し、鈴はまた一機を破壊していく。
敵の数、初期計測にて四〇〇以上。その全てが、戦闘に大きく特化させた《戦闘特化型（コンバットタイプ）》であることを考慮する限りでは、まさか偶然戦闘海域に入ってしまったわけでもあるまい。
大方、また街を破壊しにきたのだろう。そう踏んだ一行は、とにかく無人機を全て殲滅することを決定した。

「じゃ、まずは数を減らしましょうか！　《銀の翼の奏でる鐘（Silver Wing Bell）》！」

ナターシャの一声により撃ち放たれた無数の光弾。
それによって周辺の一〇体ほどは撃ち抜かれ爆散したものの、残りは全て別の形の無人機によって防がれる。それをみて、ナターシャは苛立たしげに舌を鳴らした。

「チッ、やっぱ拡散系じゃ《守護特化型（ガーディアンタイプ）》に止められるかぁ……」

無人機は、以前登場した《獣型（ビーストタイプ）》も含めると、大まかに三種類に分けられる。
一つは、少し前のプラント破壊作戦でも出てきた獣、《獣型》。センサーやレーダーといった探知系機能を最大限に向上させた、プラントには必ずと言っていいほどいる無人機。特徴としては、その強靭な顎と細く、それでいてやはり強靭な四肢。動物特有の高い運動性能を誇る彼らの弱点は、その装甲の薄さにある。
しかし、しかし。今その案件はさして重要ではない。重要なのは、語るべきは、次の二つ。
一つは、たった今眼前に無数に孤立する《戦闘特化型》。その最もたる特徴は、頭部に溶け合わさるようにして付いている、一門の巨大なレールカノンだろう。
彼、もしくは彼女の風貌は、表すならば全身兵器。両手両足に備えた四本の巨大なロングブレードは常に微細な振動を続け、あらゆるものを一瞬で融解させ、溶かし切り裂くほどの力を持つ。
しかし、攻撃性能に特化させた結果、防御面で著しく弱体化してしまったため、単体での運用は確認されていない。
それを補うもう一つの機体が、《守護特化型》である。
常に《戦闘特化型》とツーマンセルで行動し、その機能は防御面に割り当てられている。
高い耐久性を持ち、《戦闘特化型》と情報をリンクさせることで

視野を三六〇度以上に広げている他、背面に取り付けられた五基のシールドビットによって、自身の低い加速、飛行性能をカバーしている。

この二機のツーマンセルが約二〇〇。視界に満たされたそれを見やりながら、それぞれが思い思いに溜め息を吐き散らしていた。

「じゃあ、まずは数を減らそう……」

その言葉と共に簪が呼び出したのは、《朱鉄(あかがね)》でも《蒼鉄(あおがね)》でもない武装。

白銀の配色に鋭利なフォルムを持った一対のそれは、大口径の銃口のふちを輝かせながら静かに簪の手中へと収まる。

名は《銀鉄(しろがね)》、完全なる中・遠距離用射撃兵装であり、この一年の間に簪が新たに開発した武装であった。

そのフォルムには新型の展開装甲が使用されており、この装甲は《朱鉄》に組み込まれている永久熱源機関の機能と同種の物を持っている。

「標的(ターゲット)、確認(ロック)」

呟きは大気に消え、されどその意味は残り。

簪は、静かに息を吐き出す。静かに、静かに、吐き出して、そして。

「――射抜け(Fire)」

ガチリ、と。音がする。

不思議とその音は大気を伝い、海の塩の薫りに混じって、『彼ら』へと運ばれる。

その、銀の光と不釣合いな、黒光りする銃口から我先にと駆け出

す、白銀の弾丸と共に。

「射抜け、射抜け、射抜け射抜け射抜け

て、鈴の周囲にゆらゆらと紅蓮の龍が立ちのぼる。
しかし、それでは終わらない。
すぅっ、と鈴が大きく息を吸い込み、そして声を上げる。

「ハァァァァァ！！」

刹那、呼応するように一対の《龍砲》が唸り、そして光を放つ。
それはまさしく龍の目のように、一対の光。
そこへゆっくりと紅蓮の龍が重なり合い、やがてそれは一体の巨大な龍となった。
数ヶ月前に発現したばかりの、《龍砲》の武装特性、《龍眼（りゅうがん）》。
その能力は、衝撃砲の弾丸の位置を自分だけが知ることができるようになること。そして、その位置を自由に書き換えられること。

「ぶっ壊れろッ！」

咆哮と共に撃ち放たれた幾重にも重なる衝撃は、てんでバラバラの方向へと一瞬で切り替わり、《戦闘特化型》を背部から喰らっていく。
それと同時に振り被った《双天牙月》の刃が次々に《守護特化型》へと叩き込まれ、その盾を破壊していく。
猛攻の最中、それを見た一夏たちもまた、にっ、と笑みを見せてそれぞれの武器を手に戦いに挑む。

「おおおおお！」
「邪魔すると蜂の巣だよ！」
「止まっていろ、グズどもめ！」
「隊長の邪魔はさせません。総員、敵を撃破せよ！」
「「「「「Ｊａｗｏｈｌ（了解）！」」」」」

始まった海戦。
そして、それを見つめる目もあることに、一行はまだ気づかない。

「――標的を確認。当該対象の抹殺に移ります」
「――確認」
「――確認」
「――確認」
「――確認」
「――確認」
「――確認」
「――確認」
「――確認」
「――確認」
「――確認」
「――確認」

まだ、まだ。

第１０９話　海戦（後書き）

いろいろと大変。

第１１０話　目的不明

「はあぁぁぁぁぁぁ！」
「これで、最後っ！」

その言葉と共に、一夏の荷電粒子砲とシャルロットの《デュノア・オルグイユ》の光が収束する。
戦闘時間、九分四三秒。大した被害もなく、四〇〇以上の無人機を一気に破壊しきった総勢一八名のＩＳ乗りたちは、ようやく安堵の息をつく。
『黒ウサギ隊（シュヴァルツェ・ハーゼ）』の隊員たちもさすがに本職の意地があるのか、恐ろしい数の無人機たち相手に一歩も引かぬ大接戦を演じてみせ、おかげで彼女らの予想よりもはるかに速い戦闘終了を迎えることができた。
……終了、したのであれば、それでよかったのだが。

『っとー、まだまだらしいぜ？　全員戦闘体勢を崩すな、お客さんだ！』

船にいるＫ．Ｋ．からの一報を受け、それぞれが新たに武装を構える。
その直後。

「お初にお目にかかります、我が敵、怨敵、宿敵の皆々様」
「――私、だと……！？」

そこに、宙に浮いていたのは、ラウラと瓜二つの容姿を持ち、同じＩＳを纏った少女だった。
無表情に口を開くその少女の周囲には、ゆっくりと、風景から溶

け出すように、まったく同じ姿の少女たちが姿を現していく。

「此度の催しはいかがでしたでしょうか。我が創造主はこうした祭の才は捨て置いているようですので、私が催させていただきました。少々血が流れましたが、紅は祭に似つかわしい色でしょう」

「残念だったわね、アンタたちの思い通りにはならなかったわよ。血なんて一滴も――」

「いえ、いえ、いえ。今流れるのです、私の手で」

鈴の言葉を遮り、彼女は無表情のまま右手を肩の高さまで上げる。その広げた手のひらから一筋の光が放たれ、沿岸の町へと降り注ぐ。

――直後、その町は一瞬にしてクレーターと化した。轟音と灼熱、その二つをもってして。

「なっ……！？」

「ふふ、綺麗ですね。人の悲鳴、なんと甘美なことか。我がオリジナル、いえ、貴方も偽者か、まあどちらでも構いません。いかがですか、素晴らしい音色でしょう」

「アンタ……！　なにやってるかわかってるの！？」

「汚点を浄化して差し上げただけのこと。不完全な人間の癖に、我らよりも正しき判断ができると、そう思い上がっているのですか？」

そこで、彼女の目に嗜虐の色が灯る。

あまりに滅茶苦茶なその言葉に、鈴はきつく彼女を睨み付けた。

「さあ、我が敵、怨敵、宿敵。我が宴にその血を捧げ、我らの供物となれ！」

「ラウラ、行けるわね！」

「無論だ！　ふざけたその口、斬り塞いでくれる！」

大気を蹴りつけ飛び出した鈴とラウラは、彼女が何者なのか、それすらも気にせずに刃を抜く。

いや、気にできるはずもない。

彼女たちの前で血を流した、その意味を思い知らせるために、意の一番で飛び出した二人に対し、彼女は嗤う。

「アッハハハハハ！　糸の途切れたマリオネットが、操る主と共にある我らに勝てると言うか！　人など下劣、愚昧、まさしく下の下に位置する存在！　粛清せねばならない！」

「粛清を」
「粛清を」
「粛清を」
「粛清を」
「粛清を」
「粛清を」
「粛清を」
「粛清を」
「粛清を」

彼女の後に続くのは、無機質な一二の言葉。全てが、感情を露わにする彼女と、ある一点だけを除き一致していた。

不気味なその様を見ながらも、それでも二人は止まらない。そして、二人に続く者たちもまた。

「ぶっ飛ばす！」

「斬り潰すッ！」

ガギンッ！　と音高く、二人の刃が受け止められる。無表情に、二つの影がその刃を受け止めていた。

「ちっ、邪魔すんなっ！」

「敵性対象『凰鈴音』を確認。排除します」

鈴の斬撃を受け止めた一人が、瞬きする刹那すら与えずに刃を繰り出す。それは、ただのブレード。本当にただの、ただのブレードだった。

しかし、それを繰り出す速度は音速をはるかに超え、認識の範囲外からの攻撃と言っていい速度へと昇華している。

「鈴！」

「あらあら、お人形さん。貴方の相手はこちらですよッ！」

「ぐぅぅっ……！」

彼女の言葉に咄嗟に構えたラウラの頭上から、長い槍を手にした彼女が降ってくる。

咄嗟に《ＡＩＣ》で動きを止めようとしたラウラだったが、それはなぜか通用せずに、装甲へ大きな傷を負ってしまった。

ガリガリと削られた装甲をかばいながら、何とか攻撃範囲から少し身を引くと、注意深く彼女を観察する。

「あら、《ＡＩＣ》が相殺されたことが、そんなに疑問ですか？」

「相殺だと？　……いや、有り得るか。どうやら貴様らの創造主とやらは、私の元にも精通しているようだからな」

「ふふっ、その通りです。お兄様と面会したことのある『アイン』は、あろうことか拒絶されただけで自害したほど自我が曖昧でした

が……、私はそんなことはありませんし、妹たちは自我を消してありますから、壊れることはない。素晴らしいでしょう？」

「下種め」

フランスであったことは、既にラウラも聞いている。

彼女の語った内容から、フランスで襲撃してきた『アイン』の姉妹だとあたりをつけたラウラは、尚更必勝の意思を強めた。その出自を知るが故に。

「貴様は香織を貶めた。貴様を潰す理由など、たったそれだけで十分すぎる！」

「恋は盲目ですか、人形が人形に恋をするなど！　ああ、なんとロマンチック！　けれどそれは必ずデッドエンドが運命付けられている喜劇です！」

「作られたものが運命を語るか！」

「作られたものだからこそ、ですよッ！」

彼女は量産型のブレードを、ラウラはプラズマブレードをぶつけ合い、幾度となく視線で打ち合う。

その周囲では、一夏たちがたくさんの『彼女』たちとの戦いを始めていた。

『お前たちはツーマンセルで相手にしろ！　無人機とはわけが違う！』

『了解しました！』

個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）でのラウラの指示に迷いなく頷いた『黒ウサギ隊』の面々が、すぐさま二人一組に変わって戦いだす。

とても自然かつ鮮やかに行われたそれを見ながらも、彼女から余裕が消えることはない。

「この程度で、止められると思うなっ！」
「やはり量産型はもろい……、ですが、十分！　その分、数を用意すれば事足りるのですから！」
「なっ！？　くぅっ！」

プラズマブレードで刃を弾き、《シュヴァルツ・ドラート》で刃を砕いたラウラへと、新たにブレードを取り出した彼女が迫る。
幾層にも重ねた《ＡＩＣ》を同じ数のそれで中和して叩きつけられたブレードをプラズマブレードで受け止め、ラウラは歯噛みする。相手は未知数、しかもこちらはやや防戦気味。
相手は恐らく擬似コアを心臓部に使用した人造人間だろうとあたりをつけたものの、それで何かが変わるわけではない。むしろ、人間以上に無茶できるとなればどうなることか。
一夏、シャルロット、簪、ナターシャは一対一、クラリッサを含めた『黒ウサギ隊』一二名は二対一で相手取っているこの状況で援助は期待できない。
葵は万が一の場合に備えて甲板で待機しているため、動くことは難しい。
何とかして自分で退けるしかないかとラウラは心中で悪態を吐きつつ、刃を振るっていく。
これ以上街を破壊させまいと、そしてこれ以上その口から発せられるあらゆる言葉を聴くまいと。

「おおおおおおっ！」
「くっ……、さすがに強いですね！」
「貴様などに、負けると思うな！」

《ウン・ハイル・ドルン》を発動させた状態で《シュヴァルツ・ドラート》を自由自在に操りながら、両手のプラズマブレードと両

肩のレールカノンを同時に使い分けて攻勢を仕掛けるラウラ。
まともな状態ではとても捌ききれない量の武装も、彼女の両目に灯る黄金を持ってすれば容易に扱うことができた。
《シュヴァルツ・ドラート》で確実に相手の退路を断ち、出来た隙をレールカノンとプラズマブレードで追い詰めていく。
しかし恐るべきは、それを量産型ブレード二本で切り抜ける彼女だろう。事実、ラウラは決定打を決められないことに少しの焦りを見せていた。
刃同士を交錯させ、金音を響かせる。それぞれが入り乱れての戦闘の最中、突然鈴が相手にしていた少女がその身を硬直させていた。

「な、なに……！？」
「――帰還指令を確認。帰還します」
「は？　ちょ、待ち――！」

無表情のままでそう言葉を発した一人に続いて、次々と姿を消していく。まるで、現れたときと同じように溶けるようにして。
その様子を見ながら、彼女は皮肉気に笑いを漏らす。

「命拾いしましたね。創造主はここであなた方が敗れることを好ましく思っていないようです」
「まだ追い詰めてもいないくせに、随分な言い様だな？」
「忘れたわけではないでしょう、我々の心臓部は擬似コア。そのエネルギーを暴走させれば、あなた方を抹殺するなど容易いことです」

くすくすと笑いながら、彼女は言う。
それは言外に、自分たちはいつでもお前たちを殺せたのだと、そう告げられているに等しかった。
そのことに感づき、全員が悔しさで唇を噛む。

「それでは我が敵、怨敵、宿敵の皆々様。さようなら」
「待っていろ。いずれ貴様は、この手で」
「楽しみにしています。うふふ、あはははは！」

その笑いを残し、最後に彼女が消え去る。
後には、ただ戦乱の傷跡を負った彼女らだけが残された。

「――ただいま戻りました、我が主、創造主」
「ああ」

どこかの誰かが言う。
暗い暗い闇の中、色は黒と、ディスプレイの青だけ。
それに照らされながら、闇の中に沈んでいる彼へ向けて、彼女、『ツヴァイ』は口を開いた。

「ドライからドライツェンまでの稼働状況は良好、彼女たち以外にならば十分すぎる戦力として期待できるでしょう」
「よくやった」
「――はっ、ありがたきお言葉」

片膝をつき、家臣の例をしてみせるツヴァイへと、彼は決して目を向けない。
ツヴァイもまた、彼が自らに視線を注がないことを是とする。彼

女にとって彼は絶対であり、決して背くべきものではないのだから。

「それでは、私はメンテナンスに」

「ああ」

それを最後に、彼の気配が消える。

ぞくり、と、彼女はただその場で身を震わせるだけ。

その頬は、にぃ、と吊りあがっていた。

第１１０話　目的不明（後書き）

アインの後継たる彼女が登場。
果たして一体どんな目的で現れ、去っていったのか。
まだまだ謎が消えることはないようです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1252s/

願いの空へ

2011年12月18日11時52分発行